

假名草子集

全

日本文學大系の刊行に就て

文學博士　上田萬年

我が國文學各種の一大結集を作らんとする、日本文學大系刊行の計畫は、出版界に於ける近來の壯擧である。從來此の種の叢書は多數刊行されてはゐるが、其の質と量と、共に同日の比ではなく、縱ひ事業として特異のものでないにせよ、これを遂行するに、人知れぬ苦心と行き屆いた用意とを以てし、內容的にも外形的にも、十分に立派なものを提供せんとする意氣込は、やがて本事業の出色の特質であらねばならず、殊にこれが、關東大震災の直後、經濟界が最も混亂を極めた中にあつて計畫

せられ、印刷その他の設備が未だ十分に整はざる先に著手されながら、而もこれだけ氣持よい本が、著々と序を追うて刊行されつゝあるところに、本事業の眞面目さを看取しなければならぬ。

當時の出版界は、他の諸事業に先んじて復興した形ではあつたが、それは讀書界の飢渴を醫すべき一時的のものによつて、殷賑を極めたのみであつて、その現はるゝものは悉く蕪雜な貧弱な、永久性の乏しいもののみであつた。斯かる中にあつて、全然それ等の射利的計畫に同ぜず、堂々たる抱負を以て、最も組織的に本事業が企圖されたのであるから、これが當時出版界の一驚異となつたのも至當である。

忌憚なく言へば、在來の此の種の叢書には遺憾とする點が少なくなかつた。あるものは一般的に賣れる物のみを集め、あるものは其の要不要を論ぜず集めて、徒に量の多きを誇り、あるものは何等の統一なくして

只漫然と纂輯し、又あるものは無責任なる複製の複製であり、あるものは校訂校正に其の杜撰さを露骨に暴露してゐると云つた風である。本大系本は、これ等先蹤の闕典を仔細に點檢して、どの點からも遺憾のないやうに、且永く後代に殘す本として、外形的にも能ふ限りの注意を加へようといふのであるから、事業として大きくもなり、困難の度も增したのであるが、それだけ理想的のものになり、非難の尠ないものとなつたのである。

本大系本は、第一期事業として、奈良朝より室町末期までの文學を、第二期事業として、德川時代の文藝を輯め、續いて第三期には和歌を、第四期には俳諧を、なほ餘力あれば、更に最近世にまで及んで刊行せんとするもので、これ等各期の文藝を悉く系統的に組織的に排列すると共に、その資料を最も依據すべきものに求め、校訂及び校正には最も力を

注ぎ、註釋を加ふべきものは、各專攻の士にこれを依囑し、又各卷に、前後の脈絡ある詳密の解題を附する等、あらゆる點に熱情と細心の注意とが加へられてある。これ等は、苟も書を作らんとする者の、たやすく口にする所ではあるが、それを實際の上に如實に實現することは、決して容易のことでない。在來刊行の類書が、動もすれば其の抱負と背馳せる結果を將來してゐるのを見ても解るであらう。然るに本大系本が、第一期事業すら完了せざる中に、早くも、「大系本」といふ稱呼を以て云ひ囃さるゝに至つたといふことは、卽ち其の價値と權威とが一般に廣く認められたからであつて、所謂大系本に取つて、此の上なき名譽といはねばならぬ。

此の大系本刊行の計畫は、中山泰昌君によつて立てられ、國民圖書株式會社の中塚榮次郎君が、財界の不安甚しかつた震災直後にあつて、非

當の決心を以てこれが發行を引受けられたのである。而して組織編纂等の方面には、佐伯常麿君が膺られ、中山君はまた、事業の進行と各卷の校正とに、終始一貫して力を注がれつゝある。而して兩君が、出來うる限り良い本を作らうといふ上の註文は、かなり營業者に失費、犠牲を拂はしめるものであるが、中塚君は快くこれに應ぜらるゝのみならず、印刷、用紙、製本等の技術、材料にも最良のものを擇はんとして努力し、印刷の如きも、凸版印刷株式會社が印刷機械を輸入するを待ち、全部同社の優秀なる特技に依頼して、その費用の高下を論ぜざる如き、本大系本が、外形的にも優れて良いものが出來た所以として、特に附記しておかねばならぬことである。

斯くて大系本が、第三期、第四期に及んで、豫期のごとく完成したためは、こゝに日本文學の一大殿堂が築かれて、容易に他の追随し得ざる

偉容を現出し、永く學界の恵澤となるであらう。予は一日も早く其の完了を俟つものである。

序

品位に缺くる所のあるのを遺憾とされてゐる近世文學には、實に潑剌とした生命の躍動がある。傳統の中に閉ぢ籠つてゐた中世紀の文學は、次第に生命を失つて、唯優美上品な形式の文學となつてしまはうとしたのであつたが、近世文學は時代の一轉と共に、こゝに新なる生命の泉を汲み出すやうになつたのである。

先づ元祿の上方文學に第一次の妖艶の色を見せ、それについで化政期の江戸文學に第二次の爛漫の美を擅にしたのである。人を以ていへば元祿期には芭蕉が出でて、大自然の生命を摑んで、寂の文學を作り、近松が出でて、人情の世界に千古かはらぬ人間の相を描き、西鶴が出でて

如實に現實を描寫して見せた。化政期には京傳現はれて、江戸生活の面を纖細に寫し、馬琴現はれて義理の現實と夢幻の空想の交錯した世界を見せ、一九、三馬、鯉丈現はれて、現實の享樂に疲れた都人の生活を如實に見せた。これ等の外に秋成、春水等々の人々もあつて、個々それぞれのオと智とを以て、それ／＼の世界を見せてゐる。

これを文學の形に就いて見れば、元祿の浮世草子は、主として端物に由つて現實を描き、淨瑠璃は華麗な詞章を特殊な發聲法と曲節とに由つて語り、これに極めて巧妙に遣はるゝ人形の活動を併せて、一種の綜合藝術をなし、讀本は支那の稗史に倣うて長大な說話、奇怪な事件、豪壯な人物等に由つて、理想的に人生を表現し、滑稽本は享樂生活に疲勞した頽廢の氣持をよく表はして、太平時代の精神をよく傳へ、人情本は戀愛色慾の世界に人性の一面を寫し出してゐる

これ等を、すべて偉い文學、立派な藝術と推す事は、却つて最良の引き倒しであらう。品位に缺け、精神に偉大なものがないにしても、時代の藝術としては、一個の完成された物に近い所に、又棄て難い興味を持つ事は、誰しもが公平に見て否定し得ない事である。丁度歌舞伎に不足をいひながら、猶見ずにゐられない妙を感じ、錦繪を過去の藝術に過ぎないと知りながら、深い愛著を有つやうに、近世文學に對しても、現代人の多數が興味を有ち、愛著を感じてゐる事は事實であり、又今日まで興味を有たなかつた人と雖も、これに接してゐる内には、きつと愛著を感ずるやうになるといふ豫想も、ほゞ否定の出來ない事のやうである。

　それは近世文學に國民傳統精神の流があり、現代人の精神に不知不識の間に、近世文學の精神に共通したものが、著しく殘つてゐることを示すのであらう。これによく接し、これをよく讀んでゐると、我々は單な

る藝術鑑賞ばかりでなく、我々自身の生活の上に、いろ／＼反省の資を受くることもある。一概に義理の生活を斥け、一概に人情主義を排する人も、近世文學の義理の世界、人情の世界に浸る時、そこに現代の我々の生活に資すべき何ものをも見出すことが出來ぬであらうか、我々の反省を促すものが見出されぬであらうか　余はこの事を考へて、近世文學の品位に缺くるといふ一つの理由で、これを一般國民の鑑賞から遠ざけようとするものに與することは出來ない

　近代日本文學大系は、帝國文庫以來の近世文學の大叢書である。收むる所の近世文學は、これを原本の價格にしたら數十萬圓にも達するであらう、これを廉價な美本で購ひ得るものも亦昭代の恵みの一つである。

文學博士　藤村作識

序

日本文學大系は、さきに奈良平安鎌倉室町時代の二十五卷を完成し、今また江戸時代の近代文學大系二十五卷を終了するに至つた。文學の傳統は悠久にして、古必ずしも古ならず、人情の不易は古今同樣にして、新必ずしも新ならず。各時代それ〴〵とり〴〵の妙趣佳致あれども、言語風俗最も現代の生活に近く、親しみ易きは、近世の文學である。三百年太平和熙の春に咲きみだれた千紫萬紅は、平安朝の富貴に誇る金屋の牡丹や、鎌倉室町の法氣づいた草庵の蓮花とは、おのづから運を異にして、足もとの蒲公英、只何となく摘まで止みがたき風情である。今後海外文化の浸潤に人心一變し、コスモスが野菊の姿を尊び、ベコニヤが秋

海棠に花つ時までは、吾人はなほ御国育ちの可憐な花を棄てないであらう。

文學博士　藤井乙男識

序

古代の日本文學は、いづれも或特殊階級の文學であつた。其の初は、當時の智識階級であり、特權階級であつた貴族の文學であり、其の後には、同じく當時の智識階級で、同じく特權階級であつた貴族武家僧侶の文學であつて、絶えて平民とは交渉がなかつた。

王朝の文學は多く其の當時の世態人情を描いたものである。源語にしても、榮華にしても、當時の社會相を寫して、これを文藝化したものである。藝術に於ても亦同樣で、伴大納言繪卷にしても、北野天神緣起にしても、當時起つた或事實を捉へて、これを文藝化したもので、現世相の描寫ではあつたが、然しいづれも其の社會は、貴族搢紳を中心として

の社會で、平民階級社會のものではなかつた。鎌倉室町時代の文藝にしても、其の時代の武家階級といふ社會の一方面を中心としての文藝で、平民のものではなかつた。

堺は町人全盛の曙光を放つた地であるが、また文藝は起るに至らなかつた。大阪町人の勢力が盛んになると共に、平民文學は起つて來た。京阪に於ける文藝は、元祿を中心として其の波を揚げた。五代將軍が上方文化の東漸をはかつてから、西の文化も次第に關東に移植され、江戸の町人氣質は町人にふさはしい民衆文藝を作り出した。

金殿玉樓に人となつた源氏の君も、世話に碎けて世之介となり、初冠して寧樂の都に行つた業平朝臣も、むかし男、或はをかし男と名を代へて、通俗的となつた。土佐派の倭繪も、狩野派の別流も、一轉して浮世繪となり、更に版畫となつて、民衆の鑑賞する所となつた。能樂では民

衆的ではないが、歌舞伎、操となると、民衆向きである。雅樂や、幸若舞では、民衆に甚だ遠いが、舞踊となると平民的である。王朝時代には材料を貴族の間に求めた文學も、鎌倉室町時代には武張つてゐた文學も、江戸に入ると、其の題目は市井の出來事であつた。高遠なる老莊の理想も、江戸の文學者は之れを通俗化することを忘れなかつた。王朝の文學は入り難くあつたが、江戸の文士は之れを現代化するに巧みであつた孔子も色里で說法し、釋迦も和光同塵の德を示してゐる。もう文學は、或特殊階級の獨占する物ではなかつた。そこに近代文藝の價値があり、近代文藝の特色がある。菅江二氏が王朝の學權を握り、五山の緇徒が鎌倉室町の文權を占めたのとは違ふ。巨勢派、土佐派以前には殆んど畫家がなかつたが、一轉して世外の徒が畫壇の中心となり、再轉して狩野派が幕府の御用繪師となつた。けれどももう狩野派の獨占を許さずに、南

畫が起り、光琳派が起り、圓山四條派が起り、また足らずに浮世繪が起つた。王朝の和歌、室町の連歌では平民と因緣が薄いが、俳句になると大分近くなる。川柳、狂歌に至りては、全く平民のものであつた。十二一重緋袴は雲の上人の裝ひであらうし、直衣、水干、狩衣は平民の著る物ではない。それが小袖となり、振袖となり、打掛となつて、平民級は其の美を擅にすることを得た。

平民の文藝は約束がなく、自由であり、大膽であつた。即ち時代精神の表現であり、民衆文化の發露であつた。斯くして江戸の文藝は一般に普及されて、遂に明治に及んだのであつた。これ曾て我が邦が有せざる所で、近代文學の誇る所は此に在る。

本大系は近代文學の大略を網羅して、上、古代文學に接し、下現代文學に繋いでゐる。豫め卷數を一定してゐるから、此の大系に入らないも

のも少くない。鉅篇大冊のものが往々これを省いてゐるのは。固より已むを得ない。解題は自ら揣らず予一人が擔任したので、不備の點も多々あらうと信ずる。識者の高敎を煩はし、予また自ら硏鑽して、他日の補正を期したいものと思ふ。

昭和三年十二月

文學博士　笹川種郎識

序

ドコの國でも古い文學が行き詰つて、空虚な殘骸となつた時は、必ず新らしい文學が創造されて新領土を拓く。足利末から芽生えて、德川期に成熟した假名物語や浮世草紙や八文字屋物や、淨瑠璃院本の類は、即ち此の德川以降開拓された新文學であるが、專ら市井に長じたので、兎角に私生兒扱ひを受けて、文學の傍系視され、明治以後文學の新運動が初まつてからでさへも、平民文學の假稱を與へて差別し、宛がら小說や戲曲は、文學の特殊部落であるが如き觀があつた　此の文學の階級思想は今日でも猶革まらないで、ツイ近頃までも、足利末に亡びた生ける屍の如き和歌國文を、依然文學の正系視してゐた　若し德川期の國文學は

單なる古文の摹倣又は註疏、所謂萬葉復古は單なる文章遊戯であると、正直に思ふ儘を直言したなら、恐らく今でも八方からの矢表に立たなければなるまい。が、文學史論を圖はすのが目的で無いから之を措くが、國民圖書株式會社が「日本文學大系」として、古事記、風土記、宣命以下從來から古典の正系として認められるものを集大成し、これに次ぐに、『近代日本文學大系』を以てして、國文學者から傍系視された德川期の小說戲曲等の俗文學を結集したのは、事實の上に日本文學の私生兒を認知したやうなものである。此の種の叢書は從來から屢々組輯發行されたので、此の『近代日本文學大系』が初めての計畫では無いが、寧樂平安から鎌倉足利と時代を追つた古典の大系に次ぐの大系として、國文系統の擬古文學を採らずに、俗文學を集めた處に、大いなる意義がある。編纂のプランは必ずしも新らしくは無いが、其のモティーフに新鮮味がある。

編輯されたものを個々に引離して見る時は他の類書と比べて、各々長短はあらうが、全部を同一系統に總括して、日本文學の主流と見做した處に、一脈の生氣が溢れてをる

文學は單なる辭章の學問では無い。美文麗句の鑑賞や、古事難句の解釋も大切であらうが、其の中に流れる時代精神、或は社會思想の變遷推移の跡を尋ぬるは、ヨリ重大にしてヨリ深い興味がある。從來の國史國文家が、朱子學や陽明學や古神道の系統別や、地理的分布や勢力消長だけを見て、日本の文化及び思想を考察するは、水上の船を見て水底の魚を想像するに等しい。朱子學も陽明學も古神道も無い民衆の生活は、ドウして了解される。將又從來の「左様然らば」の辭令的文學で、國民の思想及び生活を知らんとするは、床の間を見て家風の全體を臆測する樣なもので、其の一面は察し得られようが、以て全面を忖度する時は意外な

見當違ひかあらう。一家の眞面目は、人前を作つた御座敷よりは、却つて樂屋を露出しにした臺所の方が家風の有りの儘を見せる。契沖の『代匠記』や、季吟の『湖月抄』『春曙抄』や、仁齋徂徠の諸書よりも、西鶴や近松の作に却つて國民の眞生命が流れてゐる。恁う云つては自分の好む處に偏する嫌を免かれぬかも知れないが、衣冠束帶したり十二單を着けたりした大和詞よりも、町人や百姓のザツクバランに、却つて飾り氣の無い人間の聲が聞かれる。

傳統を追ふの古典文學も亦決して輕んずべきでは無い。その中には日本の國民思想の中心に觸れる國學の四大人の古典運動もある。且古典は公家武家の思想の背景を作るが故に、單なる倣古の文章遊戲とのみ見做し難いものがある。が、徳川時代に於ける文明の基礎は、實は町人に築かれてゐるので、町人の文學が日本の近世文明のバツクボーンを作つてゐ

る。渠等は自ら卑下して狂歌狂文と呼び戯作と稱したが、此の卑稱に韜晦して國民の本音を吹いてゐたのである。丁度浮世繪が、土佐や狩野の粉本をお手本としないで、現實の市井の風俗を見たまゝに描き、南宗畫の雲煙山水を學ばないで、自由な山容水態や色調を現はしてゐると同じに、院本や小説は戯作に假託して、時代の民情風俗を浮雕の樣に躍り出さしてゐる。言論抑壓の世の中に多少の拘束を受けつゝも、割合に自由な筆を揮ふるを得たのは小説院本の類であつて、戯作が即ち封建時代の民衆の眞實の生活記錄である。此の一事でも德川時代の小説戯曲は（日本の文學の正系であるや否やは假に異論を挿む餘地ある問題として姑らく措くも）日本の眞實の生活を知るべき料としては、他の古文獻よりもヨリ以上重要である。

並樂平安以下の古典を集成した『日本文學大系』に於いて、これ等德川

期の傳奇小說を結集したのは編纂者の見識である。かくの如くして公家武家及び町人の文學が鼎立して、初めて日本の文學の本體が具見する。但た德川文學の多岐多樣なる廣大なる分野の全面を掩有するは困難であつて、其の採擇に就いては各々區々の異論があらうが、其の精粹を包羅して、ほゞ遺憾なきに近いは、何人も認むるに吝かでないだらう。且等しく我が國民思想の背景を作る純國文系のものと、所謂俗文系のものとが、互に相隔絕して別世界の產物であるかの如き感があつたものが、同一架上に其の典麗なるデコレーテッド・バックを列べるといふは、誠に我が文獻學上の快心事である。

內田魯庵識





「可笑記」插繪



近代日本文學大系 第一卷 目次

目次

尤之雙紙　作者不詳　二二七—二三三

巻之五七

巻之七八

目次　終

解題

文學博士　笹川種郎

假名草子

假名草子とは、足利時代の御伽草子から浮世草子に至る其の間の連鎖となるべき江戸初期の草紙に對しての名稱で、其の範圍は廣い。足利時代の御伽草子と其の頃に重刊せられたものは、固より假名草子のうちに加へてあるし、佛書も、翻譯書も、名所記も、評判記も、花街物も、怪談と言つて、苟くも假名書きのものは、すべて其の中に引き籠めてゐるが、此にては江戸初期の文學として、江戸文學の源泉として、其の範圍を狹く縮めて取扱ふこととする。

元和年間に刊行されたイソップ寓話の翻譯なる『伊曾保物語』などは、其の先驅であらう。寛永年間には、『薄雪物語』『尤の草紙』『七人比丘尼』『清水物語』『あだ物語』『そゞろ物語』『若道物語』『[illegible]』『恨之介』『仁勢物語』『文章のそうし』『長者物語』『うき草物語』等を初め、

多くの中其の種のものが出版されてゐるが、其のうち最も名高く、影響の多かつたものは、如儡子の『可笑記』である。

如儡子の本姓に就いては、水谷不倒氏の『列傳體小說史』に、豐前臣村斎藏の『可笑記』奥書に依り、湯村次郎と記してある。其の詞語に見えて『關原軍記大全』の原文は次の如し。

最上陣中にて、予が父なる湯村次郎と號する者の作りたる『可笑記』といふ草子の中に、最上義光の節、大井右近は、谷地の城に籠りて、寄手を防ぎたりとあれど、志村伊豆守、谷地の城を、一攻攻めたりし時の事なるが、實は又下大石右門、谷地の城を攻めたりしに、大井右近等、皆々防ぎ戰ひて、其の後、山形へ引取りたるを書誤りし云々。

『關原軍記大全』の著者は宮川尚古と云ひ、本名は秀興、初めの姓は富田、號は鹿齋、忍齋の號もある。又何求とも云ふ。若狹小濱の人で、江戸に來り、長沼澹齋に從つて、兵學を修め、後筑後の久留米に來りて、兵學を教授し、門人頗る多かつた。『關原軍記大成』（『大全』の增補本）序に、「同邑の士人宮川何求斎、曾て編錄に志あり、筍も若州の產、初め酒井忠勝侯に仕へて、書記となり、繼いで嗣君忠直侯に仕ふ。然れども故ありて仕を辭し、去りて江府に遊び、晩に至りて西に來り、祿を筑州に食む。」とあるにて、其の經歷が知られる。前に記せる大井右近のことは、

『可笑記』巻二に、

一 むかし上杉景勝公の家臣直江山城守と、出羽の国最上の御主義光公と合戦の時に、直江方に下次右衛門と云ふ一字の大剛、最上が方の城を攻め取つて、則ち其の城に籠り居けり。最上方より寄せ攻めに、本丸の堀際まで攻め寄せ、宵の内より引く時日と申す物をもつて闇にして、城の矢ざまへ一統に射込み申す事、いかにも殊勝、あうかりけるに、此の次日は大切にして、打ち取る所も無く、すこしもすれば此の攻口より、攻め破らるべう思はれ、[illegible]いく仕り候處に、そのか[illegible]りを若大井右近も、折ふし此の城に籠り居て、此の日[illegible]はせ合せこまれ候、云々

とあるもの、それであるが、『可笑記』巻五にある、

むかしさる時、親子ともに牢人いたし、慰みのかたはらに[illegible]仕り候時、[illegible]の事に[illegible]、老[illegible]母に[illegible]は[illegible]、[illegible]をことのほかいとおしみけるに、[illegible]ついにそれにあい[illegible]て、武州[illegible]の[illegible]にて[illegible]、[illegible]なる[illegible]出[illegible]と、[illegible]なれば、[illegible]身上[illegible]べきこともなく、[illegible]者なれば、日[illegible]にもあらず、心[illegible]なれば、[illegible]くしてつてなる[illegible]ず、[illegible]なれば、[illegible]して、[illegible]在処に、不思[illegible]の[illegible]にして、いかにすべきと、[illegible]に、[illegible]入[illegible]云へるに、[illegible]すなわちと云ふに、[illegible]に[illegible]よ、[illegible]はしき所へ[illegible]と申さる。[illegible]何と[illegible]、よ[illegible]なし。[illegible]所なく、人の[illegible]せしもいかで[illegible]ば、久しく[illegible]は[illegible]事、[illegible]まてき事かと云ふ[illegible]は、[illegible]の大事にて、ただ[illegible]すべしと申さる。

とあるに、『剣侠伝小説史』にあるが如し。彼の小傳とも見えべきものであらう。『可笑記』の中

[illegible]

には、武士の心がけを說くことが屢々見られるのを見ても、又其の近親に、勇士、且學者としての名を見ても、彼は本武士であつた。關東に生まれ、恩路に人となり、又江戸に住し、晩年は佛門に歸依したものと思はれる。文筆にすぐれてもあつて、『可笑記』『百八町記』などを述作した。『百八町記』は、佛者として、儒者に對して、精髓を述べたものであるが、『可笑記』は、時代の好尚に投じ、戯作のはじまりとまで云はれ、他の假名草子に多くの影響を與へてゐる。

意林庵朝山氏、初め佛門に在りて素心と云ふ。『清水物語』あり、三浦爲春に『あだ物語』あり、三五庵木算に『をさな物語』あり、鈴木正三（石平道人）に『因果物語』『二人比丘尼』、器の子に『花のえん物語』、蒲女に『和漢賢女物語』などがあるが、假名草子の作者としては、山岡元鄰と了意とを推さざるを得ない。

山岡元鄰のことは、『古物語評判』に精しいから、此に之れを抄出する。

齋號を而慍と御附けなされ候は、何事ぞやと云へば、先生答へて云、余が齋號は御存じの如く、論語に人不レ知而不レ慍、不二亦君子一乎といふ心を用ゐ申し候。此の心は爰に人あり、身によりてならひ習ひて積み置きたる才德ありとても、固より人に賣るべき心ならねば、人知らずとて露許り慍る心なし。若し擧げ用ゐたらん時は、時に從うて行くべきのみと思へるは、君子ならずやとのたまふ。されば某は君子に非ず、然る故に少し許り貯へ置きたる才藝を人知らず、然るを慍るが故、かく齋號を附け申したるなり、と申せば、今更をこがましく存た

ひて、皆それの道々に熟して、恰も其精義あるに似たり、此の故に蒙求子集の[illegible]かなふ所を[illegible]ひ、[illegible]
孟上下明記にもあれ、其の諸説を得て、人の常見事の要あり、一つとして[illegible]ずと云ふ事なし、醫術卜筮
經濟相生の事まで委しく[illegible]、中比儒學を好みし故に、文選左右前後くだいしを校定にもいれ、若宗
り蔬菜谷類の書籍に徂て研究し、我が日の本の通路、香山の奥へも分け登り、そこばての流れを渉り、
草木の名を小長まで心を付け見つべし、誠に百集（甘蔗之）の云へることもして、頭ずし六尺に満ちけるを以て、
ことごとなく、口に漏れずに記し以てひとしきに打ち併せて、同前書[illegible]、續群書類從も[illegible]百人一首
抄」「[illegible]物語抄」「つれ[illegible]」「首陽輿志」「同再興」「あぢさ抄」「錦」「本草考論」「本朝の抄」「[illegible]身の上
に[illegible]にて[illegible]、[illegible]「[illegible]」など[illegible]を[illegible]、人の[illegible]に[illegible]、[illegible]に[illegible]もあり、又[illegible]
[illegible]もあり、[illegible]くして[illegible]に[illegible]へられず、[illegible]にも知られで、草木と共に朽ち果てなば、何ぞ遺憾なしとせ
ざらんや[illegible]（[illegible]）[illegible]先生[illegible]子[illegible]（[illegible]）六月二十七日、[illegible]にして果てられしが、[illegible]
に[illegible]に年を[illegible]せず、[illegible]の[illegible]を待たずして、[illegible]多く[illegible]、[illegible]、山崎氏、[illegible]、字
は徳甫、父祖は勢州山田の人なり。

元隣は前記著の外に、[illegible]、[illegible]の[illegible]があつた。北村季吟に從ひて國學歌道を修め、
又俳諧に精しく、其の子に元恕があるも、[illegible]としては「他[illegible]の上」「小さかづき」等が
ある。

[illegible]はこの間に[illegible]元[illegible]を得たものであるが、果して一人なりしか、[illegible]人なりしか、[illegible]

なりしか、別人なりしかは、寔に判断に苦しむ未了の疑問である。了意に関しては、『狗張子』の序文に林義端が書きつけたもの以外に所見がない。其の文は次の如くである。

洛陽本性寺の了意大徳は、始めて博識多聞にして、特に文思の才に富めり、生平の著述甚だ多し、晩年に及んで筆力ますます健なり。去年庚午の春、往とに御伽婢子の遺せるを拾ひ、漏れたるを補ひて、二狗張子若干巻を作り、その續集に擬せんとす。其の年の冬に至り、既にも病を獲て、明年辛未の元日、意ありけるに遺偈として頌を示す、忽爾長逝して、深く其の才を惜しむ。願ふに凡そ人の常情、その偈頌を記憶すといへども、幽明途殊にして復りみるべからざれば、必ず其の生平の文字篇章を尋ねて、面目に換へるのみ。それ此の書は了意大徳晩年思ひを究め、精を研きて著作せる遺蹟にして、是れ實に大徳遺愛の形見たるをや。是の故に今其の遺書一字もあらためず、梓にちりばめ世に行ふ。

朝倉無聲氏は淺井了意を以て全然別人となして、「されば其の一種了意の俗姓の如きも、絶えて知るに由なきを、後人濫りに淺井氏を冠せしは、同時代同地（京都）に於て、淺井了意といへる著述家ありしを、同一人の如く臆断せしより生ぜし誤謬なり。この了意は俗人にして、名は松雲、字は了石、静斎と號して、戯作家にあらざるも、和歌及び物語の註釋書を初め、軍記及び地理書の著述頗る多し。寛永六年九月二十七日、壽七十にて歿せしを見ても、全く同名異人なることを知るべし。」と論じてゐる。實際了意の著述なるものは極めて多く、又頗る多方面に渉つてゐる。

二卷六冊。入道了意作とあるは、甚だ疑はしいのであるが、「月見之友」の末には、「于時寛文七夏上旬、洛下散雲子了意書之」とあつて、此の了意は、釋了意であるところを見ると、俗の了意も亦散雲を號としてゐるのでは、其の間の區別がいよいよ附け難くなる。

了意は松雲子の他に瓢水子とも號し、洛北本性寺昭儀坊釋了意とも記してゐる。佛書の著述も少なからずあるが、蓋し軍記や古文の註釋は恐らく此の了意の著述であらうといふ。名所記には「東海道名所記」「江戸名所記」「京雀」などが、了意作と云ひ傳へられてゐる。「東海道名所記」には作者名もなく、刊行年月も明らかでなく、元祿板「增益書籍目錄」に了意とあるのみであつて、了意の作と斷ぜられてゐる。此の書中、坂の下、後に二老のあるは、坂の下に用濟れ、前後明らかなる載せてあるけれども、此の年代の地頭の名、うち續き交際し、由緒れて來た事を見て、人々に指さるりしとあるが、寛文年以前地頭の名に、慶安元年であるから、此の書の成つたのは萬治元年である。雜話を交へ、文章も凡ならぬところあつて、名所記中の白眉であるから、作者も文才すぐれた人と思はれる人、殊に趣を敎訓に求めるなど、學識ありて世事に長けた人であるが、彼の釋了意を「一休の咄」と呼んでゐるから、染筆の人は、「浮世物語」の浮世房と同じく、了意自身はあるまいが、「京雀」をして、釋了意の作とは云ひ難く、又、「東海道名所記」に了意の人物作

らしく思はれる。

『伽婢子』の筆致が縱横自在に妙を極めてゐる所を見ても、了意は名文家であつて、著書も多い、此等の他に、『可笑記評判』『堪忍記』『孝行物語』『本朝女鑑』『日本二十四孝』『狂歌咄』『むさしあぶみ』『浮世物語』『狗張子』『往日利生記』『百物語』『かなめ石』『安部晴明記』『月見の友』などがあり、又如儡子の『百八町記』に加筆してゐる

了意の前身は明らかでないが、元はれつきとした武士の、後には浪々の身となり、遂には佛門に歸したらしくある。學問は老莊の說を奉じ、佛理に明るく、文才あつて、著述も亦甚だ多かつた。其の住してゐた本性寺は明らかでないが、黑谷にも居たと稱されてゐる。『月見の友』に云ふ、

一と云ふは、即ち二なり、自然の理なり。何ぞ心をつけんや、渾沌としたる、一もなく二もなく、名をつけて見たれば、一となる。一を動かして見れば、二となる。この間に物生ずれば、三となり、萬物となる。物は、ふいごの如し。動けば風を生じ、風によつて物を生ず。無爲自然にして無爲なり、無爲にして自然なれば、夢に胡蝶となる、種々花の葉にとまる、我もとまる。我たる事を知らず。野らに飛ぶ、何をか求めん、花の葉か露に、望みは是日影。何をか樂しむ、花の日影に、悠々たり。我たる事を知らず、偶然と、僅に日暮む。柴に伏す、我たり。我の樂しびを忘る、我は我か、蝶が蝶か、蝶たるを知らず、夢が夢か、覺めたが夢か、覺めたか、定め難し。

道を樂し、身を修むる事は、事少きに如くはなし。道の道たるを知らず、身の靜かならざるは、事繁きより起る。佛も一大事を説かんとて、無量の事どもを説き給ふにより、却つて諸宗の實、其の迷ひもち〳〵なり。儒佛老し、何ぞ三道あらんや。聖人心々ならんや。衆生の迷ひにつけて、佛も、迷ひ給ふ。理りなるかな。

此の書は、「清水物語」「祇園物語」の脈を受けたものであるが、以て彼の學の基くところを知るに足る。

されば了意の作は概ね此の思想に依りて教訓を説いてゐる。後世心學の材料ともなるべきものが多い。假名草子の作家として、彼は最も廣くして、且大である。

假名草子は寛文頃を最も盛なる時代として、延寶天和より、貞享元祿頃までに及んでゐる。

伊曾保物語

三冊。元和の活字本、寛永の活字本、其の異板、萬治二年の繪入本等がある。

文祿二年天草の耶蘇會學林にて開板せる「エソポのフワブラス」なるものは、全然異なつてゐる。文祿版は現に大英博物館に藏され、天草版の「平家物語」と合綴して、本文九十七頁あるさうである。此の書のことに就いては、新村出博士の「文祿舊譯伊曾保物語」に詳しい。其の序

の裏面には、左の如き由來が記してあるといふ。

讀誦の人へ對して書す

[illegible]て人は[illegible]の[illegible]に[illegible]耳を[illegible]、[illegible]の[illegible]に[illegible]遷移するに由て、耳近きことを[illegible]、其の語を[illegible]に寄す[illegible]、[illegible]は[illegible]本を[illegible]するに[illegible]てす。其の[illegible]稿本[illegible]を[illegible]し[illegible]、世の中に[illegible]あるを以て、[illegible]用と[illegible]になり。[illegible]故に[illegible]へ[illegible]を以て此の[illegible]を[illegible]ふ。日本の言葉に相こそ、いろ〳〵の字書の後、[illegible]に[illegible]かるゝなり。是れ實に日本の言葉[illegible]を[illegible]なしす、[illegible]を人に教へ[illegible]ことなるべきものなり。

此の書は今文禄[illegible]寺にて[illegible]つてある。

又元和開板其前の繪卷物ありと云ふ。元和開板後のものは、同一體本にあるが、文禄本とは全然相違してゐる

當に文禄本は[illegible]字を以て類し、[illegible]に記され、慶長活字本は同字を以て書き、序文にて[illegible]されたるもの[illegible]と[illegible]、書名等の分ちが、目録に掲げ[illegible]は分れ、[illegible]を[illegible]ちたる文禄[illegible]と慶長本とを比すに語彙の數、[illegible]語等より伊呂波傳の序文結構に至るまで差別あるし。且一本に掲げたる語彙にして、他本に存讀せざるもの甚だ多く、其語の數、文禄本七十、慶長本六十四、二本の一致せる語は僅かに二十四に過ぎず。即ち慶元の活字本は文禄の[illegible]本に據りしにあらざる事[illegible]も明らかなり。[illegible]

和刊開板の『伊曾保物語』の著者に就いては明らかでないが、新村博士は編者に關して左の如く見てゐる。

明治四十三年四月發行の『能苑』に大槻如電翁の『伊曾保物語のもつれ』と題する論文が見えて、寛永板に關する事が記載されてゐる。それに由ると、如電翁は先年大阪谷一六翁のもとで、何處からか貰物に當た『伊曾保物語』の寛永版三本を見られたが、その本は皆書賣共に關係ある人の手に成つたものであつた。然し關係共にこと十七年頃出たもので、多分外國人の手に成つたものであらうとの事である。右大槻如電翁は、此の物語の刊本は、宣教師の天主教の手に成つたものだと云ふ説に同意して、尚ほ先輩諸家なども手記で附來されてゐたと云つて、更に書きて、慶長末の刊行本は、其の當時關東中心で有名になつて居る。其の調査に依ると先輩としての一本を嚴しく追究されて居れて、即ち本書の原本作者の編纂物の一門として、前田侯爵家の藏本三冊を圖として、

圖にして彫刻させたと見てよからうと推定された。

上述の如く、上述された見解「十三世紀」の如き本人の著作者と信ずることとされるが、編著者に就いてはこれを推定理する事、慶長の事を知つて居る事、長門に出て出家の編纂物に寄して居るが、其の三國を經た編纂に就いては、當時南蠻學の事を求めた爲であらうである。

原典を日本化した編纂者に就いては、イソポ・ファーブラスの『日本文典』（天正）の編纂者である譯者に由つて、作者と名付けられ、「天草本」の如く、耶蘇會の宣教師に歸した、と云ふ説に出版人の編纂者としての事を許容すること、つまり天草本『伊曾保物語』の翻譯者であつたと見るのが、今後に於て正しいとされるであらう。

ら、見當は大體外れまいと思はれる。

四十三年八月、伊勢の神宮文庫で「伊曾保物語」の古寫本を見たが、開板以前のものらしくも、それより古くは無い。但し内容も體裁も流布本と異らぬ。如何に古くも慶長元年以後を以て、國字本の伊曾保の成った時と定められた其の根據は取ることは出來ないが、時代はほゞ當つてゐるだらうと思ふ。

此には南蠻研究者の所說を紹介して、解題に代へて置く

恨之介

二冊。寛永活字本、明暦二年板、寛文四年板などがある。

葛の恨之介が清水にて美しい女を見て、思ひ焦れ、莊司が後家の尼に此の事を打ち明ける。其の美しい女は木村常陸の遺兒雪の前であったが、今は近衛公の養女となってゐる事が分る。尼も恨之介の切なき思ひを憐んで、姫と親しき菊亭殿の息女あやめの前を介して、雪の前に恨之介の思ひを通じ、恨之介の戀は叶った。しかしそれも唯一夜だけで、又と逢ふ瀬がないので、恨之介は思ひ亂れて、友人夢の浮世之介等に遺書を渡して、焦れ死をする。此の事を聞いた雪の前は、世を味氣なく感じて自殺を遂げる。あやめの前も、莊司の尼も悲嘆に暮れて死んでしまふ。恨之

介の友人達は、根之介と雪の両人の亡骸を一つ所に埋めたと云ふに過ぎない一篇の草紙ではあるが、
が下重ね」との作句が詠まれたのを見ても、此の書は當時著名であつたのである。

薄雪物語

二冊。寛永九年板、寛文四年板、同九年板、延寶八年板、貞享三年板などがある。
園部左衛門なるものが、清水寺にてさいきやう和泉の妻薄雪なる美女を見染め、しばしば艶書を送つて、遂に戀に成功したが、左衛門の旅の留守に薄雪は病死する。之れを聞いた左衛門は出家せんとしたが、思ひ返して佛門に入り、高野に登りて往生を遂げると云ふ筋。「根之介」より後れて成つたとの事であるから、此の書がそれに摸倣したことは云ふまでもなからう。

尤の雙紙

二冊。寛永九年板、同十一年板、慶安二年板などがある。
古文に擬した狂文である。清少納言の「枕草子」に倣つて「犬枕」を作り、更に其の滑稽を助けたもので、枕の末尾を省いて「尤の雙紙」と名づけたとある。

七人比丘尼

三冊。寛永十二年版に同様本と、彩色のある繪入本とがあり、天和三年版は「さんげ物語」と改題してゐる。

内容。右京の商者、花かつら、兵部の卿が、菅井殿、通殿、常陸の國の某と云ふものの靈前計七、貞和年中に信濃國善光寺に參詣する人々の爲に、關川と云ふ所に湯を沸して大齋とし、諸人の垢をかく尼、三也殿があつたと云ふを發端とする。此處に集まつた尼達の懺悔話になつてゐる。戀もあれば、子を失つた歎きもあり、いまさらの罪障を語つて、菩提の道に入る顛末を述べたのである。足利時代に作られた「三人法師」一名「三人懺悔冊子」を本として結構したものであるが、此の書の他にも鈴木正三に「二人比丘尼」あり、又「四人比丘尼」など同じ系統のものが世に行はれて、無常迅速からの菩提發心を敍べてゐる。

二人比丘尼の著者鈴木正三は、通稱を九太夫と云ひ、徳川家康に仕へて、大坂役にも從軍し、後に秀忠に仕へて大番に列し、致仕して後薙髮して正三と稱し、石平道人、玄々軒と號した。佛門に入りて、諸國を遊歷し、曾て三河國石平山恩眞寺に在り、後江戸に下り、淺草の了心庵に住

として實隆に從事し、明曆元年六月二十五日、七十歳にて歿した。正三の作は、此の書の他に假名草子として目すべきものに、『因果物語』がある。

『七人比丘尼』下野の住人帶田兵衞は、まだ二十五の年若であつた妻の死を遂げ、十九歳であつた妻は、正十歳時にて、一周忌の夜に哀を盡し、とある小堂に通夜したるに、七人の女形は同情の涙と共に身の上を、一夜物語として、又そこに立出でて、談議に供養をするまで、夜半の折、國司しているに、終夜と、上手な手をうたつて、知音に變へて聞けば、我等と申すに、地水火風の假のものを承しに逸居けり、六趣輪廻の鏡と聞き、十悪の罪を出て、そこに入道の心當を、そこに見る為めと聞しても、有るに由て、一『人間は、根本をすこしも知らずして肉をもつて生まれ、四大には水なく、息の絶えては無なり、或者は永らへて、此の世の間非に何ぞ替はらぬとも、此の根の物を我が身と思ひ、彼は岸、彼は火、故にすて、火は煙、とせざれば、病と憂の、身は必其の種となりて、業に溺れて、苦患に沈む者、此の心を離し、道理の理となるなり、小は凡夫に拂ひとりて、無常の理に入るなり、と云ふ、女は此の道に至る心理にて、本より心の明かに在り、それにて、又不幸なる、十住かなる迷路に迷ひ、しばらく此に宿ふたれ、此の女房は、さして此の心理で遂にうちへと、真理の實は即ち事に由て、迷ひ自得となる道理とし、女は現前に懺悔し、信を開いて、説くうち、無き比丘尼の弟子となり、修行を積みて、大往生を遂げた。

七人比丘尼は、名を花の枝と云ひ、其の生涯を此に用ひてゐない。又津左京亮の息女初花は、大和兵衞の姪で、又其妻を示す。舊都の藤住れて父の清宗を害し、吉田小倉の里に庵住居をして、雖之希は其の妻を盡行、

に頃は九月の末なれば、木々の梢も紅葉して、錦を晒す東山、霊鷲山の西堺を、かくすと思ひ隔てに山は八坂の里続て、高屋の塔一なれや、立ち渡りたる霞間より、清水寺の鐘の声、祇園精舎と覚ほしく、諸行無常を響きて、[illegible]に行いて桔花に会ひ、連れ帰つて、恋慕の程を語るに、一子竹若丸をなした。然るに多々の霊鷲に、竹若水中に溺れて頓死し、家中の塵を払はれたので、[illegible]に入りて、信之丞は清月、桔花は妙海と改名し、諸国修行に出た。信之丞の乳母有馬、桔花の侍女[illegible]墨染の衣を[illegible]て、主の菩提を弔つたが、[illegible]て主人夫婦に邂逅する。さる法師の庵室にて、互に不思議を見、それより久[illegible]の三草院の傍に庵室を結び、両親の菩提、竹若の亡き跡を弔つて、清月は往生を遂げ、二人ともに[illegible]ければ、[illegible]女[illegible]、中将姫のごとくに、昔往生の素懐を遂げ[illegible]

云ふに終る。

あだ物語

二冊。平為春作、寛永十七年二月板。

作者平為春は三浦長門守と称し循庵と號す。相模の三浦氏の後で、徳川家康より附けられた紀伊の徳川頼宣の重臣である。「南龍言行錄」に三浦長門守為時とあるは、此の人の子であらうか。「鯨船の遊興」「石燈籠」「諸士知行名上の評議」「久野丹波守」等の條に其の名が見えてゐる。爲

年に寛永元年隱居して定頃と號し、承應元年七月二日八十歳にて歿した。此の人武道のみならず内典外典及び歌道にも通じてゐた。

此の書は烏丸光廣卿の序を添へて、仙洞御所の乙夜の覽に供し、叡感あらせられたと云ふ。諸鳥が當意に獻ぜしかけたるに假託して、佛理を說いたもので、風變りな趣向である。

可笑記

五冊。如儡子作。寛永十九年版の奧書には、「寛永十三年孟陽中旬江城之旅泊身雪作之　寛永壬午季秋吉日刊行」と、「心齋橋通の西へ入南久寶寺町南側平野屋九兵衞」とありて、大本である。但し插繪はない。尚ほ、年代は、十卷本で、插繪があり、「繪入風流可笑記」と題してゐる。又「に「可笑記評判」があり、「百物語」の附記にて、近世隨筆の祖と云つてゐるが、此の書は著者とある。

一種の隨筆で、作者は、不遇の境遇に憤慨して、世間不平の念を漏らしたと云ふものであるが、一種の教訓小說である。

仁勢物語

二冊。寛永年間板。傳烏丸光廣作。

伊勢物語をもぢつた滑稽小說であつて、古名作に擬した書物は少なくなく、前に擧げた『犬の草紙』が枕草子に擬し、『犬方丈記』が方丈記に擬したのを初めとして、『徒然草』をもぢつた『吉原徒然草』『つれ〴〵草』、『平家物語』に擬した『寛闊平家物語』、『伊勢物語』をもぢつた『おかし男』『仁勢物語通補抄』の類を少なしとせぬ。

作者と云ひ傳へられる烏丸光廣は、和歌國學に通じ、細川幽齋に從つて歌道の祕訣を受け、書畫に堪能であつて、公家衆の通人で、才物であつたので、從一位藤原光宣の子息であつたが、放蕩の爲に一時官を停められた經歷などもある、正二位權大納言に至つた。『田夫物語』『竹齋物語』などもその作と云ひ傳へられてゐる、又『目覺草』の作がある。

他我身の上

六冊、山岡元隣作。明曆三年板、卷末に『明曆三年丁酉正月吉日、京寺町通圓福寺前之町秋田

暑中在獄門讃日」とがれ、

此の書は叙景を主とした一種の随筆である。「乱なき節に太平の歌を吹けば、耳より外に其の音遠く、指を以てする人は月を指せば、先づ指を忘れたり。曲を曲といふもさ、それまたせしむるものは他ぞ」とある序文の如きは、荘子の思想を本とした名文である。以て作者の學識、彼の文藻を窺ふに足りる。

をさな源氏

十冊。野々口立圃作。寛文十年板。

「源氏物語」の梗概を平易に書き述べて、しかも原書の趣を失はぬやうにしてあるもので、作者の面目のある書である。此

村細非の「源氏」と共に、當時の俳人が源氏の梗概を知るに便利な書である。

野々口立圃は雛屋庄右衛門、名は親重、號は松翁と稱す。松永貞徳の門に入りて俳諧を學び、其の高弟となったが、同門の松江重頼と争ひをなし、師の機嫌を損じたので、鳥丸光廣に歌を學び、別に一派を起して「誹諧発句帳」「花月千句」「空礫」「花火草増補」「丸合せ」「小町踊」などいふ俳書を編みした。その著述が多い。寛文九年九月三十日歿す、年七十二。

京都の寺院霊場等に就いて記した

「源氏物語」五十四帖の要、花咲（？）一帖の梗概を述べたものには、「紅白源氏物語」（のち増補して『若草源氏』と改題）がある。

以上のやうに仮名草子には、説話物あり、恋愛物あり、教訓物あり、怪異物あり、若衆物あり、遊覧物などもあるが、仮名草子の範囲はなほ広い。恋愛物にしても、男色物は足利時代の「秋夜長物語」「大たんせう」「若衆物語」などを先蹤として、「若道物語」「心友記」「よだれかけ」などがあり、其の後は浮世草子に及んで、「男色大鑑」「男色十寸鏡」「男色子鑑」「男色木目鑑」「男色比翼鳥」「男色今鑑」「菜花遊女」、「傾城禁短気」、「野傾友三味線」「江戸土産」其の他の「野郎虫」を始とする役者評判に関する評判記類もある。「僧侶へ」「色物語」「江戸を鵜」「一休はなし」等の噺本、「天神の本地」「中将姫の本地」「愛宕地蔵の物語」「八幡の本地」などの縁起物、「聚楽物語」「吉利支丹退治物語」「大坂物語」「土佐軍記」などの軍記物、「狗張子」「百[illegible]本」等の怪異物、「吉原丸はだか」「楽街道日記」「吉原大雑書」などの花街物、「東海道名所記」「江戸名所記」「京童」「京童跡追」「京雀」等の名所記、「堀下徒然草」「役者丸はだか」等の評判記も、皆其のうちに属してゐる。それで仮名草子の多くは、上方板で、江戸に板せられたものは

甚だ少ない。假名草子から浮世草子へかけての江戸文學は、上方の天地で、江戸はまだ此の種の文學に遅れて、幼稚なる赤本から、黒本、青本と次第に畫の間に文學を挟む樣になり、遂に黄表紙と云ふ迄進み、合卷物となり、洒落本行はれ、讀本出でて、上方は江戸に其の領分を讓り渡すこととなつた。

伊曾保物語

作者不詳

伊曾保物語上目錄

伊曾保物語上目録

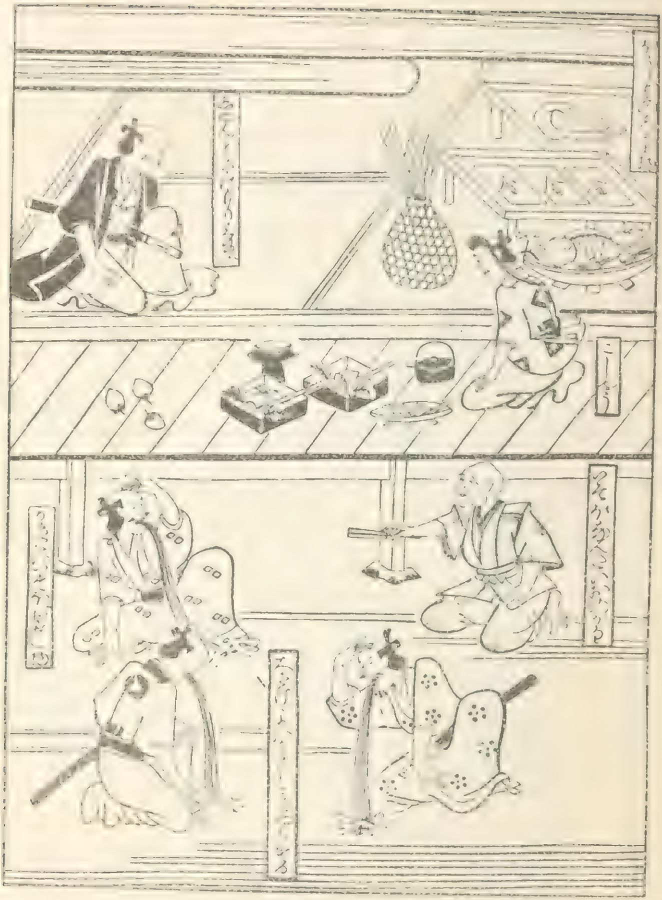
伊曾保物語上目録　終

伊曾保物語　上

第一　本國の事

さる程にえうろうはのうち、ひりしやの國とろやといふ所に、あもにやと云ふ里あり、其の里に伊曾保と云ふ人ありけり。其の時代、えうろうはの國中に、か程見にくき人なし。其の故は、かうべはつねのかうべに二つがさ有り、まなこの玉つはぐみ出でて、其のさきたひらかなり。かほかたち色くろく、兩のほゝなだれ、首のがみ、せいひきく、あし長くしてふとし。せなかゝまり、腹ふくれ出でてまがれり。物云ふ事おもしろきなり。其の時代此のいそほ、人にすぐれて見苦しく、きたなき人なり。されども才覺又ならぶ人なし。されば其の里にたゝかひ起りて、他國の軍勢みだれ入り、いそほをからめ取つて、遙かのよそへ聞えける。あてゑるすと云ふ國の、ありしてすと云ふ人に賣れり。彼の者かすがたのみぐるしきを見て、なすべきわざ無ければとて、わが領地に遣はし、百姓等にひとしく、牛馬を飼はしむるわざをなん行ふ。かくて年經ぬれども、さるべき人ともしらずなん侍りける。折節ある商人、此の者をかひとり、ありしてす、ふたりかしこしと、彼の商人にうりわたしける。猶別

の人二人買ひそへ、以上三人めし具して、さんとすといふ所に難なく行きけり。其の里に於て、しやんといへるやんごとなき智者の行き逢ひ、彼の商人に尋ねて云く、「御邊の召し具しける者共は、何事をかはし侍るぞ。」と宣へば、商人こたへていはく、「一人は琵琶をひくげに候。」と申しければ、かのしやんと、すぐに二人の者にとひ給ふは、「面々は何事をかし侍るぞ。」と仰せければ、二人もろともに答へていふ、「あらゆる程の事をば、かたのごとく知り侍る。」と申す。其の後又いそほに、「汝はいかなる者ぞ。」ととひ給へば、いそほ答へて云く、「我は是れ骨肉なり。」と申しければ、「我なんぢに骨肉をばとはず、汝いづくにて生まれけるぞや。」と仰せければ、いそほ答へていはく、「我はこれ母の胎内より生まれ候。」と申す。「汝に母の胎内をばとはず、汝がむまれたる所は、いづくの國ぞ。」と仰せければ、いそほ答へていはく、「我は是れ母のうみたる所にて、さだたり候。」と申す。其の時しやんと、「かれが返答はたゞ、魚の鳥をあぐるが如し。さて汝は何事をか知り侍る。」と問ひ給へば、いそほ答へて云く、「何事をも知り侍らぬ者にて候。」と申す。其の時しやんと、重ねて仰せけるは、「人として物のわきなき事あたはず、汝何の故にか、しわざなきや。」と仰せければ、いそほ答へて云く、「われ何をかなすと申すべき、其のゆゑは、くだんの兩人、あらゆる程の事をば知るといへり。是れにもれて、われ何をか知り候べきや。」と申す。其の時しやんと、いそほに問ひたまはく、「われ汝をかひとるべし、



汝においていかん。」とおほせければ、いそほ答へて云く、「たゞ其の事はのそれの心に有るべし、いかでそれがしに尋ね給ふぞ。」と申す。しやんと重ねてのたまふは、「われ汝をかひとるべし、彼の時逃げさるべきや。」と仰せければ、いそほ答へて云く、「われ此所を逃げさらん時、御邊のいけんを請くべからず。」と申す。かやうに様々きようがるこたへ共をし侍りければ、心よげに思ひて、いざゝかの間にかひ取り、彼の商人とゆき給ふに、あるせきの前にて、いそほが姿を見て、「怪しの者や。」と、とがめおきて、「是れは誰の召し具し給ふ者ぞ。」と尋ねければ、しやんも商人も、あまりにいそほが見にくき事をはぢて、「知らず。」と答ふ。いそほ此のよしを承り、「あなうれしの事や、われに主なし。」といひて、いさみあへる。其の時しやんも商人も、「是れは我がしよじうにて候。」と宣ひ、それよりしやんと、いそほを召しつれ、我が本へかへりたまひけり。

第二　荷物をもつ事

ある時しやんと、旅におもむかせ給ふに、下人共に荷物を宛て行ふ。われも〳〵と、かろき荷物をあらそひ取りて是れを持つ。こゝに食物をいれたる物有りけり。そのおもきに恐れて、是れをもつ人なし。さらばとて、いそほ辭するに及ばず、「何事も殿の御奉公ならば。」とて是れをもつ。「其の日の重荷、いそほにすぎたる者なし。」と皆いひけり。日数へて行く程に、此の食物を常に用ゐる。かるが故

に目にそへてかろく成りけり。はてにはいとかろき荷も持ちけり。「あつはれ賢きこゝろあてかな。」とて、そねみ給ふ人々ありけり。

第三　柿を吐逆する事

或時、しやんとのもとへ柿を送る人有りけり。彼のしよじう等、此の柿喰ひつくして、いそほが臥したりける懐に、一つ二つ押しいれて、彼になん負はせける。やゝあつて後、しやんと、彼の柿をこひいたまふ。各「しらず。」と答ふ。しやんと怪しみ尋ねければ、各ひとつ口に申しけるは、「其の柿は、いそほこそしり侍らん。」と云ふ。「さらば。」とて、いそほを召しいだし尋ね給ふに、案のごとく、懐に柿有り。「あはや。」と是れを糺明するに、いそほ申しけるは、「罪科のがれがたく候、しかれどもそれがし申さんことを、傍輩等にも、仰せ付けさせ給へかし。」と申されければ、しやんとかれが望みをとげさせ給ふ。其のほかのこといつは、各傍輩等を、御前に召し出され、酒をくだされて侍るならば、とぎやくをせんこと有るべし。其の柿をとぎやくしたらん者を、某によらず其のとがたるべし。」とまうす。しやんげにもとおもひて、其の計略をなしたまふに、たなごゝろをさすがごとし、[illegible]違はず、彼の柿をぬすみ食ひたる者ども、一度に吐逆す。さるによりて、いそほはとがなく、[illegible]其は罪をかうぶりける。いそほが當座の機轉、きどくとぞ人々かんじ給ひけり。

第四　のう人のふしんの事

ある時しやんと、山野に逍遥して、いそほを召しつれ給ふ。爰にのう人、しやんとに尋ね申すやう、「それ天地の間に、生ずる所の草木を見るに、たゞ雨露のめぐみを以て、生長することなし、此のいはれいかに。」と問ふ。しやんと答へて云く、「たゞ是れ天道のめぐみなり。」とのたまふ。其の時いそほあざ笑つて云く、「さやうの御こたへは、餘り愚かに候。」と申しければ、「さらば。」とて、しやんと立ち歸り、後のう人に告げたまはく、「先にこたふる所其の理にあたらず、我がめしぐし侍る者に、こたへさすべし。」と仰せければ、のう人彼のいそほが姿をみて、「仰せにては候へども、かかる怪しの者の、いかほどの事をか答へ候べき。」と申しければ、いそほ聞きて、「いかゞ汝がいふ處、道理にもれたり。こたふる處はづれずば、なんぞ姿のみにくきによらんや。されば先にとふ處、甚だ以てわきまへやらず、汝繼子と實子をしるやいなや。それ人間の習ひとして、實子をば是れを愛し、繼子をば是れをうとんず。其のごとくしたいの中に生まるゝ、したいがために繼子なり、人の繼子を以て、したいが親疎を辨ふなり。」

第五　けだものの舌の事

ある時しやんと、客來のみぎり、いそほに仰せて、「汝世の中にめづらしき物を、求め來れ。」とあり

けれ共、いそほ、けだものゝ香をかい聞へ侍りけるに、しやんと是れを見て、「世の中のあやふしきをはに、けだものゝ香をもとむる事、何事ぞ」と仰せければ、いそほ答へて云く、「それ世の中の有様を見るに、百姓のさへづりを以て、けんそはあんなんにして、後生ぜんしよにいたり候も、皆舌頭のわざなり。されば諸にくの中において、舌はいちあやふしき物にあらずや」と申す。又或時、「世間第一の悪しき物を求め来れ」と有りければ、いそほ又けだものゝ香をとゝのふ。しやんと是れを見て、「是れは世間第一、あやふしき物にてこそあれ、あしき物とは何事ぞ」と有りければ、いそほ答へて云く、「舌は、世間の悪事を発し候に、是れわざはひの元なり。三寸の舌のさへづりを以て、五尺の身を損じ候まゝ、みな舌故のしわざにて候はずや」と申すに、しやんと領承して、二つの返事をたつとく給ふなり。

第六　風呂の事

或時、しやんと、いそほに仰せけるは、「風呂はひろきや、見て参れ」と有りければ、畏まつて罷り出て、其の道に於いて、ある人いそほに行き逢ひ、「何国へいづかたへ行くぞ」と問ひければ、「しらず」と答ふ。其の人怒つて云く、「奇怪なり、いそほ、人の問ひに、さる返事する者や有ること」とて、いそほを人獄にいれければ、いそほ答へて云く、「さればこそ、さやうに人にいましめられん事を、し

ちすることにて侍るか。」と申しければ、「ごさんなれ。」とて、許されける。其の門のかたはらに、出入にさはりする石あり。此の石にて、あまた足をくじき、或はうちさくを、人是れをみて、「あやしの石や。」とて、是れをのぞく。いそほ是れをみて、しやんとに申しける「風呂には人一人にて候」と見え侍ること申しければ、「さらば。」とて、しやんと風呂にいらるゝ。然る處に風呂に入りける人いくらとも數をしらず。しやんと、いそほを召して仰せけるは、「汝何の故を以てか、風呂には人一人といひけること」と問ひ給へば、いそほ答へて云く、「先に風呂の門に出入にさはりする石ありけり。人あまた是れになやまさるゝといへども、是れをのぞく、それよりして出入平安に候間、人一人と申し候。」と答へけるなり。

第七　しやんとうしほをのまんとけいやくの事

或時しやんと、酒に醉ひけるうちに、こゝかしこさまよふ所に、或人しやんとをさゝへて云く、「御邊は大海のうしほを、呑みつくし給はんや否や。」と問へば、やすく領承す。彼の人重ねて云く、「もし呑み給はずば、何事をかあたへ給ふべきや。」と云ふ。しやんとの云く、「もし呑み損ずるならば、我が一せきを御邊に奉らん。」と契約す。「あないみじ、此の事たがへ給ふな。」と申しければ、「いさゝかたがふこと有るべからず。」とて、我が家にかへり、前後も知らず醉ひふせり。さめて後、いそほ申し



けるは、「今までは、此の家の御主にてわたらせ給ひけれど、明日からは如何ならせ給ふべきや。」其のゆゑは、先に人と契約なされしは、大海のうしほを呑みつくし候ふべし、えのみ給はずば、我が一せきをあたへんと、のたまひて有るぞ。」と申しければ、しやんとおどろき騒ぎ、「これ誠に侍るや。何として、あのうしほを、二口とものみ候ふべき。いかにいかに。」と許りなり。かくて有るべきにもあらざれば、「此の難を逃れたまほしうこそ侍れ。」と、いくたびかいそほを頼み給ふ。いそほ申しけるは、「我がふだいの處御免し給はば、計器をなしへ奉るべき。」と申す。しやんと「それこそ安き望みなれ。」とくとく其の計器を教へよ。」と仰せければ、いそほ答へて曰く、「明日海へ出でたまはん時、先づ其の相手にのたまふべきは、われいまは此の大海を呑みつくすべし。しからば、色々に、大海へながれいる所の川を、ことごとくせきとめ給へとのたまふべし。しからば相手何とかこたへ候ふべき。其の時御あらがひも、理運をひらかせ給ふべけれ」と申しければ、「げにも。」とよろこび給へり。すでに其の日に臨みしかば、ひとびと此のよし傳へ聞きて、しやんとのはてを見んとて、海のほとりに、貴賤群集をなす。其の時しやんと、高き所にはしり上り、彼の相手を招きよせ、いそほのをしへけるごとく仰せければ、相手一言の返答に及ばず、剰へしやんとを、師匠とあがめ奉りけり。

第八　くわんくわくの文字の事

或時、しやんと、いそほを召しつれ、墓所を過ぎさせ給ふに、傍にくわんくわく有り。其の圖の
に、七ッの文字有り、一にはよ、二にはた、三にはあ、四ッにはほ、五ッにはみ、六ッにはこ、七ッ
にはお、是れなり。いそほ、しやんとに申しけるは、「殿は智者にてわたらせたまへば、此の文字の心
を、しらせ給ふや」と云ふ。しやんと、「是れはいにしへの字なり、世へだゝり時うつりて、今の人た
やすく知る事なし」と仰せければ、いそほあざ笑つていはく、「此の文字の心を、申しあらはすに於て
は、いか許りの御はうびにか、預らん」と申しければ、しやんと答へていはく、「此の心をあらはすに
於ては、ふだいの所をさし置くべし。しかのみならず、もし此の文字の下にあらん物、半分與へん」
となり。いそほ申しけるは、「第一によとは、四ッと云ふ義なり、二にたとは、たからと云ふ義なり、
三にあとは、有るべしと書く義なり、四にほとは、掘るべしと云ふ義なり、五にみとは、身に付くべ
からずと云ふ義なり、六にことは、こがねと云ふ義なり、七におとは、おくと云ふ義なりと讀みて、
其の下を掘つて見れば、文字のごとく、あまたの黄金有りけり。しやんと是れをみて感念ましまし、い
そほにやくそくのごとくあたへず、又は其の下を掘つて見れば、四方なる石に、五ッの文字あらはれ
たり。一ッにはお、二ッにはこ、三ッにはみ、四ッにはて、五ッにはわ、是れなり。いそほ是れをよみ
て、しやんとに申しけるは、「此の黄金をみだりに取り給ふべからず、其の故は、此の文字に顕はれた

り、第一におとは、おくと云ふ義なり、二にことは、こゝなと云ふ義なり、三に見とは、見付くると云ふ義なり、四にことは、帝王と云ふ義なり、五にわとは、渡し奉るべしと云ふ義なり。然らば其の黄金を、恣にとの給ふべからず。」と云ふ。其の時しやんと、驚天して、ひそかに、いそほを近づけ、「此の事他人にもらすべからず。」とて、かね半分をあたへける。いそほ、石に向つて礼をする。其の故は、「此の金をば、先には賜はるまじきに定まりしかども、此の文字故にこそ賜はりつれ。」とて、石と文字とを礼拝す。又いそほ申しけるは、「此のたからを取り出すに於ては、ふだいの所を赦免有るべしと、堅く契約有りければ、いまより後は、御免しなしとても、御ふだいの所をば、許され申すべき。」と云ひけるなり。

第九　さんの法事の事

或時、其の里にて、大法事執り行ふこと有りけり。依つて在所の老若男女、袖を連ねて是れを聴聞す。然る處に、さんの守護、雑ひゆゝしく、めでたう坐しける處に、鷲一ツとび來りて、かの守護のゆびかねをつかみ取りて、いづくともなく飛びさりぬ。是れに依つて、法事興さめて、諸人あやしみをなせり。「是れたゞ事にて有るべからず、しやんとに問ひ奉るべし。」と、人々申しあへり。守護職より、しやんとの許へ使者をたてて、法事の庭にめし請け、「この事いかに。」と問ひ給へば、庭に並み

隣たる人々も、是れを聞かんと、かうべをうなだれ、耳をそばだてて、あらき息をもせず。門かしこまりて後、しやんと智がほにうちあんじて、「是れいみじき御大事にてこそ候へ、たやすく申すべき事にあらず。日数を経てしづかに考へ奉り、後日にこそ申すべけれ。」とて立たれければ、人々其の日を定めて退散せり。しやんとそれより我が家に歸りて、日夜是れを案ずるに、さらに何事ともわきまへず、徒らに七日をつひやすのみなり。いそほ此の由を見て、「殿は何事を御案じ給ふぞ。」と申しければ、しやんとの云く、「此の事をこそ案じけれ。」と、件の字の仔細を、始め終りかたり給へば、いそほ申しけるは、「此にも見れば、以ての外に知りがたき事にて候。只それがしを、各々の前に召し出され、其の仔細をとひ給ふべし。其の故は、我下人の身として、申しあやまり候へばとて、させる恥辱にもあらず、殿の御為にあやまらせ給はゞ、以ての外の御恥辱たるべし。」と申しければ、「實にも。」とて、其の日に臨んで、評定の庭に召し出しければ、人々、「あやしの者のたいはいや。」と、笑ひさゞめきあへり。然りといへども、いそほ少しも騒がず、其の所を罷り過ぎ、高座に上りて申しけるは、「我が姿のみぐるしげなるを、あやしみ給ふや、其れ君子はいやしきにあれども、いやしからず、そればうしよてく、賤なす、何ぞすがたのよしあしにかゝらんや、道理こそきかまほしけれ。」といひければ、人々實にもと感じあへり。やゝありて後、いそほいひけるは、「我は是れしやんとの下部なり、人々よ

へつらはるゝ者の習ひとて、其の主の前において物云ふ事、すみやかならず。」といひければ、人々皆にもと合點して、しやんとに向けて申されけるは「いそほ申す所道理至極なり、此の上は、ふだいの處をゆるし給ひ、其の仔細をいはせ給へかし。」と申されければ、しやんと少しもふてまうす。守護人此の由を聞きて「惜しみ給ふ所もことわりなれども、此の仔細を聞かんにおいては、何事をかはうすべきや、もし人なくば、かはりをこそ参らすべけれ。」といひければ、しやんと惜しむにおよばで、領承せらる。さるによつて、群集の中において、「今より以後、いそほは我がふだいにあらず。」と申されければ、いそほ重ねて申しけるは「此の比心地あしき事ありて、聲高く出し給ふべからず、聲よき人に仰せてふだいの所を赦免と、高くよばはらせ給へ。」と望みければ、いそほが云ふごとく、呼ばはりける。やゝ有りていそほ、高座の上よりいひけるは「鷲、守護のゆびかねを奪ひ候事、鷲は諸鳥の王たり、守護は王に勝つことなし、いか様にも他國の王より、此の國の守護を、しんだいさせたまふべきや。」といひける。

第十　りいひやより敕使の事

さる程にいそほが申せしごとく、りいひやの國王、けれそと申す帝より、さんに敕使を立て給ふ。「其の所より、年毎に御調物を奉るべし、然らずば武士に仰せて、攻め滅ぼさせ給ふべし。」との

敕諚たり。これに依つて、地下の年寄以下、評定し給ひけるは、「其の責めを蒙らんよりは、しかじ御調物を奉るべし。」となり。さりながら、いそほに尋ねよ。」とて、此の由を語りければ、いそほ申しけるは、「それ人の習ひ、望みを自由におかんも、人にしたがはんも、唯其の望みに任するものなり。」と云ひければ、「實にも。」とて敕諚を背かれ、敕使歸りて此の由を奏聞す。みかど其の故を問はせたまふに、勅使申しけるは、「彼の所にいそほと云ふ者あり、才智世にすぐれ、思案人にこえたり。此の所を從へんに於ては、まづ此の者を召しおかるべし。」と申しければ、「尤も。」と叡感あつて、かさねてこれに敕使を下さる。「御調物を赦免し給ふべし、いそほをみかどへ參らせよ。」との敕諚なり。地下の人々[illegible]訟して云く、「さらばいそほを參らせん。」となり。いそほ此のよしを聞きて、たとへを以て云ひけるは、「昔狼、一ツの羊を服せんとす。羊此の由を覺つて、あまたの犬を引き語らふ。是れに狼、羊をおかす事なし。狼の謀に、「今よりして羊をおかす事あるべからず、犬を我に與へよ。」と云ふ。羊さらばとて、犬を狼につかはす。狼先づ此の犬を亡ぼして後、終に羊を喰ひてけり。其の國の王をほろぼさんとては、先づ忠臣を捕へ給ふなり。」と云ひて、終に敕使に具せられて、りいひやの國に渡りぬ。

第十一　伊曾保りいひやの國にゆく事

さる程にいそほ、りいひやの國に罷り上り、敕使と共に參内す。みかど此の由えいらん有つて、「これやしの者のたいはいやな、かかる見にくき者の下知によつて、さんの者ども、我が命を背きけるや。」と、げきりんのあまり事輕からず。既にいそほが一命も、危く見え侍りければ、いそほまいりよふ察して言上しけるは、「我に片時のいとまをたべ。」と申しければ、「暫く。」とて御許しを蒙る。その時いそほ申しけるは、「或人いなごを取りて、殺さんとて行きけるに、みちにて蟬をころさんとす。蟬うれへて云く、「われ罪なくしていましめをかうぶる、人に障りすることなし。夏、山の端かくれに我すさまじきくせをあらはしぬれば、あつき日かげも忘れ井の、慰みぐさと成り侍れ、かひなく命をはたされ給はんこと、歎きても猶餘りあり。」と申しければ、『實にも。』とて忽ちゆるされたり。其のごとく我、姿かたちはをかしげに侍れども、我が敎へに隨ふ處は、國土平安にして、萬民すなほに富み榮えて、善を專らに敎ふる者にしこそ侍れ、蟬と我と、それたがはず。」と申しければ、みかど大きにえいかん有りて、「さらば。」とて敕かんをしやめんなされ、「此の上は汝が心に望むこと有らば、奏聞申せ。」と仰せければ、いそほ謹んで申し上ぐるは、「我にことなる望みなし、我さんに、年久しく有りて、人の下臈にて侍りけるを、所の人々申しゆるされ、獨身と罷り成りて心やすく侍りき。其の恩を報じがたく候へば、かの所より奉るべき物を、免し給へかし。」と云ひければ、みかど此の由叡感有りて、彼が



のぞみを達せんため、ぜんの御調物をゆるされけり

第十二　伊曽保りいびやに居所を作る事

いそほ、りいびやに居所をなしぬ。其の御赦免を報ぜんがために、一七日に此のしんをあつめ奉る。帝こいたく有りて、誠にふしぎの思ひを為し給へり、かゝる才人世に有るまじとて、あまたの禄をトされけり。いそほ此のたまものを舟につみ、ぜんへ二度下りけり。ぜんの人々此の由を聞きて、いそほを迎へんとて、舟をかざり、ぶがくを奏して、海中の魚鱗も、驚くばかりざゝめきあへり。さる程にいそほ程なくぜんに着いて、貴き賤しきえらばず召し出し、其の身は高座に上りていかに人々聞きたまへ、われ此の年月、此所に有りて、面々の御憐みを蒙りしこと限りなし。しかのみならず、人の譜代たりし者を、こひゆるされけること、御恩にあらずと云ふ事なし。然るを不慮の幸ひによつて、りいびやの国王より、御調物をゆるし給ふ事、是れ我が才智のなす所なり。是れにあらずんば、いかで御恩を報ずべけんや、是れも偏に、天道の御恵みにてこそ候へ」と語りければ、其の守護人を初めとして、ぜんのことは申すに及ばず、あたり近き国王までも、愈いそほを尊みあへりけり。

第十三　商人かねをおとす公事の事

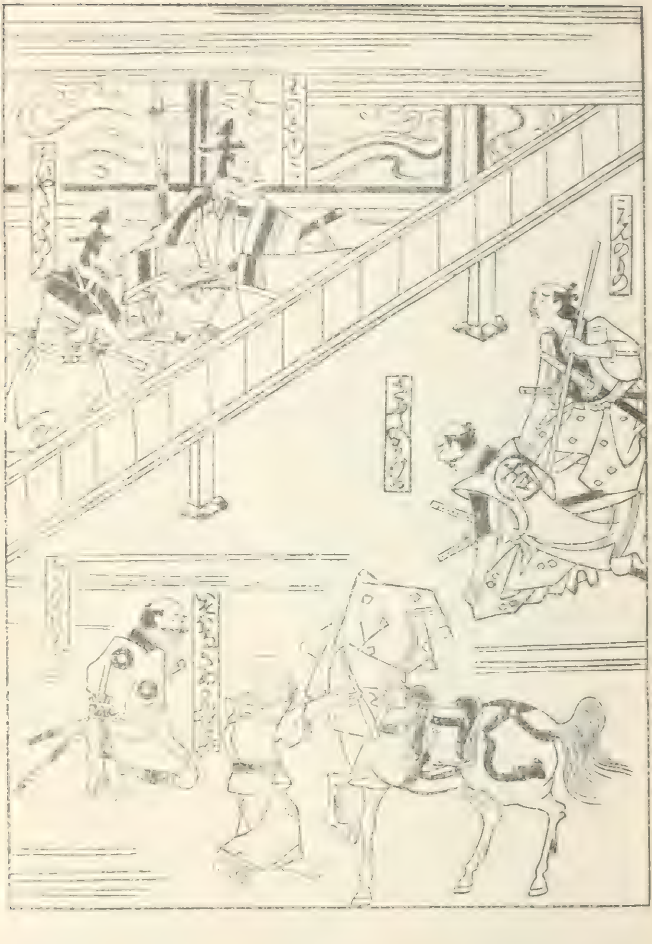
ある商人、ぜんにおいて、一貫目の銀子をおとすによつて、札を立てて是れをもとむ。其の札に云はく

、此のかねをひろひけるものの有るにおいては、われに得させよ。其のはうびとして、三分一をあたへんこととなり。」然る處に、或者是れを拾ふ。我が家に歸り、妻子に語つて云く、「われ貧窮の身として、汝等をやしなふべき資なし。天道是れをせうらん有りて、賜へるや。」と喜ぶことかぎりなし。然りといへども、此の札の面を聞きて云ふやう、「其の主すでに分明なり。道理をまげんも流石なれば、此の銀を主へ返し、三分一を得てましよ。」といひ、彼の主が許へ行きて、其の有樣を語る處に、主俄に慾心おこりて、はうびのかねを難澁せしめんがため、「我がかねすでに四貫目なり。持ち來れる處は三貫目なり。其のまゝ置き汝は罷り歸れ。」と云ふ。彼の者うれへて云く、「われ正直をあらはすといへども、御邊は無理をのたまふなり。詮ずる所守護に出でて、理非をけつだんせん。」と云ふ。これに依つて、二人ながら、糺明の庭に罷り出づる。彼と是と爭ふ處、決しがたし。彼の主せいたんを以て、四貫目と云ふ。彼の者は三貫目有りと云ふ。奉行も理非を決しかねけるを、いそほ聞きて云く、「本主の云ふ所明白なり。しかのみならず、せいたん有り。眞實是れに過ぐべからず。然らば此のかねは彼の主のにては有るべからず。其の故は落す所の銀は四貫目なり。拾ひたる所は三貫目なり。拾ひたる者にこれをたまはつて歸れ。」と宣へば、其の時本主驚き、「いまは何をかつゝみ申すべき。此のかね實に我がかねなり。はうびの所を難澁せんが爲に、私曲を構へ申すなり。あはれ三分一をかれにあた

へ、與ふる我にたべかし」と云ふ。其の時いそほ笑つて云く、「汝が慾念猥りがはし、いまより以後は停止せしめよ」とて、「さらば汝につかはす」とて、三分二をば主に返し、三分一を拾ひ手にあたへ其の時、ふくろを開きみれば、日記すなはち「貫目なり」、「前代未聞のけんだんなり」と、人々感じ給ひけり。

第十四　中間とさぶらひと馬をあらそふ事

或中間、主人の馬に乗りて、はるかのよそへ赴く所に、侍一人行きあひ、則ちいかつて云く、「われ侍の身として、歩にて行くに汝は人の所従なり、其の馬よりおりて、我をのせよ、然らずば細首切つて捨てん」と云ふ。中間心に思ふやう、「此の道中にて訴ふべき人もなし、とかく難澁せば、首をはねられんこと疑ひなし、是非に及ばず馬よりおりけり。侍わが物がほにうち乗りて、彼をめしつれ行く程に、さんと云ふ所になんなく付きにける。中間そこにて罵るやう、「我が主人の馬なり、返し給へ」と云ふ。侍馬に乗りながら、「狼藉なり二度のゝしるにおいては、うんきをはねん」と云ひければ、中間いんともせずして、其の所の守護に行きて此の由を訴ふ。さるに依つて、守護より武士をつかはして、彼の侍をめしぐしけり。かれとこれと、諍ふ所決しがたし。守護理非をわけかねて、いそほをよびてけんだんせしむ。いそほ是れを聞きて、先づ中間をかたらひて、ひそかにいはく、「彼の



侍を糺明せん時、汝あわてゝ、物言ふ事なかれ」といましめらる。中間謹んで畏まる。時にいそほのはかりごとに、うはぎをぬいで、彼の馬のつらにかけかけ、侍に問ひけるは、「此の馬の眼いづれかつぶれけるぞ」と問ふ。侍返事に堪へかねて、思案すること千萬なり。思ひ侘びて、「左の目こそ潰れたる」と申す。其の時、上着を引きのけてみれば、兩眼眞に明かなり。是れに依つて馬を中間にあたへ、かの侍をばはぢしめて、時のせひをわけられけり。

第十五　長者と他こくの商人の事

さる程に、さんと云ふ所に、ならびなき長者あり。外には正直をあらはすといへども、内心既に奸曲なり。或時かたゐなかの商人、銀子十貫目持ち來りて、此の長者を頼みけるは、「我此の所より、ましつに至りぬ、遠路の財寶危ければ、預け奉らん」と云ふ。長者やすく預りける。此の商人ましより歸りて銀をこふ。長者おもかひて云く、「我汝が銀を預る事なし、證跡有るや」と問ふ。商人いかんと申す事なくして、いそほの許へ行きて、此の由を歎きければ、いそほ教へて云く、「其の人は此の所にて、ほまれある長者なり、證據なければ糺明しがたし、汝に計畧ををしへん、其の如くし給へ。」と教へければ、商人謹んで承る。其の計畧に云く、「一尺四寸の箱一ッ拵へ、上をばうつくしく作りかざりて、中には石を多く入れて、汝が國の人に持たせて是れを玉ぞといつはりて、彼の長者のもと

預けさせよ。其の時に臨んで、汝が銀を乞へ、玉を預らんが爲に、銀をば汝に返すべし。」と云ふ。商人是れを構へて、いそほの教へのごとく、同國の者に持たせ、彼の長者の所へ行きて、是れを預くる。其の時あんのごとく、玉を預らんが爲に、商人に云ふやう、「いかなればば御邊は、かねをば取り給はぬぞ、是れこそおことの銀ぞ。」とて、本の銀を與へてけり。其の故は、此の箱の内の名珠、十貫目の南鐐より、そくばくまさるべしと思ふによつてなり。すなはち箱一ツあづけて、かねをとりて歸りけり。「あつぱれ賢きをしへかな。」とて、ほめぬ人こそなかりけり。

第十六　いそほ一人のさぶらひ夢物語の事

或時、きさんと云ふ所の侍二人、いそほを誘引して、夏の暑さを凌がん爲、涼しき所を求めて到りぬ。其の所について、三人定めて云く、「爰によきさかな一種あり、むなしく喰はんもさすがなれば、しばらくこの臺にまどろみて、よき夢みたらん者、此の肴を喰はん。」となり。さるに依つて三人同じ枕に臥しけり。二人の侍は、前後も知らず寐入りければ、いそほ少しもまどろまず、ある隙間をうかゞひて、ひそかにおきあがり、此の肴を喰ひつくして、又同じごとくにまどろみゐけり。暫く有りて後、一人の侍おきあがり、今一人を起して云く、「某既に夢をかうぶる。其の故は、天人二體あまくだらせ給ひ、われを召し具して、あまの快樂をかうぶると見し。」と云ふ。今一人がいふやう、「我が夢

甚だこれにこととなり、天朝に對われをかいしやくして、るんへる野へいたりぬ」とみゐる、其の時兩人せんきして、彼のいそほをおこしければ、ねいらぬいそほが、夢の覺めたる心ちして、驚くけしきに申すやう、「御邊はいかにしてか、此の所に來り給ふぞ、さもふしんなり。」と申しければ、兩人の侍あざ笑つて云く、「いそほは何事を宣ふぞ、われら此の所をさる事なし、御邊と共にまどろみけり。我が夢は定まりぬ、御邊の夢はいかに。」と問ふ。いそほ答へて云く、「御邊は天に到り給ひぬ、今一人はゐんへる野へ落ちぬ、二人ながら此の界に來ること有るべからず。然らば肴を置きて何かはせんと思ひて、某が悉く給はりぬと、夢に見侍る。」と云ひて、彼の肴の入物をあけて見れば、いひしごとくに少しも殘さず。その時、二人の者笑つて云く、「彼のいそほの才覺は、くわんのうが、こふ處にあらず。」と、彌崇ひ侍るなり。

第十七　いそほ諸國をめぐる事

さる程にいそほ、それより諸國をめぐり歩きけるに、ばびらうにやの國、りくるすと申す帝王、是れを愛し給ふ事限りなし。國王のもてなし給ふ上に、百官卿相を初めとして、あやしの者に到るまでも、是れをもてなすこと限りなし。其の比のならひとして、餘の國の帝王より、種々の不審をかけあはせたまふに、若し其の不審をひらかせ給はねば、其の返報に、ほうろくを奉る。しかのみなら

す、不審ひらかせ給はぬ帝王なれば、ひとへに其の臣下のことし。然るに依つて、諸國のふしんまちまちなり。然るに、ばびらうにやの帝王へかけさせ給ふふしん、ひらかせ給はぬことなし。是れ偏にいそほが才覺とぞ見えにける。又ばびらうにやより、よの國へかけ給ふふしんは、いそほがかけ給ふ不審なれば、一事もひらかせ給ふ國王なし。彼の返報として、あまたの財寶をとらせ給ふ。其の惠みに依つて、いそほもめでたく榮えけること限りなし。才智は是れ朽ちせぬ寶とぞみゆ。

第十八　いそほ養子をさだむる事

さる程に、いそほいみじく榮えけれども、年たけ齢傾ぶくまで實子なし。さるによつてゑうぬすと云ふ侍を養ひて、我があとをつがせんとす。或時、ゑうぬす大いなる罪科ありけり、心におもふやう、「此の事いそほ知るならば、たちまち國王へ奏聞して、いかなる流罪にか行はれん」と思ひ、せんずる所、只いそほをうしなはばやと思ふ心出で來て、奉書を調へ、「我が親いそほこそ、りくうるすの帝王に心をあはせ、既に敵と罷り成り候」と奏しけれども、帝敢て信じ給はず、かるが故にゑうぬす二度奉書を作りて、ゑいらんに贈ふ。帝此の由御らん有りて、「今は疑ふ所なし、急ぎ誅せよ」と、へりまうほと云ふ臣下に仰せて、いそほを誅すべき由綸言あり。へりまうほ教諚の旨を承りて、いそほの館へ押しよせ、則ちいそほをからめ取りて、既にあうなんとしたりけるが、能く〳〵心に思


虎

ふやう、世にかくねなき才仁を、うしなはんも心うし、たとひ我が命は捨つるとも、扶けばや。」と思ひ、傍に古きくわんくわく有りけるに、いそほを押し入れて、我が宿に歸り身を潔め、急ぎ内裏へ其事奏して「いそほこそもう仕り候。」と申し上げければ、帝もいとゞ御涙にむせばせ給ひ、惜しませ給ふも、御理とぞ見えにける。

第十九　ねたなを帝王不審の事

ここにいそほ、ころされける由かくれなし。是れに依つて、諸國より不審をかくる事隙なし。中にもえじつと申す國、ねたなをと申す帝より、かけさせ給ふ御不審に云く、「われ殿堂に、一つの天んをしつらへん。其の台で陽以下を示し給へ、御たくみに依つて、天かくる忽ちきうひつさば、あまた貢を奉り、其の上年々御調物を參らすべし、速かに此のふしんをひらき給へ。」と書き添へ給ふ。ゑじつ此のふしんにいかゞ有らんと、百官卿相、其のほか才智學藝に、たづさはる輩の者共を召し出され、此の由聞かせ給へども、少しも不審をひらくことなし。是れに依つて御不興と聞えければ、上下萬民なげき、なげかなしみあへり。主上御かなしみのあまり、「いそほをうしなひ給ふ事、我があやまちとおぼしめさる、偏に我が國の亡びん基なり。もしこの不審を開かせ給はずば、後日の恥辱はかりがたし。」とて、しきりに仰せありて、兩眼より御なみだをながさせ給ふ。

第二十　えりみほ、いそほが事を奏聞し事

ある時えりみほ、ひそかに奏聞申しけるは、「御なげきを見奉るに、御命も危く見えさせ給へるなり。今は何をかつゝみ申すべき、いそほ誅すべき由仰せ付けられ候時、餘りに惜しく存じ、おほやけの私を以て、今までたすけ置きて候。違勅の者をたすけ置く事、かへつて我がつみも輕からず候へども、かかる不審も出で來るならば、國中のさはりとも成りなんと、思ひ侍れば、助けてこそ候へ。」と申しければ、みかど斜ならず悦ばせ給ひ、「こは定にて侍るや、疾くかれを參らせよ」とて、還つて御感に預りし上は、敢て敕かんのさたにもなし。是れに依つて、いそほを召しかへさる。いそほ參内して、御前に畏まる。帝此の由えいらん有るに、ひさしく籠居せし故、いとゞ姿もやつれはて、をかしと云ふもおろかなる有樣なり。帝臣下に仰せ付けられ、「いそほをよきにいたはり侍るべし。」と宣へば、人々いやましにぞもてなされける。其の後みかどいそほを召して、「彼のふしんをいかに」と仰せければ、「いと易きふしんにてこそ候へ。いかやうにもこれより御返事有るべき由、仰せかへさせ給ふべし。」と奏しける。申すが如くせさせ給ふ。さる程にいそほを召しかへされける上は、彼のえうぬすが罪科のがれずして、かれを死罪に行はれんとの敕諚あり。然る所に、いそほさゝへ申しけるは、「われを憐みたまふ上は、かれをも御許されを蒙りたくこそ候へ。彼の者にいさめをなさば、惡心

怨を讎へして、忠臣と作さんことを疑ひたりしことを奏しければ、「ともかくも」とて免されけり、

伊香保物語上巻

伊曽保物語中目録

伊曾保物語中目録

伊曾保物語中目録 終

伊曾保物語中

第一　いつくは子息に意見の條々

一、汝此の事をよく聞くべし、他人に能き道を教ふるといへども、我が身に保つ事は有りがたし。それ人間の有樣は夢幻のごとし。しかのみならず、わづかなる此の身をはかなく[illegible]、やすくもあれば、惡道には入り易く、善人には入りがたし。事にふれて、我が身のはかなき事を顧みるべし。

一、つねに天道をうやまひ、事每に天命を恐れ奉るべし。君に二心なく、忠節を盡す上に、命を惜しまず、眞心につかへ奉るべし。

三、夫れ人として法度を守らざれば、惡緣に[illegible]事あり。[illegible]惡道を守護せば、則ち天罰をうけん事、[illegible]。

四、[illegible]、[illegible]心を以て、其の難を忍ぶべし[illegible]自在の功德[illegible]て、[illegible]。

五、人として[illegible]時は、[illegible]、敵[illegible]。然りといふとも、[illegible]人

[illegible]は[illegible]ろく、やはら[illegible]に向ふべし。

六、妻女に常にい[illegible]めを作すべし、都て女は邪路に入り易く、能[illegible]道には入り難し。

七、慳貪放逸のもの[illegible]に伴ふ事なかれ。

八、悪人の威勢羨[illegible]ことなかれ。[illegible]如何となれば、のぼるものは[illegible]にくだるものなり。

九、我が言葉をすくなくして、他人の語るをきくべし。

十、つねに我が口に、能き道のくつわをふくむべし。ことに酒[illegible]座にて[illegible]な[illegible]は、物[illegible]をつゝしむべし。故如何[illegible]れば、[illegible]習[illegible]、能[illegible]詞を出[illegible]て、狂言綺語[illegible]用ふる[illegible]。

十一、能[illegible]の[illegible]所、其の[illegible]賢[illegible]。[illegible]はれ[illegible]行[illegible]成[illegible]。

十二、權威を以て人を從へんよりは、[illegible]かじ、柔かにして、人に[illegible]んぜられよ。

十三、かくす事を女に知らすべからず。女は心はかなうして、外に漏らしやすき物な[illegible]。それに依つて、たちまち大事出で來れる。

十四、なんぢ乞食非人をいやしむる事なかれ。還つて慈悲をおこさば、かならず天帝のたすけに與るべし。

十五、事の後に、千萬悔いんよりは、しかじ、ことの先に千度案ぜよ。

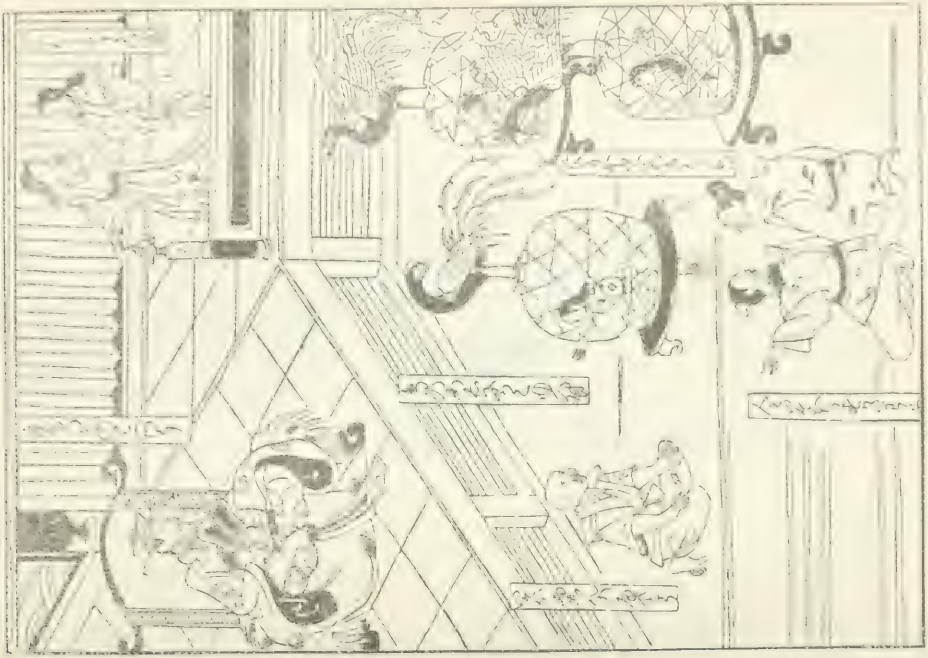
十六、天下の人に、けうぎやなすことなかれ。またこなた愁ふるものの爲には、ひとりかへりて、きはりとなるがごし。

十七、やまひを治するには、藥を以てす。人のこゝろまがれるを、直すには、よき教へをもつてするなり。

十八、老者の意見を輕しむる事なかれ。老いたる者は、その事わが身にはだされてなり。なんぢも年老い、齡かうなるにしたがひて、その事たちまち出來すべし。

第二、ふしつとの帝王よりの返答の事

ある時にいそほ、彼の國はかりことにたくみければ、さればこそ云ふ大きなる島を四つ、年をまかなひ取りて、其の地に鶏を囲ひ付けて、其の中に童子一人づゝ入れおき、其の爲の御食をもたせ、あるときある時は上のかたより、ある時は上ぼりあがるやうにして、此の由を奏聞すれば、御門大きに御感有て、さらばとて、ふしつとに至りぬ。ふしつとの人々、いそほが姿のあやしげなるを見て、笑ひあざけることを限りなし。されどもいそほ、少しもはゞかる氣色もなく、庭上にかしこまる。國王此の由緒聞めして「ほびんうにやの使は御邊にて侍るか。」御答にて、「ふかくゝゝ」、立つべきとの不審はいかにてのとき「我が思ふ事をとく候。」とて、我が家に歸りぬ。其の後此の事を風聞して、都鄙たんなうの者共、



是れなれんとて御前に出でぬ。其の日にのぞんで、彼のきりほを拵へ、庭上にすゑ、一所にいろく」と申しければ、「かの邊こそよからんずれ」と仰せければ、其の邊にさしはなす。四ッの鳥、四所に立つて居られける處に、籠の内より鶯の聲として呼ばはりけるは「此の所にてでんがくを立てん事やすし。早く土と石とを運び上り給へ」とて、のゝしりければ、御門を初め奉り、月卿雲客女房達に至るまで、「實に妙なる返答かな」と、興じ合はれてぞ侍りける。帝此の由叡覽ありて、「いと賢き謎かな」とて、いそほを貴み給ふ。「今日よりして我が師たるべし」と定め給ふ。

第　ねになぞ。いそほに尋ね給ふ事

然るに或時帝王、いそほに問ひ給はく、「けれうすの國の帥いとこく時、當國にそゝくはたつ事有るいさみ」と宣へば、いそほ申しけるは「馬の答へがたう候ふ。いかさまにも明日にて奏すべけれ」とて、御前を罷り出で、いそほ其の夜或物を作りて、明くる日所の人足に打たせ、其の故彼の國には天道なりと、貴み敬ひける故に、是れをさうぶんに違ふ。帝此の由聞召して、いそほを召出でゝ、「汝何に依つて猫を打つや」と宣へば、いそほ答へて云く、「今夜この猫が國の鶏を喰ひころし候ふ。唯今、汝にいまいましくて候ふ」と申しければ、「いかで其の事有るべき。當國と、其の國とは遙かに三百里を行く所なれば、一夜がうちにいかでかゆかん」と宣へば、いそほ申しけるは、「けれうすの國

の鼬聞ける時、當國のさうやく孕むこと有り、其のごとく、當國の猫、我が國の鶏を喰ふべく候。」と申しければ、「實にも。」と宣ひけり。

第 四 いそほ帝王にこたへたる時引例の事

ある時に、又或る國王、いそほを語らひ、よもすがら昔今の物語させ給ふ。ある夜いそほ夜深くまでて、ややもすれば眠りがちなる所に、帝いよ〳〵語れ〳〵と仰せ給ふ。いそほ謹んで承り、ぶんにをなして云く、「近比或人千疋百疋の羊を飼ふ。或道に川有り、其の流深くして常に舟にて渡るなはず、常に大船を以て是れを渡る。ある時俄に歸りけるに、舟なきに由て、いかんともせんかたなくして、ここかしこ尋ね行きければ、小船一艘汀に有り。又ふたり共乗るべき舟にもあらず。羊一疋われと共に乗りて渡る。残りの羊多ければ、其の隙いくばくのついえぞ。」と云ひて又眠る。其の時國王いそほ有りて、いそほいそほのたまふ、「汝が睡眠らうぜきなり、語りはたすべきとあらけん有り。」いそほ恐れ〳〵ようしけるは、「千疋百疋の羊を小舟にて一疋づつ渡さば、其の時刻幾ばくかあらん、其の間眠り候。」と申しければ、國王大きに叡覧あつて、「汝が才覚量りがたし。」御すんあれ。」とて暇をこふ。をかしくも、又かんさいも深かりけり。

第 五 學匠ふしんのこと

さる程に、ねたなを帝王、國中の道俗學者を召しよせて、「汝等が心に於て不審をなし、此いそほに尋ねよ」とのたまへば、ある人すゝみ出でて申しけるは、「或伽藍の中に柱一本あり、其の柱の上に十二の里有り、其の里のむなぎに三十あり、彼の一ツの柱をさうやく二疋上り下る事如何」といそほ答へて云く、「いとやすき事にて候。我等が國に、かやうなる稚き者までも是を知る事に候。故いかんとなれば、大がらんとは此の世界の事なり。一本の柱とは、一年の事なり、十二の里とは、十二ヶ月のことなり、三十のむなぎとは、三十日のことなり、二疋のぞうやくとは、日夜のことなり」と申しければ、重ねて不審と云ふ事なし。或時帝、初の春の、月卿雲客綺羅をつらね、殿上に並み居給ふ中に於て、御門仰せけるは、「天下に希有けしたる目に見もせず、聞きもせぬ物はいかん」とのたまへば、いそほ申しけるは、「いつの國にも、同日に返事申すべき事にこそ」とて、御前をまかり立ち、扨其の日に至つて、いそほ案内申しければ、人を進め給はんとてさしつどひ給へり。其の時いそほ、文一ツ取り出し、「日ごろ我が國へ贈ることとて奉りければ、帝ひらきて御覧あるに、「それがしくらゐなきといふ、ねたなを帝王より、三十萬貫をかり候處實に明白なり」と有りければ、帝大きに驚き給ひ、「此の事を知らず」と、諸臣に問ひ給へば、各口を揃へて、「見たることも、聞き奉る事もなし」と申しければ、其の時いそほ申しけるは、「扨昨日の御不審は開きて候」と申しければ、

人々「實にも。」とぞ云ひける。

第六　さぶらひ、鵜鷹にすく事

ある時に、えじつとの國の侍共、鵜鷹の道を好むこと、度を過ぎし、萬事をさしおき給へども、政命をもおろそかに是に任す。あるとき、侍に伴ひ出でて三日、殿中に歸り出でたる時、此由やうをを聞き給ひて、上方の侍けれは、思ままで、ある人。折節官人伺候の間、申し出し給ふやうは、我が國に、それ人を育む醫師あり、この養生と云ふは、器物に言を入れ、其の病人につけて三三日久しくある病者達に、上に九つの近き付ける時、外に出でては上下みれども、これを聞きて門外を出でず、其の内を見て行きける折節、或侍馬にて侍るに、上人に犬をひかせて通りけるを、上人走り出で、馬のみぞくきにとりつき、支へて申しけるやうは、「此の乗り給ふは何物ぞ」侍答へて云く「是れは馬と云ひて、人の駈走を助くる物なり。」「手にすゑ給ふは何物ぞ」と問ふ。「是れは鷹といひて鳥を捕るものなり。」「後に連れさせ給ふは何ものぞ。」「これは犬とて、此の鷹の鳥をとる時、下りつる物なり。」と云ふ。佳人重ねて云く「其のつひえ幾ばくぞや。」侍答へて云く「毎年百貫あてなり。」と云ふ。「其の徳いか程あるぞ。」と問ふ。侍答へて云く「五貫三貫の間」と云ふ。佳人笑つて曰く「御邊此の所をはやく過ぎさせ給へ。此の内の醫者は狂人を治する人なり。もし此の醫者きかるならば、

御運を取つてとろの中へおし入れらるべし。その故は百貫の損をして、五十貫の徳ある事を好む人は、只狂人に異ならず」と云ふ。皆、實にもとや思ひけん、それよりして、博奕のみちをやめ侍りける。」とぞ申しける。此の物がたりを聞きける人々、げにもとや思はれけん、博奕のけいをやめられけるとなり。

第七　いそほ人に請ぜらるゝ事

又もつとも時に、やごとなき出所ありけり。かほかたち見にくき事、いそほにまさりて見にく持けど、されども身の上は知らず、いそほが形のあやしきを見て笑ひなどして、[illegible]を持て、鹽をかづめの、顔をみがきたるが如くにして、山海の珍物を調へて、いそほをなん請じける。いそほ此の座敷のいみじき有様を見て、その體に見事なる座敷、世にためしなしと誉めて、何とか思ひけん、其の主のそばへつゝとよりて、顔につばきを吐きかけれしに、主いかつて云ふ、「是れはいかなる事ぞ」と咎めければ、いそほ答へて云ふ、「われ此の座心地悪しき事あり、然るにつばきを吐かんと、こゝかしこを見れども、皆々よくかざられける座敷なれば、いづくに吐かん所無く、顔にこそよれてきたなき所なければ、つばきをはき侍る。」といへば、主おもて赤くなりけれ罪なしといひの人あつ」と云ひ、笑ひ給ひける。

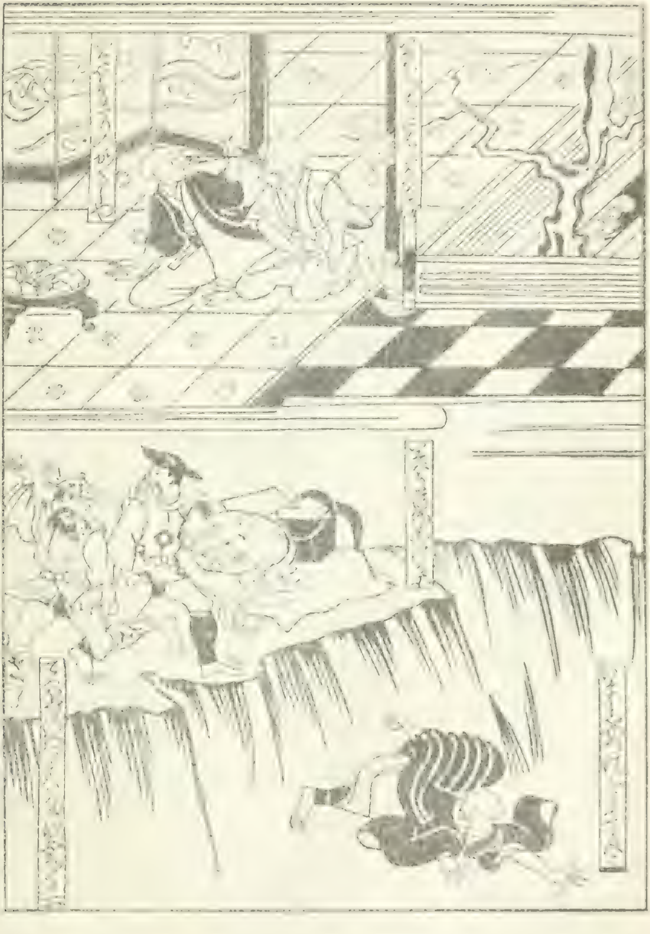
第十八　いそほふうふの中直しの事

えしつとの内、かさと云ふ在所に、のとといへる人あり。是れは富み栄えて侍れども、其の妻の方は、まづしくして、たよりなき父母を持ちて侍りき。彼の妻本より、はら悪しくて、常に男の氣にさかへり、其の間夫にかくれ、親の方へ帰りぬ。男なげき慕ふこと限りなし。人をやりまねども、還つていらへもせず、男余りのかなしさに、いそほを請じてありのまゝを語り「いかにとしてよ呼びかへさん」と云ひければ、いそほ「是れいと易きことなり、けふのうちによび返すべき、はかりごと教へ奉らん」と云ふ。その計に先づ音信物に、色々の鳥けだものを荷はせて、妻の有りしもとに行きて云ふやう「我が頼みたる人、けふ女房をむかへられけるが、さたうなし、若し此の家に有るか」と問へば、妻是れをきゝて「すはや」と驚きさわぎて「われを捨てゝ、よの妻を呼ぶこと無念なり。」とて、其のまゝ男のかたへはしり行きて「なんぞ御邊は、異なる妻を呼ぶとや、ゆめ／＼其の儀かなはじ。」などと怒りければ、男笑つて云く「けふ汝帰るべしと思ひ侍れば、其のよろこびの爲に、斯くめづらしき物買ひもとむる。」と云ふ。此のはかりごとは、いそほの才覺なりとぞ慶びける。それよりいそほは、えしつとの帝の御いとまを賜はりて、本國へ帰りける時、御やくそくのほうびなき、取りて到れる。是れに依つてみかど大きに御かん有り、其の外えしつとにて、成しける處の理ども、

ことく〳〵と申しけるは、「誠に此のいそほは、たゞ人とも覚えぬものかな。」と、人々申しあへりけり。

第九　いそほ臨終において、鼠蛙の譬へを引きて終ること

ここにいそほは、りくうるすの帝王にも、御いとまを賜はりて、諸國修行とぞ心ざしける。爰にけみしやの國に到り、諸人に能き道を教へければ、人々たつとみあへり。又其の國のかたはらに、でるほすと云ふ島に渡りて、我が道を教へけるに、其の所の心悪しきに依りて、一向是れを用ゐず。いそほ既に帰らんとする時に、人々評定して云く、「此の者を外國へ返すならば、此の島の有様を譏りなん、かれが荷物に黄金をうち入れ、道にて追懸け盗賊と號し、失はばや」とぞ申しける。評定して、其の日にとゞめんとしけるが、道にて追つかけ黄金をさがし、盗賊人と號して、誠に禁獄せしむ。漸く命も危く見えしかば、頼み近づきぬとや思ひけん、末期にいひ置く事ありけり。「されば、いにしへ鼠けだものゝ頃、よそほひをえしける時、鼠、蛙を請じて、いつきかしづきもてなすこと限りなし。その後又蛙、鼠をしやうたいす。来る時に臨んで、蛙迎へに出で、蛙鼠に向つて云ふやう、「我が本は此の邊なり、定めて案内しらせ給ふまじと覚え、彼の邊に、御迎ひに出で侍る。」と申しければ、鼠實にもとて越え行く。其の時蛙、糸をさ縄を取り出して、「導き参らせん。」とて、鼠の足に結び付けたり。かくて互に川の邊にあゆみ寄りて、終に水の中へ入りぬ。鼠あわてさわいで蛙に申しけるは、「情なし御遣なれば、聊



豚にもてなし侍りけるに、我をば斯かる憂きめにあはせ給ふや」と、つぶやきける處に、又此の由を見ていひけるは、「さればこそ」と、二ッながらつかみ、終に忝じきとなしてけり。其の如く今いはば、鼠の樣に、御邊達に、能き道を教へ侍らんとすれども、御邊達は蛙のごとくに我をいましめ給ふなり。然りといへども、終にはなる、ほどなく[illegible]より、定めて咎を責めらるべし」と申しければ、聞きもあへず彼若衆人のやつばらか、天下無雙の若人を、醜なたる山の麓より、取つて下に押し落す、其の時いたには果てにけるとかや。案ずることに、西國の帝王より、武士に命じて、其の罪を責められけるを、それよりして其のいきほひが物語を、世に傳へ侍るなり。

第十　いつはり物のたとへ引きける條々

つらつら人間の有樣をみるに、色にめで香に染みけることを本として、能道をしることとなし。されば此の樂を、一本の樹には必ず花實あり、花は色香をあらはす物なり、實は其の誠をあらはす物、されば誠に[illegible]、其のことを知るべし。[illegible]は[illegible]にうつされて、よしきをもとむる[illegible]し、いとみ下に[illegible]て、かき出せや、[illegible]信じ[illegible]を用ゐず、ふるの[illegible]己がおじきを[illegible]。[illegible]人[illegible]、[illegible]ことなれず、[illegible]のごとくなる[illegible]道をば[illegible]し[illegible]、あく[illegible]なるいろにそみて、一生をくらすものなりとぞ見えける。

第十一　狼と羊との事

或川の邊に、狼と羊と水をのむこと有りけり。狼は上に有り、羊は川すそに有り。狼、羊をみて、彼の側にあゆみ近づき、羊に申しけるは、「汝何の故にか我がのむ水をば濁しけるぞ」と云ふ。羊答へて云く、「我川下にて濁すといへども、いかで川上の障りとならんや」と申しければ、狼又云く、「汝去年六ヶ月以前に、川上に来て、水を濁すに依つて、汝が親のとがを、汝にかくるぞ」といへば、羊答へて云く、「我胎内にして父母のとがを知る事なし、御免あれ」と申しければ、狼いよいよ怒つて云く、「それのみにあらず、わが野山の草を、ほしいまゝに損ざす事、きつくわいなり」と申しければ、羊答へて云く、「いとけなき身にして草を損ざす事なし」と云ふ。狼申しけるは、「汝何の故に悪口しける」と、怒りければ、羊申しけるは、「我悪口を云ふにあらず、其の理をこそ申せ」といひければ、狼が云く、「論ずる所、問答を止めて、汝をふくせん」と云ひける。其のごとく、理非をしらぬ悪人には、是非を論じて益なし、只権威と堪忍とをもつてむかふべし。

第十二　犬とひつじとの事

或時犬、羊に行きあひて云ふやう、「汝におほせける、一石の米を只今かへせ、然らずば汝をうつたはん」と云ふ。羊大きに驚き、「御邊の米をば借り奉る事なし」と云ふ。犬此に一人ありとて、「狼

さ、鳥で、とびきこ云ふ者をたてり、奉行のもとへ行きて、此の旨を申し諍ふ。鼠、出でて申しけるは、「此の布を借りけること誠にて侍る。」と云ふ。とび又出でて申しけるは、「我も證人にて候ふ」と申す。鳥も又同然なり。是れに依つて犬に其の費を付けられたり。羊せんかたなさの餘りに、我が毛をけづり是れにあたふ。其のごとく善人と悪人とは、悪人のあたへは多く、善人のあたへはすくなし。これに依つて善人といへども、其の理をまげてことわらずと云ふ事ありけり。

第十三　犬しゝむらの事

或犬しゝむらをくはへて、川を渡る。其の中にて、其の影水にうつりて大きに見えければ、我がくはふる所のしゝむらより大きなりと心得て、是れを捨てて彼をとらんとす。かるがゆゑに二つながら是れを失ふ。其のごとく悪心の輩は、他の寶をうらやみ、ことにふれてむさぼる程に、たちまち天罰を蒙る。我が持つ所の寶をも失ふ事あり。

第十四　獅子王と牛野牛の事

或時獅子王、牡牛、うし、野牛、四つ、田中をともなひ行くに、路に行きあひ、何ぞ是れを殺す。其の四つのうしたちかけて云ひけるは、「王さへ一つで申しけるは、我けだものの王たり、其の徳に恐れ、つゝたゝ我にしたがふ、又我が威勢世にすぐれたり、汝等に離れ、なぜ其にまさり却つて是れを怪す、それ

に依つてただ一つをきまより今一つ取るとたふば、前にてもおれ手をかけたらく、其の眼となる。もて是れに依つて各容しく離れ帰る。其のごとく人はただ、我に似たる者ともなふべし。心より上なる人ともなへば、いよいよがましきことのみ有りて、其の徳もなき事なり。

第十五　日輪と盗人の事

或時盗人一人有りけり。其の所の人、かれに妻をあたへんと云ふ。ここなる学者の許に行き、是れを問ふに、学者たとへを以て云ふ、「されば人間天道にあふぎ申しけるは、『日輪妻を持ち給はんや』に計らひ給へ」と云ふ。天道「いかに」と問ひ給へば、人間答へて云く、「日輪只一つましますさへ、えんてんの比はあつさ忍び難し、しかのみならず其の時は、五こくをでりそこなふ。もし御子持ち給ひ、ぞく繁昌せば、いかがし侍らん」と云ふ。其のごとく盗人一人あるだに、物をわづらはす。ましてきに、妻をあたへ子孫繁昌せんこと、いかがと宣へば、「實にも」とぞ人々申しける。其のごとく、悪人には力をそふること、雪に霜をそふるが如し。あたをば恩にて報ずるなれば、悪人には其の力をおとさすること、かれが為によき助けたるべし。

第十六　鶴とおほかみとの事

或時狼、のどに大きなる骨を立てて、難儀に及びける折節、鶴此の山をみて、「御邊は何をかなし

み給ふぞ。」と云ふ狼鳴く／＼申しけるは、我がのどに大きなる骨をたて侍り、是れをば御邊ならでは、すくひ給ふ人なし、ひたすら頼み奉る。」と云ひければ、鶴件の口ばしをのべ、狼の口をあけさせ、ほねをくはへ、えいやと引き出す。其の時鶴、狼に申しけるは、「今より後、此の報恩に依つて、親しく申し語るべし。」と云ひければ、狼いかつて云ふやう、「何でう汝が何程の恩を見せけるぞや、汝が首ふつと喰ひきらんを、今果が心に有りしを、助け置くこそ汝がために報恩なれ。」と云ひければ、鶴力に及ばず立ちさりぬ。其の如く惡人にたいして、善き事を教ふといへども、還つてその罪をなせり。しかりといへども、人にたいして善き事を教へん時は、天道に對し奉りて御奉公とおもふべし。

第十七　しゝわうと驢馬との事

或しゝわう通りける處を、ろば是れをあざける。獅子王此の由を聞きて、あつぱれ喰ひころしてんやと思ひけるが、しばしとてゆるす心出で來ける。其の故は、「我とひとしき者にもあらば、其の爭ひも義に侍るべけれども、彼等がごとく、宿世つたなき者に、あたら口をけがさんこともますかなれば」とて罷るに侍りき。其の如く無智の輩に向ひて、是非を論ずべからず、といへる心なるべし。ろばとは、無智の輩をさすべし、しゝわうとは、才智藹然る者をたとふなり。

第十八　京と田舍のねずみの事

或時都のねずみ、かた田舍にくだり侍りける。田舍の鼠共是れを聞き、傳くこと限りなし。是れに依つて田舍の鼠を召しぐし、上洛す。しかも其の住所は都の、うとき者の藏にてなん有りける。故に食物足つて乏しき事なし。都の鼠申しけるは、「上方にはかくなんいみじき事のみおはすれば、いやしき田舍に住み給ひて、何にかはし給ふべき」などと語り慰む處に、家主藏に用の事ありて、俄に戸を開く。京の鼠は本より案内者なれば、穴に逃げ入りぬ。田舍の鼠は、無案内なれば、あわてさわげども、かくれ所もなく、辛うじて命ばかり扶かりける。其の後田舍の鼠、參會して此のよし語るやう、「御邊は都にいみじき事のみ有りと宣へども、たゞ今のきづかひ、一夜白髮と云ひ傳ふるごとくなり。田舍にては事たらはぬことも侍れども、かゝるきづかひなし。」となん申しける。其のごとくいやしき者のは、上つ方の人に友なふ事なかれ。若ししひて是れを友なふ時は、いたづがはしき事のみにあらず、たちまちわざはひ出で來るべし。貧をたのしむ者は、萬事還つて滿足すと見えたり。かるが故に、語にいはく、貧樂とこそいひはんべりき。

第十九　きつねと鷲との事

或時鷲、我が子の餌食となさんがため、狐の子をうばひ取つてとびさりぬ。狐天にあふぎ地に臥し

てなげきかなしむといへども、其のかひなし。きつね心におもふやう、いか樣に鷲のあたにこそ、雛にしく事はなしとて、柴と云ふ物を鷲の巣の本に集めて、火を付けければ、鷲の子ほのほの中にかなしむ有樣、誠に哀れにみえにける。其の時鷲、千度かなしめども甲斐もなし。終に燒き落されて、忽ち狐に其の子をくはれぬ。其のごとく當座を我がかつてなればとて、下ざまの者にあたをなし、立つ事なかれ。人の恨の積りぬれば、終にはいづくにか遁るべき、高き堤も蟻の穴より崩れ初むるとなん云ひける。

第二十　鷲と、かたつぶりの事

ある時鷲、かたつぶりを喰らはばやと思ひけれども、いかんともせん事を知らず、おもひわづらふ處に、烏傍より進み出でて申しけるは「此のかたつぶり亡ぼさんこと、いとやすき事にて候ふ。我が申すやうにし給ひて後、我に其の半分をあたへ給はば、教へ奉らん。」と云ふ。鷲うけがうて其の敵を問ふに、烏申すやう、「かたつぶりを高き所よりおとし給はば、其のから忽ちくだけなん。」と云ふ。則ち教への如くにしければ、あんのごとく輕く取つて是れをくらふ。其のごとく、たとひ權門高家の人たりとも、我が心をほしいまゝにすとも、智者の教へにしたがふべし。其の故は、わしと烏を比べんに、其の威いづれかはまさるべきなれども、かたつぶりのからにおいては、自らなしえざりける、


うし

事にふれしことどもに人に問ふべし。

第二十一　からすと狐の事

或時狐餌食を求めかねて、こゝかしこさまよふ處に、烏しゝむらをくはへて木の上に居れり。狐心におもふやう、我此のしゝむらを取らまほしく覺えて、烏の居ける木の本に立寄り、「いかに御邊、御身は、萬の鳥の中にすぐれて、うつくしく見えさせおはします、然りといへども少し事足り給はぬ事とては、御こゑの鼻聲にこそ侍れ、但し此の程世上に申ししは、御こゑも事の外能くわたらせ給ふなど申しこそ候へ、あはれ一ふしきかまほしうこそ侍れ」と申しければ、烏此の儀を實にとや心得こゑを出さんとて、口をはたけるひまに、終にしゝむらを落しぬ。狐是れを取つて逃げ去りぬ。其の如く人いかにほむると云ふとも、聊か誠と思ふべからず。若し此の事を少しも信ぜば、慢氣出來すること疑ひなし。人のほめん時は、いよいよへりくだるべし。

第二十二　馬といぬとの事

或人、ゑのこをいとほしみけるにや、其の主人外より歸りし時、彼のゑのこ其のひざにのぼり、或は手のおもて口のほとりをねぶりまはる。是れに依つて主人愛する事いやましなり。馬此の由を見て羨しくや思ひけん、「實に我もか樣にこそし侍らめ」と思ひ定めて、ある時主人外より歸り

ける間、馬主人のおもてに飛びかゝり、面をねぶり、尾をふりなどしければ、主人思ひのほかにて、大きに怒りをなして棒をおつ取りて、本の馬やに押し入れける。其のごとく人の親疎をわきまへず、我がなまり馳走がほこそ、返つてをかしき事なれ。我が能にしたがつて、其のあいさつをなすべし。

第二十三　しゝわうとねずみの事

或時、しゝ王前後も知らず臥しまどろみける処に、鼠余多指しつどひあそび、たはぶれける程に、臥したる獅子王のうへに、鼠一ツとびあがりぬ。其の時しゝわう目さめ驚き、此の鼠を取つてでいまに、既に打ち砕かんとしけるが、しゝわう心に思ふやう、是れ程の者共を失ひければとて、いか程の事の有るべきやと思ひて、助け侍りき。鼠命をひろひ、「更に我等たくみける事に侍らず、餘りに遊びたはぶれける程に、覚のけがにて侍る。」と彼のしゝわうを礼拝して去りぬ。其の後しゝわうある所にてわなにかゝり、既に難儀に及びける時、鼠此の由を聞きて、いそぎ獅子王の前にはせ参り、「いかに獅子王聞召せ、いつぞや我等をたすけ給ふ御恩に、今又助け侍らん。」とて、彼のわなの端を喰ひ切り、獅子王をすくひてけり。其のごとくあやしの者なりとも、したしくなつけ侍らんに、いかでか其の徳を得ざらん。只威勢あればとて、凡下の者をいやしむべからず。

第二十四　つばめと諸鳥との事

或所につばめと、萬の鳥と集まり居ける程に、つばめ申すやう、「爰に麻と云ふ物よく所有り、各是れを引きて給へかし」と歎きけれども、諸鳥是れにくみせぬのみならず、還つてつばめを嘲りける。つばめ申すは、「御邊達は何を笑ひ給ふぞ。此の麻と申すは、あみと云ふ物になん成りて、われ等を、からめとりて、我等が爲には大敵なり、各は後日のわざはひを知り給はず。」と申しければも、諸鳥共同心せずして、其の時つばめ申すやう、「所詮御邊達と向後くみする事あるべからず。」とて、諸鳥に背いて燕は人の家に巣をくふ事も、是れを初めにて有りける。其の如くあまたの人の中に、秀でて才智ある者ありといへども、用ゐずは、おいてふところにす。又いかに人間どやうに惡しといふとも、そのあるはけい議のこと、あなよ、智者のいふことを何かに惡しかるべきや。

第十五　かはづが主君をのぞむ事

あてねすと云ふ所に、彼の主恙なくて、何事も心に任せてなん有りける。其の所の人餘りに誇りけるに、主人を定めばやと議定して、すでに主人をぞ定めける。かるがゆゑにいさゝかのひがことあれば、其の人罪科に行ふ。是れに依つて其の人に主君を定めけるを、悔い悲しめども甲斐なし。其の時、それは其の國に謂れぬ。或る人々此のことを語るに、其の善悪を論はず、たとへを述べて云く、「或る河川に數多の蛙集まり居て、我が主人を定めばやと議定し侍りき。比ありしかるべしとて、天に

天にむかひ、「我が主人をあたへ給へ」と祈誓す。天道是れを憐んで柱を一つ降し給ひぬ。其の柱の川に落ち入る音、底にひゞきてけたゝまし。此の一声におそれて暫時、水中にしのび隠て、しかる後、そろりと水の中より頭を見上げ、「何事もなきぞ、罷り出でよ」とて、各なぎさにすゝみより、例の柱を拝敬して、我が主人とぞもてなし侍る。無心の柱なれば蛙にあまりつて、各其の上に飛び上り、又天道にあふぎける様は、「主人は心なき木なり。同じくは心ある物をたべ」と訴へければ、重ねてくゝ、「しからばかゝる物こそあるなれ」とて、此度は鶴を主人とあたへ給ふ。主人に依つて蛙、度々川の辺に出る時は、とひ是れを取て餌食とす。其の時蛙千度後悔すれども甲斐なし。其のごとく人は、たゞ我が身にあたはぬ事を望まぬ事なかれ。始めより人に従ふものの、今更独身となるとも、なき事なり。又自由に有りける人の主人を頼むらひがことなり。只たゞ心のまゝに留ることを翻すべき事なれ。

第二十六　とびとはとの事

或時鳩ども、鳶とならび居ける處に、とび此の鳩をあなどりて、やゝもすれば餌食とせんとす。其の鳩せんと評定して、鷲の許に行きて申しけるは、「鳶と云ふ下せんのふたう仁あり、やゝもすれば、我等に一日見せ顔なり。今より以後其のふるまひをなさぬ様に、はからひ給はゞ、主君とあふぎ奉

らん」と云ひ切れば、鷲安く請けあつて鶏を一度に召し寄せ、かたはしに取つて殺す。其の残る鶏申しけるは、「是れ人のしわざにあらず、我と我が身をあやまつなり、鷲の計らひ給ふ所道理至極なれ。」となんいひける。其の如く、未だ我が身に始まらざる事を、新しく仕出すは、還つて其の悔い有る物なり。事の後に千度悔いんよりは、事の先に一度も案ぜんには如かじとこそ見えけれ。聊かの欺きを忍びずして、還つて大難を請くる者多し。かるがゆゑに、或人云く、少難凌で、大難は還つて大報をえたると見えたり。

第二十七　からすと孔雀の事

或時烏、くじやくを見て、彼の身に様々のあや有ることをうらやみ、とある處の木陰にくじやくの羽の落ちたるを拾ひ取りて、我が尾羽に指しそへて、くじやくの振舞をなし、かの傍輩をさげはりて、くじやく此れをましと見て、「汝はいやしき鳥の身と成り、なんぞ我等が振舞をなしけるぞ。」とて、おもふさまにいましめてきせしはりをむしとりぬ。其の時烏傍輩に云ふやう、「我出なき振舞をなして、恥辱をうくるのみならず、様々にいましめられぬ。御邊たちは若き人なれば、向後其の振舞をなしたまふな。」と申しける。其のごとく身いやしうして、かみつかたのふるまひをなし、或はまじはりをなせば、終に己が本のすがたをあらはすに依りて、恥辱をうくること定まれる義なり。悪人として一旦

悪人の衆類を作すとも、終に我が本性をあらはす物なり。是れを思へ。

第二十八　蠅と蟻との事

或時蠅、蟻にむかひて、ほこりけるは、「いかに蟻殿、謹んで承れ。我ほど果報いみじき者は世に有るまじ。其の故は、天道に奉り、或は国王にそなはる物も、先づ我さきになめ試み、しかのみならず、百官卿相のいたゞきをも恐れず、恣にとびあがり候。わとの原が有様、天晴つたなき有様。」とぞ笑ひ侍りき。蟻答へて云く、「尤も御邊はさやうにこそめでたくわたらせ給へ。但し世に沙汰し候は、御邊程人に嫌はるゝ者なし。さらば蚊ぞ、蜂ぞなどのやうにかひ〴〵しく、あたをも作さで、やゝもすれば人に殺さる。しかのみならず、春過ぎ夏去つて秋風たちぬるころは、漸くつばさを叩き、かしらをなでて手をする様なり。秋深く成るに隨ひてつばさよわり腰ぬけて、いと見苦しとぞ申し侍りき。我が身はつたなき者なれば、春秋のうつるをも知らず、豊かにくらし侍るなり。猥りに人をあなどり給ふ物かな。」と、はぢしめられ立ち去りぬ。其の如く、聊か我がみにわざあればとて、猥りに人を慢ることなかれ、かれ又己を慢るものなり。

第二十九　いたちの事

或時鼬、鼠のわなにかゝりける事ありけり。其の主是れをみて打ち殺さんとす。鼬さゝへて申しけ



るは、「これほどに主人聞召て、我をころし給ふべき理なし。其の故に、御内にはいたづらする鼠と云ふ徒なるものを退治仕り候。其の上聊か御さはりと成る事に候はず」と申しければ、主答へて云はく、「汝を以て助くべき道理有りや、鼠を滅ぼすと云ふも、我が潤色にあらず、汝が御食とせんが為なり、謂れなし」と打ち殺しぬ。其の如く我が難儀出来するとて、慌てて詞をいふべからず、初め終りを思案すべし。命を失ふのみならず、後日の嘲り口惜しきことなり。

第三十　むまと獅子王の事

或時、馬野邊に出でて草をはみける所に、獅子王ひそかに是れを見て、彼の馬を食せんと思ひしが、先づ武略を廻らしてこそと思ひ、馬の前にかしこまりて申しけるは、「御邊此の程何事をか習ひ給ふぞ、我は此の比醫學をなん仕り候」と申しければ、馬獅子王の悪念を悟つて、我もたばからばやと思ひ、獅子王に向ひて申しけるは、「扨々御邊は、羨ましくも醫學をならはせ給ふものかな、幸ひ我が足に杭をふみ立てて煩ふなり、御らんじてたべかし。」となん云ひける。しゝ王得たりと、「是れを見ん。」と云ふ。「さらば。」とて、馬片足をもたげければ、しゝ王何心なく仰向けになつて、爪のうらをみる處を、本よりたくみし事なれば、したゝかに、しゝ王のつらをつゞけさまに踏んだりける、さしもたけき獅子王も、氣を失ひて起きもあがらず、其の隙に馬ははるかにかけ去りぬ。其の後しゝ王

はふ／＼とおきあがり、ゐぶるひして、獨りごとを申しける。「よしなき某が計にて、すでに命を失はんとす、道理の上より以ていましめを蒙る事、是れ馬のわざにあらず、只天道の御いましめとぞ覺えける。」其のごとく一切の人間も、しらぬ事を知り顔にふるまはば、忽ち恥辱をうけんこと疑ひなし。知る事を知るとも、知らざる事をば知らずとせよ、ゆるがせにおもふ事なかれ。

第三十一　しゝ王とはすとるの事

或時しゝ王其の足に杭を立て、其の難儀に及びける時、かなしみの餘り、はすとるの邊に近づく。はすとる是れをおそれて、我が羊をあたへてけり。しゝ王羊をおかさず、我が足をはすとるの前にもたげ／＼ければ、はすとる是れを心得て、其の杭をぬいて、薬を付けてあたへぬ。それより獅子王山中にかくれぬ。ある時しゝ王、狩にとらはれて籠に入れられ、罪人を入れて是れを喰らはしむ。また彼のはすとる、其の罪有るによりて、彼のしゝ籠に押し入る。しゝ王あへて是れをおかさず、還つて涙を流して畏まりぬ。暫く有りて人々籠の内を見るに、さしもに猛き獅子王、耳をたれ膝を折つて、彼のはすとるを拜す。もののゝを入れて服さんとするに、しゝ王是れをかなぐりすつ。王此の事を聞いて、「汝何の様にて、かく獸にあはれまれけるぞ。」と云ひければ、件の仔細申し露はす。人々此の由を感じて、かゝる畜生に至るまで、人の恩を報じけるぞや。」と感じ憐みける。是れに依つても、我はすと

るをも免されぬ。其のごとく、人として恩を知らぬは、畜生にも劣れる者なり。人に恩を作す時は、天道是れを受け給ふなり。聊かの恩をも請けば、之れを報ぜんと常に思へ。

第三十二　むまと驢馬の事

或時能馬、能きかいぐ、おいて、其の主を乘せて通りける。傍にろば一疋行きあひたり。彼の馬、かのろばに云く、ろば何とて禮拜せぬぞ。汝をふみ殺さんもいと易き事なれども、汝等が如きの者は隨へて事の數ならぬことゝて、そこを過ぎぬ。其の後何とかしたりけん、彼の馬二つの足をふみ折つて、何の用にも立ちぬべき樣もなし。是れに依つて土民の手にわたり侍りき。卑しき者の家に使ひける習ひ、ふんどをおはせてひき行きぬ。その馬の樣もやゝ衰へ、有るかなきかの姿に成り侍りぬ。或時此の馬、ふんどを脊負うて通りけるに、件のろば行きあひけり。彼のろばつくぐ〳〵と此の馬を見て、「殿も救も御邊に、いつぞや我等をのゝしり給ふ、廣言の馬にてわたらせ給はずや。何としてかく賤かるあさましき姿となりて、か程いやしき糞土をば負ひ給ふぞ。我いやしく生れ候へども、未だかかるふんどをば負はず、いつぞやのよきかいぐ共は、いづくに置き給ふぞ」と恥ぢしめければ、返事もなくしにけ去りぬ。其のごとく人世に有りて、高位に有りと云ふとも、下﨟の者を慢ることなかれ。有爲無常の習ひ、けふは人の上、あすは我が身の上と知るべし。一たんの榮華にほこつて、人をあや

しむ事なかれ。

第三十三　鳥けだものと戦ひの事

或時、鳥けだものと、すでに戦ひに及ぶ。鳥の云く、一軍にまけて、今は斯うよと見えし時、かうもり畜類にこしらへかふる。「鳥共愁へて云く、かれらが如きの者さへ、獣にくだりぬ。今はせんかたなしと悲しむ處に、鷲申しけるは、「何事をかなげくぞ、我此の陣にあらん程は頼もしく思へ」といさめて、又けだものの陣に押しよせ、「此の度は鳥の軍よかんめれ」とたがひに和睦してんけり。其の後鳥共申しけるは、「扨もかうもりは、二心有りける事、いかなる罪科にか與へん」と云ふ中に、こはうの鳥あるに申しけるは、「あれ程の者を、いましめてもよしなし、所詮今日よりして、鳥のまじはりを成すべからず、白日に徘徊する事なかれ」と、いましめられて、鳥の衣をはがされ、今はしたがひの破れふきて、やうやう日ぐれにさしいでけり。其のごとく、人もしたしき中を捨てて、むやくの者と悪することなかれ。六親不和なれば、天道にもはづれたりと見えたり。

第三十四　かのしゝの事

或時かのしゝ、川の邊に出でて水をのみける時、我が角の影水に移りて見えければ、此の角の有様ようて、扨我ながらいたゞきける角は、萬のけだものの中に、又ならぶものは有るべからずとて、かへ

は高樓の思ひをなせり。」又我が四つ足の陰、水底にうつりていと便りなく細くして、しかもひづめ二つにわれたり。」又鹿心に思ふやう、「角にめでたう侍れど、我が四つ足はうとましげなり。」と思ひゐる處に、心ある人の聲ほのかに聞えける。其の外犬の聲もしけり。これに依つて、彼の鹿山中に逃入り、餘りにあわて騒ぐ程に、或木のまたに、己が角を引つかけて、下へぶらりとさがりけり。ぬんあらんとすれども由なし。鹿心におもふ樣、「由なき只今の我が心や、いみじくほこりける角は、我があたに成りて、うとんずる四つ足こそ、我が助けなる物を。」と、獨りごとして思ひたへぬ。其のごとく人も、是れにかはらず、師傳きけるものは、あたと成りて、うとんじしりぞけゐるものは、わがたすけと成るものをと、こうくわいする事、これあるものなりとぞ。

第三十五　鷄と狐との事

或時きつね、餌食を求めかねて、こゝかしこをさまよふ處に、鷄に行きあひたり、よきやかしこしと、是れを取りてくらはんとす。鷄此の事を覺つて、或木の枝にとび上りぬ。狐手を失うてせんかたなさに、所詮をたぶらかしてこそ喰はめとおもひて、彼の木の本に立ち寄りて、「いかに鷄、聞召せ、此の比よろづの鳥けだものの中直りする事あり、御邊は知り給はぬか、久しく申し承らぬに依つて、態とこれまで參りて候。」と、いと睦まじげに語りければ、鷄狐の武略をさとつて、「誠に斷

かる折節に生まれあひぬる事こそ、めでたう候へ。能くあひたり、犬能き樣にはからひ給ふべし」と
いひて更におりず。狐重ねて申しけるは「先づ此所へおりさせ給へ、ひそかに申すべき事あり」と、
しきりによべども終におりず。鶏、用ありさうにあなたの方を眺めければ、狐下よりみあげて「御邉
は何事を見給ふぞ」と申しければ「されば只今御邉の物語りし給ふ事を、告げしらせんとや思はれ
けん、犬二疋ばかり來られ候」と申しければ、きつねあわて騒いで「さらば先づ某は、御暇申
す」とて去らんとす。鶏申しけるは「いかに狐、鳥けだものの中直りしける、その折節何事かは
候べき、そこに待ちて犬と交はり給へ」と言へければ、きつね重ねて申すやう「某と彼の犬、中直
る事偏にきかず、此の鶏におしよりなん」と迯げ去りぬ。其の如く、たとひ人におそれたる儀すべき者と
見るとも、人先づ問ひ向ふべからず、武略にてむかはば、我もぶりやくを以てむかふべし。

第三十六　はらと五體の事

或時、五體、六根ももろともにして、腹をそねんで申しけるは、「我等のんぐゞは、幼少の時よりも、其
のいとなみをなすといへども、件の腹といふものは、われらより終になすことなくして、剰へ我等が
苦しうするわざをたくみけるゝ、五根道斷きつくわいの次第なり。今より以後、彼の腹に仕へまじ
きぞ」とて、みな一同に、五體六根、何事もせず、食事をもとめず居る程に、初めは暫く人の總體をぞ見

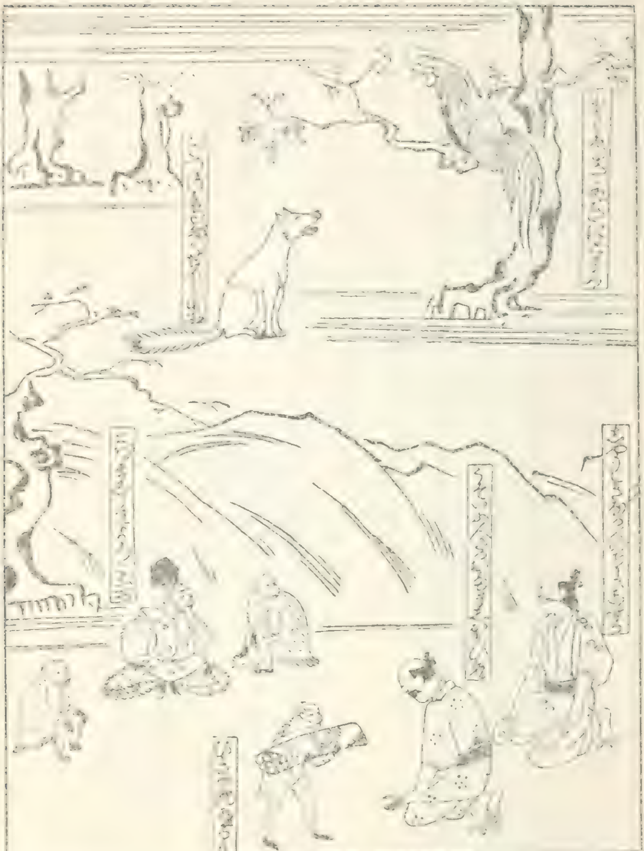
まりみ、わづか三日数経に経る程に、何かはすこしもたべき、五体六根やいわいしこ、終に草臥果て、こんきうするに及びて、「我が朝夕腹に随ふべし。」と云ふて、其のごとく人としても、今まで親、主君を捨てて、随ふべきものにしたがはざれば、天道にもそむき、人愛もうしなはれなんず。かれが為にことわざにも、鳩をにくみ豆つくらぬとかや。

第三十七　人と驢馬との事

或時人、ろばに荷をおふせて行くに、此の驢馬や、もすれば行きなづむこと有り。此の人さのみあわいなりとて、いたく鞭をおふせければ、ろば申しけるは、「かかるうきめに逢はんよりは、しかじ只死なばや」とこそ申しけれ。彼の人猶いたくいましめて、追ひやる程に、行きつかれて終に命終りぬ。彼の人々心におもふ様、かかる宿世つたなき者なれば、其の皮までも打ちいましめんとて、太鼓に張りてばちをあてけり。其のごとく人の世に有ることも、聊かのなんかんなればとて、死なんと願ふべからず、何とか命のをはりをまたず、身をなげなどすることは、至つてふかき罪科たるべし。これをつつしめ。

第三十八　狼とはすとるの事

ある狩人、狼がり行きけるに、此の狼、ある木陰にかくれ居れり。然るをはすとる見付けては



り。それによつて、此の狼、はすとるに向つて申しけるは、「我が命をたすけ給へ。」ひたすら頼む。それははすとる安くうけがふ。狼心やすく居ける處に、狩人來りて、はすとるに申しけるは、「此の邊に狼や來たる。」と尋ねければ、はすとる目遣ひにて、これを教へける。狩人、彼の眼をさとらず、はるか奥に行きすぎたり。其の後、狼、叢の中より出で、いづくとも知らずにげ去りぬ。或時此の狼、はすとるに行きあひけり。はすとる申しけるは、「わごぜはいつぞや助けける狼か。」といへば、狼答へて云く、「さればとよ、御邊の事は、よかんなれど、御邊の眼はぬき捨てたく侍る。」とぞ申しける。其の如く、我も人も外に善き事をする顔なれども、内心甚だ悪道なれば、彼のはすとるに異ならず。速かに内心の隔てを作す事なかれ、一心ふへんに善事をすべし。

第三十九　猿と人との事

むかし正直なる人、そらごとのみいふ人と有りけり。此の二人、猿の有る所に行きけり。然るに或木のもとに、猿共數多並み居る中に、秀でて各うやまふ猿あり。彼のうそつく人、猿の王の前に近づきて、例のうそを申しけるは、「これにけだかく見えさせ給ふは、ましら王にてわたらせ給ふか。其の外面々見えさせたまふは、月卿雲客にてわたらせ給ふか。あないみじき有樣。」とぞほめける。ましら此の由を聞きて、「にくき人のほめやうかな、是れこそ誠の帝王にしておはしませ。」とて、引出物などしけ

る。然るを後の正直なる者思ふやう、是れにうらやましくおもふにだに、引出物出したりければ、實をいはんに何しにかは得ざらんとて、彼の猿の澤に行きて申しけるは、「面々の中に、年たけ齢おとろへて、くさのはけたる有り、盛んにしてよく物きれするべくも有りなんことぞ」、有りのまゝに申しければ、ましら大きにいかつて、猿共にくらゐさぶりかゝわせて、終にかき殺しぬ。そのごとく、人のよに有る事も、正直なるものは、いみじく榮え、すなほなるものは、かへつて害をうくるあり。この義をすとつて、まなはたる上にまかせて、悔ゆる事なかれ。

第四十　獅子王とろばとの事

ある時ろば、しゝわうに行きあひ、「いかにしゝわう、わが山に來り給へ、威勢の程を見せまゐらせん。」といふ。獅子王かゝしとおもへども、さらぬ體にてともに行く。山のかたはらにおいて、ろば夥しく走りめぐりければ、其の音におそれて、狐たぬきなどいふもの、こゝかしこより逃げまはる。ろば獅子王に申しけるは、「あれ見給へ獅子王、我程めでたき威勢にて侍ることはこのければ、しゝわういかつていはく、「きつくわいなり驢馬、われは是れ獅子王なり、汝等がごとく下郎の身として、こゝけうとい[illegible]ふこと、[illegible]なかれ。」とて、いましめられてまかりしりぞく。それ下輩の身として、人とあらそふことで[illegible]すれば、わが身の程をかへり見ずして、人とあらそふ時には、恥

[illegible]うくるものなり。ゆだんすまじき事なり。

伊曾保物語中終

伊曾保物語下目録

伊曾保物語下目錄

伊曾保物語下目錄　終

伊曾保物語 下

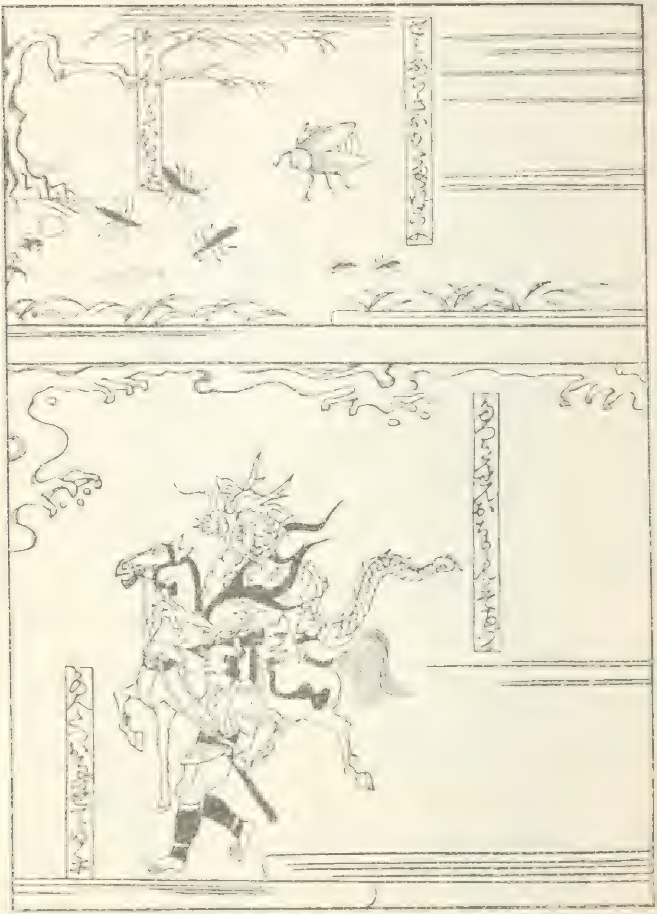
第一　蟻と蟬との事

ある時に、作麼を變へ、秋もふかうて、冬の比にも成りしかば、日のうら／＼なる時、蟻あなよりはひ出て、餌食を干しなどす。蟬來つて蟻に申すは「あないみじのあり殿や、かかる冬ざれまで、さやうに豐かに、穀をもたせ給ふ物かな。われに少しの御食をたび給へ」と申しければ、蟻答へて云く、「御邊は夏秋のいとなみには、何事をかし給ひけるぞ」といへば、蟬答へて云く、「夏秋身のいとなみとては、梢にうたふ計りなり。其の音曲に取り紛らし、ひまなきまゝに暮し候ふ」と云へば、蟻申しけるは「今とてもなど謠ひ給はぬぞ。うたひ長じては、終に舞とこそ承れ。いやしき餌食を求めて、何にかはし給ふべき」とて、穴に入りぬ。其のごとく、人の世にあることとも、我が力に及ばん程は、たしかに蓄へ置くべし。ゆたかなる時、つゞまやかにせざる人は、貧しうして後にくゆことりてよかるるを慮ざれば、悔いてのちくゆる益なし。蟬のうらみだれぬれば、さやうこのみなりて。

さる程に、猪、子供あまたなみ居ける中に、殊にちひさき猪、がまん起して、さうかのつかさとなるべしと思ひて、歯をくひしばり、目をいからし、尾をふつて飛びめぐれども、傍輩等、一向これを用ゐず。彼の猪、きをくだいて、「一所懸命のやつ原にくみせんよりは、他人に敬はればや」と思ひて、羊共の並み居たる中に行く。前の如く振舞ひければ、羊一勢ひに恐れてにげ去りぬ。扨こそ此の猪、本座を遂して居ける所に、狼一疋はせ来りけり。あはやとはおもへども「われは是れ主なれば、彼も定めて恐れなん。」とて、さらぬ體にて居ける處を、狼飛び掛り、耳をくはへて山中に到りぬ。羊もつて合力せず、をめき叫び行く程に、彼の猪の傍輩等、此のこゑを聞き付けて、終に取り留めたすけけり。其の時こそ「むやくのおほんしつるものかな。」と、本の猪等にかうさんしける。其のごとく人の世に有ることも、由なき慢氣を起して、したがへたく思はば、還つていさはひをまねくものなり。終には本のしたしみならでは、實のたすけにはならぬものなり。

第三　狐と鶏との事

或時鶏、苑に出でて餌食をもとむる處に、狐是れをくらはばやと思ひ、先づはかりごとを廻らして申しけるは「いかに鶏殿、御邊の父御とは親しく申し承り候、此の後は御邊とも申し合はせ



め」と云ひければ、鶏さもあらんと思ふ處に、狐申しけるは、「我も御邊の父とは、御一所のなかなるぞ。哀れ、その父の仕樣にまなし、聲を聞かん」と云ふ。鶏、げにもと思はれて、既にうたはんとて目をふさぎ、首を差し延べける所を、しやかしとくはへてはしる程に、鶏あることを聞き付けて、[illegible]懸けて、「我が聲を[illegible]」と言ひければ、狐[illegible]けるは、「いかに狐殿、あのいやしき者の[illegible]、我が聲を上と申し候に、御邊の聲にてこそあれ」と、返答し給へ」と云ひければ、狐[illegible]ければ、其の時、狐聲をさしはなし、跡を見返る隙に、鶏既に木に上れば、狐大きにぎやうてんして、空しく山へぞ歸りける。其のごとく人たる物も、いへと教ふればとて、思案もなくあれこれ物を云ふべからず。狐が鶏を取りて、[illegible]、思案なげに物をいひける故ぞ。

第四　龍と人との事

河の邊を、馬に乘つて通る人ありけり。其の傍に龍と云ふ物、水に離れて、迷惑する事ありけり。此の龍今の人をみて申しけるは、「我今水にはなれてせん方なし、哀みをたれ給ひ、其の馬に乘せて、水ある所へ付けさせ給はば、其の返報として金錢を奉らん」と云ふ。彼の人誠と心得て、馬に乘せて、水上へ送る。そこにて、「約束の金錢をくれよ。」といへば、龍怒つて云く、「何の金錢をか參らすべき。我を馬にくくり付けて、いためつけ給ふだに有るに、金錢とは何事ぞ。」とあらそふ處に、狐はせ來つて、

「扨も龍殿に何ごとを諍ふぞ」と云ふに、龍有りの趣をなん云ひければ、狐申しけるは、「われ此の公事を決すべし。先にくゝり付けたる様は、何とかなしけるぞ。」と云ふに、たつ申しけるは、「かくの如くぞ」とて又馬に来る程に、狐、人に申しけるは、「いか程かしめ付けけるぞ。」と云ふ程に、「是れ程。」とてしめければ、龍の云く、「いまだ其の位なし、したゝかにしめられける。」といへば、「これ程か。」とて、いやましにしめ付けて、人に申しけるは、「かゝる無理無法の徒者ならば、木の下へやれ。」とて、追立てたり。人質にもと従ひて、木の下に下せり。其の時龍いくたび悔いども、かひなくして失せにけり。其のごとく人の恩をかうぶりて、これを報ぜぬのみか却つてあたをなさば、天罰たちまちあたるものなり、これを戒めよ。

第五　馬と狼の事

或馬、山中を通りけるに、狼行き向つて、既に此の馬をくらはんとす。馬はかりごとに申しけるは、「此の度においては我を助け給はば、後代の聞えもやさしかりなんを、狼山深くめしつれ給ひ、聞ども、諸ともに給へ」と申しければ、狼、「實にも。」と同心すれば、馬狼を我が腹に付け、奥の奥に入つて、「何處へなりとも、いづくへも給へ。」と申しければ、「此の山は案内しらず、たゞ我を導き給へ」と云ひければ、馬申しけるは、「是れは平人の行く道にてはなし、奥山へ向つて通る。」と申しつ

れもこれも歩み近づく程に、手の際に成りて、狼たゞ是非にかゝれとや思ひけん、後へおしやりとしき
りければ、馬猶へ引きのけけり。しかれども狼も、大の馬には強く引かれ、せんかたなげにて行
きたりける。右此の由を見付けし、先の狼にいたく棒をそあたへける。そばよりそこの人ひとり出
で、刀を抜いて切らんとす。狼のふ、よかりけん、其の矢をはづれて、なほなきられて、はふはふ
とにげて歸りける。其の如く、我が敵と思はん者の云ふ事をば、能く思案して聞ふべし。さもなくて
同心せば、彼の狼のわざはひに同じかるべし。

第六　狼と狐との事

或河の邊りに狐、魚を喰ひける折節、狼上に臨みて歩み來り、狐に申す樣、「其の魚少し與へよ、魚
じきにあらしてんや」と云ひければ、狐申しけるは、「あな恐れ多し、我がわけ奉るべきや、籠を一つ
持ち來らせ給へ、魚を取りて參らせん。」と云ふ。狼こゝかしことかけ廻つて、かごを取りて來りけ
る。狐教へけるやうは、「此のかごを尾に付けて、川の眞中をおよがせ給へ、跡より魚を追ひいれん」
と云ふ。狼かごをくゝり付けて、川を下りにおよぎける。狐跡より石を取り入れければ、次第に重
くて、一足もひかれず、狐に申しけるは、「魚の入りたるか、殊のほか重くなりて一足もひかれず。」と云
ふ。狐申しけるは、「さん候、殊の外に魚の入りて見え候程に、我が力にては引き上げがたく候へ

は、けだものゝ聞けてこそ參らめ。」とて陸にあがりぬ。狐あたりの人々に申し侍るは、「彼のあたりの羊をくらひたる狼こそ、只今川中にて魚をぬすみ候」と申しければ、我先にと走り出で、散々に打擲しける。側よりもこの者出でて、刀をぬいて是れを切るに、何とかしたりけん、尾を切つて其の身は山へぞにげ入りける。折しも獅子王、違例の事ありければ、御氣色大事に見えさせ給ふ。「我此の患を遁りて、承り及び候ひぬ。狐が生皮を御はだへに付けさせ給はゞ、やがて御平癒有るべし。」と申す。狐この事を傳へ聞きて、にくい狼が訴訟かな、と思ひながら、召しに應じて、しゝ王の御前へいつはりごとに、おのれが身をところにまろびて出で來たり。獅子王此の由を見るよりも、「近う參れ申すべき仔細あり、近き程、汝を一の人とも定むべき」など、めでたう申しければ、狐謹んで答へけるは、「餘り儀に急いで參じけるとて、よろび候ふ程に、以ての外に装束のけがらはしく候ふ、違ひて御違例のさはりともなりなんや。」と云ひて、重ねて申しけるは、「我此の程諸人に尋ね候へば、か樣の御違例には、尾の無き狼の、四つ足と、面の皮を殘し、生皮をはぎて召させ給はゞ、則ち平癒すと申し候ふ。但し尾の無き狼は有るべうも候はず」と申しければ、しゝ王、「是れこそ爰にあれ。」と、彼の狼を待つ所に、何心なく參り候ひぬ。獅子王引きよせて、云ひしごとくに皮をはいで、「命ばかりを助けにけり。其の後ある山のそばに、件の狐詠め居ける折節、狼もそこを通る。狐申し

るは、「是れを通らせ給ふは誰にて渡らせ給ふぞ。かほどあつき炎天に、頭巾をかづき、たびをはき、ゆがけをさいて見えたまふは、若しひが目にてもや候らん、五體を見ればあかはだかにて、あぶ、蜂、蠅、蚊などと云ふもの、ひま無く取りつきたり。但しさる物のかたにてはし侍るか、能く能く見候へば、いつぞやし、上に、ましなき評論したまふ狼なり。」とてあざけりける。其のごとくみだりに人をざんそうすれば、人また我をざんそうする。春來る時は、冬またかくれぬ、夏すぎぬれば、秋また立ちぬ。ひとり何ものか世にほこるべきや。

第七　おほかみ夢物がたりの事

或時狼夢に、高位に任して、あくまで食すと見たりける。明日、狼山を出づる時、道のほとりに豬の腸あり、すはやめでたし、はやゑじきの有りけるよと喜びさかえけるが、いやいやこれは腹の毒。」とて、「良きゑじきをくはめ。」とこそ、そこを過ぎて行きぬ。ある山のそばに、子をつれたる馬あり。狼此の山を見て、「是れこそ能きゑじきなれ、くはばや。」とこゝろ得て、馬に向ひて申しけるは、「汝が子を我がゑじきとなすべし、心得よ。」と云ひければ、馬答へて云く、「とも角も仰せにこそしたがはめ。」とてゐたりけるが、狼に申しける、「承り候へば、げきやうの上手と申す。我此の程足に杭をふみ立て候へば、恐れながら御目にかけたし。」と申す。「安き事。」と云ふ程に、片足をもたげ

て、「是れを見給へ。」と云ひければ、狼打ちあふのいて見ける所を、岸より下にふみ落し、我が子をつれて歸りけり。狼是れをば事ともせず、「只今こそしけるとも、又こそ。」と思ひ、かしこにかけ廻る程に、野邊に野牛二疋居たり。狼是れをみて、是れこそとおもひ、野牛に向つて申しけるは、「汝が内、一疋我がふじきにすべし。」と申しければ、野牛謹んで、「ともかくもにて侍るなり、爰に申すべき仔細あり、久しく諍ふ事の侍れば、御さいばんを以て後、何ともはからはせ給へかし。」と申しければ、狼、「何事ぞ。」と問ふ。野牛答へて云く、「此の野をふたり諍ひ候。理し給ふべき人なきに依つて、勝負を付けがたく候。然らずば、我等二疋向うより、御そばへはしり來り候べし、疾くはしり付けたらん者に、其の理を付けさせ給へ。」と云ふ。「とく／＼。」と申しければ、野牛向うより左右に走りかゝり、角にて狼のふとばらをかき切つて、其の身は山にぞ入りにける。狼頭を傾つて、「こは仕合わるき事かな。」と、はないきならしてそこを過ぎぬ。また川の邊に、ぶた親子あそび居けるところを、是れこそと思ひ、ぶたに向ひて申しけるは、「汝が子をふじきとすべし、心得よ。」と申しければ、ぶた心えて云く、「ともかうも御はからひにまかせ侍るべし、但し我が子は未だ幼少に候へば、いまだ洗ぎつけず候。見申せば、御出家の御身なり、御結縁に、かいさずけ給へかし。」と望みければ、狼尤もなりけりとて、「さらば。」とて、橋の上にのぼりて、「爰に來れ。」と申しけるを、ぶた、我が子

たつねて行く程に、つゝよりて橋より下へつきおとし、我が身は家に歸りける程、うそめ、こゝろね
なかれて、やう／＼と這ひあがり、「あら夢見なしや。」と言ひける。

第八　鳩と蟻との事

或川の邊に、蟻あそぶ事有りけり。俄に水かさまさりきて、彼の蟻をさそひ流る。浮きぬ沈みぬする所に、鳩木末より見れなみて、「あはれなる有樣かな。」と、木末を少し喰ひ切りて、河の中に落しければ、蟻是れに乘つてなぎさにあがりぬ。かゝる所に、或人さをのさきにとりもちを付けて、はとをさゝんとす。蟻心に思ふ樣、「只今の恩を送らうものを。」と思ひ、彼の人の足にしつかと喰ひ付きければ、おびえあがつて、棹を彼方になげ捨てし、其の者の色や知る。然るに鳩是れを悟つて、何國ともなく飛び去りぬ。其の如く、人の恩を請けたらん者は、いか樣にも其の報いせばやと思ふ志を持つべし。

第九　狼と犬との事

あるほすとる、羊のけいこに、犬を持ちけれど、ゐじきをすなほに與へざれば、やせ衰へてありける、狼此の由を見て、「御邊は何としてやせ給ふぞ。われに羊を一疋あたへ、我の羊を盗み取つてにけれ時、追掛けたるび給へ、此の事見たまふならば、御邊にゐじきを賜ふべし。」といへば、實にもと同



心すべし。案の如く、狼、羊をほしく思ひて進み来たる時、大勢の道にて出あひ、はやすごと思ひて云く、「何とて羊をとられけるぞ」と云ひければ、犬答へて云く、「此の程餌食なくして散々に仕つて候。其の故に羊をとられて候」と云ひければ、「尤にもつとも」とて、それよりしてゑじきを與へぬ。又狼来つて、「我が諸眷が違ふべからず、今一定羊を取られ、其の後も羊を付けさせ給へ。然れどもゑかではし負ふせ給ふな」となだめ契約して、羊をくはへて逃ぐる所を追つかけ、彼の狼を少し喰ひやぶりて帰りぬ。主人是れを見て、「心よし」として、いよ／＼ゑじきを與へ、すくやかにす。又狼来り、今一ッ所望す。犬申しけるは、「此の程主人よりあくまでゑじきを與へられ、五體もすくやかに成り候へば、えこそ参らすまじき」と云ひはなしければ、「何とかな」と言ひける程に、犬教へて云く、「主人の藏に樣々のゑじき有り、行きて用ゐたまへ」と云ひければ、さらばとて藏に行き、先づ酒のほみ、思ひのまゝに是れを呑む。いたく酔ひて爰彼所たゝき歩く音に、はすとるの歌ふを聞きて、「彼のきたなけなるものきへうたふに、我又うたはであらんや」とて、大聲上げて喚く程に、里人聞き付けて、「あはや狼の来たるわ」とて、叩やなぐりにては責まる。是れに依つて狼終に滅ぼされぬ。其の如く、召し仕ふ者に扶持なくはかなければ、其の主の物をつひやすと云へたり。

第十　狐と狼の事

或狐、子をまうけけるに、狼を恐れて、名つけ親と定む。狼承り、其の名を、ばけ松と付けたり。狼申しけるは、「其の子を我が側に置きて、學問させよ、恩愛の餘りあたりに惡ぐるひすな。」といへば、狐「實にも。」とや思ひ、狼に預けぬ。狼此のばけ松をつれて或山の頂にあがり、我が身はまどろみ臥したり。「けだもの通らば起せよ。」と云ひ付けたり。さるに依つて、豚其の邊を通る程に、ばけ松、狼をおこして是れを教ふ。狼申しけるは、「いさとよ、あの豚は、毛もたゞこはくして口をそこなふ物なり、是れをば取るまじき。」と云ふ。又牛を野飼にはなちけるに、ばけ松教へければ、狼申しけるは、「是れもはすとる、犬などいふもの多し、取るまじ」と云ふ。又さふやくの有りけるを教へければ、「是れこそ」とてはしり掛りて、くびをくはへて我が前に來れ、子のばけ松も共にくひてんけり。其の後ばけ松、暇をこひければ、狼申しけるは、「未だ汝は學問も遂げず、今暫し」とてとゞめけれども、「いなさ」とて罷り歸り、母狐是れを見て、「何とてはやく歸るぞ。」と云ひければ、「學問をば遂げ候ひてこそ候へ、其の手なみを見せ奉らん」とて、山野に出で、狐ぶたをみて、「是れは申しことを教へければ、「是れは、毛たゞこはくして、口を害なひ申す」とこたふ。牛を教へければ、「是れは、人、犬など云ふもの有り」とこたふ。さふやくを教へければ、ばけ松申しけるは、「あれこそよけれ」是

れこそ。」とて、狼のしたるごとくに、首に飛びかゝりければ、結句馬にくらひ殺さる。則愚しむこと限りなし。其の如く聊かのことを師匠に學びて、未だ師匠も免さぬに、達したると思ふべからず。此の狐も年月を經て、狼にしわざをならはば、かかる恥辱にあはざらんとぞ。

第十一　野牛と狼との事

或人、あまたの羊をかひ取り、其の後羊のけいごに、猛き犬をぞかひそへける。是れに依つて狼少しも此の羊をおかさず。然るに彼の犬俄に死にけり。はすとるうれへて云く、「此の犬死して羊定めて狼にとられなん、いかゞせん」となげきければ、野牛すゝみ出でて申しけるは、「此の事あながちかなしみ給ふべからず、其の故は我が角を落し、彼の犬の皮をきせて、羊をけいごせさせ給へ、定めて狼恐れなんや。」と申しければ、はすとる、「實にも。」とて、其の如くしけり。是れに依つて狼、犬かと心得て、羊の側に近づくことなし。然る所に狼、以ての外うゑにつかれて、其の死せん事をかへりみず、つと寄りて羊をくはへてにぐる所を、野牛追つかけたり。狼餘りに恐れて、いばらの中へにげ入りければ、野牛つゞいて追つかけたり。何とかしたりける、犬の皮をいばらに引懸けて、本の野牛にぞ顯はれける。狼此の由をみて、「こはふしぎなる有樣かな、犬かと思へば、野牛にてあんめる。」とて、立ち歸り野牛を召し籠め、「何の故に我を追ふぞ。」と云ひければ、野牛詞なうして、「御邊の

なほ足の法を試みんため、たはぶれてこそ。」と陳じければ、狼いかつて申す様、「たはぶれ事にこそあれ、いばらの中へ追ひ込みて、手足をかやうにそこなふ事、何のたはぶれぞや、所詮其の返報に、御辺をくひころし奉るべし。」と云ひてほろぼしぬ。其の如く、さたなきものの身として、さかしき人をたぶらかさんとすること、蟷螂が斧を以て龍車に向ふがごとし。うつけたる者はうつけて通る様なり。

第十一　鷲と烏との事

或鷲、餌食のために、羊の子をつかみ取つて喰らふ事有り、烏是れをみて、「あなうらやまし、いつわが身の身として、何かは斯様にせざるべき。」と、おもひおこし、「我も。」とて、野牛の有るをみて、つかみ取らんとすれば、野牛の毛は、ちゞみて深きものなれば、脚にかへつて己がすねをまとひて、はためく處を主人走り寄りて、烏を取つていましめて、「命をたつべけれども。」とて、羽を切つてはなしける。或人其の烏に向つて、「汝何者ぞ。」と問へば、「昨日は鷲、けふは烏なり。」と云ふ。其の如く、我が身の程を知らずして、人の威勢を羨む者は、鷲のまねする烏たるべし。

第十二　獅子王と驢馬との事

或驢馬、病しける所に、しゝ王来つて其の脈を取り試むるに、みな是れを恐るゝこと限りなし。しゝ王

譬へのあとのに、其の身を、あそこゝをなでさすりして、「いづくかいたきぞ。」と問へば、驢馬謹んで「若くこしゝ主の御手のあたり候所は、今までかゆき所もいたく候ひし。」と、ふるひ／＼申しける。其の如く、人の思はくをも知らず、慮だてこそうたてけれ。大切をつくすといふも、常にはれたる人の事なり。知らぬ人に、慮りだてするも、かへつて狼藉とぞ見えける。

第十四　野牛と狐との事

或時野牛と狐と、渇に臨みて、ゐげたの内に、落ちいつて水を呑みて後、上らんとするに由なし。狐申しけるは、「二人ながら、此の池の中にて死なんも、はかなき事なれば、はかりごとを廻らして、いかゞ上らん。」とぞ云ひける。野牛、「尤も。」と同心す。狐申しけるは、「先づ御邊せいをのべ給へ、其のせなかにのりて上にあがり、御邊の手を取つて上へ引き上げ奉らん。」と云ふ。野牛、實にもとて、せいをのべける處を、狐其のあたまをふまへて上り、笑つて云ふ、「扨も／＼御邊は愚かなる人かな、其のひげ程の智恵を持ち給はゞ、我いかゞせん、何としてか御邊を引き上げ奉らん。さらばよとて歸りぬ。野牛空しく井の木に日を送りて、終にはかなく成りにけり。其の如く、我も人も、難儀に逢はんことは、先づ我が難儀を遁れて、人の難を除くべし。我地獄に落ちて後、他人の樂しみを受くればとて、我が合力に成るべきや、これを思へ。



第十五　ある人佛いのる事

或人、一つの佛像を安置して、常に名利福徳を祈る。日にそひて貧しく賤しくなれども、更に其の利生ある事なし。是れに依つて彼の人いかつて、佛像を取つて打ちくだく處に、其の佛のみぐしの中に、金子百兩ありけり。其の時彼の人佛に向つて云く、「汝も此の佛愚かなる佛かな、我常に香、花、燈明を供へて、經、禮拜する時は、此の金をあたへずして、其の身を亡ぼす時、福を定めけるよ」と笑ひ悦びけり。其の如く、惡に極まりたる者は、其の自然を待ち、善に立ち歸ることなし、おさへて佛をわるが如く、惡を善にひるがへす樣にすべし。

第十六　鼠と猫との事

或猫、家の傍にかゞみゐて、日々に鼠を取りけり。鼠出で申しけるは、「何とやらん此の程は、我が親類一族も行方知らず成り侍るぞ、誰か其の行方を知り給ふ。」と云ふ。爰に年たけたる鼠すゝみ出で申しけるは、「音高し靜まれとよ。それは此の程例の猫と云ふ徒物、此の内に來りて、ゑじきになし侍るぞや、かまひて油斷すな。」など申しければ、各せんぎ評定す。「然るにおいては今日よりして、各天井に許り住むべし。」と法度を定めり。猫此の由を聞いて、いかんともせん方なさに、「たばからばや。」と思ひて、死したる體を顯はして四足をふみのべ、ひさしく働かずしてゐける處を、鼠ひ

そかに此の事を見て、上より猫に申しけるは、「いかに猫、そらだまりなしそ、汝が皮をはがれ、ふんかうのふたに成るとも、下にさがるまじきぞ。」と云ひければ、猫是非に及ばずおき上りぬ。其の如く一度人をこらす人は、いつも悪人ぞと人是れを疎んず。只人は愚かにして、他人にぬかれたるに如くはなし。かまひて末のよに人をぬかんと思はじ。

第十七　鼠ども談合の事

或時鼠、老若男女、相集まりせんぎしけるは、いつも猫と云ふ徒者に亡ぼさるゝ時、千度くやめども其の益なし。彼の猫、声を立つるか然らずば、足音たかくなどせば、豫て用心すべけれども、ひそかに近づく程に、ゆだんして捕らるゝのみなり。いかゞせん。」と云ひければ、古老の鼠すゝみ出で申しけるは、「詮する處猫の首に、鈴を付けて置き侍らば、易く知りなん。」と云ふ。皆々、「尤も。」と同心す。「然らば此の内より誰出でてか、猫の首に鈴を付け給はんや。」と云ふに、上臈鼠より下鼠に至るまで、「我付けん。」と云ふ者なし。是れに依つて其の度の議定、事終らで退散しぬ。其の如く人のはなはだて云ふも、畳の上の廣言なり。戦場に向へば、常につはものと云ふ者も、ふるひわなゝくとぞ見えける。しからずば何ぞ速かに、敵こゝを亡ぼさざる。腰ぬけの居計らひ、たゝみ太鼓に、手拍子とる、思案のことゝや申すべき。

第十八　をとこ二女を持つ事

或男、二人の妻を持つ。[illegible]一人は年[illegible]一人は[illegible]、或時此の男、[illegible]に行き[illegible]時、其の女申しけるは、「われ年たけ齢衰へて、若き男に、[illegible]たらふな[illegible]、人のあざけりも恥かしければ、御邊のびんひげ黒きをぬいて、白きばかりを殘すべし。」と[illegible]、[illegible]まち黒きをぬいて、白きを殘せり。此の男あなうしと思へども、恩愛にほだされ、いたき[illegible]ず拔かれにけり。又或時、若き女の許に行きけるに、此の女申しけるは、「我盛なる者の身として、御邊の樣に白髮とならせ給ふ人を、[illegible]世に[illegible]人[illegible]の白きをぬかん[illegible]、[illegible]れ[illegible]ことごとくぬき捨てる。されば此の男、[illegible]にてはぬかれて、[illegible]には、びんひげ[illegible]うせざるたり[illegible]。其のごとく、[illegible]、[illegible]き淫亂にけがれなば、[illegible]斯かる事を[illegible]べし。しかのみならず、二人の機嫌を[illegible]は、[illegible]常に深きものなり。[illegible]に[illegible]、二人の情につかへがたしとや。

第十九　かざみの事

或かざみ、あまたの子を持ちけるが、其の子己が[illegible]に、[illegible]、母[illegible]ていはく、「汝等何とて横樣にはあゆみけるぞ。」と申しければ、子供、「謹んで承る。一人[illegible]に[illegible]

なし、殺害見當所なくのこされ、然らば閻王あらはれ給ひ、それへ乘り來り、こゝに云ひければ、二つ
ぬさもなく、死にまさりけり、見れば、我が貧ほしと少しもたがはず、子供達一つ申しけるに、殺る債
にありし物が、閻王の行き給ふは、たてあらざれ、そはあるまじと、喚き合へれば、閻なりし居
たるにや、其時に至つて、我が身にくらべば、また一つもなし、人の罪をたば、言ふもの一つ、善も悪も同じ人
の心は、鳥も獣も、隔てなく、人の見るまゝに見たる人にや。

第二十　孔雀と鶴の事

或時、孔雀と鶴あひともなひて遊びけるに、いとやく我が身をほめて申しけるは、世の中に我が
つばさは鶴におよばじ、鶴に向ひて云ひけるは、汝が翼にもなきければ、鶴と賀をかはれば、
鶴答へて云ふ、「御邊の御羽は、あたかも錦に似て美しく、空をかけるものの中に、並ぶ者なき美麗の
ものかなと申すは、鶴も眞し、御身はいかなる王などにて、萬の鳥にまさりたるぞ」と言ふ。
こ、鶴に左右を付けたるの闘し、二つには、鳥といつは、高く飛ぶを以て其の身とす、鶴は雲を
いかなる鶴ありて、是れを見れば、つばさに風にして、其の身はたれもいにしへあはれなる、少しも
鶴にはいのちの、いかなる羽をかはさとや、「やさしき」と言ひけるに、孔雀は……
見事なりといへ」と言へ、此の事を思ふ間は、へりさがりて默す。其の後人として、我は……

なまじひなる時は、人のにくみをかうぶりて、はてにはあやまりをいひ出さるゝものなり。かまへて人たりといへども、道理を以て其の身をいさめば、用ゐざる顔をするといふとも、心には尤もと思ひて、聊かもへりくだる心あるべし。

第二十一、人をねたむは身をねたむと云ふ事

或御門、二人の人をめしいだし給ふこと有り、一人は慾心ふかき者なり、今一人はねたむ心深き者なり。御門二人の者に仰せけるは、「汝等、我等にいかなることをも望み申せ、後に望まん者には、前の望みに一倍をあたへん。」とのたまへば、慾心なる者は、何事にてもあれ、一倍とられんと思ふに依つて、初めにこひ奉らず、今一人の者は、何事にてもあれ、人をそねむ者なるに依つて、我にまさりて、彼にとられんもねたましとや思ひけん、是れも初めにこひ奉らず、われ先せず、人先せず、といどみ争ふ程に、時刻うつりければ、「とく〳〵。」と綸言ならせ給ふ程に、彼のねい人思ふやう、こゝなるやつめが餘りに、慾心ふかきことのねたましければ、彼にあだを望まんとて、すゝみ出でて申しけるは、「然らば我かた〴〵の眼をぬきたく侍る。」と奏しければ、「安き所望。」とてかた目をぬかれ、其の如く、ねい人と云ふ者は、人の榮ゆることをみては、かなしむかほにて、内心には悦ぶものなり。されば彼の者、己がかた目をぬかるゝといへども、兩眼をぬかん爲、先づ苦しみを堪忍せんとするに

やゝ此のねい人を上覧ありて、帝是れを憐みたまひ、今一人は恙なくてぞ罷り歸る。人におしかけんと思ふは、先づ我が身の苦しみと見えたり。血を含みて人にはけば、まづその口けがるゝとこそ傳へけれ。

第二十二　蛙と牛との事

或川の邊に牛一疋、こゝかしこゑじきを求め行き侍りしに、蛙是れを見て、心に思ふやう、我が身をふくらしなば、あの牛のせい程に成りなんとおもひて、きつとのびあがり、身の皮をふくらして、子供にむかつて、「今は此の牛のせい程なりや。」と尋ねければ、子どもあざ笑つて云く、「未だ其の位なし、はゞかりながら御邊は牛に似給はず、正しくかぶらの態にこそ見え侍りけれ。御皮のちゞみたる所侍る程に、今少しふくれさせ給はゞ、あの牛のせいに成り給ひなん。」と申しければ、蛙答へて申すやう、「それこそ易き事なれ」と云ひて、力及び、えいやつと身をふくらしければ、思ひの外に皮俄に破れて腸出で、空しく成りにけり。其の如く、及ばざる才智位を望む人は、望むことを得ず、終に己が無智故に、我が身をほろぼすこと有るなり。

第二十三　わらんべとぬす人の事

或時のことに弟子一人ゐたりしが、あなたこなたを詠めける間に、盗人一人走り來り、此の有様を見

ても心に叶ふやう、ある時、此の者のいじやうに思ひて、近くの井なる所に、盗人に望念するとて、いとかなしげなる気色をあらはにして、泣く〳〵ゐたりしが、盗人立ちよりて何事をか申しければ、其の童の申しけるは、いかにも悲しく候ふ、此の井に黄金のつるべを落し候ひぬ、心にうち悦び、まことに其の黄金のつるべを持ちて、水を汲むとてしる処に、俄に縄切れて井に落ちいりぬ。千度探しもとむれども見えざりければ、いかにして主人の前に申さんやと云ひければ、盗人是れを聞いて、面には哀れにかなしき風情をあらはして、心にさて云ふやう、いと安き事かな、我井の中へ入りて引き上ぐべければ、汝はたゞ待つべしとて、童にれを聞きて、やがて裸になりて井に入りけり。其の時盗人が置きたる物をとりて、井の中に此処彼処尋ぬる隙に、童此の物を取つて、いづちともなく逃げ去りけり。盗人はむなしく尋ぬれども見えざりければ、かゝる程に上にあがりしかば、置きたる着物も童も失せて見え侍らず。其の時我が身に怒りて、独りことを云ふやう、誠に道理の上より見れば、天道計らひ給ふ。其の故は人の物をぬすまんとするものは、還りてぬすまるゝものなりと云ひて、あかはだかにて帰りけり。其のごとく我も人も、前後初終をたゞさずして、みだりに人をたばからんとすれば、たとひ相手に恥しき物なりとも、却りてまけんと思はゞ其の悔いあるべし。何事もいたさぬさきに、よく来るさきを揣

得ざかんなん甲斐なき事、もつとも道理にかなふなり。

第二十四　修行者の事

或修行者行き暮れて、僅かなるあやしの賤の屋に、一夜を借りける。主人なさけ深きものにて、結構にとてなしけり。比は冬の寒き夜なれば、手足こゞへてかなはざりければ、我が息を吹き懸けて、あたゝめけり。やゝ有りて後、あつき食をくふとて、息を以て吹きさましければ、主此の由を見て、あやしき人哉のわざかな、つめたき物をば、あつき息を出して、あたゝめ、あつき物をば息にてさますことし侍る。いかさまにも只人ならじと思ひて、「只此の里に来れるや」と、恐ろしく思ひて、修行者を追ひ出しぬ。其のごとく、至つて心ゆるしたる者は、我が身に只是とする事、ただにん、わきまへず、ふたゝび遠ざかるなり。是れ怪の事をただにし、わきまへぬやからは、善を悪と思ふは、かへつて悪しと心得、かねて見れる心得よ。これを以て、打聞きは、愚かなるもの、うしろん、人の世に有りて、道に暗き事、彼の主が人の息のあつきと冷めたきと、わきまへかねたるに異ならず。

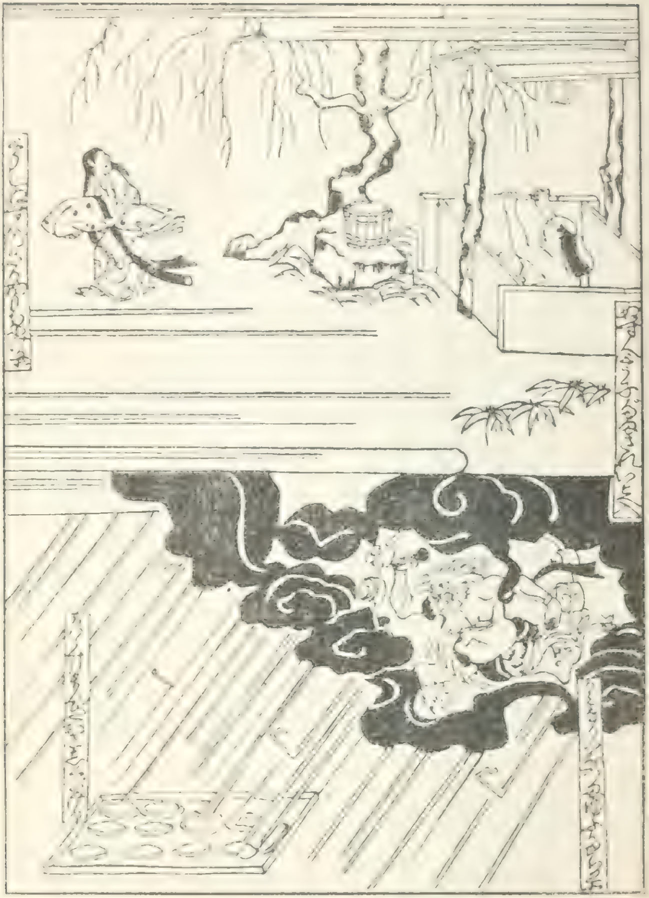
第二十五　鶏こがねの卵をうみし事

或人、鶏をかひけるに、日ごとに金のまろかしをうみける。主これを見て、日々に一づゝうむ事、

しき。然れども日に一ツうむことを堪へかねて、二ツも三ツもつゞけさまにうませばやとて、其の鳥を打ちさいなめども、其の驗もなし。日々に一ツより外はうまず。主心に思ふやう、いかにも此の鳥の腹には、大きなる金や侍るべきとて、その鳥の腹をさく。かやうにしていたゞきより、足のつまさきに至るまで見れども、別の金はなし。其の時主後悔して、本のまゝにて置かましものをとぞ申しける。其のごとく人の慾心にふけることは、彼の主が鳥の腹をさけるにことならず。日々に少しのまうけあれば、其の一命を過ぐるものなれども、つみ重ねたく思ふに依つて、終にあきたることは無うて、剰へたからを落して、其の身をほろぼすものなり。

第二十六　猿と犬との事

或る猿、一度に子を二ツうみけり。されば我が胎内より同子をうみながら、一ツをばふかく愛し、一ツをば疎かにす。彼のにくまれ子、いかんともせん方なく月日を送れり。我が愛する子をば、前にいだき、にくむ子をせなかに置けり。或時後より、猛き犬來たる事あり。此の猿あわてさわいで逃ぐる程に、いだく子を片脇にはさみて走る程に、速かに行くことなし。しきりに彼の犬近づきければ、先づ命を助からんと、片手にてわきにはさみたる子を捨てて逃げのびけり。故に常ににくみて、せなかに置ける憎まれ子は、恙なく取り付き來れり、彼の寵愛せし子は犬に喰ひ殺されぬ。幾度か悔め



ともかくも時に從つて、終に變りにくゐつるぞと、諸法は空にて、一字の一ごとくに觀念せり。其の能く人とし人も、今を觀じて思ふ者に勝れたり、愚なるをたゞにらみぶとも、たゞ此にあるのたとへに異ならず。これに從つて是れを觀ぜば、かれはなし、これは無しと品を選ぶべからず。譬へばひとしく思ふならば、天を瞻を興ふべきことぞうたがひなし。

第一十七　かはらけ悟道をなす事

或土器を作りて、未だやかざる先にほしけるに、此のかはらけ思ふやう、扨も我が身は果報いでたき者かな、或は田夫野人の手にかけられて、土ながらも、かくも心のまゝに折節生まれあはせて、人に愛せらるゝことのうれしさよと、よろこびける處に、夕立、彼のかはらけを見に來て申しけるは、御邊は何人にておはしますぞと問ひければ、土器答へて云く、我は是れ帝王の土器なり、いやしき者の手に至ることもなしと申しければ、夕立申しけるは、御邊は本を忘れたる人なり、今在俗にいえたまはぬ給ふとも、一雨あたまにかゝるならば、忽ち本の土と成りて、かまや、みきなへに流されぬべし。人もなげに、さしも給ふものかなと云ひて、俄に夕立、かみなりまじりて、彼の土器へふりかゝりければ、本の土とぞ成りにける。其の如く、人の世に有りて、さいみに誇るといへども、忽ち土器の雨にくだくるが如く、不定の雨にうちはれて、野邊の土とぞ成りにける。我が身も能く〳〵觀ずれ

ば、彼の土器に異ならず。恩愛の親しきいもせの中も、おもへば根本土なり、はかなき[illegible]のみ
愛して、當來の勤めをせぬ人は、無常の夕べにうたれんこと、千度悔ゆとも[illegible]。此
の事を案ずべし。

第十八　鳩と狐との事

或鳩木に、巣をくふ事あり。然るに狐其の下に有りて、鳩に申しけるは、「御邊は何とてあぶなき所に子をそだて給ふや。此所に置かで給へかし。嵐風のさはりもなし、穴にこそ置くべけれ」と言ひければ、鳩の[illegible]にて「誠に[illegible]」と心得て、其の子を陸地におろしけり。然るに狐、即ちにとりて[illegible]し時、鳩[illegible]、木の上に巣を掛けけり[illegible]。[illegible]人[illegible]、今上の[illegible]に申す[illegible]、[illegible]我が子[illegible][illegible]ば、狐申しけるは、[illegible]上に、[illegible]に頼み申すべき事あり、其のいけんをば、いづれの人[illegible][illegible]と申しければ、[illegible]、鳥[illegible]、下に[illegible][illegible]、[illegible][illegible]、[illegible]

給ふや。」と申しければ、鳥こたへて云く、「左より風ふく時は、右のつばさにかへりをさし候、右より風吹く時は、左のつばさにかへりをさし候、前より風吹く時は、うしろにかへりをさし候、後より風吹く時は、前にかへりをさし候」と申す。狐申しけるは、「天晴其の事自由に仕給ふにおいては誠に鳥の中の王たるべし、但し虚言や」と申しければ、彼の鳥、すこしばしわざを見せんとて、左右に首をめぐらし、うしろをきつと見る時、狐走りかゝりてくらひ殺しぬ。其の如く日々人に教化をなす程ならば、先づ己が身ををさめよ。我が身のことをば閣いて、人にけうげをせんことは、ゆめ／＼有るべからず。

第二十九　出家とゐのこの事

或人、ゐのこ一疋かひたてゝ、是れを愛しけるが、年ごろ有りて何とかしたりけん、彼のゐのこ俄に死することと有りけり。主是れをかなしみて、心に思ふやう、かかるいとけなきゐのこの死骸を、山野に捨てんよりは、とてものことに、寺のかたはらに埋まばやと思ひて、日暮に臨んで人に忍びて是れを取りつゝ、堂の邊に埋みける。やゝありて彼の寺の僧、是れを傳へ聞いて、「こは何者のしわざぞや、かかるらうぜき前代未聞ためしなし」と云ひ、彼の主を呼び、既にあやしくいましめられ侍りける。主更に返答に及ばず、赤面してゐたりしが、遁るべきかたなくて、此の出家の重慾心をさとつ

て申しけるは、「御邊の仰せらるゝ處、尤も道理至極なり、然れども御存じなきにや侍らん、此の爲のこの臨終、さも有りがたくいみじき志あり、それをいかにと申すに、後世をとぶらはれん其のために、持ちたる百貫のれうそくを、貴僧に奉るべしと云ひ置き侍る。」と有りければ、僧是れを聞いて、思ひの外にいさむ氣しきにて云ふやう、「扨も／＼かかる有り難き志は只事にあらず、我愚かなる者の身として、努々是れを知らずといましめ侍るなり。御邊は歎き給ふことなかれ、是れ程の志を持ちたらんは、たとひ商賈なりと云ふとも、必ず極樂へ生まれんこと、聊かうたがひ給ふことあらじ。われ諸共に、彼の跡をねんごろに弔ふべし。」とて、此の爲のこの心ざしを、奇特なりとて尊まれける。其の如く、慾にふけるものは、彼の出家に異ならず。人ありて音物を捧げければ、實にあやなくらして、理を非にまげることおほし。かるがゆゑに慾深ければ戒をやぶり、罪を作り、身を亡ぼすものなりとぞ見えけり。これをおもへ。

第三十　人の心さだまらぬと云ふ事

或翁、市に出でて馬をうらんと思ひ、親子つれてぞ出でたりける。馬を先に立て、親子跡に苦しげにあゆむ體に、道行き人是れを見て、「あなをかしの翁のしわざや、馬を持ちては乘らんが爲なり、馬を先に立てて、主は跡にあゆむことは、おきのめに水の見えぬと云ふも、此のことにや。」と云ひて通

ひければ、翁げにもとや思ひけん、「若き者なれば草臥れもせまじ」とて、我が子を乗せて、我は徒にて従ひけるに、又人どもこれを見て「是れなる人を見れば、壮んなる者は馬に乗りて、翁は徒にて行く」と笑ひければ、又子をおろして翁のりて、又申しけるは「是れなる人を見れば、父子と見えけるが、跡なる子は以ての外、草臥れたる有様なり、かかるたくましき馬に乗りながら、親子一つに乗りもせで、草臥れけるをかしさよ」と言ひければ、げにもとて、我が子を尻馬にのせけり。かくて行く程に、馬やうやく草臥れければ、又人の申しけるは「是れなる馬を見れば、ふたりの乗物なるに依つて、殊の外草臥れたり、乗りて行かんよりは、四ツ足をひとつにゆひあつめ、二人して荷うてこそよかんめれ」と言ひければ、げにもと思ひ、おろして荷ふ。又人の申しけるは「其の馬を荷はんよりは皮をはいで、かるがると持ちてくれかし。」といへば、「げにも。」とて皮をはぎて、肩にかけて行くほどに、道すがら蠅ども取りつきて、目口もあかず。市の人々是れを笑ひければ、翁腹立ちて、皮を捨ててぞ帰りける。其の如く一度かなたこなたとうつる者は、翁がしわざに異ならず。心軽きものは、常にしづかなることなしと見えたり。軽々しき人のことを信じて、ただのに移ることなかれ。但しよき道には幾度もうつりて誤りなし。事毎によければとて、うろんに見ゆることなかれ。たしかにつゝしめ。

第十一　或時、鳥、人にいましめをする事

或時、片山の邊において、小鳥をさすこと有り。是れを殺さんとするに、彼の鳥さゝへて申しけるは、「いかに御邊、我等體の小鳥をころさせ給ひ候とても、いか許りのことか候べきや。助け給はば三ツのことを、教へ參らせん」と云ふ。さらば「三ツの其の御訓へたまへ」。彼の鳥申しけるは、「第一には、有るまじきことを、有るべしと思ふことなかれ。第二には、求め難きことを、求めたきと思ふことなかれ。第三には、去つて歸らざることを、悔むことなかれ。此の三ツを能く守り給はば、誤りあるべからず」と云ふ。是れを聞きて、彼の鳥を放ちけり。其の時鳥、高きこずゑにとび上りて「さても御邊は愚かなる人かな。我が腹には、ならびなき玉を持ちて候ふ。是れを御邊に參らせ給はば、世にならびなき寶を給ふべきを」と嘲りければ、かの人手を打ちて、一度放ちし鳥をとらばやとねらふ程に、彼の鳥申しけるは、「いかに御邊、おろかなる事の一つにも、人は候へど、其の故は、只今御邊に教へけることを、早く何とか聞き給ふや。「第一に有るまじきことを、有るべしと思ふことなかれとは、先づ我が腹に玉有ると云へば、有るべきことかいかにや。第二には、求めがたきことを、求めたきと思ふことなかれとは、我を二度取らん事あたはざるを、第三には、去つて歸らぬ事を悔むことなかれとは、我を一度放ち、今又は惜しむ物故に悔むことこそ、又第三に悔むにあらずやと笑ひてとびにける。其の如く、人常に此の三ツを心にかけ

へるものなり。能を敎へ目のまへに有りといへども、これを見聞きながら、たもつもの一人もなし、あながち鳥の敎へたるにも有るべからず、人はけだものにも劣ると云ふことを、知らしめんがためとかや。

第三十二　鶴と狐との事

或田地に、鶴ゐじきをもとめてゐたりしに、古老の狐、是を見て、たばからばやと思ひて、そばに近づきて云く、「いかに鶴殿、御邊は何を尋ね給へる、もしともしく侍らば、我が宅所へ來らせよ、珍らしき物あたへん。」と、いと睦まじくかたらひければ、鶴、えたりやかしこし、と慶びて同心す。狐急ぎはしり歸りて、かゆの樣なる食物を、あさきかな鉢に入れて、鶴に向つて、「御邊は、堅き物を嫌ひ給ふなれば、態とかゆをこそ。」とてさゝげければ、鶴件の長きはしにて、喰はんくとすれども叶はざれば、狐是れを見て、「御邊は不食と見えたり、かかる珍物を、空しく捨てんよりは、我にたまはれ。」と、皆己が取りくらうて、「きつくわいなり。」と嘲れば、鶴甚だ無念に思ひて、いか樣にも、此の返報をせばやと思ひて歸りしが、やゝ程を經て、鶴件の狐に逢ひて云ふやう、「我只今珍らしき食物をまうけたり、來りて食したまへかし。」と勸めければ、狐すはや先度の返報かとて、鶴の宅所に到りけり、其の時、鶴、口の細き入物に、匂ひ能きくひ物を入れて、狐の前に置き侍りければ、狐是れを見

るよりも、このもしく思ひて、入物のまはりを、かなたこなたへ廻りけれども、叶はざるを、鶴「をかしの有様や、さても御邊は愚かなる人かな、只今めしの時分なるに、何とてまひ踊られけるぞ、くひはたしてこそまはんずれ、いで喰ひやうを教へん。」とて、件の口ばしをさしのべて、とく〳〵と喰ひつくし侍れば、狐面目を失ひて立ち去りぬ。其のごとく、みだりに人を侮れば、人また己を侮るべし。人を懇にせば、人また我を憐むものなり。是れに依つて、いか程もあなづらるゝとも、我は人を侮ることなかれ、たとひ愚かにするとも、へりくだりて従はんには若かじとぞみえけるなり。

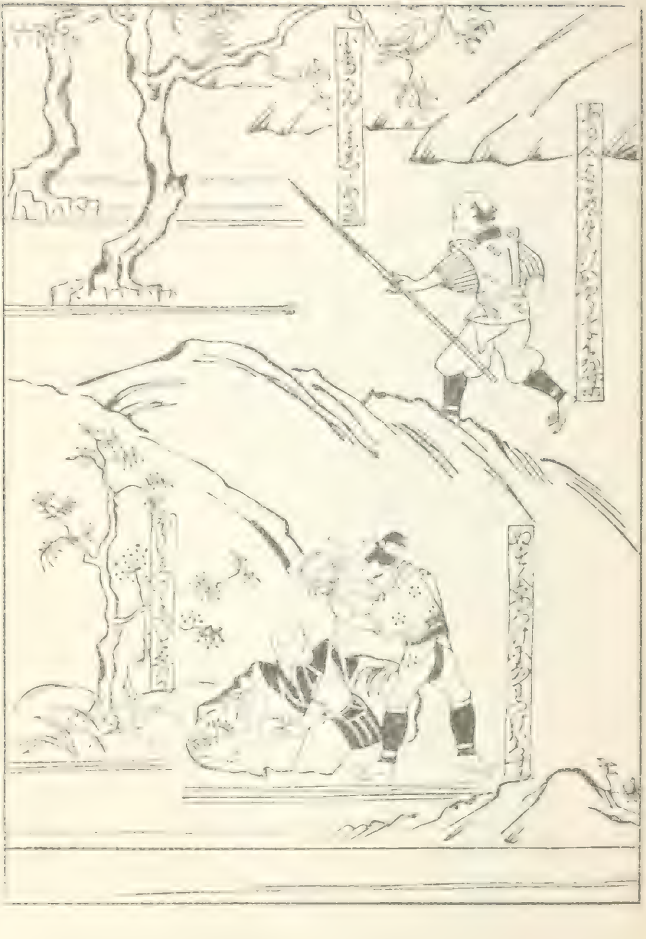
第三十三　三人よき中の事

或人、三人の知音を持ちけり。一人をば、我が身よりも大切に思ふ人なり。今一人は我と等しく思ふなり。今一人は其の次なり。此の三人と常に友なふ事年久し。ある時其の身に難儀出で来たる時、此の知音の許に行きて、助成を蒙らんとす。先づ、「我が難儀を助け給へ。」と申しければ、「為方なし。」とて聊かも助けず。我とひとしく思ふ人の許に行きて、「我が難儀助け給へ。」といへば、「わが身も紛らはしき事あれば、えこそ助け奉るまじけれ。糺し手門外までは、御供をこそ申すべけれ。」と許りなり。又其の次に思ひける知音の許に行きて申しけるは、「我常に申し通ぜずして、今更我が身に、かなしきことの有りとて、申すことはいかばかりなれども、我今大事の難儀あり、助けたまへかし。」と申

しければ、知音申しけるは、[illegible]なる人なれば、
紀し手の御前にて、[illegible]と言ひて申し出でける。其のごとく、我が身の[illegible]とは、[illegible]の
ことなり。我が身より[illegible]友とは、財宝のことなり。我が身[illegible]友と
は、妻子けんぞくのことなり。其の次に思ふ友とは、わが成すよき[illegible]、
我が財宝に助けられんとせば、いかでかは助くべき、還つてあたとこそ見えたれ。妻子けんぞくをたの
めばとて、いかでか助かるべき。還つて是れも罪業のさはりとぞみえける。此の知音、紀し手
の門外まで送りしは、ほか所まで送ることなり、[illegible]友とは、誠に紀し手の御前に
て、[illegible]其の時に臨みて、我が在生に有りし時、[illegible]
かましものをと、くやむこと疑ひなし。

第三十四　出家とぬす人の事

或法師、道を行きける所に、盗人一人行き向つて、彼の僧を頼みければ、見参すれば、やさしきことを
御出家たり、我ならびなき悪人なれば、願はくは御慈悲を以て、わが悪心をひるがへし、善人と成り
候ふやうに、おしへ給へかしと申しければ、これこそ我が身に安き事なれ、とて、[illegible]せられ
ぬ。彼のぬす人も、かへすぐたのみてそこを去りぬ。その後はるかに程経て、彼の僧と盗人と行き



あひけり。ぬす人、僧のそでをひかへて、いかつて申しけるは、「我御邊をたのむといへども、其のかひなし。きせいし給はずや。」と申しければ、僧こたへていはく、「我其の日より、片時もおこたらず、御邊のことをこそ祈り候へ。」とのたまへば、ぬす人申しけるは、「おことは出家の身として、そらごとを宣ふものかな、其の日より惡念のみこそ起り候へ。」と申しければ、僧のはかりごとに、「俄にのどかわきて、せんかたなし。」とのたまへば、ぬす人まうしけるは、「是れに井の侍るぞや、われ上より繩を付けて、其の底へいれ奉るべし、あくまで水のみたまひて、あがりたくおぼしめし候はば、ひきあげ奉らん。」とけいやくして、くだんの井へ押し入れけり。彼の僧水をのんで引けども、聊かも上らず。いかなればとて、さしうつぶして見れば、何しかあがるべき、かの僧、そばなる石にしがみ付いて居るほどに。盗人いかつて申しけるは、「さても御邊は愚かなる人かな、其の儀にては、いかゞ祈禱もしるしあるべきや、其の石放ち給へ、安く引き上げ奉らん。」と云ふ。僧盗人に申しけるは、「さればこそ御邊の祈念をいたすも、此の如く候ふよ、いかに祈りをなすといへども、先づ御身の惡念の石をはなれ給はず候ふ程に、鐵の繩にて引き上ぐる程の祈りをすればとて、かれの繩はきるゝとも、御邊の如くつよき惡念は、善人に成り難く候ふ。」と申されければ、盗人打ちうなづいて、かの僧を引き上げ奉り、足本にひれふして、「實にもかな。」とて、其れよりもとゆひ切り、則ち僧の弟子と成り

て、やんごとなき善人とぞ成りにけり。此の經をみん人は、慥かに之れを思へ、ゆるがせにすることなかれ、

伊曾保物語下 大尾

うらみのすけ

作者不詳

うらみのすけ　上

これはいつぞの事なるに、慶長九年の夏の末、かみの十日の事なれば、清水の萬燈とて、袖をつらねて都人、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、げに面白き有樣なり。爰に葛の恨之介、夢の浮世之介、松の綠之介、君を思之介、中天の戀之介とて、其の比都にかくれなき、色好みのものこあり。中にも葛の恨之介と申せし人は、一入心ぼそき者なりしが、本より觀世音の御ちかひ、あはれに思ひけることなれば、友とする人もさそはず、只一人清水へ參り、佛の御前にて起誓申し、其の後はたかれに腰をかけ、參りの道者を眺むるに、其の數更に知らざりき。爰や彼處に集まりて、思ひ／＼の物語り、是れはおすゞに豐國へ、いざや我等は祇園殿、扨は北野へいざ行きて、國が歌舞伎を見んといふ人も有り。東福寺の橋にて踊らばや、五條にてなゞさまれしと、我にひとしき友人や、引きつれ／＼伴ひて、何れかまよからましかばと、心の慰みは、浮世許りとうちしける、何をいはんも語らるゝも、恨之介は只一人、參りたる事なれば、いふべきといふも詞なし。恨、餘りの事なれば、音羽の瀧にたちよりて見るに、落ちくる水に杯をうかべ、さもいつくしき女房達、又若衆も打交り、手

まつつくる林の、さらに二なく取り立し、遊山所々開けし、世をおさめ、昔への狂へ皆人も、世に有難はなりまし、何に付けても数ならぬ、但し今は我が身の罪を察するに、電光朝露石の火の、見る内に消る身の、しばしの事もなし、とにかくにも力なし、過去の因果と思へば、懺悔の道理に任せ、我とわが身を慰めけるものなり、かくありける處に、田村堂の鐘にして、花その御色見えて、はつふんと明石の浦にあらねども、みやびやかなる人々の、あまさのみえぬ御やらんと、おもしろき音の聞えぬれば、酒宴半ばと見えにけり、と主なる後は清水へ、花の都を見下して、とさま／＼と囃する、愛宕桑けらなどといふ、當世はやる小歌にも、いまさらもころに似なれし、濱松の音はざゞんざ、今は盛りと見えにける。柳櫻をこきまぜて、錦にまさる事数の、散りも始めぬ風情かやと思へば、峯の嵐か松風か、それかあらぬか、尋ぬる人はあらねども、琴の音かすかに聞えけり。あら不思議や、國は此の内に、ゆゑ有る雲の上人などの御慰みも有るやらんと、其木陰にこのますれば、さあらぬ體にてあれば、十五六十七八、二十許りの女ばう達、色を飾り、吉野初瀬の花盛り、高尾立田の紅葉とても、かくやらん、其の中に取つても、琴をならべておはします、上﨟の御姿を見てあれば、年の程十五六と見え給ふが、紅の千入の袴を踏みしだき、肌には何かは召されけん、上には白き綸子に、色々の絲をもつて、ものの上手が縫うたりけり、御上前のくだりには、

[illegible]

[illegible]ます、高嶺の雪に消えて、[illegible]に茂る山[illegible]

[illegible]羽衣の松縁にて、[illegible]

[illegible]田子の浦、あまのつり舟ほの見ゆる、磯うつなみのはげしくて、[illegible]

ありとぬはれけり。さて帯のけつこうには、呉郡の綾にす[illegible]

くしをぞ縫はれたる、翡翠のかんざし[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]にん、ぐし君李夫人星のみや、越の西施、あしゆくぶにん、[illegible]

うたの、[illegible]

給ふ、御[illegible]

[illegible]姫、[illegible]三年をちぎる松風や、村[illegible]

、心[illegible]くこせ給へ[illegible]

風か、契りを籠めし虎御前、しゝぞの四郎が思ひきる、きによの妬、おはの御門にて、かのゑにゑのに別れつゝ、横笛に沈みし小宰相、薫官大夫敦盛の、鳥羽の御所にて見初めしより、入水なし、あぜつしの大納言すけかたの卿の御息女、わけに思ひは深草の、四位の少将の通ひける、小野小町や、ときは前、あやめの前ともに常盤前、佐藤庄司が次男の忠信と、同じよみなりたりしあとのまへ、ゆきじゆ御前、きよひめ、立田ひめ、佛御前、たいしよくわんの弟姫、江口の君に千手前、常姫ゆやの長とかや、東かむすめの十郎御前、よしはの卿の妹に悪死の女、こんよの草に中将姫、おさまよ源氏にみえけるは、桐つぼ帚木わか紫、末摘花の宴、空蝉かきつ花ちる里、須磨明石澪標、六十餘帖の物とても、是れにはいかでまさるべき。さうじて美人の其の數は、十二人と申せども、たとへば限り有るまじ。昔の人は目には見ず、耳にふれにし事ながら、此の上﨟の御形に、[illegible]ぞや増り申さんと、かの根之介がいく程思ひし、身の程をもうち忘れ、はぬけの鳥の風情にて、心もあきれて立ちにけるは、理とこそ聞えけれ。其の後、酒も半ばのことなるに、あそばせし琴を壁にもたせて置かせられ、いまやうの三尾線を、傳手きりゝとおしまはし、絲を調べてかんかとり、あいの手を彈かせらるゝ。扨しやみせんの結構には、心詞ものべ難し。えびのをの所には、雲居の雁の音信れて、廻をならべて古郷へ、歸る處をまきゐにす。さて絲くらの左右に、日月を明らかに、白が

みとて顧けすり、見るその中下りには、世の中は、夢か現かうつゝとも、夢とも更にあるでなければと
いふ歌を、かなもじにてかきにけり。扨又向の蒔絵には、都の内をぞかきにける。祇園清水賀茂春日
六波羅六角音羽熊野、豊国の大明神、三十三間大佛殿、稲荷の山のうす紅葉、醍醐寺東福寺、東寺西寺
四塚、年はゆけども老いもせぬ、むつだの河原や舟岡山、愛宕くらまやをのの里、伏見深草成道寺、
鳥羽に恋づか秋の山、さて山崎にたから寺、宇治の橋もと扇の芝、槇島にてさらしする、淀の河舟は
のぼのる、これぞやはたの御社、せきどの院、これたかのみこの御狩せし、きん野の雉は子を思ふ、
うどのに寒さまでがきの、いとだが原やいかならん。くほつのわうじ天王寺、石の鳥居に至るまで、
かなたこなたを取りわたし、ものゝ上手がまひたりけるが、ありをのべたる御手にて、ほも音氣高く、
引きなをし、八こゑの鳥にいつはりゐ、うたうた、まだ夜はよなか、しめておまれより、思ひ廻しね
は、松風もさびし、情は今の思ひのたねよなう、つらきは今のふかき情よ、いつさて花のえんとなら
うずまのと、逆陵頂伽の御聲にて、さもほのかに、うたはせ給へば、人間には申すに及ばず、誠に御
堂のみすもさゝめいて、ぼうしやもゆるぐ許り、空とぶ鳥も羽をやすめ、地を走るけだものまでも、
ことに聞心ありていよ〳〵恨之介が心も、春のあわ雪きえ〳〵と、消え入る許りに覚ゆれば、
ぜに理こざきこまける。やゝ有つて恨之介思ひけるやうは、いかさま此の御方様の、ゆかりを尋ね

はやと思ひ、まくの邊に立ちよれば、二十許りの女房たち、若しや人なと見えし所、つと取り寄せてし人や、さる上臈達の此所に、近くよらせたまふは、何の御用ましますぞ。と、顔に紅葉ちらしければ、根之介申すやう、御理はさる事なれども、我等田舎の者なれば、何のおもはくもありし事に候へば、難きてうしき花のやうなる御方様たちを、まのあたり目にとどめたりとも見參らせて、我等が道に疑ひもなし、物語にのみ聞きし雅の人、若き時のさうらひぞ、御免あれ。とぞ申しけるが、あまりに立ちよりけれ、下なる流石に都人、あざ笑ひしてこそ立ちにけれ。根之介思ふ樣、色を見することあるは枝を見しことを花を注ぐれ、かのあいさつに取りついて、猶も聞はばやと思ひ、「かくいかに何方より御參りか。上らふ樣にておはしますか。と尋ね申せども、さる御方と許りにて、つゝみて更にあかさず。根之介思ひけるは、愛にて月日を過し、御歸りさましたなると思ひ、車宿の馬をかへ、されら給へる處に、やうやく日も入相の鐘も、今やと思ふ折節に、雲の上人達も立ち出でず、御代のこしを立たうの中へかき入れ、うちのりかへり給ふうれば、ただと思へ、其の御跡をしたひければ、何れも近衛殿の御内へいらせ給ひけり。其の後根之介は、つゐなる門にたちよれども、あたられぬ式にて、わか宿にかへりつゝ、亂心と成りぬれば、只狂亂のごとくなりて、ふつ／＼物をあふするに、我等いかなる因果にや、斯樣の姫を見參らせ、何とも忘れかたもなし、雲に梯あるならば

ば、讀ても見よ、一筆の風のたよりにも、思はぬまでもと思ひけれども、跡さきしらぬ事なれば、及ばぬ戀とは是れをや申すらんと、伏し沈む許りなり。寐なんとすれどもうき人の、其の俤を思ひ袖の、涙もしぼす泣きあかす。根之介あまりの悲しさに、爰に思ひ合へり。昔より今に至るまで、力に及ばぬ事をば、何事も神佛へ申すならひの候と承り、其の上かの上﨟さまを見そめ申せしも、清水にての事なれば、叶はぬまでも一命をかぎりに、觀世音を頼み申さんと、身を清め申して清水へ參りつゝ、左のやうしに通夜申し、じゆずさらさらとおしもみて、抑御由は、田村丸の御建立、大同同二年に建てられし、萬の佛の願よりも、千手のちかひは頼もしや、由まの瀧ぞ落つれば、水上清き御寺とて、表こそ額にも、清水寺とはうたれたり。みづから幼少より、小弓に小矢の本末をしらぬし比よりも、千手の誓は頼もしく、今まで參りの利生には、我が思ふ一念を叶はせてたび給へや。我等過ぎにし十日の比、御前に參りつゝ、その下向の折からに、思ひのほかの花を見て、露と消えなん許りなり。かほどに申すからからは、いかなる佛神三寶も、哀れと思召されなば、心の内の妄執を、はらし給へや觀世音と、三七日籠れども、御利生更になかりけり。重ねて祈りけるやうは、いかに申さん御佛さま、爰にひとつのたとへあり。源中納言かねたかとて、三河國の國司なり、母は矢矧の長者にて、海道一の遊君なり、わくゝ寶も水の泡とて、其の數しらでもたれけれども、子供を一人も持

なされば、此の事を歎き、其の比同國ほうらいじの峯の藥師にて、利生あらたにましますよし[illegible]者共みなの藥師にこもりつゝ、男子にても女子にても、子種をさづけてたび給へ、此の願かなはずは[illegible]ならば、今色々の[illegible]も、いかにも思ひと聞えけり。佛もあはれに思ひ給ふかや、終に利生あらはれて、玉のやうなる女子をもつと、今の世までも聞えけれ。上みの御前に申すは是れなり。みづからが祈りしも、色こそかはれ其のむねの、やるかたなきはひとつなり。此の願かなはぬものならば、此のまゝ御堂にまろびふし、露ときえんは治定なり。しかりとは申せども、うゐてんぺんの世の中に、みらいの事は思はれず、適うけ難き人身をうけたりと雖も、罪業ふかき身と生まれ、悪心許り思ふのみならず、けつく佛のいましめ給ふ事をも、我が身のやる方なきまゝに、申すべきにはあらねども、もとよりたちの凡たを、すくはんための願なり。凡そ五かいに見えけるは、殺生偸盗邪淫妄語飲酒戒とて、色々の法衣を身にまとひ、彌勒の出世にあはんため、跡の掟になし給ふ、かれを保つだにも、破るはならひ有りときく。その釋尊の古も、しゆだら女にあひなれて、らごら尊者をまうけ給ふ。佛にだにも愛染王、神だにも結ぶの神と承る。いはんや我等もとよりも、賤しきしづのうき身なり、さのみににくくまさせ給ふなよ。此の願かなはぬものならば、佛も我を御ころしましくて、殺生戒を破らせ給はんやと、心をくだき、責めにせめてぞ祈りける。誠に御本尊、御納受やましくけん、四七日

いまはのきはに、御前より御物一巻、恨之介がまくらの枕に置き給ふ心ちして、あやしと思ふ夢さめて、七どいたゞきて披いてみる。さる程に下京五條松原通をの小路、はつとりの莊司が後家と尋ね行きて、此の事を頼むならば、必ずかなはんと有りければ、有りがたく思ひ、かの莊司が宿を、こゝのかしこのと尋ねもとめ、「清水の御夢想により、是れまで尋ね參りたり。」と申せば、ごけも此の由きくより、「思ふしさいの我も有り、みづから今夜の夢に、あすにもならば男一人、いづくともしらず來りて、清水よりの御夢想とて、我を頼まんに、其の人頼みたらん事を頼まれぬ物ならば、我をうらむなと、翁と現じ、夢かと思へば跡もなし。みづからふしぎに思ひしに、ゆめにもしらぬ人に、とはれ申すふしぎさよ。」と、恨之介を請じつゝ、酒などを侑めて申すやうは、「なういかに何のしさいに、清水よりの御告げと仰せられて、是れまでみづからを御尋ねにて候ぞ。此の上はそもじの御心の通りを、殘さず御物語を候へ。」と、したしげにこそ申しけれ。元より此の恨之介、願ふ處の事なれば、かの君を見そめ申せし時より、觀音に起誓の程を、始めより終りまで、事こまやかに語れば、ごけはきいて、「その御事にておはします、げにも左樣の御告げあり、包み申すに及ばず、事のしさいを語りきかせ申さん。いつぞや清水へ御參りの上臈こそ、我等が爲には主君なり、其の比天下の關白秀吉と申し奉るは、我が朝をば心のまゝにきりしづめ給ふに、御ゐせいを申せば、昔源平の御代は、今物の數なら

き、異國までも治め給ひけると聞えし天下の大將、三國を一つに戰ひをなし、さてわが朝の誹名には申すに及ばず、誠に綺麗の珍物を捧げ、唐人共の秀吉へ御貢を持ち参る事、上古も今も末代も、例すくなう聞えけり。爰に御一門に中納言秀次公と申せしに、御代をゆづり給ひ、關白と太閤と申し奉る處に、此の中納言の御運の末のかなしさに、大坂の人々が如何なる心や付きけん、彼の御前に於るとても、我が心のまゝならず、秀吉にはからはれ申すなり、所詮太閤をうち申し、天が下を我儘にせばやと思召し、御前近き人々を、一間所へまねきよせ、よりより御評議ありけるは、討ち奉らん事にて候へども、かやうなるは天の冥加、義の道を御背き候はば、いかで御利運候べき、御思案あれと諫言ありけれど、御承引なくの思しめしては、叶ふまじとて思召し立ちければ、皆に聞えたりとて、まゝ知れけるが、人々談せしとてに、悪念おこりけるとかや。されば此の事、密々にとはなけれども、天知る地知る、我知る人知る、壁に耳あり、岩の物いふ世の中にて、太閤の御耳に立ちければ、秀吉驚き給ひて、其の比御前ちかかりける、石田治部少輔三成を御傍近く召されて、いかに承り候へ、秀次が謀反の由を聞きつるなり。昔思ひ合はするに、源の頼朝は梶原が讒言にて、忠ある弟の義經をほろぼして、其の後後悔し給ふと聞く、いかなる事ぞ秀次が、我に逆心よもあらじ、いかにいかにと御尋ありける。三成此の由承り、御前の上を申し上ぐるは、其の恐れ多く候へども、中納言様の御謀反

か、風の便りに承り候へども、御氣色を計つて申し上ぐる事もなし。御意にて候へば、即ち只今申すべし。御謀反に於ては、うたがひは更になし」と、事こまやかにぞ申しける。太閤此の由聞召し、「其の儀にて有るならば、心にまかせ討つべきなり。親が子をたばかれば、子は又親にたてをつく、秀吉が作る罪にもあらじ、おのがなせるとがなれば、恨むべきにもあらず。時刻うつしてかなはじ」と、頓て聚樂へ使者をたつ。たばかりつゝもすかし出し、伏見の御所まで御出で有り、御供せられけるやうは、「關白殿への逆心は、夢にも更に候はず、ここうの讒を聞召し、誠ぞと思召し、かやうの御諚の無念さよ。身に於て、誤りは、露ほどもあらざれば、是れまで參つて申すなり。一天の君の上として、一旦武名のおそれといひ、又冥の照覽おそれあり、心に野心の候はば、いかでか是れまで參るべき」と、色々陳じ給へども、さあらば高野山へと上り有りければ、かの山へ落ち給ふ。然るところに申させ上る。御腹めされよとの有りけるが、終に御腹を召されけり。其の後に秀次の、日比近づけ給ひける、御子供の上臈を、中にも年若きの一條にて、上は一條、下は七條河原までも、小路々々を引渡し、十四十人を始めとして、花のやうなる上臈達を、三十二人つれ上り、三條河原へ引きすゑ、哀れ人のけなる大納言かくと、かの中納言關白の御しがいを、三十餘人の上臈姫子見て、さいごの名残と有りければ、上臈達の御なげきには、あはうかんやせのさまにて、御しがいに寄る姿を見きうさて、さす

さはよろこびのさはかなや、今のさまにて見申す事、誠に[illegible]世の[illegible]、今の[illegible]にて、御しるし[illegible]て、いづれも逢にむすびけん、其の中に取つて、[illegible]の実[illegible]しに、山[illegible]の[illegible]て、[illegible]設の御願[illegible]申ししは、今年十八歳にてまいりしが、[illegible]人の御前へ、只今のさまにて、御しるし[illegible]見奉るに、[illegible]思ひ出づるなり。此の君の栄楽の御所にて、みづから共を召され、いかに何れも聞き給へ、此の度を出づる事、じ[illegible]きやうの體を[illegible]んじ、[illegible]まの都をひらきつゝ、あやまりなきよし申しひらき候べし、それに叶はぬものならば、高野のおくの白雲と[illegible]えはてん身なりせば、此の程なれしむつごとを引き替へて、念佛に[illegible]手向けよ、我が身はいかに成りぬるとも、わごぜ達はさもあらじ、ねがはくは秀次と、同じ道にと思へども、かの高野山と申すは、弘法大師の昔より、女人結界の山なれば、いかに思ふもかなふまじ、今が別れか悲しやと、[illegible]もにいさめる秀次も、涙ながら出で給ふ。此の君の御詞、猶の末のあはれさを、思ひまはせば小車の、やる方なきは心なり、是れを見る貴賤上下の人々よ、みづからの最後を、其[illegible]流しに[illegible]、情の情を思ひやり、なく涙に[illegible]候[illegible]、[illegible]御[illegible]、[illegible]せん、其の後御[illegible]かいに向ひて[illegible]、

一[illegible]局南無阿彌陀佛と[illegible]ばねかひの岸にいたるうれしさ

一筋にやまたく契りし君をもろともに弥陀の浄土にいざなはれなむ
と語る間のひすゝめてたゞ弥陀の国をおやさき立ちもわれをまつらむ
と又弥陀頼の人はいく世の月ならばいさこそ西へ君とわが身を
さればたのみそふたの教へのまゝ、ならばほとけも君もわれもみほとけ
ふ八三こゝろ、あなきをたすくる弥陀仏一六すにかる我どもはまゝ
んめ南無阿弥陀とたのみたふの誓ひはこゝに入ほとけ前ひしまゝ
れはなれといふこゝの光に消ての身はつゆの宿たてはゞほとけ
に弥勒のかにらむ、又最ふ時ひあれば捨てしかし身ふ又だにかたにほれ
やはた弥陀をと申すすめる御仏の道を引きたまふれたのみまとに
本懐に三十餘人の人々、二言ひとよみ給ひければ、唐衣の御しかいら、うれしくも思ひけん、
おしう二十首を給ひけり。其の後こ住の御仏には、何れも念仏し給へとといひもあへず、衣の下よ
り守刀とり出し、まつさきにくけて、南無と云ふ最後にこゑし給ふ。其の跡の上臈達、是
れを御覧じ、あゝ羨しのついて哉とて、我もノと御自害なし給ふに、御乳母宰相も、又に年
ごろ青侍しも、只手はしたに至る迄、引くるしかいに抱き付き、是れは我もや我もや、いかなる

世に生まれきて、かかるうきめを見る事よ、悲しやつらき事ぞ、思ひつづけて御共に、しで三途の大河をも、召し具し給へと、[illegible]とて、なきてけり。其の時は、[illegible]時刻のこときたれり、此の[illegible]の有様、[illegible]へ[illegible]ける心、心にきえけれ共、[illegible]や[illegible]とて、[illegible]して、[illegible]といはれ人[illegible]申すも[illegible]矢の、[illegible]のつきし[illegible]と、申さる[illegible]は[illegible]、[illegible]御[illegible]年の[illegible]、片時も[illegible]申さる人をば多き中に、佐藤の[illegible]は[illegible]、奥州の人[illegible]木[illegible]常陸と申して、我等が爲には先祖の[illegible]、此の人[illegible]とともに、[illegible]におはします、上[illegible]の[illegible]には、木村殿は[illegible]にて有り、此の[illegible]の事なるに、秀衡を始め[illegible]三十餘人の[illegible]にても、御下々に至るまで、[illegible]の春の花、夕[illegible]の秋の紅葉とて、ちりぢりに成り給ふ[illegible]然るにかの[illegible]、我等[illegible]も[illegible]、彼方此方とかくし置き、此の[illegible]に忍びやか、浮世をいとひ[illegible]に、ちりをもつけずあけくれに、あらき風にもあてじだに、いとほしみ參らせ、月日を[illegible]へば、程なくむつの年まで、やうしたて申せしに、我がつまの[illegible]殿、有爲無常の習ひにて、なくなくならせ給ふなり。其の時みづからも自害して、しなばやなんど思ふ時、[illegible]の見給ひて、いかに[illegible]したりけん、みづからにひしひしと抱き付き、わつと叫び給ひて、[illegible]、[illegible]ふと申すは、二親の事は夢にもしらず、莊司二人の中をこそ、おやとは思ひ候ひしに、うき世あだな

る習ひにて、荘司にはなれ申すまじ、何とならんと便りなく、思ふにいとゞ御身又、じかいまし〳〵
候て、十にあたらぬ我が身を、何となれとや思ふらん、うらめしさよ。」とぞわび給ふ御姿、目もく
れ心もきえ〴〵と、きえ入るやうにぞ覺えける。流石思ひは切りぬれど、岩木ならねばえがたとて、
此の姫君のいたはしさに、じがいはついで沙汰もなし。荘司がことも思ひきり、あけくれお姫をもり
立て、思ふに甲斐なく十二の春の比、おとなしやかに此の姫の、形容麗しく、云ふにいはれたらっ
れば、人めかな忍ぶと思へども、園生に植うる紅の、つゝめど色のます風情、此の雛都に隱れもなし。
ある時みづからを近衛殿へめされて「いかにきくか荘司が後家、汝が家に木村ひたらが娘をば、やし
なひ置きとうぞ有り、あはれ其の姫我にくれてよかし、其の上名ある人の子を、いかで賤しきなぞつ
らん、我にえさする者ならば、草のかげなる父母も、ここぞ嬉しと思ふらん。」と、色を倶ぞ有る間、
力およばずかの姫を、近衛殿へ參らせて、みづからも共に參りつゝ、一日二日と過ぎ行けば、十四の春
まで由なき御奉公申しつゝ、此の姫おとなしくましませば、自らが妹に紅と申せし者にまへ奉っ
り、我が身につめての御奉公申すには及ばず、時々の御見廻り、かの姫君もをり〳〵は、なつかしく
聞なし、人を隔たる時も有り。かくてみづからは暇をいたゞき、御里は田かいに澳すとかゝ、人に安
ゐこんより、心を誠に盡にそめ、かざりのかみをそりおろし、身を月なみのよりかたに、なけこるも

しなをしと、只一筋に思ひ取り、花をつみ香をたき、朝に一座の讀經、夕は日頃の念佛怠らず、朝な夕なにおこたらず、念佛申して廻向をし、なにはの浦のよしあしをも、心にかけずうち捨てゝ、偏に後世のつとめなり。今とても彼の姫に、はこれ申す事はなし。過ぎにし夏の比、雲の上にて殿上人、女御后の御かた、五節の舞の有りし時、彼の姫を召されつゝ、琴の役をなし給ふ。もとより琴は上手なり、形は優にやさしくて、露重げなる秋の野か、女郎花かと疑はる。かほど優なる女房は、たぐひあらじの音信にも、なかば心もきえやせん、所詮此の女をば、雪の前となすべしとて、かたじけなくも國王よりえいちよくにて、此の姫御名を給はる事かくれなし。かくの如くの君なれば、いかなるあらきえびすまでも、一目見るとひとしく、戀ひこがれずといふ事なし。」と、始終の事共を、こまごまと語れば、いよ〳〵恨之介殿は、ほれ〴〵となり給ひ、心も空に浮雲の、飛び立つ様に思せき、聞くにつけてもぎく〳〵と、のどぎくめける聲のうち、思ひやあまる涙の袖、しぼるばかりに見えければ、理とこそ覺えけれ。やゝ有つて恨之介、いきつぎかねて申すやう、扨も御物語な、承り候へば、此方を頼み申すべきにて候はず、罷り立つ」といひければ、後家此の由を聞くよりも、まて暫し客もじさま、よし〳〵との物語は、さる事にては候へども、觀音の御告げと御申しの其の上に、いつからに不思議有り、誠に雲の梯は、わたるに便りもなかるべし、たとひたよりの有りぬとも、中や

絶えなん中々に、成りがたしとは思へども、みづから知らぬふせいにし、御文のたよりにも、なさせ申さん客の殿、御心やすく思召せ、いかにやなう。といひければ、うらみ斜におもひつゝ、硯にむかひみつ／＼の、心の思ひをくはしく／＼と、すみぞめの江の濱松の、濱の眞砂のかず／＼に、かきあつめたるもしほ草、[illegible]とて、[illegible]けるかひそあるらん、あかでまた、[illegible]と
かきとゞめ、[illegible]に渡しければ、[illegible]文を請取りて、近衛殿へと急ぎける。[illegible]かたにも著きしかば、[illegible]心にかけ[illegible]、いかにして此の文を、君に上げべきやうもなし、いかゞすべきと思ひしが、[illegible]殿の御[illegible]、[illegible]御年に、ならせ給ひし御かた様、かくれなき美人にておはします。御名はあやめのまへと申せしが、雪のまへと此の程は、[illegible]の[illegible]、[illegible]御中にて有りければ、此の御[illegible]、こゝのもと山の物語、[illegible]申し、其の後にいひけるは、上の中に[illegible]、詞にはきこしめさるべし、それをいかにと申すに、我等が主の[illegible]に、いか[illegible]清水詣での有りし時、いかにして[illegible]、[illegible]之介と申す人、是れも清水詣でして、[illegible]見てありければ、[illegible]道山ある、御姿をかいま見て、しづこゝろなく戀となり、[illegible]て、[illegible]思ひければ、清水に[illegible]つゝ、[illegible]しを[illegible]に、[illegible]けん、[illegible]に立ちよらせ、御じげんあらたにめ[illegible]て、[illegible]

猶人にまみゆるとて、我等が所に來たりて、しかぐとこそ申されけれ、みづからも此の人の前にて更にしらればこそ、觀音の告げと有りける上、みづからにも不思議の御むさうあらたにし、夢覺の間の夢あしさに、頃となる此の事を、申してはやと[illegible]し、是れこそ夢の[illegible]にも、[illegible]でもなし、いかにせまし」と語りける。あやめのまへに[illegible]し、「今もあらたにおぼしける、[illegible]のあまた[illegible]、只ならぬ當の事にてなし、佛神の御引合はせ、我らが子細にあらざれば、[illegible]りに[illegible]は、なしまゐらん」とて此の女を、あやめが[illegible]取り給ひて、[illegible]へ近づけ、うきを語りを遊ばして、後に此の文取り出し、始めよりの事共しかんと有りければ、[illegible]のまへ聞き給ひ、「觀音の御告げには[illegible]る事にて候へども、いかでお[illegible]し申すべき」と、[illegible]ければ、あやめ[illegible]し仰せけるは、「[illegible]ばさもあれども、[illegible]にひとしきかひあれ」と、重ねて申させ給ひければ、[illegible]のまへ聞召し、「松原のば、といひ、[illegible]といひ、返事申すものならば、やがて上の御耳にたち、[illegible]樣まで流罪にあひ、父母のかけたる父母の、名をなさる口惜しさよ、此の事思ひとゞまれ」と、ことをさらして仰せけり。[illegible]其の後にあやめの前、此の由を聞召し、「[illegible]、かれにも[illegible]しらざるき、[illegible]にて候へども、女人と生まれ出でしより、[illegible]かからぬはなし、由と云ふ由に[illegible]のかからぬ由もなし。何れのたとへは申すとも、たとへにつきもあらざれば、ここまでと申さる、

たゞ此の事あればこそ、ものゝふの手にわたり、死罪流罪の身となるか、又は水火のせめをうけ、くるしき苦患を見るとても、前世の業とおもふべし。但し千手の御ちかひ、不可称不可説不可思議の、くどくは行者の身にみてり。かくのごときの御じひの、あまねく世界にふかきと聞く、ことに御ほとけ引合はせましませば、其の難もいかゞあるべし、聞き入れたまへ、雪のまへ、いかに岩木をむすぶとも、此の事に付いては叶ふまでは申すべし。たゞ/\言葉をつくさむうちに、みづから身を捨て、なきみと成ると思召し、一筆の御返事をなしてたべ。と有りければ、あやめ殿にかたりければ、少し心もとわりなけれど、この上のしたゝめ宣ふは二つあらばこそ、さゝめには、縁あきらかにさとはれて、たよりのにしの文とこそ、観音のつげといひ、一つはそさまの御誓ひといひ、そむきがたくやおぼしけん、文をほそくと入れ給ひ、一もと所へたち入りて、とほきさきまでとゞき給ふに、一の葉をこそつくしけれ。

うらみのすけ上 終

うらみのすけ　下

風のたよりの、松がねの、松にことゝふ風もなく、蕭颯吹きたえて、空に鳴く音の鴈金[illegible]
君に我が姿、しらせてあらばと思へども、誰かは是れを知らせまし。唐土胡國の田面の鴈、蘇武が思ひの言の葉を、つくづくと聞きしより、哀れと思ひ知るかかる、漢朝の帝王に、萬里をへてぞ捧げける、今の我等が玉章を、情も有りて曉明の、月のほのかに此の文を、おぼろにそろりと音信れてたまはれしと思ひつゝ、かりに假ねて鳴くねにも、昔を思ひ出しつゝ、古歌にも、

秋風に初かりがねぞ聞ゆなるたが玉章をかけてきつらむ

か樣の事なども候へばこそ、鴈金はひたぶるに、思ひの程の玉章の、使をしけると承る。今の空行く鳥々に、口説きてみれども其のかひも、あら磯浪のうつせ貝、かた思ひなるあはび貝、我と碎くる我が心、いかにせましと思ひ、所謂千手の御前にて、見もし聞きもしする人を、御佛を頼みつゝ、祈らばやと觀念し、清水に參りつゝ、七々日の日數をへ、御じけんを仰ぎしに、哀れと思召し、あらたなりける御夢想に、なうなうよ枕をたけつゝ、すはばやいかにおん有りがたしと、手水うがひをするく

と、じゆずおしもみて御佛を、拜むに嬉しく御夢想に、任せて五條松原の、莊司が許へ尋ね行き、こけの尼公を頼みしに、いなといひける最上川、いなとな云ひそいな舟の、おしていくたび申さんと、詞をかへしていひければ、さらば御使申さんと、有るをうれしく思ひつゝ、硯に向ふ水莖の、水をふくまぬ其のさきに、我が目にこそはさき立ちて、しもに落ちける涙の雨、降りつもりたる墨の海、いか許りとか思召す。古歌に、

つくばねの嶺より落つるみなの川戀ぞつもりて淵と成りぬる

か樣にも候へば、筆の立てどもたど〳〵と、たどるやみぢに迷ひつゝ、心も空に〳〵、書き集めたるもしほ草、見るめもありそかひ有りて、取り上げ是れを見給はば、心を高ねの月にかけ、思ひあかしのうら波に、よせたるしるしも有らましや、又は前世の御佛の、誓ひと是れを思ふべし。一樹の陰や一河の水、汲むも他生の縁ならずや。まして斯樣の身となれば、あはれ浮世の習ひぞと思召し、御佛事も候へかし。若しお離き無きならば、今生にては身をけして、君の手馴れし物となり、朝には八重の帯、召さるゝ小腰の帯となり、お寢の閨に寄りそひて、くるり〳〵くる〳〵と、お腰にひやりと纏ひ付き、結びあはれと言ふなり。』夕の床にしづまらば、一つの魂取りわけて、魂は褥や枕の下、蟲と身をなして、よな〳〵、絶えず鳴きぬべし。魂は御寢のねみだれの、枕にかゝるつゆともなり、

元結と身をなして、くるりひつしとかみを卷き、朝な夕なにはなれまじ。若しまたむなしく成るならば、六道四生の其の内を、淀のよそへが水ぐるま、露ほろほろの涙にて、くるくるぜんぶくと、三途の川をもしたふべし。さあらん時に君にそむき、いかでうかびもし給ふべき。佛も斯樣の一念を、かなへぬ人をば殊の外、いましめ給ふと承る。これをいかにと申すに、ある經の文に、一念五百生、けんねん無量劫、生々世々に至るまで、つきせぬ恨みの深うして、ともに蛇身と成るならば、佛とはならずして、長く蛇道に落つべしと、古事までも思ひ出で、一方ならぬ思ひ草、葉末の露と諸共に、消えなんとは思へども、古歌に、

死なん只生きては人の憂しきにいやまだしなじ逢ふ事も有り

と、讀みたる歌なども力とし、つながぬ月日に立ち廻り、無常の虎の聲にも驚かず、電光朝露石の火の、刹那の程の世の中に、いか計りなる我が思ひ、積らば芥子劫磐石劫、すみつきのこふなりしを、是れにはいかでまさるべき。筆にもつきじ詞にも、のぶるに果てもあらざれば、古歌に、

水莖の岡のみなとのすの上に数書きすてて歸るかりがね

袖に落つる瀧の白絲うちはへて苦しきなかにむすぼほれつゝ

人しれぬ涙の玉の己のみ思ひくだけて年ぞへにける

袖にこそつゝむ習ひと思ひしに人めをもるもなみだなりけり

たよりなき人松風の音ならで戀しき雪のまへかな

古歌に、

うかりける秋のあはれの凄戀に顯はれそめてねにやたつらむ

背かではさてはつまじき世の中にいつを待てとてつれなかるらむ

心だにかよはば苔の下までもさぞなあはれと水ぐきのあと

わが筆に名殘惜しや／＼と書きて、あらめでたの穴賢々々と有りければ、雪の前殿此の文をこまやかに御覽じて、やさしの人の言葉の末、心を盡し給ふかや。げにも左樣に思召さば、はづかしながら御返事申さんとて、雪の薄樣に、こほろぎの墨すりながし、あそばしける。もとより此の姫、歌の道にはくらからず、古今萬葉源氏狹衣、伊勢物語の言のはを、あら／＼書き給へば、文章のにへしやうよ、筆勢のいつくしさ、中々申すに及ばれず。さらりとあそばし、あやめ殿にぞ渡されける。其の頃の莊司がごときを近づけ、かくと宣ひたりければ、よろこぶ事限りなし。斯くてこそは、はや是を持ち我が家にかへり、恨之介にしか／＼と、物語りして渡しければ、是れは夢かや現かや、夢にも逢ひ見ての後をいかゞせん、扨も雲の上なる御事を、思ひかくるもおそれ有り、まして御心

かたじけなき御筆を、しづのわれらになし下さる、一かたならぬ忝さ、一世ならぬ果報に涙せきあへなし、三ど、いたゞきにつゝことなきに、悦びける事かぎりなし。扨御返事をひらきて見れば、御手のみるに、青柳の露よりかゝる御水ぐき、亂れて花はほころびにける御言のは、つねならぬ上によそへてぞ、みるにやさしさますらをが、心の程の捨てかたく、夏きにけりとみゆる卯の花は、てにはの花とおぼしめせ、五月や一聲束なきに時鳥、今一入もきかまし物をと思へども、ねをなく蟲の哀れよの、風の便りに聞くからに、なびかぬ草のあらじと思へば、とこそ思へども、

偽りと思ひながらやわざあらん知らばや人のしたの心を

たのまじと思ひながらも偽りに待らで待つはこゝろなりけり

先だゝぬ身は同じ世にながらへて待るをみるもうき命かな

我さへに待ると人や思ふらん餘りになればいはぬつらさを

いかにせんいとふとも猶世の中を歎くこゝろのもとの身ならば

又はづかしながら一首、雫の前、

古歌に、

打ちつけに物ぞ悲しき木のはちる風のたよりの初めとおもへば

移植ゝ、はれの野邊のもと萩をおもふ人ともみつる今日かな
又は、傍に寝の枕の下の蟲、今こそ思ひ知られ參らせ候。

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜のながき思ひはわれぞまされる

か様の古歌を見參らせ候へば、御はもじなきはいとをかしくて、一首、筆のまゝ、

わがせこに見せんと思ひし水莖をそれともみえず雪のあけぼの

又同じく、

うら靡く末はをかけてはし鷹のとやのゝのあさゐ霜おふらん

晴れぬ日のはしけき日にたえぐの波してもたがかゝるかな

古歌に、

みよしのに鳴く雁金といづこにはひたぶるにいま君によりこん

おきつ浪八十島かけて住む千鳥こゝろ一つをいかでたのまん

現かしと口にもとはらぬ忘れ水絶えむやまでこゝろなるらん

思ひ出づるときはの山のいはつゝじ

下の句はいかに、御はもじとや、あらくと書きとめて、末はなければ恨之介、御文をみても、我の心

現なるもしはかられず、又こゝろの方をみれば詩あり、

乞ふ君ねがはくは含ぶわうなれども、よなぶことなかれ平沙落雁の作。

此の詩の心はいかにと問ふ折ふしに云ふやう、

天目わ……何年の雪を、かふほまよひぬべしきうしつの玉。

又、

雪鷺毛ににたり飛んでさんらんす、人は鶴氅をひきいて立つて徘徊す。

か様の御言葉いかにとしてか存じ候はねば、桂司がごけの前にては、うち頷きたるばかりにて、其処を立ち出でて我が家に歸り、誰にかは問はましと、思ひ〳〵申しけるが、こゝに細川右京の御内に宗庵と申せし人、恨之介と親しくして、常に此の家へ行きければ、頓て此の宗庵の宿へ、そは急ぎけれ。かの人折しも在り合うて、よもの雜談事過ぎて、歌物語をよそながら二三し出して、此の心を聞きければ、宗庵詩歌にくらからず、頓て歌の下の句を、朗詠にて引き出し、歌を吟じてきかせける。「其の歌に、

思ひ出づるときはの山のいはつゝじいはねばこそあれ戀しきものを

と、此の下の句にて候」と云ひければ、又、「詩の心は」と有りければ、宗庵答へて云ふやう、「始め

つがふ君ならはくほしと有る詩は、君思召しより給はば、なし鳥のたゞ婦の契りの深き事をまなび給へ、かくそのにもまた侍るは、空の上に在りける鴈金と云ふ心なり、此の鴈金と云ふものは、定めたる妻なきものなり、いく度も行くさきざきにて逢ふを妻とする故に、頼もしくなし、此くの如きの故を以ての詩なり」うらみ又たふ一末の二つの詩の心はいかに。」と云へば、宗庵のいはれけるは、「天山わきまへずの詩はしろしめされずや、つゐくの和歌に、

世にふれば物思ふとしもなけれども月にいくたびながめしつらん

此の歌の心は、今よりは誰に人目もはればにや、またまたの月にみれとの心も有るか、また雲居毛に二つの詩は、

物を思ふ陰にぞ人のあはれ事もあるにかたはなく道やなからん

此の心なるべし」と有りければ、恨之介は是れを聞き、「か程の事を知らずして、雲の上人を戀ひ參らせし事の恥かしさよ。」と、我が身に指ざしなして、「傍若無人のわうわくものの徒ら」と、獨言してゐたりけり。昔の人と聞えける、鳥羽の院の御内なる、佐藤兵衛則清は、あこぎと云はれし言の葉知らず、無念に思ふらん、浮世に有るもあるかひなく、此のふしんを晴れん爲、諸國修業に出でけるが、國々を廻りはて、いせの國に至る。あま人に近づきて、あこぎのいはれを具に聞き、扨こそ不審をは

れけれ共、今は我身は宗旨の、南むくはらして[illegible]て給ふ、此の宗旨になさりしは、舞曲[illegible]やの闇ふまい、倶に抱の光[illegible]、あへて心頭をたにわする、扨其の後はよろしき便りに、御[illegible]の数つもりて、名のみ有ん月の半ばに、[illegible]かにの緑にて返し、[illegible]ひの[illegible]瀬も有らんと存ければ、斜ならず御二存候に事限りなく、かの八月十五夜を待ちける恋の夢路をや、ひこの阿闍梨の三会の暁、みろくの出世を待つに異ならず、なかなか過月日も[illegible]申すだも、千年を待つにあひ似たり。されば此の光陰の餘日[illegible]有るならば、只一時にてもまいて、あひみんとのみ思へども、流石に思ふに叶はずして、一日々々と移り行く間、既に[illegible]日かすぎ去ぬとて、今夜ぞ秋の最中なる、名月に成りければ、狼之介は、荘司[illegible]の[illegible]に行きて、いかに申すべきは[illegible]の空、照[illegible]し御忘れ候はじ、かの際の御方よりの御文に、みえさせらるを[illegible]けける、御言の葉の末[illegible]に、秋の最中の月影に、みまてまし[illegible]有りけるが、いかにせまし[illegible]申しければ、此の由聞くよりも、時にも今夜は名のみあるな、月の宿の事なれば、月見の管絃の事ありて、いさ[illegible]らは御供し、かねての男の[illegible]のまにも、月にそうたる縁にのみて、かね[illegible]もとめて一度は、あふ[illegible]によりてものの、[illegible]葉の橋の[illegible]の、[illegible]はれを女に出でたたせ、薄衣取って引き被かせ、[illegible]ほ程なく近衛殿、こけは[illegible]にて秋風に、[illegible]のうらみを招きよせ、いまにたち帳殿、委に暫く待ち給へ、みづからは内に入り、[illegible]さまを窺ひ此の事を、委しく語り申して、御迎へに出づ

つまりは、いかにも〳〵と有けれ共、御仕の通りに吟味するが、何様に存じ其の罪を、其許に任せ申したが、と言ての事もいはれ合たが、しかりとは云ひながら、しばしの中より吟味の所に、たゞすみやかに吟味するなれ、我もいかにと答のふ八、ゆうともなるかなくば又、首尾にて引きも出づれ、つる仕出しまする事の有りた、又はかう〳〵なるといはれんこと、目のまへにて憎まへ、匪下〳〵調儀のともし〳〵て、此度いふべき事はしまさ、返す〳〵と有りければ、一目其の由聞くよりも、只其の敵に取ってお国せとても心得ず、我を我身のたとへ、御身の上より大切なり、其の上御心得ずとまで、も只一ほいかにと申ければ、御心安く思召せ、此度一とて往司かこには、御内をさして之人々に居るさこ猶、猿之介と申ものは、言葉に囀まれ過ぎて、あれこれ趣の模様、又の話なりしと言ひ、花の蕾にかゝれるに、今やく〳〵の音信も、待つことまゞ久しければ、錯ではもおとづれとなる耳にて、又の住の子と思ひしに、ことりとなりてもうゝめければ、根気招きも今まで、心むしたゝ思ひつつ、と云ての心を思ひしぬれば、それにてはあらずして、聞の行ちはれれて、さゝやくにてもはしける、報ぜば、ぱのまゝ又、誠なるなれと思ひしも、又引き寄せ一我ぞ、心に、聞かいふ道のでてたきとるとのかりのかり事に、此の夫婦のことはあれに、必ずしものを理で有り、われ等のが言事にあれなれて、あふせの中とぞなすて有る、ようの恋の記憶にも、軸と目でむつこと一、も、いきあは論用い、

ねしうするうれしやと、今一人を悦びける。かくて恨はかのごとより、御前いかにおはすらん、これの返事もなきやらんと、あんじける折節に、そなたのかたに立有りて「鶯が花の枝に音づるは」と宣へば、恨之介あつと思ひ「風にうらみを待つ鶯の身そ」と有りければ、内より扉をさつとあけさせ給ひて、いとうつくしき御手をさし出させ給ひて、恨之介が衣のそばを、とらへさせ給ひて、一間の入るべき由のはは、こなたのかたへと宣ひて、ほのかにねやに入りたまふを、もるべきかたと嬉しくて、是れこそ清水の御舞台はせぞよ、上らふの御かたをみれば、地主にて見そめし君にはあらず、いかなる御かたにてかおはすらんとあやしく思ひ、重ねし姿を見てあれば、嬋娟たるおもていに、わきるみだしの眼内、誠にたとへんかたもなし。古詩に、ようとう光にのぞんで月の出づるを珊し、また一笑をみれば花のひらくるににたり、ようやうの詩にあひたり、かみの門より上の、百ばひの袁れる所は、そも月の出づるが如し。又一度笑める御目もとは、花のごとくなるに似たりとある所、いま此の君にことならず。されば此の君の御せけるは、我をばたれとか思すらん、そなたの事を取りまち、こばさみともに使ひせし、あやかのまへとはわが事なり。心をかけたまふな、此方へまゐるなう恨殿」と宣ひて、随々の歎をことごとく打わしめし、九重のまんの内、八重の几帳を打過ぎて、紫宸殿の晶にぞ、いざなひ奉したりければ、彼の殿は見給ひて、いはけなる顔付、さまはづかはしくや

惜しけん、時雨るゝ秋の立田山、紅葉色づく嶺は更に、かみなび山の木の葉まで、匂ふ御風情、三室のうらもいつとなく、亂れし岸浪にこそあらん。秋は色をよぶ風のまに、一葉の葉のうらみと云ふに何かさま」と有りければ、かの末の男の御返しと思しくて、「君はうき身を風にまかせて。」と云ひければ、諸人かんじて、言葉にこそあれ、風の立ちぬればこそ、くずのうらみる事もおほし給はれど、風なくばうらみる事もあらじ、君を風に擬へ、根之介とは何ことて題じければ、又其の後に興のとに、各伴ひてくらせ給ふに、あたりの樹をみれば、金銀をのばせ、莊嚴しきくしやの玉衣の色も御々、扉には水晶をつらね、ともにあたりてたへの譬有り、誠に言葉にものべがたし。極樂世界又は龍宮城とはこのことか、おぼしける時かや、又辨財天女の住處も、是れには過ぎじと思ひけり。同其の後に興の有りにはあやめの前殿、中殿、奥の前殿、さて根之介とは両人にて、御所にゐけるそのほかへ、誠に情の色ふかく、千人にすぐれ目出たく、こぼれていよいよ思ひまさす。是れと申すも、偏に觀音の御利生の由緒と、有り難くこそ覺えけれ。かくて御かほなれば、かなたこなたと御國ら、中の前殿御所へ、根之介へあやめ殿の御こうけん有りければ、恨あまりの嬉しきに、かいうつぶきはゝ笑みたる有様、ただ一ふ方ぞなかりける。其の盃を根之介ひかへければ、あやめ殿かりそうひとすの御聲にて、高世江かりける、隆達節と思しくて、ぎんじ給ひけるは、

君が代にちよに八千代をかさねつゝ岩ほと成りて苔のむすまで

と、樋がたにうたなしたて、二三どかへしければ、其の杯を雪の前殿、おもはゆくかたはらに向ひて、打すさみのやうにかきよせて、かはらけ取りし言の葉の、露の情に心とけ、ゑがほのほばせはなはだしく、色がにゐでければ、紅殿大夫のしやうがんあさからぬ御聲にて、是ぞものうたつぶやき、

御みきも思ひもいれず梅の花常なるみちにたどりてまゐれ

と、唄はれければ、皆人申されけるは、紅殿は、常には小歌をも御口ずさみも候はぬに、妙なる御吟聲かなと、ほめられける。其の時、杯あがりて、あやめ殿にさし給へば、嫣然と笑ひ、一節とやとて、うけてひかへ給へば、雪の前殿うたひて、

君にわが久しき世々をたとふれば空行く月のかぎりしられず

と有りけれども、はづかはしくや思しけん、聲かすかにしてきくにたらざりけれども、あやしみたゞたる許りなり。さてあやめ殿杯、紅殿飲みをさめて、杯を取りければ、夜も深更におよびぬ、いざさらばとて何となう、座敷を立ち給へば、紅殿もお立ち有り、局々に入り給ふ。かくてたがひに本意かなひ給ふまに、御寢所を調へ置きければ、雪の前殿、梅の上に宿らせ給へ、斯くて恨之介が、よるの夜も常ならず、一代一世の間にも、見聞かざることは、はゞからじとは思へ

さる、其の實加にまうけん、おづ〳〵しとおへはひ上り、足ずりして頭に手をあてき、由言願音を
は思ひども、心にふかく風吹きて、只じは〳〵としりたりけり。さて其の後に根之介、何と申しけれ
まゐらせて、御さいうつり申しぬよ、わざとに物を思へども、よくたには更に申されず、しばしやすらふ處
に、雪の御前に申し、さこそひが月の入るさの山にも、露やおそらん事を有りければ、是はさもいかに
る御言葉やらんと、根之介は、かの宗庵にひし〳〵と思へども、爰にてはかなはず、いかゞせんと思ひ
ていくの事に由有りて、桂男のまうでゝ、言ふなる空に申されつとて、御ぎの上にだすつけれ
ら。さて御情にはおきせば、おなじく夜半をおはすなんと、わぶなき今夜のたはぶれなり。扨も
の御心、やさしき事にあるなる、我も其の御神へ〳〵、早にあらば日本六十餘州、我に大社まさの
ま作、佛ならば愛染王、神ならば結ぶの神、さ冬と隠し、三島伊豆箱根、此の神たちにいかにしても、我を
も二世までの給ふ、いかにとはふれ給ひけり。まづ八聲の鳥さへ、子丑の數事過ぎ、寅の
鐘の尽きまで、しほ〳〵告ぐる村烏、浮かれて床にはなるらん。つくにすぐ庭鳥の、しばしとこそ
此の夜半を、鳥にかはりての明けぬらん、鳥ないかはと聞くならば、いつまで、此の夜も明け
、鳥こうらみの介を惜しみて、雪の御前殿、
夜も明けば不寝にくはしとて人には鳥を先だちに鳴きてやなかなかりつる

暫しよの雲のせき守せきとめよ月日のひかり十日ばかりは

と詠じければ、東雲もほの〴〵と、明け渡る空に成りければ、千夜を一夜と重ねたる、御きぬ〴〵の袖なれば、互の名残の移り香し、今一人ふれてまし、あら情なの世の中かな、うらめしの別れやな、化しても空に有りもせで、歸らん事の悲しさよ、鬼の島に有りときく、かくれ蓑のかくれ笠、今こそ爰にてほしけれども、もとむる事もかたければ、天に仰ぎてもかひぞなき、斯くて程も有るならば、いかゞと思ひける間、おいとま申すこと有りければ、雪の前宣ふやう、「けふの名残のかぎりなり。それをいかにと申すに、世の中の有爲無常、朝に紅顏有りし身も、いつのまにかはもとの雫、末の露ときえ、夕には白骨となれる身、是れ皆もとの習ひなり。釋尊御佛と申せども、此の世盡きぬれば、ばつだいのなみと消え給ふ。いはんやわれら何をか定め、何をか期せさらん、未來永々たらんときにこそ、かさねて又もまみえ申さんこと」と、おさふる涙に袖濡れて、よその人目も恥かしき。恨之介も御情の切なき事限りなく、哀れながらへも有るならば、今一ども申したき事數々なれども、「さしていはれざれば、頼やがて一心なり、定めし事の定めなければと雖も、後生にては必ず参りあふべし」と仰せければ、恨もおさふる涙をちぎりすて、「誠に今の御名残、いつのよにかは忘るべき、刹那の妄執、くていこふの善根を、せう滅するとぞ承るに、ましてやいはん君と我が中の執着さぞあらん、いはん

やゝ暫く視まもりしが、此紙の裏を見て、漸打ゑみなどしたるといふ事あれば、来世いかならん、たゞうだことゝ申しける、慢かる心で見えなる。其の後恨は、心づよくも思ひ切り、御館を立ち出でて、御所中を忍び出で、四條室町にて夜も明けければ、人の面も白々と見えたりけり。御かたみと思ひ慰て、ひえのきん玉手箱、ふくさに包みあるう、いかなは、猶一人ぞゆかしくて、跡をのみ見返して、それとも申さでなかりける。さて松原の北の詞の辞に行き「扨も」と云ひ出すとひとしく、物をばいはず、只泣きにこそ泣かれける。こけも、「さぞ」とはいひながら、聞き分けたるかなければ、赤面してゐたりける。かくて恨之介云ふやう、「それに揃ひ御恩の程、申し上げんと思へども、此の情の面影の、眼にさへぎりぬれば、胸せき物もいはれねば、口説きて斯様に申すなり。萬事はすこしおぼしませ、重ねてよきついでに、御物語り申すべし。暇申してさらば」とて、おがやなきた帰りける。かくて恨之介が契りし程は、誠にかれがいの枕の上には、はるかに契りを千年の齢によそへ、うらないの褥の上には、ときはく萬劫のかめにきすと契りしかども、のがれざる別れに、あふとは偽へきこそとよ、それは夢か現か、物語は是れに恨が身の上の、やるかたなきと口説きにて、伏し沈みてゐたりけり。さても少なきまゝの御かたみ、身にさへ置にあて、みるに涙ぞ月明の、ふりくもりたる心の中、はたとやさむきかしきをと、のうばら我をや恥ふらん、かれとてもなき風情かや。皆はかなくもし

こそあれ、松風の村雨が、行平のかたみを見て、かく戀衣しほたれて、心からのこがれは、ことはりなれ。しいれたこしま、今の我等が、ふさいかやつかかりける處に、恨之介と二世の契を結び、日比もしく、おりしけん、思之介、浮世之介、此の人々は集まりて、ご近き比に恨之介の見えざるは、いかにしてかおはすらん、何方にもはかもの（か）、切めてもむなしくなるぞかし、ふしぎさよと申しける。一人の人が申すやう、いやさやうの事も候はず、かの恨之介といふ人は、色ふかき男にて、常に色にのまれし／＼て、身に及ばぬ色このみか、又は浮世の習ひとて、遊女遊君白拍子に、心を引かれて在るやらん、いづくへ行きかた知れぬことて、伴ひ二人出でたりけりと申すにても此の男、いかなる大事かりとても、しらぬ事に有らねども、何とも申けて有るやらん。戀之介いふやう、「仔細有るらん、るところにて聞きつる事の候は、過ぎにし此の事なるに、清水へ参りつゝ、地主の櫻の盛りに、南堂に咲ける花を見て、靜心なく戀と成り、浮身をやつすと聞きつるが、若しもさやうの事やあらん、ふしぎなりける事共かな」。先づ／＼浮世を深草の、宿に尋ねて行くかたを、とはましものと云ひければ、さらばいざとて行き向ければ、恨之介は此のほどの、思ひにばうじて草臥れか、さばかりなる襖の内にふり、前後もしらず臥したりけり。此の人々是れを見て、「なういかに恨之介」、おきよ／＼と云ひければ、恨かつぱと起きあがり、しきたいをしてければ、思之介浮世之介、恨之介を熟見て、「扨も御身

の姿こそ、古への形もなし、老いおとろへてやせこけて、物にたとへばおく山の、こけ猿が雨にそぼぬれ、ついつくばうたにすもにたぞ、いかで斯様に成り給ふ、旨趣を殘さずお語りあれ、二世までとちぎる中、何かはくるしう候べき、とく〳〵。」と有りければ、恨此の由きくよりも、「其の事にておはします、過ぎにし夏の比よりも、何とやらん心亂れ、時雨の空のうき雲の、うき身のやる方なき儘に、かなたこなたに徘徊し、一所不住の有様故、さながらよそなもうと〳〵しく、心に物のいらざれば、おのづからと打ちたえたり、御はづかしや。」と宣へば、皆人是れを聞くよりも、軈て恨が心ざしぞ、詞の末のうき雲の、うき身のやる方なきまゝに、迷ひつる詞のあやしさよ、つゝまず語りおはしませ。」恨之介は是れを聞き、御はづかしやと申せしが、爰にてこそおはしませ、萬扨申し給へ、此の姿にて候はば、浮世に有りても有りがたし。只今御目にかゝること、今生の暇乞ひ、御名殘惜しやとて、さいごの盃取り出し、二三返まで廻りけり、恨之介浮世之介、此の事をきくよりも、「いかなる事を宣ふぞ、我々斯くて有らんには、何かは叶はぬ事あらん、天下をのぞめる事は、それは思ひもよらず、但し、世の外の事は何にても宣へ、一命をもて賴み給へ、一命にかくる上、何か包み給ふべき、はやく〳〵。」と有りければ、恨之介は承り、こは忝き御言かな、此の上はつゝみ申して何かせん、過ぎにし夏の比、清水まうでの折節に、思ひの外の花を見て、心をつくし觀音に、是所

をふかく申しかけ、七々日こもりに祈りしに、佛哀れと思しけん、逢ふせの道も叶へしが、其の後便りも打たえて、二度のなさけも見もせねば、うき面影の身にそひて、戀をさゝふるこの上もなし、古き歌にも御座候ぞや、我ら一人、始めてこゝに有るとな思召しそ、昔人も、

逢ひみての後の心にくらぶれば昔は物を思はざりけり

と昔の歌も候へば、我等はかりとも存じ候はねば、恥かしともいひがたし。されば今の我々が身の評にては、かの雲居の花をみん事成りがたし。今は身をまかせてこそ、來世にて逢ひ見ん事を待ちまゐらめとて、打ち傾きて泣きにける。戀之介是れを聞き、扨もやさしき御心の程や、天地にも背き給ふべきにもあらず、世かいに陰陽あり、天地是れ又おなじ、日月も是れに比す、況しや人間に於てをや。此の道に身をすて、命すつる事理なり。されながら始終叶はぬ時にて候ふとも有るなれ、今は思ひの念はれ給ひぬ。此の上はさらりと思召し御きり候へかし。輪廻の業、ぐちのなせる所なり、あこぎと云ふは是れならん、いかに何とか思召しとまられかし。但し又先程に申しつる言葉には、我々かくてあらんには、恐らくは世の中に、叶へぬものは候まじ、命にかへてみんと云ふ、詞をいひ捨て候ぞや。まして此の道の習ひにて、思ひ切りとまる事、中々ことばになりがたし。たとひ當座はさも有るとも、返す念がさしおこらば、執着のきづなは、利劍にてもきられずと、申す事の候へば、此

の上は我々が待うる所は命を捨てて思ひ切り、近衛殿の門外に、安やかにこに立ちやすらひ、彼の輩のいつかたへも、御出での折節に、中にてうばひ申すべし。若しもおさふる者あつて、いかにばか、やるまじ。」と、追つかくる程ならば、我々五人の者共、太刀の目釘の続かん程、命をかぎりにふせぐべし。公家上臈の若黨や、下部のものが出でたりとも、何程の事かし出すべき。鼬いたちを追ふ如く、ありありぼりと縁の下、ついぢの小陰へおつこみて、なんなく首を取るべし。若し又のがれぬ者ならば、立ち並んで押肌ぬぎ、腹かき破つて死ぬべきなり。いかに面々御心中、さかまほしや。」と涙しくも、言葉をはなち申しければ、五人の人々承り、「誰もかうこそいひたけれ、よくこそ是れはいはれたれ。」恨此の由きくよりも、「忝き御ことかな、生々世々にもつき難し。」「但し、と申すに此の事は、あらきにて候ぞや。それをいかにと申すに、若しもさやうに有るならば、雲に歎きをかけ申し、其の上此の事しや給ふ、御かたがたよていはれなく、罪科のせめをうけ給ひ、うたてき事と成りぬべし。さあらんに於ては、我が心一つにて、多くの人を殺しぬべし。所詮我々一人が、むなしく成り候ふとも、それは前世の約束、とても我等に御ねんごろ、御情ましませば、さいこの文をおき申さん、此の文を松原の雌司かこれまで届けてたべ」と返す〲も、近づきぬ、念佛申し給へ、此の文は面々に届け申すべし」と有りければ、兜衛と戻ひ死ににけり。恨之介、雪の前殿を戀

死にしてければ、日比睦びし[illegible]人の人々、なく／＼野べに送り、[illegible]五條松原の[illegible]司が[illegible]行き、此の文をさし出し、しか／＼の物語りして、袖を絞りければ、[illegible]も此の由[illegible]くより[illegible]、[illegible]心[illegible]や、嘸こそは有りつらめ、無常の人の[illegible]、[illegible]殿の[illegible]に参り、后の前殿の袖を引き、この由を云ひければ、ひめは[illegible]き[illegible]召し「いかに／＼。」と有りし時、しか／＼と申して、かたみの文とてさし出せば、文取り上げ顔にあて胸にあて、暫しは絶え入る許りにて、人心地もなかりしが、少し心を取り直し、文のていを見給へば、[illegible]うけれ、昔はものを思はざりき[illegible]の黒衣、[illegible]、はかなきも[illegible]しや世の中に、はか[illegible]花の上なる露よりも、消えやすき身は石の火の、光に[illegible]はかなの、有るかなきかの心地して、又は秋風にうちなげき、なれゐしたづと別れつゝ、只一人のみ有りさめて、かひなき流れにしほたるゝ、あまの類にうち靡り、はれやらぬ日はいづくとなく、歎きますだのますみにも、あれかし夜半の雲の月、なれ[illegible]／＼は知る人も、なき身ぞかなし足引きの、山下水のあさましや、ながれ出でにし古郷に、帰らん事も思はれず、涙の川を渡るべき、我が身ならねばさゝがにの、くもでにものや思ふらん、あうて思ひのやるかたも、うき世のはてはうれしけれ。君の情はわするま

た、思ひ出づればさるにしも、暁のことの葉の、忘れもやらで懐かしや、只何事もことなる、こきの世かけて有りしゆゑ、うきよの秋の萩の葉の、露と消え行くうらみのはて、哀れとも見よ無き跡一件、とかうとゞありたり。蓋此の文を見給ひて、何れも定かならざれば、くり返して見るみれば、一首の歌あり、

萩の葉の露と消え行くうらみかへれなだれてみる筆の跡のみ

とありて、あらゆる昔恋しや、さるにても其の名月のさやかなりし、御ころかことしやよの、よるまで、こころぼへくて、

人とはゞ涙の玉の緒のきれて思ひくだけて散りにてにけり

必ず来世にては、一つ蓮の上にずし給へ、南無阿弥陀仏、六字、とかきとゞめけり。一つふさしの哀れの文や、是れ／＼は給へ、いやや殿と言へば、いや／＼殿は御覧じて、是れは夢かや現かや、夢とも定かなれさまへ下、まことにてさくらかなしかりし、ましてや雪の前殿の御事、誰故とかおぼすらんと、思へばといふもおろかなり、我こそ悲しくおぼしまして、いとゞ思ひし人かな、あはれはかなしこゝろのうちの、骨十とせ閨怨しう御ふみより御事は、御はまことに候へども、いうかひなき思ひにまかせ、一樹の蔭に立よりつゝ、他生の縁と承はり、いまの初めての縁ならず、無量劫より悪縁や、ふかく結ぶ御詮れ

ば、うらむる事もさらになし。又は我が身のいたづらにて、なさけにても候はで、九品臺のうてなに
より、約束のあればこそ、觀音の御引き付け、人のなさけにて候はねば、來世にてこそ逢はしまさ
ん」と宣ひて、心づよくは有りけれども、今の別れの悲しさに、さえ入り給ふとみえけるが、すでに
はきえ給ひけり。あやめ殿見給ひて、「是れは夢かや、扨いかになり行く。」と宣へども、更に答へも
なかりける。莊司かこけ是れを見て、あわてふためき取り付き、「莊司に別れし其の時に、おもふ道に
と思へども、此の娘故にうき命、今までもながらへしに、御身さへかく成り給ふ物ならば、誰に賴り
て何かせん、いきて千年萬年を、たもつべきよはひもなし、のぶべきもしらぬ事なれば、我もともに伴ひま
せん」とて、西に向ひて手を合はせ、念佛衆生攝取不捨と宣ひて、守り刀を乳の下にさしたて、うつ
ぶし給ふと見えけるが、息は卽ち絶えにけり。あやめ殿見給ひて、二人と見るはさはなきぞ、女とは生
まるれども、道をばいかで知らざるべき。あまつこやねのみことより、華族にそなはりか樣のことと、さ
も身にかけてなさされども、此の一まきと申すは、そも我がなす所のひが事なり、いざや三途の伴ひ
を、我もせめて。」と宣ひて、刀を口にくはへつゝ、うつぶしに成り給へば、其のまゝむなしく成り給
ふ。かくて紅は、常の前殿あやめ殿、ごけがしがい面々に、紺引きかけ何となく、心しづかにか
いしやくし、扨其の後に我も又、守り刀を取り廻し、紺引きかつぎ其の下にて、胸にさつこき少しあ

うし、かつぼしふせは数々有る、今は終になくなつて、むなしき形ぞ残りける。いづれも未だ若花、雲の庭にぞ散りにける。あやめ殿は十八さい、雪の前殿十六さい、ごけが年は三十三、くれなゐは二十一、朝の露ときえ給ふ。かかりける處に、あやめ殿のよはひなる、同じ月日の年なれも、なれむつび給ひたる、松の下枝の御局、我が宿を立ち出で、首信かはす君の葉に、「雪の前殿ましますか」と、尋ねいりて見給へば、人音更になかりけり。不思議さよと思召し、奥の間を見給へば、御衣かつぎふし給ふ。おこさばやと思召し、うちすぎぬ引きのけ見給へば、あらいたはしや此の人々、むけにそれたる御有様、みな紅の御はだへせい、こは何しにかくやらんと、急ぎ我が局の友人々に語らんと、立ち帰りと—へて、情人に此の由をかくと申させ給ひしに、上﨟局家の人々は、あわて迷ひて、是はといいかさる事ぞといふにおいて、膝に入りて見給へば、いづれも皆る姿なり。ふしぎといふる折節に、懐より見給へば、こまやかにかく玉章あり。是は如何なる文やらんと、取り上げて見給へば、色々の詞をつくしにつくして書きたりし、われ文のうちにはもほしやと書きあけん、心の闇こそやすらけれ。みな此の玉章を見るに、涙をせきあへず、古の事ども、柏木の右衛門の、はかなく成りし其の跡に、女三の宮のあと慕の、煙くらべと申すとも、是れにはいかでまさるべき。殊に一しほ中道の事は、聞こえず、御一門とふかへず、身の体に迎ふにはたり、けい断暇へて迎へにひとし、生を塵となる

はゝ、誰かしりてござんしよ、皆様にふるゝ舞まひで、あやまる事も重ねては、昔の面に外の欲を、早に取れ作りし罪が身にまとひつきて、おもかげに現れ、有るに、黒白の眼眩に、なほ是の世の事を思ふにつけ、こゝの変りはひとしりでたるに、上に無常の法の縁あらうにたゞしりかひ、妄執の種、ひとつに思ひこころしでの旅の路のならひに、人は上人の教導に、野辺の露に迷ひまして、黒谷への道を辿り、ひとへに後生を思ひすまし給ふ逢はれしわけも、委細かくに家に与へ人申しければ、都の外の夢いよ情の深さにも近き頃の聞きなれば、小雑情の人にやうに、かくばかりおもひてなからも、いざや浦の介にかゝいゝても有るには、何時に逢めまして、人々まで共にもなるは、そゝもこゝは人を、悲しと存じま介、さてみ是れを慶び、是ぞまことは申しなれど、浦之介の事は申したれど、そもそも私しも思ひますし、いざや我らも参りまして、黒谷に行きける事、都にかまれなりけるを、いとゞその都の空も、かくいる事を見物せ、言はゞや此事をこそ事めでたき事なるは、我はくさ見物に、参りたくも思ひますい、黒谷山に充満して、雲霞のごとく野も山も、錦の色にかゝやきて、まことに去年の色よりも、花と紅葉も此の時に、咲き匂ふかとあやしまるゝ、きせの袖ぞ床しき限に御仏の音に吐きて有るものゝ、みな御法の尊き給ふ、其の詞に云はく、阿字本不生、空仮中道の下化衆生、己身の弥陀、唯心の浄土、きんさいふしいずの妄執は、せつなに一念にしやうふつゝ、何を以てか二ふと申す。然

の時は法界衆生平等利益、うたがひなかりきといさゐ〳〵のこゑ、唱、南無阿弥陀仏と宣へば、二十

五の菩薩聖衆、雲に乗じ来迎ましますかと、有りがたく覚えし。斯くて見物さるゝ程の人、皆々涙をなが

むれば、三尊影向ましましけれ、虚空に音楽聞え、せんだんの香匂ひ、いきやう薫じ、華蔵かいの

風に和し、天にかゝやき地にみちて、極楽世界もかくやらんと、おもひける折ふしに、五色の雲一そ

のうちに、人々の俤、目前にあらはれて、西の空のうき雲に、むから紫雲の御迎に、なう〳〵あれは

有りがたしや〳〵と、うばたゝまでは袖を引きたみ引き、うらやみて涙をながしけり。みる人きく人

おしなべて、上古も今も末代も、ためしすくなき事どもと、かんぜぬ人はなかりけり。

うらみのすけ下 大尾

七人びくに

作者不詳

七人びくに　一名ざんげ物語

上

西國筑紫の傍、無間の鐘にあらで、ほつさうの山寺に、しのぶの山風の外す、妙法蓮華の花ざかり詣りしに、むかし友とせしやつれ、信濃國善光寺へ上るの侍りしに、前のあるじの語りけるは、此所にひとすぢのあはれなる事あり、かたりて聞かせ申さんと、此の年比心ざし入にかくれすむ尼一人あり、爾は如来の御前にゐるや、まさしくは今の念佛申して、年月を送り侍りける所へ、一樹の人の尼へ参りて、我が身の上をかたりけるは、人の身の上をかたりては其にまかせて、びくにの衆に向ひて、やさしく物語りわき、或時、朝起て、人の身の上を思ひけるに、うけがたき人界に、生を受けたりといへども、ようやくはら暮らうとして、いふにいふを過ぎ、はかなく日を過ぎ侍るに、あさましく心をもつくして、来世のくるしみを思ひつゝあるに、観念するならひは、生死のならひ、はかなき身をうけて、又はかりそめには、出離のはかりごとこにそ…もして、六趣の苦をのがれ、それぞれと思ひけれども、前世のさだめなるにや、またしき身に生まれて、こゝにて親のあたりにては、世をわたらし、又世の人に…とこし、…

きつかで、菩提の種にもせんと思ひ、然るべき所をたづねければ、おなじ國のせき川と申す所に[illegible]ゐたる[illegible]あり、しかも[illegible]人の往生の道なりとて、[illegible]侍をご始めける。さる程に五歳七道の[illegible]、清光寺へ[illegible]して、[illegible]る。しかる所に、年のほど三十ばかり[illegible]、清花寺[illegible]夜はゆやをかりてぞ泊りける。小夜更けがたに此のあま、[illegible]尼公にとひけるは、[illegible]御念佛は、有りがたき御事にこそ侍れ、いつより思ひ立ち給ふぞや、[illegible]にもはぶき給へかし、もろ共に谷の水を結び、嶺のたきゞをも拾ひて、[illegible]と申しければ、[illegible]いかなる人か、いかなる御[illegible]おこり候やらんと、隨喜の思ひをなし、御[illegible]侍らば、御心のまゝに[illegible]べけれ、と申されければ、かの尼なのめなふ[illegible]によりこそ、ともに湯をわかしける。しかれば後に來り給ふは、今阿彌陀佛と申し、あるじの尼を、古阿彌陀佛と申しける。此の二人の尼、ひとり水をくめば、又ひとりは薪をとり。かくのごとくなんぎやう苦行しけれども、慈悲ふかかりしゆゑ、露程もうらめしき心地も侍らざりけり。又長月二十日あまりの事なるに、比丘尼四五人、旅のくたびれに此の湯に入りて、又此の尼にすみかに宿をかり給ひけるが、秋の夜のことなれば、明しかねたるはにふの小屋のなにひにて、さこそ

ものうく侍りしに、ものゝ音、うちしめりわたる心地にて、いとゞ思ひけるに、かうたけ、なほ、
なるしの山の端に月さしのぼる、いたましの影さし侍りけるを、こゝろすごかりければ、ある比丘尼何
となく、

我にうとき月見よとてはふきささじ今宵かゝれのわび人の庵

と口すさみ給ひければ、又一人の比丘尼かく、

取まもる月には見つべしさてもさきは心の闇のいつかはれなし

またある方よりも、一首かくなん、

戴閒もる月のひかりの何とても心のやみを照らさざるらむ

此のうたに、六十ばかりの尼、是れを聞き給ひてのたまひけるは、心識になげきてもあるはあるは、心の闇にてはなくて、心の月明らかなりといへども、一念の雲かゝりして、生死の長夜にまよへり、なほふかき知識にとひ侍りしに、一寸の光陰を惜しむべき事は、千金にもかへがたしといへり、まことに惜しむべきは、一寸の光陰なる、

徒らに月日はすぎていたづらに人こそすごす月日なりけれ

とよみたまひしは、あるとき尼公此の山を聞きて、ことことに心ざしふかき人々なれ、かゝる人に近く、

て、一大事のようにして待り、聞き奉らんと、あひの障子をさしあけて居けるにおりさとしき[illegible]けはひに、御やどに侍る中のよき侍ひつよ、然れども、官にかなひ[illegible]はなしに落れ[illegible]と申す歌を侍るなれ、たゞ一度の事と思召し、是に[illegible]の御事なれば數多の人々、此川邊二人の[illegible]にても、いまだかやうの願人にあひ奉らず、みな〳〵一大事を歎きはしと[illegible]、其のふかい、かうしこみた給ふといはれ、いかなる人の北に御すれ、誰人も御むかしに侍るやらん、何故かくも給ふそや、皆をあさに御さびしく、すさまじき折からに侍へば、さあれ物語などし、秋の夜の長きをなぐさみ給へかし。」と申されければ、老いたる比丘尼仰せけるは、いとやさしく侍るものかな、さらばやう懺悔すれば、罪もはく〳〵ふかし、みな〳〵すぐ〳〵おなじて、罪を懺悔し給へよ。[illegible]の身をなれて、心にものおもはねば、またりはればけしく侍れば、一だいの經論には、あまたたびさとられし身にて侍る、しかのみならず、あるじの望みなり、かれこれもつて、中々とことうけし、然るべしと申されければ、次第々々に、さんげ有り、皆たゞならぬ人々の、身をなき者のになし給へる御事をかる〻し侍れば、七人比丘尼のさうしとぞ申けしなり」

○しら菊の事

此の時、「若き方より、御物語り侍れ。」と有りければ、三十許りの人の申されけるは、「いにしへの事

申さず、畏かしき御事なれども、みな／＼御物語り侍らばみづから申すべし。わらはは元は丹波國、桑田の陰里と申すなにがしの娘に候が、一たびみやこにて、六波羅殿のいくさにうち負かされ、國里を遁さそこのびぬ、みづからをひきつけ侍れども、なすべき事も候はで、終にまうしき身となり、軍の習悩の道なきぬ、名をしらぎくと申す者にて侍りしなり。其の折ふし名を得たる武人にて、その身あきたゞと申す人、四十あまりにおはします給ふ人侍り、みづから十九の秋の比より迄けとめ、心うしあさからず、偕老同穴のちぎりをこの侍りしに、或時この男、あさかへ下ふ事の候ひしに、みづからは、此をたつる用侍り、うきふしことの身なりしかば、その後、又おとの國の守護代の子に、上戦なにとしのぎと申す人に思はれ、かの國へつれ下り侍りける。此の人は下はじめまのにて、爲心やさしく情ふかく、誠に盛すぐれたる人なりき。此の人に思はれ、身をも人を恨まじく思ひまゐらせ候ふ事なしとおもへども、古人の言、恵心は戀なきに依りたに、かの間のあさましさ、田舎にまかり下り、田舎をまかり候ひしに、あたりの人申しけるは、其の人は常に、昔の御事をのみ御噂にてあそばせし、色ごのみの心まさりにければ、かの國にて思ひ侍れば、此の男をば前のごとく、今一とせ、自らに見えぬ、時めかなしとぞ、田舎住の事をうらみ、思ひ入りのよしありしを、なにはに住みし人、になりきたりて見えなし、ほどの心をやして、自由、しける涙の袖の露、いで乾く間もなきまゝに、ひは

空なる心地して、只いつとなくあづまのかたを詠めつゝ、忍ぶ心も今ははや、色に出でん許りなり。しかる所に、みづから召使ひたるわらはに、介のつぼねと申せしに、是れは都にとゞまりしが、彼のいにしへ人の有様をつくづくと見侍り、哀れに思ひて「かの御事忘れ給はぬか、それほどたへこがれ給ふならば、文給はれ、此のよし申さん事、いと安き御事なり。」と申せしかば、この男、おろかなることを宣ふものかな、流れをたつるならひ、只かりそめの契りなれば、などかかくといふべき」と、打ちなみだぐみて、衣引きかづきふし給へば、介のつぼね申しけるは「かのしら菊の御かた、みのの國へ御下りの時、みづからをめして御酌に侍りしは、女の身といひながら、ことにつたなげなる流れの身にて侍れば、たゞ一夜の心も心ならず、今一たびはとおもふ心もよしなく、宿のはからひとて、かやうなるぞやと、かきくどき宣ひしこそ、其の御言葉の末に、もし君上り給はば、我は忘れまじ、ことの便りもあらんならば、いよいよ忘るまじと、かきくどき御かたり候ひしなり。これ程の御思ひならば、たゞ文を給はれ」と申しければ、さらばとて、文をぞ給はりける。さて介の局は、人の思ひをやめんため、また久しくおもひみぬ君にもあひ奉り、つれづれの御物語をも申さん事の嬉しさよと、大津のうらにて便船こひ、しなのうらにあがり、急ぎみのへぞ下りける。すこしためらひ、さる人をたのみ、出であひ侍りしかば、みづからあまりの喜ばしさに、嬉しなきに涙ながし「何とて下り給

ふまで、尋ね侍れば「是れ〳〵の次第」とて、即ち文をさし出ししかば、「夢とこそ覺ゆれ。」とて、文を見侍れば、その中に色々の、ありつもりぬる言の葉を書き給ひて、奥にかく、

　東路のみのなる花にうつるとも馴れし老木のかけな忘れそ

と、此の文を見しよりも、涙にくれふたがり、きぬ引きかづき臥しまろびしを、とりあへつく〴〵と見給ひて、「いかなる人の事を申し來り侍るぞや、但し父母のいかにも成り給ふやらん、何とて我につゝみ給ふぞや、御かたりもなければ、いかさま心のおく深く、思ひのへだても有りぬべし。」と、あながちに問ねられしかば、つゝむとすれども、あまりにさては是れもみな、たゞさきの世のふかき契りの果しやらで、あさまの嶽に立つけぶりの、立ちゐつらふる心地して、身はいたづらになりぬともと思ひ定め、都に紅葉を折りたりし、面目もなき事なれども、いにしへ都に契りし人のかたより、文下りて侍ることよ、」との文を取出しかば、男さらに文をみんとて、いかなる氣色もなく、つく〴〵と案じかへして〳〵み給ひて、案じわづらひ給ひけるが、何とか思ひたまひけん、はら〳〵と涙をながし、「只切りすてん世にあらはれ、ましてや今までの契りなるべし、流れをたて給ふなり、何かくるしく候べき。」とて、かくなん、

　百とせ見し都の花のちらぬまにあづまの春はとにもかくにも

と、流れて昔物の冊に、都にいでて逢ひける人をかゝみいるまの川水に、身はかくし遣りつることに、のくはここに住有るへしと、夢にも更におもはさず、いねもをに福豊にて、われ身をのりしかば、さしこ顔の色に黒むつかしく、いかになるともとは思ひしに、男の心すさまじければ、こゝに過ぎて見さたるも、て叶はぬ身なりとて、介の局と打ちつれて、丈濃國なるとふらにけるを、いふ六日の返りとめた、帥の宰ふ侍りもせざりければ、程なく九日といふには、都の宿へ立上りける。さて介の局をつれて、今御上り。と申し侍りしかば、いかに御悦び有りて、我々も殊心ざしのやさしき者かなと、ほうろくもあるべしと思ひしに、案に相違して、頼忠宣ふやう、いと老木の華の色さへおとろへて、昔に似ぬ我がすがた、見えん事もはづかしくて、其のうへあづまのあだ人の、かほどに思ふまじく、わかれの別れにありつるを、思ひしらずもいかならん、あづまの花に続して、都への御心ざしは、なかなか鳥ならば比翼、木ならば連理の枝とは思へども、などか逢ひ奉るべきと、世の中の義理を重んじ給ひて、かく御かへり事の侍りしかば、はなれ鳥の立ちわづらふごとくにてぞありし。此のをのこも、しかは宣ひつれども、かねてよりの御したしみの事なれば、胸のうづみ火消えやらで、終に此の事をつゝしやせんかくやあらんと、思ひにあこがれ、やがて又の年、戀のやまふとなり、終に空しく成り給ひけり。此の人の常の思ひを聞き侍りしに、中々我に秋風ふかねども、嘸々わが思ひのごとく、又吾妻

の人もおもふことに、人のうきめを、我が身のうへに思ひあて侍ると、常なかく聞き侍れば、さては我が身もいかならん、うき世をよそになさばやと、このでがしはこそおもて、みるさましなし、たゞひたすらに嘆きかなしむ人の書捨とはよはふと思ひ、かやうに成りてさぶらふと語り侍れば、年たけたる尼ぜの給ひて、かやうにやさしき心、二人ながらに侍る事よ。あり上一殿は、世の中のならひなりそば、此の御子の文など見給はば、いつく読ましき心出て来、邪慳の心るぎをあき、よよいよ愛念ふかかるべきに、しかのみならず、都の花のさかりぬると、おはれ給ふこと、今の世には侍らじと思ふなり。又都の人は、是れほどに命を失ひ給ふほどのことなるに、うき人にあひもせで、人をはかなく思ひ給ふ事、とも老少の心には侍らじ。よの常の人ならば、ともかくもにこそ、まして言葉のすゑにも、御身は、たゞ東の若木の花に心おきて、老木の花を見すてぬのみならず、まして事を申すとも、おもはばこそ思ひまうらめ。又都へ御身も、ながれをたつる習ひなれば、又いかなる人にも、うとならぬ都の人には、あだに名を惜び、文を頼みに上りしに、いかに御心の替り給ふぞや。それ正に思ひみすれば、あのまにまにとくるべきにと、女のうらむべきは、ほのほかいだき上げ、明暮うらむつくも、いとかくは思ひもて、古今の代々にもさるなるに、御身の中で、是れをたとへの[…]ともいて、日来の注の玉、くり返しく、有りがたくこそ侍れ。昔より今にいたるまで、くまうき事[…]

歎として、後世のたねとは成り候へ、定めて三佛常住の、悟りをひらき給ひし事、疑ひは侍らじ。

四　左京の御書

三年此、三十餘り四十にあまりてこそ、人と生れ候ひしか、もとは闇一ツの身のみなれば、人界の生をうけひとて、うふのおすび、浅からず侍りしに、此の男年月にふるといへども、一人の子もなき事を歎き侍りしが、しかはあれども、いつからはかりて其の心も得ず、明暮うき世のあだなることを思ひ侍の世いかにと歎き、秋の夜の長きも、夜もすがら無常の心身にしみ、それぐすだく蟲のこゑぐまでも、我が身のうへに思ひやられて侍りしかば、神佛にまうでても、あはれ菩提心をおこし、うき世の世わたりを、おもひはなるゝ身となる事をのみ、祈りまゐらせしに、世にふるならひとて、いとしもなく睦まじく侍れども、夫婦のかたらひなりし故に、ひとりの男子をまうけし、此の子常なき、寄顔びれいなるうへ、心もおとなしく、賢しきまゝに、おさないけなる聲をし、父母にいだき付き、おとなしやかなる言の葉をのみ申し侍りしかば、もし此の子年比にもなるならば、いかなる者にもなるべきほどに思ひ候ひけり。みる人ごとに玉のべたりといふとも、是れには及ばじと申しならはしぞかし。父のいとほしみ、中々申すに及ばず、寵愛のあまりに、四つといひし冬の暮に、鶴といふ鳥を父手づから切つて、食はせんとし侍りしに、折ふしまないたの前に此の子侍りて、戯れあそびしが、

脇刀の柄おけ、をさない者の胸にさしたてたれ、うしろへ通る。此の子いたく驚き、聲をあつと上げ、父のいましめかと思ひ、今より後は、鳥などにも近づくまじ、あしき事をもすまじ、ゆるしたまへと申すまじ、萬仰せのまゝになるべう父御と、手を合はせ、聲を上げて泣き入りつるを、はしとあつまり、色々命のとゞまるよそほひ、都にても四方に聞えしほどの、名醫師をあつめ侍れども、なく事もはそくなり、次第々々によわり、あぶら火の細くなるごとく、神佛の祈りも叶はず、終にその曉、ふたりの手を取り、ねぶれるが如くして終りしなり。かく有りければ、夫婦もろ共に、さも魂も消えはてて、共にさけび地に臥し、人目もはゞからず打ちまさに、まさしく狂人の心にて侍りしに、父は暫くためらひ、涙をながさず、さらに「かゝる事にこそ」と、みづからなに刀をさへなげすて、胸をも宜はず、かれねぶりたるやうにておはせしが、我らすこしなおもはり侍る隙間をみて、かの脇刀にて自害し侍りしに、こはいかにと、みづから手に取り付きければ、兼ての思ひ定めし心なれば、また聞きぬやうに、心もとよりうしろへ通りはべれば、それかたもなく有りしほどに、やゝ日をへて、みづからも行方なきいひおき、七日といふ夜半の比、終に命むなしく成りしなり。あまりのうさに、其切りなる我は昔の其の何日に思ひに、消えはてばやと思ひ定めしに、ある人来て宣ふやう、「御身の心のかなしきはさる事なれど、二人の人を跡とぶらふてこそ、その世に思ひ切り給ふ身ならば、其

も仕捨るべきやうも侍らでましし、又かの人々もすでに魂二つなりてこそ侍るなれ、まことに枕にと思ひあすなはち、くれぐれとまはり魂一つにしてこそいふなれ。されば、おもしろくも是れも道理の至り所なり、とうぼうの智識にだに申すは、是れならんしの。そこにて、又その刀にてもとゞりを切り、賀茂川にすてたるも、衛のより法門をたのみ、出家し侍りしこそ。しかはあれども、二人の事のいまだおもかげにたちそひ、もとより暇もなく、かの男かの稚い者の姿、まみえし故、さてまた様をこそかへぬれ、心は愛執ふかきと思ひて、色々の修行もなし、殊更女人の身にしあれば、法華経一部を覚え、二童を供養し奉り侍りしなりと申されければ、老いたる尼君はきゝて、是れはまさに、観音の三十三身に身を顕はて、まことの妻となり、つるとなり、一切の衆生をすくひ給ふなり。法華経の心をはらはず見侍れば、けやけんの変うつくしきたまへ、もやうとて、仏人といふ菩薩となり、じやうぶつせんといひし二人の子と成り、十八の人を断し、父のおうかすくひ人にて、おもてに二人の姿とあれし給ふ。其の心を見侍れば、御身の妻となり子となり、鶴となりて給ふも、みな菩薩の化導のてだてならずや、あらたのもしや、羨ましうこそ侍れとして、皆々随喜し給ひけり。

○化かつらいの事

さて四十あまりに成りける尼、一人ありける、もとは都のものなりつ父は北面の何かし、のちのむきとに

申す者のむすめ、恥かしながらも花かづらと申せし女にて侍りけるが、ことの縁あるによりて、近江國の住人に、おくの山と申す、武勇のものと契り侍りけり。此の人と契りそめしより、周尺のま[illegible]たる、一時も離るゝ事もなし。月をこそ[illegible]、花をねたむ心地のみにて、互に月日のたつ[illegible]へ侍らず、あかしくらし侍ひしに、ものゝふの習ひなれば、契りし昔の筑紫の探題になり給ひて、既に鎮西へ御下り有りつるが、彼の奥山も御供なり。此の事聞くよりも、人の[illegible]、[illegible]がひに涙にくれふたがりて、いかなる[illegible]と歎き侍れども、[illegible]又武夫の習ひと、沙汰せられん事を恥ぢ、せんかたなく、涙ながらも都を立ち給ひけり。朝な夕な[illegible]にも、別れとなれば悲しきに、ましてはるか遠き筑紫のはての長たびなれば、いつ歸るべき日もしらず、しかも又いくさにおもむく身なれば、命も露にたとふのみ、風のたよりも[illegible]。又我が身も明けくれ思ひにしづみなば、戀のやまふと成りぬべし[illegible]、[illegible]思ひつゝ、打ちうれ[illegible]、[illegible]人目も[illegible]りゐることそ悲しけれ。此の人も心はさきへ行きかねて、思ひの色の[illegible]、[illegible]出でて、その日は山崎までこそ下りけれ。[illegible]、[illegible]ならば、迎への人を上すべしと、みづから

なさけなくさへ仕せ侍りしに、其の後は風の便りもなきまゝに、明暮心もとなく思ひ侍りしに、たまさかにて、
ありしけるに、さる又の年の秋の比、都に召出でし、豊田の三郎と申すもの上せ侍りし。あくがるゝ心
も心なとて、まづ内海の有様はいかにと尋ね候ひしかば、何事もなく安穏にいかくと申す事は
て候ひしが、いまだ国をさまり侍らねども、御事をのみおもひ、明暮ふかく思召し候へば、御むかへ
に上りて候ふとて、文をさし出しけり。うれしさ限りなく、やがて豊田とつれて、なにはの浦
とは申せども、ふれにし人にあはんため、心のうちのよろこばしさに、心ならずもいそがれて、はや
き船をたのみつゝ、急ぎ筑紫へ下りけり。二十日あまりに成りしかば、筑前国ぎふといふ所にとゞま
りて、まづ事のやうを聞き侍りしに、宿のあるじ、「いかなる御かたにて候やらん、此の程はいくさ
のやうなる御物語り申して、旅の疲れをなぐさめ申さん。此の比たび／＼の合戦に、かなはずの大将う
ちかたせ給ひて、此の程は敵の人々、行方しらずなり侍りしのみ、ちかくに城郭をかまへ、大将は
せぶり山に御わたり侍るが、又敵大軍をもよほし、此の四五日城郭既にかなひがたく候ひつるにと
り、大将軍は五千余騎にて、きのふせぶり山の御陣を御立ちあつて、今日明日に定めて矢あはせ有な
べし。」と申し侍りければ、みづからはいかなる事やらんと、胸ひしくと打ち騒ぎけり。まづ豊田を
遣はして、是れまで下りたる由を申し送りける。扨そのあと三日と申す暮ほどに、豊田色をもかへ、

たいへんともはや、「此の文御らん候へ」とばかりにて、涙にむせびて物もいはず、申すべきやうなしとて泣きゐたり。みづから餘りのおぼつかなさに、文をみんとせしに、又かどの外にあけなく騒ぎ候りしかば、いかにと驚きたち出でみれば、乗物一つかき来たり。隣りのふしんげに走りよりて、すだれを上げ見侍れば、空しき死骸を入れてぞ来りける。是れは夢かうつゝか、かくはるゝ下りゐるも、一たびは見えん事のうれしきに、うき旅衣よそにして、下りし事のかひもなく、情なき御事かなと、そのまゝ死骸にいだき付き、うらみては泣き、泣きては怨み、人目も恥ぢずして、かきくどきて死骸も離さざりければ、宿のあるじ「先づ其のごとく御歎き有りてもせんなし」とて、我にとり著き、死がいをもぢはなして侍りしなり。此の時詮なく〳〵申し侍りけるは、「そのふ際ほどにまうで著き、御文を上げ侍りければ、御覧じ中々なのめならずまし〳〵て、かのたまふやうは、あすの卯の刻に、いくさは開するなり、今宵の御下りの返す〳〵嬉しくこそ侍れ、くれ〳〵は此の文にと仰せ有りしかども、御陣の事をもきこしめしつるほどに、吉く退治し侍れば、陣中ことのほか勇ましき事し候、むね打ち騒ぎ聞耳たて侍りしに、敵御陣へかけ入りたり、用意あつてと呼ばはりける。はふの矢合は、敵味方高音聞、二手につくりて押しよする。味方わづかに五十騎、是れも二手に作りてたゝかはれけり。巳の時より始まりて、申の時までの戦ひなり。但うたれゝ、左右もしらず、手うたれる

も親知らず、入れかへ〳〵戦ひしに、ちかくは廣しといへ[illegible]
是れまで[illegible]奥山殿も、度々の太刀うつに、[illegible]
[illegible]
くつばみをそろへて、大勢の中へかけ入れば、敵むら〳〵[illegible]
[illegible]
[illegible]一人出で[illegible]、奥山殿[illegible]
に押しへだてられて、行くかたしらずとかたり侍りければ、[illegible]
んども、みぬ事の口[illegible]
[illegible]、奥山殿[illegible]
是非は[illegible]、豊田と申す者[illegible]、奥山殿御手[illegible]
と案内申しければ、いかなる[illegible]、奥山殿の[illegible]、是れに御入り候へと申されければ、[illegible]
だ生きていませばこそ、逢ふべきよし仰せありけめ、あら悦はしやと思ひ、急ぎあひ奉り[illegible]
いたはしや思ふにかひなく、大事の御手にてましませば、御枕に立[illegible]
さらに物をも宣はず、[illegible]に我を見あて給ふ[illegible]に、なにか御まはり侍るぞや。豊田にて候、

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
そのまゝ涙にむせび候ひしなり。さて此の御文を見侍りし[illegible]
しらぬ身なりしを、四五日の中には、かならず〳〵見参と書きとめ、返す〳〵と書かれたる、文の
と葉のむなしくて、書きおく文の数許り、[illegible]
[illegible]になしてみづからは、もとゞりを切り、此の十七ヶ年があ
[illegible]ければ、老いたる尼仰せけるは、「誠に佛のちかひにて、女
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ことはりなるらし、御身をすてゝ給ふうへ、あひかまへて〳〵、出家の人、稻麻竹葦のごとくに、
三帝よりも、道心ふかきれは、人は、稀に侍るなれば、是ぞ菩提の種として、七世の父母も、ともに、
几燒天に生ずる事、うたがひなかるべし。三苦随喜し、泪をながし侍りけり。

七人びくに上終

七人びくに　一名さんげ物語

中

○兵部の御かたの事

さて四十にあまり、五十にあたぶきたる尼、打わらひて申されけるに、みづからは、もと宇治の里に、しる事ありしよしにて侍るなり。みづからは、別してさんげ申さん事もなく、世をうらみ、人をかこつわざもあらず、みな〳〵の御物語のごとく、思ひなげきの道もなし。唯つね〳〵世間のありさまを見るに、春の花も風にはさそはれ、千里のあけも斯くやと詠じし月影も、暁の雲にかくれ、いかなる王位、世にほまれとりたる人も、たゞ一時の、夢のたはぶれとなり、貧しきも賤しきも、とゞまる事のなきは、みな世の中の習ひ、きのふ生まれし子も、けふはなき身となり、よろこびをいはひ侍るその日の昔好、はや歎きかなしむ事のみ眼にまへぎり、目のまへに侍れども、まだるかる昔の無明さまかなる身かなって、我といふべき身なる所に、我をほしむまのなほれたるて、殊にしたしふ所もなほ我をふくみ、一切の御教へに、自他のへだてなしと、つね〳〵聞き侍れども、

[illegible]にち、こと〴〵くりんゑの迷ひとなれり。此の[illegible]に[illegible]、[illegible]
あるは又、[illegible]、[illegible]、[illegible]うくわん等の、地獄をすみかとして、出づる期更になし。
[illegible]人間[illegible]事は、[illegible]、[illegible]
[illegible]人界[illegible]、一たび人身をうくることは、一眼のかめ[illegible]、[illegible]の穴に逢ふ[illegible]
人界に生[illegible]、佛法にあひ奉る事かたし。[illegible]佛法にあふといへ[illegible]、[illegible]
[illegible]身[illegible]野の[illegible]、風吹かぬ[illegible]、一度出家[illegible]、生死の
りんゑ[illegible]出で、彼岸につき[illegible]と思ふ人[illegible]、[illegible]切り[illegible]、定
[illegible]共に[illegible]世菩提[illegible]、[illegible]侍りしな[illegible]

流轉三界中　恩愛不能斷　棄恩入無爲　眞實報恩者

といふ[illegible]にまかせ、夫にいとまをこひ侍りければ、ゆるす事なか[illegible]、[illegible]心[illegible]に、今は
たゞいかにもして、[illegible]はかりごとを廻らし[illegible]と、思ひ[illegible]、髪をも[illegible]、顔を
ものごはく、齒[illegible]、手足の爪なども、切りもあけず、[illegible]、かたまゆ、いや
しきさまをのみし侍りしかば、神佛にまうでても、此の事をのみいのり[illegible]。あるとき西山東
山、京洛中の淺ましき[illegible]見侍れば、惜しからぬ命をたすけんとて、往來の人に物をこひ、[illegible]

者に尋ねはべる風情、ある禪の二［illegible］、或はあるまじ、或は日見えず、或は顔の、端なるもあり、或
はことといふ物を胸にあて侍るあり。是れはさて、いかなる過去の報いにて侍るぞと、知識にとひ侍
れば、因果經の心をみれば、みなことごとく、因果歴然なり。ひんぐうと貧の飢ゑたるものは、さきの
世に人に施をあたへず、財寶に常住の思ひをなし、佛法に縁をむすばざるむくいなり。盲目なるん
どの中からは、さきの世にて、目をくらませしわうわくの心ありて、耳の聞こえざるだでには、經論説法
といへども、世界のいとなみのみにて、一時片時も聽き聞かず、目見花見のあひのみあれば、物うから
き、聞く事を厭ひなり。かくのごとき人は、靈鷲のしやうにも、浮みがたし。

欲知過去因　見其現在果　欲知未來果　見其現在因

との經文、よこと に〳〵、そぞこゝろのうちにあることなくにて侍る。かく聞て、一ゝ人も見えて、
明齊いふにもして、男の心も取り、いときよく給ひかしと思ひ侍りけれども、其の心なかりけり。或
時は、たとつゆる事をすこしも、ものはりも切りまで、世とはなりけるき、いかなる寺へも走りい
らんと思ひたちき、けつく思ひもよらぬ事はなくして、恐ろしきさまにけれども、忠ひれて元有
りしか、あまりの心よまち男なれとて、光ー北野にまうでて、後世の道をいのり、朝の講讚にさま
つゝしみと、所勢も侍り、下向の折ふし、道のそばなる草村の中に、うれたる箱のありつるを、つ

くづくと見るに、始めて驚くべきにはあらねども、目もぬけ、はなも所々にて、あさましく、[illegible]、かたちもみえず侍りければ、

皮にこそをとこ女のいろもあれ骨にはかはる人かたもなし

とは誰ともなければ、すていつの日のいつの時、さうからもかくならん、東の山の端に日もいり、天日地に落ち侍るためし有りとも、などかこれたる頭とならざらんと思ひて、此のされかうべを袂に入れ、わがやに歸り、其の夜をとこの臥したる枕のもとに置き侍りしなり。暫し有りてねざめの時、騷ぎのゝ侍りとに、男の手をとりて、枕のもとに置きたるかうべをさぐらするに、こはいかにと、驚きの侍りつる時、語りに語り給ひてのことし、又手をとりてみづから顔を、よく／＼さぐらせていふやう、いづれか違ひたるぞや、たとへば、布はりたると、ぬ張らぬとのちがひなり、我に執心し給ふことなかれ、いかに夫婦にそひぬるとて、いくほどもなき契りなり、又二世とはかねたれども、われ人、過去の業因にひかれ、きやくしやうそくはうと申す事侍れば、などか来世のみちもとしく、同じ蓮となり候ふべき。愛別離苦のことわり、會者定離のならひの御事なれば、君も菩提心をおこし給へ。妙智大師は、しよくしよいんとんよくいほんと釋し、なんざんは、四百四病は、しゆくだきをもつて根本とし、生死の流轉は、女人をもつて其の源とすと宣へり。とかく御身も、此のたび

うかみ出で給はずば、いつうかみ給ふべきや。さあらずば、御身はいかなる人にもなれ給ひ、ありからか細く、うるはしく愛し、わが偽のけごの師識となり給はば、かみそりこぼし、うき世をすて、こつじきつだの身となり、心をしづめ等々由々、思ひのまゝにまうでて、一大事を思ひ入りたらば、何事かおもひはんべらん。」と、手にとり付き、終夜あながちにかこち、しやくりもあへず、涙ながらにくどきことわり侍れば、此の時をとこ申されけるは、「我も岩木ならねば、など此の年比にふるまひを見侍らねまし。いかに女の身として、一たんの菩提心おこるとも、終にはやがてことの縁にまぬてきあ侍るべし。こゝに物語のあるをかたつて聞かせ申すべし。此の比みやこにて世に栄え、御身とわらにかつて、たつ姉めでたかりしを、その男、何とか思はれけん、浮世のあだなることを明暮歎き、後世のいとなみをのみ深く思ひ入り、たびたび女にいとまをこひ、終にはもとゞり切り侍りけり。あまの道心深かりしまゝ、一切の五こくをくらはじ、五こくといへるは、鋤のさきにかゝりし、蟲けらをつき切りて、断くていでくる五穀なれば、しかしばいいては、殺生にも成りぬべし、又はまんぼいりあひみとなりなば、くふうのさはりとも成りぬべし。しかのみならず、なんぞん大師は、一飯のよねに、したたかあれば一はいの、身苦にまるとのたまへり。かくのごときの、もろもろのわずなる五こくを離れ、いはうらに暮されよりは、たゞ木食をと思ひ入り、木のみ、かやのみ許りにて、月日を送り

れければ、またもなし侍る事、なのめに過ぎたり。後には木食の御房とて、又はたゞあまた僧とも申しける。しか侍る故に、此の事天下にかくれなくなりつるが、何とかしけん、心かはり、年比いあるにしたがひてや有らん、木食も断念がちにぞなり侍りし時、此の木阿彌に、もとなれにし友の間あて、既に後世の佛に侍るものをと思ひ、此の御房を折々毎にとぶらひ、こまやかに、常宿をもこれけなさけて、時々ふることのつれ〴〵をもかたり、それをなしけりしが、あまりの親しみふかくなるあまりに、過去宿執にや、未だ晴れやらぬにて、終にはもろ〳〵見にくしなどと、沙汰せしこともあらはれて、こゝに夫婦のかたらひ、ふたゝびありしかば、人々あざけり、京洛中の物語にて侍り、只もとの木阿彌とは、是れより申しならはすとぞかし。是れのみならず、世の中の有様をみるに、人々あまた道心おこし、始めの程は、誠に木食草衣三衣一鉢の姿にて、生身の仏かなと人もたふとき人々侍れど、後々には、けさ衣もなげおき、當世のはやり歌、ちご若衆をあつめ、佛經しやうぎやうを捨て、ほこりに埋み、酒さかもりの人あまた侍りつるもあり、またはー向に在俗となり、うき世の中の交はりにて、くやしく入道などと、沙汰せられし人多く侍れば、御身にはなるゝのみの哀れにあらず、しかしながら、女の身にて、ーたんの人のしめしを聞き、あさ〳〵と思ひ立ち給ふとも、智恵よりおこらぬ道心なれば、ふつに嫁ぐまじと思ひ、立ちかへりては、御身の爲なれば、いかにも思ひ切り侍らぬなり。

おんなに、道心はと石のごとく、よこしまにはうしなして捨てやすしといへり。なまじひなる事をおぼし立
ちて、世にわらひ草となり侍らんより、たとひ在俗の身なりとも、其れほどによくきこしまさば、五戒
の中にひとつをもたもち、常座のようにておこたらず、ふうふうなりとも、後世菩提をねがひたらば、則ち現世あ
んをん、後生善所なるべし。いかでか出家にはまさりの候べき。ひたと思ひとまり給へ。其のうへ昔
の成仏、在家のうへと見えたり。ぼんなう即菩提の心是れなり。一代のきやう／＼、あながちに出
家にかぎるべしや。御心をひるがへし給へと申されければ、御ことわりの仰せにて申さは、女の身に
しはつかしく侍れども、年来のなじみの御あはれみに、よの中のわらひ草、もくれんの御物語、何よ
りおもひはとくこそ侍れ。さりながら、たとひ道心をおこし侍るとも、さやうなる菩提心、などか朽ち
しきことにふれて、ある経文とやらに、一日一夜の出家のくどくは、二十萬劫悪趣に堕ちずと、とかせ
給ふと承り侍るなり。しかれば、などか詮なく侍るべき。されども又、もとのまゝのことはり
なのとも、思ひそめたる事なれば、まどはし給ふ、我が通ひつるまでも、常にかこそ侍れ。其の
うへ、年わかきとき御事にてはあらねば、此のころはつゝみ候へども、今ははや誰かはいふべし、
里のことはざにも、ことにはするとなる、罪をまもり給ふ、それのとはを申して、あしかる
あらそひとての後、しなるたはぶれをいへ、わかき人の申すならば、是れに一心もとうらみ侍る

いづかたのに、つね〴〵こもりて侍るなり。この願はくは、みづからも思ひ立ちたることなれば、またよし御ゆるし侍へ。」と、又々くどきければ、しばしは物をも宣はず、案じわづらひ給ひしが、今ははことわりも聞え侍りけるぞや、我は男の身なれども、女の心にはおとり候なり。誠に人間のありさま、ばせをの風にやぶれやすく、水の泡のごとくなる身を、常の思ひをなし、いつまでかと企るべき。

おもひきる心のきはのなき人は生死のきづなきりぞわづらふ

といふ歌を涙ながらひき給ひて、手づからもとゞりを切り、みづからが膝に置き、財寶にも構はず、そのまゝ其の曉出で給ひて、遂に行方しらず、京にもやまし〳〵けん、みづから思ひのまゝの嬉しさに、君出でにし跡に又髪きりこぼし、諸國をめぐり侍る。」とかたりければ、よし此の比丘尼、是れを聞き給ひて、「是れこそ誠の出家にこそ侍れ、誰しもうき事にこりはて、のがれがたきには、出家遁世の人あまた侍るが、思ひ歎きの道もなし、うらみかこつべき人もなく、殊更ふうふの親しみ、よにことに、さながら偕老のちぎりなるを、思ひはなるゝのみならず、男の心したがはざりしを、色々い御はかりごとをめぐらし給ひて、御身の上のみならず、男の發心までもすゝめ給ふ事、今の世には有りがたくこそ侍れ、てんねんの彌勒もなく、じねんの釋迦もなしと、ただいゑんは宣へり。誰しもか

ことを、思ひ出なるべきよりなりけりとて、みな〳〵も、「有りがたかりける御事かな」とて、下女あはせ、隨喜し侍りけり。

○きく井殿御事

さて老いたるあま、御物がたり侍りけるは、「かた〴〵の古の御事承りて、みづから申さねば、すゝめたるしるしもなし、恥かしながら、ふしぎのありさまを御物語り申すべし。わらはは元は阿波國の者にてはんべるなり。年比にもなりしかば、きく井の右近と申す者と契りをこめ候ひしに、この男、ことの仔細有りて都へ上り侍りつるが、是れを待ちかね、明暮はたゞ都のかたを打ちながめ、都のかたはいづこぞと、人にもとひ、召使ひしものをあつめて、よそながらのきゝ言にも、餘りの物かたりもせられはせず、この事をのみかたり出し、思ひにむせびて、戀ひこがれ侍りしに、男三年ほどありて下りけり。あまりのうれしさに、人目をもうちすて、かどの外に出でて、「めでたく御下り」と申し侍りしかば、この男よしとも思はぬ氣色にて、中々と許りいひ侍りけり。あら思ひもよらずの姿やとは思ひしかども、京より何とぞ、心にもそまざる事にてやらんと覺束なく、二三ヶ月も侍りけり。然るところに、風のふくやうに沙汰ありつるは、「きく井殿は、京よりいと花やかなる女をつれてきましませしが、年も若く、物いひなどもさすが都の人なれば、風流びやさしく、春のかすみに柳のなびく風情

る女房にて、御はからひのまゝにおき給ふべしと申しければ、さては思ひあたりたる事あり、ひそかに門へ出でつる時のけしき、げに／＼誠にて有りけり。此の事もし定まり侍りなば、かの女を思ひのまゝ、にすむべし、ほかの都のものなれば、誰かれうどの者もあるまじ、としてみづから一門繁昌と、定のまゝそのふるのも、わらはが事こそいとほしけれなんど申すべければ、この女で、なほ、末代の女の、人の夫をとりたる手本に、引きごとはべるべしと、おもひうだめしが、また案ずるやうは、いやいや夫の心は、たくみふかきものなり、そのうへみづからも、三十にかたぶきたる身にてはたへれば、ゆくすゑの頼みも幾年もなし、世の中のあるならひなれば、わが身をいたはらむ心さへなきはらば、よし／＼ともかくもと思ひて、ひとりねの枕も涙にぬれ、暁のかねものさびしくて、月日を送り侍りしが、ある時この男、打ちしをれ申しけるは、今は何をかつゝみ候べき、京よりくだりし者を作ひ下りけるが、今更はるばるとかへすにもあらず、御はからひにおもやへにて侍る、御身にはなへ奉るまじ、返す／＼怨みを結び給ふなどと申しければ、みづからも、かねがねおもひやり、さるかなりと思ひ、世の中のならひ、何か苦しう侍るべき、都の人ひとりにも劣るまじ、いまだもならぬ給ふこそ、そのことのならひにてさふらへと、ゆるしげに申しければ、うれしくこそ侍れ、さすが名ある人すなほにて侍ることとて、男も悦びしなり。かくて月日を送りければ、此の男いひし言葉の末も

なく、かの女にしたしみ日々にかさなりて、我をそばめ、何事をいひ侍れども、うらめしき心になりけり。みづからも初めのほどは、人目を思ひ、身の行末を思ひつらねて、よし／＼我だにそれとて、そだつるならばと思ひけるが、あまりの情なき男の心かなと、色にはみえずながら、心のうちうらみ、女のねたらず侍りしゆゑ、夜をかさね日をそへて、此の事思ひし故やらん、うしろにおそろしき物出で来侍りけるを、よく／＼さぐらせし見はんべれば、うろこなんどのやうなるものなり。あらあさましと思ひて、又ある時鏡に向ひ見侍れば、髪もよれあひ、目のうちに光出で来、口もさく面も額には、角ともいふべきやうに、こぶふくれあがり侍れば、今までは人のうへ、昔物語のやうに聞き侍りしに、今ははや、次第々々に身もくるしう、一身は火焔の如く成りしかば、是れかゝる人おそろしうおもひて、後々は召使ひし者、みなさりはんべりければ、さては世の人もはや知りぬると思ひて、大息つき、常になげきおもひにし、月日を送り侍りしなり。しかはあれども、つね／＼かなし女房、たゞ一人時々打ちまうで侍りけるに、ある時あんぎやの僧きたりて、ろさい有りけるに、此の女房かの僧に申しけるは、「是の御方もねたみの故にて、かやうの姿にて侍れば、御りやくに衣鉢をさいのりて給へかし」と申しければ、「しさいなし。」とぞ仰せける。其の時みづからに申すやう、「此の僧こそ有りがたき人にて侍る、御結縁あるべし。」と申ししかば、みづから大きにいかり、「思ひもよらぬ事

かな、さうして今よりは、佛とも法とも聞かじ、たゞわれはが常に願ふ時に、此のすがたに進みな
し、くろ雲をたなびかし、紅蓮大ぐれんのほのほを出し、にくき女と夫を引きさき、假令の身にするな
らば、何の思ひか殘るべき。かくのごとくなるやうにしてこそ、諸共に三惡道へもおちて、生々
世々の間までいなれ、大蛇となるべき事をのみ思ふなりとて、大こゑ上げて怒りいかり、さけべば、そ
のこゑ山々谷々に響き、大地もふるひさけ侍れば、此の女房、大きに驚きけれ、あきれはてて侍りけ
る。其の時みづから申ししは、諸國をめぐり給ふ僧ならば、何事も御明にあ候べし、見參すと
申しければ、この僧、何事の侍るぞやと申されしに、みづから申し候ひしは、はづかしき姿にて、
はづかしき御事を上げ侍れども、さても憎きものゝ、わが思ひのまゝになり侍らねば、妬しのあまりやう
やあらん、教へてたべ」と云ひければ、この僧、「それこそ安き事にて侍る」と申されければ、いと
ならず嬉しく思ひて、みづから申すやう、「年比たましきもなれ侍り、さるほどの事は申すに及ば
ず、寐るまもなく、ほのほをいだき侍れば、夜に三度晝三度、一身より火焔を出すかと覺え侍るなり。
さある故に是れ見給へ、此のだきなけになれ、水を入れていだき付き侍れば、やがて水湯となり候へ
ば、いよいよ心くるしくこそ候へ。かの女をころして侍らば、此の苦しみもあらかじめやみ候べき
なれば」と申しければ、かの僧申されけるは、「いと安き御事なり、人をころすには心を向くるやうに

に、故一二三て、心を仰むけ侍らば、多くは十四五日、さては六日七日には過ぎ候はじ」とおほせしかば、「何とたのとも、仰せのまゝに」と申しければ、かの師宣じけるは「一切の事を思はず、一念も生ぜず、善悪を忘れ、思ふ人をもおもはず、にくき人をもしらず、生れたい臍に首をられんとする時のごとく、念々を放下し給へ。さすれば是れ則わ、己が本性本来の、あんもくあらはれ侍るなり。是の念願は、にくきものを殺すてだての第一と説き給へり。もしいまだ念々色々にしやうじて、頭に来る事あらば、其の念を失はずして、つくぐヽと此の念はいづくより来るぞ、いかなるものぞ、それんよくねんねんくゐの、四しやうをもつて、心を付け見給ふべし。さらに此の要念の源あるべからず。たゞ一家の修行にて、萬法一如なるべし、此の時一時に情きもいを打ちこみし侍るべしと、御教に侍りければ、この言葉を信じて、善悪の心をたゝきやめ、時刻のうつるもしらず、行住坐臥に、念々妄念のおこる時は、あるひは誦し、或は修し、或は人静かなる所をたづねて、それのごとく、色々にかぞへ来りつるに、さらに何の道理もなかりしかば、其の後十四五日経て、此の僧のもとを訪、「いかに情き候は。」と侍りしに、「何とも分別なき事にて」と答へ侍りければ、此の僧いはく、「さきにこそ念々の起こるやうもあらはれて侍れ、よくよくおこる所の念々を工夫すれば、くわいらんのうへにこも無のことくにゝにゝき、いとほしき前世、ぜひはからく\と前頭し、しゆしやうさらに一だてまし、

自らもなく他もなく、他則このあのは、あのあ則に他なるべし、是れこそ圓實にくさる所を打る、るりけだ工の教へ、だればこそ是本しやうじつ是れたりことあることかは、これ業あとぞに善とおたり、手をうち、けに〳〵つらきなもなく、いとほしみの夫もなかりけりと、大息つき、罷りいでぬとて、拳打ちきあ、悲僧の跡なく、もとの姿となり侍れば、いよ〳〵工夫をとげ、三界はたゞ幻のごとくと思ひ入りて、やがて、此の僧の弟子になり侍りしなり。とかたりければ、箱の尼聞きたまひて、御身の事はさておきぬ、此の僧のしめし給ふ事、瞋恚をいましめずして、菩提をしめし給ふ事、誠に眞實の大乘の御法、有りがたくこそ侍れ、善悪不二、邪正一如、へんしやかいちうなどと、天台の御にやくにも、出離のけをこずるといへども、ことばのみありて實なきに、かまくのなくにことならずといへり、

　時ふくき浮世の中にはまことはなしの今はまことの道あたりねん

まことの道とは、佛祖のあんりなり、一大事とは、ほとけにあらず、衆生にあらず、ねはんにあらず、今にあらず、長短方圓をはなれたるところなり。此のところを、ほとけは、いちじゆうどうの妙諦と說きたまひけり。三世の諸佛、十方の佛陀、いろ〳〵さま〴〵のしつらひ、八萬ほふさう、十二部經を說きたまふも、みなこの一しんのあうしやう、ふしぎの理をあらはしたまはん、御こゝろに

てはんべれ、いまゝではうちやりの人にて、世をわたるべき尼御前とばかり侮り、ないがしろに見くだし侍りけり、とのわけ御かたの御こゝろの、そこすみ渡りたる月かげの、曇りもなく明らかに、一しほあはれなる御事にこそ、なほたけ有り、有りがたくこそ侍れ、誠に一樹の陰、一河の流れ、皆他生の契れと承り候へば、未来の御結縁とうれしく、又今までうたがはしき佛法のしめし、いか許りか旅人の御心をとめし侍れども、御身のことく、たぐひなき御さとりの人には、逢ひはんべらぬなり」と、宿のあるじ、涙ながらすぞふりこぼれける。

七人びくに中 終

七人びくに　一名さんげ物語

下

みいけ殿の北

さてあるじの尼御ぜんは、「何故かく、大なる大悲をおこし給ふぞや」と、みな〳〵とひ給へば、あるじの尼公、申されけるは、「われらは是れ、つくし筑後國の住人、三池殿の北の御かたわらはに侍るが、三池殿訴訟の事ありて、都へ上り給ひつるに、そのゝちの跡にも、文のたよりもなかりければ、北の御かた、つねは、あらぬさまにて、さしてそのみも宜しからで、涙を目のうちにふくませ、打ちしめられたる御さまいとほしく、物あはれなる御有様にてましませしなり。あるとき、みるめもあまりの事なれば、みづから申すやう、「さても殿の御行方、聞え給はぬこそふしぎに侍れ。御身の事はいかにも角にも成り給ふべし、唯わか君の御事を思ひ奉るにつけて、心ぐるしうこそさふらへ。つら〳〵と案ずるに、いそぎさせ給へ都へ、わか君もろともに打ちつれて、三池殿の御ゆくへをも、たづね申さん。」とかたりはんべれば、「まことに、うれしき事をいふものかな、年月さこそとは思ひつれども、

人の身なれば力なし、また御身のこゝろの中もはかりがたく月日を送りしに、よくこそ思ひいれ給ひし、さらばもろ共に立たん」とて、十二になりたまふ藤若御ぜんを先にたてて、行方もしらぬたびごろも、思ひおもしをしるべにて、二月の末のころ、安楽寺にもうでしかば、みやこのかたの恋しさに、あら人神のいにしへを、思ひいだしてわが身をも、まもりたまへと祈誓して、昔のみ聞えし箱崎の、松のしたゐも風すごく、その昔をもしるしおく、もじの関もうち過ぎぬれば、日かずはつもるいつくしま、神のちかひを今日たのむ、君にあふやま山ふかく、こえゆけば早をのゐもの、うら山かけていつとたく、須磨明石につきにけり。これや源氏の大将の、なみこゝもとと詠ぜしも、今こそ思ひいくたびさ、生田の川にとりもるば、あふべきことはかなはずと、こゝろ嬉しく打ち過ぎて、早みやこにも着きしかば、九條室町に宿をとり、さて宿のあるじに、みいけ殿の、行方いかにとたづね侍れば、あるじ「それならこそよく知り侍れ。みいけとのは、訴訟かなひて、又越後のすみふしと申す所へ給はりて、下り給ふ」と語り侍りしかば、聞くよりさのまゝ力もなく、都々と心がけしに、また行方もしらぬ、越後とやらんに、此のつかれぬるうへにいかゞと思ひ、はぬけ鳥の、立ちわづらふごとくにて侍りしより、又おもひ返して、北の御かたに申すやう、「是よりも跡へ帰りても、あふべき人もなし、道のほどさらぬ、路さはこゝふべきにも侍らねば、旅たびの御事なれども、命も共にとてもの事に、越路

へ御下り侍ふ、御供申すべし。」と申せしかば、「御身こそ、心ざしふかきことなれば、何事にも、たとひつがるそとの濱、えぞが千島なりとも、たゞ君のゆくなれば、うれしくこそ侍れ。」とて、又都より越後へとぞ心ざす。かくて都を立ち出でて、音に聞くだに恐ろしき、あらちの山も跡に見て、いつかかへるの山風に、さそはれて散る花の雪、消えぬ命をはふも過ぎ、あすは野山に夜をあかし、踏み分け出づるしのはらや、あたかのみなとに著きしかば、折ふし出づる舟侍りしに、便船をこひ、ゐなごの國に聞えし、かしは崎にもつきにける。此の所にて、殿の御事をたづね侍れば、「みいけ殿は、三條と申す所に。」と語りければ、其の邊ちかき所に宿をとり、あるじの男をたのみ、くはしく文をかき送り給ひしなり。しかる所に、みいけ殿は、此のほどまうすよしと申す所へおはして、三條は留守にて侍りけり。此の時殿の御あとに、あまり人がなしかれば女房一人ありけるが、出であひしに、此のよとこ、事の仔細を申し侍いしかば、女聞きて思ひけるは、是れは我が身にては大事のことなり、此の文うたがひもなき、みいけ殿のふる妻の文にて侍れば、あら淺ましや、ふつに、われはにや迷ふるべき事定まりぬ。つねづね殿の口ずさみには、つくしにしれぬ者あり、なさけないものと、夜ごゑ此の事をのみ思ふたらと宣へば、何とはなるべきとあんじけるが、いやいや世の中のはかりごと、ほうろくにしく事はあらじ、城郭をやぶり國を滅ぼすも、みな財寶をもつて、手だてとし侍ると承れば、此

の使ひをそかに招き入れて、色々の物を引きとらせ、酒さかなにてもてなし、此の女房申すやう、「深く汝を頼むなり、遠国の人にねん比をし侍るとも、さらにえきなかるべし、もしみづから、此の殿にもあるならば、御身の事は申すに及ばず、一門を人となすべし。かの旅の人をはかりごとをもつて、追ひ失ひて給はれかし」と、命と共に頼みけり。此の男、げに／＼御頼みのうへは、心得侍るとて、やがて宿へ帰りて申すやうは、「文をみいけ殿へまゐらせ候へば、つく／＼と文を御覧じて、ふしぎや何者の来りて、かくいひつるぞ、しよせん女だてらしなるべし。西国にては妻もなし、妻なければ子といふものなし、いかなるものぞや。さやうのつくり事をいひ侍るものをば、領内に一夜の宿をもかすなと、もし貸したるものあらば、一門を罪科にすべしと仰せ有りしは、我らが参りたることも不便に候へ。一時も御身をかくすなら、作りごと宣ふ人に宿も無益、急ぎ／＼よそ在所をもとめ給へ、あゝおそろしや人々、はや／＼こと、はうらぎの木などにて、追ひ出し侍りけり。下らうの浅ましさは、先づ色々の引出物、さけさかなのために目がくれ、あへなく宿をばいだしけり。此の時は何とし侍るべき事もなく、おつる涙ともろ共に、三でうを立ち出でて、末たのみなき旅の空、いづくをさしてそこはかと、行きやるともおぼえねども、命の消えざる事こそ、恨みなれと思ひつゞけて、なく／＼ざわう堂まで出でにけり。其の夜は堂に通夜をして、わが行方をいかゞと思ひなげけども、更にせんなし。さる程に

衣のほのみえし方様に、北の御かた仰せけるは、「男のならひにて、われこそすさめられし身にて侍れども、ふた君は、まさしく子にて有りければ、いかなりとも一目見せなば、などか見て給はざる、みづから是れまでたづね下り、おかなるさまを見、はぢなかく事も、あの子が行方を思ふゆゑにて侍れば、はづかしながら今一たび、父をもみ、あの子が具足し父に見せ給ひ、此のよしかくとも、藤若やあつけて、御前は急ぎかへり給へ。又古郷へ立ちかへらるべき身ならねば、是れが菩提のたねとして、様をかへて諸共に、流浪の身ともなるべし。』と、ありしかば、「げに〳〵誠に仰せのごとく。」とて、父をとひうけ御いとまごひして、さわう堂に北の御かたひとりおき奉り、またも御供へぞ急ぎける。しかる所に、その日の暮ほどに、跡より山伏三十人つれて、ものあはれに物がたりするを、耳をそばだてて聞き侍れば、「さてもあはれにやさしき女房にて侍るかな、むかし語りとなるべし、かはれる姿なれども、おもてはそのまゝ菩薩のごとく、楊貴妃そとほり姫などもかくこそあらめ、髪の長さうつくしさよ、つねさまの人にてはあらじ、都へんにてもかかる人をばいまだ見ず、いたはしや、いかなる思ひのあればか、かやうに身をなげ給ふらん。」とかたりけり。みづから胸打ちさわぎ、あまりのふしんさに近くよりて、「たゞいまの御物語は、何事にて侍るぞ。」と尋ねければ、「その事に侍る。大わたりにて、うつくしき女房の、身をなげたりしぞや。人々あつまりて、涙をながし候ほどに、道のほとり

に作れば、われはも哀れに思ひて、逆縁ながら頼みじゆして通ひ侍りし」と、かたられけり。さてはうたがふ所もなしと思ひ、又いそぎもとのこわう堂へかへりけり。しかはあれども、此の君との旅わかれとおぼて、又かなしき身にしみて、一おし歩めども、たゞ一所をのみふみ、あゆむ心地も侍らず、憐はく住居は夢にて、覚めよかしと、たど〳〵かへりけるに、道に行きあふ人ごとに問ひけれども、いづれも同じことばにて、見て通るあし人を申しければ、急ぎかへりて、人あまためてりたることろへ、はしりつき見たれば、元来御ぐしは、波にゆられて御身にまとひ、袴はくゝりをよくしめ、ねりぬきあさぎの袂に、石を入れしりまんたるのたくみなり。くろ木のじゆずを手にまとひ、はや涙に咽ばれて、ねむれる如くに見え給へば、わか君母のかほに手をあて、「のう〳〵」と泣き入りて、「我をば何となれとは思ひ給ふぞや、それほど見捨て給ふならば、など是れまでつれてはまゐらせ給ひそ。情なき父御の御心はかはるものぞ、恨みても又あまりあり、又思ひ切り給ふとは思へども、われらにが心のたゞばかりて、かくなり給ふもうらみなり」と、泣き悲しみ給ひければ、みうかりあふ人の悲しさに、同じ道にとおもひしを、やがてわか君との付き給ひ、「いかゞなる事にてあり、二人の親にさへ悲しきに、又御身に離れなば、何となるべきかたもなし」と、手をとの袖しとろひ、我に賜りけるは、「わが心もすわりて、…もわづらひて侍りしが、ふしぎに川により、故前関

五こう、おしなべて、船遊びして、さもゆゝしげに見え給ふ。さぶらひ船と覚しくて、川の中島へ舟をよせ、うたひまひなどして遊びけるが、此の人々あまた、死がいにあつまるを見て、「あれは何事にて」と、主人問ひ給へば、「旅人の斯様の仔細にて、身をなげ侍る。」と、案内者有りて語りければ、主人聞き給ひて、「さても不思議や、いかなる者ぞ。」と船をよせ、つくづくと見て、「いたはしや、いかなる人の行末ぞや、我もふるさとに、あの年比の子をひとりもちたれば、よその歎きも、我が身のやうにこそ覚ゆれ。」とて、船をよせ、「いづくより来り給ふぞ。」と尋ね給へば、わかき者死がいのうへに伏し打ちおはひ、「西国の者。」と宣へば、「何とてかやうになり給ふぞ。」と有りしかば、「その事にて侍る、父の行方を尋ねんため、母もろともに国々をめぐりしに、父の心のかはりし故、そのうらみにてかやうになりと、涙をながし、母のしがいに取り付き給へば、かの殿あやしく思ひ、舟よりとびあがり、かほにおほひし袖をとり給へば、疑ひもなき我が妻なり。「あら浅ましや、こはいかなる事なれば、かかることの有りけるぞや。夢うつゝとも覚えず。」とて、此の殿人目も恥も打ちすてて、しがいの膝にかき乗せ、涙にむせび給ひしかば、舟のうちに並みゐたる人々、是れはいかなる機縁かなと、きようさめほにて驚き侍りしなり。やゝ暫くありて、此の殿宣ひしは、「今は何をかつゝむべき、皆々も聞き候へ、是れこそそれがしが子、又このしがいは、わらはがつくしの。」と、いひもはてず、たふとにかほ押しあ

て、臥しまろび、よその見る目も哀れに、さめざめと泣き給ひしかば、知るもしらぬも、袖を絞らぬはなかりけり。みづから申しけるは、筑紫を出でにし日より道すがら、誠に男の身にても、旅路は物うく侍るに、北の御かたの爲ならず、若君つれて、はるばる都へのぼり侍りしに、又越後國へと、みやこにて聞き侍れば、一目も知らぬ越後路を、足にまかせて迷ひつゝ、道すがらの悲しさも、必ず殿にあひ奉らん事のうれしさに、うきも辛きも忘れつゝ、遙々下りしかひもなく、情なくも、殿の御心かはり給ひて、剩へ一夜の宿のうきふしも、立ちわづらへる御姿、殿の仰せにて侍れば、宿をもかさで追ひ出し候へば、君を深くうらみたまひ、ごわう堂にひとり止まり給ひて、みづからと藤若殿に、さいごの宣ひて、其の跡にかくれ給ふ。」とかきくどき、殿の袖に取り付きて、雨雫とうらみかこち、有りの儘に申ししかば、殿聞きたまひて、いかにいかに、御身がいふやうならば、さこそ恨めしく思ひたまふらむ。我はとくつくしへ下り、あの藤若をも見たく思ひしに、何とておろかに思ふべき。」と、のきくと宣ひしかば、さてこそ殿の心もいつはりなし、是れこそ朝の御文。」とて、袂より取り出し、讀ませしかば、殿文をひらき見たまへば、其の文に、かく重ねて申しつる。恥かしながら、そのかひとても有明の、つれなくこそ思召すらめと、思ひながらも忘井の、あさましげなる身の程は、思ひの淵にしづみなむ。かほどになりゆく身のはてと、かねても思ふ身ならねど、たづね越路にしら

草の、消えなん我が身はさておきぬ。なに藤若は、御身を分け給ふ子なるぞや、其れさへ子なきと宣へば、いまで甲斐なき涙川、涙の露の玉くしげ、二おや共になかりせば、誰をかけことなりやせん。思ひ切りたる呉竹の、よゝおいきはりとなりぬべし、今はくやしき浮節の、明けぬ暮れぬとまつ人はた、いれいや床の露しげき、袖のぬれます身のほどの、なげきふる時にときさの世の、なく〱とこそは思ひつれ、たとひにくしと有りぬとも、露の情をかけんとてや、跡とひたまへくれ〲と、かきくどきたる玉づさの、言葉のさてもあはれさよ。涙と共に書きたるか、文も涙に色つきぬ。ふでの淡き文字しみて、しどろもどろに書きなせし、心の中のいかならん。是れを思へば我が身をも、同じ道にと思へども、跡の菩提と心ざし、まづしがいをとりて舟に入れ、なく〱ぢわう堂へかへり、やがて煙となし侍りしなり。叔父の使の男、一門二十餘人いましめ、藤若、母のかたき給はり、汝が無念をはらすべし。と宣ひければ、若君大きに悦び給ひて、父に宣ひしは、此の男一門、後代の見せしめに、いましめてもあまり有りとは申せども、かれをころし侍るとも、母のかへり給ふにも侍らねば、孝養にたすけ給へ。其のうへけいぼの御事、情なしとは申せども、またいにしへより申せしも、けい母やうやまふは、かへつて父の孝行と承れば、是れもそばむるわざ候まじ。と、宣ひければ、父も涙をながし、仰せ有りけるは、母もろ共に、此の藤若が、さかしきを見侍らば、何か思ひの有るべきぞ、

せんだん樹は二葉よりかうばしく、一池の跡こそつぐべき者なりとて、跡をゆづり、母の弔ひとて卒堵婆をたて、かやうに詠み給ひけり。

思ひきやたづねこしわのたび人をあらぬさまにて見なすべしとは

と詠じ給ひて、その御庭にて御ぐしおろし、行ひすまし給ひしなり。此のうへはと思ひ、みづからも御さまをかへ、清光寺へまゐり、かの御あと弔ひ、此の二十年が間難行苦行し、其の後此の湯をわかし、功徳をほどこし、かの御ためにと語り給へり。此の時老いたる比丘尼仰せられけるは、「是れは生身の如来にてましますなり、かやうの所に宿をかり、かく有り難き御事を聞き、さすが嬉しし」とて、五人の比丘尼一同に、ひれふしたれにこそよろこばれけり。

花山院姫君の事

あなたふとく、さては物語と、今阿彌陀佛、かくごとしに聞きてねのびし、身をこそくとかきくどきたまふ。是れを聞きし人々聞き給ひて「さてもくはしくぶりのなかなかかなひきつと、思はれしに、ありしのあまり申されけるは「わらはの有りのままなりけれど、つれづれの物語、みそ一字をもらさず給ひて、秋の夜の長きをも、かいしく給はで、涙のひまにて終夜、ねぶりもせぬの者侍るに、聞き入れずして、下れる人といひながら、すく前の人々この不思議さを、そのこよひ、木石の、ありがたき人にて侍れば、此の尼共をも引きたて

なさけある人なれば、今こそ後に叶ふまじ、そのうへあごんにいはく、もし人もと悪なければども、悪人に近づけば、後に必ず悪人になると説き給ふなり。此の必ずと御ことばは、おそるべきに侍れば、早く出で給へ。」と申されけり。此の時こん阿彌ねながら、

ねともせずふせる姿にみえながらも、ねごとには人の聞かぬものかは

とがめこといたきあみだの、御ことばにてさふらふ物かな、此のかりのやどりを出で侍れと御事、たとひ御とがめさふらふとも、いかでかとかく申すべき。未だ常住ふへんのすみかを、知り給はぬか、殊更、ぞう一あごんを引きたまひ、悪人に近づくまじとのたまふ事、何れか悪人にて侍るやらん、善悪不二邪正一如とは、いつも耳にふれ給ふべし。たゞし御耳のたけ給ふより、おほれさせ侍るらめ。其の上ぞう一あごんと申すは、せうじようのうち、四あごん經の、其の一部にて侍るぞや、是れ佛はゆるせうじようとて、一往は用ゐ給へども、再往は、こぞのこよみの如しと宣へり。ことにいひすて出でにければ、又餘の比丘尼たち聞き給ひて、色々の經文を心得、またはたゞ一字をもよくる事こそ、かれがためには不審なり。然れども、みな〳〵のさんげを、ねごとと申すは、淺ましき、奇怪なる事なり。」と申されければ、あみだ重ねて「ねごととはいかに〳〵。」ととがめ侍りしに、こん阿彌からからと打ちわらひ、こなうあん〳〵の、夜もすがらの御物語は、さながらねごとにて侍るなり。

姿は沙門に似たれども、心はまだき在俗の人にて侍り。こよひの如く、泣きしみあひ給ふ事は、出家のあるの上すべきや、さんげをせざれば罪ふかしとの事、皆々御物語にて侍るが、など眞實のさんげをば、したまはぬぞや。」と申しければ、此のとき餘の尼申されけるは、「さんげにおいて、僞りのさんげ、眞實のさんげとて、二つ三つ侍るやことて、若き比丘尼、ころ／＼と笑はれければ、又、阿彌陀ぶ申しけるは、「面々こそ、さんげに二つ三つは有るまじ。」となん宣へり。佛はしからず、佛はさんげに品々を分け給へり。それはと申すに、大に分けて二つ、跡一つには事のさんげ、二つには理のさんげなり。おの／＼こよひのさんげは、あさ／＼としたる、在家の茶物がたりのやうなる、淺ましきさんげにて侍るなり。事のさんげと申すは、ふけんくわんぎやうに說きたまへり、にやくよくさんげしや、たんざしじつさう、しゆざいによさうろ、ゑにちのうせうぢよといへり。かくの如く、無常のさんげにて、眼耳鼻舌身意の六根の一切の罪、はら／＼と消えうせはべること、霜露の朝日にあふごとくと見え侍るぞや。其の故いかにと申すに、一切の罪のおこる根本の源をたづね候に、たゞ一はゐんやうの妙體とさとりたる智慧の光に、などか煩惱の霜露あるべきや。」と申されける。此の時餘の尼きゝて此の人は唯人ならじ、心は姿に似ぬ物なり、よろづ不審なる事をば、たづねべしとて申しけるは、「さんげと申すは、罪を悔ゆることにて侍るにや。しかれども、理のさんげ、事のさんげと申

り、二つの御いはれ、いかなる利害の侍るぞや。」――その御事にて侍る、おの〳〵のやうに、いとこまかしこき御方の、御あきらめなき事を、いやしきわらはなど知り候べきや。さはさりながら、わらは嘗かしこ、寺々天台眞言禪律等の知識にあひ奉りし時、たづね侍りければ、是れのみ人の明らめかたしと、宣ひつゝか有りし程に、此のごろ又、ある道者に問ひ侍りければ、この事理の二つこそ、むつかしき事なんとて、ちしやいひゆとくげなれば、水晶の玉をもつて、たとへにとりたまへり。たとへば、水晶に火の性あるがごとし。おろかなる人は、さだかに知られざんめれども、日の光に向ひ、ほぐしにつくる時、さては此の玉になん、火の性のあることと、疑ひなしと知らるゝなり。――といひたるも、又かくの如し、火の性の玉にあるは、まんほふのりしやうにたとへ、ほぐしに火をうつし出しぬるは、じさうの如し。――しかもほぐしに、火を取り侍れども、玉にある火性は、さうもなく、けんさうもなく、まなこに定かならず、手にも取られず、さながらしゆへんほふかいにして、道あふれ、ひろからず、せばからずなんあり。たゞほぐしにうつし出したる火にこそ、さうあり、けんあり、消ゆる時あり、燃ゆる時あり、さうけんぜひは、時にしたがふ隨縁の物なり。誠なるかな世の中の人々、もとよかりたる、隨縁のじさうの火に心を付け、常住ふへんのめでたき所には、心を運び工夫したまはぬぞや。かやうの御事は、あるかゝりの御事にては、心得がたし。心を佛道にかけ入れ、終日に、終夜工

出し給ふべし。但し事理一たいの、御心得の上にてのさんげにて侍らば、有りがたくこそ[illegible]じやうみやう經にいはく、若し外を淸めんと求めば、まづ其のしんを淸めよ、若ししん淸ければ、則ち外きよしといへり。又戒にも、ほつしんひやくえつほつ、萬ぎやうと世と述べられたり。各のごとく、懺悔虛僞のため云ひ出し、しみ〲と涙をながし給ふは、まうしくねごとにてはあらずや、其の上面々の、こよひの御物語の由來は、

我によき月見よとてはふきさゝじこよひかりねのわび人のいほ

といふ歌よりおこり侍るなり。こよひ一夜のかりねと、詠じ給ひつる人の御心のうち、定めし常住とおぼすらんか、とのわけありとなん、聞えたんなり。いづれか此の界に、常住の所あらんずらん。其の常住と宣ふこと、誠に不審にこそ侍れ。此の三界と申すは、俗界の六よく天、色界の十八天、無色界に四くうしよ、かくのごときの三界のちやう上は、ひさう、ひひさう天と申す天なり。此の天の命は、ながく〲しく、八萬ごふなり、此の八萬劫も、果報つくれば、けんたいすと申して、かへつて後惡道におつると、上しゆしんゑんに見え侍るなり。まして此の世界は、六十年を一期とせり、其の六十年の、指をかぞふれば、わづかに七百二十月なり、日をかぞふれば、二萬六千餘日に侍る。是れ即ち、かなはにして、やまひしからぬ人の事なり、いはんや老少不定なるをや。なに

一夜ばかりの今宵かりねのと仰せ侍る事、かたはらいたくこそ候へ、上下とも皆此の旅宿、なに
かと聞き侍るなり。

誰とても同じかりねの宿あれてもりくる月やあるじなるらん

と讀みて、よし〳〵、あるじの法文道心とりおきたまへ、まことくはみな、實相の妙法にて、しかけにほふなし、何をか捨て何をかとり、何をかあいし何をか悪しむべけん、煩悩即菩提なればなり。」と申しければ、あるじの尼申されけるは、「煩悩即菩提」は、まさしく御身にこそば、又諸宗のもちゐる大事の法文なり。われ〳〵こそ、ぼんのうそくぼだいの、道理に叶ひ侍れ。其のおもむきいかんと申すに、みづからが如き、もろ〳〵あへなき、うきめを見、恩慕哀傷をふかくいとひ、後々うき世の悪業煩悩にこりはて、此のぼんのうをひるがへし、菩提におもむきしは、まさしく煩悩即菩提にあらずや、ひたすら慢のはたほこをたふし給へ。」と申されければ、今阿彌陀申しけるは、「いとめづらしき煩悩即菩提の、さとり承るものかな。みづからが心得たる、ぼんのうそくぼだいといへるは、しからず、煩悩と菩提とを、とりもなほさず、其の性ふかとくにて、一じちのさうたいなるを、煩悩即菩提とは申すなり。たとへをもつて申し侍る、ときがたき冰を、とかざれども、まへに對してぜんたい水と心得て侍り。たとへをもつて、煩悩即菩提といふ、そく〳〵の字の心よく〳〵御あきらめ侍れ。みな〳〵

ごとくなれば、煩惱をひるがへして、さてその後に、菩提におもむくなり。たとへば心も、寒來つて、かたまり氷となり侍るが、春の陽氣に向ひてとくる時、水となるにことならず。しからば卽の字たら侍らぬなり。此の義について、達磨の弟子に、三人とくほどの者あり。だるまに對して、にさうが曰く、「煩惱を斷して菩提をしやうす。」と。師の曰く、「われわれ皮を得たり。」又にたういくが曰く、「迷へば卽ち煩惱、悟れば卽ち菩提。」といへり。師の曰く、「われ肉を得たり。」惠可にしかがいはく、「もと煩惱なし、もと是れ菩提。」といへり。師の曰く、「われすゐを得たり。」といへり。かくの如く、三人のとくほふ、皮肉髓とさうせしなり。おのおのの思惟にぶんざい、まださにすうちがひたる、皮のぶんでいなりとにくの斷ても行をたたぬ御事ない、いかにいはんや、すゐにいたりてや。これらの御心得をば、これのようかたふとも、ないめんさうはふとも、そのことにすてて侍るなり。此のうへに、しやうあくしやうぜんとて、煩惱卽菩提のあらはるゝ事侍れども、いまだ手なれ給はぬ御事のみなりし。候ては、御心得がたければ、あさく〱と申し侍るなり。

目にも色耳にもこゑを難波がた蘆のかれ葉に風ぞそよめく

月よく花よくと見るひとの心なきこそみちのみちなれ

と一心の念佛は、一心不亂にして、佛を思はず、惡所を恐れず、みだるゝ事なく、六字の念佛、あた

ふ、心のほかに求むべけんや。とにもかくにも、もの〳〵につけて才覚を入れず、御聖教に向かへに、ほふかいを家として、なにぬかず、月にあうても月をたゝし、花にあうても花をたゝし、ふるとうくれを憐れ、みこうにしても、ともに萬事の闇をとけ、せいひやうりやうにも止まらず、ひたすらやなほつしんを御あるじと頼み奉り、心安き身となり、心ざし深き人々にさひ奉り、さほ〳〵したる家に宿り侍らんよりは、しかじ只、ふるみのふる笠、こつじき袋にとりそへ、いづくとて、かく、

ふけば行くふかねばゆかぬうき雲のうきにまかする身こそ安けれ

と詠じ、いとま申して人々。」とて、柴のいほりを立ち出で侍りければ、人々とり付き、「御名を名乗りいかなる人の御行方」とて、袖に取り付きまゐらせに留め侍れども、「名もなく我もなく、まぼろしの如くなる身にして、」つひにあへらず出でにけり。

人々あまりの不思議さに、その後或人に、かくのごとき人はいかにと聞き侍れば、「かたじけなくも、花山院の姫君にておはしけるが、ようがん人に勝れ給ひて、既に天子へまゐり給ふべきに、御宦まり有りければ、后の姫君とぞ申しける。十六の春のころ、御室の御所、花山院へならせ給ひて、花を御覧ありけるに、花若殿とて、天下に聞えたるちご一人おはしけり。御さかもり過ぎぬれば、花のもとに歸らんことを忘るゝは、其味によつてなり。折ふし落花の比なるに、夕風いたく吹き、木陰庭

御おもまで、このかの雪なかりければ、いとゞ興をもよほし給ふ折から、御さかづき、花山院の御まへに有りしかば、御室の仰せに、「花若それ〳〵、御杯申せ。」と仰せられしかば、元来まひの上手の事なれば、扇を少しひらき、落花らうぜきなり。風狂じて後といふ朗詠のしまひのひやうし、いづれか花と打ちながめ、たゞ天人の影向も、是れにてこそと許りなり。然る所に、みすの隙より、かぜの便りに此のひめ君と花若殿、目と目をほのかに見合ひ給ひけるに、其の後は又みるよしもなく、夏の蟲のこがるゝ思ひに侍らふ。此の姫君も舞の面影忘れがたくて、只いつとなく、御物思ひの御ありさまにてまし〳〵ける。花わか殿も思ひにしづみ、若むらさきのゆかりの人を頼みて、玉づさを結びおくられける。ひめ君御覧ずるにことのはもなく、

「まだかゝる思ひに消えぬべき人に知らるゝいのちならばや

とばかり侍る。「是れはいかなる事ぞ。」と有りければ、「いつぞや、舞のちごの御方より、御姿一目見給ひしより、しづ心なくこがれ給ふゆゑに侍るぞかし。人を助くるは皆是れ菩薩の御利益にてさふらへば、御返事あれ。」と申しければ、姫君おほせけるやう、「我も此の人のゆゑに心の奥はみだれがちの、打ちとけては思へども、思ひならはぬ御事なれば、人知らぬまに思召しとまり給へ、世の中にもれ聞えなば、御身のこといへきこえて、いつとても御返事もなかりしかども、心の内のうち氷、終にはとくる様な

ひたれば、御文ただひとへにありしかば、忍び／＼の御かよひで、つゝみ給ひし事なれども、いかなるさなれば伊勢の海、あこぎが浦に引くあみの、人目も繁にもれ出けり。淺ましや世の中に、そねみはるに、○○の宣旨に、天子の后とも給ふべき御身なれども、かゝる大事のうへ、わが○○給ひけ、所本何となる給ふにや、此の道とては、高きも賤しきも、教訓に及ばぬ事なれば、ただ石を抱き淵に入り給へつゝと、人々ひきとゞめければ、御身の置き所こそなかるめり。誠に都のうちに申せども、御身の置き所も、せむ方ほどに沙汰侍れば、あのとひとつ御供にて、花園殿とやらん、足に任せて出でたまひけり。わざりの末のかはらずば、たとひ虎ふす野ぐ、鬼界高麗までも、逢がれじと契りを結び、なにはのうらまで出で給ひけるが、あのとの女房のゆかり、四国に有りとて、それを頼りに下り給ふべきよしにて侍りけり。しかる所に、宿の女房、此のひめ君をつくづくと見、あはれ男にかたりけるは、何ともあつらかなる、未だはたちにもたり給はぬほどに見え侍るが、常の人にあらずと見え候ふ。同じ女の身なれども、心も空になれ衣の、打ちほれぬべしとなるを、手のものも打ちおとす程にはべる。御身も一期の思ひでに、一目そとのぞき給へかし。と申しければ、御にけにとおもひ、障子のすきまより見ければ、かたりつるよりは、一入色まさりて、あまりの美しさまゝに、萬を打ちすて、心も空のうき雲の、月をながむるこゝちして、つくづく見るたりしが、いや

いや、此の君御立ち有りて後に、露の命も消えぬべし、たゞ一筋に思ひ給はばやと、案じ煩ひしが、さりながら見れば、わかき人只一人付きたりければ、奪ひとらんに、何のたゝりか有るべきとて、小夜更けがたに、めのとをよび申しけるは、「此の姫君みづからにたび給へ。若しそれ叶ふまじきならば、ともに此の世にては、あらぬ様となり、後の世にはおなじ底にしづむとも、此の事とては思ひとまるまじき。其のうへ御身、心をあはせ給はぬことならば、今宵の中にみなみな失ひ申すべし」と、遁れがたくたゞ申しければ、めのとの女房ははつと思ひしが、心をしづめ、「誠に御身の仰せも遁れがたくはべれども、是れは都より四国へ、御下りの御かたなり。其の上ひとりはここにて有りけるか、かねてよりの御契りあつからず、偕老同穴の御中なれ。いかに思ひとまり給へ」と申したりけれども、「此の上とて、今は思ひとまるべきやうもなし」と、とにかくに、此の事をしおふせんにかけ、姫君をうばひとらんと思ひける。さる程に小舟をこしらへ、前後もしらぬ旅寝風に、二人ながら臥し給ひけるを、もろ共に引き分け、「是れへ是れへ」とて、かどの外に出し奉りしかば、御ねざめの事なれば、さまよひ出で、これも何心なく思召され、川向ひなどにこそと思ひ召されけるに、さはなくて、こぶねに乗せ奉り、帆をいだし、突き出し奉らんとせしとき、「こはいかに」、姫君は心ちがひ、「など来り給はぬぞ」と、頻りに宣ひけれども、男、舟をおしたすくるに、急ぎのけやとて、髪を取つて海の

底に沈めける。さて此の男も泣ながら涙にくれて、歸り見侍れば、二人ともはいとゞに、あさましげにて打臥せしを、そのまゝ抱きとらんとせし時、姫君、もとの枕もとに置きたる、[illegible]給ふをしらず、くらきよすがら、何事か有るべき、わがものなりと思ひし所を、情なのあるじの有りさまやとて、むなしき人を、かたなうらみ給へば、やさしき御手にてのわざなれども、氷のごとくめでたき御刀なれば、此の男やがてなくなるべきにこそ見えにける。されども刀を奪ひとりしが、いまだをはりもやらで申しけるは、言ひたはしやあかぬ人をかたきとて、わらはを御あやまりの候へ、げにもとこそうらみに侍らめ、御ことわりにて候。我も御身ゆゑに、かくなり行く露の命、消えても更に惜しからず、後の世とひてたび給へ。姫君は人の知らぬまに、急ぎ此の中を落ちて、此のにしの山うちに、心ざしある比丘尼あり、それへはしり入り給はば、大事は候ふまじと、涙と共にいひもはてなく、いひけること葉もよわ〳〵と、なり行くまゝに姫君の、行末までも案じつゝ、とら卯の刻の間にぞ、終に空しくなりにけり。かくのごとく、いかばかりの人、あへなく侍るも、是れ一つ事にあらず、いかにはかなくも、天子の女御となり給ふべき御事なりしを、下輩として、おかし奉りしゆゑにこそ侍れ。さて王城の鎮守の御はからひと見えて、二人共に失せけることぞ不思議なれ。さて姫君は、教への如く比丘尼たずね入り、御ぐしをおろし、花の姿も引きかへて、あさの衣もにつだ袋、うちかねはけて色く

ぬく、たゞ打ちすての乞食にて、諸國を流浪し給ひて、我ゆゑ斯くはかなくなりぬる人の菩提のため
とて、寺々の貴き知識をたづね、法文を聽聞したまひしが、都を立ちて其の後、加賀國にさすらひ、
こつじきのにんに打ちまじり、年久しくもおはせしが、又善光寺へと心ざしけるに、かたはらに寺あ
り、此の僧一とりの人なりとて、人あまたもてなしければ、これこそのぞむ所と思ひて、二年是れに
ござりしくけるが、ある時は山谷にとぢこもり、或時はこつじきに打ちまじり、大いん小いんのよそほ
ひあこたらず、萬法一如のさとりを、ひらきたる人と申しふれしなり、さありし時、ざしやに歌をこ
ひて斯く、

しらま弓あてどもしらずいつる矢の空には終にはづれざりけり

此の歌を長老御らんじて、たゞ人には侍らじとて、

されば、こともとのおのがかしこくまよひいるまの外にも道ありと

とあそばしけるを、實に有りがたき御事かなと思ひて、其の後は一生涯にまかせ、隙間をめぐり、此
の山寺にも年を送り給へりつゝ、飯來れば飯を喫し、これ來ればねむりつゝ、あゝまことなるかな此のこ
とば、一切の作法は、みな一心のあらたいしあらはるゝ處なり。よく〳〵工夫をし給ふべし、斯か
るに一大事とす、いかでかゝんをふるべきと、佛菩薩の御おはりなにて、みな〳〵あらき風の吹きと

すも、人あしなどとあやしく思ひ給ふ人々を、かゝるうきめを見せ、菩提心をおこさせ給ひし事、いよいよ有りがたくぞ侍れ。此のことわりもなきなれば、いづれか身をなき物になしはてゝ、身をやつし給ふべき。たゞうき世の前に、たくはへ置きぬる寶しもの、こんな侍もてはべることに、たゞ／＼猶を申、あなたこなた、かゝるうきめを見る人、耳に聞き目にあふれども、是れを見ることにて、浮世をすたる人も稀なり。たとひうき事にあひ、さまをかへ侍れども、やがて本心のかはりぬる、人のあまた有りけるに、いとも賢きわか上らふの、かくなり、老いぬるまで末かけて、道心けんごなることこそ、めづらしけれ。かく筆を染めぬるも、貴き人々に、御ゆかりもあらまほしく、また心あらん人の見るよしも侍らば、化他の功徳ともなるべきなり。

七人びくに下　大尾

九之雙紙

作者不詳

序

さるひながきとしのころかとよ、これかれ集まりて、彼の清少納言が、まくらさうしをまねびて書きたる物あり。その名を犬枕といへるなり。此の二枕は、あしびきのやまと歌のむつのたねをあほし、末の世の人のためしとなるべき事を顯ひ、言葉すなほにしてたくみありて、ことに妙なり。右のやうにくに書きもらしぬる、ことどもて、かたはらいたき事どもを、とりあつめ、此の狂歌となせる物とちりぐかうに今はたしきたへの、まくらといふ名をかたどりし事は、納慮ありおそれありといへども、あしかりけりいさゝか通ふかたありとて、枕とこそ文字の、一方ゆ殘りて、尤もうしと名づけ侍りぬ。

尤之雙紙目録

上

二十三、[illegible]物

二十四、稀なる物

二十五、たのもしき物

二十六、にくき物

二十七、をしき物

二十八、[illegible]物

二十九、[illegible]物

三十、きたなき物

三十一、あかき物

三十二、しろき物

三十三、くろき物

三十四、むらさき[illegible]物

三十五、まつ物

三十六、[illegible]物

三十七、ふとき物

三十八、ほそき物

三十九、[illegible]物

四十、かへる物

下

一、[illegible]物

二、さす物

三、物のかしら

四、[illegible]物

五、めぐる物

六、[illegible]物

七、[illegible]物

八、まがれる物

九、[illegible]
十、こはき物
十一、まことなる物
十二、[illegible]
十三、わらふ物
十四、くすむ物
十五、物いはぬ物
十六、なのる物
十七、かしましき物
十八、しゆしようなる物
十九、めづらしき物
二十、おもしろき物
二十一、まよふ物
二十二、あだなる物
二十三、[illegible]
二十四、くだる物
二十五、[illegible]
二十六、あぶなき物
二十七、おさるゝ物
二十八、とらるゝ物
二十九、あらはるゝ物
三十、あらき物
三十一、さびしき物
三十二、[illegible]
三十三、はづかしき物
三十四、みぐるしき物
三十五、きびのよき物
三十六、つよき物

十七、丸き物

十九、名所誹諧

十八、[illegible]物

二十、目出たき物

尤之雙紙　上

一　ながき物のしなじな

一、それ漢朝をいにしへ、長き事のためしには、堯舜の御代百七年、周の御代八百年、前漢後漢四百年、我が朝にては、神代のむかし、すべて八十三萬六千八百餘歳とかや。いま人王の御代と成りても、みもすそ河の流れたえせじ、百王萬歳の御代ぞかし。耳に聞きても長き物は、天竺の石の橋、日本に宇治の橋、勢田の橋、回廊の長きはいつく島、三十三間、鎌倉の建長寺の廊下、通天の橋、天橋立、ぬけから、細くいたく繩、高なはや、青鷺のくび、鶴のあし、山鳥の尾に鷄の頭、猫の耳、牛の舌、神馬の尾づゝ、稚子の袖、上臈のかもじ、七なんがそゝの毛、むくづけ男の鬚、えびがはな毛、女字餘りの歌、催馬樂の歌、長歌、短歌、源氏物語の上下、八宗の講釋、連歌の席、上手のうつ碁、下手の談義、しんどくの般若六百卷、正木のかづら、青つゞら、青柳の絲、藤の花ぶさ、永き日をよめる歌に、

さくら咲くとほ山鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色哉

又秋の夜のながきをよめる、

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜をひとりかもねん

又すまのなが雨、それよりながきは五月の雨。

五月雨のふる屋の軒のつれ〴〵といつを限りのながめなるらん

北州の千年今此の御代、

長生殿裏春秋富　不老門前日月遅

二　みじかき物のしな〴〵

一、すそのまくつぎ、袖ぶくりん、女にほれ羽織、よい袴、戸田の小刀に長柄のやり、ちやうちん〳〵のうたひ、ごろ寝、下手の連歌、いとこの状、上臈の円そく、ねこのつら、ましこのはしに、うづらの尾、つくりのとつて、ちやぼのあし、夏の夜、冬の日、ふいうの命、電光、朝露、石火、人間五十年はゆめまぼろし。

三　たかき物のしな〴〵

一、ぼんてん、たうり天、下界においては富士のたけ、浅間のだけに立つ煙、高間のみねの白雲、忝くも御門の御位、もろこしにては、秦の始皇の咸陽宮、秦のしやうわうの造られし九層臺。日本

こては、雲居にも・やく高き屋、これば延喜の御製にも、

たかき屋にのぼりてみればけぶり立つ民のかまどはにぎはひにけり

東寺四塔の九りんより、ひえの山やあたご山、杉の梢の天狗のはな、品こそかはれ高き物は、講堂のほくせき、大鐘や、門之二歌書、定家の色紙、頓阿、尭孝、つねよりの短冊を今もてはやす。其外にかねの土の物、さては、分林かたつきに、丸つぼ、なすび、しりぶくら、又花いれは、かぶらなし、鶴のすこゑ、せいたかどう、目わきさしやよりかたな、吉光、正宗、国俊や、かの行平にしくはなし後藤がめぬき、しら糸のうつぼ、ひでりの年の米の直ニ、員数もたかき金なり。山ぶしのふくはらの貝、おりこうすぢみなが懸たてゝ、わらべのうたひ、ほんじき、蘭渓、上無調、撥にはなけりのあがるいきほひ。

四　ひくき物の品々

一、なぎなたぼこ、一寸ぼふし、五位六位の位、ひゞかぬすゞし、おちえん、沓ぬぎ、谷の下樋、ゐんぎつの楽台、いうこつの地謡、しのびねの睦言、

犬がゐのきこう山なるいまや川いまとこたへて我が名もらすな

熊野なるおとなし川にわたさばやすゝめの橋のしのびしのびに

五　ひろき物のしなぐ〲

一、大海、大空、むさし野、千畳敷、華厳天皇○○○、[illegible]、[illegible]、あはうの[illegible]、敷若の顔の口、大海の茶入の口、のとがまの口、鵜の[illegible]、[illegible]、かり衣の袖、大鼓の[illegible]、ひろ袖にはて[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、大唐は四百余州とかや、日本にも奥州は五十四郡なり。[illegible]はふの時、大衆八万四千の[illegible]、みな人毎の[illegible]、[illegible]の頭巾孫のきて、おやのくつはくいたはしさ[illegible]

六　[illegible]物のしなぐ〲

すぼりのしり付、ひあな　　かぎのあな
しやくはちの穴付、火吹竹のあな　　竹の筒にて天をのぞく
井のうちの蛙　　蚊やりたく家
たたみ風呂　　一畳半のすき
手島むしろ　　とふのすがごも
たびの紐　　たゝみのへり
屏風のへり　　かけ物の風帯一文字

庭のやり水付、ほそ川
はりのみ[illegible]
くすり包紙付、はくがみ
しはき人の心中
ひとつばし
をののほそみち
雑木ばたにてながら二三[illegible]にけれはけふのほそぬのむねあはじとや

じ あされいた物の品々

一、諸国に求めもとむる
上手のふみ[illegible]のうへ付、よ[illegible]
青の道のかよひ路
風呂あがり
奥の山[illegible]
[illegible]の内[illegible]

ねずみど付、ふぢ口
遠射の矢のはね
かたぎぬをよろひ物
のりあひのふね
山田のあぜ
けふの細布 絲のほそきにはあらず、はゞせばき事なり。

あを竹の[illegible]縁
なまめく
あたらしき畳
庭に青石しきたる
ぬぐひ板
女の身のしたき

垢はくざら付、びいどろ　　いくつきても白小袖
うるし臭き椀　　木具かはらけ
ねうはなます　　淡ざたう
水嚢するせん　　ほしいひ
もしあらば無慾の人　　賢人の心
池のはちす

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなどかは露を玉とあざむく

八　むさき物のしな〴〵

一、掃除せぬ庭、ふる畳、旅籠屋のめし、はげたる椀折敷、汁かけ飯のわけ、くゝにしたるあかりせん、かご手の結付、わか衆のはかすみ、帷子のしみもの、はな糞、目くそ、爪くそ、まづしうして諂ふ人、何よりもきたなきは戀の道

戀といふそのみなかみを尋ぬればばりくそあなの二つなりけり

九　うるはしき物のしな〴〵

一、わか衆の行儀、俗人の文字有る、連歌の宗匠、詩歌の達者、女子のうたよみ、はしかき尋常に

したる女、君達に家子のうしろみ、女のそばの比丘尼、兒のそばの出家、口上のよき使者、太刀折紙の儀式、嫁入の夜の請取り渡し、水晶のじゆず、かざりの毬、屋かたへ入るに鷹のかひこふ聲、付けたり、馬の湯あらひする、心すなほに言葉たゞしき人、心うちつけて愛敬づける若衆女。

十　うるさき物のしなぐ〵

一、うるさきやう人、年寄女房のあふひの巻に源内侍といへる女、賀茂のまつりのかへさに、車のうちよりあふぎを、源氏の君へ奉りけり。ひらいて御らんじければ、あふぎのつまに、

　はかなしや人のかざせる葵ゆゑ神のしるしの今日をまちける

五十にあまる女なれども、歌よく詠みて、琴をひきけるにや、源氏の御心まどひて、かりそめに契り給ひしを、けうじて戯れけり。源氏心うるさくおぼして、八十氏人の御かへしありけるを、恥かしくや思ひけん。蛇のかひ、犬のつかみたる、しんかん、くつさ、くさり物のにほひ、ふるきすがたの精進、こゝいかたぎの人、物こそつかひ、いか物ぐひする人、ねこけ人

　なふてかやこの手かしほのふでおもて兎にも角にもねたけ人かな

昔、むさしなる男、京なる女の許へ、聞ゆれば恥かし、聞えねばくるしとかきて、上がきにむさしあぶみとかきておこせてのち、音もせずなりにければ、京より女、

なぞしのこへさきのにつけて観むに話間はぬもうらし聞ふもうなすし

十一　うれしき物の品々

一、親のあたゆるつよ、文のきゝはひありて気に入るはうれし、遠きのかりに、それに逢ふはうれし、人の娘を子にもらひたるは嬉し、いゝなびも、その子の生まれたるは嬉し、又孫やうくことひまれたるは嬉し、我ひとりに、加増給ふは別してうれし、満作なる年の知行はうれし、不慮に摑み出したるはうれし、金を拾ひたるはうれし、くじに取りかちたるはうれし、たのもしの札一番に当てたるはうれし、諸勝負にかちたるはうれし、諸芸しすましたるはうれし、鷹をはじめてとりかひたるは嬉し、糸瓢のかへり申しはうれし、うゑ木の花、始めて咲きたるは嬉し、まちかねし物に、当りたるは嬉し、絶えし故郷より一便聞きて嬉し、文匠に文字の不審、付けたり、師匠に大事を聞いて嬉し、博もえてあふ夜はうれし。

うれしさをむかしは袖につゝみけり今宵は身にもあまりぬるかな

十二　かなしき物のしなぐ

一、よひ夜のさはり有るはかなし、夜ふかく別れてかなしゝ

感時花濺涙　恨別鳥驚心

あり明のつれなくみえし別れより　曉ばかりうき物はなし

何となく秋の夕はかなし。

さびしさにやどをたち出でながむれば　いづくもおなじ秋のゆふぐれ

鹿のね、むしのね、きけばかなし。

おく山にもみぢふみ分けなく鹿の　聲きく時ぞ秋はかなしき

きりぎりす夜さむに秋の成るまゝに　弱るか聲の遠ざかりゆく

同じむしにもれぬるはかなし。

契りおきしさせもが露を命にて　あはれ今年の秋もいぬめり

親におくれ、子に先だつもかなし。

すゑの露もとのしづくや世の中の　おくれさきだつためしなるらん

何ともおもつたなさは、[illegible]下かなし。

貧家親知少　賤身故人外

ゆかしき連歌に、

これ〳〵のはかの身をいかゞせん

上三〇頁上

ゆかりにもおもはれぬればうとまれて

饑の客の有るに肴のなきはかなし、さむきもかなし、あつきもかなし、心せはしきはなほかなし、蘇武が十九年の間、一足をそられて、薔薇を拾ひしかなしさ、又法勝寺の執行俊寛僧都、鬼界島に入道されし悲しさ、王昭君が胡國へうつされし悲しさ、又昭陽人が十六にてうち召れて、楊貴妃にねたまれ、六十になるまで玄宗にもえあはで、昭陽宮にこめられしかなしさ、あたら日をまたずに悲し

かたみこそ今はあだなれ是れなくば忘るゝ隙もあらましものを

光源氏おほけならぬ御契りのみ、御年三十五の秋つかた、おもはずも津の國まで下らせ給ひしかなしさ、又玉かづらの君、肥後の監におそはれて、忍びて都へのぼり給ひしも、はや三十にのせ奉り、ひゞきのなだもなだらかに過ぎぬ。海賊の船にやあらん、小さき舟の飛ぶやうに来るなどいふ者あり、海賊のひたふるよりも、物恐ろしき人に、追ひくるやと思ふやるせなしさ、又隣心うくしより歸りまし〜て、大原のやまざとにおはしましし悲しさ、又一宮の御息所、松浦が船にとらはれて、浪にたゞよひ船にうきて、あはのなしまに年月を送り給ひし悲しさ、いづれをいづれといへばさらなり。

十三　みだれたる物のしなぐ〜

一、異國のみだれは三年三月、秦の代のみだれは四十年、我か朝にては源家平治のみだれ、又平家壽永のみだれ。

みだるゝもみだすも人のとかならぬ時いたりぬとみゆる世の中

天狗のなげざんか、かさがしら、佛の御いましめをやぶらば、飲酒のみだれ、笛太鼓のおもしろきは、猩々のみだれ、さはらばおちぬべき萩の露のみだれ、ひろはば消えなんとする玉ざゝのあられのみだれ、春風にもまるゝは柳の絲の亂れ、秋風にもまるゝは萩すゝきの亂れ、殿にもまふるゝはたのねくたれ髪のみだれ、みちのくのしのぶのみだれ限り知られず。

十四　しづかなる物のしなじな

一、元日の朝、歌の會、連歌の席、定家のはやし、囃指下ふむ間、御燈の光すごくとして、みや人のしはぶくこゑ、夜番の聲、

たゞ住ける友とうちかたらひて聞はさはなれむつふたり

嵯峨の奥に籠り閉ぢて心をすます、九年面壁座禪の牀、弘法大師入定にて、三尊三會の曉をまつ、

とひくる人なき山の陰、いさゝかなる水をむすぶ行ひ、下樋の水の音のほそく聞ゆる閑寂なり、名はあれ

山寺の鐘の音さへ入相しづかとのやゝ

江南野水碧於天　中有白鷗閑似我

十五　はやき物の品々

一、一弾指に三千世界をめぐる韋駄天捷疾鬼、稲妻のひかるといふ詞のうへ、鷹のはやわざの
八ひつの駿、矢羽のめぐれしほうらんすゐ、のきゆく鴨、ひつじの歩み、
けふもはや午のかひこそ吹きつなれひつじのあゆみ近づきにけり　　赤染衛門
みつぼのそや、ほかけ船、曲水のさかづき、石橋ける水、ただいまか、下り船、のゝ足のまい、兵法
人のさそく、鼠にねこ、舌疾に物いふ人、光陰矢のごとし、とめ所なき上になるをほどなき

十六　おそき物のしなじな

一、日待の夜のあくる、二十三夜の月待、申まちのよの鶏のこゑ、人をまつまのひとりね
なげきつゝひとりぬる夜の明くる間はいかに久しき物とかはしる
春の日の暮るゝ、秋の夜の明くる、老のあゆみ、上りざか、のぼりぶね、牛の地道、ひさしくへるの一
さう、みろくの出世、御所の御成にすはく半とき、能因法師が旅行
都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白川の関

十七　しづめる物のしなじな

一、[illegible]かれ、むかし[illegible]見、[illegible]国の下知、心ざ[illegible]、進退のたいか、[illegible]
[illegible]の玉[illegible]しは。
[illegible]にのりを沈めしは、[illegible]、又いかりをかつぎ[illegible]もあり、[illegible]
二人[illegible]、[illegible]おはします安徳天皇を、二位の尼いだ
き[illegible]、[illegible]心得たりとて、[illegible]御
[illegible]の[illegible]にて、

いまぞ知るみもすそ川のながれには[illegible]

[illegible]て、千尋のそこにしづみ給ふ、[illegible]
けり。おなじ国にさゝだ[illegible]、この女[illegible]人と
[illegible]水鳥を射給へ、[illegible]
わたくし[illegible]へ従ふべし。」といふ、さらばとて射けるに、[illegible]ほ同じさまにひとつ鴨にあたりけ
り、[illegible]て、
[illegible]に身はひとつむすぶ思ひをいかゞさだめむ

と、一首のうたをよみて、此の生田川に身をなげむなしくなる。二人の男もつゞいて身をなげけれ三人ともに死骸をとりあげて、ひとつ土中につきこめたり。されば塚とて、生田の森に、今にありけるとぞ。

いふたり[illegible]の流に入りぬればそつらもしゅたる[illegible]けり

十八　うかぶ物のしなぐ\

一、名にし負ふうき草、水に瓜、水に瓢箪、

如[illegible]水上[illegible]蘆[illegible]十二番郎[illegible]

一、うみあさき人

一子出家九族生レ天

詩歌に作れる人の句にやきこゝろ、大水にともの から、朝にはにつゝぶね、雨の後のうかぶ水鳥、

俄なる大名の一類、うれしきにもつらきにもうかぶは涙、川ながれの死人。

ものゝふのやたけ心のひとすぢに身を捨ててこそうかぶ瀬もあれ

十九　おもき物のしなぐ\

君子

君子不レ重則非レ威と云々。

仁の道　仁は重しとなす一つ　金、石、主の恩。

あぐみある千金をかたむくるもの事神もほとけも第二第三、忙も重きは父母の恩、ためしの児ぐそく、鑓 袴、古帽子、年貢俵、商人の海道荷、下手の謡、上手のくせし、しめり袴うすに、鮨のおし、おつほねのの物、ふしやう者のたもつ、笠の雪。

笠重呉天雪

二十　かろき物のしなじな

一、噂かち、嬉心、こゑわた、かみぎぬ、ぬかだけし、くもまひ、蝶とんぼうのとぶ、さしばのひなやかむる、はずむ駒、女の下知、まめなる物のたもつ、上手の謡、下戸のうけたる杯、ほだしなき桑門、名さへかる石、から船のあし、へうたん。

瓢箪軽く　草達嶮澗之陰

二十一　ふかき物の品々

一、物しれる人、分別ある人、頭陀の老僧、千尋の海、夏山、沼田、くれなゐの色、雪道、

三層岩の…となしにうそぶして深き契りそする事はなかき

くいさかれある齢、古身の罪、歌物語、詩聯句の沙汰、歴世久しき女郎、ふかき契りには、

楊貴妃鐘馗畫讃　李夫人玉簪畫讃

此賀遊郎の繪入にて、役是作るにつけても、又正字の体口いふものへまじへきはに書はあれて、

秋の夜の千よを一よになぞらへて八千夜し寝ばやあく時のあらむ

返し、

秋の夜の千夜を一よになせりともことば殘りて鳥やなきなむ

又光源氏、まだ中將にありし侍りける時、六條わたりの御忍びありきのころ、ほのぼの見えし花の夕がほの草枕、小家がちなるあたりに、みたけさうじの打はして、南無當來導師とぞいたらしめかく佛と唱へける、遠山ぶしのこゑを聞きて、

うばそくが行ふみちをしるべにて來ん世もふかき契りたがふな

二十二　淺き物のしなじな

一、猿の智慧、狩場のきじの草がくれ、女のこゝろ。

いでて行かば心かろしといひやせむ世のありさまを人はしらねば

分別なき人、片言いふ人、ことば多き人、無學の僧、あらみの刀、木ごふり、すゝけたる鐘、障子、くりざね、一夜づけの酢の物、かたなし、冬枯の野山、ひでりの川瀬、山の井。

あすか山にかけさへみゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

二十三　大切なる物のしなぐ\

一、なさけふかき主君、命をかろんずる臣下、しよきうていえいすたれし、師弟、親子兄弟、夫婦の中、女子あまたの中に一人の男子、知音の若衆、譜代の家人、外様にても勇者、名物の道具、どうあるの刀、手に合うたる馬、手にあうたる弓、鶴取の鷹、鷺取の鷂、白茶、葡萄酒、早咲の椿、けんふの梨、かたみの文、師匠の印可、古今伝授の人、知音ならずとも物の名人は、誰も大切におもふべきなり。

二十四　稀なる物のしなぐ\

一、むかし清見原の天皇と申し奉りしは、天武の御事なり。大友の王子に襲はれ給ひて、吉野山へしのびおはしまして、しばらく鄙の皇居にうつろひ給ひし。八月十五夜、くまなき月に琴を弾じ給へば、五人の天少女あまくだりて、舞をまひけるとなり。是れ豊の明の節会、五節の舞の初めとかや。その時御門の御製に、

をとめ子が少女さびすもから玉の玉手にまきてをとめさびすも

又昔しするがの国三保の松原のうらに、白上といふ者あり、天人下りてまひかなでし事あり、あ

づまあそびのするが舞のはじめなり。

又蔵からはしの中門とて、古来不覺の男の公家あり、あまき二輪の上手たり、又道に通じて、時天のあるじ、時により給はくとの勅使わたくだりぬ。今の京在廷てんしの宮これなり、法文ひあまねくまうづる宮なり。

いづれも天人のあまくだる事、稀なるためしぞかし。

君が代はあまの羽ころも稀にきてなづともつきぬ岩ほならなむ

猶も稀なるは、もろこしある山寺に、読経する僧あり、一人の叟来りて聴聞す、僧の曰く、汝は何の者ぞと問ふ。叟答へて申さく、我はこれ此の山下の潭にすむ龍神なり、今年ひでりこのりねば、隙を得て、貴き御法を聴聞するなりといふ。僧の曰く、ゆゞらば雨をふらして、民の心を安めたまへといふ。やすき程の事なれども、江湖を上帝より封じて、水をもらさゞる事心のまゝにならずといふ。僧のいはく、此の硯の水をもるゝでも、その行術成りてんや。と問ふ。叟すなはち硯の水をのみて飯去す。其の夕雷電おびたゞしくて、あかつきに及び大雨しきりなり。夜明けてみれば、雨のふる跡ことごとく墨の色なり。又稀なる事には、荀令君至三人家、三日坐席香し、薫大将に同じ。又稀なるは西王母がそのの桃とかや。

三千年になるてふ桃のことしより花さく春にあふぞうれしき

前代未聞ふしぎなる事は、聖武天皇の后光明皇后、崩御の御跡を、帝ふかく悲しみ歎じて、はんてんにきせいし奉り給へば、閻魔王あはれみて、二たび娑婆へ送りかへしたまひし有りとなり。又聖の智眼の日蔵上人頓死して、閻魔王宮へゆき、地獄をみて延喜の帝にあひ奉り、これも二たび蘇生しけるとぞ。人生七十古来稀なりといへども、八十九十百年に余るも有り。七夕の契りは年に一夜の契のたゝずとかや、それよりもまれなる契りは、玄宗皇帝の后は三千人とかや、此中に一年の日数は三百六十日なれば、一夜づゝの契りにても、まれなる契りぞかし。

あだなりと名にこそたてれさくら花年にまれなる人もまちけり

しはき者の、人を振舞ふもまれなるべし。

二十五　たのもしき物の品々

一、極上の眼鏡といふは孔雀でならる歟、種々の智解たるべくなし、素に昇を仕立て、筏橋のをも照らせ申し候恐れ、我が御前にてかけことのなき人、ありがたき細帯、勇者の腰下、名物の道具人に預けおき持ちたる、上手のくすし、代々の手の器用なる、軍者右心賢者の時、門の前にとる人もあり、

山にさけ海はあせなん世なりとも君にふたごゝろわがあらめやは
かうずの城に千早楠が敕答、佛神の奇瑞、されば觀世音の御歌に、
たゞ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらんかぎりは

二十六　にくき物のしなぐ

一、かたき前の者、後妻、まゝ子、ぬすびと、屋につく鼠、物をかぶる蟲、花をちらす風、あくまる、んなつひやすき蟲、書物をさすしみ、主の前を通るに腰をかゞめぬ慮外者、口答へする家人、主君こきつふ座頭、見物の前にせいの高き人、急ぐに驢がおわたる守、付けたり、馬追、關かくい、廓のろく山、野間のうつみの上田、讒者の花婿、きし出者、後者付に道問ふ疎者、名人ぶりに三曲をしらざる人、はへ。

蒼蠅々々嘆二南之爲一レ生　古文眞寶

二十七　惜しき物のしなぐ

一、金銀、命を惜しむはめづらしからず、盛りの花を風のちらすは惜し、盛り惜しむは三月の盡。

三月正當三十日　風光別レ我苦二吟身一
共レ君今夜不レ須レ眠　未レ到二曉鐘一猶是春

やしあとも替のかぎりのけふの日のゆふぐれにさへ成りにけるかた
秋は文名高き月にめでて、
明けば文秋のなかばもすぎぬべしこよひの月の惜しきのみかた
物の上手、名人の老い果つるも惜し。あかぬ別れの名残は惜し。
あひみての後の心にくらぶれば昔は物もおもはざりけり
火にやけ、水におぼれて名物のうするも惜し、うつくしき[illegible]の落髪は惜し、[illegible]や松風のうたひ
を、へたのはやすは惜し、かづけふあわの[illegible]すぐるに惜し。

二十八　あとはつる物の品々

一、世のもしたふ、かた過ぎたる娘の、在五中将にまとはれて、けさうにて侍りけれけ、
[illegible]
南にたかやぶ、殿となり、さいくく用をいふ知音、殿のわかうのわたくし御用、借錢のさいそく使、
[illegible]の年にさへ三日とふれば用、はすみのれるゝ、[illegible]、ほへ、[illegible]寄人、ふだんさうぢう汁、た
[illegible]、は社助、へたのひようけし、夜づめの奉公、遅されんがの執筆、[illegible]弓の矢とり、冬田の
借部。

山田もるそうづの身こそかなしけれあきはてぬればとふ人もなし

かれる田におふるひつぢの穂に出ぬは世を今さらにあきはてぬるか

二十九　あをき物のしな／＼

一、まづ青陽のあしたには、門々に飾る松竹や、子の日の松にひきそふる、七草つみて彌生には、誰見ぬ島のうきわざも、あやめにいはふかざり粽、三伏の夏も過ぎ行けば、けふ七夕の祭とて、かぢの葉にかくやふようた、水かけ草や蓮の葉に、盆には鯖まつゝふいひ、八朔の日は禮儀とて、青侍のよりあひて、なほる座敷の青だゝみ、青竹をかくぬれゑんに、せいひようせん敷きひろげ、なふひ居ぬれば振舞に、いだす膳部はなに／＼ぞ、ろくしやうの黒の足うちに、せいしつのわん、あさぎごき、せいじの皿にあゐのなます、藍よりあをき蓼酢をかけ、青豆しやうが盛りこぼし、青鷺の汁にあをひばり、青じとゝまでやきをへて、青鯖のすいり、ぬきた汁、あをな、青のり、青なしや、色々のくわしを取り出でて、長井が青茶むく／＼と、たてていだすを飲みながら、あかしくらせば程もなく、重陽の日は菊酒に、きゝの葉色の新酒をまぜ、のめば甘露もかくやらんと、うたひまふこそ目出たけれ。

三十　きなる物の品々

一、[illegible]とや、きの黄門にわづらひ[illegible]病に氣がおとろへ、[illegible]き[illegible]滑止の[illegible]とゞめ、黄袈裟きころも着しつゝ、きたうは様々ありけれども、さら[illegible]にあらざれば、[illegible]まいへふくすもおよび、[illegible]、黄連、黄芩、大黄、地黄、ほりう、うかう、黄柏、し[illegible]、牛黄圓、[illegible]をあたへけれども、其のしるしだに更にな[illegible]、終に黄なる泉へおもむき[illegible]こそいたはしけれ。

三十一、あかき物のしなぐ

一、申そく赤い事申そ、[illegible]に、妙覺寺の[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]、いなづま、朱すり[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]のなつしき、[illegible]、[illegible]の御門、ゆふけいのこしざし、朱ざや、朱具足、からのかしら、猩々皮、高雄のもみぢにだんの[illegible]つゝじ、[illegible]、[illegible]、はりの木のきりかぶ、鹽引のきり口、鱒のさし[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]永のほゝさき、朱屋のかゝの口べに、茶屋のかゝの前だれ、よしやすのづきん、とうきのまくら、べ[illegible]

ざら、朱わん、朱折敷、ちやづか、づすか、朱つぼ、朱かはらけ、上のはなか、しゆざんど、頭はた
そのまんなか、まいすまん中。（これは十七歳、じゆらくの城の時分、京わらはべのいうたなり。）

三十二　しろき物のしなぐ\

一、春はまづ咲く梅さくら、しら玉椿しらふぢに、夏は卯の花夕がほの、はなのまかりや、こけら瓜、秋は日影、しら萩や、大はくの菊、露の玉、冬は初雪、夕霜や、椎の落葉にしらふの鷹。

雪しろやましろうけかひ爪じろにあをしろほしろ舌もしろ鷹

しらぐ\しししらげたる夜の月影に雪ふみわけし梅のはなをる

深田の鷺や、谷の鷺、綾の小袖にねりかづき、法印の袴、わたばうし、加賀の奉書、たかだうた、伊勢おしろいや、きらゝ、石灰。或誹諧の発句に、

雪や今朝山ないれたるしろ袋

三十三　くろき物のしなぐ\

一、黒澤九郎兵衛といふ人、鞍馬まうでの、初とらの一こんには、まだやみの夜に、からす丸通をたち出づる、黒毛の駒に黒鞍置かせ、らつこの皮のくらおほひ、熊の皮のあふりに、ちやのしりがい、こくひのきつつけ、力がは、らふ色ぬりのあぶみをかけさせて、かちんの下づなよりかけて、其の身

の出立ちくすみたり。はだにはふんきや、ごろ／＼に、しゆちん、くろけん、ちやう、てうしん、おりやうの小袖かさね着て、らしやの羽織に、おやぶるのはかま、しゆすのきやはんに紺のたび、黒鞘まきの太刀をはき、行けば程なくくらま寺、黒龍院におちつきて、毘沙門堂へぞ参りける。護摩堂をみれば十さけて、不動のかほはくろ坊か、にらみけるよと疑はれ、下向道におもむけば、八瀬や小原のくろ木うり、所につきたるくらますゞみ、道もなきほど出でければ、若黨郎從つきぬ小袖、鍋墨のやうによごれて、はふ／＼京へぞかへりける。

三十四　むらさきの物のしな〴〵

一、春日野の若紫、三河の澤のかきつばた、田籠の浦藤、つぼすみれ、むらさきつゝじ、まくれゐけり、夏にもなれば紫きく、紫竹の若竹まの間にも、はや秋風の音信れて、小野の蘭を臥しに、誰かぬぎかけしふぢばかま、彼の山の菊の花、ふるき詠めのことばにも、

　さきさきる位の山のきくのはな濃きむらさきに色ぞうつろふ

紫の雲の林にきてみれば、紫衣きたる僧の、紫檀の机によりかゝり、紫硯のふたをあけ、すみすりてよしかかれたる、掛字のへうぐは何々ぞ。紫綾のきうけへり、紫地の錦の一文字、紫絲のたくはへしと、頭味いきをみてあれば、童一人ありけるが、紫かのこの小袖きて、肉米つくゝし

啼、[illegible]

[illegible]

一、はつ春よりまつものは、花、鶯。

[illegible]

春きてもつれなき花の冬ごもり待たじとおもへば峰のしら雲

[illegible]

[illegible]

人を待つ

[illegible]

日待、月待、申待、十七夜は立待、十八夜は居待、十九は臥し待、二十日は[illegible]、夏は[illegible]風を

まつ、秋は[illegible]まつ、冬は[illegible]春を[illegible]

は、笛を吹いて鹿の[illegible]まつ、[illegible]人[illegible]、旅より[illegible]を待つ

山上有山帰不得 蕭江[illegible]

ししこ字には、商人乗りて往来の旅人を待つ、鷹をうつ人は、秋の山に鳥屋をさして鷹をとり、また
さるかた、ゆけば田鶴とぶ鴫をたて、家守り、二条の寄宿を木樵にあづかりの、夏を来て、八瀬大原のすゐ
なるは、鷹をふまへて冬をまち、谷の樵木に刈りまうけ、曲水にのぼれる歌人は、それにすらみ五[illegible]
をきく、東山西嶽の花もみぢの比は、都人をまつ。

小倉山みねのもみぢ葉こころあらば今ひとたびのみゆきまたなん

ねがふ時には、大鼓をたたいて見物の人をまつ、編笠の中には、都住居をして、一日のよろこびを待つ。
四条河原の町に宿かりけり、大和人の詩に、
出るあてのみつ、[illegible]かならずやかしましと書けるも

三十六　めでたき物の品々

一、酒をのむは、かぞへて盛る、升の祝詞にこそあれ、酒にてのぶる、閨房は水に[illegible]あそぶ、大事に結
し、物は目出度のぶる、鏡餅をつらぬには、世の緑であしとも年をのぶる、千の日の極に引きて、千
年のいのち、松葉をそへては、老の鶴をのぶる、小松をおいては、神代を祝ひ、をのこの子まで、
賜を[illegible]いはば、盃をのぶる、木賊を添ゆるに、一合と盃一木綿をのべて、[illegible]のふるまひ、上り

たゞ許容のぶるなり。擬議の間に、賞罰是非の聞へさる時、御くせ、又御膝を進すゝむ
し給ひけんと申されしは、いつも御院より御かへり、のびくなりとるほど猶さる、
世間甲子須知事　　道書仙人之意
諸神の上人、御手はかりといふ事は、むかし宗権のみかど御向き、上人この御に召けるに、御簾のうち
より、御手を出させ給ひければ、上人御手をとり、
はつ春の初音のけふの玉ばゝき手にとるからにゆらぐ玉のを
文字のつよき人は、もんごんを色々にかきのぶる、へたの点は、筆にはかせてのぶるものなり、能
を見ては面白さに気をのぶる、さけをしひては、客の酔る事をのぶるなり、へをさしてよき屁をひ
へて、腹のはをのぶるなり、
片しにむすばはるともへをきさん心もしらぬつゐのわかれか
かけあしの馬には、手綱をのぶる、風をうけては、遠射の矢をのぶる、利銭をしては、銀をのぶる、
利そくをなしては、借銭の元をのぶる、百姓の未進をしては年貢をのぶる、田畠にこゑをあして、た
けんちをしては、知行の高を延ぶる、くすねをねりては弓ぶるにのぶる、よき作をはしにさせば、た
けのぶるとなり。尺蠖の身を縮めるも、伸びんがためなり、論のおんぎよくにも、かろくよせて、

たはほ、世の中はのべてうたはんと心得べし。間の有る年は、三十日をのぶるなれ、両替ひとへにては、だんぎをのぶる、花の木のもとには、酒のむしろをのぶるなり、ねじへかしては、あしをのぶるなるべし。

三十七　ふとき物の品々

一、大こん庄、円庄、尾張大根、八幡牛房、花筒の竹、のけいしはうから、鯨のたけり、馬の物、筒轉の弓、鬼殻か緒、石引の綱や、鐘つ綱、わきさし地頭の摺か袴、武士の心、天王寺の石の鳥居、ほていの腹や、ことすねに、あきうどのこゝろは、大仏のはしらよりも太しといへり。

三十八　ほそき物のしなぐ

一、大きつれ子のともし火、そしも間ぬめつきどの口、三日月の眉、おこ様や、青竹の音、ほその絲、うゝかにの絲、あわのこしや、のうの首、わたとさきまる、しのめのひや、下手の鉋に、かね、撥がわり職の音、一休りかな、つらゆきの歌作、ほたごやの帯、津田のほそ江のふえ、ゝし。

五月雨はつだりほそ江の身を籠しみとぬもふきなしろしたるより

三十九　通る物のしなぐ

一、田にかし付ける道、谷作の棹、ふれ行ひの商人、むゝ時雨、するまの風、せゝる絶りて通るは

所作、舞に通るは獅子、田樂、ねんりき岩を通す。
　これを見て[illegible]
けふりは空に通る、[illegible]根下へ通る、辨慶はくわんじん帳を讀みて、富樫が[illegible]口を通り、あたか[illegible]關は
通りし通る、[illegible]峯を越えて通る、[illegible]小袖を通す、[illegible]ふくろを通す、大
[illegible]三十三間堂の、二千八百四十七矢を通す。

四十　かへるものの品々

一、年のかへる朝には、十代のかはり、水口まつり、小田かへす、[illegible]かへる、
などこれみなおなじうたに、
　春霞たつを見すてゆくかりは花なきさとにすみやならへる
花は根に、鳥はふるすにかへる、山がらは籠の内にてもかへる、とかへる鷹にもしなぐあり、巣に
かへり、もろ[illegible]、もろがへり、山がへり、この山歸りの[illegible]
　はし鷹のとかへるみねのしひしばの裏白なるは[illegible]
引くに歸るは荒木の弓、ほんのうの犬は門に歸る、虎は子を思ひて千里を歸る、[illegible]昔家に[illegible]
に歸る、思ふ人を宿に待ちては、心いられに立ち歸る。

たちわかれいなばの山の峯におふる松としきかば今かへりこむ

昔男あづまへ行きけるに、伊勢や尾張のあはひの海づらに立つ浪を見て、

いとゞしく過ぎゆく方のこひしきに羨ましくもかへる浪かな

又あだ人のよめる、

おくふたりあるにはあまたくはしければ行きてはかへり歸りては行く

朱買臣に錦をきて故郷に歸り、業を去つて世にかくれしは、東坡公、韓退之、黄山谷、西里先生、此四賢人も一たび配所に囚へ、二年中興歸にはまて、又森氏に三上立ちぬれば、明石より歸り讀ふ、

或人さすらへて、文月十四日に配所にてよめる、

中々にかゝる魂二たびふるさとに歸らむかへりこのしぐれ

とよみければ、あはれにおぼしめして、翌の年の春ありて、故郷へ歸りけるとぞ。

尤之雙紙上

尤之雙紙　下

一　ひく物のしな〴〵

一、小うたにのせては三味線をひく、平家に合はせて琵琶を引く、歌をすんじては琴を引く、

きりの木の琴になるべきたあしには下さきの山をひきわたるかな

都の牛は車をひく、なげうきんにてお茶を引く、膳をだしてはさいしんをひく、ひきさいにひく霞引や、酒も過ぐれば引出物、ひるぶたにのせて小袖を引く、客より座には馬を引く、寒念仏に小袖を引く、御のまへにはしめをひく、佛のまへには施行を引く、數珠引く、木地ひく、ろくろ引く、木を引く、石ひく、ふねをひく、あみを引く、臼ひく、腰を引く、くゞびき、つなびき、なみこ引き、網するあまは絲をひく、かた田のうらには網をひく。

こゝろひくかひこそなけれあふ事はかただのうらの網のうけなに

また仲哀天皇異國退治の御ために、あらぜんの國つるがの津より御ふねにめされける時、御酒宴ありしに、殿上人かんだちめ小うたをうたひ、御酒をすゝめけるとぞ。

春の野やこまかけらる中にもえいやらえいとあゐをひく

此の小うたの事、氣比宮の縁起にみえたり、すなはち氣比大明神は仲哀天皇にておはしますなり。杣山人は梭を引く、のこぎりにては櫛をひく、傘をはりては油をひく、物見の場には幕をひく、みすの内には几帳をひく、春は子の日の松をひく、夏は軒ふくあやめを引く、秋は牛ひく、ほしあひの空、冬はさむさに風を引く、鷹野のともには犬をひく、老いたる人に手をぞひく、おかしの事は例にひくのみ、

二　さす物のしなぐ

一、出る日影は山にさす、月の出潮は浦にさす、わたし守はふねに棹さす、鳥差は小鳥をさす、たそらをば照射す、もののふはのぼりさす、かたな脇ざしは腰にさす、紙のあふぎは左右へさす、されば しやうがのうたに、

さすやうでささぬは人まつよひのからきど

ささぬやうでさすは又おらふが中のとかづき

錫杖、しやくじやうに鐶をさす、血をとる馬にも鍼をさす、腰のものは足袋をさす、わら屋をふくにも針をさす、のみのものをば段下さす、雨のふるには傘をさす、梅花を折りてはかうべにさす、櫻を折り

ては[illegible]につき、とも[illegible]の[illegible]に油[illegible]、[illegible]の汁には酒[illegible]、[illegible]の市には[illegible]かく
ふさず、目のかすむには薬をさす、うたひの本にはしやうじをさす、執筆の[illegible]には[illegible]、柳
の[illegible]。
　蘆の屋のなだのしほやきいとまなみつげのをぐしもさゝずきにけり

二　物のかしらの品々

一、天神七代の頭は国常立の尊なり、地神五代の頭は天照大神、人王の頭は神武天皇、[illegible]
初めは伊弉諾尊、人間の[illegible]、[illegible]はきさき、公家には太政大臣、武家は征夷将軍、[illegible]は
周公孔子、仏法は釈迦如来、[illegible]は[illegible]、[illegible]にはまづ[illegible]
　八[illegible]たてはいつしやくに八寸[illegible]
此の[illegible]の三十一字の[illegible]はなれのけり。また連歌の初めは伊弉諾伊弉冉尊、始め[illegible]
ぐはひありし時、伊弉諾尊、
　あなうれしにへやうましをとめにあひぬ
とよみかけ給ふに、伊弉冉尊、
　あなうれしにへやうましをとこにあひぬ

[illegible]、天台山の頭は[illegible]院、[illegible]は御室御所[illegible]院、山伏の頭は聖護院若王子、馬の頭は観音、牛の頭は牛頭天王、くすしの頭は典薬頭、[illegible]、[illegible]、一年の頭は[illegible]、花の頭は梅、月の頭は八月十五日、庚申の頭は[illegible]、[illegible]、幸若、[illegible]の頭はくわん世、こんぱる、こんがう、ほう[illegible]、[illegible]の頭は[illegible]、木の頭は[illegible]、七つ頭、八つ頭、二つ頭、三つ頭、此の外頭小頭つくしがたし。ふほしの頭、あか頭、くろ頭、地謡頭、[illegible]頭、[illegible]、[illegible]中にも、あながしら、小鳥の中にもかしらだか、いわしの頭、いもがしら、ちゞみがしら、かさがしら、さいづちがしら、[illegible]の頭、[illegible]、十二支の頭は甲子、[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]は人、[illegible]、人は[illegible]

四　もちゐらるゝ物の品々

一、主上、関白、将軍、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]まれ有る人、いうそくの人、上手のすし、何にても一芸の達者、夏は扇に秋は月、奈良諸白に[illegible]、[illegible]中には人参、肴の中には鷹の鳥、鳥なき里のかはほり、大名の

とり子、ふだも御座あらふ、天滿の門跡

左　めぐる物のしな〴〵

一、二六時中天路をめぐるは日月、北辰は其の所にゐて、しうせいはめぐる、日にむかうて廻るは葵の花、雲につれてめぐるは村時雨、ひとりめぐるは水車、或連歌のまへ句に、

あぢきなやたゞまはしてもみん

付句　戀ゆゑに我が身はやせてみへの帯

又　みどり子のなきかかたみの風車

田づらをめぐるは山水、三界をめぐるは會下僧、國をめぐるは六十六部、大慈大悲の觀音堂に、三十三番の札を打ちにめぐるは順禮、るかの二郎清重がまつてめぐる廻文、連歌にめぐるは一順、座敷をめぐるは杯、町をめぐるは番太郎、門々をめぐるは鉢ひらき、大名をめぐるは下歩、やとめぐりするは山うば、まはせばめぐるりふさう、くわたびにめぐるは轆轤つるべ、叩けばめぐる不精ごま、賤の女のまはせばめぐる絲のわく車、三千世界を一日にめぐるは韋駄天、六十二年にめぐりとめぐるは暦、ほどなくめぐるはおやの周忌、或發句に、

めぐりきぬ世のうき秋の七車

六　まふものの品々

一、くもまひ、しゝまひ、獅子の舞、幸若、猿樂、白拍子、でくゞつ、ここのほ、猿廻し、すべにかゞむは鼠まひ、雲雀にまふは鶏、すだか、又は千年の鶴も舞ふ、田にまふはなすびの木、かきはにまふはかたつぶり、花園に蝶まふふん〳〵たり、出家の舞は大衆舞、孝行にまふは老萊子、酒盛に舞ふはじゆんのまひ、ひだるき時は目もまひぬ。

ひだるうこそあしらへ、めのうゐぬれば人もはやさぬかこそまひけれ

七　すぐなる物の品々

一、麻の中のよもぎは、ためざるにすぐなり。

人は唯ところによるぞかし麻の中ならねども見るにも

勝てゞなる竹は、松の立木、又は青竹に

色かへずたゞすぐなるをこゝろにて竹はまがれる枝だにもなし

是れを世のすがたともがなくれ竹のすぐなる物の色もかはらぬ

正直の二字、みどり子の心、聖人の心、治まれる世の掟。

其身正不令而行　其政正民不邪

賤が山田にしめるいねこそて滝にされる世の稲をしるかな

雷鳴のさゝやきふりしきるほに、むまや伝管、理問代の可ほ八、さいしと筆、箱のくらつくりかさ、箱の口まいせた。

八　まがれる物のしなぐ

一、三日月の影、虹のかけはし、馬のくらぼね、牛のはなづら、えびのこし、いかの物、象の鼻、大工のかね、ねや、ふるみのいざ、檜物屋の仕事、なべのつる、鍋を蓋やくしに、つたの枝、城のまがり塀、千鳥が羽、九折の道、しやうがの指、むかし天下の政道にかしかひなるとに、條の辻にむかの宗木、ふたつに書いて立てたる落書あり、此の心は、上部なれにまりて、下又のかのこという義なり。老人の腰。

とらふみはおてみかみもとの川の水ではでわまで下直ぐにけるかな

九　それはいかなる物の品々

一、おさなくの小袖、わた子、公家の参会、びくにの出立、やんごとなきわかしゆの心、同じくなんたの心、付けたり、はだい、老人の交はり、けなげ物のはなし、ならの茶、のたてぶり、あさ瓜、からいうふ、雷神の心をもやはらぐるは歌の道なり。

十　こはき物のしなぐ

一、たゞの子がしこ、なまじひなるものがたり、禮のつきすぎたるせんたく物、狂人のきたる座頭、算用を知らぬ人、たゞのみすといふ神のまへ、尊號、地しん、山伏のいのり、くらなに、蛇のすむといふ淵、いまだ若きが、たまにくすゐのいのり、のぼすぎたるたこ、名さへこはいひ、鹿、鳶、亀蒼、古歌に、

世の中はきよきおとのみかり何にいふ人のくるこそ猶うかれけれ

十一　まことなる物の品々

一、君子の一言、神は正直のかうべにやどり給ふ。

ことの葉にたがふ事の過ぎにあはでれたる誠ならずとてし給やまされけれ

もとをつけ、目をたよ、恥をはぶら、たるたになるあへいは、頭顱の醜業なるべし。これ者にいるは十日まで、用をもい、随所にもんぐん。

いのちあるの数を世かにのは神物用にかきことどさまもしてそめけれ平常思議の時の仕様、宿料、痩れといふ二人の人あり、後のちの細計をなけり。よの時季徒の頭を得ぬしはるに、平にまひもの他種へ後に行き、ところにて賦りけるさて作用は聞へは死人はりといふぬぬやかなり公庵の墓のもとへ向ひ、所の醜業しける後に、二つに折りて手向けけるとなり、このふ

誠の道たるべし、此の心を或詩に作れり、

蒼石早曾麟閣　雲心排秋風寄樹寒

十二　いつはる物のしな〴〵

一、昔よりいひならはせる仲人のそらごと、伯樂のきた、ほくちうち、物うるに手揃といふ者、あまりあれども、此の譌れは、昔もろこしの國に、或人むすめ一人もちけるが、繼母の中の企みには、あまの濡衣をかりとりて、むすめのあしたたちたりけるふしどに、これを脱ぎきせて置く。蜑人きたりて我が衣をとらせ給ひて侍るといふ。さもあらけなきあま衣の、ひとへになき名をいひ付けたり。父是れを聞き、則ち蜑人の事なれば世の聞え見苦しとて、むすめをやがて殺しけり。其の後かの父がゆめにみえつゝ、たく〳〵一首のうたを讀みけり

ぬぎ着するそのたばかりの濡衣なかきなみだのならひなりけり

また僞りのあらはれて恥かしからんは、かぐや姫に送りし玉のえだ、又もろこしに、趙璧といふ玉は卞和が夜光の玉なり。此の玉を秦の始皇より趙王へ、城十五にかへんといつはりて此の玉をとれり。趙王の臣下に藺相如といへる者、僞りし又此の玉をとり返す。相如始皇へ行きて、かの玉に瑕あり、其の所ををしへ申さんといふ。則ち玉を取り出して相如に見せ給へば、玉をとりて始皇の御そばへ

もかく〳〵とより、一座中取りすくめし、我が國へ遊り給へことといかれければ、僊方なくて王共に遊りかへされけるとぞ。又使の人の僞りしは、かの土佐正尊がそら起請、又筑紫ありしやの里人訴訟ありて、在京十ヶ年にあまりぬ。ある里のかしく〳〵て文をこまぐ〳〵と書いてやる。其の文の中にいろ〳〵のきぬ小袖をやるよしかきて、其の物はそとゝのへずして文ばかりやりけり。妻女あやしくうち驚きて、みるに、かきたてたる物は一色もなかりけるに、喰をばたてずして、一首のうたをよみけり。

　こゝろざしあるかたよりの僞りはまことよりうれしかりけり

鳥の名にもうそ、刀にさへそりざや、誹諧發句。

　あさなけりたかきそらねの郭公

佐々木四郎高綱、頼朝よりいけずきを給はりしを、梶原とかあしに、僞りて無事に通りし事、又宇治川の先陣にも佐々木僞りし事、平家物語にみえたり。

十三　わらふ物のしなぐ〳〵

一、左繩、みゝうゝに小鳥、物狂ひに子供のあつまり、狂言、上手のはなし、なまじひの事をとりかゝりて得しとげざる事、天狗がくさびらに醉ひたる、名にめでてわらひじようの面、とりはづしての君なら、北野の二童子、よろこび遊びのざしき、祭にのたる童つ物、光源氏より衣をくばり給へる

に、[illegible]

から衣久からごろもからごろもかへすぐ\もから衣かな

[illegible]

つし下とう[illegible]侍りければ、二人の人もふしまろびてわらひけり。これを三[illegible]の友とぞいひつ

たへ侍りける。

十四　くすみたる物のしなぐ\

一、不動のかけ、おやこの中の物[illegible]、下戸の[illegible]、[illegible]茶の参會、しんの茶の手前、[illegible]

やの小[illegible]、[illegible]

はいでねども、身をまんじてくすむ人もあり。

十五　ものいはぬ物の品々

一、ふかき御情も、すこしのふしに物いはぬ事、世のならひなりしひとつ蓮のえんとならん、二世をかねたるいもとせの中も、ねたむ心を押しこめて、ひたやごもる時も有り、詩の言葉にも、桃李物いはず春幾暮ぬると有り、又いかなれば漢皇は、李夫人の姿を甘泉殿の壁に、似絵に写して、明暮むかひおはしまして、ものいはず笑はず人をしう役すと、かなしみ給ひし事も有り、又僧正遍昭、いまだ良岑の宗貞にて好色ならびなかりければ、是れを帝の心みんとにや、后のまねをして、山吹色の御衣を引きかづきて、御簾の中に渡らせ給ふを、宗貞是れをけそうして奉りける一首御かへり事なし、其の時、

山吹のはなかみ衣ぬしやたれ問へどこたへずくちなしにして

[illegible]

心にはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる

[illegible]

いひ給はで、父帝かなしみ給ひて、羅漢に尋ね給へば、羅漢曰く、「或時に、眠りたる亀を、鷲くはへて、食せんとするに叶はず。童子是れを見て曰く、「石の上におとし侍らば、やぶるべき物を」とをしへけるが、からす鳶のごとく高く飛びあがり、石上に落してうち割り、これをあさる。其の報いにより畜道におちて後、太子に生まれたまふ、無言太子是れなり。又都粟田口に、三猿たうといへる宮あり、中尊はいは猿とて口をふたぎて有り、わきだちは見猿聞か猿なり、傳教大師の御作なり。されば歌にも、

何事もみざるいはざるきかざるは只ほとけにはまさるなりけり

公事をたにかゝずらふもの、此の猿をむかへて我が家に置き、對決の場へ出でければ、かならず其の公事かちに成る由いひつたへ侍りぬ。

十六　なのる物の品々

一、三番のから相撲、合戰の軍兵、新參の事は申すに及ばず、年頭八朔以下の禮儀にも、太刀折紙の奏者を以て、名のるは常の習ひなり。むかし天智天皇、筑前國かるかやの御所は、茅茨きらず采椽けづらで、丸木をもつて建てたる皇居なればとて、木丸殿と申したてまつる。秋の田の露に濡れ、かやが軒ばの月を御覽じけるころなれば、御用心まし〳〵て新關をかまへ、往還の人をなのらせて通し

詠じける、御門の御製にも、

あさくらや木の丸どのに我をれば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ

又毛利千句に、

つらきわかれと引きとめし袖　　昌叱

名のらずば誰かは又もとがめまし　　同

みちのゆく方はあすかゐのやど　　紹巴

此の句は花の宴の巻に、朧月夜ひすぎて光源氏にうかれて、こうき殿の三の戸口に、なにとなくたゝずみおはしけるに、おぼろ月夜にしく物はなし」と、うちずんじて出で給ふを、源氏の君やをらたちよりて、「朧月夜の、「名のりし給へ、いかでか聞ゆべき、かうてはおもひやみなんとは思されじ」と、引きとめ給ひて御契りあさからず、扇をとり交して別れ給ひし前置なり。又みちの行方の句は、[illegible]の大輔あすかゐの枕」につきてこそ[illegible]の給へるに、仁和寺の隆信師といへる法師、ものとと心あはせてぬすみ行くを、大輔に歌一首にてゐつけ給ひてとがめ給へるを、君をば車に置きて逃げけるを聞いてたびてぞ、いづ方へゆくんぞ名のり給へ、送りとゞけん」と宣へば、「二條堀河殿より」と答へし一つゝきて、其ゆゑ、契り結びて御懐妊ありしを、又めのとを筑紫に伴にくだる、太宰少弐[illegible]

と[illegible]合せてつくらしめ下るを、[illegible]門にて[illegible]、長門守[illegible]のに[illegible]しなりて都への歸り、ときはの里にて御誕生ありけり、狹衣の御むすめ、あすか井に[illegible]のて、とぞ申す、あすか井の君とは申すとかや。

郭公の名乘るとよみたる歌。

　　　　藤原爲忠

待ちかねてくらぶの山のたそがれにほのかに名のるほとゝぎすかな

　　元方

たちかへり[illegible]ほとゝぎす己が名をいふなのみなるらん

　　[illegible]

山風のふはのせきもりとはれども心と名のるほとゝぎすかな

　　前參議[illegible]

朝くらやとはぬに名のる子規木の丸どのの名にたてじとや

ある發句に、

郭公名のるはふじのたかねかな

十七　かしましき物の品々

一、女の集まりてさゝやき物がたり、下手うちすぎたるつゞみたいこ、かぢ屋のとなり、やくわんや、
あぶらしめぎの音、から臼の音、石臼ひく音、車のとゞろく音、かみなりの音、百姓の唐みふく、
よつの鳩、谷川、からいまい、てつぽうの音、いぬのほゆる声、あふ夜の鳥、わかれのかね、喧嘩
口にまかせたる出来のくちわるしんばたりかへて誰のこゑきけ

十八　しゆしようなる物の品々

一、御八講の儀式、紀州の談義、御名のこゑ、
笙歌遥聞孤雲上　聖衆来迎落日前
となふる往生の時の南無阿弥陀仏のこゑばかりにして
高野山つねのまつり、上人のこゑ、二月堂のけいぶつ、東寺のはなのこゑ、うたの講師、
行香の管絃、むかしの安養の尼、伊勢へまうでて、神前をふしをがみてまゐる、
何事のおはしますとはしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ、

十九　めづらしき物の品々

一、いくとし越えても花三の儀式、鶯の初音、子規の一声

きくたびにめづらしければ郭公いつも初音のこゝちこそすれ

ゆきやらぬ山路くらしつほとゝぎす今ひとこゑの聞かまほしさに

宇治よりさぼるかきえ、すだか、あおかけ、とや鮨、しろふかはり、十三尾、いちにてしかへたる駒、いこく人、いつみても若衆のふみ、新枕、うひ子、よれのゆかりにあふ、きゝ及びたる藝能、時ならぬ雪。

ときしらぬ山はふじのねいつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ

玄宗皇帝、楊貴妃寵愛のあまりに、内裏のそのに瓜をうゑさせ、二月の比もいふられためづらしきためしなり。

内園分ニ得温湯水ー　二月中旬已進レ瓜

又めづらしきは、橘諸兄卿、とこよの國よりたちばなをとりてかへりし事

たち花は實さへ花さへその葉さへ霜は置くともときはの木

二十　おもしろき物の品々

一、神代のむかし、日神天岩戸にたてこもり給ひしかば、とこやみの世となりぬ、八百萬神、岩戸のまへにてかぐらをそうし給へば、其の時すこし戸をひらき給ひぬれば、人のおもてしろくとみえ

傳の中には、日本の謡ころにて、おもしろやと宣ひしより、おもしろき事を面白とは申すとかや。月花の面白き事いへば更なり、上手の能、付けたり、謡曲、初雪の朝數寄、付けたり、雪中み、遊ばなし、夏は川逍遥、秋はもみぢの木のもとに、車をとゞめてすゞむてなり。

停車坐愛楓林晩　霜葉紅於二月花

冬はたくひのもとにて、いり物などして、手づから、みづから、柄子をとり、さだかに火燵によりふして、まくらをさし出だして簾をまけば、香爐峰の雪など打聞し、こゝろあひの友と物語りするも、面白しさあひてによりて集樂集もおもしろし、鵜飼その外一さいの殺生は猶おもしろし、滑稽のおかしやこもおもしろし、おもふやうに作事をするも面白し、あし毛馬に乗もしろし、尼もしろし。

二十一　まよふ物のしなぐ

一、人のおやは子故にまよふ。古歌に、

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふみちにまよひぬるかな

わる道の事、よくのみち、色みち、霧みち、ひろき野のみち、おく深ふかき山のみち、しのゝめの川ぞいふかき霧のみち、心づくしたる情のみち、あくにも迷ひし恋し道、されぼさとりのよくの是非は、さりとりに迷なり、誰しひのまよひの是非は、是非といふに非なり。

二十二　あだなる物の品々

一、世間は、によむげんはうやう、如露亦如電、くわいらいはうとう。石の火の光にたとへし身の[illegible]
風のまへの燈、日かげまつまの朝がほ、飛花落葉。

　世の中は[illegible]空

むかしあだくらべせし男、女の歌に、

　鳥の子を十づゝ十はかさぬとも思はぬ人を思ふものかは

といへりければ、

　朝露はきえのこりてもありぬべし誰か此の世をたのみはつべき

又をとこ返し、

　吹く風にこぞのさくらは散らずともあな頼みがた人の心は

又女かへし、

　行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

又をとこ、

○一本に、末にさかゆるありさまなる花といふ名詩でとふことの二ありけむ

二十三　のぼる物の品々

一、都はあかたやし、秋はつかさめし、みなかよりの調物、龍門の鯉、玉川の鮎、古き歌に、

春ごとにけふさき見れば玉川のそのほころびしけむはるたる

又、鮎、かたこすゑの花を手折る人、春の野のひばり、秋の木のみをまもる猿、だんぎの高座、二階座敷、心づくしの玉かづら、かづらき、高間、天窓をわたりいくて人の中伏、浅間ふもと、富士もうて、めでたくのぼるはくらゐ山。

十一の巻の宿の山の小松ばらの今年や千代のはじめなるらむ

くらゐ山花をまつこそ久しけれ春の都にとしはへしかば

こむらさきたなびく雲をしるべにて位の山のみねをたづねむ

二十四　くだる物の品々

一、あまくだりたまふは高天の上、つくしへくだるは鯨の上、[illegible]は谷の庵、五月雨の雲はこりしきて、ふもとにくだる雨とまり、秋の薬師の結ひとには、[illegible]のし木の木に、霜は石上に咲しも有り、笛琴の音に乗じつゝ、天人くだりしためしもあり、陰陵の跡

るかりがねの、平沙に下る比もあり、谷にさがる鶯、宮雀、水にながれにうつりしつゝ、ひばりの下る事も有り、巴豆大黄や、牽牛子は、いづれも下る薬なり。

二十五　とぶ物のしなぐ

一、いにしへ秦の始皇をたばかり、荊軻しんぶやうといふ者、燕のさしづ、竝にはんおきが頭をもちて、二人参内して始皇へ近づき奉りて、御門を抱き取り、既にさし殺し奉らんとせし處に、華陽夫人と申す后の、琴の音に聞きとれて、すこし油斷をせし處に、みかど御衣の袖を引ききつて、七尺の屏風をとび越え給ひて、御恙もましまさぬなり。又我が朝だんの浦の船軍に、能登守教經、源氏の大將よしつねをめにかけ、しきりに追ひ既に危く見えし處に、義經かなはじとやおぼしけん、三丈ばかりも隔てたる兵船にとび移り給ひけり。教經ちからなく、今はかくよと思ひきり、安藝太郎次郎といへる兄弟の者を、兩のわきにさしはさみて海へとびいり侍りぬ。又紀州熊野の權現は、御すゐでんの御なけきに、音無里に飛び給ふ。跡よりむけん聖とびきたり、聖の宮とぞ申すなり。又つくしへ菅相丞のさすらへ坐せし時、御別れを慕ひし飛梅、御跡よりやがて老松といへり。ぬけてとぶは蓮の實、とんで火に入るは夏蟲、あふみ竹生島のは岩とび、あふみ非島のこえとび、走りとび、そくとび、目にも見えずとぶは蚤、目に見えてとぶは人魂。

たまはみつぬしにたれとも知らねども結びそとむるしたがへのつま

又とぶ鳥のうたに、

くれぬめりねぐらもとめてとぶ鳥の飛鳥の寺のいりあひの鐘

又あかり障子といふ題にて、

いにしへのいぬきがかひしすゞめの子とびあがりしやうじと思ひき

二十六　あぶなき物のしなぐ\

一、池のはたのわらはべ、神なり、ぢしん、大風、あらなみに乗る船、くせ馬、一きん、馬の上のゐ眠り、丸木の一つ橋、かたそばの細みち、こ家におほびたく、女人の藝能、老人のかるわざ、くひあふぐ汁、みづからしる草びらの料理、かりそめにも傷寒の病、理をもてながらも公事のさた、しうのかけごと、虎の尾をふみ、わにの口をのがれ、うす氷のうへをふむ、それよりもあぶなきは人の悪をぬすむ、

さなきだにあらきがうへのさよ衣我がつまならぬつまなかさねそ

二十七　おそるゝ物のしなぐ\

一、非は理にまさる、理は法度にまさる、法度も時の權にまさる、權は天道におそるゝ、

むかし熊野のおく十津川の里にかり人あり。或時かりに出でけるに、ふしぎの事ありて、蛇の雛子をとりてころしけり。又其の蛇を、しゝの来りてころしけり。かり人これをみて、弓と矢をつがひ放たんとしけるが、まてしばし、此の獅子をころさん事はいとやすし、わが命を又いかなる物か斯く殺さんと思案して、わが家にかへりぬ。さて其の山の麓にて、ふんべつかな、てうへ〳〵におさる、と二こ、大木の上よりいひけり。「もし獅子をころさば、我又はころされん、と天狗いへるとなり。それより此の猟人猟をやめて、後は出家となりぬ、十津川のおくに阿陀浄土寺とて有り、僧侶の聖位は雑仁におそる、おきうの師匠は役所にておそる、雄上は弓におそる、男はおそる、いは竹の葉におそる、うしとらにおそる、曲候はこゝにおそる、武勇はおそる、外様者は関道人におそる、ことに能は上下におそる、商人は見物に人におそる、千石萬石つむ船は風におそる、

二十八、とらるゝ物の品々

一、鳥は鷹にとらるゝ、又犬はね折つて鷹にとらるゝ、鼠は猫にとらるゝ、雉はいぬにとらるゝ、盲によろ真は猟師にとらるゝ、年貢は地頭にとらるゝ、百姓の子は人質にとらるゝ、首は寺者にとらるゝ、笠は風にとらるゝ、くろふねはいぎりすにとらるゝ、商人のかけ荷は山賊にとらるゝ、馬の血は伯楽にとらるゝ、

早苗は五月男女にとらる、藥代は醫師にとらる、提子はしやくにとらる、わらはべの川水あびては瘧にとらる、合戰にまけては國をとらる、ごだいに美人あれば男をとらる、ばくちにまけては衣をとらる、やくびやうの神にても、敵はとるといへり。

二十九　あらはるゝ物のしなぐ

一、下萌のわか草は雪間にあらはるゝ、紅は園生にうゑてもかくれなし。

　み山木のその梢とは見えざりきさくらは花にあらはれにけり

海にます神も、

　西の海あをきがはらの浪間よりあらはれいでしすみよしの神

かの三車の長の富人は、必ずあらはるゝなり。粉骨碎身に心をくだきて、何事も精を入れば、終にはあらはれずといふ事なし、是れ則ち陰徳陽報なるべし。

　やしほだらが福地のそのに種まきてあらんかならずうゑし都に

しのぶる中も終にはあらはるゝなり。業平は二條の后へ通ひ侍りけるも、世にかくれなし。光源氏がゞやく日の宮と聞えし藤つぼへ、御心の有りし事も終にはかくれなし、又柏木衛門督が女三の宮へ契りし事、又匂兵部卿の宮うき舟の君に、忍びて契りおはせし宇治の中にて、

年ふともかはらぬものかたちばなの小島がさきにちぎる心は

かへし、

橘花の小島は色もかはらじを此うきふねぞゆくへしられぬ

ふたこゝろ逢にあらはれぬめり。

伊勢のうみあこぎが浦に引くあみもたび重なればあらはれにけり

服衣を墨に染むるにも、うすくこくそめわけて、そのゆかりの遠き近きをあらはすなり。此の心をふるき連歌に、

おもひに何のいろをわくらん

うすくこくそむるもおなじ藤衣

罪人のつみとがの輕き重きは、淨玻璃の鏡の面にあらはる、實盛がびんひげを墨にそめしは、池水にてあらひてあらはる、又あらひてあらはれしは、むかし大やけに御歌合の有りけるに、水邊の草といふ題にて各よめり、

まかなくに何をたねとてうき草のなみのうねうね生ひしげるらむ

と、小町がよみて、よひに琴に合はせてたかくと誦しけるを、大伴黒主が立ちききて、此のうたを

萬葉集の中へかき加へて、翌日御歌合の時、是れは古歌なりと黒主がいひければ、小町顔うち赤めて恥かしく思ひ、いづれの集にありけるぞと問ひければ、件の書きたるをさし出す。小町是れをみて、文字の墨つき怪しく侍れば、御前にて洗ひてみんといふ、さらばとて、はんざふに水を入れて出したりければ、小町則ちさうしを洗ひてみれば、新筆のすみはおちて古筆のもじは殘れり。黒主がいかばかり歎はかかで、恥をかくなるべし。酒をのめば色にあらはるゝ、人にほるれば目許にてあらはる。

しのぶれどいろに出にけりわがこひは物やおもふと人のとふまで

狐のばけたるに、はなをふすべしあらはる、傾城の誅は大がかけてあらはる、無學の僧はもじすふたんにてあらはる、翔のけはけんさの斬りにてあらはる。地神四代ほゝでみの尊は、わたつみの都へおはしまして、豐玉姫と契りたまひ、うのはふきあはせずして尊を産ませ給ふ、豐玉姫常にこそうつくしくおはしけるが、わにざめのいたちに蛇身の姿あらはれければ、恥かしくやありけん、其のまゝ海中へいりたまひぬ。三たびまはすとなり。又紀州道成寺のつきがねをおろして、山伏をかくしけるも終にあらはれければ、いふきやまの能にとて、おそろしき蛇體はあらはれたりとうたふなり。

三十　あらき物のしな〳〵

ちぬる者に、老いてはづかし。やごとなき人の御中へ、衰へたるもの、みさまに色もかはらぬ、着つきたるきなれ衣を著して出づるは、いとはづかし。夕霧の君と云ふの物、いとけなくおはせし時、御なりの大[illegible]にに人しく[illegible]けるか、た[illegible]にこそ[illegible]れ給ふ給はりなん、つのちも夕霧を、六位といひおとしめ叱りしかば、をさな心にも、いとこそつらしとこそ思ひ給けん、

あげまきやひろばかり隔ててねしかどもころびあひにけるまろびあひにける

もろこしに王琳といへる者の處へ、客の來りけるに、めづらしき初瓜を出したるに、客しつ心なく、瓜の皮をあつくむきて食し侍りぬ。さてその皮を地にすてければ、王琳きやくの目を忍びて、此の皮をとりて食ふ。客これを見て恥かしくおもひけるとぞ。むかし津の國難波の里に、いとむつまじき夫婦のものあり、かくて朝夕のけぶり絶えぐ\に、おとこへはてんかはとて、二人が中を引きわかれて出でにけり。程經て女、身を富みてふるさとへ歸りきにければ、男たゞ一目みて、己が姿のびろうなるを、いとはづかしくや思ひけん、むばらからたちの中へはひかくれにけり。

あしからじよからじとてぞ別れにきいとゞ難波のうらはすみうき

もろこしに陳蕃といふ者、民紀伯といふ者あり、則ちとなりなり。民紀伯、ひそかに陳蕃が地を

あまりて、垣を廣げて我が地になす。陳囂是れをみて、民紀伯が見ざりしまに、わが地を一丈ばかり入れて伯にあたへければ、大きに恥かしくおもひけるとぞ。其の國の太守閻府君これを聞き、陳囂が義をかんじて、その里の名をあらためて義里と名づけ侍りぬ。葛城のよるの契りといふ事、役のうばそく、久米路橋をかけたし給ひし時、かづらきの神、みめわろくはぢかしくおもひければ、よるのみ出でて岩橋をかけ侍りぬ、ひるは恥かしくてまみえ給はず。

いはばしのよるの契りも絶えぬべしあくるわびしきかづらきの神

名に[illegible]

宮の[illegible]物[illegible]杜の[illegible]草[illegible]

三十四　みぐるしき物の品々

一、貧しう[illegible]人、[illegible]の者の怪我、[illegible]寒さに[illegible]鼻たれ人、[illegible]に微粒[illegible]、[illegible]鼻毛[illegible]、[illegible]の鏡[illegible]たる、[illegible]なかき、座頭のさうめん食ふ、出家の女房と物語するもみぐるし

三十五　きびのよき物のしなぐ

一、[illegible]の敵をうちたる、すまふに勝て[illegible]、[illegible]て帰る[illegible]野、[illegible]道[illegible]

たちふろへ入りたるもきびはやし。ためしもののにどうのおちたる刀、こい茶飲みたる口中、臺所の末那板の音、ひもじなる時食ふめし、あつきじぶん水あびたる、又旅の門出に天氣のよき、じゆん風に帆をあげたる船、新宅へうつりたる、よき夢みたるもきびはよきなり。

三十六　つよき物のしな〴〵

一、項羽威をふるひ給へば、山をぬく力ありと書く、はんくわい怒れば、髪兜のはちをつらぬく、又鎮西の八郎爲朝の弓力は、八丈島にて沖なる船腹を射割りて、兵船一艘しづめり。又能登守教經の弓勢は、大國までもかくれなし。鬼には鬼神がつかふるとかや、義經のひざもとさらず、むさし坊辨慶、又和田軍に門を押しやぶりしは朝日奈吉秀、かれにまされる曾我五郎時宗、又かれを組みふせしは御所五郎丸、またのが力わざ、さなだの與市が乘りたるむま、車をひく牛の力、木曾殿の巴がうでぎき、由井の濱に二人つぶてうちたる畠山六郎、命もしらぬかやの木ばしら、いかさまに強き栗の木ばしら、ぬれえんをかかば、蕨繩、信濃のしなを、丹後つむぎ、革つゞら、しつくい、ほんだ、むぎうるし、まむしのしやうね、うなぎの精、かやまといへばかけもどる、猪などにいくはなし。

三十七　まるき物のしな〴〵

一、日輪、月輪、車輪、九りん、禪家には一圓そう、天台には圓頓者、うたはに添ふるけさのくわ

八、神には茅輪、丸四天、童女のひたひ、かゞみの餅、ふんきや、まりに、さかづきや、ましは中よき一もんのまじはり。

まろくても猶まろかれやわがこゝろ角のあるには物のさはるに

丸は寶の玉ぞかし、干珠滿珠の二つの玉、卞和夜光の玉、面向不背の玉、貝玉、牛の玉、鐵砲玉、露玉、あられのしら玉、おもひの玉、眞如の玉や、衣の玉は大こくのもつは如意寶珠、子供のもつはぎちやうの玉、ざとうのもたぬはまなこ玉、女のもたぬはへのこ玉なり。

二十八　にたる物の品々

一、弟子は師匠ににたり、弟は兄ににたり、佛、かくの如く書きて、おもかげとゞむるやうの心か、子は親ににたる事のかくしからず、

子はおやににるなる物とおもはれて戀しき時はかゞみをぞみる

物まねをよくにせて、さいはひになりたる例には、かのもろこしの燕丹、また孟嘗君秦の都をのがれて歸國をいそぎけるに、函谷の關におちきたる。あとより敵のおひきけるに、此の關法にて曉鷄鳴くを聞きて關の戸をひらく、夜ふかければ開かず。いかゞせんとおもふ處に、下座の者によく鷄のこゑを眞似するものあり。かれに一聲ときをつくらせしかば、關の鷄みななきける。關守門をひらき

をも通しけるとぞ。此の人の歌に、

夜をこめて鳥の空ねははかるともよにあふさかの関はゆるさじ

此連歌に、

いかにいかに上の戸さしくるしも
その人とまなびなれける声はして

此の句はうき船のまきに、薫大将の浮舟の君を、宇治の里にかくし置きたまひしを、にほふ兵部卿の宮ほのきき給ひ、薫は禁中御とのゐの隙に、内記といへるものに案内させ、かの宇治の里へ、さ夜ふけがたに宮おはしましたりしを、門よりはえ入り給はで、垣をやぶりてしのび入り、しんでんのもやの軒ちかくたどりよりて、いよすのかゝれる隙より内をのぞき給へば、うひにはおり縫ふわざして、おのがじゝみなおほとのごもりぬ。宮つまどをたゝき給へば、うちより右近といへる女、とがめしに、薫の御こゑによくにせてこわづくり給へば、大将の御帰りと心得て戸をあけぬれば、うちへ入り給ひし、夜の事おもひやるべし。よしは蘆ににたり。

物の名もところによりてかはりけり難波のあしは伊勢のはまをぎ

花あやめはかきつばたに似たり、芍薬はぼたんに似たり、水仙花はにんにくに似たり、あんずは梅に

側たり、あてはひの木に似たり、海棠は櫻に似たり、さいかいはにんじんに似たり、雪は鵝毛に似たり、猿は鹿に似たり、鵜は人に似たり、かはほりは鳥に似たり、鹿は馬に似たり、鹿をさして馬といふ事は、秦の始皇死して李斯、趙高といふ二人の臣下あり、始皇死する時、長子扶蘇に位を讓るの由、狀を書きて李斯に賜ふ。李斯此の狀を隱して、扶蘇をばうつべきよし御遺言なりと云て、兵をさし遣はす。扶蘇事にすして自害し畢。扶蘇は器用ありける間、かくの如くしけり。胡亥とて二番めの御子は幼少なるを用ゐて、これを二世といふ。李斯は趙高共に大臣として、秦の國の政をおこなはんとせし處に、趙高又李斯をほろぼさんとおもひて、李斯叛逆の心あるよし、二世王に讒しければ、しかる間李斯は罪せらる。趙高いまはおそるゝ事もなくて、我が威勢のほどをみん爲なり、これは鹿なり、馬にてはなしとしれども、皆威勢に恐れて、鹿をさして馬といひければ、[illegible]に、[illegible]のかもをこひに遣はして侍りけるに、侍らずといひて侍りければ、

かくして馬といふ人あれは鹿をもをしと思ふなるべし　　藤原仲文

かへし、

なしといへばをしむかもとや思ふらんしかや馬ともいふべかるらん

己已已巳、[illegible]

三十九　名所舊跡の發句となん〳〵

一、春　うす竹の枝もしなへし日枝の嶽

やり梅やふかくてつゝくぬこし岡

夏　ならひけはかすかまゐりの用意かな

ときは木のおもはもぬれてやひばり山

ほたるとぶ夜やくらまのひうちいし

秋　きつね火はいなりまつりのかゞりかな

めい月はをばすて山の名だてかな

さびあゆやくれなゐくゝるたつた川

露をこし蹴あげてゆくやまりこ宿

冬　すゝはなやたちひにひえてせきがはら

松風に雪ひらめくやすまのうら

けぶりにもすゝけおもしろし富士のたけ

四十　日出たき物のしなん〳〵

一、嫁入なことに、けんぷくやわたましの能、初聟入に、元三のせち、いきみ玉、ながえのてうしのてふ花かた、正月のかゞみ、松かざり、二十日は其足のしうぎとかや、御産安隠、かみ置き、はかまぎ、女子貴着、子孫はんじやうのうばおほぢ、うけ振舞に、鶴かめや、松と竹とにやちよの椿、萬歳々々萬々歳

よろこびごとゐむかしの由にとばふなるあめのしたこそ楽しかるらし

此いろ草紙は、或人つれづれの餘りに、硯にむかひ筆にまかせて書き集めける、其の心餘れりや足らずや、然るに忝くも無品親王御覧ありて、事たらざるを加へ、宜しきをたすけ、腹に味ひて、筆を染めしめ給ふとぞ。

色之雙紙 下 大尾

うすゆき物語

作者不詳

うすゆき物語　上

都のほとりふかくさの里に、そのへの衛門とてやさしき男すみけり。ある時きよみづへ参り、御寺のほとりに暫くやすらひし所に、いづくともなく輿きたれり。いかなる人ぞと御名きかまほしき折ふし、御こしより下りさせ給ふ御すがたを見れば、御年十六七と見えしが、下には白きひとへ物、上にはからあやをいろ／＼に、その身も瑠璃にそめなせる、かたなくだりに詠むれば、春のあしたとおぼしくて、初音を告ぐるうぐひすの、垣根々々なきつたひて、御法のこゑをとく時は、四方の山々かすむらん。さてひだりみぎの袖ごとに、ふぢ山吹の咲きみだれ、訪れわたるほとゝぎす、なく音に聴やまざるらん。夏もやう／＼過ぎゆけば、露こそすそは露らすなる、あきはぎの花の色々に、あきも夜寒になるなりは、鳴るかこゑも遠ざかる、むしの音までも一しほに、物あはれなる有様を、心つくしてそめつらん。こしかくだりにには、思ひ心をつくしなる、はかたの松にふる雪の、遂にきゆべき世の中に、いつかは君とうちとけて、かたり盡さんことのはの、世の有様をそめにける。みな水晶のすがたも、二十ばかり給ふ御姿、容顔美麗にて、かすみに匂ふはるの花、風にみだるゝあをやぎの、い

さはる風にしたがふ風情、むかしなきさへたゞしも、いかで李夫人楊貴妃、小野小町かくやらんの、女三の宮のたちすがたも、これには如何でまさるべき。おもかげなしに例へても、丹青の書にほうでゝも、筆にはいかでつくすべき。一め見しより其の後は、しづ心なき戀となり、あさからぬ思ひにあこがれて、うきふし繁きかはたけの、君なみしよの雲きり、むねのけぶりは立ちのぼり、ことよりまさる思ひねの、あけゆく空やあしたか山、そゞろに人はうきしまか、何とて君をみほのうら、たえぬ思ひをするがなる、うつの山べのうつゝにも、君にあはねば甲斐もなし、天にあくがれ地にふし、流涕こがれけれども、しる人もあらざれば、此いまだ断くといひやるべきやうもなし。あまりの悲しさに、いそぎ瀧に下り、身にやかくにもきよ水の、ながれみてこりをかき、祈念申しけるやうは、「てんぢくにほしの宮、もろこしにきさらぎ、わが朝に出雲のさいはひの神、かしこのかみの御引きあはせもましませ」と、きせい申し、それよりも又観音の御まへに参り、あふぎ開いてまへにおき、「たとへばもろこしには、ほうといひしもの戀ゆゑに身をやつし、あゝなタなになげきしに、観音あはれとおほしめし、かの女ばうに現じつゝ、遂にその戀かなへ給ふとかや。たゞいまのみづからが、思ひをかなへてたび給へ」とて、色々きせい申す折ふし、君の召されたる下女、あたりを通りける。ひとへに観世音の御利生とよろこび、下女をちかづけ、何となき物がたりなど語り、其の後、「御身の

奉公し給ふ御かたさまの御名は、いかにたれ人にてましますぞと問ひければ、父にきいきき和泉との
と申し、昔の御名はうすゆき、御とし十七になりたまふとかたりければ、男返して、御やどはいつ
くぞと問ふ、一條殿の御内にと申しける。男いよ〳〵思ひに堪へかね、様々にたのみければ、観音の
御引きあはせにや、又は中だちの人こゝろやさしくてやありけん、なんなく頼まれけり。男あまりの
うれしさに、とある木かげにたちより、すゞりに向ひそゞろに墨をすり、筆のたてども覚えず、
かくこそおもひ送りけれ。これを便りに、その後たび〳〵文を通はしける。そのふみのことばに、
ふしもうらも、御面影のたちそひて、心はうき雲の、身は中ぞらになるかなや、ねには聞きつゝうき
人をこそはみ思ひにあし引の、山河おもくいだゝりて、あゆみも遠きみちのくの、とかの浦にあら
ねども、よるはすがらの思ひの涙に、しほたれ衣いとゞさへ、かわく間もなき有様を、昔とのはかには、
つくにか、ほし得さすべき人もなし、とはおもへども、

　おもふだにこそ恋しき人のかた見なればすゞや袖のくちはつるまで

と、よみあくあひとゞめれば〳〵と、かやうの事に思ひなし、むなしく月日を小車の、やるかたもなく心
うし。いづれの道にも御返事、かしくとかきとゞめ、松かはやうに引きむすび、かの女ばうにわたし
ける。

女の返し

御ふみを見申し候へば、われに心をつくしなる、あはとの海のはま千鳥、ふみたがへにてもや候はん、數々の御たはぶれ、よその御ばもじにて候。わが身は心の水にて、御たゝりもいかゞ、あまあしやおそろしや、かしく〳〵

をとこ

御みづぐきのうつくしき流れの御返し、おほせ御もつともに候。さりながら、三かいを照らし給ふ月だにも、性なりことはありながら、雲路に忍ぶならひありし。又中ごろの事なるに、横山どのと申す公家あり、瀧山のあこ見ぬ戀にあくがれ、かず〳〵書きおくり給ひけれ、その文かず限りなければ、いもせの中の橋となり、しのばん事をわびたるに、或夜よこやま殿御留守なり、わこのよろこび限りなし、やがて忍び入り給ひ、一つ御座にてかたりなぐさみ、比翼連理の語らひ淺からず、少しまどろみ給ひしに、よこ山どの御かへりある。御ちご十五御寮十四にて候へば、いづれもおとらせ給はぬ御かたち人ふし給ふ。物に能く〳〵たとふれば、秋の野に千草の亂れあひたる風情なり。よこ山どののつく〴〵とみ給ふ。御ちごも夢さめて、よこやまどのを御覽じて、取りあへず一首、

けふ宵をめまだ肌なれぬから衣あかつかぬまにあらはれにけり

御だい

たまさかに花をもとめし今宵しもあらくな吹きそよこやまのかぜ

よこやま

梅さくら二本のはなのなげきには思はぬ花をあはれとやみる

かやうに詠じ給ひて、御ちごを御山へ送り給ひし、なさけある横山なれば、かくの御ぐし、たとひ主ある花なりとも、木かげの一枝折るは常のならひなり。

枝高き花のこずゑも折ればなる及ばぬこひもなるとこそきけ

男女にはいかなる花のさくやらん身になりてこそ思ひしらるれ

とてもさやうに恋しく候はば、うき身になりても、身をやつし候ひてなりとも、常ならぬみの末までの御ほねに、御ゆるしこのし候はゞたすけ候へかし、うらめしや〳〵。

女返し

いかにしの御文見しよりも候へば、上のんの御恩き事あらしらく候、それなれば、一日の其日も皆に、すぎの首の玉書の候ふ、この心にて候、わが身しきまの此一首かきあらはせて、ば、いかでかくれし候はんや、御分別候ひてくだされ候へ。

たゞならぬ[illegible]野[illegible]上[illegible]かの関は[illegible]とも
かき積る文は千束になりぬとも、心をうごかさぬ[illegible]、[illegible]錦木には[illegible]
じ、さつと御やめ候て、かさねて御むよう／＼。

其二

こゝろ／＼御心のふかき御返し、いまはその思ひはますかゝみ、見えんやかにも今はもはや、[illegible]
のほて、身の終りを何とすゐかなる、田子の浦波とふひたとたく、なき間しどたる流れども、これを
を君な慕ふれとて、いやしきしのぶ伏屋にも、いとゞ涙にたまきだれ、もりくる風のにほひより、手
かひの虎の引綱の、ながき思ひにたゆるの葉の、其の柏木の及びなき、戀路もよしなしとやしきとへば、
なりまさるこの四位の少将も、小町に心をかけおひの、くるおはれん／＼一條の、こさも袂を濡しけ
く、九十九夜までかよへども、遂にたびかぬつれなさに、さてこそ少将もいとゞ思ひにたへかね、ふ
かき怨みに信濃なる、淺間の山ぶりと消えにけり。その怨念つきそひて、小野小町とよばれしも、花
の季がたちびきかれて、ゆゑにまじはる狂女となる。古歌に、

　この死なん命のほどは惜しからでなくはん昔のためぞかなしき

われらの心中、この心にて御座候へども、一ねん五百しやう、けねん無量こふ、生々世々のかたき

に、ふかき怨みのつきずして、ほんのうの犬となり、むかしの地獄に追ひつかれ、因果の報がは違す

と申し候へば、身のうへも遠からず、今生はさておきぬ、後世のみちやも昔故、おこくにおちんうら

めしや、よき御かへりごと、ざつと隅田川の渡舟、かなしきうき身もこがれやむべし、かしく。

女返し

はずしけの、くみいかさなる御筆の行方、たび〳〵おくり給ふ、さりながらもかなはざる御事

に、互に徒名にも候はゞ、いかゞにて候まゝ、御かへり事も夢のうきになれしと思ひ候へども、うき

世をわたるならひ、又は色をはなれず、むなしく御返しも申さでは、又後の世の報いにも、くるしみ

をなさしても心にかゝると承り候まゝ、筆にまかせ申しまゐらせ候、古歌に、

わがおもふ人を思はぬ報いにやいましのぶへのわれをおもはぬ

かやうのふかき歎き御申候まゝ、御身の上の御うらみ候へかし、わかれもさりがたのしめり、しかも寺の

上人は八十三のとし、京極のおもき所を思ひ侍りて、比内山にたゝずみ給ふ、さきさきあはれに思召

し、此の間近く住みなれ、かりそめのくだりたる御手はかりなきし出し給ふ、上人もみのかくれのうちなれ

ば、すぐにの中にて、きざきの御手をとり、ひたびに押しあてて一首、

いさゝかはまことの道のしるべして我をいざなへ捨なかりたまひそ

と、あそばしたると申し候。まゝ、われらのとりのあと御覽もしなから、ひとつことに思召したまはゞ、かきね鳥はみきりく候。かくにみゝ、石の物いふ憂世のならひ、たゞ一身のうへとおぼしめせ。かしく。

をとこ

しらぎくの花、めづらしき色もかはらぬ、金よりかたきいましめの文、みるより戀も一しほに重くなり申し候。夢のうきはしとは、なかなかたえせぬとの御事にや、さりとては我ら心中に、又たらし河ほどに御入り候へども、しぢのつまがきにて候へば、此の人やらんとあみ、

日にちたび思ひやるとはえもしらじ通ふこゝろのものをいはねば

なか比小宰相の局は、院につかへ給ひしを、かたわきの平宰相のよもの御子に、ゑちぜんの三位中將みそめ、一目見そめしよりも戀となり、うたを詠みこされしに、たびたび文を返し給ふ。

わが戀はほそたにがはのまろ木ばしふみかへされてぬるゝ袖かな

とよみて送りけり。心づよき小宰相も、あはれとやおぼしけん、返歌に、

たゞたのめほそたにがはのまろ木ばしふみかへしては落ちざらめやは

とあそばし、やがてなびきそめさせたまふ。かやうの御事も御いり候ものを、あはれと思召し候は

ば、秋の田かりそめぶしの御なさけまゐ申し候。

女返し

さいへ、ことふるもどきの、御かへりごとも申すまじく候へども、つての人あながちに申し候ふまゝ、ひらき見參らせ候へば、みたらし河と候は、戀のゐ神にいのるとの御事候や、しなのつゐかきとは、人にしらせずとの仰せかや、御ことわりは聞きわけ申せども、戀のつゐぎにて候ふ。中ころも建禮門院の御とき、横笛とてありし、そのころ小松殿の御うちに、三條の齋藤左衛門が子に瀧口とてありし、小松殿の御つかひに女院へ參り、めん廊に休らひて、もの申さんといひけるに、横笛きくがさねの衣に、紅の袴ふみくゝみ、みす押しのけて出でたる其のすがた、容顏美麗にて、かすみにこもる八重ざくら、いまを盛りと咲き匂ふばかりの風情して、心も言葉も及びがたし、楊貴妃も是れにはいかでまさるべきと思ひければ、たき口ふみ取りいだし、使なついてに、

あきの田のかりそめぶしのよなりとも君がまくらをみるよしもかな

とゞふみ、顔うちあかめてうけ取り、女院の御返事を餘の人していだしける。この歌をたよりにて、いよいよ、文を通はし、やがてなびきにけり。あるとき二人のおや、此のよし聞きつたへ、瀧口を折檻しければ、嵯峨野のおく法輪寺といふところに、庵室をむすびて閉ぢこもりけり。其の後まこふ人こ

れぬ關守て、たゞ九重をはなれば、人なき所とし音もせず、なにとぞ三の獄にまします候て、有、

あかきぬあかみて心のつきければ、いみじもあくがれのこそあわ

と、誠にはかなくもかへりぬ。たゞ日物のまよひ見おくりて返歌に、

ものうのみそのみ恨みと思ふなよこことのみにいふぞわが身は

又よこぶえ、

あはれなり今を限りのみちにして先だつものはなみだなりけり

さこふより、うらめしき庵室を見捨てしのかへりけり。それより千鳥が淵へのき、身をなげむなしくなり

ぬ。たゞき日こののよし聞くよりも、おどろき騒ぎのぞみれば、むなしき死骸ばかり。なくなく死骸をと

りあげて、無常の煙となしにけり。たゞき日が今のうきなげき、数行虎氏がなみだも、これにはいかで

まさるべき。それよりすぐに高野山に上り、ほだいをとくとくとぶらひけり。かやうにひとり捨て候

へば、いのちうせ候ても、なかなかがたき物を、御おもひきり候へ。

をとこ

いつもいつも、谷の水のごとくなる御ふみ、いよいよたゞかね申し候。このの劒とは、まつと思ひ

きり候へとや。さてさてこれほどに心うたく候はゞ、中々はじめより御返事もなく候てこそ、露の

命ははやしきに候はゞもゆみ、たゞ/\の御ふみ、いよ/\身をしづめ雨にふし沈み候。

つらからば只一すぢにつらからでなさけのまじるいつはりぞうき

あはれさま世やうなる人の、いにしへもあはつれはこそ、たれ人かくみおきけん、おぼせつことく思ひきり候はんずれども、この心や、

心づよき君には猶もたのみあり青柳よりもゆきをれのまつ

げにやおもふ事かなはねばこそ、うき世なれと知れども、さすが猶思ひかへせばあつき時、いとゞ心づよく候とも、いのちをかぎりに引きて見るべし。かしく。

女返し

文ご覧候御事のはやり、ともかくもいひ参らせ候。さては谷の水のごとくとは、身ひとつをこの心と[illegible]けやられと御うらみ候へ共、色をも御たにと聞きれば申さとも、御身上の申し様もかゝることく、百[illegible]候ては、又なに事申さん事もなかしく候。つれなくきく見給にも、そなたさまのやうなる無理ごと御しかけられ、御門おはします。その臣下にかへれはといふものゝ、その妻とていおはしまさい[illegible]、みにしなき人なれ、御かみも聞召しおかれ、おそへて雲の上のまじはりかなはせおかれし、て[illegible]いにしへ罪に我が君なから申させ給ふにより、かれはくれぐれことゝも忘れまして、みやうに[illegible]をしおはし召

も、かんにくが耳鼻をたちて、ていかうに見せ給ふ。いよ／＼なげき悲しみて、病しもうちかさなり御門叡覧ありて、しまさんかんはくある故にこそうち詐けれとて、かんはくを千尋の底にしづめ給ふ。そのときていかうは案をめぐらし、かんはくが沈みし池のほとりにて、かの亡きあとをとむらひとふらひ給はゞ、その後はともかくも。と奏聞す。御門大きによろこび給ひ、かの池のほとりにて、しめん／＼の舞楽を催しつゝ、かの追善をなし給ふひまをうかゞひ、ていかうは水の中にとび入り、往の世までもちぎりたると承る。まことなるかな、けんじん二君につかへず、貞女両夫に見えずと申し候。もろこし我が朝、道はかはりへだゝり候とも、心の程はおとるまじ。とても叶はぬうきなれば、ふつとおもひきり候へ。

よの中は月にむらくも花に風おもふにわかれおもはぬに添ふ

このうたの心にて御おもひきり候へ。かしく。

をとこ

御返しながらまた申しあげ候。ことに異国までの御ひき事、さることにては候へども、さやうの御事はためしおほく御座候。我が朝にも鳥羽院のきさき、あるとき花ぞの山に御出である。佐藤兵衛憲清も御うらにありし人なれば、御供にいでにけり。かなたこなたとやすらひ給ふところに、蝶とい

ふ蟲こつつれて、花にもつれ飛びけるを、きさき御らんじて、「あれは何といへる蟲ぞ」と問ひ給ふ。御つぼね「あれは蝶にて候」と申さるゝ。きさき聞召して「あれは半なり。」と宣ふ、色々もんだいなかばに、のりきよ出でてかくなん、

ひとつでも千鳥といへる鳥あれば二つありとてもてふはてふなり

と申しければ、きさき一しほ御感ありけり。そののちこれをたよりとして、たび／＼玉章遣りけり。やすからぬ事なれば御返事あり、この世にも又あの世にもかなふまじ、三とせすぎて天に花さき地に實ならば、その後西方みだの淨土にて、らいがうを待てとぞ書きてくださるゝ。さしも歌人たりし憲清も、前後をわきまへず、このよにも又あのよにも叶ふまじとの仰せと心得、命もあやふく見えにけるを、きさきは憲清が最後と聞召し、事のしさいをこまやかに問はせ給へば、ありのまゝに申す。あらあさましとや、歌人といはれし憲清が心にはあらず、このよとはこのよの事、あのよとはあのよの事、三とせすぎてとは、三日のよすぎの四日のよといふ事なり。天に花さきてとは、ほしいづる事、地に實のなるとは、露霜もてといふ心なり。西方彌陀の淨土とは、これより西の方にたて給ふ、あみだ堂にての事なり、と宣ひ給ふ。さてその後、かね言せし夜にもなりければ、堂にのぼりまち申せども御出でもなく、夜もはやあけぬるに、憲清すこしまどろみけり。君御出であり、憲清が袖をひかへて、

かれならば鳥啼くまで相待つべきに、思はれぬこそさきみだれける

憲清もとりあへず、

よひはまち夜中はうらみあかつきは夢にやみんとまどろみぞする

とたがひにたはふれ、その夜は淺からず御ちぎりをこめ給ふ。君は主、夫は下人なりしかど、なさけのみちはかくの如し。いせ物がたりにいはく、

あふなく〜思ひはすべしなぞへなくたかきいやしき苦しかりけり

なさけにはいやしき袖はなき物を洩らさでやどれありあけの月

このごろはいかに御なさけなやなう。かしく。

女返し

さい/\の御ふみ見参らせ候、さては又鳥羽院の后のたとへを承り候。かの佐藤兵衛憲清はしのゝめの別れに、重ねてはいかにといふとき、きこし召し、それはあこぎと宣ふ。いまよりそのあこぎを知らせし、諸國しゆぎやうに出でしとき、その名を西行とかへ、あこぎを知らんその爲に、おほくの國をめぐりしとかや。いつくにてかしりの男が牛をひきて通りしに、道のほとりのいな葉をはみて、通る事たび/\におよべり。彼の牛の主、あこぎなる牛かなとて、さん/\にうちに

すゑ、西行なゝめによろこびて、いそぎたもふの仔細をとひければ、

いせのくに阿漕な浦にひくあみもたびかさなればあらはれぞかし

と、古人いひ傳へたれば、申しつゞるなりと答へければ、その娘くるしむ様のせつ〳〵の文、あこぎにて候へ、よびかさぬればあらはれやせん、いくたびおほせ候ても、さきの御返事のこと、ていちやうにはおよびまじく候。かさねて御ふみたまはるまじく候。

をとこ

御傍りへふみを申し候へば、たび〳〵ふみを進じ候へば、あこぎと仰せられ候。なにとこそやう御おやとのにこそれ候や、さこそは一夜の御なさけありてこそ、あこぎとはおほせ候へ。とてもいにしへの身も御ゆるしは候はば、たとひかぎりも、せめて露のふかりしと御情をかけられてこそ、其ゆうに下は阿漕ともおほせられ候へ。さもなくてはさなく、御心にかなふ人さへはあるまじく候。さはありとて、

おもひには石にたつ矢もあるものをなどかわが戀の通はざるべき

[illegible]わが身つらくのたはならば深くもあはれ[illegible]こゝろみ

御はつゝんしながら、平にまかせ申しあげ候。さて〳〵戀には人の死なぬものにて候や、あまり御

心くふかきうらめしさ、心中の程ご推量なさるべく候。くはしくはすのうらかく、かしく。

女返し

御ふみ見参らせ申せば、くすの裏風と御とゐ有るは、みづからを御うらみ上の御事にや、さすのうら風にてもあれ、御心にしたがひ申す事なりがたく候ふ。いにしへより、そのかみ天皇の御時、左大臣きんみつの御子に、百合若大臣とて候ひしが、むくりこくりをせうばうして、日の本に攻めいる、百合若大臣うけたまはり、おほくの軍兵と八万艘の船にのり、むくりが沖にて三年三月たゝかひ、遂に大臣うちかち給ひて、帰朝なさるゝ折節、げんかいがしまにあがり、日ごろの疲れをやすめ給ふ。大力のくせやらん、ねいりてしばらく起き給はず、夜日三日ぞふし給ふ。物のあはれに、臣下のべつ二兄弟、謀叛なたくみて、大臣をばしまにすておき参らせ、わが身は船にうちのり、ほどなく帰朝して、さかて参内仕り、大臣うちじにの由申し上げければ、御かど哀れに思召す。しかのといへども、天下太平なる御かんあつて、このたびのくわんじやうに、筑紫を一国にくだされけり。まことに栄華にほこりしが、大臣の御台に心をかけ、かずの玉章おくりしかども、みだい露ほども御なびき給はず。其の後だいじん御帰朝ありて、三年後に、まくらひとへに女のかゞみなる物な、くもり候てはわかぬしさまに、ふたたびおもてをみせ申さん事なりがたく御入りの候。かしく。

をとこ

さてもさても心づよき御返し、いまにはじめぬ覺え申し候。さては大臣のながね御たとへ、一しほ耳にとまり申すなり。我等もその如く、そもじさまとながね致したく候。中ごろもさる人女院さまに心をかけ參らせ、玉づさをさゝげければ、うつくしき御筆のながれにて、薄様のはしに、くれなゐの一はな心とやらん御かたへとばかり、あそばされてぞ下されける。男なにともこの心をしらず、ある人のみて、これこそよきかへり事なれ。古歌に、

くれなゐの一はなごゝろ薄くともひたすらくらす名をしたてずば

この心なり、と申せば、よろこぶ事かぎりなし。其の後やがて臣かせ給ひけり。まことに雲の上なる御所さへも、落せば落つるうきよのならひ、あまりつれなのふりにて候。とにかくにいやとはうおすて候へども、又涙にむせび候まゝ、おもひきりしもいつはりの身や。

女返し

かされがさねの御返ふみ見參らせ候、さ候へば雲の上なる御所さまの御事仰せられ候。それは雲の上人なればこそ御落ちありける。我等がやうなるいやしき雲の下人は、落ちん事はさておきし、これ迄申す事も中をわきまへざるなり。その上わが身のことは、わがぬしさまとは、たがひに操りかけ變

のこれるすゐも、ひとつふたつにてそれよりうせて候へば、わかかたにつくる黒髪なれば、この昔までも思し候はゞ、る人もなく候。またそれも同じ様へうらなびき候はんこそ、なかしく御入り候。わが身のごとく在五常が娘と、在五中将業平との御ちぎりもさそならず、いまも物かたりにも、

つゝゐつゝ井筒にかけしまろかたけおひにけらしないも見ざるまに

と、昔男のよみければ、その時女、

くらべこしふりわけがみもかた過ぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

と、互によみけるとなん侍り。それのみならず、わかぬしてまとわかれも、

われならでは下紐とくなあさがほの夕かげまたぬ花にはありとも

二人してむすびし紐をひとりして相見るまではとかじとぞおもふ

このごとくのかねごと候まゝ、なびき候事なるまじく候。かしく。

うすゆき物語上　終

うすゆきもの語　下

をとこ

おし返し〳〵申し上げ候ふ。さ候へば、在原業平の御事承り候。いにしへもたちばなの少将やすよりの子に、道命法師とて、叡山にならびなきかくしやうあり。内裏に御祈禱のありしとき、心なきをふ風吹きて、つぼねの御簾のひきあげられ、泉式部を見そめしかば、しのごゝろなき戀となり、学問をもやめ、叡山より忍びくだり、綱子うりに身をかへて、見そめし局のあたりにて、かうしを賣りければ、うへより下女をいだして、こゝ下ばかりうり給へ。といひければ、道命はうれしさにあまりて、数へける、

「一つとや一人まろねのそでまくら袂しぼらぬあかつきもなし

二ツとや二世[illegible]ちぎらうふのうらにして戀しき人をいつまでまし

三ツとや見しもこゝろの戀路でなどうき人を忍ぶらん

四ツとや[illegible]

五つとやいつや今やと待つほどに身はかけろふとたゆるぞかなしき

六つとかやむかひの野べにたく煙もつゝま故にこそなきあかしけれ

七つとやなき名のたつもいらかゆに君もろともに立つとおもへば

八つとかややよひの月のひかりをば思はぬきみの宿にとゞめむ

九つやこゝにありける人故に世にもこゝろをつくしけるかな

十とかやとやを離れしあらたかをいつかわが手にひきすゑてみむ

十一や一どまことのあるならばいかに言の葉うれしからまし

十二かやにくしと人のおもふらむかなはぬことに心つくせば

十三やさのみなさけはふりすてそなさけは人の爲ともあらねば

十四かや死なで命もなしからだ君のゐ捨つるいのちなりけり

十五とや後世のさはりとなりやせむ此の世はかなく逢はではてなば

十六やろくだのはどをめぐるとも君にこゝろをつけてこそゆけ

十七や七度まうでしたび〳〵も君にあふかといのりこそすれ

十八やばせをに置ける露のまも思ふ人にはそはですぎなむ

しれやくるゝ夜ごとにおもふには貝いたづらに朽ちやはてなむ

ことわりやにくしと人はおもふまじ数ならぬ身に人をこふれば」

とよみければ、かの女これを聞き、「あながち硯子をとゞとるべきにあらねども、うたのあまりおかしうさに今一つ。」とありしに、

ことゝや一夜のなさけこめむとて多く言の葉つくしけるかな

これはふかきうらみ。」と、云ひすてて出でにけり。みすのうちよりこれを聞きたまひ「忍びて宿を見よ。」とて人をさしそへにけり。扨しきぶはうき人の心あはれと思ひ、その夜たゞ一人かのやどへ行きて、戸をほと〳〵と叩きて、

いでてほせ今宵ばかりの月かげにふり〳〵ぬるゝ袖のたもとを

このしき歌のこゝろは、一年いせの源氏を讀ひて、

思ふるさみだのあめに濡ぬれてけさはとればまたはぬれ〳〵

と、よみし歌のこゝろをおもひ出でてよめる。たうあいやがて返歌に、

いでやとふなき袖のあら夜影さして心をてらすやよひの月

と、ねがひにそう夜はるなの始ふとうけたまはる。かやうのたとへ、またたにも御人の様々、

らめしや。

女道書

御[illegible]を見奉りし昔は[illegible]、とのみ[illegible]御[illegible]たはぶれ、われに心を[illegible]、[illegible]あるへし[illegible]り
給ひ、若菜のやうなるしづの女の、いひもうすいと白玉の、なにぞと人のとひし時、露とこたへぬう
き身にて候。なかなか文にこゝろを御くだき候ても、いらざる事にて候。昔もさうだの御
時、高師直といふ臣下、塩冶判官といふ人の女房、ことごとの美人たるよしを聞きおよびて、吉田兼
好に文かかせ、じじうといふ女ばうして、いくたび送りけれども、更になびきやらず、師直おほきに
腹をたて、「物の用に立たぬものは手かきなり、この兼好よせつくべからず」とて怒りける。この後薬師寺
次郎左衛門ふと参りたりけるを、かたはらへ近づけ、「こゝに文をやれども手にだにとらず、情なき女のあ
るをば、いかゞすべき。」と、いひければ、薬師寺聞き、「二心の下紐むすびとめ候とも、とかばなどか
解けざるべき、たゞいくたびも文して御申しあれかし」といひければ、「さらば汝書け。」とてかかせけり。
もとより色ごのみの男なれば、言葉におよばぬ山のはまで、いふのうらにぞ書きつらねける。此の
文をみてはいかなる賢女なりとも、たちまち心まよひぬべし。されどもこの女、「さよ衣」と許りいひ
捨ててうちへいりぬ。じじう罷りかへり、かくとなん語りければ、むさしの守おほきに喜び、又薬師

呼びよせ、かの女房のきよふ衣とばかり聞えしに、きぬ小袖などいふものへよとにや、この儀ならば、百物百なりとも遣はさん」とぞ申しける。薬師寺聞きて、いやいやその儀にては候はず、新古今十かいの内に曰く、

まなきだに重きが上のさよごろもわがつまならぬつまな重ねそ

この心にて候ふ。人の[illegible]ばかりをへてむきのなり」と申しければ、師直大きに感じて、御へんは弓矢の道までにてもなく、歌の道にもよく心得たる人なり。それぞれ引出物せよとありしかば、よろづ物の具太刀かたな、数をつくして積ませにけり。その後だにもうぜなくて、[illegible]けれども、遂になびかず、侍従もとの宮のせられて、せんかたなさに田舎へ逃げくだりぬ。この上はちからなし、師直をはなるほしと思ひ、この女房とやすくとりまると思案して、ある時尊氏の御前に参り、「塩冶[illegible]所存にてあるよし申しければ、尊氏聞し召し、いそぎ[illegible]退治すべしとすぐに[illegible]折しも、塩冶は在京してありけるが、この由をききつけて、とてもかなはじと片岡に[illegible]、うちつれが国に下りて旗をあげんとて、野村などに出づる体にもてなし、やまさきへ逃げくだる。女房には、物まうでする体にみせ、丹波路へおとしけり。ここに判官の舎弟、四郎[illegible]といふ者四郎、なにがしの宿所に来りて、兄にて候ふ者こそ、昨夜伯耆へくだりて候ふとぞ、つぎに語

り。師直將軍の御所へ參り、「さしゝ申したるもの、御まへのなかしに違ひつる故に、判官は早落ちて候。いそぎ討手を遣はされ候へ。」と申されて、山名伊豆守ふしに仰せつけられ、夜を日についではせくだる。程なく道にておつつきしかども、判官が手のものども、こゝを先途と防ぎて、ふせぎゐるひまに、落ちのびぬ。山名道にすこしの逗留もなく、はうきの國へ打ち入り、鹽冶判官がかつて謀叛の企てあるによつて、討手を下さるゝ所なり、うつても搦めても參らせたらんともがらは、非職凡下をいはず、御はうび有るべきよしと、札をかいてたてにけり。さる程に、鹽冶國人に語らふといへども、いつしか心がはりして、その命にしたがはず、とやせましかやせましと、案じ居たるところに、女房につけて丹波路へおとしたりしもの一人走りきて、「殿は何とておはすかくておはしますやらん。御臺は早路にて打手おつつきければ、とある家に火をかけ、御臺若君もろともに、一體のけぶりとならせ給ふ。それがしも御供申すべかりしを、この事申さんために、これまでまゐりて候」といふ〳〵死出の山の御さき仕り候べし。」と、いひもあへず、腹かききつて死ににけり。判官、これは我等をいさむる自害なれとて、同じく腹きつて遂に空しくなりにけり。かやうに無理なる人なれば、わりなき中なをもむなしくして、我が身も叶はぬことに、うき身をやつし給ふなり。古歌に、

おもへどもぬしある闇のくれたけは一よのふしもねられざりけり

をとこ

あけてもくれても同じ事の御返し、思ひにふし沈み申し候。業平はうこんの馬場のひをりのひ、むかひにたてる車に、女のかほばせ下簾よりほのかに見えければ、中将見給ひて、

見ずもあらず見もせぬ人のこひしくはあやなく今日やながめくらさむ

女は

しるしらぬ何かあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

と、よみてやさしくなびき給ふ、いせ物語にも見え申し候。そのうへ小町も古への身を後悔して、せき持にて、

いはずとも口の前にはなさけあれ只いたづらにくちはつる身を

と、よみおき候。さればこそ、我らのやうなる世にならんかと申し上げ候には、御なびきなきも聞や、

あさましや男はわれみし能なし人にすぐれてすりきりはして

身のうへ御はづかしく候、とは思へども、あまりつれなき事によせ候て、有の比やかたく候。

女返し

ゆうもしからざる御文、ただ人のいかゞにて候。業平うこんの馬場にてのあやめに御申しなされ候。此のことばは、いか程の御たはぶれを承り、ことにをかしき御返事、まことにおもしろくとなり候ひし。とまりあはせ候ひて、うれしさにひきたく候へども、いまだ一つのことにてめ、もと太政大臣清盛の御子、本三位中将重衡は、一の谷にて川越の小太郎にいけどられ、七重の中にひき渡し、それより鎌倉にわたす。頼朝きこしめし、御感なゝめならず、さりながら、朝敵の中にも一人不便に思召し、その千手の前とて、手ごしの長がむすめ十六になり、みめいつくしき女房の御そばにありしを、いたはり申せとてつかはさるゝ。誠になさけ第一の女なり。さびしき雨中のつれづれにも琴をひき、琵琶を弾じてなぐさめければ、おもはぬ涙やなげきの、つらきなかにもなぐさみには、野山のあらしの音までも、さながら一曲にひきよする心地して、おもひはすこしぞはなれける。

いにしへも誰人か、

琴のねに峯の松風通ふらしいづれのをよりしらべそめけむ

とおもしろく、今更おもひ出でて、いとゞ昔をおぼしめし出させ給ふ。然れども重衡東国へ御下向ありしとき、法然上人を師とたのみ、戒をたもち給へば、しんじつの御なさけもなかりける。ほどなく重衡、京都へとまりしかば、ものゝふ守護し出で給ふ。千手なごりを惜しみつゝ、なげきをとまる思ひ

かし、涙の露の玉すだれ、かけぬなさけの中々に、なるゝぞうらみなるとかや。しげひら都に上り、
衆徒の手に渡り、木津川のほとりにて誅せられ給ふ、千手聞きつたへて、
　ありし日の昔いかばかりなしや今はもはや二世のためにはなきもかへれ
ここにて、十日二十日をおくり、ふたゝび夫の肌をふれずと申し候ふまゝ、まことに一夜のなさけな
るものゝけと、御ことは申したる人ばかりにも、賢女はかくのごとしと、うわさにも、
　くもの家に入れたる心はつたなくとも、たれもかゝる人はたのもし
この心はうれしく候まゝ、いくたびおほせ候とも、まくらつくべきとの御返しは、なかなか申す
まじく候、おぼしめし御きり候へ。

をとこ

　いかなる酔心うちに御暇ふれ、いかなる思ひはますらやらが、やたけ心に君を思へども、かほどの思
ひにまかせてひるもよるも様子、あけくれ思ふ心に、須弥をさし蒼海山となる、世界の水
も念ではなし、こゝろの風にふきやられ、この事を釋尊もまたあり煩悩と説き給ふ。人間にむまれき
て、この心なき人もなし。三千大千世界の御すがた、春の花と秋の月、雛にも物によそふに、なにはに
世の中にあるかたち、名ある月の内情、幻戲のしばしの、移世をかくれん

のまへに十郎御ぜん、しよわう丸の松浦佐用姫衣通姫、ときは御前皆鶴女、小野小町や天女のかゞみ、當麻の中將あやめのまへ、吉じやう天女摩耶夫人、まことの前に千手の前、しづか御前はしのゝめや、和泉式部小宰相の局、大磯の虎ぎやうだい、うつろひやすき花のいろ、紫式部佛御ぜん、豐前國なるまつの長者のひとり姫、たまよの姫をはじめとし、もろこし天竺わが朝に、美人おほしと申せども、いかで君にはまさるべき。それのみならず源氏にも、六十ぢふの女房たちの、そのかず／＼にもまさり、草ばの末の露夢のまも、わすれん事は荒磯の、いかなる波のよる／＼も、かさねに袖のあかし、みまくほしき君かなと、身をうらみ世をかこち、涙をともにしし、錦木にはあらねども、夜はすでに明けければ、とこ／＼とたちかへりぬ。承り候へば、花にうしゆのやく有りて、草木と申せども、果實のときをたがへず、いはんやこれは人として、なさけあらぬはなきものを、たゞ是れとてもみな人の、わかきときのならひにて候はまゝ、御なびき候へ。

女返し

あしびきの山鳥の尾のしだりをの、なが／＼しき御たとへ、いつも／＼承り候、いくたびうけたうにおほせられ候ともかたく候。一年木曾義仲は、頼朝の御代官として、平家を西海におつくだし、天下心のまゝなる故に、われまた都をしらんとしけるを、よりとも聞召し、蒲の冠者範頼、九郎

冠者よしつねを大將として、木曾追討の爲にさしのぼせ給ふ。よしなか都にこらへかねて、近江路さしておち給ふ。粟津が原にてさんざんに攻めたゝかふ。其のころ木曾殿の御うちに巴とて最愛の女あり、馬によくのり、こゝろ剛にして力つよし。いつも戰場へつれ給ふ。このたびも粟津が原にて、ほんくわいもそねむ輩のふるまひなり。木曾殿宣ふやう、「たのもしき巴かな、未來にてもまたちぎるべし、とく／＼落ちよ。」と仰せければ、「こに口惜しき御諚かな、縱ひ女なりとも男子には劣るまじ、御最後の御供こそ嬉しけれ。」とて、おつべきけしきはなし。木曾どの御覽じて、「心ざしはさる事なれども、『弓とりの最後に女をつれたり』と、後日のさたも口惜しかるべし、はや／＼落ちよ。」と感涙をながし宣へば、「此の上は仰せを背くにあらず。」とて、三町ばかりひきのき、遂にそこにてうたれぬ。心ある女なればかくのごとし、いづれの道にも心はおなじ事ぞかし。

月のわに八重むら雲はかゝるとも晴をのこのあればくもらじ

をとこ

しづかなるときにて御入り候へども、あまりに絶えかね候まゝ叉申しあげ候。いつも／＼戰ひにては、ながくしく候まゝ、とりあつめ歌にて、

ふねのくい千引の石とわがこひを荷はばあふごなかやたえなん

たえもせず胸にたく火もいつはりの烟しはさぬあふかくすもなし

なみだ川(がは)そでのしがらみ朽はてゝ流るゝかたなきこひぢなるかな

なか〳〵に君のおもかげ見ざりせば物はおもはじかゝらぬ身に

きみ故(ゆゑ)におもひあかしの身(み)をつくし夢(ゆめ)にもきみをみぬよなりけり

はかなしやうき世にもれぬならひとて身はかずならで人(ひと)ぞこひしき

わが戀(こひ)は千本(ちもと)の松も枯(か)れはてゝおほうみやまとなるよりも猶(なほ)

戀(こひ)ひくれてこのよ消(き)えなばあくるひは涙(なみだ)ぞねやのあるじならまし

わがこひは石(いし)の枕(まくら)もくちぬべしつれなき君(きみ)をこふるなみだに

わがこひにまつな時雨(しぐれ)のそめかねて眞葛(まくず)が原にかぜさわぐなり

まことに〳〵とりあつめ、この十しゆをかしく候(さぶら)へども申(まう)しあげ候(さぶらふ)。はづかしながら我(われ)も一首(しゆ)、

こひごろもみるめばかりにしほたれてほして得(え)させよくちはつる袖(そで)

女(をんな)なにともことばなくて、

われも日(ひ)をいとふうきみの薄雪(うすゆき)にぬれしたもとをいかでほすべき

男(をとこ)あやまりてまた一首(しゆ)、

たづねみよ夜知らぬ山路をまよふ身に君がありかをそことしらせよ

と書きし参らせければ、御返しに、谷かけの薄雪、このよのうちはかなふまじくと仰せくだされて、男これをみて、このよのうちはかなふまじとは、未来の事と心得、いよ〳〵たへかね、今を限りと見えけるに、ある人の見して、これはよき御返事なり、古歌に、

たにかけにふる薄雪もはる日にて人しれずこそとくるものかな

谷かけの薄雪ならば、こよひのうちにはとけがたし、あすは人しれずとけ給はんとの、御かへり事なり。」といひければ、男あまりうれしさに、

うすゆきの心とけにしかすが野をいかでわすれむ世々はふるとも

かくよみて送りければ、暇なくその夜は、海人のかるもにあらねども、浦風にうちなびき給ふ。されやおもへば東山、にごらぬ契ひは清水の、ながれも尽きず嵐ふく、音羽のたきの水たれや、かやうに落ちあひ申さんとは、夢にもさらにわきまへずと、はじめ終りの物がたりなどし、鴛鴦のふすまの下に、比翼連理のちぎりをこめ給ふ。夏の半ばの事なれば、枕ならぶるひまもなく、八声のとりも告げわたる。男あまりのかなしさに、

夏のよのつゝともなき手枕に八こゑのとりのなくぞかなしき

女いせ物がたりの歌なりしが、ついでよしとやおもひけん、

　夜もあけばきつにはめなんくだかけのまだきになきてせなをやりつる

男また、

　秋のたのかりそめぶしになりそめて今はなごりの惜しききぬかな

女また、

　あふときはかたりつくすと思へども別れになればのこる言の葉

かくいひて立ち別れし。男いふやうは、吉野の末山のおくまでも契りたまはんに、よく〳〵人めをつゝみてかよひたまへと、やくそくしてこそ歸されける、これ一重に觀音の御利生と喜びける。そのあした、男文つかはす。

すぎしよは、とし月のうき思ひの數、御ものがたり申し承り、御うれしさ何時の世にかは忘れ申すべき、久遠劫の間もかすならずして、なか〳〵いまは茫然として、夢かうつゝかまぼろしとも、さらにわきまへず候。ひとへに七夕のちぎりと存ずる御事に候まゝ、くれ〴〵さやうに思召し候て下さるべく候。

　なか〳〵になれてくやしき新枕いまはおもひのたねとこそなれ

あひみての後のこゝろにくらぶれば昔はものをおもはざりけり

いとゞ思ひはますかゞみ、御おもかげの身にそひて、むねのけぶりは、ふじや浅間はものかずならず候。

女返し

御文のごとく過ぎし夜は、なれ／＼しき御言の葉、さて／＼御はもじきにて候。誠に他念なく御いもじさ、中々かりそめぶりにみえ参らせ、今さら思ひのたねとなり参らせ候。七夕のちぎりとはあふよの数すくなくとも、ふたばの松の千代かけて、たがひにへだてなく變らぬ色との御事にや。とあやなくも此の上は力なし。二人の親のみ給はぬやうにとはおり参らせ候。肌を、何となう、御みのたはぶれにうちなびき、うつゝなうなよ竹の風情にて、ふしみだれ参らせ候。くれ／＼御はもじにて候。御いとしき御中なりとも、更になにの心もしり候はぬわが身に、そもじ様の御たはぶれにより、思ひのたねとなり、今さらながらも怨み入る許りにて御いり候。うらめしのうき世やな、とは昔はおもはざりの、逢うての今はいよ／＼深き、おもひぐさの御はもじながら、

なか／＼にたえてしなくやさしき新枕のふな／＼におもひますかな

わすれなよほどは雲居に成りぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

となたもおなじ御ことなるにて候。御げんもじのとき申しまゐらせ候べく候。かしく、

人めをつゝみ忍びけるほどに、五月のころよりも、よはにとだえれて通ひければ、昔は物をと思ひて其の年もくれ、二月初めつかたまでも通ひ侍りしに、男のゆかりある人あふみの國しがの里にありけるが、風のこゝちしてやみたるに、それへおとづれゆかんとて、その夜は君の所へゆき、しのゝめのわかれに滋賀へ行く由かたりける。女聞き何とやらん名殘惜しげにて、やがて御かへりましませと、なみだともに立ち別れしに、女、男のそでをひかへ、かくこそよみけれ、

　月出でばそなたの空をながむべし傾かばまた思ひおこせ

をとこ、

　やみの夜はおもひたえなむうらめしや月なきとてもわれはわすれじ

かくいひてたちわかれし、たがひの心のうち、おしはかられてあはれなり。

男も滋賀の里に、三十日になるまで日をおくりけり。その跡に薄雪なにとしてか、病の床にふし、今をかぎりとみゆる。二人の親さまたゞにいたはりしかども、老生不定の世のならひ、むじやうの風にさそはれて、薄雪むなしくなり給ふ。其の後男滋賀よりかへり、此の事夢にもしらず、昔のところへゆきければ、下女出でてかくなんと語りけるにこそ、男前後をわきまへず、しばしは消え入り給ひ

ける。やゝありて聲をあげ、わつとさけぶ哀れさは、何にたとへん方もなし。しばしありて涙のひまより、

「行くときは又もあふみと思ひしがいまからさきは君にあはづか

其の後かたみなど取り出して參らせければ、いとゞ思ひはまさりけり。げにやいにしへ松風村雨、行平中納言にわかれしとき、かたみのたて烏帽子かり衣を、見るたびに怨みしもことわりかな、

　かたみこそ今はあだなれこれなくば忘るゝひまもあらましものを

むさしの守、去年の九月のころは、きよ水まうでのをりふし、見そめしよりしづが心をつくしぶね、こがれしことも今は早、あだ偽りとならんとかや、此のかたみを見る事なにの報いかと、身をおきふしまろび、西にむかひて手をあはせ、さきだち給ふ薄雪と、此のよの縁は薄くとも、來世にてはかならず、一つはちすの縁となし給へ、南無阿彌陀佛とゝなへ、すでに自害と見えし時、折ふしありあふ人々、腰の刀にとり付いて、こは何ゆゑ御愁歎ぞ。」と尋ねければ、はじめよりの有樣をくはしくいひければ、「げにことわりの中、いま世の中程わりなき事はよもあらじ。」と、袂しぼらぬ人はなし。「さりながら、會者定離のならひなれば、なげきてもかへらぬ道にはあらず、能く／＼あととひ給へとよ。」と、とかくなだめければ、最後の供にはよもなるまじ、古歌に、

あふは猶わかれのはなと思へ、たゞ會はずばなどかなごり惜しとは

と申す事の御入り候ふと、色々にけうくん申しければ、今は歎きてもかなふまじ、落花枝にかへらず、破鏡ふたゝび照らさず、これを善知識とさだめ、それよりすぐに尊き寺にゆき、みどりの髪をそりおろし、二十一と申すに、れんしやう法師と名をかへて、大原のおくにこもりしが、感ぜぬ人こそなかりけれ。

むかし、きよもりの御むすめ建禮門院は、一もんに遅れしより出家になり、この所におはしましける。法皇みゆきなりし事、今さら思ひやられて哀れなり。或とき法師心に思ふやう、もののふまでも薄雪の、しるしをいざや留めんと、かうやの山を心ざし、大原のさとを立ち出でて、薄雪すみし都をば、涙ながらに見送りて、道すがらの名所には、とばを通ればいにしへの、猶なつかしき戀うかや、しかのねまでも鳴きそへて、もみぢ色づく秋の山、にしをはるかに眺むれば、みだの誓ひぞありがたき、すゑもたのみの西の岡、よどの川より舟にのり、あとをみかへり眺むれば、東に續く山々は、清水木幡いなり山、猶も思ひの深草や、伏見をしてもなけくなり。くだりかねたる道なれや、八はたの山をふしをがみ、賴みをかけて橋本や、うらみも多きくずのさと、急ぐに程なくいし山につき、それよりくがにあがりつゝ、天王寺住吉伏しをがみ、河内和泉もこゝよりは、堺のはまをうち過ぎて、東

かはるがはるに眺むれば、くもゐ絶間の上がだけ、心しづかに伏し拜み、足にまかせて行く程に、ねごろ小川をうち過ぎて、高野の山にぞ著きにける。こゝにしばらく逗留し、院々谷々をがみめぐるに、聞きしよりなほたつとく、八えふの峯そらにそびえて、千佛のさく雲にさゝげたり。むろの扃苔とぢて、さんぷのあかつきに月をこす、或はせつほふしゆふの庭もあり、あるひは念佛さんまいのみぎりもあり、ひぎやうの三鈷地におち、しるしにうゑたる一株の松、回祿のよえんほのかに去つて、のきをこがせる御えい堂、かうの煙までを出でて、心ぼそきれいの聲、霧にこもりて物さびし。こゝは昔たき口入道がすみたりし、あんじつの跡と尋ねみれば、ふるき板間にこけむして、あれても洩らぬよるの月、かれはいにしへ、西行法師が結びおきし、柴の庵のなごりとて立ちよれば、はらはぬ庭に花ちりて、ふむに跡なきあしたの雪、さまざまの靈場、所々のいうかんを見給ふに、のがれぬべくは、かくこそあらまほしけれと宣ひし、維盛卿の心のうち、げにもと思ひしられたり。猶しも奥の院に參り、彼方此方をみるに付けて、いとゞ涙ぞまさりける。さて卒塔婆をかきて立ておきける、

行きかへりやすそとばをかきつばた遙々きぬるしるしなりけり

かやうに詠じ、こゝかしこに遍歴をなし給ひしが、かゝる靈地に逗留して、猶もうき身のはがれがたさを、さたゞ山里にても、又ふる里のなつかしさに、なくなく都にのぼり、薄雪の御は小路へたちよられし、な

みたにはてぬくうちらに、たゞし音楽は文字ありて、とめ行く道はさこそなくて、風のわたるばかりなり。

これこゝに終のみへりあふなきことの薄雪とともにきえはてぬべし

その後りがし山に、かんさう庵といふ柴のいほりをむすびける。たまく\こと問ふ物とては、みねに木づたふ猿のこゑ、軒もる月のさし入りて、物さびしげなる折からも、心ふかきそふ松の風、のきの玉水おとすごく、かうの煙はいにしへの、そらだき物とおもひ出で、竹の柱にしばのかき、風を防かんやどにあらず。かくてれんしやう、道心けんごにして、二十六と申すには、往生をとげ給ふ。ありがたかりしためしなり。

うすゆきもの語下　大尾

あだ物語

平　爲　作

あだ物がたり序

平　篤　春

此の上下の物がたりは、予がいにしへこゝろざす事ありて、人やりならぬ道にいでて、野べ山邊とゆくりもなく辿りゆくに、ころは春まつ月のはじめなれば、夕風はげしく、空かきくもり、袂もさえまさりぬれば、ある山里に草のまくらをむすび、夜もあけがたにしきすこんとせしに、雪こぼすがごと降りいでて、今日殊にやまず。さらぬだに旅泊に、物がなしき習ひなるにといひつゝ、日を送るに、宿のあるじのゆかりとて、老さらぼひたる人ありしが、我年月をかさね、聞き傳へし物がたりどもあれば、遠き人をなぐさめんとていで侍り。此の翁のよはひを思ふに、かのうら島が玉くしげ、あけてくやしかりし、身のゆくへも斯くやありけん。さて何かやまと物がたりしけるが、昔ぶりとや言のしなるかはり、おもしろかりければ、今日もくくと聞きしに、やまと島根よりはじめて、高麗もろこし新羅、だらの事までも殘るまじく、すべらぎの代々を重ねて語りしよつぎの翁も、これには過ぎじとおもひの、耳なれぬ事のみいひけし中に、わきてあやしきは、さる國のかたはらにて、諸鳥ども此中に、かはる珍らしき事ありつると語り出しはべり。まことしからず思ひつれど、神代には有情非情、みな

物をいはねばし、又人に代となりても、雪山の鳥は[illegible]にてやりて、[illegible]鹿の命をたすけんことをうつたへ、多舌魚は漁父にかたつけ、またのうろ[illegible]たころし、春日のほとりにすむなる[illegible]と蟷螂は、たがひに我が名のいはれをたづね、妙色の蛇は、猟師にあうて、ころされつる[illegible]のをしへ、我に大力あり、汝を害する事いとやすけれど、一日の命をたもつゆゑにゆるすといへり。これのみならず、鳥けだものの言をかはし、歌をよみ[illegible]さだめしおほし。ことさら妹背のなかの、ちぎりふかきことは、人倫にかはらざれば、うたがふべきにもあらずと、[illegible]人の言葉を、残さずかきとゞめ、年月はうちすてて置きつれど、我も年たけよはひかたぶき[illegible]、この世のながらへ、程もあらじとおもへば、寵愛の童女のおすゝめにも、又はなからんあとのかたみにも、なさばやと心ざして、卯月五月の雨のつれづれに、しるし置きつることのはを、かきあつめ侍り。始終寓言のごとくなれば、なづけてあだ物語とやせん。まことに水のあはれなることわりなり。須磨のあま人にはあらねど、さへづりし翁がことに、したがふ鳥のあとなれば、たゞしからぬことやあらめならん、後見ん人の添削を、加へたまはん事をねがふばかりなり。

あだ物がたり上巻

平　篤　作

時は何時にかありけん、ある國のかたはらに、はうとき山のしけき中より、ながれ出でたる谷水あり、野澤に落ちあひし、末は大海にいりけり。こゝかしこみなと田なども有りけれど、今はかへりとも見えず、誠に山谷のかくれあるはせまき、人の通ひは稀に、物静かなる所なれば、あまたの鳥共あつまりて、各の目のまへ／＼に、巣をならべて、物語をぞ始めける。その中に鷲といへる小鳥あり、野寺山寺の軒端の梢の上へ、又は法問言葉のとぼそ近きを宿にすみなれ、儒佛神道の文のことわりをきゝ、あらまし覺え、又は風雅の道にもたづさはり、もとより賢く心よき鳥にて、進み出でていひけるは、「何とやらん今は申し候にて候へども、此の世のあだなる事は、居所の常の無常の道を悲しみ、電光朝露のごとく、朝菌に晦朔を知らざるに異ならず、朝がほの夕をまたず、ひをむしの一ときの命せざると同じ。一息心臓部の殊にても、後の世とまけば遠きに似たれども知らず今日もその日なるらん、といふを聞いて、誠に誠とても無常ものがるゝことならじ。殊に我等などは、わかち色力の通かふ

あらしなれば、鵆といふ名の字をさへ、よわき鳥とかけり。このむかしといふ名につき、無常をかゝる、ことなし。その故は、昨日の日はきのふ、今朝の日は今日ならず、昨日の日はあすならず、今日はきのふ、あすの日は今日に變ならじと觀ずればなり。本來の面を思へば、よき名をえたる哉、無常生滅の理に叶ふ。ひとゆゑ、喜楽はかりなりて、憂悲はあれど、一人ものゝあるゝ道ならねば、たかきもいやしきも、たゞにんたがひ、この世にあらん中は、さならぬ道具を備し、心をもなぐさむべき事なりといひは、いはれたる諸鳥ども、げにもと思へる面持にて、かの有馬鳥が雨夜の物語の時、中将うなづきし有様にて、物もいはず、時刻うつりゆけば、その時もの知り顔なる小雀、あまたの中をすゝみ出で、ひわのことばをぞ難じける。「さて／＼此の世のあだなる事につき、色々の御物がたり、耳をおどろかす許りなり。ふるなの辯ともいひつべし、まなぶに難かるべし。さりながら、我等無才愚暗の身なれば、内裏仙洞、又は四道の儒者出身のみなりと、大學寮のあたり、其の外諸寺の勸學院の軒端にたちすむかとすれば、内外典にわたり、智者碩徳の物がたりをも、少々聞きおぼえ侍れば、うたがひは悟りのもとゝやらんいふを、たのみて申す許りなり。萬の事に總別の二あり、今日諸鳥を御すゝめ、しなじな別すれば、本説本歌教内教外にわたり、總ずれば、無常をすゝめて樂しみを極めよといふ事なり、此の儀さらに信じがたし。三藏教には專ら無常の觀をあかして、後世をいさめ、無相の空にいたらし

る。いざとよ無常をすゝめ、貪慾をおこせといふ事は。」とたんずれば、その時ひわ、驚きたるけしきにて、座をたち直り、すこしも我まんの心もなく、「御ふしんの條もつとも聞え侍り、但し大論並に摩訶止觀にも、慾のつりばりをもつて、機をすくふとのべて、貪慾すなはち道のもとなりといへり。さて又人の世にも、もろこしのいにしへ、邯鄲の旅亭のあひやどりにて、盧生がこゝろに貪慾のあるを、呂翁さとりて、名利を離れさせんが爲に、持ちたる袋の内よりも、一つの枕をとり出し、「是れを枕にして寐ねたらば、ねがふ事かなふべし。」といへり。盧生教へにまかせて臥したれば、黄粱一炊のあひだ見つる夢のうちに、五十年の榮華をきはめて夢さめぬ。其の時盧生、貪慾の念をひるがへして、人間百年の樂しみも、今みつる夢にことならずと悟りて、即時に名利をはなる。斯樣の先蹤もあれば、樂しみつきなば、彼は菩提に、心もおもむかんかと思ふなり。」といへば、もとより智慧すくなき僧なれば、すなはちおもしと、心をおなじうし、「あのおたき善知識なり。」とほめて、「さらばめづらしき遊びを求めばや。」といへば、かさねて理の答へける旨、「雪月花のもてあそび、詩歌管絃などは、世のつねの事なり、是れより北にあたりて一つの山あり、末だち故ありて、ゆはびかなるところに、てうをすみとて、毛いろもかほり、此の世にはにげなき程のひめ宮おはします。かたちを褒めんに言葉たらず、うたひの聲ふ聲こゑなどは、頻伽が子にありて、こゝ衆鳥にすぐれたりといはれし鳥も、はな

おもむべく聞ゆ。品を申さんには、尺にたらむ丈かの御すがたなれば、耶の字をいふにて、つりてむ睦ともに申しけれ、たゞ田姫といはんにもつきなからず、七夕の手にもおとるまじく、中にも琴ひき給ふ事、世にたぐひなし。いにしへの華陽夫人の爪音、伯牙絃をたちしげんの音、俊蔭があすらよりつたへし琴のひゞきも、けおされんやうにおぼゆ。あしびきのまぢかきひゞきを聞かんは、おふけなき事なりぬ。たゞ心々にしたがひ、一首の歌を参らせ、御返事をも見給へかし、といへど、歌にたへたるはうけひかざるけしきを見て、父鶴のいひけるは、古今のじよに、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりけるといへり。花に鳴くうぐひすに、此の座に出給へば、声をのこし侍り。水に住む蛙とは、むかし壹岐守紀良貞といふ人、住吉に詣で、わすれ草つめる木陰に美女一人たてり。良貞けさうしければ、かさねて爰に来給へ、あひ見んと契りて、かたみに立ち帰りぬ。又の年をとゝ行けど、ありし女もみえず。折しも砂のうへを、かはづの前わたりするあとを見れば、住吉の浦のみるめもわすれねばかりにも人に又間はれぬる、といふ歌の文字あり。此の時、さては、ありし女も蛙にてありつらんと、戀ふる心もやみけるとなん。かやうのためしを思へば、心の淺深ありて、難波津の道のよしあしはありとも、歌よまぬ方はあらじ。姫君の睦まじくし給ふ山雀、こから、日から、四十雀などいへる御達のうちを、中のつかひと頼み、いすかのつぼね、ましこ、かやぐきなどいへる御そば近き

衆、此の外もひさき衆もあまたあれば、それまで云ひつたへたまふべくや。又この君に藝能にてものなく侍れば、したしみ給ふともがらまでも、よのつねの方ならず、まことにみなを友とするもことわりなり。ましてしなたかき御方なれば、めん〳〵の由緒をも、ほにいだして、いひつたへ給はじ、といへば、おの〳〵「此の儀いみじし。」とて、すみか〳〵にかへり、しな〴〵の歌をぞおくりける。中にも猿子鳥は、そゞうにはやけき方にて、なにの思惟もなくまゐりたり。

猿子鳥

君をおもひこがれぬる身をむべしこそ火にくばれると云ひ傳へけれ

とよみて、由がらの御達を頼みてやりけれど、うそ[illegible]とかおぼしけん、とりあげもし給はず。

雲雀

物おもふ膝には試すすりたし名はたかくて雲居のひばりとこそなる

とよみて、「世あまねくはなたれるも、我が身のうへ。」といひて、目かけのかの君を頼みてそやりけるが、君がはなれたてまつり、おの〳〵見給ひ、よき歌なりと思へるけしきなり。

瑠璃

うき世のたからの物とはなりもしき金銀瑠璃の名なくこそかな

と書きて、四十からのふるこたちに見せければ、やがて親君の御許へ上げて、ささやくに、なほもほのみて、狂歌なれどをかしき歌なりと、さゞめきけり。

尾長鳥

君ゆゑに心偏れし尾のみのながきたもとを結びこのぼや

と書きつらねて、山からしてぞ贈りける。姫も面白さうに見給ひしかど、かへしはなし。

目白

めは白くなほなるとても願はくは君をあひてにおしもあはばや

とて、さのみすそめやつゝまぬ風情なるを、つかひの日から、取りかくしてもて行きければ、「おにおそろしや。」と宣ひたる許りなり。

鶯

梅に宿り櫻になるゝあさゆふも君を戀ひつゝなくばかりなり

とよみて、「我が身のむかし、いやしからぬ事なるも、ことに出でて、

鶯はるなかの谷のすなれどもだみたる音をばなかぬなりける

と歌人ものたまへど、我はものを思へば、聲の色さへかはる許りなり。」といひて、四十からのおもと

にぞれたしける。姫君例のうけ引きし給はず。使の云ひけるは、「是れはいにしへ、孝謙天皇の御代に大和國靈天寺に住む僧の、最愛のうつくしき童子ありしが、程なくみまかりて後、三年の春、童子、鶯となりて軒ばの梅にきたり、初陽毎朝來不相還本栖となきぬ。是れを文字にうつして見れば、

はつ春の朝ごとにはきたれどもあはでぞかへるもとのすみかに

と云ふ歌なり。かの童子の再誕にてましませば、先祖もたゞならず、古人も、鶯の聲に誘引せられて花の下にきたるといひ、又は花中の鶯、香は花ならずしてかんばしなどと、ほめ給へり。かかる御かたに返しなくてはいかに」といへば、姫君、

「梅にこの隙にわれをしたひなば花より後にわすれもやせむ」

と宣へり。

佛法例

かくいふは岩木なれども、われは未來の苦果の身を案ずれば、佛道の心がけのみにて、歌などよみたる事はなし。知れるをしれるとし、知らざるをしらずとせよ、これしれるなりと、論語にもあれば、歌のことはしらぬよし、ありのまゝにいひて、姫君へは、つかひの口上にいひたのまんかと案ずれば、無常のおどろきにや、ふと心に、三十文字あまりの言の葉、うかぶを幸ひと書き付けて、使に

ざわ[illegible]しける。

[illegible]寶のみなを唱へし舎利弗にまさり思ふ[illegible]たまふるや[illegible]口つき[illegible]に、心[illegible]け[illegible]きて、君の[illegible]上は[illegible]みがたし。さ[illegible]も四諦の名ばかり[illegible]へづる鸚鵡、猶天に生ずといへり。いはんや三歸をとなへば、いか許り有りがたく思ひしに、さ[illegible]後の世を此の世にねがひかへて、い[illegible]、[illegible]となひて[illegible]にけり。

鴫

[illegible]かし、暁の鴫の羽[illegible]、夜がか[illegible]とて、「[illegible]のことはしらざりければ、鴫立つ澤のあ[illegible]やうなれど、おもふ心はふか川よりふかし。」と語り[illegible]よしあしは使のいひなしならん。」と、いひて渡しけるを、みなみな聞きて、暁の鴫のはねがき百はがきとよめる、古今の歌の俤なれば、なかなかの鳥には[illegible]、た[illegible]か[illegible]に[illegible]も、君の身に[illegible]事は、[illegible]事な[illegible]といひて、[illegible]給ひぬ

烏

君があたり[illegible]のまね[illegible]ておけばやところなきからす事もはづかし

とい口さがなき口惜しけり、鴉は吉凶をつげて、いかにもんざしつかなる事なりしやと、古人のいひしごとく、人の上の吉事を返しつて、むかしく里々をなきさまよふとも、我が身の上の吉凶をしらず、此の思ふ事叶ひなば、いち早くしらせ給へと、面かげ見ていひけるや、熊野権現の此の鳥に問ひたまはんとせしかど、いかなる鳥にて、さらすといふ大木を鳥の宿とて、人をころしとぞあり、よいかして隠けて、何のなき鳥とて、吉凶の使をもいひけるに、悪口雑言に、悪業の衆生のならひ、よみにもとかなし。又いにしへを思ふに、六國の昔、此の鳥の黒き羽の、この國のあはれに黒き羽を持ちて、日の光にもあまり、此の玉を取りて、熊野権現の使鳥に日の御前のみつの鐘のその一つなり。此の國の王と、敵人にもおぼえたとはいふなかれ。その上鳥に反哺の孝ありとて、親に孝行をなすと、親を養ふことを考へて、いにしへの時のたれもこれらのかれかれ、食をはこぶかれがらず、此の外にもあまたしたまへる事に、これは悪をしらぬ給ひて、いまだそのならずにてさしをせ給ふ、みな心あるべきにもあらず。ただ一筆の勢かくしあれば、ただ給へるといへど、あがた一筋にいふみ過ぎて、こち〳〵しきとや、きらひ給へり。

鶉　鳥

空をとぶ我はこまの鳥君をのせて足なみはやくたのみかへらばや

鵯

夜もすがら君をこひぬるひとりねに身のひよ鳥ときらはれやせむ

とよみて、「われながらいやしき身なれば、なさけの道をたのむばかりなり。」と、つかひの機嫌をとりてぞ、つたへける。

鳶

おきもせずねもせぬ床の明けがたはとびたつばかり物思ふなり

とよみて、「我は此の體にても先祖いやしからず、第六天の魔王の末孫なり。」と、くはしくかたりて、ふかく山からを頼みて傳へけれど、すがたのふつゝかなりとや、きらひ給へり。鳶此の由をとくにききて、山からをよび付け、目をいからかし、したゝかに腹をたちていひけるは、「よの小鳥のかたへさへ、一度の返歌はありしに、我をばあなづり給ふや、重ねて此の歌をまゐらするに、もしかへしなき物ならば、うぐひす姫をはじめて、みなみなをも、はからふ旨あり。」とて、

口惜しやゝがて魔道へ引きおとしうさもつらさも思ひしらせむ

と、いひすご渡しける。山がらことのほか驚き、いそぎ姫君へまゐり、やうすを殘さずかたり、「此の

鳥は魔王の御ともなれば、あるはかにし給ひては未事なるべし。大論には四種の魔をあげ、瑜伽論には五種の魔あり、楞嚴經とやらんには、悲魔、狂魔、憂魔、知足魔、常憂愁魔、好喜樂魔、空魔、慾魔とぞ説き給ひ、日本にも、あたごの山の太郎坊、ひらの峯の二郎坊、するがの國の富士太郎、大山の伯耆坊、白峯の相模坊、しこうんの豐前坊、鞍馬の三郎なといひて、國々山々嶽々に魔類のおほき事、さばへなす神のごとく、此の鳶の氣にいらせ給はば　如何樣なる天魔波旬のしやうげかあらん。」とおそれければ、うた姫はおそれはしつゝ、歌の思案もなき體なれば、いすかのつはね、ふるひ〳〵そよみける、

魔道へはつまさかおとしそ引きおとしうき姫君といふぜともなれ

といひやりければ、すこしは、きげん直りけるとなん。

鶉

みし見ずばうづら衣かふか草の野べのまくらの色に染めすとし

と口ずさみて、

野となりばうづらとなりてなきくらしなみだにや耐はこそしるね

とはきけど、君にとはるゝ事もなき。」と恨みてぞおくりける。

火桶

いつかも祝言ありしころ、姫の食のひたきとせしものなればや

と口ずさびて、我ながらよからぬ名をもいひて、ねぬのおもひをさへ他さまへわかちし、ひとりごとは

れば、当日も聞きたまひて、哀れと思へるやうなりしかど。

喚子鳥

よぶこ鳥なども、こゝぬはかすむひの中にかぞへそのきさや有りけれ

とかきしたゝめ、つかひに持たせ、こがらの宿へぞやり給ふ。やがて見せ参らせければ、姫君、「これは和歌の三鳥とやらんいはで、ただかき方にて、おとにはきけど目には見ず」と宣へば、いまか、まし、かやうにも、同じやうにぞいらへけれ。こがらは「御つかひなれど、直に御文をとらざれば、いかやうの御説とも知らず。たゞし世の中のとなへには、かほ鳥とも山鳩ともいひ、鳥とも、又は猿ともいひ、鹿ともいへり。いづれを正説と云ふべきにもあらず。萬葉に、

朝霧にしとゞにぬれてよぶこ鳥御船山より鳴きわたる見ゆ

古今には、

遠近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

たどよめるとはきけど、更にはきゝたる事、たゞ三光鳥といふ鳥こそあるなれ、と思ひ給へば、
むづかしからじ。」といへば、蟹君も、さやうにやおぼしけん、返しはなし。

鴨

暗からむ旅にやくればや行くへなの宿かし鳥とたれてとはれん

とはよめど、つたへえたまはれもなし。」我はそのみ物さぼしけれど、諸鳥の口まねをする事にまでたれば、ゆふやみの道たどたどしき折から行きて、つかひの山がら小雀の口まねをして、此の歌を直に蟹君に参らすべし、但し昔、孟嘗君が千狐の裘をもらひしに、秦の昭王のこひ給へば、ひそかに蔵の扉にはひいるに、夜深くして函谷のせきあかず、従ひ行く三千の人の中に、鶏の口まねするものありて、鶏をつげければ、即ち関の戸あきて、事はなく本国へかへりしときけば、我もこれにまなぶべし。たゞし夫れにはかはりて、ゆふまぐれに山がらの我はかへるとも、君にわふ鶏の關をばかるまで、そこつなる宿鶏のなきに、うちたゝかれなば、にがにがしき有様ならんと、思ひわづらひたるけしきなり。

鵜

ここ鵜やよしに回せしと前に入れておさなけるなるむ［illegible］

とよみて、

「これも又さすがに物ぞ哀れなるかた山かげのつゝ鳥のこゑ

と歌人ものたまひおきけれ、あはれみ給ふやうに」といひて、使も頼み侍り。

鵐鳥

昔とふる瀬にしとゞめるゝ日も胸のおもひはきゆることもなし

と口すさびて、言すくなにてやりけるも、又をかし。

雀

われはたゞすゞめなれどもうそ姫といはひするめの名にもかへばや

といへば、使も此の鳥の事をば聞き及びて、姫君に語りけるは、「勸學院の雀は蒙求をさへづるとて、才智世にすぐれ給ひぬ。貫之歌よみ給ふ事は、和國の風俗なればたゞもの給はず。此の御歌も六種のもなたかく、ことえりをもしたまはんすれど、君の御返歌もおもひかしく思ひ給はぬやうにと、狂歌ていなるもことふなき事なり。又はいにしへ實方の中將、奥州にてみまかりしに、其の魂魄も雀と化して、内裏へかへり給へり。かたゞいはれ有る御ななり」といへば、よしこ、かやくき、おなじ言葉に、世のことわざとよ、勸學院の事は、むかし大内裏のとき、公家の學匠たち集まりて、講義せらる、

所なり。其の下部の人の名をすゝめとはいふなり。また諸寺にも勸學院は有るべし。まことの雀の蒙求をさへづるといふ事、しんじがたし。」といはれて、使はあまりにほめ過して、むつかしき目にあひぬる事よ、たとひ此のなんをばいひわけたりとも、さはりとなりて、歌のかへしなくては、本意なきことなり、いかゞせんと、案じたるばかりなり。

鶴

我に歌よむ事もしのばず、えんなるかたにも心のかよへれど、このたびこのかたにいふすぢば、狼藉者として、とり〴〵に、これもかなしければ、歌をば友鳥をたのみて、

またけさも猫にはしれと思ひつゝ人の疑へをなにとかはせん

とよませて、いで鶴のかたにしもやりけるに、心にもたまはこはだにたりるも、文をなし。

山雀

いにしへのもずの草莖あだなれとあだなるせにていざはかりけり

とよめりければ、うき君、「此の歌の心わきまへがたし。」と宣へば、使のいひけるは、「これはいにしへことの人の聲がなにして、ひとりの美女にあひてなまめきければ、女のいはく「あはれなるもずのいたる草莖の上を目にかけて家り〳〵、いつねにこよひ給へ」と、契りてわかれぬ。又の年のまでみれで、莖ばかりを

なし等もなし、女もなくてむなしくかへり侍りぬ。これによりて[illegible]を依、[illegible]にまみ聞はせりつた。しそれは、たゞりにことばをもかはしつるまゝ、せめてそのちぎり程なりともと、思ひ給りたることの葉も哀れなるかな。此の外もすの草ぐきとは、時鳥のくつでのかはりに、草ぐきに贄をさして置くといふと、いろ〳〵の說つ有り。とかくいはれある鳥なり。」とほめければ、おの〳〵宣ふは、「くつでのいはれは、もずの爲にはよからぬ事なり。また伯勞饒舌なれども代にはやすしと、諸人もいひ置く。よろづの鳥の口まねなどをばすれど、みちにたつことをばいはざる故、人にもとはるゝ事なきと聞きつたへり。あまり口ききにて、心もをさ〳〵しからじ。」とそしり給へば、使もおもなげにてたちぬ。

[illegible]

世にしられればおもなき事なれど、我はつひに歌といふものの詠みたるためしもなし、たゞ[illegible]諸鳥にいやしめられんも口惜しけれども、折節人家へたちいで、垣穂のすさまじ、築地のくづれなど通路としてあるけば、世の中の物語などは聞きおぼえ侍り。此の國は和國の風俗として、伊弉諾伊弉冊尊、天の浮橋のもとにて、いひかはし給ひしことの葉よりおこり、素盞嗚尊、出雲國簸の川上の大蛇をたひらげ給ひて後、八雲たついづも八重がき、とやらんいふ歌をよみ給ふと聞けば、和光はおなじ御事なれ

ば、三千七百三十餘社の神々も、[illegible]給ふべし。いづれの神をか[illegible]、[illegible]一首よむ
やうに[illegible]らばやとおもひけるが、我は[illegible]をかは[illegible]の、日本の俗[illegible]には、[illegible]三年[illegible]
なきいひならはし、名[illegible]をきくにたがへて、[illegible]と[illegible]くとき[illegible]、[illegible]
おほすにも、よそまでもなし、此[illegible]の神に[illegible]とて、[illegible]、たゞ[illegible]
とすだの、[illegible]、[illegible]
きければ、くたびれやしけん、[illegible]

こひのやみ照らしたまへや照らさずば神のゆかりの名をやくたさむ

と示現と[illegible]、[illegible]にとて、まづかきとゞめ、[illegible]、
明の[illegible]に見[illegible]たてまつれば、[illegible]にこそ思ひつれ、さて珍らしき艶書のおく
のやうかきて[illegible]

[illegible]　にくからむ[illegible]いかるがと思ひても又なびきもやせむ

とか[illegible]けも、[illegible]らぬとや思ひけん、「かたちこそみやまがくれのくち木なれこゝろは花
にそこばなりなむ。」といひ、なかなか[illegible]を取りてぞやりける。

燕

おかばやと我がいへ作るすべぶしんぬるまも君をわすれやはする

とよみてやりけるを、おの〳〵見たまひ、「これはこの国の鳥にもあらず、他国よりわたり、春のまゝきひなれば、つばめは居舎なくしてけいしいとかはしし上、詩人も宣へり。家もなくて、あさなのすはこれ事やと、笑はれければ、使の山雀のいはく、「つばめは社日をしりて辞してさるとし、日本には二八月の戊、戊、戊申の日、神へ五穀の成熟をいのり、唐土にては、両親の霊魂をまつる日なり、一社日をしりて往行するゆゑ、神の鳥といへば、神慮のおそれもあり、その上、とこよの国より通ひたまへば、猶はづかしき事なれば、御返しばかりはしたまへ」と諫めければ、御心のかされば、せめて御かたの返歌なりともとて、山がら、ぬるかべのひぬまにあはばせばしとも我のふがほのやどなからまし、とかきて、たよりをまちてぞやりける。いかゞ思ひたまふらんおぼつかなし。

鳩

我が身はいやしけれど、忝くも八幡の御使者として、男山に住みなれ、わきて人にもあがめらるれば、よそのきげんをとらんとはおもはねど、恋路のならひにて、中だちの気をとり、あらましうそ姫へかこちけれど、いなせもなきは口惜しと思ひながら、

我をたのみの男山とやおぼしめすおなさけなしや弓矢八幡

とやのけるを、うそ姫見給ひ、「たび／＼の御志添けれど、此の鳥の心たのみがたし。その故は雨鳩婦をよび、晴鳩婦を追ふとて、雨の時はつまをよび、はるゝ時は追ひやらひ給ふときけば、おつとせいもせの中ならん」ときらひたまへり。使の小雀が御言葉さる事なれど、八幡の御ちかひに、他の国より我が国、他の人よりは我が人とあれば、いか許り鳥をば大切におぼしめさんに、おろそかにし給ふこと、まづ神慮もおそろしきなり。其の上此の鳥は鷹より心たけくまします。その故は、いにしへ出羽国小賀、内裏へ鷹を奉り、其の鷹のおやを、あとにして鷲が取り殺しけるを、かの鷹飼にて知りつゝ、すなはちはなれて、八幡山へゆき、鳩をつれだちて出羽へくだり、ほどなく鷲のかたきをとり、文部へたてまつりければ、鳩やの鷹とぞめされける。此の心か、いではなる小賀のみたか立わかへり親のためにはわしをとるなり、ともあり。此のたかも、鳩の力をたのみますば、かなひがたき事なり。この種たけき鳥の氣にちがひたまはん事、おそろしく」といへば、雛君をはじめ来り、みな／＼あんじわづらひたるけしきなり。

雉

うそ鳥のけん／＼とするふりならではろりと捕かくる日もかな

と詠じてぞおはしける。例の見る事もきこえ給へり。いすかし局に、いにしへ今の事ども申すれば
えければ、いすのをなじくて「これは神代に、天上より天稚彦）もとへ、名なし）雉を、御使にくだ
され、其の雉の賜をにくみたまへば、いやしみ給ふべきにはあらず。女は雉にも、ことにやさしき時
は明に、これの雉をのみこそ、いかなる人も、雉の鳥なるをぞきこゆれ、されば、雉は神代の中を
にはありし昔のまゝならばまいひ置きしごとく、たがひにみもしきもなして後、これにあらはかにて
しられなば、いかばかりくやしからまし。」と宣へば、又つぼね云ひけるは、「御志のほど、まことの
賢女にて坐す。貞女と云ふも、両夫にまみえずとある。いづれにても、一人にはなげき給ふべき事
なり。其の上雉にも夫ありとて、すてらるゝにむつい品あり、それも今の御心のまことやかなる上に、
猶たしなみ給はば、障りはあらじ。」といさめければ、うらみそへてゐ給へり。

鶸

扨いつ比、ひたくゝまとろし給ひしとき、はかなき口にまかせ申さし事や、いしうや思はれけん、
とりどりにうそ君へ歌をおくりたまへど、返しもなきやうに聞き侍り。われ又同じやうにては口惜し
き事なれば、ふりかへてかこちたらば、かへりも有るべし。その故に、古伊勢の斎宮にて、杯の
のさかづきに、かち人のわたれどぬれぬえにしあれば、と書きて出し給へば、又あふ坂の関はこえなん

と、つゝまでにすぐれて、歌のすゑをかきつけられし、そのおもかげをしたひ、鶯卿へつかはさせ給、わきの句のなき事はあらじとて、山がらを使にて、発句を書きて贈られければ、すこしはもある行き、「こはめでたし」とて、ひらきていひける様、智恵賢しくて、歌を参らせば、各々おくに御返歌あらん、前句ならば、つけ給はぬ事はあらじとの、御はからひと見えたれば、皆ともに脇の句を給へ」と、いひきこしければ、うちゑみ、ほかならぬ局へ給へり、局をはじめ、使のことわり責にもことや思はれけん、「さらば鶯君わきをし給へ、歌そばにある侍るとも共も、なしあしはいかねと、一句つゝは詠みて見んこそ」といひて、おのおのまかせ給ひける。おましのけはひ静かにて、まことに存みえけり。

咲こそやみなのはいぞころも花ぞかし　隼

うそむく月を春の夜のとも　鷽

長閑なるつぼねの簾まきあげて　鵤局

露もかすめる庭のかやぐき　鵯

雨はふりましこの羽もぬれまさり　増子

とつゞけて、いまだき給ひしに、ひから小雀四十雀などは、ふれまさりて前門のうちにてありけるが、中

に由井は使なりければ、是れをとりて君に見せければ、よろこびて吟じけるが、眼に泪しきりけり、「そもじは、此の句をもなば、何と見給ひたるや、世の中の連歌といへるも、此方は祈念にし侍り、此の句ともにて、君と我が中をうらなひみるに、何れも大不吉の句なり。先づわきの御句に、月を春の夜の友とあそばすは、我をば月花の友にはいやとの御心なり。又局第三の句に、簾を巻きあげてといへり。月をばすだれを上げて見るとも、戸をば指し固めて、我をばよせじと云ふ心なり。又四句目に、露もかすありといへり。此の頃の物思ひの涙の露に、目もかすみてかなしきに、庭のおやぐさにまで、涙の露のおくやうにとや、あまりなる事なり。又五句目のぬれまさりの句も、ふりましごとを猶もいひそへ、ふきやうになれど、涙の雨のふりまさる體にきこゆれば、是れもあはぬ戀のこゝろにて、いた〳〵しき句どもなり。とかく我をばみうちの衆まできらひて、のろひ給ふと見えて、あさましあさまし。」と云ひて、あしずりをして泣きけるも、又哀れふかし。

鶯

名にしおふかひこそなけれ君にあふたくみはならぬたくみどりかな

とて、きのみ物もいはず、思ひ入りたる體にて、使をたのめば、例のいすかの局、目さがなくて、「此の鳥は、よとともにひまもなく、こゝかしこの木をつゝきならし、名をさへたくみ鳥といへば、とり

の中のぼんしやうなり、木のみちのたくみに、よからぬわざなり。」といやしめ給へば、使の日雀のいはく「さやうにかろしめ給ふべきにもあらず、百官の内にも、内匠頭相當從五位上大夫諸道五位等これに任ずといへり。木工頭は直に鐵をも取る役なり。これは内裏の御作事などをたくみて、奏聞する官なり。」とはあれど、御氣にやいらざりけん、かへしはなし。

[illegible]

おもへども隔てらるれば君が方によるとなくなるかひやなからむ

と詠じて「我が先祖、胡燕より玉章つたへしより此のかた、文の使にはなれど、やる事をゆるされ、但しかゝる際ときへ思ひたまはば、世の中にあらん限りはたのみ奉らん。」と云ひてぞ傳へける。日からも行きて、昔に見せ奉れど、御けしきよからねば、「靈儀たゞしくましまさず御かたに、御かへしなくてはいかゞ。」とすゝめけれど、いなせもなければ、つかひつかまつりのかへしのあらば恐しともよき日から見てとりもつたへんと、詠じて、我が歌としの給ふやうにとや、名をもよみをへてやりつゝ、いかゞおぼすらんとあんじたりけり。

[illegible]

きはきこひできたつゝぬれば山鳥のをろの鏡は見るもはづかし

とよめるを、國土から取り備へて、見せ參らせければ、皆々の申し給へる「此の鳥いにしへにしきなる
ね事なり、夜は雌と山の尾を隔てて寝るとて、それふしをの尾をまるくなし、妻の方を見やりて、妻
のおもかげの見えける時鳴くを、山鳥のはつをの鏡と云ふとききけば、うらうらしき鏡の中にて、いや
なる事とかや」とよむとかや。国使のことにけるに、いもとせの中のしたしからぬ鳥は、定めて
目の心もち有るべし。さりとてなみなみの鳥にはあらざるなり。その謂れは、六國に鸞といふ鳥あ
り、此の鳥を或書に、雉に似たり、見はるれば則ち天下安し、とかけり。此の鸞、鏡を見て鳴き舞ふ
事妙なり。是れによつて鏡を鸞鏡といへり。又太政官に西宮と號といへるは、此の鳥に由て我が身
を鑑して、政を天下に振舞ひ給ふべきとの事なり。山鳥又鸞に似たり。これも鏡を見て鳴くと故事
あれば、鸞にて候、夜は朝にて山鳥なれば、あるかに思ひ給ふべからずといふぞ、いかな仕物
もいはず、聞きて給へり。此の鳥は口つきのまたはたる故か、ときとして、かゝみを見る事なきもの
給への。我が氣にあはぬ事をいふとやおぼしけん、俄にけしきかはり、四十になりてことし鏡
とは何事ぞ、鏡を見たとて何のよくなるにもあらず、さいさいくもれば、研がれとするもむつかし
し、かゞみなどは、のまんとてよれば、向はでも叶はぬ鏡なり。又初春のかゞみの餅などは、食物
なれば嫌ふべきにもあらず。此の外のかゞみはいらぬものなり。なんぞや山田山畑のあたりに積るな

りあくとの、其の中をくゝり澤なる山鳥が分として、いらぬかゞみとのたはぶれ事や」と云、云ひて然し
れけり。其の時四十がら、膝だたしくなりて、我はいずかの時に、悪しくいはれる筋目となして其の
うへ名より年たけて、五十に及び、まその書さしかし書様に書られ、座敷を立たんもおとなはれば」
とて留頭り、わしきをかへていひけるは、さてく只今の御物語、殘さずうけたまはり付候て、[illegible]
御いはねには、似合はざる心をもち給へと。たゞし鏡のいはれ知りいまはぬと聞えたり。しらざる
事を貴ならひ、一字はんもんの師となれと云ふ事あれば、あらまし教へ參らすべし。まづかゞみの名
は、まるかゞみ、あさかゞみなどいひて、和漢ともに弄べり。又五月のかゞみは百錬鏡とて、船
中にて鑄たるかゞみなり。このこゝろを、一につなぐ舟のなかにて昔たれみがく五月のかゞみなりけ
る、とよまれしもいはれある事なり。さて[illegible]は、百官の人のみことに奉りし鏡にて、[illegible]
[illegible]、[illegible]事[illegible]野にある水を、[illegible]
が見と云へり。又徐君が鏡は人の心の中をてらせば、世の人こぞりしはれがわけれは、[illegible]
る事ならずとや、つかの下へうづめるを、野守のかゞみといふとも、又野をまもる鬼の持ちたる鏡の
[illegible]人の心のうちを[illegible]、いろいろの寶[illegible]主あるによつて北の鬼がめでに、鬼の惜しみ
持たれば、野[illegible]とし給ひし時、ちからなくして奉りしを、野守のかゞみといふとも、又

秦の始皇即位の頃、深宮に一の鏡来りて、一つのかゞみを奉りて、わたり三尺なり、これは萬人の前にたつれば、六腑五臓みなことごとくあらはれ、やまふのありどころを知れり。是れをのもの鏡、と云ふとも、此の外せつ／＼あれど、いづれにても霊ある物にて、かみしむる物にはあらず。これのみならず神代に、素盞嗚尊、出雲國へおはしましけるに、手摩乳、脚摩乳といへる夫婦の者、一人の姫をもてり。いなだ姫となづく。此の姫を八岐の大蛇ありて、今夜のまれんとかなしむ。其の時素盞嗚尊、此の姫を我にえさせば、大蛇を退治すべしと深く約束ありて、程なく大蛇を平らげ給ひて、稲田姫と夫婦の契約し給ひし時、わたり八寸、めぐり二尺四寸のかゞみを、聟ひきで物に奉らせければ、素盞嗚尊、天照大神へ奉り給ふ。崇徳天皇の御代の時、天皇へわたり給ひて、今の内侍所の御かゞみこれなり。其の後崇神天皇の御宇に鑄あらためて、始めの古き鏡をば、天照大神へかへしまゐらせられ、あたらしきを今の内侍所にをさめ給へり。此のほか八咫鏡とて、天照大神の鑄させ給ひたる鏡二つあり。はじめ鑄させ給ふちひさきは、紀伊國ひさきの宮といははれ給ふ。後の御鏡は、伊勢國蓋見が浦におはしまして、いづれもこの國のまぼりの神となり給ふ。かかれば男女によらず、此の日本にすめる、いきとしいけるもののたから物は、かゞみにきはまれり。また生をうくる物の親をもたぬはなし。人の子はおやに似るてふなゐらの恋しき時はかゞみをぞ見る、と古人もいひしに、

かゞみをいやしといはば、なにておやの面影をもみ侍らんや。不孝のつみもあさまし。此の外かゝみのたからなる事おほし、日をかさねていふともつきざる事なり。といへば、いすかは口のひずみたる事いひいだし、はおをかきたるとおもふも父をかし。姫君は此の物語こまかに聞き給ひ、げにもとや思はれけん、山鳥のをろの鏡のくもらずばかけやうつるとながひてもみむ、と書きて、いだされたりければ、四十からは、當座の面目ほどこしてぞ立ちける。

鵺　鵼

我が昔いふせの中の中だちと知らでなびかぬ事はうらみし

とよみしを、使持ちゆきてみせ奉り。「此の鳥は、神代より別けていはれのある事なり。名も一にあらず、庭たゝき、いしたゝき、いなおほせ鳥などいひて、いにしへの歌人の詠も、いろ／＼にみえたり。さらぬだに道ふればつゐでの葉をまつうちはらふ庭たゝきかな。とあふことをいなおほせ鳥のをしへずば人を戀路にまどはざらまし。など、名はかはりてよみたれど、鳥は一つと見えたり。また、我が門にいなおほせどりのなくなべに今朝吹く風にかりは來にけり、とよめる、これは古今の歌なれば、ことに由のおかしき事なり。」といへば、なにとかおぼしけん、姫君とりあへず「しらぬき妹兒の中の中にたゞよふまなび逢ふ世々のためしは」と宣ふを、使のこがら、此の由かたりければ、返

歌のことわり、げにもとやおもひけん、庭の石にたゝかせて、物もいはず、ふくみ声でなきたる、更なさし。

時鳥

かことよれ三郎に兄はあれば歸らむ二郎かしといふもあらはかなきた
と、くりかへし詠じけるを、田舎使にて、聞る人傳へければ、頼朝見給ひ、歌の心はいかゞ覺えぬとありければ、使のいひけるは、「このこのたまひつる短冊をまゐらせよ」とて、かきなしるす。そのなかにこれ程しなたかき、御かたはありがたし。その故は、むかし蜀の國の王、みかせ、御名を杜宇と申し奉る。蜀の王やこを出て隣につきまとひ給ひ、其の御魂時鳥に化し給ひ、ほとゝぎすとて鳴やことは、ければましけん、不如歸とかきて、旅人まゐで、我がかへり歸ることは西かにとすべりたまふ。又は郭公といふ國の王、他國にて遠行し給ひ、くわうこう／＼とも、不如歸ととなくとも鳴き給ふと云説もあり。古の歌にかこちよれども、昔にあはねばと詠めるも、此の故事なるべし。また四手の田長となづくと、いくばくの田をつくれば郭公の時鳥しでのたをさを朝な朝なよぶ、とよめり。此の歌を心／＼おぼしなしかれども四手の山より、卯月さ月に来りて農をすゝめて、過時不熟と鳴くが、ほとゝぎすと聞ゆ。それ故四手の田をさとなふとかける物あり。さもありぬべき事なり。又此の鳥死出の山より来るといふ

いまだに、古へもいひ傳へたる事あれど、しげければのこし侍り。又此の鳥を百千鳥、ときの鳥、田をさ鳥、田をさ鳥、うたへ鳥、うなゐこ鳥、たち花鳥、もゝ囀鳥、しげ鳥、夜たゞ鳥、たそがれ鳥、いもせ鳥、たま迎鳥、うつた鳥、めづらし鳥、さくら鳥、ゆふかげ鳥など、いろ〳〵に名を敬ひ、詩歌にもこれをよめり。あるひは、一聲山鳥曙雲外、とつくり、また、行きやらで山路暮しつほとゝぎす、又、一聲をまちやらいでほとゝぎすいく夜あかしつとよめるなど、たとへ詠めるをのこされ侍れば、人がたの鳥にはあらで御かへしたまはらぬやうにといへば、姫君、をりはらでのたまひつたへたまひて身はさも上なりてつかへん、とありていだされければ、由緒あれども、ひ歸り聲を見給はず、さぞ時鳥の喜び給はん。此の比よかれぬとりのべの使にまゐり、猶それあはきみして、いと嬉しうこそ侍れ、ひ、ゆふかげの宿のうちとも聞しめしに、おもむけたに又たこゝろなき鶴が籠のうちにとゞめ、心のまに〳〵のたまはし、いかでか此の心をもあはれに一筆、御許さに眠はれぬやうにもあらず、あはれもてはやすものあらなん、うれしくもと、行きける。

鳰

難面しとしのび車のめぐりあひて君に別れのとりとならまし

とよめるを、目がら取り傳へて、姫君にみせ參らすと、何とやらん、御氣に入らぬ御面持にて、またもわかこちみを、はからひていへかしとの御けしきなれど、いづかの場に、いつぞや四十からた、はしたなく云はれし後は、心おくれやしけん、言葉すくななりければ、ましこ進みいでていひけるは、「よしのひ申の歌の作者、御氣に入らぬもことわりなり。此の鳥にはよからぬことあまたあり。その故に、先づ人家をすみかとすれば、庭のかたはら、馬屋のあたりなどをたゝずみあるけば、手足の不淨なる事これ一つ。又當世の武士の道具のはやり物とて、持槍の鳥毛さや、馬のよろひなどとて、くび毛尾羽をぬきとられ、みぐるしき體これ二つ。又東君の春もなかば過ぎ行き、巳の日のはらひの時にもあたれば、家々の小者中間などの負ひまはり、抱き廻りて、鶏あはせとて、ひめもすいたき目にあふ事これ三つ。又人家に住むとはいへど、所せきかまどのほとりに、とやをしむれば、椎柴河或は洞、諸鳥の住所とも同じからで、人の住家をへつらひまはり、我が家とてしもたず、借屋の體にて、借もせの望み、おふけなき事ぞかし。さかしらをいへば、使の日から至極の道理を聞きて、答へんやうもなけれど、一言もいはねばたのまれしかひもなく、又鶏に當座のはぢを與へんもさすがなり、又姫君の御心になき事をもとりそへ、ましこがいひたるも口惜しと思へるけしきにて、「唯今の御物語、すきもなき事なり。さりながら、萬の事一やうにはあらず。まづ心をしづめて聞き給へ、そもそも初め

我が身などやうのものなれば、世の中の人馳走し給ふ事よれたり。鶏なれば、國々家々にかひ給へば、よき鳥と見えたり、これ一つ。又木綿付鳥の事は、世の中さわがしき時、内裏より、鶏にゆふを付けて四關にいだしめて、まつりをなし給へば、諸句に鶏のほまれとなるなり、これ二つ。又孟嘗君が函谷の關にて、鳥のそらねをはかり、其の時の害をのがれしも、鶏の徳なり、これ三つ。又常世の鳥といへり。是れは日神天の岩戸にこもらせ給ひし時、八百萬神たち神樂を催して、出し作らんとせし時、龍宮の鶏を求めて、夜は明けたりと云ふしるしに、鳴かせけるとなん、これこそなれ給ふ諸鳥のうちに、いづれか日神などの御側ちかく、参りたる鳥ましますや。かやうのことを思へば、鶏のほまれたぐひなき事なり。これ四つ。また庭とり、木綿つけ鳥、庭つ鳥、八こゑ鳥といひ、くだかけとり、しほとり、とこよ鳥などいうて、あまたの名をも給へり。これも鶏の德なり。ほとけの御うへにも、上[illegible]とて、とりの御名あるをたつとき事とす。これ五つ。又聖人なども、鶏既に鳴いて忠臣のあしたをまつといふ。又正月一日より六日までを、六ちくの日といひ、七日を人日といひ、八日を穀日といへり。この日のうちに、別していはひの一日なれば鶏日として、鶏の日と定め給ふ事、かの鳥の庭先にあらずや、これ六つ。此の外官職の名にも、日には鶏舌香を含み、下に鶏を[illegible]といふ事なりとはせり。此の香は一木に衆香を具するとて、よろ〳〵のにほひを具足せり。

鶏の下枝あひ／＼の舞をなしたる故、鶏の下にかくして鶏冠木といふなり。かやうに大國小國に群れ遊びて、ほまれある鳥や、みな／＼それ／＼に歌よまむこと、其の雛をばにはなれさせたまへといへば、ほうかしこく思ひけん。鳳凰のやうにあるてふ、よき日を見て、あづまへ参りてよめりき。

鶴

まめやかに我が思ひつる心をば千とせののちも君にしらせむ

とよみて奉りけり。我が身の所作のいやしからぬ事をしほのめかして、山雀の咎をへこそ詠じける。其の後姫君に見せたてまつりしに、返しはしたまはず。時に山雀が「これはいやしの歌ふことを御かたならず。いにしへ仙術を得たる鶴長房も、つゐの羽がひにやどをかり、聊入滅の靈地とも、鶴林とてつゐのかたへは集れり。かやうの謂れを思へば、妹兄のちぎりはなさせ給へ」と、一羽のむつましきと、まゝのかたは、口にもとも思はれけれ、姫君「まめやかに我が身をおもひつる」と住吉わたりきかばたづねてもみん。」と御筆をとりて給へば、使よう喜びけるとなん。

鴇

物おもふ時々かはに波よわりまさなる住吉の水のみなそけ

と詠じて使にむかひ「年らはや五十年をこゆるおいの波の、よるべきあらぬおぼ小船、さしてたのまん

にまゐだに、なき身とならん行末を、かけても尋ね給ふ世もがなと、いひとゞめ侍りぬ。此のはなやかなる音のつゞき、くち木に花の咲きたらんためしもかくやこそと、使のかたりければ、君も哀れと思ひ給へり。

千鳥

片磯も濱にはせではいたづらにあやなく八千代の波かぞへかね

とよみて書きつけられ、思ひかねいもがりゆけば冬の夜の、貫之がよみしかも、我が身のうへになさばやとて、いけ、日暮の寂しさに涙をさそひ参らせけれど、何とあれけん涙ははなし。

都鳥

ありとしは名も鐵はしいざこひて角田河原に住む身ともがな

と口ずさみて、古の業平もあらまし給ひ、みよしのかなるに住む鐵の思ひとといひて、女を四十余ひふる御運こそ哀れなれ。さて行きて、さつてに見て参り、此の都鳥といへる御名、世にただひなき事なり。細宮風森見候といへるは、人道の外なれば、いみじき言葉にあらはれたり。人皇の始め、神武天皇大和の畝傍に都し給ひしより以来、こゝかしこに都を移し給ふ事、三十度に餘り、我が朝にてはいく萬世の中の、何れもおぼつかなし。さる国有りき都にとらへしませば、

みうせける、御かたにはおどろき、御返しなくてはといへば、御代の東路の角田河原の川水のすむ
もすとし給ならずけ」と宣へば、すそを御衣の袖おとし給はんことをいひける。

[illegible]

伴我をよせじとねやの戸をたてはたゝき開けてもあはれとぞ思ふ

とながめて、短冊に書きつけつゝ使に見せければ、これたしとやおもひけん、とりおとしたるやう
にしてぞかへりける。傳へんたよりもなくて、道行きぶりに[illegible]とはたて申して、[illegible]いければ、も
のかひもなきにや。

鵲

名にしおふ笠やみの毛もわが物と雨もいとはず忍びゆかなん

とかけるや、うけ取りて見まゐらすれど、御氣にあはぬ體なれば、使の申しけるは、「是れはいにしへ
遊子伯陽と云へる人、鳥鵲の二つをかひ給ひし、其のうちなり。後に妻の人共にのぼり、牽牛織女の
二星となり、天の河を隔て住みたまふ。常は水けかれ有りとて、此の河のわたりを留したまはず、七
月七日は帝釋善法堂へ行幸し給ふ日にて、水あび給ふ事なれば、二星の渡りをゆるし給へり。其の時
むかしの因縁わすれず、此の鳥來りて、翅をならべて橋となしてぞわたしける。わかれの時、七夕

血の涙をながしたまへば、翅もみぢの色にまがふ故、烏鵲紅葉の橋とは云ひならはせり。かやうに心ざしふかき方なり。」とほめければ、雨にぬれしの鵲は、なほのなさけとや思しけん、

鵬

たゞ中に中潤さきによするしら浪のたちてゐ居ても君そこひしき

となんかけるを、使として行きて「此の鳥はよとゝも妹に逢ひたり、潤さきにのみ住みつゝ、契りもまれにて、色にふけらぬ鳥なれば、后姫の心これに順ずべし、などかける文もありと聞きつたへしに、かやうにふみはへて、かこのよの給ふ事は、おいらかなる御心ざしなり。」といひければ、何とかへしけん聞きしはなし。

翡翠

山川のあくむにすみてとる魚やしふる味なき物おもふ身は

「世をつるとわいる心は、あゝれにおもへとほゝえみてぞよみける二顧すにとりぬる魚のなきがごとくなき心なる君はたのまじ。」とぞいひやりける。

鶉

君にこゝろゆる木の葉にすみ舞となりても鶴ぬるそくやしき

と書きて、我が身の位のほどをもことにいでて、中のつかひをたのみ給ふ。やがてとり傳へて、見せまゐらすれど、ともかくもなる御言葉もなければ、使のいはく、「此君は羲皇の御門より、五德の位をたまはり、周南三國の詩にてましますうへは、餘の事はいひたつるもくだ〳〵し、御返しとてはなきか」と申しければ、姫君「われに心あるまじき末の鷄なおぼめかしそ時をしるとて」ばかりいひ捨て給へり。

鴫

君を思ふ心ふか田にありたつ佇くて片足とてもあはれやすらむ

と書きつけて、ことも少なにてぞやりける。使取次ぎて「此の鳥は觜しろき白鳥とも、又は天河とも名のり給へり。羽は雪毛に似て、飛んで散亂すと作りて、詩人も雪月花の内の花にたとへ給へる程の鳥なれば、御返歌もあれかし」といへど、姫君何とやらん、なやみ給ふやうに見えければ、「重ねて」といひてやみぬ。

鷹

われならでよそに契らば劒ばのきれむ限りはうらみてもみむ

と詠じて、使をまちて贈らんとしけるを、あたりはなれぬ友どちなれば、よかゝ此のよしを知りて、

鶯じの未詠くうらいしこまらば我も腰折歌なのしこまるかせたまひて。

鴨

霍の聲こゑた一騎へしたにしそふかもの新にいりの品るかな

とよみて、雀者てはくやしとや、鳥のかたのみたこ使の、小雀こたゐるをかいはひこ、十上二そや
ける。使の力に及ばず、二の嘴一せにあ[illegible]て、見ず事もすれば、品君此の比は御心の例な
りすぎしとては、何上のにす、かわ打ちあかれてるへり。使いなけるは、此の鳥を、いづれも
かわしいふべからず、鴫鳥はわきて契ふかければ、これにあへたれとや、鸞鶯の衾とて、世の中
にもしる物。いまそとなのたまへば、これにまれたる事にあらじ。とた、鴛水にとしめつらきば
まほだて、事はふたつのはしきなげしみ、古人も宣へば、ねたみふかき鳥と見えたり。此の鳥の心
やはこれをすは、とそのえにしなの立たし、とこの鴨いふ人の歌いつにまて、秋望にも、あし
がも、すずがも、よろつ、あをみ、やもめのあひと、こまねの鳥、又鳴の羽色は、春の山の色にたとへ
ほとゝぎす、うましたのことは有、鵬すて此のかたくは、けやけさはそれあり。其の品は浄土
の三部、觀無量壽經に、是鶴法として、それから法なく、古には、いかと
ま事に隠[illegible]に小雀にはなるれば、

心なのこすべきにもあらず。これにつけて古を思ふに、津の國生田といふところに、うなゐをとめのおきつきといふあり。これは昔津の國蘆屋の里に、うなゐをとめといふ女あり、これを二人の男ありて爭ひけり。一人をばちぬ男といひ、一人をばさゝだ男といひける。男の心ざし、いづれもひとしければ、女思ひわづらひて自害してうせぬ。二人の男もまた自殺しければ、これを葬るとて、をんなの塚をば中につき、二人の男の塚をば兩につきけり。これをうなゐをとめのおきつきといへり。おきつきは塚の名なり。此の心を萬葉に、いにしへのさゝだをのこの妻こひしうなゐ少女のおきつきぞこれ、とよめり。又花山院の作らせ給ふ大和物語とやらんには、生田川にうかべる水鳥を射給へ、矢の中りたらん方へなびかんといひければ、二人の男うれしき事に思ひ、水鳥を一どに射侍るに、心ざしの淺深やなかりけん、二人の矢ともにあたりしかば、女せんかたなくて水にしづめば、男も共にしづみ、一人は手をとり、一人は足をとらへて死にけるとなん、塚のつきやうなども細かにのせ給へり。此の事世にあまねく知る事なれば、こまかにいはんはむくつけき事なり。今こがらのつたへし文は、此の物語の面影なれば、何とも思ひわきがたき事なり。返歌をば、おの〱の中にてし給へ」とて、おましをたち給ひぬ。使もことわりとやおもひけん、ものもいはで過ぎぬ。

鶫

君にしもはなれて沖の島津島うき身を水にうけてしなはや

とかき付けて、「汐干に見えぬ沖の石も、身の上なり。」とばかり云ひて渡しければ、使取りつたへて君に見せ奉り、「打見たるうはべよりも、心はやさしかりつる。」とかたれば、「さては御かへしなくてはいかゞ。」とて、かやぐさのはしにてぞよみける、「聞くもはや悲しかりける水底にしづむほどなる君がおもひを」といひてやりければ、「いかゞ思ひ給ふらん、ゆかしき事なり。」とぞいひける。

鷗

つれなしと思ひにすてじ沖の海のふかき限りはかこつても見む

とよみて、「我が思ひのほどをば君も知りたまはじ、」とやうに言葉をかざり申したれ給へと、一すおにを憑みけり。この所の持ち行きて見せ奉らすれど、姫君はふところに入れなば何とも言はず。かやぐさ「此の鳥は、鴨の浦にばかりなれて、身をはなれぬ所に候か。」と、いひや、使ひ此の鳥かへ聞えすば、ふかくれたるまでしるのもたしと思ひのに、「すなどりするをしもかれも給ふか、あまくはしら鳥ぞ、神代のことゝいふとも、御身にも火闌降命は、おもりかへ海の幸ましまず。弟の彦火々出見尊は、山のさちを山の幸ましますこ、或時たがひにさちをかへし給ひし、すなはち兄のさちに鉤を、弟のさちに弓矢をかへし給ひ、ほゝでみのみことの弓矢を、兄のみことに返し給ひ、たがひに釣漁をし給ひ、

いづれもさちを得給はず。其の時すそりのみこと、ゆみやをかへし給ひ、ほゝでみのみことへ貸したまひし鉤をこひたまふが、魚にとられてうしなひ給へば、力なくてあたらしきつりばりを、一箕にもりてかへし給へど、昔のつりばりならずばとらじとこひ給へば、せんかたおはしまさずて、鹽土のおきなを頼み、海神の都にいたりて、豐玉姫とちぎりをこめ、海神そこの魚給へば、大小の魚をあつめて、つりばりの事を問ひ給へど、いづれも知らず、たゞし赤女の口にやまひありといへりと。其の時赤女の魚をよび、口をさぐりて、かのうしなひ給ひし針を取りいだして、みこへ奉り給ふ。其の後ほゝでみのみことも立ち歸り、御兄の火闌降命へつりばりを返し給ひきと聞けば、かゝる神々の御上にさへ、かりすなどりをし給ふに、此のとりさたをたゞといふ事にしらると。又山谷の詩にも、中に白鷗の閑我に似たるあり、賢人の心のうちもかなたにたとへたまへば、かゝみの鳥にはあらず、御返歌たまはりてといへることば、なにとかおぼしけん、かきそへての事とて返しもし給はず、使は我かたへかへり怨みられけると、あんじ居けるに

鴨

しらせばや涙の淵のふかきたびに沖中川もまさるばかりを

と口ずさびて、我がすむほり江の水よりもふかく、使を頼みてやりける。雁昔見給ひて、これは、にほ

その日の津中川に流し、あとも昔にかへるふことも盡きぬやうにと、よみたりし歌を、本歌にて詠じけるや、心の花の色のゆかしやことばかりにて、打ちおきたまふ使のこがね、たゞは捨てがたければ、狂歌このみちもことにて、たのまれんことかなはねば使ふる身もこゝろふかの風にちらばや、といひやりつゝ、思ひたる〔illegible〕とき給ひにけり。其後は、諸鳥共も、うた頼りあまりにつれなかりしか、おぞましくやありけん、訪れも日にまれに稀になり行き、のべいびしきに、昔やまへの初めづらしよか、わらはやみの樣になやみ給へるが、いまだよからぬや、しらがさねの日も近づけど、衣がへし給はんけはひもなし。これは此の比かよひし玉づさ短冊の、まゐりおろかもなく、おいらかたりし御心ざし、いづれをとり、いづれを捨つべきにもあらずと、それをなげき給ふならんとはおもへど、日ましにおとろへ給へば、みなみなおどろきて、「いかゞせん。」といひしが、「わらはやみには祈念に如くはあらじ。」といひて「さらば、のりの師をたづね。」とて、數々のとりどりを出しやりける。中にわきて、山雀は賢かりければ、やがて聞き出し、つばめに語りけるは、「これよりあはひ程へて、山中のおくまれるに、梟法師とて、やそぢに餘れる持律持戒に、〔illegible〕、青髪の大德、功の驗者のやうに聞き侍りし。」といへば、おのおのよろこび、「片時もはやく、やうやう奉り、御枕加持もある樣に。」と宣へば、山雀ら卽時にゆきて案内をこひ、夜たかを奏者にて、しかじかのよし直に申し侍り。

老僧はきはんするさうに二間を給ひ、此の姫君の御方は、まさなみもつきたへ、秉燭、内々御あにかゝりたまふと、いさゝか相背の時節なれば、やがてまゐらんとて、御同宿にはまたの木魂小僧の蝸蟖ふせ引き具し、夕陽の西にかたぶくをまちて、山々みねく、木のまくの木がくれをつたひ、條の島にしのびてまゐられける。此の由君にたふせ奉れば、うれおこりて祭の行者もしらぬ山此これは、あなたの花もうつろひはてて、又わが住みたるところのあたりを、打ちつけならんかに見もえや。」いづれもげにもとや思ひけん、おましにありたる調度めく物など、とり置きぬる。をりふし月もおぼろなれば、みかたちも明らかには見えじと、御枕もとへ請ずれば、此の老僧もとよりくらき所はまて物にて、月の光もつゝけれど、わざとたどるふりをして、御そばへより、一儀のことなれば、御祈念の道具も持參せざれど、愚僧ほどの碩學の上には、苦になる事にもあらず、前後左右にたてる深山木を、胎藏界七百餘尊、金剛界五百餘尊とあがめ、谷水のおちくるひゞきを、鈴錫杖の音と定め、風のさゝらのさらくと音するを、いらたか數珠と觀念し、眞言の祕術をいだし、一いのりいのらん。」と宣へば、みなくたのもしく思ひ、いのりには流々ありて、いろくならひありとはきけど、つねのいのりの如くならば、定めて手執錫杖、當願衆生、設大施會とよみはじめ給ひて、三世諸佛執持錫杖とよみをさめ給ふならん。又呪には不動釋迦文殊普賢地藏彌勒藥師觀音勢至阿彌陀阿閦大日虚空藏

背ひ十二部の經をくり、殊更これは[illegible]なれば、果闇の御聲、おんころ〳〵せんだりまとうぎそわか
とも、[illegible]給ふと、おり〳〵耳をすまし聞給へれば、とはなくして、何經とも聞えず、ふたたび
ある事を口にまかせ、高らかによみ出されければ、聞きゐたる僧達の耳にも、これはいかなる事で
やと、あやしくもおもひけり。さりながら[illegible]に油斷もなかりけん、虎狼のほゆる事も
なる聲をいだし、[illegible]は[illegible]の[illegible]を[illegible]はりて淨をなが[illegible]、なごりなく消して終られける。此の御
いのりのしるしにや、[illegible]ことども[illegible]給ひて後、御身のあ[illegible]しき[illegible]けれは、つきそひゐると[illegible]
[illegible]うちに[illegible]はなし[illegible]か[illegible]、後ろに[illegible]ばかりに[illegible]、何とかし[illegible]
上人[illegible]、[illegible]となつて、御[illegible]をたちかねてゐ給へるが、山からは智慧かしこくて、此の法
師のうつりうつり、[illegible]し[illegible]見[illegible]、これ[illegible]姫君に心亂れにけりと悟り「我が身いかばかり、持律
持戒の[illegible]に[illegible]と見給ふや」と、ほや[illegible]た
ちより、手をとつて引きたてけり。
御經にこたへくたびれ給ひたるや、夜明けまで山鳥の聲きこえて、笑ひたてられ、いかに[illegible]き
[illegible]、[illegible]古寺[illegible]給ふ[illegible]、[illegible]の[illegible]法師は[illegible]道たゞ〳〵
引[illegible]と、[illegible]、[illegible]に手をひきけれ、[illegible]

いかへり、其の儘うちふし給へりき。さて又うそ寒の朝うちの窓には、やまがらこ、なやて、三
ふ鳥、これより下つかたには、かはらひわ、からすだち、やまとこの外、又聞しれ給ふ鳴き音には、
日がら、小雀、四十からなどいふ鳥ども、山がらに向ひて、此の方の御祈りにまゐられし、大とくの顔
つき目元は、何とやらんやうありげなる事なりしと、とりどりに笑はれけり。山がらは籠居したれば、
前がた三日でさへたかりける。姫君は何にも構ひたまはず、わらはやみの悪寒ぬるみたるやうにて給ひ、こ
このよけにたち出で、筑波嶺にはあらねど、このもかのもを眺めやり、み山は餘寒にけうとければ、卯
月なかばになるまでも、葉まじりに花の咲き残り、青地の錦をさらすかと見たまひ、何にとなく御心
にうかべば、古郷へさしもかへらでゆく春の花のにしきをなどのこすらんと、くちずさび給ひぬ。
とりなくの何かと宣ふおもひや、我が身にもつもり、又いかなる日にもあはんかと、心細げにおぼし
つゞくるに、山かげなれば日もはやくかくれ、那寺の鐘の夕をいそぐ聲も聞ゆれば、猶物のあはれも
まさり、涙もろなる御けしきにて、ねやへぞ入らせ給ひける。さて又山寺の大徳は、四五日は水をだ
にも召さず、なにかと物をあんじたるていにて、うちふしゐ給ひしが、ふと起き直り、こたか、みゝ
づく、蝙蝠などを、わが牀近くよび給ひて、「今あたらしくいふべき事にはあらねど、年月をしへつる
學問のかひには、主師親の三とくのふかきこと、又かうかうをなすといふ事なれば、さだめて聞えてこ

そあるらめ。これにつきいにしへを思ふに、高僧といはれし出家、三井寺の智興法師に使はれ、智興やまひあり、醫師の力も及ばず、安倍晴明陰陽の術をなして曰く、『法師のやまひ治しがたし。もし命にかへけるものあらば、祈りかへんべし』といひければ、代らんといふ弟子なかりしに、證空あまたの中に、一人すゝみ出で、『法師のために命をすてん事、いとやすきことなり』と、晴明にいひければ、すなはち祈りかへけるにや、智興の違例たちところに癒えて、即時に證空やまひの牀にふしけりといひ傳へたり。かやうに師匠のためには、命をさへすつるためしあり。主君への忠臣にかぎりなき事なればいふに及ばず、又これは親の孝行なれど、主師親はさだまれる事なれば、かたりてきかするなり。いにしへの二十四孝などに似たる孝行は、今の世にも稀にはあるべければ、語りにはおよぶまでもなし。昔た中將といひし人、[illegible]ともに一人[illegible]、つく[illegible]しが、子三人[illegible]て、まことなる凶夢をみて[illegible]ければ、三郎[illegible]子三人、その御恩をとこそ思ひて[illegible]て、母のおもひをかなへけるとなり。これこそ愚僧が氣にいりたる三國一の孝行なれ。此の三郎殿の心の様なる弟子を一人もちて、物をもゆづりたきばかりなり。それ又しきたへの枕の上のまぼろしに、うぢ神の御示現をうけたまはりて、其の神託にいはく、『この處にありとしあるほどの諸道具を殘らず、うた姫とやら[illegible]を求めて、此の寶物をおくりけるに、即例として我一人のそなれ、そのかずにはいりけるや、

但し出家の戒法をやぶらじとや、おのがたき事なれど、佛道にのぞやうは餘國のならひ、此の國は神國たり。これらしくは來ぬもみなすかし。ちはやぶる、神のいさむる道ならなくに、ともいへるもことわりなり。天の浮橋に女神男神となり給ひし事あれば、神の御制する道にはあらず、いそぎ春日の宮にまゐるべし。」氏子のはなに、氏神のはなむけなり」と、いかり給ひて、しやだれのとびら荒らかにひらきて、神はいらせ給ひぬ。此の儀神敕に任せずは、いかなるくせ事か出できこん、いかにかくはと言へば、弟子ども、此の大徳はいつも妄語をこのみ給へば、いまの神託もそら事ならんとはおもへど、師匠のことばなれば、まことさうにしてぞ聞きゐたる。その中に小僧のかうむりは、まだ年もゆかざれば、なにの遠慮もなくいひけるは、「せんどはや御まくらがみのなりふし、老僧の御たましひは冥土へも參りたるかとおもひ、いかばかりかなしかりつるに、いまだながらへ給ひ、かかる事師たのみはめでたき事なり。神の御つげはなしとも、此の小僧めがあしたゆきまで、御文つかひにさされまゐらせんと思ひまうけたるに、猶神慮ならば否みがたきことなり」といへば、老僧なのめならず喜び、人のおやの末の子に養はれたる心地して、「我が一世にたくはへたるもの、又てらの什物いづれの一物ものこさず、小僧にあたふべしく」と、ひとりごといひながら、文こまかに書き認めて、「よしあしは小僧が才覺にあらん。」といひてぞ渡されける。ひるはよそめもしげしとて、たそかれ時をまちえて、姫君の御か

たゞ縁か、山かもみたのあまこ二心に隔てはなけれど、大徳の御いのりも給ひし時に、にげなきふりを見せたまひしことよ、昨日今日の事にて、みな〳〵覺えたまへるに、又つかひになられしことよ、おもはゆき事なりつ。頭背も例にたがへ侍りし後は、いまだ御心もよからねば、几夏三伏の比をすぐし、白藏の空にもうつりゆき、長月なかばにもなりなば、木々の木の葉も移ろひ、のべの草葉もうらがれ、蟲の音もよわりゆかば、殊の哀れもまさりなん。かゝる折もなきますがにて、かこちまさ給ふべしとぞ、縁はましこゝ認むれば、御遊ぶ事を取り停へんことといひてこそかへしけるに、小腕たちかへり、かくなさびつれは、いかなく樂しくかへりぬるまゝとかたれば、大徳、われ又御神の御よはひにもしとしければ、年のたけぬるたゞ、秋の了きてまたれし事、心のうちのたが月に、いかばかりとせいしてたまはし、なきたゞその日の五十のあのの、あふ事もくにたゞはてなば、くやしからんとくどかれけるも、哀れふかし。

あさ物がたり上卷（終）

あだ物語下巻

平　篤　作

ある時に、□□ゆく駒も足なみ早ければ、夏もはやすぎの街に、月もさやけき秋になり行くまゝに、いにしへ春のころ、とりぐ\、うち姫へ玉章短冊おくりしことも、箸鷹の中へ洩れきこえければ、兄鷹をはじめ兄鷂隼雀鷂鵟鳴まで、木しげき山べにあつまり内談しけるは、さて世の中に名をよばるゝほどの諸鳥ども、いづれもうち姫にやらんとへ、玉章短冊をやりて、返歌を見てなぐさめつると聞きいだし、うらやましきことなり。われらは諸鳥を食物とする事なれば、うそ山雀のやうなる小鳥などゝ、なにとはかられはいと易けれど、かゝる妹背のみちに、まびと心は後の世までのあざけりなるべし。いざや歌を一首づゝよみて参らせんに、人々と贈りなば、目かすかになるべし。さりながらうちわりなき障りなどありては、はいなき事なれば、[illegible]どにかきやりて、こゝろぐ\の程をもしらせまゐらすべしとて、同じ處へあつまりてぞよみける。

兄鷹

肝かきの羽はとぶとてもなにかせむ君こめやまにゆくとなければ

雀　鵰

渡り鳥にこそつらここに一あはれやむさびれやあはれ事となし

見　鸛

雛がなくも越えてはまの白鳥なれば雌一羽つつもまれはとし朝な

鸇

こそ姫も翅のあらば羽くらべの鷹ともなりてちぎりそめまし

隼

ふきこにてうぐんじ雅をこえぬればこれにかにしもならで悔しき

鷹

あけぬまはさめて野守の鏡にもうつし見せまし鳥のすがた

と、あやしくにはにらるるをきき、簡子なる心事[illegible]

[illegible]

[illegible]

侍共に走り出でけるが、何となううしろめたければ、かへりみがちにて姫君へ参り、「かくこそおりけれ」といひて、歌ども見せ奉れば、ある限りおどろきさわぎて、「此の頃君はいかなる目にかあはんかと、かなしみ給ひし御心の中の、ちかはさる事よ」といひて悲しみけり。さてしもまた、うちすてゝ置くべきにしもあらねば、「御かへしし給はんかし」といへば、姫君「歌よむ事はならひ侍らねど、玉章短冊などをこのみはし、したしみよる程、いかなるうき目にかあはん」と宣ひつゝ、よゝと泣き給へば、四十から聞きて、「これも父御ことわりなり、年月むつまじくし給ひしなかには、我又いま一たび命をすてゝ、鷹のすみかにいたり、はからひ見ん」とて立ちゆけば、姫君をはじめ、各々名のみして、ぞ思はれける。かくて歌よみし鷹どもは、返歌遅しと腹立つ顔にて待ちかねけるところへ、四十から行きけるが、我は思ふ心あれば、まことならぬわざながらこの體をすべしとて、つばさをたれ身をいためたるふりにてぞ行きける。兄鷹を上座にて、つぎ／＼にならびゐけるが、小鷹のなかに、すぐれたるは、「この頃はたゞかふ事のみにてひまなければ、ふき鳥をもとりて食せず、ふき折節四十から／＼ると見えたり。使のしやう悪しくば、かへすまじ」といふを、四十からは聞けど聞かぬふりにて、いかにもうちふれたる體をなして、まおもかくふれば、「なにとして遅くはきたれる」と、兄鷹兄弟よりたゞに問ひ給ひけり。「ない／＼とくに参らんと、こゝろいられはしけれど、四十年をすぐして、雨露霜雪を

しのぎ、その積りにや、又は老いらくのよわりやら、かたみすくみ、かさなどもあまたありて、行歩心に任せざれば、運びなほれ侍りぬことといへば、兄麿をはじめ何れもあはれと思へり。さしばは、さし出でたるとりさかなにて、「扨はやまひどりなり、食せば毒になるべし」と、小聲にさゝやける。その後又「歌の返歌はいかに」ととひ給へば、「むかし惟喬のみこの宣ひけるは、かた野をかりてあまの川のほとりにいたるをだいにて、歌よみて杯はさせ」と宣ひければ、かのすまのかみ詠み奉りける、かりくらし七夕つめにやどからんあまのがはらに我はきにけり。みこ歌をかへす〴〵誦したまひて、返しえしたまはず。紀のありつね御ともにつかうまつれり。それが返しと伊勢物語にかきのせり。これはしばしに御返事いできかねたるにや、又はゑひ給ひたる故にや。されども七夕つめのことの歌、名歌なる故、みこの御返しなきといひつたへり。此の物がたりのごとく、おの〳〵其の御歌とら、さもありつべく候か、名歌なれば、にはかに御かへしもなりかたき由申し給へり。さて〳〵右の詠歌どもの、御ことばつゞき、御作意のはたらきたる事、ほめたてまつるも、くわんたいにて、そらおそろしければ、御ゆるしもあらんところを、残さず口に任せまうし侍り。ますがきの御うた、ますむ月とは、ありけの月は身おもければ、こなたの歌よりかたにへおもいりて、のたまひたに、むかしの歯を申くも、たかはすでにとひわたりて給ふ事なるべし。君こゆ山にゆかれば、とすかき

の羽とせんなきとや。もつともの御心なり。しかれ文字のこゝろなきまでたゞはで、あまたの別ものなき山をさへ給ふ事、まことにめいよとぞおもしろき御歌なり。それ、こゝでの御うたは一羽づゝとは、かのばの鳥の、むれゐたゝき鳴るとき、たかは賢くましませば、ほこをたてたることもし富へとぞおあかり、よくかけまはりみ見給ふことなるべし。そのごとく君がはまりなくば、うしなはむと御心にかゝこれ又よかく思ひ入りたる名歌なり。きみとひとりの御歌。これどもとは、あまたのものか、ほめふまはこつぎつにて、めん〳〵にゝつゝとり給ふ事なるべし。此の君はひとり、かこふ給ふなけれまたなれば、こゝろせりにもならぬとなげき給ふや。はらにあはれたる御歌にて、あはれのふかき名歌なり。われたかはの御歌に、こもつもここまとは、しづかなるこもりなりにて、物をあまたがことく、ちかごとおはぬ鏡のこゝろにや、もつとも秀逸なる名歌なり。うき雛の御歌。羽くらへとては、二月なかばの頃、あまたのたかの山へあつまり給ひ、わかたんと思召すをたかを、あたかのおひまはり、羽のはやきをつまとさだめ給ふ事なるべし。そのごとく姫君と、羽くらべありたきとの御心ねかひ、これ又思ひあまりたる名歌なり。あはぬまの御歌。野守のかゞみとは、むかし、鷹のみかけいうつりて見ゆるとて、野なる水を野もりのかゞみといへり。あはぬまは、せめて水にうつる御かげなりとみ給ひたきとや、まことに君をこふる心に、水のあさからぬ程もあらはれたる名歌なり。佛木の

いにしへ、ほの〲とあかしのといひし言のはも、此の御作意どもには、しまがくれのみ。又わかのうらにしほみちくればと詠めしとき、此の御歌どもにいでなば、山邊赤人も赤顔になりてはぢたまふべし。又櫻ちる木の下風とよみし貫之が歌も、此の名歌どもの中にまじはらば、空にしられぬ雪と消えぬべし。在原業平は、その心あまりて言葉たらず、しぼめる花の色なくて、にほひ殘れるがごとしとは、古今の序にことわれり。おの〱樣の御歌は、花のいろはにほひにおとらず、にほひは又いろにおくれざるが如くにして、心も言葉もたらひて、帝釋の瓔珞の光りあひたるが心地し侍り。殊に六首の御歌どもは、とりどりの劣りもなく、梅に鶯の囀るやうに、うぐひすの音にほとゝぎすの聲をそへ、十四十五の日の花を、かくて見るときは、かくもあらん。ことさら御作意のはたらきたる事もあれ、肝魂も消え入りて、身の毛もよだち、まことに萬歳入りたる心地して、目の玉にあるはとおぼえぬにたへたる御歌どもなり。盤古はじめて、開闢の昔よりこの程に至るまで、同じやうにはあるまじ。一首し、日はまうでて、百首あそばしにし、かくなせば、たゞ一首もおぼえたてまつりえられ、まことと思ひけれ、おのれが心もいく昔しらず、いつまでもまつべし。早かへれ。」とてぞ返されける。兄膽もめとていさて〱四十があまりは、ものも知らずて目もあきて、心もやうやうし。あかやうなる鳥などには、わかきはうすきものつべからずとも、小職ともに教へまき、わが身もそのつらいの給ふ。又わの大德

は、彌勒の御出世、五十六億七千萬歳のあかつきをまつ心地して、長月にもなれば、小僧をむつまじげに、ちかくへとひきよせ、汝がいひしことばのすぢ、夢ほどもちがへじと今までまちつるを、弟子には似合ひたる心とや思ふらん。さて又いつぞやの神託を、空しくなさんもさすがなれば、つかひに行きてたべ給へ」とて、文のうちもくるみすぎておくに、

しらずばやつよき斷りのしるしとて身がはりに身のなやむすがたを

と書きて、「山がらのかねごと、ちがはぬやうにいひなせよ。」とて、わたし給ふに、小僧うけとりて、「過ぎにし春のころ空しくかへりしも、不成就日にあたりて、まゐりたる故かと覺ゆるなり。同じくは日をえらびてやり給へかし。」といへば、大徳「けふは九月九日ならん、重陽にていはひの日なり、とく行け。」とのたまへば、小僧かいはく、「さてはよからぬ日なり、かずの半は陽、丁は陰なり。九月九日は、はんのかず重なるゆゑ重陽といへり。いもせの道は、陰陽和合してこそよけれ、これはいま／＼しき日なり。」と申せば、大徳「もつとも道理なり。」といひて「さらばこよみを見ん。」とあれど、人家たえたる山中なれば、求めんたよりもなし。」とぞ弟子どもいひける。小僧はかしこくて、さはへにくだり、蕣を一もとたづねいだし、「これにて日のいくかをも、又は善惡をも見給ふべくや。」といへり。大徳はこの事知り給はで、「何事ぞや、ちとをしへてくれよ。」と、ありければ、小僧「これはいにしへ

丁林といふもの、こよみをつくりはじめ、世間へひろめしなり。その書を後檎にいれてうてなり。そのところに英章おひ出せり。時に其の子あやしみつゝ、掘りいだしてよみ侍り、これによつてこよみとはいひはじめしとぞ。本朝の御代に、こよみを毎月朔日には生ず、ないしは晦日にいたりて十五日生ず、十六日以後、毎日一はづゝおつ、月小なれば一はおちずして、晦朔をしるといへり。蓂莢草はいまのこよみのことと聞けば、たづねてもあるまじきなり。天地の暦数をもつて、ふみにつくりたまへることといへば「小倫がことわりものとなるにや」と、愚情事はこのとしに至るまで、日ごとをかぞへね、文章博士におし渡つて、よみ直なし書籍ども、山の如くにして、胸中曉々としたれば、死し見かの古事本説など、さがしいだすにはひまをとるなり。さあれば安らかる事もあるべし、死なく小倫が詞をいひしことと、のたまへば、小倫申しことさへでとても申しけるは、とてもかやうに乗りたれと、この事は然はやはそれもいとや思はれんと、日をかぞふばかりなり。にわけやまやし、よからぬ日とは思ひつれど、文字の日どりにて、これを考ふるに、先月九日は弁の月には大のり、仏滅下日にあたる思へば、くわいこの折ありながら大凶日の御子なれば、仏にこそとまつるべきなりやとて、その光長にて陰陽生日にあたる」といへば、光俊は天文からの橋にて、ふみをふくみ、これを記さるゝところに、天道はみるに聞きおぼえたる事ありと、はじめてつけるは、小倫

は八相の化儀を知らずや、佛は兜率天に生れ給ひ、四種をもつて人間をくわんじ、其のこと下天詫胎出胎出家降魔成道轉法輪入涅槃と、値遇をたまはれ。人間の四姓の中にも、刹利婆羅門の二姓にばかり生まれたまふ。いかんとして鳥獣なぞの中へ、佛の生まれ給ふべきや。」と云はれければ、小僧も言葉すくなになりけり。大徳はしかと聞きも給はねど、小僧が顔つきを見て、いとにふきげんになり給ひ、「道理にもあれ、早くつかひに行きたまへなんかし、とく／＼」とあれば、小僧は腹立ちけれども、物もいはず文うけとりて行けば、老僧は世にたのもしさうに見おくり給ふ。ほどなく山雀のすみか夕がほのやどにいたり、「是れはかゞみにし僧のこれの御文なり」とて、おもとのかしこへにおかれて、今まで待ちつること」とて、渡しければ、約束の如く、ましらに語らひ、見せたりければ、姫君は「むくつけき事なり。」と仰せありて、例の口さがなきつぼねは、小僧をよび出し、「まて／＼、これは大徳の御文か、一には、いにしへも稀なるよはひに、十年あまりが程も過ぎ給ひて、にげなき事なり。二には、破戒のとが、三には、諸鳥の中へ聞え、笑はれたまはん事も悲し。何とて佛弟子の御身として、心の中にはつかはれ給ふや。たゞしいつぞやの御ねんの布施も、いまだ參らせねば、せめてこのかへしばかりはしたまへ。」といへば、姫君、

身がはりになやまはなやめ悩むとてなやみなやむなことも知らねば

と、書き一冊にせられしは、小伯けの見ま二つはお前を給ひ、まくりしんやうなるを、いましめの御濃なりしあるに、この御子たちのまつにあらぬなることわりなれば、比倫に見せ参らするもおそく、この張具散らせたりしと、

身内も手足も奇麗にすることをしさせ法の論にくしむなり

ともの日は、始まることはわたる寺も日にそのきさんなと、

妻子をも奇麗にはなせ三のの論の妻にせまとのくへやばある

といはれ、又小将、こゝにてもの言葉すくなにて、あふぎさるやうに聞くなりけるにやとくそ我ればはうまれつき、春から寄贈、なかるおもなき日にもあふると、ひとりこといひて行きゝく、我が家とふゆこと、今は口に言藤の、いやも、ことかに雨ければ小将とさてば、細やかるやか、一ぐくを着来なやすくとこまれで、つは自ら歎しよけめと、小将のかたにはのしかさされ、心すこしあそまれたむと思ふべからず、かゝることはかきはかにきたれる、あから秋事なを、中でも度行ぎて、なほはどいひし事ともなからいがれけし、両匠のはなにならぬやうにしてたひた参へてと、小納小持物は遊問ひしとくの人として、なしたまひ、なはきけれ取りて、秋をほうふ事をみせると、

見そめつる御思ひのなることもおでつる御言ひしま身となるかな

とは書きたれど、これも又かやうにて、こまかなる文さいくく書くこともならねば、文は古今日の
うちに有るべし、しかいひても、渡すべければ、陶匠への孝行とや思ひけん、又たちかへり、このたびは
口上のみなれば、とて、すぐに姫君へまゐり、短冊を見せ参らせけり。又、今のほれ宣ひし事申しきか
さ侍れば、大徳一々に御返事申されし、そのひとつには、かかることと老僧にはなきしや、昔我が朝
にんなでらの上人とて、行學世にすぐれし、九品の蓮臺にむまれんとの道心、たゞひまなく、御とし
もりて六十路にあまり、かほに四かいの波をたゝみ、眉に八字の霜をたれ給ひしも、京極のみやすど
ころの、しかの花見のかへるさを見たてまつり、覺えず心を迷はし、

初春のはつねのけふの玉ばゝき手にとるからにゆらぐ玉の緒

とよみたまへば、みやすどころ、極樂のたまのうてなのはちす葉にわれをいざなへゆらぐ玉の緒、
といひかはし給ふ事あれば、いまはじめて我ばかり、悪心をくはだつるにもあらず。一には破戒のと
がとや、これ又きやうせつを見たまはぬゆゑなり。すでに日月燈明佛は、八人のわうじをもちたま
へり、大通智勝佛は十六人、今日の釋迦佛にも、羅睺羅尊者とて一人まします、かかる妙覺極果のほ
とけの御上にさへある事なり。たゞしこれらは出家し給はぬ先の事なれども、それは上代にて、上根
上智のじせつ、これは末代にて、下こん下ちの時分なれば、これほどの違ひめはあるべし。又羅什三

藏は、勝曹二種を講釈し給ひしほどの聖人にてましませど、誓願のすゝめありとは聞けど、一往は破戒の名を得給へり。さ言ふ、聴には孔子のたふれといふ事のあるをも知り給はずや。ここには諸鳥に笑はれとも恥しきや、是れ父母の御身の、いたづらになる事にもあらず。」とて、大徳、諸鳥どもが笑はば我も又口をもすさみ思ひでなさむ。」と、狂歌などよみて笑ひ給ひしと、大徳ものたまはぬ事までいひて、あるひは讃み、あるひはきけんなどして、言葉に花をさかせ、心にえみをあらせて語り、何ごと此の事をすなやうにとや思ひけん、「折ふし心にうかべる」とて、

詞匠さへ昔にさけなかうなりとならばうれしく舌をもかへまし

ここに狂歌にのり、心持ある義なれば、返歌し給へ」といへど、局心中には、白氏文集をやしたには、豈に杜の枝にしき、孤の鼻によくると書きて、両妻を恵へにいへり。又或文には、父母を直し不孝の罪ありといへば、強角いかなるあやまちなりと思ひ、くかへし給へ、面者の御心もやはらぐやうにいひなし、いとど返歌をも、あとよりまゐらせんといへば、とかくよしありしは、御こけんの御まはれにあらんとそ、古詩へそむかれて、人徳は小僧が物がたりの聞きたまへて、一言もしき此の比は、由なきいひすてにつきて、長日まで古くしき秋をまで、今又つはれが左右を悩たる、ひとに打ひする事なれ」と言へば、我二な進み出でていひけるは、「いでもとなくひとの

かけを迹り、物を思ひたまはんより、もし御心もなぐさむやと、うらなひを聞きたまひてはいかゞ、あらんことと申し侍れば、大德のきけなほりて、「左樣の物知りはいづくにあるぞ、早く行きて聞きたき事なり」とて、もはや出でたゝんとするよりければ、「しばし樣子を聞きたまへ、此の深山をさし遠きぞ、出羽の國に兎の算の博士とて、安倍仲麿が末孫安倍泰成にもおとるまじきやうの、うらなひのさやありと聞き侍りしこと」といへば、老僧心地よげに、「一刻も急ぎつゝ行きて、御うらなひきかばや、翼をもちたるは、かゝる時の用なり」とて、弟子共ひき具し、たゞ一飛びにぞ飛び行き給ふ。折ふし博士に他行なれば、かへりきたるを待つとて、大德のいはく、「只今これへまゐる事、別の儀にもあらず、身上のうらをたのみいりたきばかりなり。たゞし御うらは、いづれの流にてましますや」。博士のいはく、「昔宿値令に、賀茂保憲天文道をもつて、弟子の安倍晴明にゆづりたまふと云ふ。又三善家は算術なりふといへり。かほどの安倍、三善家、又は卜部氏などの流にもあらず、我は月中の兎なり。これによつて、月を玉兎となづく。詩人も、綠樹陰沈んで魚樹にのぼり、清波月落ちて兎波を走ると作り、これらのことばを思ふにも、月宮殿にすむべきものなれど、前世の宿緣やありけん、先祖の時あまくだり、わが世にいたるまで、この國にとゞまり、卜占をことわざとし、世をわたりはべり。今時世間にはやる、八卦の書などもこゝにあれど、これらは淺き事なり。我がうらはよそにかはりて、當意卽妙の分別な

れば、かきもらしもいはず。」といへり。大德、「こは世にたぐひなきことなり。さらば御うらない一つ聞か
ん。」とありければ、其の時博士八卦の書をてすきびになして、ものもいはず、しばらくありて、いひける
は、「大德の調子をもつて考ふるに、これはふかく身にうれへの積りたるやうにおもひ給へり。」いか
やうなる事にてましますぞ」と問へば、大德は年にあはぬ事とや、答へかねて在給へり。小僧はや
くちよしと、身をも上へすゝみ、「しかるべからず。」といひ侍り。博士聞きて、「その儀ならば叶ひ難き
御うらなひ、先剣他行せし事は、我がともがらの中にようなきことありて、うそのすみたまふ山の木が
くれを行きめぐりしに、とりふし琴引き給ふゆゑ聞きて、あまりにたゞならずしかば、立ちどまり
聞き侍りしに、時々かなしき聲にてなげきしやうにてひき給ひし、これは秋の調子にて金なり、大德の身も
のりは給ふことは春なり、是れは春の調子にて木なり。金剋木と相剋すれば、思ふ事すなはちかなはず御
うらなひ、かやうなる一段、不叶候は、かやうの調にしてまかれしものなり。[illegible]
いろを見るに、殊に衣體赤色なり。大德の顔のいろは、いろは白くして、金體白色なれば、火剋金
とこれまた相剋せり。これは口のいひならはしなれど、根本は心のおこるところなり。色いろは身のわざなり、
聲やよき相剋と給へば、不吉の調ふなり。相剋にも相生にも吉凶あれど、これはあらはなることの
ことにて、給ふやうに申すやうならば、世間にはあまねくて、わがいへにある事なり。」さて上臈達は

らわかみ、ねざけに見ゆるわか草にて、いまだしげりも知らぬころにてましますに、大臣は大あらきの森の下草にもすぎたるよはひなり、ことに出家の御身なれば、一つとして君の気に入り給ふ事なし。これは前世よりの因縁なり。忠言耳にさかふのことわりなれば、定めてへだてなきとや思し召さん。かくうらみたてまつりても、なほわりなき逢瀬をねがひたまはば、前後はありとも、たがひにこの世を夢となして、もろともに、わたりがはの逢瀬はありとも、今生のえにしはかなき御うらみなりといへば、老僧は袖をかほにおしあてて、歩むともなくとぶとも覚えず、自坊へかへり、又例の思ひの牀にひれ伏したまふ。かくてまたかの森の山かげは、秋もすぎ神無月になれば、降りみふらずみ、定めなきしぐれの雪も立ちまよひ、物のあはれもまさり、寂しき折なれば、又あまたの鳥共おちまれていひけるは、さてもすぎにし三月やよひの頃、うき名へおりおり、たまづさの短冊をおくり給ひしに、返事のあるもあり、又なきもありつれど、まめやかにこゝろの解けたるかたはなし。うらみには思へど、又あなたにも道理あり。その故は僧のすゝめにより、歌をかよはし、返歌をみて恩みにもせんとのもよほしにて、ふりはへてわがかたより、想ひよりたる方にはなきとみえ侍りき。世に両知といふ事あり、たゞ二人してしりたる事さへ、いろまほる習ひあり。いはんや諸鳥の中の事なれば、もれ聞えて我なかうなるとおもひ給ひて、なけの情だになきとおもへば、露ばかりのうらみもなしと、とり

ひとり口々にかたり終りて、又、「是れより北にあたりて物すごき深山あり、それは□□法師とて行學兼備の老僧ましますが、いつぞやうき離のわらはやみのとき、御枕加持にまゐられけるが、前世よりの物く筆にてやありけん、ふいに心をまよはれ給ひ、また往命不定のまへし、風のたよりに聞き侍りしがやうやうあやしいはまその事とも思はず、このうへ出家の御身なれば、とひたてまつりても悪しき事にてはあらじ。いざや此のうちに心ざしあらんかたならば、つれだちて參らん」とて、みづからが案内者にて、おくれさきだちて、ほどなく山寺へゆきつゝ、此の由をこいひける。小僧は、なにたる御用ござりしとて出でければ、深山からすゝたゞ今おのおののとぶらひ給ふ事、べちの事にもあらず、大徳の御もとや其のかくれなければ、御見舞の爲ばかりにこそといへば、小僧はもの近くまゐり、しかじかの由を申しければ、又とくとく「かゝる道例もしられ侍る面目なければ、御こゝろざしかたじけなければ、ふしながらも。」とて對面し給ふ。みなみなかしこまり、「さて御心ちは、いかがおぼしとすこし、くるしにかゝり給ふや、御念仏し給ひたるや、佛神へ立願などかけたまひたるや」など、ねところにとひ給へど、老僧は恥かしくや有りけん、又なやみや強かりけん、いらへもし給はねば、さりともに言ふやうは、「大徳のみけしきは、思ひしよりかよわく見え給へり。今こゝにあつまりたる諸天童子の如に、陀羅尼をじゆし、祈念などすべきかたもなし、さありとて只かへらんは曲もなし。

きみがは法華薬王品の金言、病即消滅不老不死といふ経文の字を、よみたてにおきて、歌を一首づゝ、こみ、此のところの氏神の社壇に、納めたてまつらば、力をも入れずして天地をうごかし、めに見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、たけき武夫の心をもなぐさむるは歌なりと、古今にも仰せたれば、さだめて神も納受し給ひ、大徳のやまひもなほり、願ひもかなはん[illegible]、おの〳〵一首づゝよみ給へり。

山　鳥

ひ　ひとしれぬみやまがくれの草も木も照る日の光受けざらめやは

時　鳥

や　山ふかく時雨のそめぬいろもなき葉や胸にたゞひのいろをみすらむ

瑠　璃

う　うきこともうれしき事もさだめなき世のことわりとおもひなすべき

鶲

そ　そことなきみ山がくれのすみかにも訪ひくるもののやうき世ならむ

鳩

ノ　雲ゐまよふ深山の水にすみ[illegible]心のにごり[illegible]

火　燒

サ　世の中は昔の[illegible]事のおもひぞ數の[illegible]有るかな

鶲

[illegible]身こそ根[illegible]流るゝも[illegible]

鶚

[illegible]日に[illegible]忘るゝばかりの末[illegible]

[illegible]鳥

つ　月かげはさやかなれども物思ふ心のくまやさはりなるらむ

尻長鳥

ふ　古でらや道ゆきぶりにとふとても後のむまれのえにしならまし

目　白

[illegible]世に[illegible]此の世は[illegible]

[illegible]子鳥

有漏の身なれば六欲の煩悩はなれがたし其のあるる世とならば物もおもはで

頭

まして黒谷趣きしうらむる心を流行くぶり神さびしらさらなれば

時

しとねをもこのみなかれ山川水に逆瀬のあらむとさかしき侍てしかやうにとりくに、くわすさびつゝかき付け給ひ、日もおちかたになれば、いとま申すとて立たれければ、大徳は一病中にて、おくりにこそまゐらざらめ、その隠なる事ないと詠じて、あまたの御歌の返歌とも、人とみ給ふ御れいとも、こゝえをうれしく、

詠ぬらすことばとはなゝめくいには四季のやま遠のあらしるべせん

と書きて、あとより追ひつきて出ひやりければ、おのゝゝ吟じ給ひ、「例ならぬうちには、さばくなる詠歌ありことはめてゝ、あはき事おもひたちて、後の世のつとめなし侍ること」といひあへり。猶日かず重なれば、老僧はおきもせずして、夜なおかず枕のうへにて、身のことを観じ、「さて〳〵久しくながらへし故、かゝるうき目にもあふことよ。」と、小僧ばかりを近づけ、かたり給へば、「まことに寧意のごとく、荘子もやかられに、男子おほき則ハば懼れおほし、富める則ハば事おほし、いのちながき則

んば辱しめ多しとみえけり。申すは緩怠なれど、此の言葉のうち、すゑは老僧のいまの御すがたなり。
論語にも、老いて死せざるは是れ賊をするなり、と有るもやうならず。」といへば、又小僧がいさめもつ
ともなれど、生死のみちは、自分のてづくりにもならず。」といひて、
わが思ひのまゝには死なれもせず死ぬも死なれじ苦しみぞとて
と答へば、小僧、おもひのほかの御返事申されけることと、
なにもせず猶ながらへて逢ひ見るは恥ぢようきはなほぞかなしき
とよみければ、大徳はいはんこと葉もなくて、これもの袖もしぼるばかりに泣き給ふ。木菟は耳とき
鳥なれば、はじめより終りまでこまかに聞きけるが、聞かぬふりをして、「坊主はなにとて涙にむせび
給ふぞ」といへば、「いや、それは何様にもあらず、愚僧が蔵経の雨露にぬれたる故、小僧にほさしめける、
事、こゝろいれずして濡れ事なりと言ひしは、木菟のいひけるに主師親をいさむるも世のなら
ひなれど、それはまへかどのことなり。ひめ君へ艶書をも小僧がとりわたして、事のかたはぬとて
申しつれば、賊徒の内にも、その上、かの返事は、大徳の御身ばかりにもかぎらず、昆虫
荘厳しやらんに、烏瑟延王経にあそび給ひしに、五百の仙人ごく
くるまりけるに、この所をすぐるとて、いろを見てこゝろを聞きて、愛念をおこし、神足をうしなひ、山

林の中へおつることゝ、まことにかはゆきを鳥の理なりといへり。又波羅奈国の一角仙人は、扇陀女に心をまどはし、和州の久米の仙人は、深山に入り仙術をまなびて、一日空にとびゆきけるに、婦人の足をあらひて居るふくらはぎを見て、たちまち染心を生じて、そらより落ちしと元亨釈書にみえたり。此のことわりをば、何とふんべつしたまふやらんといへば、小僧はものもいはず、たゞ/\頭かき、仁蔵は世にたのもしげにおもひて、さていかゞすべきことゝあれば、以前のはかせのうらなひばかりにしは難題なれ、よくはしらぬ事なれど、古にはしなん/\ありといへり。龜の占、くしのうら、辻占、かどうら、時のうら、ゆふけとふうら、はしうら、あしのうら、道うら、おしうら、石うら、心のうら、歌占などいふあり。また山すげうら、これは山すげの葉をむすび合にせて、またその末をかんなぞにおもはせて、占ふことありといへり。龜の甲のうらは、卜部氏のもの、はゝかの木をもつて龜の甲をやきて、占ふことあり。かたぬくうら、是れは鹿の肩の骨をやきて、これもはゝかの木にて占ふといへり。むさし野にうらへかたやきまさてにも、祈らぬ君が名うらにいでけり、などよめり。又天照大神岩戸にこもり給ひし時、天香来山の鹿のかたの骨をぬきて、はゝかの木にてやきて、大神のいで給はん事をうらなひしとなり。此の外いろ/\の説あれど、しけければのこし侍り。かやうに古はいろ/\あれど、むづかしく、にはかにならぬ事はせんもなし。やそのちまたに夕占とふとあれ

ば、われは日くれて雀色時にもならば、人のかよふ辻にゐて、人の言葉を聞きて占はばやといひければ、老僧は、ともかくも計らひしだいとのたまへるに、ほどなく其の時にもなれば、木筏辻にいでて、ともに木立の蔭にかくれて、しのびゐて、人の通るをまちけるに、あるだまうけの終りにや、家路にかへるとおぼしくて、わかきどち九人つれだちて行きけるが、酒にやゑひけん、「竹にむまるゝ鶯の、竹生島まうでいそがんこと」と、唄うたひて通りける。木筏みゝをすまして聞きけるが、これはいみじきことわりなりと思ひ、いそぎ立ちかへりて、「めでたかなる御うらを聞き出し侍り。」とかたりければ、大徳上人きゝたまふに、「竹生島といふうたひならば、なにと心得てよきうらとおもふや。」とあれば、木筏のいはく、「竹になまるゝうぐひすとは、竹生島といはん序のことば草なれば、その心はとらじ。唯竹生島へまうでんといふことなり。これは御ねがひかなはんとの瑞相なり。いかにとなれば、ある経の文に、観音摂化の道場、湖水の中に金輪際よりおひいでたる水精輪の山あり、天女すむ所となり。即ち此の山の事なりといひつたへ侍れば、御ねがひのこんげん、正しく満ち足らんさとしなるべし。其の御山にまうでたるものは、すべて祈ねがひかなへたまふといへり。その上神明は大悲にてましませば、うらなひの父天照大神の御すゑにてましましませば、上人の御ねがひをかなへたまはんとの御うらにて、うたがひなき事なり。」といへば、老僧にあはに

の浪もたちかへり、よもの霜もとくるばかりに、心もいさみて打ちわらひ、一種二種を云事なきに、いせんのうきを博士のうらかたは、さにとしはづれたるやうにみたまへば、小智に、酒肚に思ひはなけれど、いせん木菟にいひつめられし報いなくてはとおもひ、夜たかは又、其身世のひきなれ呼ひいだし、きず人になしていひけるは、「菟はかせのうら、何とてあがひたると宣ふや、これは木菟ばうしのあたりたる時の事なり、いまよりはちと早きあたり外れのきだりなるべし。それがしの心には、大不吉の辻のうらと覺え侍り。まづあるじまうけのをはり、酒に醉ひたる者のうきひといへり。酒は人の本心をみだす正意とせり。法華經のたとへにも、醉酒而臥として、酒にゑひふしたる故、無價の寶珠をころもの裏にかけたるをもしらで、他國をまよひあるき、衣食にもとぼしとあり。醉ひなき者ひのくりごとなどいひて、醉中のこと葉はみなあだことなれば、うらなひの科にならべからず。又きけのまゐ者の言葉にして、うらなひ見るにもよからぬことなり。その故に、物のかすかに考ふるに、大徳の御うらかたは、木菟ひとりにて一とくの水なり。辻を通りしものは他人なれば、たしかにましますうそ嬉のかたにすれば、五人はいつきの土にて、剋水とたがひてよからぬ占なり。歌うら辻うらなどいふ事は、その詞をのこさずうらなひて、善惡をさだむべきことなり。わが氣にあはぬこと葉をば、ひろひすてて、氣にあひたる言葉ばかりを取りて、占ふ事はわたくし事なるべし。竹に生まるゝ

といふこと葉はまづ不吉なり。いにしへ竹とりのおきなといふもの夫婦ありしが、竹の中にいと光る竹のあるを、怪しみて見れば、竹のよの中に、三寸許りなる人の美しくしてありしを、家にもちきたり、生ふしたてければ、あたりもかゞやく姫となりたまふ。御名をなよ竹のかくや姫とぞなづけたてまつり、あまたの人、この姫を得んとしけれど、遂にかなはず。後はみかどよりけさうし給へば、我此の國のものにもあらざれば、したがひ奉らずとて、天へのぼらんとしければ、内裏より武士をつかはし、ゆゑやなくびにてとゞめ給へどかなはず。遂に八月十五夜の月のさやけきに、天上よりむかひ下りて、雲居はるかにのぼり給へり。このかゞやくひめぎみ天女にて、人のねがひをかなへたまはず、ていうそ翁、天女の御末なれば、おなじ御心なりと知らせん爲のうたひなるべし。竹にむまるとは、かゝやひめのこととききこえ侍り。うぐひすといふことは、これもよからぬ事なり。詩人の詩ばにも、鶯いまだいでず遺賢谷にありとて、賢人のあしき代をいとひ、谷にひきこもりたるに、うぐひすをたとへ給へり。うそ姫やそぢにあまる老僧とそひたまはば、あしき世なるべし。それをきらひて、わがすみかに引きこもり、いであひたまふまじきとの由なり。竹生島まうで、又いやなり。所らんねがひのあればこそ、竹生島まではるばるとはまうでぬれ。これもならぬ戀のうらなり。とかく鶯といふ字のいりたるにてしりぬ。鶯はひとく〳〵と鳴くと、古歌にもあれど、つねの者のいゝ

には、法華經となへときこえめ。只老僧の臨終くるはゞ思ひとゞまり、大日經・金剛頂經などのはてればかりよまんより、法華經をも折々によみ給ひ、後世のつとめをなし給へといふつけたるべし。すごさて水茎、そゝられたる甲斐もなし」といはれて、あやまりたる體にて「さだめて小僧こそ、よき占しりたるらめ、うらなはせ給へ」といひてぞ立ち給ふ。大徳ははじめゆきけんとはおもひ、おやかなる月日に、にはかに雲のたちおほひ、村雨などのしたるけしきにて、雨眼のひかりもくもり、ねぶりめになり、涙の雨をふらし、ひねもす打臥したまひしが、又起ひおきつゝ「とかく弟子どもあたのめば、むづかしきいひ事のみありて、思ふ事はかなはず、此のうへは自身一占うかゞひて、心みもさだむべし。後鎮の歌に、神風や三つの柏にことゝひてたつをま袖につゝみてぞくる。これは伊勢大神宮にて、三葉がしはを取りてなぐるに、たてば思ふことかなひ、たたぬはかなはぬなり。たつを袖につゝみてよろこぶなり。この國は神國なれば、いざやこの占をして見ん。大神宮へは遠國にて參らずとも、神慮をおもふ心のまことさへあらば、内外のみやもこゝに同じ事なるべし」とて、かしはをとりよせて、なげて見給へば、此の葉しばらくたちたり。「さてこそ水茎が占、まさしき事なり。」と、ほゝゑ給へば、小僧はいやたちけん、とび出でていひけるは「此のかしは占ゝひたすらにはあらず、いろいろのせつあり、續古今の歌に、

思ひあまりゐでのかしはにとふことの沈むにうくは涙なりけり

とよめり。これはかしはを水にうかべて、沈めばかなはず、うかべばかなふとしることなり。こゝろながら吉事ならば、木菟がだうりにもならん。」といへば、さらばとて、み谷にくだり、手あらひ、口すゝぎて、祝詞をねんじ、ながれのきよみどころへ、かしはの葉をうかぶれば、うかびはせで沈みける。

小僧に我が占あたりたるとや、ゐけんまうにて、「見給ひたるや。」といへば、二どには定めかたしとて、又よのかしは葉をうかぶれば、猶水底ふかくぞ入りにける。大徳も木菟も言葉なくて立るかへり、「小僧は何ともいはばいへ、うらかたのよしあしは、未だおちつかず、今一度ふみをとまゐらせて、この神かへしにこそはなれ。」と、懸紙のところせきまでかきつゞけて、おくに、

さりゐだにたゞのすにはゆふもつ身の悲しさはしなばかはりからむやは

とよみて、此のたびは木菟にやり給ふ。もとのやうに、かのでらに此の由かくといひければ、「稲荷も此のこゝろやゝ心苦しけれど、大徳の御心ざしあまりに哀れなれば、つくねいきけん悪しからんは知らねど、さからうてみん」とて、たゞつゝ受けとりて、神祇やもちかへりまゐるを、「色みえてうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける、とはきけど、かの御前のいちの心ではなき、いまだ降るべきやまず待

りことて、文をまゐらせければ、あはれとやおぼしけん、又御身のわづらはしきに、此の世の[illegible]ともなさば、のちの世のたよりにもとやおぼされけん、なみだぐみ給ひ、あなたよりの御當願をたつかたに、懸想、

こひしなば我もわたらむみつせがは迷ふ淵せのせぶみたのまむ

と、書き付けたまへり。かやぐき取りつたへて渡しければ、木兎なりのかたらきよろこび、いそぎもちてかへりしが、耳より目やさかさりけん、みちにてとり落したるをも見つけず、寺へかへり驚きければ、とりにかへらんも、山々嶺々谷々の、木すゑや木のま木の下を、しのぎつゝ来し道なれば、たゞねんたよりもなくて、茫然としてゐたりけるを、大徳、「いかに〳〵」と問ひ給へば、木兎のいはく、「御かへし給はり、あまりのうれしさに、道を急ぎまゐるとて、とり落し侍り、たゞし御返歌をば、そらに覚えぬる」とて、

「こひしなば我もわたらむみつせ川まよふ淵せの瀬ぶみたのまむ

とかきつけ給ひ、餘のことわりはなかりつる。」といへば、大徳きげんよきやうにて、「これは一世までも、ちぎり給はんとの御心、いちじるき御うたなり、木兎がよろこびつるもことわりなり。」と宣へば、小僧がいひけるは、「まことにめでたき御返歌のことわりなり、一世二世のちぎりの事はいざとよ、いつぞ

中算博士のことばに、「たがひに此の世をゆめとなして、もろともに渡川のあふせはあれども、今生のえにしはかなき離占なり」といひしに、よく仙道にたる御歌なり。わたり川みつせ川、何れも三途川のことにや」といへば、老僧「とかく小僧は、かたきお弟子となりたるや、あたりに居れと勧めたことこそ、下りのおくなる精米のうてはへ、そ閑にこもりたまふ。さるほどに、未覚が取りきとしたる豊範は、苔鼠はげしくて、尾上にふきみだれ、つひに嶺のすむなる山にとどまれば、是れを見て給はむ「これのうへしき豊範かな」とて、兄僧兄弟衛門まで呼び出し、「こころみたらう綴のいで所はいづくならんや、しらずば、理聖にたちともいひて見よ」とあれば、みなく大事のいふへとおもひぐんで、「これいはあんをめぐらし、やがて申しあげければ」とて、向臓のまへをたれ、みなひとところへ集まりていひけるは、「此のたとへ歌は、奥の所行がしわざなるべし」と、又いづぞやわれらの中にて、歌をとり聞かしが、ついには歌ひきこえんぬ。いざや此のついでには、謝りやうに此方よりかたりはてば、よもや咎めはあらじ」とて、おそれみに心すうだめ、しばらくありて向臓の前へいでて、「これいまのかき物のいでどころ、しかと思ひあたりたる方もなし。ただし御詠ありしところものにて、心あてに通り聞召さるべし」といへば、「つきいすゝみ出でて、くわしうしるしめたき方もおはせず、ただ今暗に大徳とたまわりあつ、これよりはるかと谷端を隔てて、やまのおくに、梟法師とて有験智徳の老僧あ

り、さりながら修行は[illegible]、[illegible]

ろ、[illegible]にきこえ[illegible]なれ[illegible]、[illegible]

ば、われ／＼なども寄り合ひ、[illegible]返報(かへしうた)[illegible]

とりの[illegible]由緒(よしざこ)[illegible]、その[illegible]だ[illegible]

ひ、歌をよみけるに、その返歌をつかひ取り落しぬると思ふばかりなり。」といへば、角鷹(くまたか)、「それ

ほどならば、われも一首よみそへ[illegible]いざさらば老僧のすみかへ押しよ

せ、ことの仔細をたづねんとて、[illegible]寺にいたり、[illegible]

[illegible]の御僧[illegible]、小[illegible]、うつは[illegible]

へ、[illegible]

僧、[illegible]一別の[illegible]

そのうちに大徳と[illegible]ふ名のあれば、そのいはれを問ひ給はんとて、[illegible]

もには兄鷹兄鶻をはじめ、また／＼参らる[illegible]といへば、「さらば寺の内を[illegible]」と、いつはり

をいひてうちにいり、弟子どもをよびあつめ、「木菟があはうなる落し文のゆゑ、此のころのたはぶれ事(ごと)

みな／＼あらはれ、角鷹(くまたか)をはじめ、おの／＼これへよせ給ふべき分なり。さだめて破戒の僧とて、殺(せつ)

悟にや及びなん。進むにも進み遂ぐべからず、力の及ぶほどは、いでわれみましてん。とて出家の威儀ただしくし、なる程袈裟ふりをせよ。年月いたしなれば、かかる時のようなりとて、さて日本の中より、木の葉にてへぬれたる衣をとり出し、弟子どもに着せ、我は苔衣に、蔦かづらにてしたる袈裟をとりにかけ、いかにも尊げなるふりにて出給へり。ほどなく、寺主をはじめ、いづれもおはしたまひしければ、大徳は同宿どもの、寺をへだてたるかなたにも出で給ふ。やがて寺の軒の松の下陰に、寺主ある給へば、御供の衆、又大徳も庭に伺候し給へり。さて、老僧は年にもにあはず、其の上しつけの身にて、好色の心のとめあけし、殊に小僧又は未通などに、使にあるかずし事多くなりけれ、寺家につみをおかしたし、但しいまだ事もあらねば、あのりさまに申し上げ給へと、見聞覚知してねに罪を結へと、大徳にそれはつよしつ、年比ものつもりにや、花洛として下僚の濁すをきたしたる者りにて、物もしはず、小僧北のこゝろに来面におひかかくされ、北ふさるゝの身なれども、こゝは静りてて、師匠の恩を報ぜんと希もり、庭にておはしても、道のいでてもおはせんいつはらずは、在家にて御昇進となくるべからず、つみなくの所存だまさずらず、われらこれしい給ひつゝ、悲かなる師匠を申しただ時われときことして文に、大徳の二字このあるをあやしみ給ふなり。人倫は申すに及ばず、禽獣にいたるまで、智力のある法師に、大徳といふ事かつてしかるべからず。日本は小国なりといへども、六十

ゆ。このたびの修行はもて、ゆえやすなるやらんと聞きしあのぞ、二とせ三とせの侍りて、すなはち春のころ、斧にさこすらよき鋲りにて、蜻蛉のつちを取りてこれかはし、さびしきにまして、としば、いかくやことし雲の行き、来をつかはじにんぐのを運歌ばぞ候歌すことまでにはしとぞ、いかかとひの給ひておる由間しか、その故をいまだ返しもなし。いかなることぞ、いの老情なりつもしるひ、様やとるにするに、その運歌をつかひの取り落しめる一間はりその云ひにをいへば、鶏頭、これはまなるほ、われも一首よみそへたるあるを二とやらせ給ふ藁にはけやういうさ狼藉すあるも押しあせ、ことの次第をたづねんとて、よう御さきへはいたかる鷹けし給ふ。ほどに、寺にいたりて鶴よの御使とて申しければ、小僧を召り、うつほ座へ引き籠もれりし腹立ちにこそ、く、おのれを、わが所を出し、ある時も二日の時の間で、さらにその衆用とて聞き給ふぼ、鶴のいはく、「別の事にもあらず、おとし文のありしを、鶴のよしまする山へ鳳のつたへ侍りしをそのうちに大徳と云ふ名のあれば、そのはれを聞ひ給はんとて、南院にこそとたまひしを、鶴ともには見慣れをはじめ、みなくく参るをいひてうちにいり、弟子どもをよびあつめ、木兎があはうなる落し文の為め、此のこのたびの様みなくくあらはれ、鶴をはじめ、おのくくこれへよせ給ふべき分なり。さだめて破戒の僧とて、殺

窮に及びたれど、逃げても逃げ遁るべからず、力も及ばぬほどは、いひわけもあらん、とて上品家の威儀をととのへ、なる程尊げなるふりをなせしに、年月のたちたるに、かかる時のまうけなりとて、うつぼ木の中より、木の葉にてつづりたる衣をとり出し、弟子どもに着せ、我は苔衣に、藤かづらにてしたる袈裟をかけ、いかにも尊げなるふりにて給へり。ほどなく暗きはじめ、いづれもおほせましければ、大徳に同宿の二人も、寺をへだてておかひに出で給ふ。やがて寺の軒の松の下陰に、暮るる陰へは、寺院の奥、又七度も庭に廻続し給へるすて、上に新しき年にもなく入れず、月の上にのつけのみにて、好色の花のさかりし、特に小僧は未だ若く、使にあるかぎり皆すれまゐりけり。度々つつみ給ひにけれど、申し上げ給へ」と、見渡し給ひもに聞き給ひつと、大臣はきしりつつしつつ、年はまつつきたり、茫然として皆の袖をおさへ給ひりにて、物もいはず。小僧都の口には本意にあらぬやうなれど、身には、こ、ほどなりて、師匠の思ふ様を推しはかり、随ひなば道ひいで出だされたるには、ますます仏道にある、からず、つねんぐの用心をかかずに、かれなどのいて、学びのさまし、理れたる御返事を申しけり。大徳の二字これあるやうにやしみ給ふなめり。人倫に申すにあたらず、にょうそうの、僧正のある法師と、大徳といふ事のかなしおもなき。日本は小国なれば

餘州といへり、そのうちの人畜にいか計りかあらん、たとひ眞言大德と書きたりとも、又國々山々に何程か、眞言の大德とよばるゝも有るべければ、我が師匠にばかりかぎるべからず。又末德と小僧の使にあるきたると宣ふや、世の中に末孫のおほき事、目連の神通にてかぞへ給ふとも、かぎりあるべからず。殊に我が師くなるかうむりの、小僧になりたるも多かるべし。いづくの國、いづこの山に、末孫か蝙蝠のあるきたるを、われらとばかり定め給ふは、道理にそむき侍らんや。これによつて昔を思ふに、かかる有驗智德の僧侶には、非理のなんあるものなり。その故は、唐の一行阿闍梨は、楊貴妃と名をたち給ふ。あとかたなき事なれど、その疑ひによつて果羅國へながされ給へり。此の國へ行くには三の道あり、輪地道、幽地道、暗穴道これなり。中に暗穴道は、重科の者をつかはす道なり。一行も大犯の人とて、この道をやり給ふ。七日七夜がうちは月日の光をも見ず、冥々として人もなく、森々として山ふかし。まことにあはれなるありさまにてましましけれど、無實のつみと天道もあはれみ給ひて、九曜のかたちをげんじつゝ、一行をまぼり給ふ。時に一行右のゆびをくひきり、左のたもとに九曜のかたちをうつし給ふ。是れ眞言の本尊九曜の曼荼羅といふなり。上代末代と時刻はかはれど、我が師大德も眞言の學匠にてましませば、かかる難はあるべき事なり。むかしの權者の跡をおひ、大德また無實のなんにあひ給ふ。未來は猶一行阿闍梨の、佛果のあとをおひ給はんと思へば、我

が師匠ながら頼もしさよ、いやまさり、なげきの中のよろこびなり。」と、辯説はたゝうたり、ことばの
いみじかさり、我もなみだをもよほし、ありがたげに語りなせば、鷂兄鷹以下何れも嘆息のほかは
なけし、道念をおこし、小僧物がたりさへありがたきに、大德老僧ならでかたり給はば、さぞ殊勝に
あらん。かゝる物知りの說書など書きたまはんや、學びたてまつるも、未來のさはりなるべし。」とて
嘲られけるが、立ちかへり、聊爾なる事いひつるものかな、大德はゆるし給へ。」と、謝拜してぞたち給
ふ。老僧は恐ろしき夢のさめたるこゝちして、雨の下をあはせ小僧を拜み、此の比かたきのやうに思
ひて、いけんをも聞かざりつる故、すでに命をとられんとせしに、古事來歷をいひいだし、鷲の心
をやはらげ、我をたすけぬる事をおもへば、敵の中の味方なり。木菟は我が不行儀をもいさめけれ
ば、さはのく嘆ひつれど、けつく文をとり落し、わが命を失はんとせしことは、みかたの中の敵な
りこといひて、又さめ／＼と泣き給ふ。此の事うち聞きては、いづ方より知らせ侍りけん、御いのち
に參らせし老僧は、木菟が落しつるたゝう紙故、あやふくの鷹どもにせめられ、からき命をたすかり
給ふと聞き給ひ、我が身のゆゑとやおぼしけん、猶違例も重くなり給へば、つぼねを創め、睦ましく
し給ふかぎりは、あとや枕にさしつどひ、泣くよりほかの事はなし。その中に山雀のいひけるは、「い
つぞや心のかうさく／＼しかりぬ、新篇の師の案内せしよりこのかた、さやうの事にはこりはて侍りつ。せ

めでたくまからる醫師になりと、かけまゐらせたく思ふはいかに。」といへば、おのおの「これはよき謂れなり。その醫師はいづかたにあらんや。」といふに、知りたるかたもなし。ややありて申しけるは「これより一里ばかりこなた、竹山のすそ、山畑のほとりにすむなる、土龍といふものこそ、世の聞えの醫師にて、あたりにすめる鳥けだものの、重寳なりと聞き侍りし。」といへば、「さらば、それは上の事はあらじ。」とて、かしらだかを使にやり給ふ。いそぎ行きつゝたづねければ、土のそこふかく住み給へば、いひ傳へんやうもなし。まことやらん土龍は、朝まだき又は暮ふかゝなれば、土ひとへしたまでいで給ふときくなれば、その頃を待たんとてゐたりけるに、ほどなく日もいり、うすやみの夕になれば、案のごとく土をうがち給ふ。かしらだかそれ〳〵と寄りて、「あと物申さん。」といひければ、土龍「なにの御用ぞ。」とて、土より上へ出で給へば、「かかるわづらひある。」よし語り侍り、「我は醫者と申すほどの事にはあらねど、これまで御使もだし難ければ、藥など用意つかまつり、醫書をも持たせ、明日參上申すべし。」とてぞ返されける。使はつばさを早めて立ち歸り、いしやの返事をいひければ、夜のあくるを遲しと待ち給ふ。土龍はうちの者引き具し、朝脈とらんとて、早朝よりきたり、案内をこひければ、先づかしら鷹むかひに出でけり。此のほかいづれも出であひ、すこしもはやく、脈をみせ參らせん。」とて、姫君の御ねやへ誘ひければ、ちか〴〵と御そばへより、左右脈をねんご

あにこゝろみ、顔色を見てたまひき、しばしありて、[illegible]われてふたたび何とも見とゞけ侍らねば、われ
らの神治にはかたはかたき由いへる。時に四十あまり、心におもふやう、此の管者の體をみるに、さい
み霊神のたる障子にもあらねば、世へくすれ事とい事も侍つかなし。書道のことをたづね、その上
やことなるべしとおもひ、わがみは知らぬ事なれど、神霊のかたちを何とこゝろみ給ひて、神治の
おもさしは管おや、あやくの作法をもあらまし語りたまへ」といへば、これは思ひよらぬ事をとひ
給ふとは思へど、すこしもいはへずに[illegible]たるべし。おもいにしていへ、典要家あるひに管博士錬のには
の表にすゐもの、陰陽師めく、験者などといふべき[illegible]聞きれば、聞くばやと
おもひ、霊治のたびのたまひ事すとて、陰陽との語はたにもあらず、年月をたのわて、こと見
侍りしにもおよばざりしつゝ、三輪をとりしにたびとは申し[illegible]こゝ事なるべし。それのみとは、
験記ある中には、なにしろ又なき事とも、あるひは三部の書、三部大統の書、四部の書、五部
陵作の書、男の祓経、先代舊事記、ないしは出世近むの古に付きて、種々の書あるがその外は
しげければ略し侍りぬ。かくの如く名ばかりは聞けど、いかやうなる形とも知らず、又浮屠にむかふが
ことし、さはなし事なしとはいへ、又、両部の神と申さ、唯一宗とやいへ、それのにしるしたり
とをは、いれのこときの[illegible]者に、習合したる近道に思して心ひかれども、それにて[illegible]たると

おぼえ侍らず。これは浮沈靈散の圓なり。たゞいまの御やまひ、頭にして力なければ、氣をわづらひ給ふと見えたり。わづらひには品多しといへども、内因外因不内外因、と云ふより外に出ずやうにきこえ侍り。内因は喜怒憂思悲恐驚の七情より起り、中にも強く物を思ひ給ふ御病なり。其の外は風寒暑濕燥とあり、又飲食勞倦則休、虚弱は治しがたしと、古人いひおきしに似たる御病なれば、またび醫すと申す計りなり」といへば、四十がらをはじめ、皆々此の物語を聞きて、是はまことなる事なく、ここと土泥の中より、いろかたへなる蓮の花の咲きいでて、不淨なる土の中より、こがねいでたる思ひをなし「御病症も御みやくも、御つものにはわかひ侍らず、御藥を召させたまへ」と、皆々ほとんど何れもいへば、醫師の云く「さやうにしきりにのたまへば、否みがたきことなり。さらば調合仕らん」とて、傍のものを近づけ、なすみの皮にてぬひたるふくろを、一つ取りまぜ、とかなかまの、ふるきものや木の葉などに包みたる、くすりどもをとり出しけるが、いづれにもかきつけあり。さては四十がらも、なにぐすりをか合はせぬらんと、うしろめたく思ひ、書付をねんごろに見て、これは和名にてましますや、此のまへ聞きつるくすりどもの名とはかはり、なにとしたる事ぞと問へば「われらのいへには、和名を用ゐ來れり、たゞしくすりの寒熱能毒はおなじ事なり。いま世間にては、此の加乃高介久左をば人參、予介良をば白朮、末豆保土をば茯苓、阿末岐をば甘草、和禮毛加字をば木

香、莨久利をば香附子と云ふとは聞けど、よくは知り侍らず。又この斷干はみゝずの陰ほしたり、御蟲のこゝろあれば、そのおさへにいれ侍り、これは別して家傳の秘藥なり。本草綱目とやらんにも、長蟲をころすといひ、又くわいちうをさるとのせたまへりと、つたへうけたまはりぬ」といひつゝ、一包調合して、「煎じやうはつねのごとくなり。」とて、局にわたし、「さらば。」とて座を立ちければ、みなみな送りにいでて、御藥をばまたかさねて、取りにまゐらせん。」とてぞかへしける。その後、[illegible]はたかどもを呼び出し、ようき姫への文のこと、かの梟坊主は知らざるかまことさうなり、さありとて打ちむくべきにあらず。[illegible]つかひにゆきて、みやつかひをもする樣にいひなすべし、今日は日がらよからねば、あす行け。」とてのたまひけり。[illegible]は聞くよりはやく、うへ見ぬ鷲のすゝみ給ふところへのき、「かゝるとことはしこそ侍れ。」といひければ、「さやうのこと、今まできかざりけることを申しければ、おくれてはあしかりなん。」女もうたもいるべからず、[illegible]と我力くらべにすべし。」とのものまでもなし、鷺すぐに使に行くべし、と〱」とのたまへど、「今日は日がらあし。」とて、夜のあくるを待ちかね、朝まだきより行く。何とかしたりけん、[illegible]も鷲もおなじ時に出であひ、つばねましこなよ「聞し、「鷺[illegible]より御使なり、よからぬいもせい定めあらんより、御みやづかひにいで給へと申せなり。」と、兩のつかひ同じやうにいへば、「しばらく待ち給へ、そのよし申さん。」とてうちへ入り、

こまかに語りければ、なやみのなかばにてはあれ、聞きもあへずたゞ入り給ふを、おもてに氷そゝぎなどして、いきいで給へるを、いろ〳〵なぐさめまゐらせ、「わが身などはおもふむねあれば、此の御ならぬみかたちを、御つかひに見え給へことて、屏風を御牀近くしやうじあげ、つぼねまして云ひければ、「此の通例のやうすくはしく御申し給へ、すく〳〵しくなり給はゞ、そもじさまたちの御ようを、何にても叶へ參らせん。」といへば、さしばはいたか、此の言葉は聞き所とや思ひけん、きげんよさうにて、「二ところの御まへなれば、われ〳〵にまかせ給へ。」とて、立ちゆけば、みな〳〵よろこび合へり。かくて使どもみちにて談合しけるは、「此の事かたみのいどみにならば、よからぬ事なり。とかくわづらひのおもきやうに、いひなさばよからん。」とて、鷲熊鷹の前へいでていひけるは、「おほせのとほり、つぼねを以て申しつれば、「わづらひなかばにて、御返事申さんやうもなし。いつはりなきしるしには、とこの上ながらまみえ參らすべし、こなたへ入らせ給へ。」とありし時、またのよには思ひしかど、もしまことならぬわづらひもやと、うしろめたうて、ねや近くよりて見侍りしが、起き給ふこともならず、匂ひやかにうつくしげなるかたちの、いたう面やせて、ことにいでてきこえやらず、あるかなきかのけはひ、きりつぼの更衣の、限りとてわかるゝみちの悲しきにと、ながめ給ひしも思ひいでられ、李夫人の、甘泉殿の牀に伏しけんいにしへも、かくやありつらんと、なみだをつばさに

包みて立ちつる。」と、たけきあすらきじんのこゝろも、やはらぐやうにも語りなしぬ。[illegible]もあは

れとや思はれけん、「さてはきのよからんほどは、まつべし。」とぞのたまひける。さて又瀬君のおとや

まくらに、したしき限りはきしつどひ、おなじやうにいひけるは、「ことごころよりの御使、此のたびば

かりには限らじ。御身すくよかにおはし給はゞ、したがひ給はんや。」よのとり〳〵とはあらがひたる事な

れば、まだきより御こゝろをもおとしつけ給へ。」とぞいひける。瀬君はなやみたまへば、おからなく

て、「いへばことにいはねばさわがれてと詠ぜしも、今我が身の上なり。さて〳〵みな〳〵は、何とてた

わりなき事をば言ひたまふや。おなじ日おなじ時に御つかひ立ちて、御こゝろざしのまさりおとりもな

きやうなるに、いづかたへしたがひたてまつらんや。昔もかかるためしあり。櫻子といひける女あり

しを、二人の男の二面におもひて、命をすてしあらそひければ、女の思ひけるは、昔より一女の身と

して、二門に行くことなし、又をとこのこゝろもやはらぎがたければ、しかじ、身をうしなはんには

と思ひ、はやしにわけ入りて木にくびをかけてみまかり侍りぬ。二人の男これを見てなげきけるが、

おもひの涙をおさへて、「はるさればかざしにせんと思ひしに櫻の花はちりにけるかも。」「いもが名に

かけたる櫻はなさかばつねにやこひむいやとしのはに。」と、ひとり〳〵歌よみなどして、したひけれ

ど、そのかひもなきといひつたへり。此の歌どもは、萬葉とやらんにのりけるにや。又いつであめい

のりの師の、いかばかり心をつくしたまへど、よしくしきことばをさへかはし侍はで、世に時めきぬる御かたなりとて、したがひぬるも道にそむかんや。貞女兩夫にまみえずとやらん聞くに、これは三ところより、同じやうなる御心ざしなり。又いにしへやまとの國のことかとよ、蘆屋といひし女を、三人のをのこありて、こゝろぐにおろかもなくいひよりければ、女の思へらく、一女の身はきえやすき朝露の如し、三雄の心ざしは、やはらぎがたき堅石の如しといひて、つひにみゝなしの池にゆきて身をなげてはかなくなり侍り。三男かなしみにたへずして、みゝなしの池しうらめしわきもこがきつくかくれば水も火とならん「『あしびきの山かづらのこけふゆくと我につけせばかへりこましを。』足引の山かづらのこけふのごと、何れのくまをみつゝきにせん。」とこゝろぐに歌よみしたひけれど、そのしるしもなかりつるとなん。これも又萬葉の歌にや。わが身の上も此のむかし物がたりにかはらざれば、いまいたづき事はなしとも、いのちながからんやは。」とて、よゝと泣き給へば、つほねをはじめいづれも、いかなる御心たがひもいできやせんと、哀れもまさりて、つばきをぞぬらしける。かくて月日もかさなれば、三冬もすゑになり、日もくれ夜にもなりゆけば、物のけしきも哀れに、寒さも増しぬれど、姫君はねやへもいらせ給はず、はし近くゐ給ひて、おもふ事いはでぞ只にやみぬべき、と歌人のいひしことの葉まで、今身のうへになりぬとは思ひ給へど、ましこはたのもし

きこゆるなれば、いひあはせばやとおぼしめし、忍びに近づけ給ひ、「いまはの際までも、ほにいでじとは思ひつれども、わごぜはわきて、心やすければ知らせ侍り。さてさてわが身のこしかた、ゆくすゑを思ひつゞくるに、一すぢにかたならぬ世のうきなり。此の身さへ露とも霜とも消えはてなば、よそのうらみもおはじ。惜しみても惜しみとぐべき命ならねば、自害をもせばやと思ひしかど、女性には餘りに心づよく、にげなきわざなりと、なかなか名跡のとなへをはゞかり、ねがはくは此の頃のなやみの弱りにて、ともかくにもならばやと思ひしかど、いまだ定業やきたらざりけん、わが命の絶えやらざりける事よ。一日々々とのび行きて、いかなるむくつけき目にかあはん。逢ひての後は千たび百たび悔ゆるとも、よも甲斐もあらじ。此のうへはせんかたなければ、世のそしりをはゞかるべきにもあらず」とても思ひたちたる事なれば、此の夜のあけぬ間に、てづから我が身をむなしくなさんとは思へど、自害やはなにとするものやらん、知らざることなれば、とやせんかくやあらましと、こゝろさだめかねゐること」と、語り給ふうちに、時刻もうつりゆき、やうやうゐまちの月も出でぬれば、「いにしへ人のすさびときゝしにいひけんも、ことわりなる光かな」と口すさび、此の世の月を見る事も、今宵かぎりと思ひ給へば、御こゝろ細さもいやましにて、なげき給ふことのみあり。さて世の中の心のよとたりをば、かねて深くおふしたて給ひし、たらちねをさきだてまつり、御あとのことども

[illegible]るのみにせんに、さはなくて、[illegible]に歎きみなげきせし事、[illegible]父母恩重経とやらんには、懐胎守護恩、臨産受苦恩、生子忘憂恩、咽苦吐甘恩、廻乾就湿恩、乳哺養育恩、洗濯不浄恩、遠行憶念恩、為造悪業恩、究竟憐愍恩と、説き給ひたると聞きしに、此の十恩をも忘れたるやうになりゆけば、三世の諸仏、又は六道能化の地蔵薩埵、閻魔大王も不孝のものと、うとくみたまはんと、つゆ深くおぼゆれど、思ひとゞまるべき道にもあらねば、此のことを父母にも知らせたてまつり、今生の御いとまごひをも申さんとは思へど、いかなるものか、このあたりにて我が子の自害するを見て、のこらんと思ふおやのあらん。ある経には父母常念子と説き給ひ、古人も「人のおやの心はやみにあらねども子をおもふみちに迷ひぬるかな。」とし、かく山路の一首になりにけりのがひの牛の子をおもふこゑ。」「子をおもふやけののきゞす立ちかへりけむりのうちに音をのみぞなくことよめることわりを思へば、知らせたてまつる事もならず、おのづから不孝のやうになり行く悲しさなど、いひおきつると知らせまゐらすべし。さて又局には知らせたけれど、これもいさゝかにかはらぬ事なれば、われをまきだしんとは思はじ、いさむることもあらんに、さなかんは後の世までのさはりなるべければ、おもひとゞまりぬ。わが身こゝろにへだてなきとほり、よきやうにはからひ給へ。此の三つのたんじやくをば、なからんあとにて、二ところの御かたと、いのりの師に見せたてま

つれ。」とて、「つひにさてあはではてぬる玉の緒のながきうらみを書きものこすな」と、書きておきたま
ひて、ねやより忍びやかに出でたまへば、ましこもつゞきて出でけるが、とゞめまゐらせんかとは思へ
ど、とまりたまふべきけしきならねば、叶はぬこといひだし、後の世のさはりになしてはいかゞ
と、思ひとゞまりていでけるは、「わが身もおくれず御ともも申したけれど、今のたとひし御ことの葉、
又は御さいごのやうすをも、ふた〳〵に語り聞かせ侍らざらんも、本意なきことなれば、夜あけなば
のこし給ふ御ふみぐさをも、つぼねにわたし、御あとよりおひつきたてまつらん。六道のちまたにて
待ちたまへ、いづかたへなりともおはしまさんかたへ、付き添ひまゐらせん」といへば、「それとてもな
し、心ざし深くてわれを忘れずば、あとにて後世をとぶらひてたび給へ」とばかりにて、はる〳〵と空
をながめやり給へば、月もはや西の山の端に落ちゆくを御らんじて、「わが心懸くる西方浄土もおなじ
かたにや。」と、うらやましく思ひたまひ、さはりのなきまゝに、一時もはやく行かばやと思し給ふ、
御こゝろのうちを哀れなることかやうに世を早うなさんと思はゞ、この世のことあきらめさせたまへ」
と、極めるといへどもかひもなし。たとひ又浄土を願がひたれども、往生するほどの善根をなすことは
なかりけり。その故は、一部経のうち、阿弥陀経に舎利弗不可以少善根福徳因縁得生彼国と説き
て、すこしの善根にては、彌陀のみくにへ生まるべからずと述べ給へり。さりとて、かの国と此の国と

のありけるに、華嚴國とて五欲の樂しみおほき國あり、安養世界へ往生せんとする人、此の國をとほらすとはるとて、十人に八人は快樂に著してこゝにとゞまり、終に佛道におもむくと見えたり。これらはみな淨土をねがひたる善人のうへにて、往生のなかだちとなる事もなし。わが身にはまだ何ともおもはずば、未來の事をしらず、花をながめ月にたはぶれて、身をくるしめければ、小善根にて人なしたるためしなければ、淨土へ生まれん事おぼつかなし。たゞし最後の念力によつて、などか彌陀の御國へ生まれざらん。觀經には、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と述べ給ひ、又雙卷經の十八の願には、欲生我國乃至十念若不生者不取正覺と說き給ふと聞けば、我がいまの一念十念によつて、彌陀如來六十萬億那由多恒河沙の御身をつゞめ、丈六のみかたちを現じ眼前に來迎し給ひ、やすやすと九品の蓮臺にいたらしめ給へ」と、高聲にのたまひ、念佛十遍計りとなへ、なむとなふる聲のうちより、つたかづらにくびをかけつゝ、あしたの露と消え給ふ。かくて夜もやうやう明けゆけば、御ねやのうちにては、いづかたへ行き給ふと、おどろきさわぎて尋ねしければ、ましこ君しきからをば、あとに殘しおきつゝ立ちいでて、姫君のいひおき給ひしことのは、最後の御ありさま殘さずかたり、たんじやくとりいだし、つぼねに渡しければ、悶れはてけれど、もしもいきいで給ふこともやと、急ぎ行きて見けれど、はや御はだへも冷えはてて給へば、せんかたもなくて、泣くよりほかの事は

なし。かかるまぎれに、ましこもいづちへかいにけん見えざりければ、たづねんとするところに、一くだりの文あり。取りて見れば、さて／＼かやうになりぬる事、年月君のむつましくし給ひつれば、おくれて一人残られむ悲し。かた時も早く御もとにと思ひつれど、残し給ふ御ことりは、又はいまは小時の實れをも、おの／＼に譲りまゐらせんためばかりにて、しばらく残りつるなり。黄泉の旅の空にて、詩のひさしうやおぼすらんと思ければ、こまかならずと書きとゞめ侍り。世にありたまひしやうに、うたかうむにもかゝりたるかと、木すゑ木の間をのみたづねければ、さはなくして、自害し給ひしなげくれに、いは井の水のありしに、身をなげてぞはかなく侍りぬ。つはねみはじめ泣きたる人かめにて、時うつりければ、たがつぐるともなく、我さきに、とりべ／＼にしぶらせ給ひければ、傍には鷲鷹も鷹どもを引き具していで給ふ。梟法師も弟子ども具されたちてぞまうでける。おの／＼うち姫のうたにかゝり給ひしければ、ましこが水におぼれしありさまを見て、さみだれ流て面かげはかなしむかし鷹の勝負記、安祿山が世をうばはんとせし時、馬嵬が原にて、空しくなりし俤もかくやあらん。されば、いにしへの詩人のことの葉にも、死生の顔色は塵中に變じぬ、芳體眠れおなごとし管弦の悲しきといへり、歌人も、わがおもふ身はみなのべに散りはてゝあさましきのとこそなれ、とぞよめるに、これのみならず、朝には紅顔あつて世路にほこれども、暮には白骨となりて郊原にくち

め、ともいひ、またすみの墨をとめ雲や世にはかのおもひはさだめになしなたれ、ととよめり。かかる詩歌ともみも、今迄のおぼえにつけて、はじめて聞きたるやうにおぼつかなくばかりなり。これのみならず、ひきよせていへばくすのいはりにてとくればもとの野はらとなりけり。水は水火はもとの水にかへりけり、おもひし事よすばきれぼこそ、なにもなかりけり。ひきよするとは、さきの世の業報が、地水火風の四大をよせて、此の身をつくれども、とくればもとの野はらになると、始終をよめるが、後のうたはとけて地水火風の四大が、もとへかへりたることばかりをよめると見えたりと、たが語りいだすともなく、あまたの中にていひかはし、日生落魄の世の中なりとも、鳥々のなげき淺からず、なみだは雨とふりぬれば、谷々のみなぎるもまさるばかりなり。扨またも捨ねは、ここらのたんじやくとりいだし、「ここところへまゐらせ、「かくなり給ふことも、みなノ\さまのみこころかし」、わきがたきゆゑなり」といへば、大德は、「いつぞや此のせんさくし給ひし時、いかばかりいつはりをいひて、かくしつるにあらはれにけり」と、顏のいろみちかへ、地へも煮えいるばかりに思はれけれど、申しあへもなし。短册をひらきたまへば、

逢にかくあはで絶えぬる玉の緒のながき恨みも君ものこすな

とはかりにて、よのことばはなし。三つながらおなじ歌なり。其の時、僧都は老僧をにらみ給ひ、「そこ

なばうすは不婬戒をやぶれり。いぞんとひし時は、いかばかりたふときふりをし、夢にも知らぬ様におもふるが、此のたんじやくはいかに。」とのたまへば、迷惑にやありけん、君の別れやかなしかりけん、人涙をながし泣きたる許りにて、物もいはず。童も聖も、一いたちの時にあらずは、め破戒の坊主を、はつとにくみ侍はんものを。」といひあへり。貝しうあるべき事ならねば、なく／＼聖拍をもよしこなる、みなにはかになしはてて、「まで御骨をば、いづこの御寺へ納めたてまつらん」と、つはねいひければ、諸鳥どもは、驚き騒に怖れて何ともいはず。老僧は物ごりやなかりけん、出家のやくとや、又わかきのめいふなるとこや思ひけん、「御骨をば高野へ納め給へかし。」と、こごゑにていひける。師ほ、かかる後生の事に、御用家の御計らひよからん。」と、高らかにいへど、霊仕此の聞きたまひて、下ここに出家はなし、とこ坊主はかたちは似たれども、心は大俗にておとれり。いかんとなれば、智積大師の御むやくに、無住無着にて出家とあるに似て、好色のしふぞやく深き僧なれば、後生の引導ことしかるべし。そのうへ高野は大師の寺なり、未來のためならず、傳教大師の御寺よからんず。天竺にての靈鷲山を、唐土我が朝へ移し來り、或は天台山、或は比叡山と號せり。又天竺の靈山とぞ申したりて、此の比叡山になり給ふといひ傳へり。これによつて、今に此の山を鷲の山とも、四明のほらともよび侍れば、此の御てらに籠したる、骨の納めどころはあるまじぞ、のたま

ふゝ。主は『佛道のことは知らざれど、これに尤も由緒ありと答へ給へば、いづれも『其のはなしにますはあらじ。』とさゝやきける。つぼねを始め付き添ひし者ともは、さらばとの由とやらんへ行きて、まみの御めとぞもとぶらはんとて、さるだたかりに立ちいづれば、勝国寺と遠からず山に詣でけるが、ひとつの山まで行きたりとも、たゞかへりてはせんもなし、此の世の無常なることとは、道すがらも語りこれ、物の物がたりにて聞きつれども、さほどには思はざりしか、いま姫君ましこの露と消えにしを、まのあたりに見侍れば、たれとても此の世の無常をのがるゝ事なきと、思ひさだめたれば、いかなる知識をかたづね出し、説法をもちやうもんし、なかく佛道しゆぎやうをなし、姫君のあとをとぶらひ、又は自身の得脱をも祈らばやといひてとゞまりはべり。その中に、某のたまひけるは、『なかる発心修行は、そのときのひとあれば、魔のしやうげありとかや、よそえたづねは、時刻もうつり行かん。いつぞや、袋坊主に物問ひしとき、小僧の蝙蝠いでて、師匠の知らぬ事まで語りしは、物知りと聞えたり。まづかれがものがたりばかりも、聞きたらばよからん。』とあれば、あまたの中より、誰と雀すゝみいでて、ひとつ口にいひけるは、『此の御諚もっともなり、佛法も十宗八宗とわかれたれは、宗々のたてばかりもあらまし御たづね、みなく\にも聞かせ聞きたまひ、佛種従縁起なれば、めんく\のえにしありて、こゝろおもむく宗々にしたがひ、後生をも願ひたるがよからん。』と、いふよりはや

く小僧が、師匠より上に着座すれば、袋法師は腹立ながらにて「それまではすゐさんなり、我がしたにおき給へ。」といへば、鷲鷹は同音に、「さて俗坊主は言語のさはふをば知らぬか。天帝は畜をはいれて師とすといふことあり、弟子なりとも、いかで説法者を下座にはおくべき。」と、いかられければ、老僧は我がしれたる事思ひたらしゆゑ、度々しかられければ、面目なければにげんと思へど、後のたゝりも恐ろしく、たび／＼恥にあふ物かな、いつぞや小僧が『命ながきものは恥おほし』といひしも、いま思ひあはする計りなり。」と、ひとりごちゐけり。さて小僧はたかきところへ請ぜられ、「われはいまだ見聞もはべらず、そのうへ聖教の一冊も持参つかまつらず、なほ真言はみつしうにて、説法などすることはなければ、いかゞ申さんは御聴衆のために、おそろしき御かたもとほり給へ候、御意にしたがひ、天台の判釈にまかせ、またおにおぼしたるとほりばかりも、ところ／＼御聴聞にまかせたてまつらん。」といひてぞ、高座へあがりける。「そもそも釈尊は天竺のうち、中てんぢくにて、浄ぼん王を父とし、摩耶夫人を母とし、出世し給ひてのち、世間の有為無常をかんじ、夜半に王宮を出で、檀特山といふやまにいり、十九にて出家し、三十の御年、菩提樹のもとにて成道し給へり。説き給ふところの法文は、衆生のこんじやう万差なれば、説教も又さま／＼なり。されども五時八教にはほかならず。かの五時とは華厳時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時なり。八教とは化儀の四教、

漸教、不定教、秘密教の四けうと、化法の三藏教、通教、別教、圓教の四教と、あはせて八教なり。五時のうち先づ第一のけごんぎやうは、三七日別圓の二けうを、法慧功德林等の四菩薩に命じて、小をからずして、たゞちに大乘を說き給ふ故、化儀の四けうのうちにては頓教なり。此のほか阿含、方等、般若等のきやうにて、小大と次第したまふことは、漸經といひ、得益の不定なるを不定教といひ、秘密の法を秘密教といふなり。今の經の內、別經のこゝろ信解が中なり。第二阿含教は、十二年のせつなり、三藏の一教をとき給ふ。此の教のこゝろは麁細の色みな無常なり、心又ねん〳〵にむじやうなり、色心ともに無常にして、空々なりとあかすなり。第三の方等經は、十六年のせつなり、藏通別圓の四けうをときたまふ、通經のこゝろは、これも虛無のくうなれば、三藏教のごとく色心を折破して、くうするにはあらず、六道輪緣のしよほふのたうたいを、もとより空なりとくわんじて、しばらく〳〵も實有なしとするなり、藏別圓のこゝろはさきにいふがごとし。第四の般若經は十四年のせつなり、通別圓の三けうをとき給ふ、此の三けうのこゝろもさきに云ふがごとし。これまでの四けうの內に、けぎけほふの八教こもれり。第五の法華經は、八ヶ年のせつなり、頓圓一實のみをとき給ひ、八教超過のゑんけうなり。涅槃經は、一日一夜のせつなり、四けうをとき給ふ、追說の四けうといへり。法華いぜんの四教を法華に開會し、かさねてのせつなるゆゑ追說といへり、追泯のゆゑに同醍醐味に

て法華一たいなり。また十宗のこと、修行の理は宗々の深意にて、他家よりはからふべきにもあらず、宗旨の名のたてどころばかりにも、御聴聞にそなへたてまつらん。まづ華厳宗といへるは、けごんきやうを依所として、宗旨の名とし、五教をたてて、諸教諸宗をせつし修行をなせば、もつともふかきむねなり。倶舎宗は四阿含経によつて倶舎論をよりどころとし、宗旨をたつるなり。成實宗、これも阿含経によつて、成實論をたのみ宗名とするなり。律宗又阿含経をえうやうとして、四分律五分律をむねとして、宗旨の名をあらはし、戒法をもつぱらとするなり。法相宗は方等部よりいでて、解深密経の三時の法をもつて、瑜伽論のへんのほうさうの儀をむねとして、宗旨をあらはすなり。真言宗は先顕後密をたてとせり、更に密用をもいへり。この宗も方等部よりいでて、大日経蘇悉地経金剛頂経の三部を依経とせり、宗旨を六大無礙にもつてたつるなり。もろこしにては、唐玄宗皇帝開元四年のころ、わが朝にては、元正天皇の御代のころ、つたへしわたる宗旨なり。わがこころといへりとて、はむるにはあらねど、禅宗にはまさるべからず。経論深遠なるうへ、なほあやしうたれば、ことばにあらはし難し。禅宗、これも方等部より出でて、楞伽経、金剛経、首楞厳経の三をやうにとつて、くうのむねにして、経をもつぱらとせぬゆゑ、禅宗といふなり。妙楽大師の釈しやくに、楞伽七巻の首尾をみれば、にくへつの実なるべし。あるひは以心伝心といひ、あるひは教外別伝ともいふ

などにおいて、くわんしんをかんえうにすると見えたり。唐土本朝において、貴賤ともに用ゐ來れる宗旨なり。淨土宗、これ又かの部經にいでて、觀經雙觀經阿彌陀經の三經と往生論によつて、かの國に生まれん事を願ふ。即身成佛は上こんのきのものゝのぞむところなり、末世げこんのわれらは、まづ淨土にまづ生まるれば、のちは成佛もならんと、彌陀のほんぐわんをたのみ、欣求淨土の行をなして、宗名をも立つるなり。わが朝、後鳥羽院の御代より、いまにいたるまで、はんじやうのしうていなり。三論宗は般若經によつて、中論百論十二門論をむねとして、わが宗の名とするなり。本朝には、推古天皇の御宇、または孝德天皇の御代のとき、ひろまりし宗旨なり。これまでの九しうは、釋迦如來四十餘年があひだ說きたまひし、經教をまきやうとして、たてたる宗旨なり。ことかたのみはなつて、小僧こゝろに思ふやう、此のうへはのちの八ヶ年と說き給ひし、妙法蓮華經よりいでたる宗旨のことを說くべし。但しこれは鷲鷹の尊敬し給ふしうていなり、おろそかにいひなして、御氣におちかはば、今日の說法はみな無になり、又ののものとがめも恐ろし。そのうへ此の經は經王なれば、かろしむる事もならず、こゝろのおよぶ程は、經のくどくの深き事をもいはんと思ひ、「抑天台宗といへるは、無量義經法華經普賢經のさんきやうを正依經とし、涅槃經を傍依經とせり、能弘の人によらばてんだいしうといひ、所弘のきやうによらば、法華宗又は佛立宗と云ふなり。いかんとなれば、一のまきはうべんほ

んに、是諸法諸佛之祕要、又四のまきはつしはんに、藥王此經是諸佛祕要之藏とも說き給ひたればな
り、又おなじほんに藥王の十喩とて、十のたとへをもつて、妙法蓮華經をほめ給へり。まづ一さいの
川をあげて諸經にたとへ、此の經のくどくの深大なることを大海にたとへ、又一さいの山をあげて諸
經にたとへ、此の經をば須彌山のことしと說き給ひ、一切の星をあげて諸經にたとへ、此の經をば月
天子のことしと宣ひ、又日天子の能く諸の闇をのぞくがごとく、此の經も亦復かくのごとし。よく一切
の不善の闇を破すと說き給へり。此のほかのたとへは、しげければのこし侍り。これらの經文をも
つて思へば、法華經は諸經のなかの頂上なり、經王なり、第一なり。そのうへ又さへの經文のすゑ
に、此の經典を受持することあらんものも、亦かくの如し、一切の衆生の中において亦第一なりと、
受持の人までもほめ給へり。かやうに所持の經をば能持の人をほめ給ひても、此經に惡人なくて
は、うたがはしき事なるに、二のまきの譬喩品に、舍利弗を記し、授記品にて、迦葉を光明如來、須菩提
名相如來、迦旃延閻浮那提金光如來、目連を多摩羅跋栴檀香如來と、授記し給ひしよりなる事なり。又五の
まきには、五逆の提婆に天王如來とさづけ、龍女は成佛して無垢世界にいたり、此の外に憍曇彌
耶輸陀羅等、いく人の成佛をかぞへ知らず。かくのごとく善人惡人二乘闡提にいたるまで、十界皆成佛道の
無相をたもち給ふには、類なしき事しうなり。」とほめければ、龍宗の龍神とも云ふべしとて、ここと

かなしみ、感涙をもよほしけり。高僧・智識のたつとぶところの御經、又は宗旨をも世に弘め給へ、さきければ、喜悦の眉をひらき、「此の粟散國には、斯ばかりほどの大導師なり」とぞほめられけり。また又、「かかる佛縁に遇ひやうには、時刻うつりては、なり離す事なり、よつて御小僧のまゐり給ふ、御寺へ、尋ねまゐりて、ねがはくはかの御寺は、いかなる所にて候や」とのたまひつゝ、鷲の高座にのぼりてよ り給へば、諸鳥ども、われおとらじと進み出でてぞいたゞきける。さて受戒すぎければ、小僧も高座をおり給へり。老僧は面目やなかりけん、又おそろしくやありけん、ふるひふるひ座をたち、小僧に伴だち古寺へとてぞかへり給ふ。諸鳥どもは、「此のかたがたにての寺參りは、よそ目もはゞかりあれば、人間のすがたをまなびてまゐるらん。」とて、衣はおなじ色なれど、こゝろはおなじからぬ、てら／＼へぞまゐりける。かくて年月をふれども、佛道修行のけぢめなく、うそ姫の菩提をとぶらひ、自身の得道をもいのりけり。此の根源をおもふに、執愛戀慕のみちよりおこり、まことなるかな善惡不二といへり、迷悟不二といひ、邪正一如といひ、凡聖一如といひ、煩惱即菩提といひ、生死即涅槃といひけるも、理と、今思ひあたるばかりなり。但し不二の心は、別のすぢもあるべき事なり。いよ／＼諸鳥共修行成就して、遅速はありけれど、遂に無常の嵐に誘はれ、本覺眞如の都に立ち歸り、同證佛果の願ひを滿てけるとぞ聞えし。殊更不思議なりし事は、とり／＼の過去の縁や深かりけん、現在にてのか

ね音にやあはれならん、何れも同じ鳥部野に葬りて、墓こゑしの松ふうゐ、卒塔婆なごあとたてておさけれど、年月重なれば誰彼にふりてきぬ、そこはかとなき有様にて、誰彼ふともなく、風ばうくとしたる野への草原、誰とまらいふばかりなり。末やうの事なや、古の歌人も、

ゆきゆけしもの名に聞く鳥部野十市とも何ゝぬふるを嘆きかたら詠ひしなき給へしも、こやうの道理にや、そことに有為転変のあだなる有様、目の前にて、見きゝし事どもなり。

可笑記

如儡子

可笑記評序

[illegible]をくわんずれば、あきじりめくら、おつし文旨の如し。[illegible]

[illegible]

可笑記卷第一

○昔さる人のいへるに、永禄のはじめの比年、東の空にはぶれのもえいづる星あらはれたり、人おやしみあやしみ見ぬといふ事なし。その比名誉の博士、明文をもつて考へければ、我が朝文武の正道滅却すべきしるしの星なり。されば王位武道ともに久しき事、古今以後つたへ来る、侍の家を立事に逢へは工夫、近代は家法を取りうしなひ、仁義禮をわきまへず、或は一向無能にして、利を得日にたかぶり、慾にふけり利に進ひ、はしたなる事を好みもてあそび、重なる時は、めじいやの非も惑て、今日殿つとめの追従やとらひ事の、道にあて道にまはれて、適しともせずとすれども、家老出頭と用ゐるなれ、家老を書面にて、あやしき者を分別にて、一図に重用して、悪逆不道の輩をまへをよろこび、無智なる者を重用とし、神道をやぶりあざけり、佛法をいやしめ儒をす、尚不忠孝不義理の不智者なれは、ゆるし難き義なり、然る間武家の旨ちかひけん、良賢の勧を会話すへしと言へることを、家中の如く傳へ来れり、われ愚かなるゆゑも、かくしうまへし、おく集隣して、さてのみやたゝ、いかなるかのみはなす、此の世界に成りて、さはいふまけ

誠遂東の家なるべし。若し他兒の人文字の御用ならば、[illegible]儒者のかた、かなの御用ならば、公家連歌師のもとへ御たづねあるべし。[illegible]、唯うらならくは文言つゞき[illegible]、短冊よめかぬる事を。さりながら内外の書に[illegible]、錯簡などもありと聞く、しからば何の遺恨かあらん。但し不慮の誉れく[illegible]求むるに似たるか

○昔さる人の云へるは、穀梁傳といふ物の末に、孝行の子は親の善き事のみをいひふれて、悪事をば深くかくす由をしるせり。然らば忠節なる侍は、主の善き事のみを言ひふれて、悪事をば沙汰すまじきなり。さればいかほど誹謗あざけり言ひふれても、主においては、せつかんちやうちやくはするとも、死罪流刑におこなふ事はあるまじければ、主君は宥し給ふべからず。されば主君も父母も、御身の誹謗あざけりを痛くきらひ給ふならば、先づ手前の悪をえらび捨て、善をねがひ求め、五常をまもり、臣下に掟をくだし、子供に教訓あるべし、さあらば何の誹謗嘲りあらんや。誹謗あざけりなくば、折檻ちやうちやく死罪流刑も有るまじ。但し御身は不慈悲、不義理、不行儀、貪欲深く、よろづひがごとのみをおこなひなし、其の誹謗嘲りをやめんとしたまふならば、更に言ひやむまじ。しかるをしひてやめんとしたまはば、折檻ちやうちやく死罪流刑の絶ゆる事なく、いよ／＼[illegible]かんなるべし。たとへば洪水のまし来るを、俄に堤をつきてせきとめんとする如し。無理にせきとめ

ふとするときは、あたれきとものやうに信ぜて、いかなる見苦しきとも能ふべし。一かうに義理にて
めには、歌よりも命を入れて連歌つくべし、侍子あたるとては叶ふまじ。されば其の武道修行をも
さとむる兜といふは、一向当世にかまはず、義理つよく、存寄たゞしく、慈悲ふかく、物ごと吟味ありて、武勇
に勇みを取る家下にまかし、手ごとに覚悟あるべし。
○昔さる人の云へるは、侍人ごとに油断すまじき所あり、定て浅智者の不幸にして、死ねば後くやむ。
し。ただしき時は事と思ひ、油断せずして大病にかゝりて悔ゆべし。若き時節ならず学まして、年寄りて
悔ゆべし。無事の時に油断ずして、恥をかきて悔ゆべし。又酒をのみ酩酊して前後を悔ゆべし。又、
臨時に利行もなく、利口にのみ言ひもして、善悪の所へことを申しおこなひ、諸人の愁へ悲しみつ
もり、又油断すべからず、大酒悔ゆべし。其時のことにおこなひ、天命に背き、すなはち
みをみれば悔ゆべし。家来をもなくして、心ざしのかれ、わき見たくなし悔ゆべし。日頃不忠
不忠にして、合戦の場に限りし時悔ゆべし。高家のものの雑談をもして、天下をなして悔ゆべし。け
いは、主君にたのまれて、世のためにも悔ゆべし。一度の花かいしあたなれば、眼前におこたらば
り、我々へて、其人にまさりけれ、ひやうし有るべき侍ひ、一人づつ油断して、名ある相違いたす侍の
べし。死ぬべき時死に得ずして、生きがひなくて悔ゆべし。

○昔或人の云へるは、人の心は萬えんにひかれて、移りやすきものなり。盃をとれば酒に心を奪ひ、碁をとれば勝負に心を奪ひ、うたひをとれば謡に心を奪はれ、色をとれば色にまよふ。[illegible]くうちに人は[illegible]、遂に其身をあやまる事なり。

○昔或時[illegible]の女房に[illegible]はじめて、心を通はすなど二所あり、一人の男は此の男に嫁ぎ、夜な／＼ひそかに契りをこめたりしが、又一人の男はわが夫を討たんと思ひけるに、故に此の男を頼みにしけるに、日頃縁を結び二人の女の夫と云ひ、不慮のさいなんにあうて死にけり。彼の男ねがふ處の幸ひと悦び、扨てつれなきものと思ひ[illegible]て夫とする。或る人の云ふやうは、「かねてよりむつまじき初めより世になき人を夫とする事なるに、何とか別れて、日来其方を頼み、情ある人と思ひ[illegible]他人の妻にて有りしとき、我にあざむきをかはし、むつましかりし女は、今是われが妻と成りても、又他人に心をかよはす事も有るべし。又日来我心をつくしくだき悲しみけるを露にもなさで、我と思ふ嫌ひし女は、只今わが妻となしても、又他人にみだるべからず」と語りけり。是れを以て思ふに、譜代の主をふり捨てて、敵方へ降参内通する人は、又其の主をもふり捨てて、他の主へ降参内通すべし。主君において心得給ふべし。

○古き人の言へるは、常に親しみなれむつぶべき友だちあり、慈悲ある人、義理つよき人、慇懃なる人、堅く言をまもる人、忠ある人、武功の人、孝行なる人、分別ある人、書道ある人、正直なる人、又友だちにいやなる人あり、心のひがみたる人、色好みの人、不断大酒をのむ人、数寄をすく人、短氣なる人、高慢すきなる人、うそをつく人、おごる人、慾ふかき人、臆病なる人、不忠不孝の人。

○古き人の言へるは、陸奥の住人鳥川權兵衛と云ふ者、ある時の合戦に先がけをいたし、大河を一文字にさつと渡し、高名比類なく、恩賞に預り、よろこびのあまりに一首、

先がけをすればこそ高名取川身を捨ててこそうかぶ瀬もあれ　權兵衛

○古き人の言へるは、人として富貴を願ひ求めざる者は有るまじ。但しいか様に願ひ求めても、朝夕をさとし昼日中まで遊びくらしては、いかなるとも富貴ならむや。兎角十年二十年も是非共の心掛けにて、精をつくしたらば、またいつとなく富貴ならずとも、口にてはねがひ求めたる分にては身をすぐるほどの富貴にはなるべきもの也。但し、農工、商家、色々のあれども、先づ其道の利をもとめに四ツには、一心不亂に思ひいるほどにして、十年十五年も道に至らんと学問すべし、されば其の先の一つの学者になるべし。其の仔細は、十五六歳より三十になるまで学問をするに、朝夕十五日づつ、七書、三註、四書五経をもすまし、目録の書籍をもとめ讀

心すべきか。さあらしにおいてこそ、たとへ天命に不幸にて貧には陥ども、うき世の人に嘲りのあなかるまじ。奔走であるべし、商ひよ身い貧なる事も、何ぞこれらく論のあるぞの、嬉し悲しむまじき。然に猶も此事なくば、富貴栄耀の楽人よりはましなるべし。中にも、此様に富貴栄耀なりとも、常にお身を慎まれなば、一生うれへ憂しみ絶えまなし。されども世間に楽しみあり、これ学者にもいへば、世間の人捨て置く事なし。捨ておかれぬほどにこそでは、必ず富貴たるべし。真友達の上に来り、楽しみ、まさに其の中にありと、大聖孔子の御教へありがたし。

○昔唐に五柳先生といへる人、田居して世を遁れしが、ある事ありて、一度うき世に出て仕へし時、白鷴といへる鳥を愛して飼はれけるが、秋の頃にや、照りそふ月をまて打ちながめて、いにしへの住みなれし山の端のけしき、さぞ懐かしく、帰りたくおぼしき心切なりしかば、在りてもなごの口を開き、此の鳥をはなちやりにけり。さる人なれば、おのが心に思ひあはせて、はなちたりけり。今の世の愚かにむさきもの、いかでか思ひあはすべき。牛馬犬畜の外面はするに似たり。

○昔ある人の云へる事、大身、小身、富貴なる人の子供衆には、必ずなる若き人をそへ置くべし。守する人の遠慮無慾なるがよし、小姓衆は神妙器用なるがよろし、御乳の人は氏系を選ばず、下戸しかるべしとぞ。

○昔ある人の云へるは、牛は心愚癡にして角ある故に、やゝもすればつきあひ、犬は心ぐちにして牙ある故に、やゝもすればくらひあひ、鷄は心愚癡にしてけづめある故に、やゝもすればけあふ。識に明の如く、萬の藝能有る心愚癡なれば、その藝能にたかぶり自慢して、他をそねみそしりて、後はかならず喧嘩口論をいたし恥をうくる事、畜生同然に淺ましくこそ覺ゆれ。ことに心得給ふべきは、位ある人、大身なる人、金寶もてる人、物知りたる人、出頭する人、ちからの強き人、利發利口の人、心剛なる人

○昔ある人の云へるは、世間の人々、我こそたけが低い、色が黒いと悔い悲しむ事なかれ。いはんや他人においてそしりわらふ事なかれ。其の仔細は金子は小さけれども、萬の寶にまさりて天下の寶となる。針は小さけれども、衣類を縫ひて衆生の用にたつ。墨は黒けれども、佛經祖録聖賢傳の書をしるして、天道のたすけとなる。硯は黒けれども、諸道具のたすけたり。竹は長けれども、其の中空虚にしてうつけたり。山は高しといへども貴からず、木あるを以て貴しとす。高僧は低けれども、萬里をいたせり。たとへば古徳といふものたる人が、いかほど痩せほそりたく願ひたりとも叶ふべからず。しかるをしひて痩せけるくひ物をとめ、かたちをいかめたらば、かならず貧になりてやまひ生じ、身命をなくしおるべし。又痩せそのたる人、いかほど肥えふとりたく願ひたりと

も叶ふまじ。然るをしひて肥えふとらんとのみ、食物をたゞさんにして、ものするのひをせば、かならず氣血をみだらし病を生じ、身命あやふかるべし。されば藥師[illegible]の用語、[illegible]、藥をあたへ養性するとも、いかで其の驗を得ん。しからば[illegible]、[illegible]にて、[illegible]、此の[illegible]せいがうとらんにて、[illegible]あらず、我の身は[illegible]つなぎ[illegible]の無念さにつくぐと思案しけるは、我が身にこそかくあらめとも、是非子孫に於ては、せいのたかき子を得つべしと、されば妻を迎へんに好みありて、みめ容貌にはかまはぬ望みなれど、只せいの高きを尋ぬるに、其のせい六尺あまりにて、無雙の[illegible]なり、いまだ[illegible]ほどに、[illegible]作して、九月の[illegible]、[illegible]みればむすめなり、あつぱれ[illegible]あれかしと、[illegible]なるよし、[illegible]、育てけり。かくて此のたびは是非共、男をまうけんとせし[illegible]に、[illegible]女子ばかり五人までもてり。あら腹だゝしや[illegible]と、此のあけくれおもひなく、[illegible]、なげすてもとどめけれども、[illegible]して、養育するほどに、いつぞの程にか、そろりそろりといたいけぶりをなしなし、見なして、朝夕のうへにてぞだり、そくさいに五人ながら成人す。しかれば此のむすめども、いづれも母に似て、色黒くはなはなし

ぞ、かくばかりあさましき口ぞかし、ひとたび出て耳にすく、眼はなく動きがたく、やりおとがめなきにて、六尺のたかの如なり。さればむことのよあいる事もなくて、何ともてあつかひたることなや。されば生れつかぬ事を、しひて結び求むる時は、必ず難儀のなまだちとなれる。親にや兄にもこれにはすりまれ、いかほど富貴を願ひ求めたりとも、我と心にかなふまでは、しかるをしひて求めなば、かならず仁義に背き、身命をうしなふべし。心得べき事。

○昔さる人の言へるは、合戦に勝つべき大事の日どり、大風、大雨、大雪、霜寒、夜闇、大河、大山をこえたる時、ゆだんなく夜討を心がけべし。

○昔ある人の言へるは、たゞ世の中のはかなき事を思へば、身の置き所もなき心地こそすれ、とくして世を遁れて、しづかなる身にてあらまし、其の世を遁れてにしかず、人間に百世を知せや。縦ひ千年をへぬるとも、つひのきはなきにしもあらず、正に其の命数んきはに、若き人のしねるより、まことに悲しきもなく、世の中の人のやうなるは、思ひいれば心れとこそ、老いはてて牀にふしなば、諸人共にもて佗びぬべし。此の身惜しながらも、三千にあまれる年月をかさねて見るに、更にその事をもいとゞのだにこそ覚ゆれ。けふより存へて、四十五十を経て百世にいたりぬとも、又かくのごとくならでしかし、古の人は六十に二つをへて、生まれたる初とす。されば昨日生れて今日死し、執心

さらに常なし。誠世の無常なる事、ひま行くこま、ひつじの歩み、石火の光、いなづまの間のごとし。されば去年は在れど失せ、今年はたが死に、この月は誰が身まかり、きのふは在れども今日は亡くなりはてゝ、けふ健かなるも誰かなくなりたると見れば、今は我が身の死ぬべき時にあらずや。けふまで遁れ難き命の際、あけくれにおもひしめさるゝに打驚きて、とく世をのがれ、松の下岩根に身をよせ、後の世を願ふべし。さは云ひながら、我も又遁れ得ぬ身なれども、此の身はいかなる前業のつたなきにや、いまだ衆生のえんつきず、心のみ悲しめる事切なり。あゝかく悲しみたれば、一たびはのがれざるべき事、何の疑ひあらん、果物のじゆくし、時いたりぬれば、おのれとほどの落つるに似たり。かくいへば傍人とた熟する時をまたんとなるべし、さあらば我が如く熟して、一朝一夕の風を待ち給へ、さあらば江戸の中におほき人々、死なざる時日は有るべからず、一日に二人三人のみならんや。浅草芝日神田山の手、其の外の寺々野山ごとに、無常のけぶり立たぬ時あるべからず。老いたる若き、つよき病ある無病なる、高きいやしき男女僧俗にかぎらず、思ひがけぬは人の死期なり。

○昔さる人の云へるは、大聖孔子の教へに、父母を持ちたる人は、遊山慰みのためばかりに遠く行き、日を重ねて歩くべからず。其の仔細は、我いたづらにとほく、父母に立ち隔たり、日を重ねて住へず、無沙汰いたす悲しさよ。もし此のうちに父母の身命に、いかなる大事の出で来んも知らず、又

いかなる用のありしをもおぼつかなしと、大切に思ふのみならず、父母の我を見たし逢ひたし心もとなしと、いかばかりのあんじに給ふらめと、父母の心もかへり見るべし。されば父母の心をもつて我が心となし、父母の恵をもつて我が恵とせよと有るをや。

○或る人のいへるは、それは人は人のまねをして、賤しき心までけれども、賤下にまねるべし。大名が小名のまねをすれば家をうしなひ、小身が大身のまねをすれば身をうしなふ。或は侍が町人のまね、町人が侍をまね、出家が俗をまね、俗が出家をまね、此の外分別あるべし。

○古人の云へるは、一日やぶれある噂けきこゆ、若衆歌舞伎を見物にいゆる、大勢の中へ分け入うかるに、されやものまへに、又それしことらの人をわけて、我がぶの見物すべ。此のおりにお様はおして、通用すれども見えず、上臈の女口、我が供の人をた押しに押す。又人分別にも押しまする、いよよく心をつけて、さらに御をもひけしとするも、いかな分別なる猿のたてあて、我をまへなる貴がぶりに肘して、我をばしらぬやうに、我が供たる人又、それに対して腹が立つべし、我大こゆ押されば我が立ちことで、我が行く人又腹が立つべし。我うしろの押されて、腹の立つことしに、代をまへなる人、又腹が立つべし、前後たゞ縁るにはしかじと思ひ、すこしいしと立ち縁をはらか。其にて思ひ出しけるは、ある時しや、いんじいの、我の心持を一のなるべし。

くむなしき人の弔へるには、我一とて果かなかりし時、思ひもよらぬ人をはかなみしまさんや、あまりなる情にうすく
も致し、しづ心なき世の中の習ひの理に、人しれず袖もしほるべきと打ちふし、あさき情けゆゑに、悲
しさのうちに恥ぢたしき目もみ侍らず、昔は九日ぎふの山隠ら、難にかすめる几帳の、ひとへにうすき人
こと、高下のさだめ来し侍はもと、むろは雨にて、日ぐらしの、をりはへて泣くばかりなるに、あすき
の千葉かさなり、にしき木のたてながら朽ちぬべき時いたり、けふの細布むねあはじとや、あ
ふせを憾む夕ぐれは、若しいかなる障りかもあらんと、やすき心のひまをなみ、言種にぬるゝ袖すね
の、枕定めぬ折ふしは、風の妻戸を音づれきへ、君かと胸打ちさわぎたましひを消すこ、かくてひとよく
れんりの手枕かはす夜すがらに、うれしきことのみ遊ぐれ、物もいはれず、せめての思ひには、其の時
の情なき怨みあへるに、千夜を一夜の秋の月さへ、夜ふけがたにかたぶき、思ふ人いしはにうちねど
ゐねるさへ、またむつごともつきなくになど、恨めしくかこちあへるに、別れをこそふ八声の鳥、は
らはらと涙も血に流れ、きつにはめなでと悲しあるもよしなく、おくりやりたる妻戸の程よそ、むなし
くたゝずみたるに、きぬぎぬのかたり身にしみ、またいつかはとしたふ、またねのうきつらさいはん
かたなし。さて過ぎし夜のおぼつかなき一筆のたよりを待ちかぬるに、其の日もやうやうと暮れ行く
入りあひの聲、まろねの枕に響き、待たれし夕に引きかへたる悲しさ、いひやらんも言に及ばず、さ

ふは朝の花のえならぬ色香に称しても、同じくは詠むる人と二人詠めばと、思ひにこがれ、其の花の
うるへ見ては、此の花の盛りなるうちに、君もろともに見もし、みやぼやと待つ甲斐もなく、あだに
散りはて、嘆きにこそ悲しく、花もろともに果てて、其の木の下々に朽ちるうさつらさ、月雪風花な
ど、あらゆる風土の風情を弄ぶもの、ただ、かりそめに身をやつして其の身の心あだかたきもので、嬉し
なつかしの中立となる。ここには耳にふるゝ虫の声、鳥の囀り、有明月夜の月とゝもに、雨うつ夜の雨、霜
雪の朝、ふとによるる風景、またある絵画をもて用ひらし、これぞゝ物の哀れをかふまでん、いづれか想ひの
つまならざらんや。かく千古の詩歌の集、そうし物語をよみて心のうきを慰さんとすれば、しかるふ
さがの間に、文字さだかならず、このみち盲の女なり。いつぞや此の程にも、かの聲色の芸をた
えて、何ともやう来人になりたる例は、恋する心とまことのたゞとなりたりけるの例とて、ことごとく
面白くたをれて、心の哀れをもたせ、観念の悟りともなつて、愁にたへず涙を得ることを申しければ、か
たはらなる人の申しければ、おほくこそは思ひもしの給ふ物なれ、さりながら其の御心、恵みの下との恋を治む
べきらず、狂言ごときは又すゐもなれど、文を以てこれといふも實の道にあなれ、正理に照し読まば、い
かなる面白にてもあれ、侯とも、其の貧苦の有様、一興とおぼして、詩歌文章にたねまもなり、観念の
たすけにもなるべし。」

○昔さる人の云へるは、淨土の幡隨意上人と、清見寺の新靈宗と、駿州六とはの舟に乘あはせし時、幡隨意問うて、「御僧は何宗にておはす」と。新靈宗答へて「南の沙彌でおはせしか」と、またたる御僧さればやるき淨土宗といへる。淨土の和尚なり。又も一休禪師は、佛を食して、わがはらにて糞になりて出けれといへば、禪僧答へて「惡魚僧都こそ魚をくらうて、その糞のあみだに成けれ」とあれば、亦こたふ。高隨意こたへて「一言にて候」。兼寛僧手をはたとうちて、それはふしぎや、一休和尚は佛をくらひて、糞にひられけんとおもひて、と笑ふ。

○昔ある人のいへるは、さる御大名ことの外若輩なるにて、すがた美しく、あはれなるはしき小姓を多く召しつかひ、知行金銀もろ／＼の寶をあたへ、いとほしがり、かはゆがりたまひて、いかなる惡事にてもよろしく、其の若衆どもが云ふ事を聞、皆よき事と思召し、日夜朝暮淫亂におぼれ、酒宴に長じ、不行儀法、かずかずにして、無理のかごとの多く、代々の老どもをさしおきて給ふ故に、國の仕置法度以下みだりになり、御家滅亡あやふし。是れをいたみ悲しみて、家老中に意見申あそいはんとすれども、近よせ給はず、諸何わるさすねにすねありて、懦惡逆不道におはしましかる所にかの老分別を廻らし、先づ御若衆だちの日頃よりすき好む所の、色々様々なるの調へ、あけくれかの若衆だちをもてなし、なつけ近づけおきて、おもふさま氣に入り、扨をり／＼と佛道儒道

の面白き事をはなしすゝめて、それ〳〵の気分をうかゞひ、佛法ずきたる若衆には、佛道をもつて善に引き入れ、悪をしりぞけ、儒道ずきたる若衆には、儒道をもつて善に引き入れ、悪をしりぞけ、かたのごとく、能き人間に仕立、譬へば、後には上若衆、又かの若衆共にすゝめ入れられ、語りたびけられう、佛道儒道に入とゞ、善に進み悪を捨てたまふ。さあればかの家老をも、名誉の善人なりと賞翫したまひて、嘲る所なき上君になさせ給ふとなり。然らば女房ずきなる主君ありて、諸悪にたちじり給ふとも、家老の分別者を以て、其の悪をのぞき、善に引き入れ申すべき事、何のうたがひあらんや、いはんや此の餘のすくる主君をや、家老のものども、心得あるべし。

古人のいへるは、されば淫慾の道ほどおそろしき物はなし。昔の聖賢を破り、其の身をほろぼす事歌といふ歌は、女色をふかくいましめて、其の一角といへる仙人、女に心をうつし通力自在なりしをさへ、志賀寺の上人は、わずかの京極の御息所に恋して、御子のあまりにうき名をながし、花山の法皇は、后の御伎にふかき揺しまし、御上たせいありしたに、あのとの中将といへる好物にいる、此の外皆は醍醐と呼ばるゝ賢き人、智者といはるゝ武き人も、皆女にたぶらかされしためし多し。

又國つる人のいへるは、總て事といふ事に、慾深くなき寶の主を持つ人ありて、いかに思ひけるにや、

其の時分、其の國の臣下みかに、常に子罕といふ司一人ありけるに、玉をもちて宰相にまゐらせしに、此の
なくれたる、心ざし深し、されども我は正直にならずして、貴き寶物は受けとらず、寶とする
もはず、われは其をほしくもなく、寶よりも思はぬ心をもつて寶とす。されば今貪欲をもつて寶とて、
節せ其のまことの事、皆南子の時の上たりとて、しひて返し給ふ。

○日本にもやうん云へる人の痛める歟なりとて、人の論じける事聞く、

中々に頼まみおのが力にて柳の枝に雪をれはなし

けにも／＼柳などのただひみ見るに、山柳の強きによつて、雪ふりつもれば、おそれてなる、事あ
り、是れをなん雪をれの枝といふ、岩其のごとく、岩といふ物はつよきものなる故に力を出し、かた
きものなるゆゑに、又舌といふ物はよわき物なるゆゑに、やはらかにして、折るる事なし。さ
るほどに人間世上にもあまりぬれば、歯は折れ動きかけおちれども、舌は其の人一期のうち、ふけ落
ち揺ぎ折つる事なし。又火と云ふ物は、其の勢ひきびしく強きによつて、鐵石山野もみなくだき、
灰となせども、薪をたへざれば滅しやすく、又水にあふ時は消えやすし。又水といふ物は、其の
勢ひ柔かに弱きによつて、紙一重をもつて隔つれども、へだてやすく、又髪の毛一筋をもつてとほせ
ども、さはる所なし。されども千石萬石つみたる船をも、かろ／＼と浮べ、又海となる時は、大山を

を僻任するも打くだく。すべて聞ふもおふんなは、慈悲深く義理つよく、老いたるは猶若くせしと
りたて、同年にしたしく、慾あさくいんぎんにして情ふかく、鬪なる心をおしかくし、しかも底には
油斷せず、うはべやはらかに人あひよきこそ、眞實の大勇強無類の武士たるべけれ。
○常さる人のもとに、人を寄り合て集まりしに、その中によすぐれて案才なるといふ人の、ふせい
を見聞くことをこのみしけれど、かの人集にきて打ちかゝれば、萬の用所をはたとかき、後悔すること限り
なし。何ぞ物を見ずれば、常常はたしかに見たると云ひて、後にとへば何でも見ぬと云ひあらそひ、
又のみたる物を喰ふれども、腹十分にのみくうて、後にとへば其の左味をしらず。或はかしらの上に
火をいたゞき、高位にあれども、常に諂ひしらず、只基にわるくすきて、鬼穴と云ふ事も晦らず。其に
わけには聾人の聞に、心ここにあらざれば、聞けども聞かず、見れども見ず、食すれども其の味を知らず
と、此の外此の心持萬事に心得らるべし。
○昔人のいへるは、まるかたにしてさる事を見るに、萬倍百年されるものどもがいへるに、此の頭かうを
といふ意こそ、こころの外世間にしてなきものけれ、我が身としまかりしまでは、よき人の嗜なりといへ雖
されどの事なし。下崩はなる首をはきりて捨て候由、むしと書き付けたり。是れに心付きて常軌を
飼ひそのよし候、このしろ、せへぬ味常にんにくまでも、高家大名の御前なゝのならず。又是

れにおもじよりて、つら〳〵世間を觀ずれば、いかなる貴人大身の御前にても、すぢなき下手いやしき商人ばらも、金がねさへもてば、めたと召し出され、おのが恐れず御はなし、御相伴を仕る、そのかみはかくはなかりしと見て

○昔さる人のいへるは、下臈の詞に、苦無にもとりえありと云ふに付きて思へば、誠なるかな、何事にも皆とりえあるべし。弱馬の人をくひ、はね、ふみ散らし、百曲あるは必ずかんがつようて、重荷なるかとりえなり。又かんの内なる馬は、かならず人になれしたがひて、荷負ひ田返し、民のたすけとなるかとりえなり。又夜中の火事が眞暗にてやくる物ならば、何ともみえなるまいに、あかきこそとりえなれ。又雪の色が赤か黒かならば、物に付きて何ともえなるまいが、白きこそとりえなれ。又ぐど〳〵たる人は、正直なるがとりえなり。又わやくなるものは、こすかしきがとりえなり。

○昔ある若き人あり、立居靜かに大くゐひせず、養生を好みて無だ口をきかず。或人云ふやうは、あつたら若き人の若きにもあらず、年寄のひがみ、しんきやみかなと嘲る。側なる人のいひけるは、「否とよ、あの若き人は、孝行を專らとすると見えたり。さればこそ立居しづかに大くゐひせず、養生を好み、無だ口をきかず、口きかぬ様なれども、心の中には能く物をいふ事明らかにして、猶古利口の及びがたき所。」と申しければ、皆人の不審に、「何でか心の中に、物言ふといへる事やあるべき。」

と嘲なる。答へて曰く、「嘲けるなかれ笑ふ事なかれ、天道をさして誠むべし、天何をかのたまふ」とい

へば、文者人の不審に、「元より天道の物言ふ事やある、見聞きたる事なし」と、いよ／＼嘲り笑ふ。

答へて曰く、「いかにかた／＼、天ののたまふ事を見ずや聞かずや、さらば語つて聞かせ申さん。先づ春夏秋冬の四季を試むるに、天公口をひらき聲をたて、今ははや春ぞやはやと、人間衆生も其の分心得よと、言ひふれ給ふ事はなけれども、春にさへなれば、四方の景色ものどやかに、霞みわたりあたゝかになり、木の芽も萌え、花ひらいて、百千の鳥聲心よし。されば人間がならず、春といふ事を知る。夏にもなれば言はねども、軒の橘ほのかなり、暮の雲に郭公名のり出でて、五月雨の降ふかく、螢のすむに咲きおふを見ては、人民直に夏と知る。さて初秋一葉のおちそめしより、野原の蟲の聲々のあはれ、小牡鹿の音も物すごく、月の光も照りそひ、裏見がほなる葛の下風身にしみ、紅葉にしぐれ降すまでは、世の人皆口々に秋と驚く。冬にもなれば時雨物すごく、水こほりあわたゞしく、萬葉みだれ、いたやの霰はしたなく、雪白妙に野山をうづむによつて、萬民冬を知れり。古き書にも曰く、「春夏秋冬風雨霜雪日月星辰、みなこれ天の文章なり」と。されば古き歌や詩にも、

山ふかみ春ともしらぬ槇の戸に　たえ／＼かゝる軒の玉水

五月蟬聲送麥秋　一葉落時天下秋

　僞りのなき世なりけり神無月たがまことより時雨そめけむ
此の外春夏秋冬の詩歌、あげてかぞへがたし。是を以て觀ずる時は、天公御心のうちにして、其の時節を宜ふれて、衆生にいのちをあたへ給ふならずや。」と申しければ、昔人「それはさることこそあるなれ、さて善行の時、いかで安居しづかに、大くるひ有らずや。」と問ふ。答へて曰く、「それは人として常情をわかしく大ぐるひすれば、不慮のあやまち有りて、身命破損す、我が身の五輪五體、すなはち父母の遺體なれば、少しも傷り損する時は、たゞちに父母の五輪五體を破損し、父母の身命を滅亡するに同じ。其の上子の身にいたみ悲しみあれば、父母かならずいたみかなしむ。さあれば無用のあやまちゆゑ、我が身をやぶり損じ、いたみかなしぶ上に、又父母にもいたみかなしまする事不孝ならずや。それ聖人の詞にも、身體髮膚を父母にうけ、あへて傷り損さゞるを孝行の始めとするなり。然るを安居しづかに大ぐるひせぬは、我が身を大事とする故なり。我が身を大事とつゝしむ事は、右孝行のいたりならずや」と申しければ、又昔人の云ふやうは、「それはさもこそあるらめ、さて孝行のため、養生を好むいはれいかん。」答へて曰く、「不養生なればかならず病あり。病者なれば、出家、侍、百姓、町人までも、其の家々の務めなりがたし。その勤めならざれば、其の家衰微破滅うたがひなし。其の家衰微破滅ならば、父母の愁へ辛苦いかばかりぞや。其の上病者なれば命みじかし、命みじかけ

れば、父母に先だち死して、葬礼をつとめず、おのれ死する歎きのうへに、結句父母の歎きとなる、
是れ誠に不孝の至りなるべし。然るに養生をすれば、病なく息災なり、そくさいなれば、出家はよく
学問をつとめ、侍はよく忠功をつとめ、百姓はよく農作をつとめ、職人はよく細工をつとめ、商
人はよく賣買をいとなみ、各かくの如く、其の家々のつとめを全き時は、富貴繁昌うたがひなく、富貴繁
昌ならば、父母によく仕へ妻子を愛し、兄弟親類他人までもあはれみ扶けずといふ事なし、父母も安堵し、心
やすく樂をも過し、死してあとにも、佛事ねんごろにいとなみ、その一家なりゆきやう目出度、子孫繁昌の
ためなるべし。是れ誠に佛菩薩聖人賢者の御心にかなふ、天道に恵まれ奉る所なりと申しけ
れば、皆人いかゞ思へるや、其の後は物をいはずなりにけり。

一 昔ある人のいへるは、漢字にいふ物の本に、小盗は誅せらるし、大盗は侯たりと書きたり。小盗とは
すり、辻ぎり、ぬすびと、追剥などをする悪人ばかりの事、是れを盗人と云ふ。誅するとは首をき
られ、はりつけ、火あぶりなどにおこなはるゝ事。大盗とは國家をかたぶけ、天下をも亂さんとする
悪人どもの事、是れを大盗人といふ。侯たりとは高き位に昇り、大名になり、榮華に誇る事なり。
されば盗む人として、いかでか大名になり、高き位に上り、榮華にほこるぞと云ふに、此の大
盗す人と云ふは、其の家の乙名、出頭、奉行、役人等を云ふ。されば其の家々の乙名、出頭、奉行、役

人なりとも、とりわけ不道の悪人なれば、強に其の國郡を目にかけ、心にこめて持ちなし、奪はばやと思はれ候、それが慾心のやまなき故に、是れは殿様の御為、これは國家の御為とくはだて、他の物をむさぼり奪ふ故に、あまたの無理ひがごとの、我がままなる仕置、法度ばかりにて、侍百姓町人出家までも歎きくるしみ、愁へ述懐多く、獄屋の囚人おほく、道路に死罪流人たえず。然る間天地のわざはひ事しげく、國家次第に衰微しもてゆき、終には滅亡うたがひなし。國家滅亡の源をたづぬれば、かの老、出頭、奉行、役人等の、とんよく深き不道の故なり。さあればどうよく不道の老、出頭、奉行、役人は、國家を傾け天下をみだすものとする、謀叛反逆の大悪人と同事ならずや。さりながら、退いてつく〴〵と案ずるに、國家治亂の根本はたゞ主君の善悪によるべし。いかんと云ふに、主君仁義を好み給へば、善人をえらみ出し、それぞれの役に召しつかはれ候はゞ、上に大ぬす人なく、下に小ぬす人あるべからず、責一人に歸すとなれば、おそれつゝしみ給ふべき事。

○昔日蓮淨土の中、兩宗のだんな二人寄りあひけるに、日蓮宗の曰く、痛はしや其の方、現世夢幻のえいぐわにふけり、未來永劫のくるしびを知らず、急ぎ八軸の妙典をいたゞき、成佛得脱し給へかし。念佛はこれ無間の業、あら恐ろし、妙法蓮華經と唱へたり。淨土宗のいひけるは、最も有り難

を禅すへし、[illegible]なくは能へども、それ我が宗の心は、四字十が三[illegible]、禅字一[illegible]、死字

八萬諸聖教、皆[illegible]阿彌陀と號す。されば[illegible]いましめには、日蓮宗をもつて第一とす。日蓮のうち[illegible]

[illegible]の一[illegible]は、[illegible]をいましむる故なり。しかるに日蓮宗、此の一つの[illegible]を[illegible]して、何

と成佛とといけんや。[illegible]の[illegible]は[illegible]佛とならば、かやうにて、小智、人つき中、日蓮宗の[illegible]、あら有の

なたしき」とあざ笑へば、日蓮宗はらをたてて、[illegible]いかれやといて、[illegible]破戒[illegible]ならば、

といふ覺悟の[illegible]宗こそおそろしけれ。[illegible]、おのれや[illegible]と名をつけて、寺

の[illegible]、八百年[illegible]、[illegible]の悪名は、[illegible]。是な

うして[illegible]事を[illegible]、[illegible]なり、無間[illegible]のするなり、[illegible]。淨

土宗うち聞きて、「いや〳〵さやうに腹だちて云ひ給はば、嫉妬の火も[illegible]て、智恵の水わきか

へつて、佛法の波しづかなるまじ、先づ心をしづめて聞き給へ。[illegible]、もとより守

[illegible]り。されば親の敵と定め[illegible]、たとひ[illegible]、[illegible]は更に[illegible]、されば日蓮宗

の[illegible]、一とせあづまに於て、旦那の女房を[illegible]。あけくれの[illegible]に[illegible]、

其の夫を殺し、佛罰のがれがたく、鋸引きに首をひかれ、天下に宗門の名をながす。また又、法

華宗とは、天台の宗號なるを盗みとつて、おのれが宗號として、是れも既に謗法と[illegible]

にあらずや。又八講の題目を唱へ、速に成佛なるとうきをとつて、されば法華經をおもんずるに、妙の一字を信ずるこそ、成佛得道はすべけれども、法華經に五十展轉の中に比し、文字の座に至れるたり。書寫いかでか此の經を用ゐるあるべきならんや。しかれを、おのれが一宗の經なりと言ひ出でて、彼の宗の法華經を讃嘆する、あら有り難の御宗や。と、鉦打ちならして唱へ給、日蓮宗門を信じて、萬事をおやうに打つて、「あつたら下地また」といふ言いかに、と問へば、「これはせ給ふ誰か人はすてて、法華宗の二字下地にてはなきか」と答へにたへずなおなりけり。

○昔さる人の詩に、

人只馴賢無觸賤　花中鶯舌不花芳

此の詩の心は、人はたゞ賢人に近づき馴れしたしむべし。返す〳〵惡人と交はり親しむことなかれ。其の故は、梅の林を木傳ひ囀る鶯を見るに、鶯の聲は元より句ひもなき物なれども、梅花の匂ひにひかれて囀る聲も、ふん〳〵たりとしられたり、面白し。

○昔ある人の云へるは、侍に四つの病あり、つよみ過ぎたると、よわみ過ぎたると、利發過ぎたると、たはけ過ぎたると、此の四つなり。先づたはけ過ぎたる人は、無徳に似たる物なり。其のいはれは、人をなぶりあなづりて、さても其方は氣のきれいなる御人、無慾心かなとほめあげ候へば、それに

ぐすやかにして、前後の考へもなく、年貢諸役の道具をもあたへ取りくれ、家にとめ置く入用の上なる事を聞きて、後悔する。或はつよみ過ぎまじき事にも、人にたぶらかされて、あたら十分のまゝを消し、商ひこそなけれど、ぞなる惣じて、これは惣躰はたゞりに付くと申して、お中やつりの金調子てんえども、つゐふまじき事にもめた懐ひにうしなふ。たとへば人來りていふやうに、さてもあなたは囲碁の上手、見事なる道具持なる、此の御すしきはまめいに見しき、かやうな道はいたしたる物を、さ、達ある画あると、能き目にて成ほはやせば、誠と心得嬉しがり、様々の勝負して古類をい、月見花見遊山良ごなしなどに、物を入れ造作を盡し、程なく手前ひつ涙らして塞へ思はり、さて懸走にあである人など、皆われくが本意朝日なとして、かの人をすゝめだまして、遊山諸計じたるとふれまはり、はなしにつゞてまひおきたる、世の中にはおかしき物もなくはべ、ぼっち、はもっとす、食事、めぐらけ家、蝋燭、夜ありき、夜ぞする間の浪費、人をもおもぶりば出づれば、鼻をたかめて高慢し、わがものゝやうに身をもしなすは、又削り發するこ申すは、いかにもどうよく深く、こびへつらひあてんもく、算盤胼胝などに目をやつ気を付けて、ほり出しせんとの心がけ、おのれが物をば錢一文も借へのたくはへ、人をへつらひのみくひして、老、出動人にいるようして、即ぶりの熱々と、人を譏ごはのなし、おけにてはそしり嘲り、物ごとしくもつたいなてみし、まつつ概き

人みれば、ほむる體にてりやうり上げ、よろづ我より下のなみとみれば卑しめかでも、おのれと慢じ利口して、諸藝能を習ふにも、あたはし少し聞き覺りて、はやくと我のと立ふすれば、甘なる難盤みありに上手なるもいらぬ事などと、利發だてをいひまはり、まて弓を射習ふには、いまだ中りもせぬさきより、三十三間堂をとほし、知行をとらんの心がけ、鐵砲を習ふには、未だ引きがねもしらぬ術も知らぬ時より、鳥獸を射ころし、賣買せばやの心ざし。馬を持てば、ばくらうをもとらんとしたくなり、氣のきれいなる風情をして、どうよく海よりも深く、不禮不義理なる故に、行儀詞一つも首尾あはず。まあれは人にひだちをうたれまじきと、人のいはぬさきより詞を出し、面白をかしう云ひまぎらはし、さて二人もろ共にしたる事をも、おのれ獨一ぶんのでかしたるやうにいひまはり、當りあふたびのはなしには、賣りかひ利とくの事、或は內の者共の悲しみ、迷惑する仕置十分行儀、眞なるやうにて馬子なり。花車なるふりにて意地むさく、逃れぬ人が意見いへば、詞の下より合點し、陰へまはりて、是れを用ゐず、すき好みしなくは、茶の湯物のめききだて、そろばん等なり。此の人かならず臆病なり。たとひ心ばせ有りといへども、やぶれ軍のおひくひか、人の捨てたるしらみくひの鼻などをかき上つて、高名手柄だてをいひまはり、或は我より臆病なる者とみれば、いはれざき雜言はきかけ、白眼み廻し、刀わきざしのそりを直し、おどしまはりて手柄だてをする。さて其の曲に

なうして、口をそろへて、すね者に寄り合ひ、思ふさま悪口せられ、せんかたなさに巧者ぶりを離ず、おもしろをかしく取りなさんとすれども叶はず、むかうもりた、かに打ちた、かれ、當座一言の返答にさへ及ばず、傍輩はせよの中やたはすれば、それにつきあかわして、此の仕合には究なごとんにえならぬとよしめき、人差れの尤もとかんじいるにはねば、おのれと悪まげにまぎらかし、同輩を駆め、片かげにて餅酒のうにとりいふらひ、気おかの間隔たに三評語あさせる。又つよみ過ぎたると申すは、猪こぼく兼分別有様にて、述懐ある人をば臆病者よと悪口し、血氣武勇の出頭ある人をば、うそつき者ともらも悪しり、禮をおこなふ人をば、軽薄人よと誹謗し、人をいたはるにかずれ、いりはなる時様で元として、人にしこします、人のしたことの目にたてふれてはり、轉寐日論といただし、角の醜聲し、又同事子兒弟などの聞く人陰きと云ず。ユテ實論にても、大概に下知に背き、軍法さそむき、以下手がけをして、人なき上花もし、家方の大事をも出し、又は下の方には者となて、御勘氣とこいふものあるで、他國にうとまれ、側見て嘆に出るなる。又腹病者かたこに申すに嫌ふかく仁義にわずれ、當世のもの事をば、うらやみ候へのふれば、為便ませんやくる論講にて、人をさえる臭顧うとへ、佞心をつくろひ、無用あのをして、事こそ不すく、いりやすく、少しの事にてもに分別せずして、物毎ったの仁口なすれ、一作心で然できおしる絶えず。

○昔さる人の云へるは、それ侍の善悪は、ひとへに主君の善悪によるべし。其の仔細は、よき主君に仕へし人は、生まれつき大かたなれども、其の主君の善に従ふ、家老、出頭、ほうばいの善に引かれて、漸々によくなる。悪き主君に仕へし人は、生まれつき大かたなれども、其の主君の悪に従ふ、家老、出頭、ほうばいのあしきにつれて、漸々に悪くなると語られけれ。誠なるかな、水は方圓の器にしたがひ、人は善悪の友によると申せば、主君をえらび仕ふべき事、もつとも。

○昔さるかたに精人あり、俄に總身かゆくなりて忍びがたし。手を止めずかきければ、疵わき出づる事限りなし。爰の上に集めて見れば、五六升も有りぬべし。身の皮はただれかゆくなり、後にはいたき事たへがたし。あまりのかなしさに、酢をしほと湯にたてて、上はばかりも浴びければ、すきと治りける。

○昔ある人の云へるは、唐の名醫扁鵲、河間、東垣、仲景、丹溪などいふ人は、病の根本を、明らかに悟り知りて治せらるゝによつて、病ひ治せずといふ事なし。末世の醫、人間の諸々の妄想、妄念の源を、明らかに悟り知りて身を修め健ならば、病へ悲しみあるべからず。されば又家を治め國を治むるも、其の根源あるべき事か。

○昔さる人の云へるは、世間の萬民高きもいやしきも、皆貧をきらひて悪み、福をねがひて喜ぶ。是誠

にあらぬおそるゝ損のなり。あながちに貧をきらひ悪み、しひて福を願ひもとむる事なかれ。聖人すでに貧しうして楽しむところのたまひつれ。されば夢窓国師と申せし貴き人、地福に三生の怨と宣へり。此の人心は富貴を好む人、かならず胴慾ふかし。どうよく深ければかならず愚なり。愚痴と云ふは、不義、不慈悲、不実、不識、不智にして、利得の事にのみ、さしいでやうにかしこく、日々利養ふかくして愚痴なれば、必ず有漏の善をつくりおきて、一生をおくりし、聞に痛ましうもこそ、少しは仏の道をも悟らずして命をはる。是れ先の第一生の怨なり。有漏の善と云ふは、堂寺を建立し、僧尼を供養する事、さて後の有漏の善に引かれて、次の生には又かならず、欲界の人間と生まれ来て、福貴の果報をうけて位にのぼり、大名になり富者となる。されば、必ず栄花栄耀にほこりて、つゝしまず[illegible]著の心ざし重く、又侍、百姓、町人等の人を悩まして、掟法度万の用事、もろ〳〵のつかひにつきて、悪業といふもの、いよ〳〵三界にめぐり、三界の生死の海ふかく、輪廻の山高く、罪業はいよ〳〵重くなる。たとへ大罪に墮つも、貧窮の家に生まれ、世に落る萬の事に引かれて、餓鬼、畜生、修羅、地獄、敗道にまよひて、心にもまことに又ばれて、真実の道を悟り、行ずる事なし。是れ第二生の怨なり。三の過去の

善なれば、ゆるく／＼當來、今生にて悉く付盡し侍る由、來世成佛の罪業とて重なる縁になるべしに、次の生にはかならず地獄に墮在し、一たびうかむ世なし、是れ第三生の怨なりといふことゝしかれば三界佛在すとも、何の樂しみあらんや。昔より今に至り貧者の為に悲しみたまひしも、唐土・天竺我が朝に於て、僧俗・男女・老若・貴賤共の數多し。又富貴萬福にして惡しみにしつゝ、身節歳遂の人かぞふるに遑あらず。皆是れたゞ貧福の善悪や、明らかにしめたり思召し給はゞ、何の仔細なきとて、さらば仏、さればいにしへ天地開闢よりこのかた、佛・菩薩・聖賢などと申し奉りて、過去現在未來まで、みづから悟り知り給ふかたなれば、皆々無爲の貧者、尤もかくありとて坐すよし、此れは富貴萬福が徳しは、聖人賢者佛菩薩の御身として、何しにこの貧者とならせ給ふべきぞや。そのなから生れつきの貧者すなはちなれば、是非に及ばざるなり。先づ釋迦如來と申すは、日本國七八百も合はせたる天竺の御あるじにて、金輪淨土の王位をふり捨て、一人ごく／＼と頭陀の行をおこなひだんだんとせんに引き籠り、あらら仙に仕へ、十餘歲の間、薪を拾ひ水をくみ、果菓を忍び難き道の苦み。又達磨大師は西天の大王にておはしけれども、御位をうち捨て、難行苦行に立ち、少林寺に籠り、九年が間壁に向ひて苦しみ給ふ。又大唐の龐居士は、馬祖大師の御弟子となり、萬億の財寶を舟につみ西湖に沈めて、家財清風誰にか付與せんと、相傳の大國共にふり捨て、乞食の體となれり。又堯舜と

串ず、唐土四百州の大聖帝の御殿は、土階三尺、采椽削らず、茅茨きらずとて、いかにもかすかなりしとかや。夫れ我が朝は纔かに六十餘州の小國なれども、當世のありさまを見るに、殿も町も寺も、金銀珠玉を鏤め、高廣をなし、作事をなせる事、偏に憎むべし恐るべし。西聖の顏回は、飲食を用るべき器なきまゝに、竹の器にうち入れたるを持ちて、水をのみ食ふといへども、道のほとりに樂を結び、聖人のふそしこ叩頭れり。又伯夷叔齊の兩人兄弟は、首陽山に蕨をとつて、遂に飢ゑて死せり。此の伯夷叔齊、聖人賢者にて下りずの賢者、人を救するにあらざれあり。されば論語にも、仁者は富まずと見えたり。抑今時の富貴を願ふに、出家・俗・町人以下も、皆馬鹿のうつけの、たはけ者とこそおもはれ。さりながら口を利口たてまつりて、金銀自由に持ち候に、何とて聖人賢者佛ぼさつの、三千世界をお心に叶ふ御身を、過去現在未來を悟り得給ふ御身として、富貴になく、すりきり給ふ事分別のなき事か。昔さる人の云へるは、其れ人の心は秤のごとし、但し正道正理にいたり、本心あきらかなる人の心は、かゝるものなる秤のごとし、目を以て見るに、高き物をかけて見るに、けがれ人の權事なふわざといふ事なし。眞其のごとく、正理正道にいたりたる人の心は、萬の善悪邪正、うち毛ほどもみだれずと云ふ事なし。されば物を捨て、佛法をいふもあるべし。又無道邪理におぼれて、本心くらき人の心は、目のくらめ、秤のごとし、萬の物をかけて、輕重をしるべき事なし。され

れば、善悪邪正の差別なし。又別なければ善正邪悪の用捨なし。又正理正道にいたり、本心あきらかなる人は、とぎすましたる鏡のごとし、萬の物をうつし見るに、善悪邪正微塵もかくれなし。かくれなくば、善正を用ゐ、邪悪をえらび捨つべき事、何のうたがひあらんや。又邪理悪道におぼれ、本心くらき人の心は、曇りたる鏡のごとく、物をうつして見るにも見えず、見えずんば、いかでか善悪邪正明らかならんや、明らかならずば、全く善正を用ゐる事あるべからず。さあらば一生、妄念の悪逆不道の我がまゝをとり行ふべし。

○昔源九郎義經公の御歌とて、吟ずるをきけば、

　百人を十所におく備へこそ千のせめにも切りかゝりとなれ

　張良も百萬騎はせたるにても下知につかずば負になるべし

そばなる人、げにもと感ず。又そばなる人、「さてもはや合點の人かな、我等式の存ずるは、あまたの軍兵を大將一人の下知につけらるべき事大切なるべし。又十所にも百所にも、備へをおくべき事はやすかるべけれども、かたく備へを立て置くならば、却つて悪事となるべし、如何おぼすや」といへり。もつとも。

○昔さる人の云へるは、冬の夜のつれづれと寒けきに、焼火にあたり、とほんとあかしかねたるに、

其の燒木のもゆるに臨みて、いな事を思ひあはせり。燒つくればもゆる火消え、きゆるかと思へば、又くぶる薪にもゆ。昔に今に、海中にありて年ひさしき石も、うちわり見るに火いづるなり。さあれば元來一火は、消ゆる事なきにや、誠に乾坤充滿の火はいつ消えはてん。

○昔或人のいへるは、花は根に、鳥はふるきすに歸く。さる人の心つたなかりしを

○昔或人の云へるは、一とせ淨土の上人、おむかひやうと申す老いて深き中なりけるが、いかゞしたりけん、一日一目さはる事にや、對面せでこひしきのあまり、

南無あみだぶつと申へば切られぬこ六時に來れむかひやうじゆぶつよ

○昔さる人のいへるは、虎、庭にて狐、頭を逆語にて、誠に食はんとするに、此の狐云ふやう、いかに虎、我をくらふ事なかれ、我はよりもして來て、もろもろの獸の大將に、天道より御定を付けられたりさる程に我をくらふならば、天道に背きて、忽ち罰が當りつべし。若し此の事いつはりと思はば、我があとにつき例きして參るべし。もろもろの獸、われを見て、必ず恐れをのゝき、逃げ隱るべしといふ。虎ふしぎにおもひ、さらばとて此の狐が跡になりて行く。誠にもろもろの獸ども、虎をば恐れそれ、恐れをのゝき、おびれ伏す。其の仔細は、此の狐に恐れて逃ぐるにはあらず、虎に恐れてこそ、もろもろの獸はにげ隱れ、恐れをのゝくなれ。されども此の虎は、誠かの狐におそれ

をなすと思ひ、天命を重んじ、却つて守護をなしけるとかや。是も大なる僻ごとかな。されば世間の家々にも、又かの狐こそ多けれ、ばかされ給ふな御用心々々々。

○昔さる人の云へるは、おのれが心には随分善事なりと思へども、よその笑止なる事あり。何々、先づ物狂いしやの療治、才智もなくて位たかき人、常に大酒好む人、讒言もちゐる人、贔屓ふかき人、分別なくて乙名不行する人、栄花におごる人、物毎に自慢する人、軽薄する人、この外心得あるべし。

○昔ある方に、小身なる侍二人あり、一人は数寄者、今一人はぶすき者なり。中よく有りわたりはべりし、さる時すきなる人云ひけるは、「其方も数寄の道に心がくべし、既に古人の書にも、茶の十徳をしるせり。其の上世間のはやり物にて、大名小名貴賤老若僧俗以下も、由ある人は皆是れをもて遊び楽しめり。さあらば誰人か茶を給はらん時にあたつて、知らずんば必ずあかはぢをかくべし、笑止千萬」といふ。ぶすきなる人の云ひけるは、「されば此の男も自然茶はすきなれども、数寄はぶすきなれば、御意見た、馬耳風にして甲斐なし。さりながら数寄しらぬとて、何しにあかはおかくべきぞ。たゞ大聖孔子の御詞にも、知らざるをば知らざるとせよ、是れしれるなりとのたまへり。實に實に数寄者といふやつばらは、名利がらんにして、古茶わん、古鉢、ふるはんご、ふりたるかな物、ふるき器どもを求め集めて秘蔵がり、寶物よともてなしはやし、利得を好む。又侘びたるなどとこび

よそはしかし、せばき座敷をつくりあつめ、かこひなどと名をつけ、貴人高家をもおそれず申しうけ、不禮不義をわきまへず。又掛物などは、佛道たつとき出家の手跡をかくるといへば、弘法大師などの五筆をば用ゐず、さらば禅家知識の墨跡ばかりを用ゐるかと思へば、大俗人のかながきなどを秘藏がり、其の理一つとして道にあたらず。其の茶の十徳をいへるが、我きく茶の十徳の内、諸人愛敬の徳、佛神加護の徳、清心とく道の徳、父母孝養の徳あり、實に道心あらん人々、茶を服し給はんに、其の徳あらん事うたがひあらじ。されながら當世の數寄者は、却つて十損はありとも、なんぞ十徳を得べけんや。先づ當世のすきしや、諸人愛敬の徳なき謂れあり。仔細はまづ茶のたてやう、存ぶりやう、目利其の外、色々様々の習を細工を作り出し、上手へたをあらそひ、高慢我道にまつて、しいて論も出来、たがひに誹謗あざけり、いかで悪みて仁義禮に背く。さあらば何ぞ諸人愛敬あらんや。又佛神加護の徳なき仔細は、何でもなき高物をとりあつめ、財寶珍物をとり秘藏寵愛して、貴賤僧俗かまはずにし、まかせ、おのれにたかぶり、他を嫌ひ悪口し、貪慾、瞋恚、愚痴の三毒をふくみなきゆゑ、さあらば何ぞ佛神なごの徳あらんや。又清心得道の道なき仔細は、前に云ふ所のさまざまの妄想妄念にまよされ、胸の意にや言ん無道にして、一生本心を明らめざれば、道に入る事なし。さあらば何ぞ清心得道の徳あらんや。又父母孝養の徳なき仔細は、右に云ふ所の如く、たがひに悪みそしりて、諸人

の和不和によりて、或はとんしんのみこ事にあてられ、悪逆非道におぼれて、慾心の眼蓋にはなされ、或はもろ／＼の科をおかされ、一生の間心くらく濁りて、本心をあきらめ、正道をうる事なし。されば必ず佛法神道人道をおかす上は、天命つき身命を滅すべし。然る時は父母にさきだち死する者しみ悲しみの上に、一門・一家・父母妻子兄弟親類朋友までの患ひ歎きとなす。されば聖賢を父母を重の徳あらんや。されば古人賢人の茶を翫びしは、有るに任する事のむしろ、満足自得、心法のあそ戸の開鎖に、本心をこそやしなひたれ、今の數寄者の茶をたつるには、貴くふるべきものにもとし、名利に走り邪悪にとゞまり、本心をにごらし、くるしむ事。一とせ太閤秀吉公の御時、利休といへる數寄者、とうより、貿欲におこり、はてつはにかけられ、又織田信長公の御時、佐久間といへる人の子息すきを好み、道徳不道に進み、侍の道を流すにまかせて逐電せらる。又尊氏將軍の御時に、高師直と云ふ人、是れも數寄を好みて、星霜ふりたる塔のくりんなどをやぶり取り、ちやがまなどをいさせて、悪逆不道におこりて、はたして天罰をかうむり、身命ほろぼす。其の上侍として、すきやのせばき所におし籠められ、刀脇指手などはに捨て置き、何の心やすき事ありて、面白かく嬉しがるぞや。一侍、道油斷の大敵是れにすぐべからず。さて茶人ちやわんに至るまで、諸道具皆もつて年ふりたるを秘藏す。其の諸道具を能く／＼思ひみるに、昔より幾千萬人が手ふれ、口ふれ、呑みよごし、くら

ひとこしたる馬道具なるべし。其の中に白癩黒癩がさかさきんそく、婬飲口熱鼻葺等の病人とあるべし。然るを知らずして、きたなしとも思はずして、賞物とし秘蔵寵愛す。抑、侍と云ふには、みやびやかに清き事をこそ好むべけれ、いで〳〵侍が、茶を飲み香をきかんとならば、先づ結構なる書院にして、唐絵の掛物か、さては能筆名筆などの物に面白きをかけさせ、花入の尋常なるに、花さびしく入れ、庭の木立物ふり、いかにも掃地きれいに、残る暑さのほどには露うちそゝぎ、茶わん茶いれその外よろづの道具、いかにもあたらしく、きれいなるを用ゐ、然ふともかいつくろひて、料理調へ酒もてなさば、実も心無骨なることもあらまほしけれ。其の日頃すきたる故に、第一不奉公にして主君の恩を忘れ、当世界の上の奉公は、戦場と同じ事なるにや。其の上すきなる故に、数寄の道具を買ひ集め、無用の金銀を費すにより、侍の具つけもなくして、奉公の勤めなりがたく、侍の道具武具、見苦しければ、人前の立ふるまひもなりがたく、見にくし。されば、ここに大剛義者の曽我十郎助成も、すぐれたりしかども、めぐりは下のせぬ方なきに、いへる事こそあはれなれ。たゞ〳〵人前へ召し出され、心ばかりは高砂の尾上の松とはいへども、重ねの錦うすければ、肩こそせばくて物うしと、くどかれしとなり。其の上にはたらすぐる物もたねば、内の者ももたず、馬道具みぐるしければ、騎馬をばかなはずして徒にてつとめ、たゞ馬に乗つたりとも、馬わるければ不自由なるべし、たとひ又馬はよくとも、鞍鐙を買

はずば、なんの用にか立つべき。さあらばとりきの迷惑の上に、忠功の道もすたれり。又日頃したくの弓槍もつぱらまこと、貧苦にせめられ賣り捨て、質物におき、栄耀のをたて習ひ、朝日に上出来たらば、例へば上下武法をとゝのへ、住名をあらはし上恩を報ぜんや。但し其の時にあたつても、器がまだ兜になるべきか、柄杓がさし物になるべきか。侍のすきすく事、費えあはう言語にいはまあきあらず。爰をもつて觀ずるに、數寄者のためには茶の十徳は、却つて千損萬損なるべし。駟も舌に及ばず。」といひければ、すきなる人腹をたて、そばなるちやびしやく押取りなほし、「無知人中莫說此經。」といふ。ぶすきの人のいひけるは、「實に／＼數寄者といふ奴原は、いかなる貴人高家の御前にも、恐れはゞからず、そさうなる器物、おろそかなる食飲まで、すゝめ參らせずといふ事なし。誠實なるべし。いかにと云ふに、只今其方のいへる八句の詞は、おそらくは是れ法華八軸の金文なり、いかにか爰に引き用ゐるべきぞや。實なるかな、唐の柳下惠といへる大賢、飴のうるはしくて味ひ甘きを心み給ひて、老を養ひそだてん食よといへるに、盜跖といふ大惡不道の大盜人めは、此のあめのよくやねばりたるをもつて、人の門戸のじやうかぎに傅けおきて、やす／＼と門戸をひらきみだれ入り、夜討をせんとよろこびけるも、かやうの事にやあるらん。」と、たがひに雜言吐きちらし、水剋火の知音になりにけり。

○昔さる人の云へるは、萬事みな少しの事、少しの所を能くつゝしみおそるべし。指を一つ眼にあつれば、富士山も見えずかすかなり。ちりほこりが目に入る時は、月日もひかりさやかならず。古き歌にも、

芳野河其の水上をたづぬれば苔の岩まの雫とぞく〳〵

○昔さる人の云へるは、「人の主君に備へたる家の花、出頭人にうち任せ給ふか、よきさうなる事なれども、賞と罰との二つにおいては、かりそめにもうち任せ給ふべからず。賞とは知行金銀をとらせ、又は情をかくる事、罰とは成敗し、又は追放する事なり。」しそばなる人の云ひけるは、「尤も面白き事には候へども、さりながら出頭人善人の事をよき樣に申し上ぐる時は、賞をおこなひ給はざらんも如何あるべき。又惡人の事をわるく申し上ぐる時、罰をおこなひ給はざらんも如何あるべき」と問ふ。答へて曰く、「されども、出頭人、よき人の事をよく申し上ぐるにも、又あしき人の事を惡しく申し上ぐるにも、又惡人の事を惡く申し上ぐるにも、又わるき人の事をよく申し上ぐるにも、先づ其の前後をよくあきらかに聞きて、さて正直なる横目をもつて、家中諸傍輩近所外樣皆者のにほひを聞き糺して、其の實否によりて、賞罰をおこなはるべし。」

○昔さる人の云へるは、「世間いづれの御家にも、おれの者と云ふ出來出頭人ありて、萬事なんなにも

あて、諸職人、諸あきんど、諸旦家、諸百姓、人非人までに賤しめられ、いかにもしてわたを取ざん、罪科にもおこなはればやと、悪口誹謗せらるゝ事いかに。」と言ふ。側なる人の云ひけるは、「諸にくまれそしられ、かなしまるゝも道理かな。此のおためしやのおこなひを見聞きおよぶに、先づ國守様のために、金銀、米錢、小絹、かべ、しだ、綿、作料、代物、ぢし、年貢、金銀、人夫に至るまで、うの毛のさきの粟のこねほど、細かにせめてすゝをもぬかせて貪り、金銀米錢を取ることのへ、けいはく佞心を構へてさし上ぐれば、主君ますます褒め給ひて、主のため大切に思ふ、利発利口のたのもしき者よとほめたてられ、御恩などけに預り、いよいよ出頭する。さあれば元来老、出頭衆も底心にはいかゞ思召すやら、先づうはむきには取りも直さず大事とあへしらひて、利發才覚のおためしやなどと、あたる物は馳走し、御取成し申し上げけるゆゑ、かの御ためしやは、我ほど利発の者はあらじと鼻をふくらめて、彌利得にほしゐ、慳貪不道にとゞまり、算勘をめぐらしつゝ貪り、萬民を迷惑させて、國の衰微、家の破滅、主の恥辱をもかへりみず、あゝ傷ましきかな、前様なる悪逆無道、どうよくむざんのやつめを、善者と思召しつかはせ給ふ主君の御心こそ、いとゞ慾ふかくおそろしけれ。又さやうの大悪不道人めを、御とりなしを申してほめたて、馳走せらるゝ老、出頭人の心のそこも、浅ましくおそろし。先づかのおためしやの悪逆不道、どうよくむざんなる仔細を申して聞かせん。其のいは

れ共、たゞきいやしき老若ばん〳〵、ぎんりこん、うとましく思ふ事にこそあれ、我人年頃日頃より傍輩衆に好みを損なれ、はうばいの身の上をへつらひ、むさぼり苦しめ、迷惑させて金銀をとりあつめ、主君を役ばしる御前にて、其の身をもつて我が身をたて、知行を拝領し加増をとり、出頭をばやと仕度する心にもあらで、何ぞ善人といはんや。かくて其の家の萬民、心の悲しき身の苦しさに、主君、家老、出頭衆の御事を、自他の差別もなく有るまゝに讒言うけたへたらば、外聞恥辱も淺ましく苦しかるべし。且又外聞恥辱にも構はず、國安のさはりの事ならんか、國別にもよくむさぼり人の気嫌をも、老、出頭人を召しつかはれば、主將第一の御恥辱なるべし。其の仕置は、利欲といふ欲に、實に知行、金銀をむさぼらんと、持つてはしと思ふ斗りにもあらず。第一には己が身をいとはず、命を惜しまずして、主君の言行ようづ悪逆不道なれども、われもよし是れも尤もと斗りほめあげて、御機嫌を取ることとれ、身命を抛ち捨て、いけん諫め申す事思ひもよらず。然らば其の老、出頭の中に何事かあらん。我聞く、古のよき出頭人、家老といふは、主君の悪をいたく悲しみ、諫め意見を申して身をいたます、命を惜しまず、殷に箕子、比干、伯夷、叔齊、伍子胥、わが朝に中納言藤房、信長公の時の平手中務政秀の侍、皆是れ身を捨て、命を抛ちて諫め申されしなり。誠に感涙肝に銘じ、有り難きことかな。此の外中比、天竺、日本において、主君のために諫めを申して、死罪

流刑に及び、其の外遁世せられし人、あげて數へがたし。されば何處いかなる國所にか、主のため思ふとて、侍、町人、出家、百姓、以下を、貪りつめ苦しめ迷惑させて、金銀米錢を山のごとく集め、國の衰微家のほろびの基をなし、同族ふかく身命いたはり惜しみたる、よきおとな出頭人ありや。更に承り及ばず。誠その身其の人に應て、はづかしからぬ事かは、よく分別あらせたき事、

○昔さる人、諸奉公人の心得べき歌なりと詠ずる二首、

爰もうし又行さきもさぞあらむ同じうき世に同じ身なれば

逢坂の嵐のかぜは寒けれど行すへしらねば侘びつゝぞぬる

○むかしさる人の云へるは、人はたゞ萬少しの事に心をよせ、氣をつけて、つゝしみ分別すべし。既に大事となりては、後悔益あるまじ。されば漢江のはじめには、濫觴、楚に入りてはすなはち底なしとて、唐楚國の傍に、漢江と云ひて、いかにも廣大に底ふかく、海のごとくなる江あり。此の水上を尋ぬれば、いかにもちひさき盃をうかべる程なりけれども、漸々と水ながれ重なり、楚國にてははるかに廣く、千尋ふかき漢江とはなれるとかや。又ふるき名歌にも、

筑波根のみねより落つるみなの河戀ぞ積りて淵となりけり

この心は、ひたちの國にみなの川とて、廣くふかき川あり、此の川の水上は筑波山のみねより落つる

昔の間まの夢なりけり。真其のごとく、戀といふ物は、かいま見そめし人の俤は、いかにもほのかにかすかなるしるべなれども、其の面影を忘れかねて、つやつやこひ偲ぶる事、漸々とかさなつて、つもりて後には身をくだき、命を捨つるほど、大きなる患ひわづらひとなれるよしなり。萬につきて心得あるべし。

可笑記巻第一終

可笑記 卷第二

○昔越王勾踐、呉王と合戰の時、さる人酒樽一つを進上しけるに、其の酒を川の水上へながさせて、御身をはじめとして、ぐんぜいを彼の川下へたてならべ、此の川水を呑ましめたまふ。その水酒のあぢはひはなかりしかども、御心のかたじけなさに、各酒をくだされたるより、一しほ心よくなりて、勇みすゝみて身命をなげすてて、戰ひけるほどに、その一つせんに大利を得たまふとかや。これについて思へば、永禄十二年十月はじめに、甲州武田信玄公、さる所の國ざかひの原に在陣ありて、今川氏眞公、北條氏政公御對陣なり。折ふしはまかぜはげしく、寒さ堪へがたかりしに、信玄公酒樽あまた召しよせられ、大かはらけをもつてかんをさせ給ひて、御前にもいつぱいきこしめされ、諸士どもひにも、「思ふほどたべよ。」と仰せける程に、上下思ふさま呑みがちに仕り、さて信玄公の御諚には、「酒を呑みても未ださむきか。」と御たづねなり。いなと申し上ぐる人もあり、いやまだ寒きと申し上ぐる人もあり。信玄公きこしめされて、「さらば酒のさめぬさきに、てきの用意したる、山の上の陣屋をせめとれ。」とて、さきしうを薩埵山へ遣はされけるに、その山の陣屋には、てき一人もなく、陣屋をま

もん仲間、下人ばかりありけるをおつちらし、小屋をはきやくし、武道具ひやうらう等までうばひとつてけり。これひとへに、信玄公の御智謀のあさからざる故なり。いかにとなれば、ふもとに陣どりてとるのみならず、思ふさま酒を呑みてさへさむきに、いはんや酒をも呑まず、たかき山の上なれば、てき陣にて寒さに進退して、ふもとへさがりこん夜をあかし、いまだ此のあかつきの寒きに、ゆだんなして、山の陣屋へはのぼるべからず、たとひ又、陣取つてひかへたりとも、此のあかつきの寒気には、手足こゞえて、はたらく事なるまじきとの御智略なり、まことにためしなき事、心得べし。

○聞するところに、葛のかつらの介といへる人あり。此の人のくせとして、いかほどしたしき友達なれども、少しの事にうらみくねりて中を違ふ。ある時ある人来つていふやうは、「いかにかつらの介、げにもさやうにみえて、くずのはの介となるべし。そのいはれは、くずといふものはつたに似たるくさなり、此の草にあき風そよと吹きたてば、そのまゝ葉のうらを見する草にて、古歌にも、しのだのもりのうらみ葛のは、など詠まれたり。まづその如く、そのはうは心秋風そよ吹けば、根ぶかくねりおぼしめす。されば、ひよくれんりの夫婦の中さへ、したしき時あれば、うときとき有り。況んや他人の中はにし、いかでか我が心のまゝならんや。みなこれわが心の、おろかなるところより、僻りわきまへ一すじにて、他人のいふやうにはならぬ思ひなし、雑事、むげにあさまし。されば章義門院の御やうにおほ

千載にも、

あだにのみ人をつらしと何か思ふ心よわれをうきものと知れ

又ふるき名歌に、

おのが身のおのが心にかなはぬを思はばものは思ひしりなむ

げに／＼わが身にてさへわが心の思ふまゝには、うち任せぬうき世のならひなれば、他人をうらむる事、みなわがごとの至りなり。ひとり子をもちたる親さへも、その子の可愛きときあり、憎きときあり、ひとりのおやを養ふ子としても、その親にしたがふ時あり、そむく時あり、いはんやこれは他人なるをやと思ひかへし候はば、なにしにさのみは怨めしかるべき。一とせ隠岐の院と申せしみかど、四国へながされさせ給ひしとき、御悲しみのあまりに、御なみだのはら／＼とこぼれさせ給ひて、御衣の袖をぬらしければ、

うき世にはかかれとてこそ生まれけめことわり知らぬわがなみだかな

と、えいぎんせさせ給ひて、おしのごはせ給ふとなり。みなこれ愚じゆつくわいの歌なれども、引きよせ心にくわんずれば、よし／＼人をうらむまじ、みな我からのあやまりぞと、よくしんじたる歌どもなり。まこと清和の御きさき、二でう殿歌にも、

あまのかる藻にすむむしのわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ

○昔ある國のあるじ、れいけんあらたに、たつとき宮を御建立あり、是れは國家安穩、武運長久、しゆじやうけちえん、りやく大慈悲の御せいぐわんとかや。かくてさいかくりはつきんかんたくみいぶぎやうにん承りて、當世はやる入札におほせたり。町人ども聞き及び、われおとらじと札を入れけるほどに、そのうち高くもなく安くもなく、あうりふだを入れたる人にさだめ、よきうけ人を取つていひつけぬ。此の町人かねてのさいかくには、札をばまづけおきにいれ、てまへへふだをおとし候へば、かの奉行人へ色々の進物をし、そのうへみめかたちよきけいせいをもつて、大ごしを打ちぬき、おもふさまたぶらかして、利得にとらばやとおもひけるに、案に相違して、此の奉行人たゞ賢人ぶりして、何事にてもたよりなく、いつくしくきびしくせめつめて、ざうさくをとげけるほどに、此の町人うけぬしともにたふれはてて、家屋も財寶まで賣りすてて、なくなくざうさくをきはめたり。さあればかの町にんどもの父母妻子、親類知音どものうれへ悲しみいかばかりかは。しかれば此のみや御建立、國家安穩、武運長久、しゆじやうけちえん、りやく大慈悲のためにはならずして、かへつてわざはひをまねくなかだちとなれり。いたましきことといひければ、かたはらなる人さし出でて、いやとよ、それは國主の御あやまりにはあらず、ちやうにんども、おのれと身を苦しむるなり。いかにといふに、

金子千兩いるべき作事と思ふならば、二百兩ほどに心得て、しあげてしだいに札をおとし、聞て札
だんの札ならば、くじをとり、果報とかせにすへまかせてと申しければ、さればこそと此きさきにし
て、下々のおの／＼、いづれおだといふ物なくば、町人どもの身命うれへもあるまじぞ。ぬけ目にして
下のおかなり、しものはかになりて國家をさたせる。されはうへ／＼にて、是れは利のある事、かれに
はそんのゆく事などと、こまかなるせんさく御吟味なくば、その御心のうちに、おのづから大徳大利
もそなはりて、殿さまの御をんも參らず、人民うれへもあるまじけれどといひければ、又かたはらな
る人さし出でて、おの／＼は何を申すぞ、夫れ今時の人の心に、たかきもいやしきも、出家も俗も、
女も男も、老いたるも若きも、皆もつて胴慾の事には、がてんも行きやすく、利口を付けて、わく
つをいひたて、おもしろけれども、無慾の事に於ては、げにもと合點ゆきたる事にも、がてんのゆか
ぬふりをして、ふしんを立て、あざけりわらひ、正しき道理をもいひけし、いらざる口論無用にとて
あざわらひて、座敷を立てり。

○昔さる人のいへるは、唐の事は格別、我が朝にて君子小人をさだし申されには、まづ君子といへ
るまき人は、其の威おも／＼しく、心體おちつき、むつくりとしてたちふるまひかなり。さてくつろぐ
所はうちとけ、いんぎんなる所にて偏心し、嘲けるやうにて詞すくなく、ふくふかきやうにて義理つよ

く、醜きやうにて慈悲ふかく、無分別あさく案ふかく、無智無能のふりにて、よろづ首尾をあはせ、淫乱なるやうにて、女わかしゆに對して執心のぞみなく、人の諸道具をえするには、いかにも大事に上りあつかひ、そこ／＼に氣を付け、よき頃にはほめなし、三味線こうたにいたるまで、愛するていにてとりもたず、或は茶酒食物も、すごすやうにて禮儀にかなひ、きやらたきものをたしなめども、さのみもてあそぶ事なく、人にそむかずしたしまず、知音の中間に立たず、人をそしらず取りなして、妻子財寶にいたるまで、無理に愛する事なし。小人といへるは、わるき人は皆よき人の心體とうらふみひにて、心さわがしく立ちふるまひ、心ひがみ猿利根にして、ねいしんをつくり、うちとけよひさ所にて、くつのぞすごし、いんぎんなるふりにてはしなれ。びろうなるはなし高聲に、無慾のふりしてどうよくふかく、男だてをして底いたむさく、慈悲あるふりにてむごく、淫慾ふすきのふりをして、なれが家を尻目にかけ、人の秘藏の諸道具、なりの所望に見物して、おのれが氣にあはねば、取りあつかひあらく／＼しく、ところぞに難をいひつけて、其の主にぶきようさせ、又その道具がおのれが氣にあへば、雲居にほめあげ、後にはかならず無理に所望する。或は小唄しやみせんの雑曲に氣うつりして、なにのわけもなく面白がり、いかにもしてにぎわし、ふらひたしと、このむ遊民になれむすび、神前ののぞとする。さて茶酒しよくもつにあふ時は、座敷にならず、人よりさきにとびかゝ

り、しんしやくなしに取りくらふ。たとへば酒は是れゐきと名づけて、風寒を去る事三寸なれども、過ぐる時には、醉ひみだれて恥をかき、醉狂し、とがなき人を惡口し、いつはりいひて物ごと自慢し、けいはくなり。此の外君子小人の相違、筆詞にいとまあるべからず。

○昔さる人のいへるは、たとへば何事なりとも、法度に定めおく時、その法度にそむく同類四人ある時、いづれも同罪なるとて、吟味せんさくなしにおし付けて、同じ罪科に行ひ給ふべからず、これは罪科に輕重あるべし。其の仔細は、生まれつき愚癡あるひはどんのものは、たとひ法度といふ事をば聞きしりたりとも、かくすれば此の法度にそむきて、身のため惡いといふ合點なくて、そむくものも有るべし。又かねては法度を恐れつゝしめども、時にあたりことにおぼれて、其の法度をはたと打ちわすれて、そむくものも有るべし。又もとよりその法度を知らずして、そむく者も有るべし。かやうの者をば、死罪をさだめて尤もなるべきにや。又かねて、其の法度をよく知りながらも、かくしたる分にては、罪科に行はるゝまでの事はあるまじきなどと、下にて上をはからひ、わざと法度にそむくものも有るべし。かやうの者をば、たとひ少しの法度なりとも、大罪にさだめて死罪におこなふべし。但しとがある者を殺さんか、助けんかと思ふならばたすくべし。牢人か折檻かと思はば、時の折檻なるべし。是れに付きておもふに、年比召しつかひし人を、あれはいかなるものと、傍輩共に尋ぬる時に、

よき者と云ふ人半分、わるきと云ふ人半分あらば、そのよきにしたがひて、恩賞なさけあるべし。昔さる人のいへるは、それ人の主君として、みうちの者に萬物をとらせ給はんは、大事の儀なり、よく〳〵御分別あるべし。其の仔細は、何ぞほうびすべき時にあたりて、よき侍に少なく取らせんもわるし、又わるき侍に多くとらせんもわるし。さりながら、能き侍に少しとらせたるよりは、わるき侍に多くとらせたるは、大いなる誤りなるべし。所詮只よき侍には、たくさんに取らせ、わるき侍には、少しづゝ取らせたるにはしかじ。たとへばわるき侍に、知行なりとも過分に取らすれば、よき侍是れを見きいて、あらいやの知行や、しせん我々も拝領するといふとも、あのつれのやつばらと、同じやうに思ひなされんも口惜し。且に又石を抱きて淵に入り、薪を負ひて火にいることと退屈いたし、とかくして其の家をのがれ出でんとかゝる。されども、いまだくれ給はねば、せんかたなく隠れ宿るといへども、萬の事に、かけんや言はず、平人なみに自然としてをるほどに、何の用にもたゝず、あたら磨ける玉のやうに、たゞいたづらに年月を送る。いはんや牢人なれば、いかほど知行を取らせんといへども來らず、又わるき侍共もこれを見聞きて、あの者にさへ是れほど知行をあたへ給ふなれば、我等に是れほどくだされたるも、別にうれしくもなしと、さして御恩賞とも思はれず、結句くだされたる甲斐もなし。さる程によき侍をえらび、恩賞をあたへなさけをかけ、わるき

侍あれば、其の悪に從つて、死罪流罪におこなひ、善悪たゞしければ、かのわるき侍共、よき侍の出頭し知行をとり、金銀を拝領し、御なさけをかけらるゝ事を見聞いて、うらやみけなりがりて、我も／＼と、よき侍のまねをし、恩賞にあづかり、御情をかうむりたがりて、我おとらじとたしなみ申し候間、おのづから悪しき侍も、よくなる道理なり。かくの如くありてこそ、よき侍はいよいよよく、悪しき侍も又、其のよきにつれてよくなるなり。かく申せばとて、直ちに悪しき侍を、えらびすてたまへとにはあらず、萬物に善悪あり、是れ儒用なり。たとへばもろ／＼のかねのうちに、金子を以て第一とし、萬民これをたからとして、身命にかへてもむさぼり求むる。しかれども金子ばかり世にありては、重寳となりがたし、銀子鐚錫なまり銅赤銅など有りてこそ、金子もいよいよ寳なれ。

○昔さる侍にすこびたる人あり。心うきやかにして行儀しまらず、貴賤老若僧俗善悪の人をもきらはず伴ひ、家ゐことがら物をかしくさびたり。一日夏の日の暮れがたきに、ふるき友だちたづね來りていひけるは、汝いかにしてさあるや、いにしへのよき人は、いかにおちぶれすりきりても、其の心ざしたゞしく、悪人に交はりても、其の行儀みだりならずと承り候へ、と申しければ、此の人答へていはく、さればとよ、蛇は一寸を出して其の大小を知る、人は一言をきゝて其の善悪を知る。されば

かかるうき世に住みながら、行儀正しく心眞にしては、皆人氣違ひ、むつかしがりて近づかず、近よらざれば親しむ事なし。したしまざれば其の悪をしらず、此の善をすゝめがたし。愛に本位の療治あり、たとへば内ねつあるをさまさんとて、冷藥を用ゐる事これ本治なり。しかれども、やけ石に水をかくる如くにて、さめかぬる時は、右の冷藥の内へ、ねつやくを一味加へて用ゐる時には、ねつかならずさむるなり。これ反治なり。げにも／＼雷の落ちて家などのやくるに、水をかけてけさんとするに消えず。其の時此方の火を投げ入れて、火をかくれば必ずきゆるなり。誠に同氣相求むるこれなり。されば佛にはあみだ魚をひかせ、しやくそんすがたをかへ給ふ。或は陽極して陰を殿上にはき、いかすところをやかゝげたれし。蘇老が詞に、たとへばかたねぎ、あかはだかになりても、要の櫂、ほこをよこたへ、時もなくある時へは、いかなる大力勇者も、たやすく近寄りがたく、たとへ帳のまへ碎與を背、鐵杖らへばのつるぎをおびたりとも、油斷して、ねむりゐたる大敵をば、いかなる者も是れを討たはすといへり、誠に油斷大敵つゝしむべし。

一、昔さる人のいへるは、たとひ一騎なりとも吟味ある侍の家には、作事あらば、まづうら／＼のつかはれめ、朝夕の起き臥しすべき所を心にかくべし。屏風しやうじなどに繪かきぬるには、上手をえらばず、色紙たんざくなどに書かするには、公家のかた／＼名ある古人、扨は能筆を用ゐるべし。されど繪師の下手

なるに習ひて、名もなき雑草を用ゐる事、よろしからぬ心なるべし。[illegible]見所こそあれ。
ぎよくあらまほしけれ、雪隠のほとり所よりはたに遠くして、日あたる所[illegible]
し。第一春夏をむねと心がけよ、秋冬はいかやうにも住みなさるゝ物で、よろ春は南庭の[illegible]に、
陽氣を早くうけえて、花に對し百千鳥さへづりをきいて、陽氣を[illegible]
あたりて、夏は熱にあつさに堪へかね、陽のおり過ぎてあせ出やすく、[illegible]
かつしかるにしける木立を詠め、きよき流れをなすければ、心神もよく、すゞやかによろしき[illegible]
ことに心をよすべきは、樹木鳥好みなり。千種萬木の中にも桜花を先として、枝ぶりすなほに見事なる
を植ゑさせ、もみぢ松常盤のたぐひは、とりわけなくてはかなはねど、花よくたねとなれど、陽を木ずゑと
し、白き花の一重におなじきものを植はせ、山吹のさかりなるにすぐれてゝは、風にたぶりあるを
ふきに、前栽のいと殊なるに竹取のあはせ、その所々にある道よりまでも、水のうつて流れ
て、小石ましりにちらちらとしたるこそすゞしけれ。ふかき水はにごりやすく、折にふれてすゞしく
も覺えず。鯉魚のあそべるもあつき岩間はやさし。又うきくさのうかびたるもをかし、蓮の小さきなる
かしき。さて野べのかたへには、白きと黄なる菊をはじめて、すゝき萩、いとすゝき、女郎花、くすか
づらに、石のたけ、少しつゝ咲かしむべし。柴垣の一かたに、あさがほの一本さきかゝりたるも由あ

り。又おれたる木のふりたるに、こけむし、つたかづらのかゝりたるも見ならひなり。家は天井高きは、冬さむく、燈ひかりなし。物すきといふはさのみ造作をつくらず、取りつきやすらかなるをかんえうとして、掃地を心がくべし。

○わるしといふ人のいへるは、人はたゞ我が心をあきらめ、さてまづ我を糺しなほすべき事なり。されば我が方より悪口をすれば、人もまた我を悪口す。われ不礼をしかくれば、人もまた我に不礼す。われあたをすれば、人もまたあたを報ず。われうそを云ひかくれば、人もまたうそをいひかへす。かくて後には、ひとたび口論をし出し、身命をもはたす。是れ皆他人のあやまりにあらず、我と我が身をほろぼすなり、萬事心得べき事。

○昔ある人、[illegible]の庭訓をそらんじておくる。

ちはやぶる神の[illegible]は一滴の水のやうの手洗そくすゝ

夫を從たゝ主觀と思ひつゝあさな夕なにおそれつかへよ

これぞわが物見の[illegible]へさそひなばかなはぬ用を云ひて止むべし

よし訪し二日はしもよその別ねば取りずとせぬぞしかるべきなり

明くのよしとの時にやる寄は下直しにする事なかるべし

用あらば夫のあるにはありくべしるすにかゝりては打やゝなりけり
物をあきなうしを見るとゑみけしやう人目にたゝぬやうはふきぶな
きれわたく色黒くとも女房は心詞をきよくしあかれ
女房の形は春の柳にて心は秋のみねの松風
物何をこはかり欠はむつかりて詞すくなにはやらへるよし
第一とたしなみてよし口の内手足ははづれくびのまはりな
うつくしき女のりんき深きこそ錦の袋ふんをつゝめれ
みめわるき女の心やさしきは月をうかぶることりの江の水
にくし〳〵とたば我にむかふともなに心なきありさまをせよ
客人のあらば詞をやはらかにかけての後はみむくべからず
女房の立ちゐに心づくべきはおれの遣とあしのはづれと
女房のありかばすそに目を付けて足音せぬぞ心ゆかしき
ばんのうへ雙六などはうつもよしまけてわらへよかちを好むな
物くはば口音ひきく箸さきを少しぬらしてしづかなるべし

なにごとも物語する折からにさし出口はつらそにくかる

女房の物ねたみせぬ殿事ならば月よ花よと男をもらた

おもひ火のもえたつ時のあるならば心の水をせきとめて消せ

女房の姿はほさつ心ねは鬼と心得たしなみぬべし

我が男けにいとほしき事ならばたださもうとのみにくかるべき

わが子をは行儀をつかんでよくして他人の手にてなでさすらせよ

母おやの心さへよき事ならば其の子かならずかはゆがられむ

母おやの心の闇にあひだす子をそだつる道にたど迷ふらむ

○昔さる人、ふと上方のお陣所、しんしやくなしにはおおもしろくて食ひけるが、いかがしたりけん、たちまちに酒下を吐き流し、すでに死ぬべかりしときに、ある人韓脂を粉にして、湯にて呑ませければ、すなはち蘇生す。目出たしといへば、これはとよ、一とせ韓をくらひて死ぬべかりしを、山椒子を煎じて飲み、今までいのちながらへ、又此の薬をのがれぬ。」とかたる。

「昔中殿の夕けしきひやゝかにして、雲間の月さやかなるに、むさしの国浅草の観音へ詣でける。かねてきたりける寺の戸あけ、久しく打ちたえていたりぬ。主なる法師の庵のもと

より、かく定かにたんやごりはあやつらよ、紀貫之がいにしへ、いかなるなどといひ出し侍りけるに、

「むべも此の月を見給へ。」とうちたはぶれて、

我も又人の心は白雲のたえまの月はむかしなりけり

一　京都の要師信と云ふ人、子を見るたびごとに、よろづ堪忍をせよとの意見教訓をする。ある時此の子答へて云ひけるは、「もつとも商かたに仕り候事、随身にこそ過ぎて聞き候。さりながら我何のかまひもなく、無爲無事に罷り有り候時、いたづら者来て、それがしの面へかすはきをはきかけ候はんに、おしのごひてかんにん仕り候はんや。」と云ふ。又此の由を聞きて、「言語道断無き堪忍の心得やうかな。かへすがへす其のかすはきをのごふべからず、もし其のかすはきをのごひ候はば、はきかけたる人の思はんずるは、我等かすはきをむさし、きたなしと思へばこそ、拭ひたれ、にくきしかたと怒り腹立て、重ねてはいかなるくせ事を仕りて、迷惑させんも知られず。さる程に、其のかすはきをそのまゝおきて、ほしかわかすべし。」と教へたり。此のけうくんの心を分別して見るに、何のとがもなき人の面へ、あたとかすはきをはきかくる馬鹿者は、生ある人とは申しがたし。ひとへに狂亂するさやう、ばかたくらだ人非人とも云ふべし。ひとへに蠅と云ふ蟲が、人のつぶりへとひ上り、夫婦のかたらひをなし、或は糞などをする如し。されば其の蠅は、本より蟲なりと思へば腹

も立たず、重其のごとく、輩同然の者に對して、いかでお腹をたち、人倫の作法をなし、その云分あらんや、まことに堪忍の心得、是れほどとなくてはいかゞあらん。

○昔武州江戸の御城にて、四座のうるがくども能をする。或人見物してかへるさに、あら面白や上手やとほむる。さる人、「能は何にてありつるや」と問ふ。答へて、「知らぬ」と云ふ。問うたる人曰く「さても其方能の名をさへ知らずして、面白き上手やとほめるゝ事、いかゞ」と笑ひければ、答へて曰く、「其方われをわらふことを、我また其方こそをかしけれ。いかにとなれば、其方にうつくしき女房わか衆が見せたらんには、其の女房わか衆の名をばしらずとも、其のうつくしきと云ふ事をば、ねんごろに知るべし。」

○昔唐土の國喜に、陶宗儀といふ賢人あり、其の論に曰く、人間に三つのしな有り、上の食物、中の家、下の衣裳。

○昔それがしの親の申されしは、「[illegible]に若輩より見なれ聞きなれて、はや三四十年もたゞはなれたる傍輩なれども、其の人の心ざしのよしあしと見定めぬ人は、そのふりふりかづきになれたるがごとし。またとへば其のふりふりかづき、しる人になりて、一座二座寄りあひ已後はなしたる人も、其の心ざしよきはしる人なれば、したしきしんるい朋友のごとく、思はるゝ。」と申されたり。

○むかしさる人の云へるは、されば天下に生あるもの多くありといへども、人をもつて第一とす。人の中にも、士農工商の四民を以てたからとす。士とは奉公人、農とは百姓、工とは職人、商とは商人なり。此の四民の外のものは、遊民とて何の用にも立たず、たゞ鼠のごとし。医者、智者、芸能しやは、いづれに付てもかくべつの事、沙汰に及ばず。但し芸能に取りては、弓、てつぱう、馬、兵用、へいはふ、しつけかた、此のほか用に立たず。されども、天子のよりおこりて諸侍には、それぞれ魚に煮るがごとし。

○昔さる人の云へるは、それ世間に、主君おほくは御内の者共に、過分なる程の恩賞をあたへ給はず、あはれみのなさけもかけ給はず、やゝもすれば無理ひがごとをいひかけて、迷惑させ給ふ。そのいはれいかにとふしぎに思ひ、つくづくと思案して見るに、まづ主君の御心に、いかなる無理ひがごとをしかけ云ひかけても、御内の者共のおのおの述懐恨みに思ふべからず。其の仔細は、日比より似合ひ／＼に知行を取らせ、ちそうあたへ、妻子をやしなはせ命をつながせおく。其の上軍陣はなし、何を以てか日比の恩を報じ、述懐恨みあるべきぞと思召し給ふなり。又御内の者共のいきどほりを思ひやるに、もつとも知行と名づけて、くれ給へども、その国所の第一悪所を選び出して配当し、扶持といへば蔵中第一の悪米を、小さき升にてはかりくれ、其の上堀、垣ふしんな

どのやくとして、金銀をほしく取り給ふ。さあれば知行とぎふ名ばかりにて、何のたすけもあらず、そのほか御上洛よ江戸つめよと、毎年々々に費あつかひ、或は役金を取り給ふ。是れ軍陣のことゝもあるもかなし。しかれば臆病のおとしゐほどの恩賞、いかでか報ぜられんと、うはべにこそ奉公だてをすれ、内心には頼み薄く、あさましく悲しみて、只ひだらしの奉公なるべし。さある証拠事ぞふと出で来る時、かならず日比のことをさしはさみ、たれありてか大事の御用に立つべきやとて、もし又主君の馬のまへには出で、身命を惜しまずはたらき候とも、それをつたく主君の為のはたらきにてはあるまじ、只おのれ侍と生まれ付きたる家のため、名のため、又は、重ねて他の主君への奉公のたよりなるべし。

但し出頭人共をつなぎといはるゝ、めん／＼が、あぶらびのすべるに任せて、追従を好むこといふ、御用に立つべいてと、さらぬしてうるやて、愉わしさに害をなし、血をあやかしく持ぎて、主君をたらし申したりとて、まことの働きに、これの出づるのみ、たゞみの上にて、うでだて、望口したると相違し、人より先に進むべし、其の場には、主君の時に召し用ひられ、用事も仕す、或は恩賞なさけにもあづからぬ人と、あしを主君の時に召し出され、内々を召し、或は恩賞なさけにもあづかる人とは、兎角心底は隔て、胸意思の有なりと、平賞のをしる暮がれし御恩もなるゝこゝに／＼、幸其連、ねいしんへ、きうかへ、不退の事ではなら主君の大事にたてるや、古今その類すくなし。とことに

衛の懿公の鶴を愛せしためしあるぞや。

一　昔さる人のいへるは、それ大將となりて、國郡をきり取るべき事、思案工夫あるべし。無理なる合戰をし給ふべからず、たゞ天命にそむく所を、よく見はからひて取るべし。天命にそむく、と云ふは、とうよくふかく不行儀にして、あたと人をころし、物毎ゆだんがちにて、恩賞なさけ[illegible]らず、さぶらひをはじめ百姓町人までも、萬うれへ迷惑がる事共なり。かやうなる時こそ、かならず合戰をはじめ、うつて取るべし。味方の無ぜい惡日等にもかまふべからず。周の文王の、殷の紂王をせめほろぼし給ふためしあるぞや。されば天命にそむき、國郡を切つてとる仔細あり。其のしさいは、其の國郡の萬民うれへ悲しみ、めいわくするところを安くせんためなり。さあれば天運まつたくして、かつ事を一時に期せん。さりながらその國郡をきつて取り、我もまた不道ならんことを、おそれつゝしむべし。よそへかたの國主不道のゆゑに、其の國郡をとられしに、よき手本かゞみならずや。されば天命にそむかざる國郡を、無理に取らんとするは、かならずその國郡の、萬民をうれへ悲しませ、また我が國郡の萬民をも憂へ悲しませる。さあればみかた多勢にして、わがため吉日良辰なりとも、天命にそむき運つきはて、たちまち滅亡すべし。たとひ又、一旦は敵の運つきたるによつて、勝つ事有りと云ふとも、又かならず思ひもよらぬ敵出來して、終にめつばううたがひなし、まこと織田信長

公のためしとほからぬ事、よく心得給ふべし。

○昔唐の辻叟と申す賢人、毎日明暮物の本ばかりを見て、門より外へ出でず、たゞひとりつく〳〵としてゐるゆゑ、ある人むかひ来りて云ふやうは、「さても其方はいつ来て見るにも、たゞひとりすご〳〵として、友なひあそぶ人もなし、さびしき事はなきか」といふ。答へて曰く、「さればさびしきと云ふ事は、みな其方づれの身のうへの事よ、われ等は朝夕物の本をめなれ手ふれて、聖経賢伝を學するによつて、則ち聖人賢人と友なひかたりなぐさむなり、何のさびしきと云ふ事あらん」と。

○昔ある野に、十二三許りなる童共、三人よりあひ物語する。まづ一人が云ひけるは、「なにとぞして親に生まれまさり、父の名をあげ我が身をたて、子孫をもはんじやうせしめてがな」と願ひければ、又一人の童がいふやうは、「あらむつかしき云ひ事かな。人の子として親にまさらんと願ふ事、まづそのおそれあり、然らば不孝となり、天罰をかうぶるべし。さるほどにたゞいかにもして、親に生まれまさらぬやうにと願ふべし」と云ひければ、答へて曰く、「さいふ人こそむつかしけれ、されば父母の心體をうけ分けて、出生する子なれば、生まれ劣らん事、其の理八つ九つにゐても、されども人間に善惡の心體あり、其の惡をうけて生まれたるは、惡人なるべし。其の善をうけて生まれたるは、善人なるべし。まことにせんだんは二葉より芳しと云ふなるや。たとひその親にまさる

大悪不道人なりとも、その子善人ならば、家をたもち、身をたて、父祖の名をあげ、子孫繁昌するべし。あかき牛の子にて、またもなきものにひとしく、父親に生れまさりて、いかで不仁になり、父闘をかうぶるべけんや。たゞよく瞽瞍の御子に大舜おはします、よやおにれの御はらまの種姓なたしやうあやけり。されば貝わかうして病なく、身をたて名をあげにし、老いてのちたかに子孫繁昌、これ孝行の始終とす、いかに〳〵と云ひければ、何なる道、いね云ふを聞きて云ひけるは、一切に善悪あり、天地、陰陽、日月、君臣、父子、夫婦、智者、愚者、尊卑、貧富皆以て是れなり。されば善行はれし諸悪を救ひ、諸悪あらはれて諸善をたすく。只可不可に一條にして、義ある所を肝心とすべし。汝しらずや、柳下恵と申しし大賢、君子の御弟に盗跖と云へる大悪不道人あり。無用の事をあらそふべからず。但し又かくいふも無用にや。これは無用の用なるべし」

○昔平安城姉が小路の真中ほどに、彦八とて富み栄えし町人あり。いかなる前業の拙きにや、朝夕の飲食とては、黒米飯水かゞみの汁のみなり。かの彦八が隣なりける又吉と云へる町人、世にならびなき大すりきり、つねにかの彦八をうらやみそねみけり。ある時かの又吉一首つらねて送る。

　寶ともならぬ財は彦八がもちたるかねとわが身きんたま

○昔ある人の云へるは、諸侍の心得べき事、うそをつくまじきとたしなむべし。但し一座の興あら

人事は格別、非當番にまゝか油斷すべからず。奉公するが爲の事とて、當番にてもなきに、さし出で奉公すべからず。損財寶、衣類、裝束、諸道具、作事等に心をよせ、かねて嗜む事なく、武道具おろそかに照りかゞやかすとも、物の用に立つ樣にこしらへ、よき内のものをかゝへ、思ひあたへ情をかけ、慈悲心うすく、色を好む事なかれ。但しつまとさだめて妾持たるゝもくるし。但し一代もたぬもくるしからず、其の時その人其の仕合によるべし。惜し妻をもたんとならば、氏素性をたゞね吟味して、みめかたちとみさかえにめづる事なかれ、たゞ心中を直にとるものゝ、總じて小身なるきふはひの妻は、みめ形の思はしからぬがよく候。其のいはれは、小身者の妻は、きのみ人目しのぶ事もなりがたければ、人にまみゆる事多し。さあればその妻不行儀ならずとも、世間のとなへあしきものはばかりあり、いはんやしつの子はもちろん、ことに心をゆるすべからずと云への物なり。たゞし心がけと申すは、みめかたちなりとも無るべし。但し小身者の妻持りしんしや、有るべし、大身の人も本妻に御子五三人もあらば、無益のいたづらなるべし。其の上云ふ事に、本妻に御子もなく子孫あやふき時に、是れを用ゐて子をまうけんためなり、ゆめゆめ淫亂の用にはあらじ。さて武士道に云ふにおいては、弓術馬術能く天下一ほど上手なりとも、少しも自慢あるべからず。さて商家商賣の人とすれなり、む事なかれ、すでにはげらふ例をとれにも、牛は牛づれ、馬は馬づれなるもの也。さて義理、律儀

り、人數つもり、旗色、勝負の時刻、あしがるのかけやう、もどりのやりやう、陣小屋のかけやう、弓てつぱう、さかもぎのまはりかけやう、此の外軍陣の事に、老功武篇、はたらきの人に云ひ聞かせ、吟味せんさくもつとも成るべし。さて刀、わきざし、太刀、鎗などのよき道具、その身々々の得手によりやうに仕度すべし。當世の人々は、みな〳〵十文字の鎗をもたすれば、其のまゝ得手をもしらず、我も〳〵ともたせらるゝ、人目おどしのたて道具、更に其の心を辨へざるなし。さて本心明白の善惡に親しみ、うたがひの妄念を離れよ。さて友達をえらびて、惡人とはたはむれべからず。そこかりてもよきのなる所、錢金取りおとしたる所へ行くべからず。我が身あやまりこれなくとも、人にうたがはれてもよしなし。いはんやふるき名言にも、朱に交はれば赤くなり、すみに近づけば黑くなるとある物なり。さて其の心體いかほど思はしからぬ人なりとも、其の家の老、出頭人などいんぎんに仕ふべし。主君を重んじ奉り、さて萬に遠慮をふかくすべし。そのいはれは、たとへば主、いかなると無心野心の事ありと云ふとも、其の心をおさへて遠慮すれば、その内に親類友だちの、よき分別才覺者共よりあひ取りもちて、よきやうにするほどに、たとへば我が無分別にて、惡事にしなし出しなさん事も、みなもつて善事となる。此の遠慮と云ふ事は、かんにんに似たる事なれども、少しのかはり目あり。かんにんといふは、たとへば赤面流汗恥辱におよぶ事なりとも、その道理によつて、其の恥

辱なすべしこらふる事なり。遠慮と云ふは、かねて其の事を工夫思案する事なり。しからば遠慮といふは分別の根源なり。さて我が行くさきより知人馬にて来るならば、いそぎたちかくれべし。我又馬にて知人に行きあはゞ、急ぎ下馬すべし。さてのみ物、くひ物、ねつ、おきつ、およむ事、その外よろづに付けて、人より跡にと心がけべし。さぶらひが、人より先にと心がけ候は、戰場うちものの事はいはぬ也。主君の御用あつて、たれを參れと召さるゝ時は、急いでまゐりたるはよからんなれども、それさへ傍輩あまた罷り在り候はゞ、見合せて立つべし。但し事の急ならんにはかくべつの事。かやうのあさまなる事も、つねに心がけ申さずば、かならず越度あらんと書き付け侍る。さて人なみのさぶらひが、主君傍輩に對し奉りて、あながちに輕薄ものといはるゝ事あるまじく候。是れについて世間のあざけりそしりを承るに、禮をおこなふ人をけいはく者と云ひ、儀をたつる人を異風者と云ふ。されば眞實の輕薄ものと云ふは、上をよく邪まなの惡心を以て、きしやう文をかき、追腹の約束、或は國家のすゝびとなる思慮せず、よからぬ相談の事をおこなふに申し、又は傍輩共のうはさを取り付け、あしざまにさへ申し、讒をつき、佞人をつくり、だし拔き奉公をして、諸傍輩のつまはり、出世をかへりみず、たゞ主君に出頭仕たき事をのみねがひ分別し、老、出頭衆に氣に入り近づきたかる。上に申す輕薄ものといふは、當世人のいへる、くわふくわつものゝたぐひなるべし。かの輕

闕くのといふ儀、奈良ものの刀わきざしのこと也。此の奈良ものは、うはべはさてもみかけよきものなれども、物の切るゝ事もなく、頼みになる事もなし。千に一つも、物の切るゝ事もあれども、ふるき友達にあうては、きれおくれうちをるゝ。真其の如く、かの臆病ものも、おもてつらはよさそうなれども、このもはや、人ごとに云ひて悪口おそろしく、いかほどなる口論だてをし、底意地むさくおくびやうなり。されども、おのれよりすぐれたるおくびやう者によせあはせて、けんくわ口論にしかち、鼻息強き時あれども、口論と申す物は、當座の仕合によるものと見えたり。されば彼の身體にならずして、かさねてすねものにまけあはせば、思ふことにあひつけられ、切りまくられて赤はぢをかく。さて法度をさへこれあらば、必ずつゝしみおそるべし。此の外きずつくるに限りなし。

○昔さる人の云へるは、おやのかたきうつべき時、いづくにても行きあひたる所を幸と思ふべし。またとへば、刀脇指取りあへぬ所にて行き逢ひたりとも、其の仕場をのがさずして、つかみ付きくみつきてなりとも、勝負を決すべし。若し天運つきて、かへつて我が命をうしなひ候はば、死にたると只て魂魄に報ずべし。さて又かたきとして人にねらはるゝ人は、いかほども臆病になりて、用心を肝要とせよ。たとへば我が行くさきに、敵待ちてゐると聞かば歸るべし。但しのかでかなはぬ事ならば、わき道を行くべし。しかるを臆病などと云ふは、侍道ぶせんさくなる言分なり。たゞ何としても打た

おとなみ、高名手がら迄、いにしへより定めおかるゝ。

○昔もろこしの朱文公といへる賢人、みな人に学問をせよと教訓せられしに、其の詞に曰く、けふは何とねむたきほどに、あすよりならふべし、此の月はちとあつきほどに、来月よりすゞしくなりてならふべし、今年はちと隙が入るほどに、来年よりならふべきなどゝ思ふ事なかれ、たゞ時も日もけふばかりと思ひ、油断なく学問すべし。年月と云ふ物は、一睡の夢のごとくはかなく、あけてはくるゝものなれば、少し油断のうちに年寄りはてゝ、悔めども甲斐あるまじ。其の上人間に四百四病の病あり、願ひにふしては叶ふまじ。又古塚をたづね見よ、多くはわかき人のなきあととなるべし、さあらねばあすをも知らぬ命にて、油断は沙汰の限りなりと、くれぐれ書きおきたまふ。よき事にこそ。

○賢なる人の言へるに、されば人の口は、一切善悪の出で入りする門戸なり。かるがゆゑに口にたゞ善業を言ひおきて、悪しき事共を言はざるべし。其のいはれは、あしき人の口はさきを言はけり、悪鬼などを云ひて身命をあやまつ。是れは口のうちより、外へいづるいたづらもの共なり。又くちより猥りに食ひ、飲むまじき物をのみ過して、病を生じ身命をあやまつ、是れは口の外より内へいるいたづらもの也。又狂言綺語を云ひ、悪文章のおもしろきを作りなどは、口のうちより外へいづるもの也。又人の前にてあしく云ふ事、それゆゑの業をのみて不浄し、あるひはかつに

およんで、藥をのみ食をくらひて本復するなどは、外より口のうちへ入るよき者共なり。かの番衆と申すは、おのれ／＼が心に御座候間、よく／＼この善惡をわきまへ分別して、善きは用ひ入れ自由自在に、あしきをば、出入かたくきんぜいすべし。少しも此の番衆ゆだんしては、大事出来すべし。譬へて大事といふ物は、少しの所より出づるものなり。たとへば堤をつきて水を防ぐに、蟻といふ蟲のとほりたるあなより、次第々々に水かうるほひ、そろり／＼と流れ出て、後々には廣大なる穴となりて、其の堤を押しやぶるとかや。

一　昔さる人の云へるは、狂人走れば不狂人もはしる、といへる譬喩あり。げにも／＼江戸上下の人々が、慶庵の泡齋と云ふ狂人共が、町々小路をかけまはり走りありけば、是れを見ものにして、おとなしき、をさなき、男女まじはり、爰へはむら／＼、彼處へはばら／＼と、走りまはり、かけ歩きて見物する。さあればかの物狂ひも、いよ／＼心さわがしく氣みだれて、様々のつらくせ、てくせ、足ずりをする。然れば又此の見物の人々も、彼に氣移りして、様々のつらくせ、てくせ、あしずりをする。さあれば狂人ならぬ見物の人も、皆かの物狂ひと同じきなり。是れに付けて世の中をうかゞひ見るに、大身にして而も金銀もてる侍が、見事なる馬くらにのり、衣類裝束花やかに、人を多く召しつれ、どしめいてありかるゝを、小身にして而も金銀不足の侍が、つく／＼と見物し、羨ましがり

て、その眞似をしたがへ故に、すゝきりはて、借物くびり骨のなるゝ程負ひ、後々は主君に述懐を申し、老に恨みを含み、出頭衆をそしり、慮外をしかけ、不奉公をする。しかれば不忠不功の馬鹿うつけ者とにくまれ、いよ／＼手まへひつぱくする。誠下らふのいへる如く、述懐奉公は、薄穂に出て首かたらき、あげくのはてには身命破滅うたがひなし。されば遊山、なぐさみ、家作り、諸道具、飲みくひ物のたぐひ、行儀、心ばせ、萬事萬端にいたるまで、皆人かくのごとし。たゞ分々相應の覺悟分別、もつともなるべし。

○昔さる人の云へるは、誠に天神と云ふ物はおそろしき物かな、南無天満天神といはれし御身のうへさへ、時平公といへる大悪人のためにさゝへられて、九州太宰府へながされ給ふ。其の時の主君帝王は、かたじけなく、醍醐賢王と、今にいはれさせ給ふ延喜の帝なり。されば いま時は、天神のやうなる臣下も有るまじ、又延喜の如くなる主君もあるまじければ、いよ／＼ざんげんへつらひの臣下はおほく、へつらひさゝへを誠におぼしめし、聞召し入り用ゐ給ふべき主君はおほかるべし。よく心得おそれつゝしむべし。されば かの天神のいにしへ、心つくしへながされさせたまひて、觀音寺裏の鐘をのみ聞きなれて、ふかきうれへに伏し沈み給ふ。九月十三夜のよるはすがら、月にむかつて都の空なつかしく、したしき人の行方も戀しく、いとゞ罪なき御身のうきつらさのみ數そひて、

月光欲曉無明罪　風氣如刀不暖忍

隨見隨聞皆悟情　此秋獨作我身秋

おりふしにふれ有るを觀じ、吟得深邃の五言詩かと爰に書き付け侍る。

〇昔さる人の云へるは、さる時さる人の長屋のまへを通るに、いかゞしたりけん石一つまろびき、すでにころばんとする時、かの長屋の上なる人「あらいたしや」と云ひてあなづる。けつまづきたる人の曰く、「いやごめんあれ。石かとおもうてけたれば、扨はそなたのはなのさきか」といふ。長屋の人いかゞ思へるや知らず。

〇昔さる人の言へるは、人の主君としては、少したりとも、忠功あらんさぶらひには、はやく氣をつけ、それ〴〵に何なりともくだされ、其の侍の心をなぐさめこぼしあたまふべし。さあればわき〳〵の侍も此のよしを見て、われ〳〵の身にさへ御氣を付け給ふ間、いはんや思ふさままでかせいたらば、恩賞あつくあづからんと、我も〳〵とたしなみ心がけ、いさみすゝみ申し候間、すぐれたる大忠大功の侍共おほく出來する。又少しの事にも御氣を付け、詞のなさけにもあづからざれば、諸侍の氣もうかすして、忠功立て申さぬなり。

〇昔年のおもしろきにいざなはれて、うかれあるきにかゝづらひ、入徳門のまへを過ぐる。ありがた

しありがたし、初學徳にいる門よと伏し拜みし折から、夕をいそぐ雪げの雲、消えたる風にひまそひつゝ、ひがしのうなばらに光をはき出づる月のかげ、しのばずが池鏡にうつる景色に乘じ、人手をうたる一軸をわすれて、

風捲寒雲池月澄　煙波洗雪柳條輕
門前埋盡人無掃　思得讀書待夜明

○昔越後國ぶだう峠のふもとに、天狗坊とて富み榮えたる山ぶしありけり。其のとなりに、ことの外なる大貧切ありけり、かの山伏の富み榮えをうらやみ、問ひていはく、「いかに御坊、ぜにかねもち、徳なるならひやあるか。」「山伏等にて、大事のならひあり。」「さらば教へてたべ」と懇望しける程に、「ひさうの事なれども、執心ふかければ教へん。」とて、かのすりきりを同道にて、うしろの山へ上る。[illegible]に高き嶺のけはしく〳〵と聳え、峩々とそばだちたる岩間より生ひたる松の、枝くねり苔むして、つたはひかゝり、ねぢねぢとしたるが、深々たる幽谷の、底も見えぬ所へさしのぞきたるあり。山伏かのすりきりを、此の松へのぼれと云ふ。あやふく思ひけれども、慾にめでてのぼりぬ。一のこずゑへのぼせて、左のあしをはなして、谷のそこへさげよと云ふ。さらばとてさげければ、又右の足をさげよと云ふ。是非におよばず、あぶなく〳〵ぶらりとさげければ、又左の手をはなせと云へり。いかばかりおそろしく、身

ふるへてあやふかりけれども、かくせねばなしふる事なりがたしといへるに、とかく思ひきり目をふさぎ、南無阿彌陀佛ともろともに左の手をはなし、夢の心地して下りぬ。しばらくありて又右の手をもはなせと云ふ。すりきりの云ふやうは、「此の手をはなし候はば、谷のみくづとなるべし」と云ふ。山伏答へて、「もつとも道理、とく／＼おり給へ。」と申す。嬉しくてすべりおり、今少しばかりになりて、山伏詞をかけて、「あやまちすな用心しておりよ。」と云ふ。すり切りもの漸くおりつきて云ふやうは、「などやこずゑに有りてかたてはなし、あやふき時には詞をかけても給はらず、たゞ死にたるものよみがへりたる心地に存じ候。」と、恨めしげに申しければ、山伏語つていはく、「されば錢金持つたらひはそこなり。富み榮えんと思はば、錢一文半錢なりとも、みだりに遣ふ事なかれ、錢一文をまうくる事は、只今松のこずゑにのぼり、右の手をはなちたるほどの辛苦と思ふべし。さて此の一文錢をつかはんと思ふ時は、右の手にてとらへてゐたる松の枝を、放さんとする心地せよ、手を放せば落ちて死するは必定なり、必定と思へば、たれも手を放さぬぞ。眞其のごとく、錢一文をつかふならば、命にかけて大切と思ふべし。さて飛びおるゝ程になりて、詞をかけし事は、こずゑにありてあやふく思ふ内は油斷をせず、せざればあやまちなし。よろづ事のあやまちは、心やすき所にてする物なり。物をけるに大事の所をけすまして、其の心の大事を忘れずしてけぬれば、落つべき事ならねども、大事

の所をよく蹴たる自慢に、油斷あるほどに、かならず心やすき所にて、思ひの外に蹴そんずるなり。譬其のごとく、錢金たくさんにもちても、もたぬと思へば油斷なく、萬に才覺まはり利足をとる、是れこそ大事ひでんの、富み榮えのならひなり。」とかたりぬ。

○昔さる人のいへるは、ひろく世間を見聞きおよび候に、一萬石二萬石よりうへの身上めでたきお侍衆は、みな利慾にふけり、しはくして、諸人にもあざけられ、其子は又身上破滅し、おとろへ給ふ人多し。又五百石三百石より内そとの侍は、あまりにきすぎたてをして、分際に過ぎたる榮耀めるに、おちぶるゝもあり。さりながら人々是れをばあはれみいためども、大身のしはくして、身上破滅したるをば、諸人喜びうれしがる。

○昔もろこし楚國のあるじ備臣と申すは、行儀みだりならず、心も神妙に物も知り給ひて、うはむきはよきやうなる人にておはしけれども、まさるうちの目下なるも給はず、法度おきても締りなく、ややもすれば國家滅亡せんとする事たびたびなり。其の比王蠋といへる賢人の詞に、佞臣も又玉巵無當と笑はれたり。玉巵とはうつくしき玉のさかづきなり、無當とはそこのなきといふことなり。げにうつくしき玉のさかづきなりとも、そこがぬけたらば何の用にかたつべき。されば主君のよき面下をくゝり給はねば、慈ふかく仁義を知り給はぬのあなるべし。これに付けておもへば、富貴なる人の

大きにおごる事、うつくしき玉のさかづきを、三歳ばかりの童にもたせてあそばするがごとし。

○昔さる人の云へるは、人として慈悲の心なくんばあるべからず、じひに大小あるべしと、小をすてて大を取るべし。たとへをもつていふに、冬のいたつてさむき時、船橋もなき川ぎしに行きせまつて、渡りかねたる旅人共を、その国郡のあるじ御覧じて、ふびんにおぼしめし、みうちのものどもに仰せ付け、かの旅人共を一人づゝせおひこして給はらんは、いかばかりの御慈悲と思はるべし。是れすなはち小なるじひなり。其の謂れは、勿論わたりかねたる旅人どもは、いかほどもうれしく思ふべけれども、せおひこしたるみうちのものどもは、ひえこゞえて腹をたてぶきようすべし。其の上せおひこされたるも、せおひこしたるも同じ人間なり、さあらば親類に他人を思ひかへたるがごとし。されば大なる慈悲といふは、其の河に橋をかけよ、たゞし橋のかけられぬ川ならば、ふねわたしをおきて、わたしもりにもにあひに半銭をあたへ、少しのとうりうもなく、何時にてもいそぎ人をわたすべきよしかたくだい付くべし、さあらばわたりかねて迷惑をする旅人もあるまじ。旅人なくんばみうちの者共、ひえこゞえて腹をたてぶきようする事もあるまじ、是れすなはち大なる慈悲といふ。いにしへの賢王と申せし延喜のみかど、さむき冬の夜に御衣をぬがせたまひて、民の寒きを思召し知り給ふとかや、まことにみかどの御身としては、民をあはれみ給ふ御心ざしは、かぎりなく有りがたけれども、

萬民あまりにすりきりのはてゞ、食物衣服もにあひ相應にもつべきやうに、御代のまつりごとたゞしくあらんにはおとるべし。是等を小なる慈悲とやいはん。されば管相丞は、罪なくして心つくしへながされ給ひて、からき愁歎に身をまかせ給ふ。又羽柴太閤公の御時にか、都をはじめとして三ヶ津の町人共に、かねをくだされ、家どもを給はり、情をかけ恩をあたへ給ひしかば、町人どもかうむらけ、聖人賢人佛菩薩と申しあへりけれども、天下の侍百姓どもは、堀石垣普請などに、金銀をたくさんに拵へとられてせめつかはれ、うき辛勞を仕り、その石垣堀などの用にかたてる。の許でる天命に叶すかざらむ、大なる小なる三十あまりすゑならべ、日もあやなれ。さて鷹部屋のけこのにたゝずみ見るに、いきたる犬を引つなぎ、さし殺す人あり。いかなる事にやと問へば、鷹の餌にといふ。あはれなるかな、罪なくしてこゝにあはれみければ、何なる人、一犬をころされば鷹が死ぬるぞと云へり。又鷹三ヶ人が云へるは、一匹ころしてあそばれば、いぬも死ぬましと答へしに、萬の事鳥獸にとりて、有のがたる人をなと思はれけり。されば多くの鳥獸、いのちを惜しみかなしみ、子を思ひをすること古通をこり、物思ねたみいかり深く、執心つよくねんのおもき事、人間よりもはなはだしくおもたり。是れ畜類のいたれるゆゑなり。しかるところさん事例かよからん、人はたかきそのにる鬪諍あるいたる事也。

○昔さる人の云へるは、盗人しさいとんじあり、善人なれども、其の身の才覚にあはねば、まなこをいからしにくみ、其わが業を見て、まなこをほそめ愛するは目ぬす人、善事を云ふと我が耳にあはねば耳をそばめ、よき事云ひけれども、悪き事を云ふにもおのが気にあへば、耳をかたぶけ聞きすぐるは耳盗人、善人なれどもおのれがあひくちならねば、そしりてばうし、悪人なれどもおのれがあひくちならねば、実儀にはあらねども、ぜいきをするには口ぬす人、家のおとな出頭衆のしとたる、御前にて評議はわるけれども、一たんすしとはりたし、半人のもちたるをば贔屓にしよけれども、おとな出頭衆のまへにては、本はよけれども否がわるい、与ひはよけれども本がわるい、などといひこなすははな盗人、孤独鰥寡老人貧人等のてつから何をし給ふを見ながら、掠取りてくめは手盗人、御使に参りてわたくしの用を達し、御返事おそなはるは足ぬす人、此の外世間ぬす人おほし。たゞがちに財宝をうばひとるばかりを、盗人とは思ふべからず、分別あるべし。

○昔さる人の云へるは、さぶらひはたゞ武士道をたしなみ、剛なる心がけもつぱらなるべし。中にもより云ひ傳へたる武道嗜れの人々、名字名乗たゞしくのこつて、松風露をはらひ、西窗の月さやかなるごとし。げに〳〵此の世はかりの宿、一生は風前のともしび、たま〳〵侍の家に生れて、いかんぞ後代の名を惜しまざらんや。されば千里をいそぐ虎は、毛を惜しみて、伏したるあとを二度かへりみ

り。仁義の侍に家名を思ひ、二つなき身命をすつる。又表裏軽薄どうよく不道の臆病ものも、名字名聞たしかにのこりて、きれいなる口より出でてもむさらしく、いさぎよき耳に入りてもけがらはし。まことに生命をくわんずれば、つながざる船のごとく、根をはなてる草に似たり。水の泡のあとなきゆくへ、陶朱公が八萬四千歳、音に聞いて見たる人なし。たとひ北州の年をたもつとも、死ぬべき時はかならずしかるべし。松樹もつひに枝かれ根くつる、日影まつまのあさがほも、その栄えたのしみあり。それ定命六十年といへども、上つ十二三まではさのみ何事をも辨へず。さて二十許りの程は、父母兄弟の氣をかね、萬事思ふやうならず。又六十以後は世間を憚り、かへつて我が子の氣をもかね、或は目見えず耳きこえず、歯もうごきいたみ手足かなはず、心體おとろへ腎水かわき、脾胃さまたげ、日々にうれへがちなれ、月々に病悩のみ數そへはべれ。されば、荘子何とかいへるまことし人、仙家をつたへて長命なりしも、陳圖南といへる詩人、神仙死せざるも何事をかなす、たゞ秋風にむかつて感慨者にはならんと、そしりあざけりおはべるめり。げに〳〵彭祖が長生をして、つまの数四十九人、子の數五十四人に死しおくれて、かなしみなげきに伏し沈めるもあるものをや。長命何の益か有る。命ながければはぢ多し、人はたゞ四十に足らぬ程に死なんこそよけれと、吉田兼好もいへり。まめなる定命六十年といへども、あとさきとり捨てみれば、わづかなる命の間なり。いはんやけ

生れてあすを知らず、たゞ今無事なりとても、後刻のあやふきを知らず、何をかたのまん、唯を
かまへこぼんの、此の世はつねのすみかにあらず、あながち執心のごとくなし、執心の深からず
ば、いかんぞ臆病をはぢて、剛なる心がけなからん。

○昔もろこし楚の項羽と云へる大將は、おそろしくたけき人にて、眼をひらき、いかりにふれ
ば、いかなる大剛のつはものも、みな頭をかたぶけ、おそれをのゝき、ひれ伏しけるとなり。かやうに
恐ろしき大將なれども、戰場にて諸卒難をかうぶり候へば、涙をながし、血を、項羽自ら吸ひ
とつて、なさけ深きしかたなれども、よくふかき人にて、物かくれなき大將なれば、かやうの情は
女の人のあはれみが如しとて、たれ／＼も思ひつかず。かくのごとく慾ふかき人なる故に、しやう
知行などあてんとて、朱印を出す時には、いかばかり惜しく思はれけん、いく度も其の朱印をひらき
ては巻き、まきては開き、紙のけだちやぶるゝまで、くれかねられたるなり。かるが故に貰ひたる
人、うはべにては嬉しがるふりをすれども、そこにては嘲りわらうして、うとみはてけるといひ傳へ
り。さるほどに漢の高祖には、つひにたゝかひまけて滅亡せられぬ。されば物を取らせんには、さら
りと氣味よくとらすべし、さあらば貰ひたる人も、一しほかたじけなく思ひよろこぶなり。

○昔さる人の云へるは、人間萬事師匠といふ物なくては叶はぬ事なり。さりながら根本の師匠をたづね

もとむべし、根本の師匠とはわが心なり、物ごとをはなれと思ふが則ち師匠なり。さあれば我が心こそ
師匠なれ。されば世間に師匠とする人は物毎に多けれども、なほ心をおぼえんと思ふ心ざしなければ、
其の師匠もみな用なし。又世間に、其のしるべの師匠はまれなりとも、わが心をたゞしくし
て、もの毎に油断なく、吟味せんとたしなむ輩は、その心すなはち師匠となりて、日々にあ
らたなるべし。されば、こそ大聖孔子も、三人おこなふ時は、其の中に師ありと宣へり。此の心は、譬
へば三人よりあひてゐる時に、二人は他人一人は我が身、合はせて三人食をくふに、一人は花車
にくひ、一人はむさうに食ふを見て、我も同然に思ひなさで、花車にくふを見ては、我も尋常なるく
ひやうをと、よくよく気をつけて見覚えて、我らも以来は、あのやうに食ふべしとたしな
む時には、是れ則ち師匠なり。又、人のむさうにくひちらしたるを見ては、さてもさてもむさうなるか
な、なにとぞ我れもと、是れにも気をつけ、よくよく見覚えて、我も以来に、あの様にはふるまは
じとたしなむ時、これも又師匠となる。孔子の御詞は、天下国家をも治むる身のおこなひを、見な
らひ学びて、師匠にせよとの御事なるべけれども、さやうの事は、常式の人までに合点い
たさせ難し、みな人々に合点するやうにと、朝夕二時の食物にてたとへて、愚案の寸心
を書き付けはべる。さて飲物、食物、見る聞く、おきふし、言語、衣裳、家宅、道具、異相にいた

ることで、人間のうへの善惡ある事なれば、それ／＼に眼をつけ氣を付けて、よく／＼みならひたしなる儀には、それ／＼に我が師匠となるべし。三十町の後はおのが心せい／＼といさぎよくなりて、人の善惡一點ものこさず、鏡にうつして見ることくなるべし。但しあまりに心さきだてをすれば、諸人を見てはにくしきたなしと思ふものなり。げに／＼古語にも、水至つて清ければ、そこにすむ魚なし、人いたつて清ければ、内にともなふ友なしとかや。されば人まじはりに心清きふりをして、諸人をきたなしとの心思へば、其の心おこりもて行きて後、かならず我が身のあたとなる。是を慢氣と云ひて古今いましむるなり。しかる間其の慢氣をおさへて、年まさりなる人をうやまひ、年おとりなる人を引きたて、同年にはうちとけしたしみ、互にいけんをいひ、恨みありともかんにんして、次第／＼にねんごろすべし。これぞまことに、眞實の心ざしある人と申すべし。

○昔ある人の子七八歳の頃、てならひをせよと、いろはを教ふれば、「いやぢや」と云ひて庭訓をならふ。十二三の比より馬に乗すれば、かたたづなにて乗りかけとばせ、弓を射させすれば、あたりをこまかに強くひかんとす。てつぱうをうたすれば、中筒をもつて中りをもつはらにとうつ。兵法をつかはすれば、只はやきと許り心がくる。さて學問をせよといへば、「二十におよびて仕るべし。」と云ふ。父母腹を立て、「汝おやのいふ事を用ゐず、いかにとして左樣なる心あるや。」とせつかんしければ、答

へて曰く、「よつてならひの事、庭訓と申す物の本には、諸々の文章、草木、魚鳥、衣類、家財、其の外色々の事をかきあつめたり。これをさへならひ覚え候はば、物かく事にはことを欠くまじ、いろはなきはならはずとも、これらに覚え申すべし。又馬の事はくわしくよく、はやりかけとびこそ、軍陣の用にも立ち候へけれ、片手綱に太刀うちたるため、たづなかまへやうやくしく、馬上じんじやうなるは、馬日帯馬乗の心がけなるべし。弓ほとけ矢を射、三十三間堂をとほし、巻藁まへうつくしく候はんこと、弓射の心がけなり。まてに輪臨の弓といへば、三十三間にすつとよく中をよしとすへし。一とせ山口軍兵衛と云へる弓の射手も、敵二間計の前にて、弓をもちたるこぶしの下へ、つきあて申し候と聞しが、矢をはなしてこそ、よろひのすないたを射ぬき、胴をくびをとる。又下総の住人庭谷又左衛門と云へる鐵しの人、弓にて度々の高名あり。その物語に、九間三間まりとほくして、矢をはなしたる事なし。一とせおくれいくさにし、たゞ一騎北原へはと道を引退くに、敵五六騎にて追かけ、三間程を寄て候由、さやかいつて射候へば、敵ともは鞍を射たまらず射とほし、鞍の前輪を射付け候へば、馬よりまつ様にまくる。其の間に敵しがいを引つかけて引き退く、あやふき命いきたりと語られけるよ。又鐵砲の事は、国々うしろ石火矢など申して、三十町程遠くへあり、爰の矢ぐら、かしこの塀打ち崩しけり、雑人原をおどし、或はなりおとおびたゞしく、女童の肝をおびやかし、軍に勝

たんとの用意なるべし。されば豊臣太閤公、攝州大坂の城に、色々の大鐵砲共を仕度し置き給へども、子息秀頼公の御らうの時には、かの大筒ども、何の用にたてりや。此の比九州しまばら一揆御成敗にも、寄手の方にて、何の用にたてりとも、承りおよばず。城中の中筒にてこそ、よせてを打ころされぬ。されば此の大筒と申すは、思ふやうにさい〳〵度々にはなされず、又目あてもあらず、取りまはしも自由ならぬなり。さあらば取りまはし自由自在にして、目あてにのりやすく、思ふ度々にいか樣も放されやすく、人によくあたり、よろづ德用のある中筒こそ重寶なるべけれ。武士道無雙の甲州信玄の御内にても、中筒にてこそおの〳〵てがらをせられしとなり。一とせ武田勝頼公と徳川家康公、三州長篠にて御かつせんの時、家康公大利をとらせ給ふも中筒なり。一とせ上杉景勝公の御内直江山城守と、出羽國最上の御主義光公と合戰の時に、なほえ方の下臣右衛門と云ふ二千の大將、もがみ谷地の城をせめ取りて、すなはち其の城にこもり候刻、最上方よりかへりぜめに、本丸の堀際までせめよせ、百姓がもみをひく、すりうすと申す物をもち楯にして、城の矢ざまへてつぱうを射こみ申す事、さつもはづさず。かるがゆゑに此のせめ口大切にして、もちかためがたく、やゝもすれば此のせめ口より、責めやぶらるべうおもはる。せつかく仕り候處に、それがしのをぢ大井右近も、折ふしこの城にこもり候が、此の口へ走せよりて見れば、敵鐵砲をうたんとて、かのすりうす

ゆきは入立ち寄り候へば、関門の植木を入るゝあひだ、立ちのけば此の穴をあけてたゞ見て申し候を、よく／＼見すまし、てつぱうしたゝめ、矢間へさしむけ、すりうすのあなをねらひたる申し候へば、例のごとく敵てつぱうをうたんと、すりうすの陰へ立ち寄り候へば、かの穴くらくなり候所をうち申し候に、あやまたずすりうすの穴を射通し、敵のみけんをうちぬき、やにはに射ころし申してより後、此の矢一つにおそれをのゝき、かさねて此の矢間へよせ来る者一人もなし。一人一丁にて、大切の責口をよく固め申し候に付きて、いにしへを思へば、駿河の八幡殿の御矢一すぢにおそれをのゝきて、平清盛六波羅の責口をにげしりぞき、奥州の佐藤四郎兵衛忠信の太刀一ふりにおそれをのゝきて、よし野の大衆後代みれんのうき名を残し、殊に高館にて申し候、武蔵坊とて、た十日目の玉を入れ、かたきを大事と案ずる事に、宿儀にかゝしはやし申し候とかや、されば大事の物ならば、下手の方にも用心にばかりかゝはりて、めあてにかする事あるまじ。其のうへ軍陣には心も臆するといへば、大剛のものならでは、かたきをよくもためし得ずに、宿儀たゞもしくらち得まじ。大剛のものは世上にまれなるものなれば、いはんや強弓のものなどに、かの豊後物伊など申す者はまことなかるべし。」とほめ申し候と也。人に有たるまで用や用やある。又兵法の事に在る八百八と云ふ事なれども、それは兵法者の上にて、ただ一心をまもりて、はやき事を第一とすればこそ

て學問の事は、先づ此の武藝共をならひ覺えて、から學文參りて後、年比より、とくと學び申すべし。それ聖經賢傳は、いたつて大事のよしなるぞや。その外何ぞ一部を得心仕り候はゞ、忠孝あるまじり申すよし、御心易かれ」と申す。

○昔ある人の云へるは、當世の主君達、諸牢人を召しおかるゝに、總じて手柄のさぶらひをとはかりめし給ふが、總じて手柄のさぶらひは、世間にたくさんに有るよし。たゞし澤山にはなき物と御存知ながら、御目にてはかりかへたきと仰せられ、御外聞をつくろひ、牢人をば召しおかれずして、知行をむさぼり、金銀をたくはへ給はんとの御分別か。それさぶらひの心剛なるも臆病なるも、みな大將の剛臆によると申し傳へり。たゞ主君の、覺えてからの侍をと、選び用ゐ給はんは、侍大將物頭しら使番等なるべし。此の外諸牢人は、先祖の剛臆をたづねめしおかるべし。されば東國の人々は、皆上方衆をば、ちと臆病なると思ひあなどり申す。しかれどもいにしへ、河内國楠多門兵衞正成公のみうちに、一人として臆病なる侍なし。さあらば諸侍の剛なるも臆するも、みな其の主君の剛臆によるとおぼえたり。されば覺え手柄の侍なとばかりえらび給はゞ、皆五十より上の老武者どもなるべし。さあらば生まれかはりの若き侍どもは、何になり申すべきぞや。其の老武者の覺えてがらは、皆わかき時、かせぎはたらきたる覺えてがら共なり。さあらば當代の若き人々なればとて、何

ぞ臆病にして御用に立ちかね申すべきや。先づ若き侍を召しおかれ候はゞ、當座の御伴、使にも御用に立つべし。いはんやあすに何事にてもふと出來候はゞ、主君の御下知次第、馬上にても徒歩にても馳せめぐり、諸事に付けて御用に立つべし。老えてからの侍には、合戰の下知をさせ、物かしらなどに然るべし。さあらば老勢は何に入用あらん。わかき此の軍は攝州大坂なり、此の陣もはや三十年になれり。たとへば大坂陣へ、十七八にても罷り立ち候人も、はや五十歳におよぶべし。いはんやその節かせぎ手柄の侍は、八九十にもおよぶべし。實に〳〵麒麟も老いぬれば駑馬におとれりと申すや。されば老えてからの侍ばかりをかゝへて、わかき人々をかゝへ給はずば、當代の若き人々は、百姓にならんも、田畑つくらん事なるまじ、職人にならんも、俄に細工もなるまじ、あきなひせんもとでもなし。さては心にもしまぬ道心おこし、おもひも入らぬ寺入、あるひは身にもしらぬすぎはひをして、いたづらに猿いねなりをするか、さては道路にさまよひ、こつじきせんより外はなし。但しかく申せば、老功の覺え手柄のめん〳〵を、ねたみそねむに似たり。まつたくそれにはあらねど、たえて、召しおかれたと云ふにあらず。わかき時てがらをせん奉公をせんと、諸侍の心がけて、身命をもいとはずかせぎ申す事は、家名をおもひ、老後のたのしみをねがふまでなり。所詮たゞ老若の

んぜさ、侍百騎をかゝへおき給はんには、老武者三十人、わかきさぶらひ七十人召しおかるべし。樣

の脇、もとのしハくと申し侍へたれば、老人は口やく先にて、當座に武藝すぐれ、ある間に十人と申すべき、さて又諸侍人を召しおかるゝ時、但し手前の評せんさくありといへども、其の時年寄またりていで／＼評せんとする時あるべきならば、埋も手柄にも様々有るべし。たとへば其の家に一ある侍あり、その家にてある侍におとりたる者も手柄も有るべし。又くひ一つとらずとも、大きなる働えてがらの侍もあるべし。

○能き侍る人の云へるは、當世の主君たち、よきさぶらひはあるまじと、選みすぐらく給ふ、そのごとく能き人ばかりはえられまじ。善人ふとえらび給ふときは、家老、用人、奉行、目付、物がしらとなるべし。あながちに侍をえらむ事なかれ。主君は善をおこない、仁義にいたりたまへば、下々はおのづから、みな善におもむく、仁義に達す。大聖孔子も、善ある所へは悪はなく、悪ある所へは、善も又入り難しとのたまへり。されば近ごろ、孟嘗君といへる名将は、善悪を論せず、あまたの人を抱へもてり。ある時さる仔細ありて、秦州の帝、このまうしやうくんをうち殺さんとし給ふに、まうしやうくん狐裘のかはごろもとて、あたひ限りもなき寶を、秦皇にひさうのきさきの后へ参らせ、其の后を頼んでわびごとをさせたれば、命生きて侍りき。さて其の後秦皇よりつかひありて、其方は天下無雙の寶、狐裘のかはごろももてり、急ぎくれらるべし、くれずはわるかる

へしにとぞ云へり。しかるに古は衣なれば、まへかど三旨へ献じすたり。いかゞせんと迷惑せられしところに、みうちの人の中に、犬のまねをする天下無雙の上手ありて、犬のまねをして門番役所をとほり、かの狐のすみ給ふ宮中へしのび入り、かの衣をぬすみ出し、秦王へまゐらせ、主君まうしやうくんの聞えすべくひけり。さてまうしやうくん思へるやうは、かくて此の所に長居せば、又いかなる難儀にか逢ふべしと、秦の國を夜にはにして、函谷關と云ふ所に行きつく。此の關は日本にてたとへば、江州の逢坂か、當代ならば相州の小田原、にこねの番所のやうにて、きびしき番所なり。この關のならひにて、にはとりなかねば門を開いて人をとほさず。まうしやうくん夜にげにしたる事なれば、其の跡よりは追手かゝるべし、如何はせんと悲しめる所に、家内の人の中に、鶏のまねをする天下無雙の上手あり。關やの上にとびあがり、鶏のなくまねをしければ、關所の鶏もときをつくり、其の時番所をひらきけると聞、難なくにげすぎてけり。されば何やうにおやうなる芸のかれし事は、諸芸をたしなませて、人を大勢もちたる故に、其の多勢の中に色々の藝者ありて、君の身命をすくひしめぐみなり。人にはとりのまねするもの、何の用に立つべきなどとて、ひごろはわらへるなれど聞けば、まうしやうくんの身の、いかでかようたかなるべしや。又りうこし世間の主と、実の直さかすゝめり。此事は主たゝかひまけて逃げ給へるを、敵追かけす下にうちこえんとする時、必陰と

れたる下部あり、此の人九つの鉢を手だまにとる事が、天下無雙の上手なり。いそぎ楚王の馬のあとへ走せふさがれ、ふせぎたゝかふといへどもかなはず。さるほどにかの九つの鉢をとり出し、面をきときふに手玉をとりければ、敵共此のよしを見て、あらおもしろと見物して、楚王を討つ事をん事を、ばたと打忘れける間に、楚王にげのびあやふき命たすかり給ふ。これも何の用にも立たぬ事なれども、時によつて大事の用に立つ事あり。下手のたとへに、繩ひも三年おけば、用にたつと云ふ事もつともなり。又蒲生飛驒守殿のみうちに、何の用にも立たぬ、知行千石ばかり持ちて、しかもふをとこ沙汰のかぎり、かうむりのつにむせたるやうに、なきつらなる侍あり。出頭のおの〳〵ある時に、「あの者は御知行だくさに御追放あるべし」と申し上げければ、ひだ殿宣ひけるは、「いや〳〵さぶらひに於て、一つのとりえはある物なり、あのなきつらをとこをば、しうたんうれへの使者につかはしてよかるべし。大將と云ふ物は、侍をえらびて侍をすてず、あの男をひだのかみが、譜代のよしみを忘れて追放せんには、誰人か又扶持しおくべきぞや、むごき事をいへる」とて、御機嫌あしかりけるとなり。さあれば唐土我が朝にも限らず、名大將は人をえらびて、人をすてたまはぬぞ有りがたし。まことなるかな上手の大工は、材木をえらまずめたと切りすてず、ながき木をばけたなどに用ゐ、短きをばつか柱にも用ゐ、ふとき木をばかうりやうなどに用ゐ、ほそきをば柱にも用ゐ、よ

かれるやうにてなるやも、それ〴〵に使ひ用ゐる。又上下の、いしやには、人参だいわうなどの、ねのたかき薬をのみ、能薬として用ゐず、蜜柑の皮、牛房の實に至るまで、時に應じて能あるを宝とす。の謂ゆる人のすぢへるは、侍の花車なると云ふは、行儀よく正しきにして、人をにくみそしらずへらはず、手に筆算の本をも大事とつとめ、そのひま〳〵には、歌道儒道謡歌のみちに心ざし、弓馬しつけかた、兵法手跡など、少しづゝも心得たるぞめでたく覚ゆ。茶をたて花をいけ、調ひなきもゐひあさけれ、やしやうぞくをつくろひ、役にもたゝぬ物ずき、やはらかなる風情をさやしやうにおもへること、お上かた衆の意見なり。されば、あづまの風俗をとして、何ぞはらひたらで内のものをしかる時、ぬぼくひよつまりておくれべいといふを、上方衆はわらふ〳〵びやういふたれや、いでとりげんとお申あるも、まことに花車常やはらかにして、やさしくこそおほゆれ。その武がい上がた衆は、花車だて詰肉をるれども、よみつふだしとみな上方に使ひて、山高ければ、武道にはお家のめん〳〵おはしとも、詩作には五山のめん〳〵おはします。連歌には昌琢、紹巴の宗匠あり、両匠に不足なければ、百人か九十人とでは、歌連歌詩作などがしらるゝたるぞれなり。但し歌の用あらん時には、お公家衆をたのみ、詩作用ある時は、五山の出家衆を頼むべし。連歌の用あらば、昌琢紹巴を頼みて、そしれはすんとやおほすられ。けにも〳〵代官主いふに優るとなれば、ずらこととするべし。但

し文章をとゝのへらしといへる、其の器にもとづき給ふか、あつまり行くに、會連、當座、歌、連歌、詩作など、よく〳〵吟味し給、少しづゝは、百人の中に八十人は心懸申し候、これらもよき嗜もなければ、ひがことのみおほかるべし、されどもしらざるにはしかじや。

○昔大江文平といへる人、あるかひもなくすりきりはて、せんかたなくやありけん、ある時、易由と云へる醫藥師のがり行きて申しけるは、抑人間四百四病、其の中に、貧よりつらき病なしと古人もかなしめり、それがし此の年月、貧苦の百病にてんがうなし、御藥治無雙にてましますよし、一包御調あれと申しければ、易由あざわらつて、それこそ此のくすしの得手なるやうにて候、さらば調合つかまつらんとて、寢所へ入り、金子百兩つゝくしてくゝりて、金持病身丸と銘を書きてあたへぬ。先づ一劑には大けんあり、さいごは知らず。

○昔さる人の云へるは、人に物をくれながらもわるく取らすれば、損をしながらかへつてうつけたるやうに思はるゝ事あり。たとへば人來りて、我がもちたる道具をことの外ほめて、後には所望などするとて、うか〳〵と心得、其の人の心をも見とゞけずして、御氣にいり候はゞ進ずるなど云ひて、めたと取らすれば、その座しきにてはうれしがり、かたじけながるふりをして、其の座をたちのきてかげにては、おのれが利發才覺にて、人をたらしだまして、取りたるやうに云ひふれ廻り、くれたる

人をば、[illegible]けれる様に[illegible]程に、[illegible]人には物を惜しみすとも、[illegible]人には、
銭一文なりともえさすまじきなり。

一、昔なる人の言へるに、人間において禮儀を肝要と心得べし。禮儀と云ふは、むかひの人に[illegible]お
[illegible]

一、[illegible]人の[illegible]、織田信長公、羽柴秀吉公ときよりこのかた、いづれの御家にも、けんくわ

くのさゝに、ひもの類のに付めて侍が取る。其の上りんじの過役をかけ、ひやこといひて日ごとにつきに徒聞、百姓迷惑するばかり。百姓おとろへ力なければ、でさくもかれ物成りもへり、それ故侍つまり侍のつまりとなる。さて侍が、富み栄えれば、衣類、装束、家居も、諸道具をも色へ、のみくひ物に至るまで、分々相應にしたくするゆへ、職人、商人皆其の細工あきなひの為にて、おのづからにあり〳〵に富みさかゆる。しかるを侍がすりきり候へば、諸道具をいかほどほしく思ひしも、其あたひなければこしらふる事ならず、たとひこしらへたりとも、作料も取らせねば、諸職人のつまりとなる。また萬の装束をいか程ほしく思ひても、あたひなければ買ふ事もならず、なまじひ買ひとりたりとも、代金を下さざれば、商あきなひもつまりとなる。さて又侍が富み栄えぬれば、寄子、ごくわん、中間、同心、家の者はいふに及ばず、日米出入の奉公だてをする町家、中人、職人商人、百姓、諸げい萬能者、さまざまの遊民、人非人までも、それぞれ相當にすぎにかね、米、小袖などをば取らするによつて、其のなり〳〵に富み栄ゆる。然るに侍がすりきり候へば、心付をほどこさんにも、手まへひつぱくなれば、思ひつめたる心ざしも水のあわとむなしく、世間ごさたになりて、人もうとんじ親しまず、おのづから仁義禮もわきまへ知らぬ者に似て、公儀も不案内になる。されば侍が富み栄えぬれば、百姓かならずゆたかに栄え、でんばく念を入れあれちなし。左様世

上におゐて見れば、賣や買ひゆるやかにして世間のたかなり。世間豊かなれば、諸さいく、諸あきなひでお
ほく、職人あきんども常に榮え、侍、法師、すとう、僧まで、さるがく、あやつり、かぶき、人非人
迄皆ほふしき、其の時を得てゆたかなれ。すあらば其の住居の家も、又日を逐つてゆたかなるべし、
その家富み榮え給ふならば、其の國所もにぎはしく、はんじやうなるべきか、いかん。
昔ある人のいへるは、諸大名の寶物とて、常に秘藏しておき給ふべきは諸侍なるべし。する
樣に恩をかけ情をかけて、鎮にしたがひをはなれざるやうに、召しつかはるべし、其の故は侍の身に
身をいたすも、よく仕へをいたし、大事の時には命を捨て、御用に立つべきは侍ならでは、一つに
は日頃のたのには、寶となるまじき寶にてはなきか、金銀米錢などを納めおきて、絹布、花紋、
又は器物を寶とせば、一戰の山ほどもち給ふとも、大事の時の御用には、ゆめ〳〵たつまじきなり。
但し日本全國たとへたくはへ置きて、大事の時に取り出し、諸人をもたしよせんとの御分別ならば、
うのれとゆふことに、ともかく金はたくはへのあたらきよくなるべし。急ことの急なる時にあたつて、
いかほど黄金を積み置き給ふとも、ふつたくうれしからぬ物ぞかし。それこそ昔は恩のたのにつくす、命
を、義によつてかろし、寄錢のむしには無念より、金銀の寶には死せざる、と申しつたへり。
又世にはいへるは、世間にてきけいのまりある物を、買ひ、あるはおとろかす號、寶仰ひものつきる

せかれ、出家の女房を見るまなじり、わか衆の大食、鹿の狂ひごとのまなこなどゝいへり、闘諍邪道の音は出来出頭のおごれる者、此の外までもなしとなり、

一 昔儒者、儒者によき分かちわけけるは、それ人の身の上に分々相應に生まれて、其身になすべきことわざ、定まりてある物なり。これを大事とつとめ、ゆだんなくつとめ行ふべし。まづ大名小名にかぎらず、人の上は慈悲ふかく義理つよく、其身はおごらず、大事小事によらず、侍は常に身をいたはらず奉公し、大事の時には命を惜しまず用に立つべし。たとひいやしきにかぎらず、父母は教訓せんかん、男女にかぎらず人の子は孝行、老いたる若きにかぎらず夫婦は中よく、出頭不出頭にかぎらず、傍輩いふぎん懇、貧福にかぎらず百姓は農作、職人はその職を、商人はまされるやうにあきなひ、大智小智にかぎらず、佛者儒者醫者は學問、上手下手にかぎらず、藝術者はそれ〴〵のけいのう等なり。右見ればその大概なり。さていへ、取り分けていはば、侍の中にも、老、出頭、役人、近習、外様などあり。其の家の老は、萬の掟法度、出頭人は萬の御用、役人は其の役々、近習外様は、其の品じなの奉公等をもつぱらに大事と心がけ、油断なくつとめおこなふことなり。此の外の人の身の上に大事と心がけ、ゆだんなくつとめおこなふべき事は、右これに思ひよつて心得知るべし。なか〳〵しくて是れを略す。さて又人間として腹の立たぬといふものなし。若しなにぞ腹のたつ事あらば、先づ腹の

たつ心をおししづめて、直實の道理をよくわきまへ知るべし。理もたゞうすれば非の一倍と、けらうの申すごとく、いかに我道理なれども、あまりにいひつのるまじき事也。あたらの道理をきたなくいひのり候へば、勝ほこつてゐるにしかる物なり。さる程にそのみ大事にもならぬ事には、大かたに道理を云ひたるがよし、是れを直實の道理と云ふ。少しの事なれども人とあらそひ、口論を仕り候時、それがかうずれば、後々にはかならず血にうかされ、氣をみだらして、大事となる事を打忘れて、悪口雜言吐きあらして、身をあやまち命をうしなふ事おほし。さて奴人の手前ふり、物をもらひ申し候時分別肝要なり。いかゞ分別すべき上なれば、たゞ今此の物をもらふ事は、いかなる義理があるぞと、しかくも替るまじきや、但しいかゞあらんと、買ふ物を見るひとの内より、早々に事を思ひ出して、よく/\分別して、さなければ慾にひかれ、ともすればほうりまじき物をもらひ、恥辱あるべし。さて奴人の上に慾と云ふ物はなくて叶はぬ物なり、さる程に、むかうのあひての位より少し過ぎるほど禮をすべし。右此の四つをさへ、よく/\心へしみおこなひ、ゆだんなく候へば、あやまちもなく、愛つよからず、恥すくなし。これは我が役にもなき事にさし出でて、横道せんじやう致し、いかりたかるによつて、どこぞの裡に、かなはずしてこなひをいたし迷惑する、心得べき事なり。

一 書きる人の云へるは、當世の人々、貴賤、老若、男女、僧俗共に競ひしさわがしき、愛らぬやうにと

の二つを粧して、ちやうにうちそうし、其の鏡を見ては、かほかたちの[illegible]をあらため清むる、是れ外の鏡[illegible]てあるをぶなり。されば聖人天道よりうけたる所の心の鏡をば、何としてうちすてられ[illegible]はしますぞ、おろかなるのいたれり。

[illegible]日蓮宗のお上人、だんなの座につらはれて、とやせんかくやあらましと、思ひわかしの仇言の、立ちゐるくるしき海士少女、かわく間もなき衣手の、昔へ[illegible]たれに[illegible]しあわれ[illegible]とかきくどき、南無妙法蓮華の上に坐しぬれば、[illegible]だもかはらざりけりと、ある歌を思ひ出でて[illegible]、

南無妙法れんげの道になりぬれば出家も俗もかはらざりけり

[illegible]なる人のいはるゝは、女房み[illegible]かはれるか、又[illegible]とゐるに分別[illegible]いかほどもありかたちよき女房なりとも、其の女の父母は[illegible]邪心の胸慾人か、又はかざき者にて[illegible]にふけり人か、或は何と[illegible]るゝをやまひあるか、或は罪科に行はるゝ人か、又ふつき萬福のおごり人か、又は[illegible]にはかに富み栄へ時めく人か、右此の分をしんしやくすべし。さて又年ごろあひなれたる女房をさりのくに分別あるべし。父母に不孝か、うまずめか、りんきつよきか、ぶきようか、餘りに口ふかくか、ぬすみけあるか、右此の分はいかほど見めかたちよく、氣にあひたりとも、急ぎさりのくべし、さて又いかほど見めかたちあしき女房なりとも、堪忍してそひはつべき女房といふは、父母に孝行なるか、其の女の父

同兄弟[illegible]、道[illegible]やる[illegible]、其[illegible]、かん[illegible]苦[illegible]、後
にふつ[illegible]たる女房は、いか[illegible]めかたちわるくとも、一期添ひは[illegible]。
○昔さる人のいへるは、こなたかなたの家々、わたる[illegible]見るに、其[illegible]萬民に、皆
其の下[illegible]すき好み給ふ事を、すきこのむと見えたり。其の仔細は、上君の数寄を[illegible]れば、下
下までも、茶道具のせんさくの[illegible]にて、ほり出しせんと[illegible]心が[illegible]なり。あるひは[illegible]御好み[illegible]
ば、下々[illegible]吟味[illegible]なり。或は遊山、大ざけ、[illegible]、皆かく[illegible]
し、又[illegible]く仁義を[illegible]給はねば、又下々もよくふかく仁義をし[illegible]萬[illegible]な上[illegible]人[illegible]
無心[illegible]、下萬民なる[illegible]思ひ[illegible]實に[illegible]無慾に[illegible]はしまし[illegible]、慈悲ふかく義理つ
よく、武士道の吟味あきらかならば、下[illegible]又慾[illegible]す[illegible]仁義に赴き、侍道の吟味たし[illegible]な[illegible]べし。
誠に[illegible]あきらかにして下くらからず、堯[illegible]は[illegible]に[illegible]がひ、桀[illegible]が民は暴[illegible]従ふとある[illegible]や。
○昔さる人の云へるは、小隠はりんそうにかくれ、大隠[illegible]朝市にかくるる、といふ古き言葉あり。こ
[illegible]心は、小隠[illegible]しき世をのがれさりて、[illegible]
れをる人なり。大隠[illegible]朝市に[illegible]るといへども、[illegible]
びても汚されず、かへつて其の悪をし[illegible]、[illegible]、[illegible]る人なり[illegible]朝市[illegible]

とく、にぎはしき国所の事なれ共、それは心だに誠の道に叶ひなば、と申す事の候へば、我が身よくも
なくとも、我が心だによくあきらかにして、心身無為無事ならば、萬事千端安楽なるべし、さく/\
荒羅のうちに住みなれたりと云ふとも、おのが心身みだれ騒がしく、妄想悪念ならば、いつも戦場の
世の動なるべし。又後鳥羽院、後醍醐の天皇のみよに住みなれても、己がしんぐふくをさめあきら
かならば、いつも聖代賢世の時なるべし。

○昔もろこしにて、九千歳を經て長命なりし東方朔と云へる人、友だちの公孫弘と云ふ人、身の上おとろへすりきりはてたる時、文をつかはす。その文章にいはく、木槿はゆふべにかれてもあしたに榮ゆる、人も又長く貧しからじとかけり。此の心は、木槿と云ふ花は朝に盛んにして、ゆふべにはかれしぼめる物なり。常にはかなきたとへに申しならはし候へども、今此の文體に用ゐる心は、此の花あしたには盛りにして、夕にはほどなくかれしぼむと云へども、又あくる朝には、時たえて咲き榮え侍る。さあれば夕にはかれしぼむと云へども、天地の有らんかぎりは、毎朝花のさかりたえやらず、世の花よりも、しばさかりなり。其のごとく、人も又一たびおとろへ、おとろへては又さかりにして、盛衰あるにぞ、長久のもとゐとしてめでたかりけれとなり。おもしろき文體ならずや。

○昔さる人、九月のなかばに、淺ましきすりきりをいたはり給ひて、ふき酒を酒瓶に十分入れて、文

かたへ、贈らる、其の文帝に曰はく、此の酒は是れ風寒を避くる事殊にして、しかもうれへをはらふ帚にのせて遣はさる。遍事に曰はく、何となく南山にうちむかひたる折から、人情を翫ふ一たびには悦こ、一度は感じ、魏の武帝の短歌行をうたひ、やせたる菊が香を愛すと云ひ遣はして、其の酒を三ばい引掛け、また、すなる事は赤色の如し、いさぎよき事は秋の月の如し、一盃の樽前みづから獻酬す、百萬の悪魔降する事を得ず、爾るに陶を用ゐし此類と云ふべしと、林和靖が詩を吟じ、北のさかふくべをかたにかけしければ、此のごとくふくべこほ／＼となる、あら、ふしぎや、酒の十分にあるうちは云ふまでもなしと思ひ、又取りなほしてかたはらへ置けば、又こほ／＼となる。ここに思ひて、此の酒を除て器物へうつしかへたれば、あへて鳴る事なし。爰に心をつけ、世間をうかゞひ見るに、智恵の十分にみてる賢き人は、しかやうにむだ口をきかず、又皆目物を知らぬ愚かなる人も、しかやうにむだ口をきかず、然るに少し物を知りたる者が、聞ふ人聞いたる事に、あた物口をきゝ物しりだてをする。又書物をよみ、諸芸をまなぶにおいても、常にむだ口をきかず、未熟の不器用無筆口の達なる人もむだ口をきかず、時になま利口のあるか、あた物むだ口をきかずをういて、よしあしをわきまへとおしうり合へり。是非非なり。

○昔ことしの人の云へるは、人に意見を云はんにおいて心得あるべし、是非の分れぬ中ならば、人のなき

方へ引きよせ、しれ〳〵とつとむとおふべし、大方の中にては遠慮あるべし。されば他人の聞く所にて
して云ふは、質にはぢを云ひあたふるに同じ。すでに口ばしりいかゞ見つ、又一言出すれば返して、
或は悪口し又は責めて見つ、色々としたて有るべし。第一其の人の機嫌をうかゞひ計らふべし。又云ふ
べき意見にあらば、まづ其の内すゝ〳〵と悪き事をいひて言ひなほすべし、一度に皆をかぞへた、
云ひたてんと思ふはわるし。但し大事に及ぶ事は格別なり。それ聖賢ののたまひけるも、仁者は的に
射る如しとあるをや、返す〳〵意見の云ひ様しなく〳〵有るべし。第一心ながくいひとほすべし。むかし
こし呉國のみかど、胴慾無道にして、無理ひが事を思ひ立ち、かねては懇したしき中の國都の、楚
國のみかどを攻めほろぼさんとし給ふが、もし此のこと無用と云はん臣下もあらんと邪推して、腰に
さし給へる劍を引きぬき、御前の人々をずん〳〵に切つて捨て、のたまひけるは、「此の度思ひ立つ
所の合戦、無用と云はん者あらば、かくの如く切るべし」と、おもてをかへて怒り給ふ間、それ〳〵
も、悪しき事とは思ひながら、身命をいたはりて、意見を申す臣下なし。かかる所に郭恵といへる賢
臣おはします。意見を申して此の合戦をとゞめばやと思ひ、御前に参り色々の御物語の次に、ふと思
ひ出したる體にて、手をうつてからからと笑ひけり。みかど「何を笑ふぞ」と問ひ給へば、答へて「此の
世に愚かなる事こそ候へ、さる所の下郎、夫婦連れにて桑を取りに行く道にて、みめかたちうつくしく

年十八ばかりなる女の、只ひとり行くに行き會へり。かの男心うかれ、傍にそばへ立ちよりて詞をかけて、「是れは何處へ獨りは行かせ給ふぞ」とたはぶるゝと問ふ。此の女かほうちあからめて、「否いまだ定まれる夫もなし」と、少しうち笑ひたるかほばせは、咲きかゝりたる花に似て、たゞこひ心を進ますりければ、いよ〳〵心うかれ往し、歸る方へは行きもやらず、この女の後につき、先に立ちていぬる。さうすれば此の男の傍、いかに縱聞、さやうの事に不慣なるべし、年とる方も其の道にはあらず、こなたへ來よ」と言へば、男膽を立てて、「あらぬでなし」と面や、あからきたる女の姿、いにはぬりふさなする風かた、おのれによく見あきたり、今日ありし、永くいとほしさなどと申出しければ、其の上に女の思ひ入れて、いつくとも知らず突き込み、さて此の男はかのうらう〳〵と女に付き從ひて、女の東に行かれ〳〵と、道すがら詞をつくして行くほどに、さる在所に着き、あれは我がの宿、さる人の家に這ひ入りぬ。此の男も出でゐ、日暮ともまた相ても見え、待てども出でざるに、はやいかゞと思ひ過ぎぬ。さらば案内言ひ入れて、うちたへぬべきやうもなく、とかく〳〵と立ちめぐりて、ひたすらたゞ嘆きつゝ立ちかへり、もとの妻をたづねあはせたれども、されば怪しきとに思ひあれど、言ひたる事もあらず、是へ一たびまたまに迎へり、是れ心ざしおのれにも必離れきになて、必ずふかく不思議の縁よりと申しければ、此の件くみ〳〵きこしめし、「欲ひしく我かまま

ある數ひて、面白くいふものたりとて、合戰を相やめ給ふとなり。又晋國の平公に申すやう、凡そに君この給ひて、九重の御殿にて、筆詞にも及びがたきほどの大極殿をつくり、三觀珠玉をもつて飾り給ふ時に、是れを意見いさめんと云はゞ臣下もやあらんと、かねて法度を言ひ出し、若し此の事に付いて意見いふものを云はんものならば、一門ともにいくわにおこなふべしと定め給ふ間、誰人も悪事とは思ひながら、口をとぢて居るのみなりつ。しかるに荀息と云へる忠臣あり、御前へ參りて申しけるは、「我此のほど面白き術を習ひて候ふ」と申しければ、「いかなる事ぞ」と御尋ねなり。荀答へて曰く、「このはなの上に石を十二重ね、其の上に又鶏のたまごを九つ重ねあげ候ふ」といへり。みかど聞召し、「それは危き事かな」と仰せければ、「いや少しも危からず、是れにもまされ甚だ危き事ありと」、其の者ふすしからず、是れは百千勝れたる危き事こそ御入り候へ」帝「何事ぞ」と問はせ給へば、「さればに候只今つくらせ給ふ九重の御殿故に、萬民ことごとく苦しみつかれにうれへ悲しむ。是れは國家滅亡のもとゐ、あやふからずや」と申しける。時に帝はいかん坐して、「面白く諫めたることよ」、其のまゝ其の作事を相やめ給ふとかや。此の趣を心得て、主君、父母、親類他人の意見分別すべし。

○昔つれづれとふり暮したる、あま夜のしなさだめする人々あり、立ちよりいかなる事ぞと聞けば、「世の中に油斷のならざる物あり、わかき女のかほかたちうるはしきが、歌さうしなどに心を寄せ、

ひとぬめり〳〵たる手かきな女房をもてる年寄、良人の心こゝ」と語りいづるに、[illegible]人、さればこ
とよ、世の中の人の悪しとて笑ひあざけることも、其の人によるべし。町人としていはゞ[illegible]のふべん
をしたらんよりは、かひふりて逃げたるときけるは、はかりなく聞き悪し、さぞ見たらん人の目やす
からず[illegible]と云へるに、側なる人、さればいつぞやの事なるに、さる寺へ参りて和尚引き入れ給ひ
て、様々の御馳走色々の御料理有るに、[illegible]、[illegible]しものと、どしめく、こはいかなる事に
やと心得にて見れば、さもなき精進物の[illegible]、寺[illegible]精進だて心得べし[illegible]

○昔さる人の末の子、殊の外りこんなるありけり。父此の子を近づけ、「汝今日より学問[illegible]、聖
賢の道に入り、心をもあきらめ、身をもをさめ、時の誉を得、賢者に成り、先祖の名をもあげよかし。」と教
訓す。此の子申しけるは、「承り候。[illegible]、しばらく思案して云へるやうに、我等学
問をして智者と生まれば、[illegible]貴人高家に[illegible]、[illegible]御相伴にも出るべし、[illegible]
の[illegible]様[illegible]は[illegible]、学問に末[illegible]も[illegible]、いまだ年若ければ、遅しと云ふ事も
なし、[illegible]なれば[illegible]年の内死ぬると云ふ事もあるべからず。それ君子はもとをつとむ、もと立つて道
生ず、[illegible]孔子も[illegible]たまひしものを。」とて、[illegible]近づき、[illegible]、[illegible]、
[illegible]、[illegible]に心[illegible]、[illegible]、面白くなりて行き、[illegible]の事を[illegible]に

と思ひよらず、たゞ飲みに飲み付ける程どに、終には肺痕と云へる病を煩ひ、いよ〳〵[illegible]して死に付るとなり、誠に若き時の[illegible]、無分別なるとなりもしからずや、心得べし。

○昔もろこし漢の司馬徳操と云へる名譽の人あり、萬の事を問ひ尋ぬるに、たゞよし〳〵と計り返答せられけり。ある時人來りて云ふやうに、我こそ世上にて[illegible]名譽の人と取沙汰せらるゝと云へば、「それもよし〳〵」と答へられけり。また或人來りて、「我子世上にて[illegible]」と云へば、「それもよし〳〵」と答へられけり。又ある商人來りて、「[illegible]の子を亡くし候」と云ひて、涙を流して語りければ、「それもよし〳〵」と答へられけり。其の時徳操の妻の言へるは、「[illegible]道理の事か、總身名譽の人にて、遠くより來りて悲しみを告げ給ふに、[illegible]よし〳〵とばかり仰せらるゝは、[illegible]と思ふべきに、なぜ人の子の死したるを、それもよしと云ふ事あるべきや」と、いさゝか咎めければ、又「それもよし〳〵」と答へられけり。

○昔ある人の云へるは、「道心ある人は、一束の柴の庵にすみても、不足なき事なれ。いはんや[illegible]の住居をや。只あるに任せて頭陀を行ずべし。古人の曰く、たゞ衣鉢一つを貯ふべからずと。されば出家として、天下ある時は四海の寺社、皆以て我が寺社ならずと云ふ事なし。天下ある時は四海の[illegible]、皆以て我がでんばくならずと云ふ事なく、天下ある時は四海の飲食、皆以て我が飲食ならず

といふ事なく、天下ある時は四海の衣服、皆以て我が衣服ならずと云ふ事なく、天下ある時は四海の財寶、皆以て我が財寶ならずと云ふ事なし。誠に家ある時は、風火をも痛み患ひ、寶ある時は、賊までもいとひにくみ、衣服ある時は、時のせんだくをも思ひわづらふ。道心はたゞ身の煩ひなく、心の慰みたきやうにのみ心得したくすべし。つら／＼うき世の人をはからふに、道心おこして頭陀を行ずる人を見ては、氣違ひ物狂ひのきたなき卑しきとのみ思へる。それ頭陀の行は、清淨の活命として、三十二相のうち無見頂の因とす。頭陀の行とはこつじきする事なり。かたじけなくも、三界のたく尊にてまします釋尊は、月氏七百州金輪淨王の王位をふりすてゝ、頭陀の行をおこなひ給ふ。しかるに釋尊をも氣ちがひ物狂ひの、きたなし卑しきと申し奉るべきや。さりながら道心ある人の心中、妄想雜念ある人の心は、天地夏冬雪と墨と相違ある故なり。かの名たかき智藏禪師の、いにしへは吉野の行人にて、忠功人にすぐれければ、武徳年中に大國大官を下されしかども、あへて請けず。其の年四十にして道心をおこし、世をすて山中にこもり居て、むかしの友達共、一把の茅をたづさへ來りて、禪師のありさまを見て云へるやうは、猶も淺ましのふぜいかな、如何してかくは氣違ひ、まとひ給ふぞと笑ひければ、答へて曰く、されば我が氣違ひに、いまだ佛心佛性の本氣となれり。我が氣ちがへるは、終に安樂世界の榮華となるべし。今汝等が本氣と思へる慾心我慢の氣違ひは、いづ

いよ／＼おもりとなるべし。今此等が浮世夕露の榮華は、一朝の槿とおなじく、實やいへしかれば流ども朗世夢幻の妄の身を、かりそめに執着して、色にそみ聲を愛し、榮華をたのしみて、よろこびにほこる。是れすでに生死流轉の氣道びにおもむき、とのたまひければ、みな道心おこしけると。

○ある人の云へるは、唐土、天竺、からうい、なんばん、その外遠き國々島々より我が朝へ渡り來る萬の物の中に、書籍、藥の外は、わたらでもくるしかるまじきか、無用の物をわたさんとて、南蠻の商人どもあやふき海をわたり、やゝもすれば身命をうしなふ、ふびんなり。それ今時の人々、寶物とてもてあそび秘藏するたぐひは、みな遠き國々島々より渡り來たる物、又は年ふりたくひのなき物共なり。右のうちいづれをか指して、眞實の寶とや定めん。金仙老子の詞にも、えがたき寶をば尊ぶまじきとのたまへり。むかしに宋といへる國あり。その國の愚人、あやめなるもひとつき石をもてり。燕石と名づくる。秘藏ならびなくもてなし、庭のつき山のかたはらにすゑ置きたり。此の石雨ふれば燕となりて飛びめぐり、雨はるればもとの石となりて、もとの所にすわりたる。まことに愚人の身としては、ふたたびかぎりなき寶物と、秘藏しけるもことわりなり。されどもよく／＼がてんせよ、たとへば其の石つばめとなりて、飛びめぐりはねあるきたればとて、何の益かあるぞ、人はたゞおのが身にあたひ限りもなき寶物あり、よく／＼秘藏せらるべし。

○昔さる老功の人の云へるは、合戦の時馬上にて太刀組み候はば、かならず切るべからず打つべし、かゝるがゆゑに、太刀を打つと申すなり。太刀は其のびて軽きがよし。馬はちいさくさゝかんにて、乗地道を肝要とせよ。物おじする舟橋などは、きれこみ、のりずまひを大事ときらふべし。萬の毛のうちに、河原毛とぶちとを忌むべし。

○昔さる人の云へるは、「かの大悪逆人こそ、此のほどはちと氣が和ぎて候へといふ。さばなる人、「いや〱十の物二つ三つやはらぎたりといふとも、われ〱はいまだ心をいたし、心やすくは申し談じがたし。其の謂れは、かの大悪逆人は虎狼の如し、其の虎狼が十度に一二度人をくはずとも、飢食心無異にして、人をくはねとは思ひがたし。其の虎狼はかねての大食にあきみちたる時、人をもくはぬなるべし。然るをあやまらおほいみこそ心無異なりとて、牛馬のごとく心やすく思ひなば、いつぞのほどかあやまち有りて、後悔甲斐あるまじ。古語にも曰く、愚者も千慮するときんば一得あり、智者も千慮するときんば一失あり。さればさばかりの善人なりといふとも、何ぞあやまちもなからん、龍に逆鱗あるがごとし。」

○昔さる人の云へるは、人をころすべき其の理もつともならば、千萬人をころすとも苦しかるまじ。縦ひまた其の理なくして、一人なりとも悪逆不道なるべし。愛にたかる物の上手あり、あるとき二下

人も切あつかふ。一日冬の比なるに、貴子御寺へ参り、昔々の物語りの時、僧の曰く、いかに其方はやためし物に無用にしまはせ、罪つくりの恐ろしき執化なり。此の人答へて、「少しも苦しからず、目前と申し又罪深き共にも頼まれ候」と申す。此の依子も、ともにて候」といひて、暫くありていかにあの樹に雪積り、枝重げに見え候、拂ひてたびてんや」と仰せける。心得申し候とて樹陰に立ちより、ふりおとしければ、かしらや袖の上に雪おほかかり候間、打ちはらひ候へば、此の僧御らんじて、何れにはらひ給ふぞ。それがしの頼み申し候間、それがしにこそかかり掛るべき事なるをやことと有りしに、はたと行きあたりて、それよりためし物をやめてけりとかや。是れにつけて思へば、いかに人をころすは罪科なりといふとも、朝敵をほろぼし、悪逆不道を退治する事は、いく千萬人なりともくるしかるまじ、一人半人なりとも、ころすべき道理なくば、その過重かるべし。されはためし物においては、もつともころすべき道理なれども、侍のあまりにすき好みて切るべき事いかゞあらん、しかればころすべき道理のうちに、又切るまじき道理あり。

○昔さる人の云へるは、いかに孝行をするといふとも、おやの跡を取りたく思ひ、或は財寶に心をかけて、つくり孝行をするは、孝行の中に不孝行あり。又忠功をするにも、知行をとりたく思ひ、或は出頭をしたく思ひて作り忠功をするは、忠功のうちに不忠功あり。又學問をするに、此の學問のかけにて金

銀をもらひ、或は諸人にも用ゐられはやと思ふは、つくりの學問にて、學問のうちに不學問あり。されば人の子としては、孝行をするはずよとばかり思ひ、他念なく眞實に孝をすれば、その孝行のうちにおやの跡目継ぐ事、諸財寶をとる事も、皆こと〴〵くこもれり。又人の臣としては、忠功をするはずよとばかり思ひ、他念なく眞實に忠功をすれば、其の忠功の中に、知行をとる事、出頭する事も、皆こと〴〵くこもれり。又人の弟子としては、學問をするはずよとばかり思ひ、他念なく眞實に學問をすれば、其の學問の中に、金銀をもらひ人に用ゐらるゝ事も、みなこと〴〵くこもれり。こゝをもつて天道と云ふ、よく心得べし。

○昔さる人の云へるは、かへす〴〵諸侍の牢人となりしすりきり、餓ゑて死ぬるかなしいなりと て、賦をとらぬ心もちなるに、あたら物をすぎたはり、あとさきふまへずくるしきお家へありつき、後悔遂ぐし給ふべからず。天道の大慈悲に、肉の命をあたへおかれし給はぬなれば、あながち餓ゑて死ぬる事も有るまじ。若し又うゑて死ぬる仕合ならば、それを天命かぎりと思ひ定むべし。うゑて死ぬるはすりきりの牢人、今の世の牢人は、いかにもかぎるべからず、それ〴〵のおさぶらひ衆、すりきりはしのぎかねたるに、以大屋に家をかけ、腹切り死ぬる数多し、いらざる事と思ひ、其の主家其の侍の道知らず、これは悪きお家といふは、身代ありつきても知行すくなき[illegible]。其

のおもしろき程の扶持をくるれども、あしき老人にすぐる給にこめて、其の後加増なきことは
れども、其の國郡の第一の賢人、國にはそれ〳〵おもひ目をつけおける村里の、すぐれたる者は、其を尊崇
し、師傅として奉公させしく、無理なる事のなきやうに法度を守らせ、其の身をも慎み、行の吟味を細か
す、仁義にそむく罪を許さずして、たるかはこれに身を見立て、奉公つとむるかれ、なつかしきまゝに
いとまこへば日本國をおよびまはりて、道理なきまで、此の外わるき事あるべきには、高禄の事を貢
て人をせつもおよびがたく、阿部下前の才智もつく〳〵かなひがたかるべし。これはせにさき御家をも度々開き
つくれりて、能く〳〵吟味をなし、油断なく種々とかせぎ有りて付く〳〵た
目許する人の云へるは、人をよみよひ申すに、其のしたおほしといへども、第一帝人の中より、三価
僻かんとほすべし。おもうしきのくれ〳〵、廊下便所のすみ〳〵まで隠うちはらひ、手洗水せい〳〵
とたゞまはりて、縁にかけ物をかけて、花さびしく香ひしめやかなることをおくゆかしけれ。此の外四
書七書、あるいはその養生論、つれ〳〵、甲陽軍鑑、硯料紙の置きたるもふしぎて勝部の事、櫻折
敷、おのれのなんにましと延めて、引いて色々茶菓の湯道のかく、案じて懸りに住居すべし。鼠をなか
きこのみ〳〵に、折ふしはすゝき痛めたるもよし。酒はきこえにまかせて、但し少し強ひたるも苦し
からず。されながら珍客老客、或は若衆などには、つようすゝむる事いかゞあらん。酔ひてはいみな

る人らここゐえだれ、ぶふまどさことゐもぶひわら、さやうざもみだりなり。されば其の客人に、わざと馳走あたふるにあふすや、いはんや酔狂など出したらんは笑止なるべし。たゞふるまひの其催と云ふは、春夏秋冬に心をよせ、ありやうにありはこれなく、いかにもきれいな事をもとして、まさかさ肴にも、あたらしき乏を用ゐて、萬のものかたは少しづゝ入れて、一杯に心ん事なかれ。但しものかたにてもし、屏首は祝ひかるべし。酒はこやうほど、毒論のきかづさいかゝあるべし。さりながら梅花などの一重なるを、一輪づゝも思は見えたに論ずきたるは、四季共に花もありてかづきにうたぶはあるき、面白のなるべきか。殊に人柄に亭主として、おのおかすきこのむ物をもつて第一としたん、思ふ様ふにたべたとや。たゞ客人のためにを料理肝要として、塩梅専用たるべし。亭主ぶれ[illegible]に、勝手料理のやに稀嚴して、みてかわの引物二度ほど、きしきを喧々とりもの、た。ここ客人亭主ぶるには、ゆそのともありつゝ酒すしとい[illegible]、亭主はことの酌を相手とすらむ、さしき静かなるべし。

昔あつこし瑰といふ国の里人、山田をかへす時、なりのおもしろき石を掘出しつゝあやしき物とは思ひながら、石にはありけれども、ことはかへ捨てたり。そばなる人此の石をひろひ家にかへり、旅なる輪の玉、りーて、えぐやかにたりき、秘蔵しもちけるを、ここぞ聊きおよび給ひ、此の玉を買ひ

となり、無價寶珠と名付けて、御秘藏こなうあいさるのみならず、あまつさへ下されたり。さればかの南人、千金をすてたるとまうすとは、寶を見しりたると、見しらざるとの謂れなり。是れに付いて思へば、いかなる人々も無價寶珠とて、値がきりなき寶の珠を、一つ宛もたぬ者はなし。此の玉、にもれざるかにみがき、秘藏しもちて、買手のある時を待つべし。此のたからの玉といふは我が本心なり。工夫、思案、分別、才覺、利發、武備、智慧なども、みな此の一源より涌きいづるなり。さればあざやかにみがき秘藏しもつならば、今の世間にも見しりたる主作のあるべし、さあらばかならず買ひ取り給ふべし。買ひとられ候はば、ひぞうちようあいせらるべき事、何の疑ひかあらん。誠に大聖孔子の御詞にも、我はあたひを待つとこそのたまひけれ。此の段特に諸牢人の心得らるべき事。

一、昔弘法大師諸國を修行ありしに、江州すりはりたうげにて、一人の老翁が斧を石にあてて、ひた物すりまはるあり。弘法御覽じて、「いかに翁殿、其の斧をすりて何にし給ふ。」翁答へて、「針に仕る。」弘法からからとわらひて、「扨いつの世にか其のをのをすりほそめて針にし給ふべき、其のをのよりはそなたの命こそ、早くをりへるべけれ。」翁頭をあげて、弘法の御かほをつくづくとまもり、「なう御坊、其の心中にては學問なり難し、それ世間の無常老若さだめがたし、其の上事を勤めんに、命期しられざるとて、空しくやむべけんや、さあらばさいつ法師の修行も無益なるべし。」といふに、弘法お

つよ心すゝ給へば、この翁、我は是れ此の山の神なりとて、光を放ちて飛び給ふ、すなはち大明神是れなりと。

口惜しき人、人みな生れたる事あり。されば學問をして物をしると云ふ事は、なりがたき事なるべし。さばかる人、いかにも學問をして物をば知るべけれども、心に得道して行ふ事こそなりがたかるべけれ。又いはく、さいやう／＼我等ごときの者は、よろづ善には遠ざかりたく、よろづ悪には近寄り易し。よろづ悪には氣根も出るが、よろづ善には退屈し易し。よろづ善には鈍なれども、よろづ悪には器用なれば、されば先づ學問をして物をしると云ふ事は、なり難き物なるべければ、其の上まづ物を知りてこそ、心に得道しおこなふ事も有りなんに、さはなる人、いやしく我が心をさへ學問をさせねば、たとひいかなる人なりとも、物をば知るべけれども、其の學問のごとくに心をまもらせ、おこなひたゞしいふべき物はなし、されば言を知る事はやすうして、得道して行ふ事はかたき物なれ。」

昔さる人の云へるは、人はたゞ學問に於いて身をくだき、本心の玉を磨くべき事肝要なるべしと。されば昔もろこし卞和と云ふ人あり、或時此の山にて寶の玉を得たり。且つ時の帝王に奉りけるに、臣下は石なりと申す。されば僞りを申したりとして、左の足を切られて、其の後又武帝に奉る。又臣下も、石なりと申しければ、又、

けいへ偽りを申したりとて、右の足を切られて、楚山の麓へ歸り、なく〳〵年月を送りけるに、文帝御位につかせ給ふ時、又この玉を奉る。玉すりて見せ給へば、「無雙の寶玉なり」と申しければ、則ち磨かせて御覧ずるに、誠比類なき寶の珠となる。則ち和氏連壊の玉と名づけて、御重寶なり。あまつさへへんくわも愁憤を散じ、高き位にのぼり、御恩賞あつく給はりけるとかや。されば玉を見知りて重寶とする名人は、身體をば破損せらるれども、玉においては破損せず、其の上いかに卞和が玉なりとも、文帝みがかせ給はずば、寶とはなりがたし。眞其の如く、人も又我が本心の玉を見知りてみがかずば、いかでか善人となるべきぞや。されば古き詞にも、玉磨かざればたからとならず、人學ばざればあきらかならずといへり。

〇昔古つはもの二人の子をもつ。其の年十四五より主君の御前にめし使はれけり。或時てがら高名ならびなきおぼえの兵、御成敗なさるゝに、此の子を討手に仰せ付けられたり。此の子やく〳〵とうけおひ申し、御前をたち宿所へは歸り、親に告げ知らせ、くさりかたびら肩にかけ、急ぎ走り出づるを、父門外まで追つかけ、「いかに汝くさりかたびら忘れそ」と云ひければ、「心得候」とていづると、はや何のやうもなく切りころして、しるしの首中間にもたせ、主君へ御目にかけたり。扨もこの父がくさりかたびら忘れそと、云ひをしへたる仔細は、總じて敵にむかふときは、かならず心お

[illegible]して、よろひくさりなど着したる事を、ほつたと忘れて、思ふ樣ふみこみ切りつくる事ならず、さ
あればあやまちもあり、しかるに我らはこのひくさりを着たる間、いく刀切られたりとも、大事ある
まじき[illegible]、心がかうになりて、思ふさまふみこみ、切つてすつる事うたがひなし。誠に
此我一丁の[illegible]たへ、侍たる人、是れをも又忘るゝ事なかれ。
[illegible]水無月の、むしくくと暑かはしき時しも、或やせだんな淨土寺へまゐり、上人に向つていひ
けるは、「いかなれば在家と申すは、あつければ猶あつく、寒ければいよ〳〵寒きにたへかね候に、
羨しやお寺がたは、かく涼しく候。」と云ふ。上人の曰く、「されば[illegible]凡人に、八寒八熱焦熱大焦
う五つのほのほ、紅蓮大紅蓮の[illegible]責[illegible]難き事を、佛は說法し給へり。たゞ在家のあつさ
に堪へかぬる事は、六塵六慾妄想妄念のおもひのほかに、[illegible]なるべし。い[illegible]に寺にて
あればとて、夏冬の寒熱を天別つべきにあら[illegible]と申すは、六塵六慾を拂ひ捨てたる
身なれば、おのづから夏も涼しく候。されば[illegible]淨土へはなれぬ寺[illegible]涼しきに、い
はんや[illegible]如來のおはします極樂淨土[illegible]、いかばかり[illegible]おほしめし[illegible]、急ぎえんり穢土ごん
ぐ淨土と念じ、一心具足して佛になりたし[illegible]、[illegible]つくづくと[illegible]、つぶ
りを[illegible]おふ[illegible]、[illegible]つらき[illegible]、あらいやの佛になり事や」と云ふ。上人[illegible]心

ぬるにこそ、當來の苦を苦しみにも沈み給へ。[illegible]の事[illegible]との心[illegible]に。」と問ふ。上[illegible]邪答へて「あれ御らん候へ、佛壇なる御本ぞんは、くゐ米穀の[illegible]にあり、菜のこのみ得べからず、ほやしぶ茶をたむけられ、やゝもすればまつかうをもつて鼻[illegible]ふさがれ、せばき所へ押しこめられ、きうくつにおくしく堪え候。いかに涼しき淨土と御申し候へども、見及びたる體は、在家に[illegible]しほあつさうにこそ思ひやり候へ。」と、あいさうなげに申しければ、上人の曰く、「いや／＼あの佛壇の體はかりにあらはし、衆生みせしめのすゝめとせり。眞實のみだの御國は安養世界として、[illegible]も極樂と書き候ものなり。」とて、一首つらねてけうげす。

　極樂は涼しきすみかなるものをあつき苦界を何したふらむ

此のおせだ[illegible]承り、さあらば返歌いたさん」と[illegible]、

　夏さへも涼しき住家なるならば冬の寒さに迷惑やせむ

○昔ある獵師、おく山へ狩しに行き侍りけるに、とある谷川のあさ瀬に、鱒と云ふうをのゐたりけるを、猪のしゝと熊のしゝと守りをりけり。熊のしゝ心やすくとりたりければ、飛びかゝつて食はんとするを、ゐのしゝ牙をならしてついて蒐る。くまのしゝも鱒をすてて飛びかゝり、弦をせんどと戰ひけるが、後にはつゐに折れ牙にあひけて、もろともに勢ひつかれて死にけり。此の獵師大きに悅び、二つのしゝ

勝もなきときに、取りて歸りけるといふに付きて思へば、對々の大將國をあらそひ給はんに、いづれも心の良きに任せ、互にかけあはせ、無二無三かたさきの合戦あるべきに、どれもおとらぬ大將なればば、千騎が一騎になるまで引き退く事もなく、[illegible]勝負もつかれぬべし。かゝる時[illegible]おりて、かたはらの[illegible]へまちかけたる大將、[illegible]打つていづるならば、何の様もなく勝つて取られ給ふべし。[illegible]出つる大將、[illegible]二つのしゝはかせんし給ふ二人の大將、しゝのつめと牙とのをれ[illegible]たるは、[illegible]二人の大將[illegible]かたぶくと、なぞらへて知るべし。さあらば大將として他國をうつて取らんならば、天運をはかり時をまちて、其の間の仕度には、諸侍に[illegible]、[illegible]人、[illegible]、仁義を[illegible]、百姓[illegible]なやみ、思ひつくやうに[illegible]、[illegible]有るやうに仕置あるべし。若し又他國より合戦をはじめ、わが領中へと[illegible]、武將、諸卒[illegible]て、國に心[illegible]、[illegible]にうつて取るべし。

[illegible]の人のいへる事あり。[illegible]ひとならば、傾城に心を迷はすべからず。けいせいとは遊女の事、[illegible]申したるげに候。けいせいとは唐土にてさへ、楊貴妃、西施、

寃姻なりとこそ申しつれ、日本にてはかたはしをのみ申しつたへ候ふ。しかるに當世の僧俗、貴賤、老若ともに、此のけいせいに蕩されて心を迷はし、後には身命破滅する。是れ不忠孝、不禮儀、不智仁のいたれるなり。いかにと云ふに、よき人の臣下としては、不奉公になりすり切りはて、武道具もたず軍役つとめ難く、風情物よわくだてあき、諸朋輩のつきあひうとく、不忠功のうつけもの、たはけものと呼ばれぬれば、知行召しあげられ、あはうばらひに追放せられ、あるひは成敗せらるゝ。扨又人の子となりては、父母の日比たくはへたる金銀を失却し、いさめに背き、夫婦の中不和になりて、子をもたず子孫をたやし、累代の家名を絶滅し果りぬ。げにもしく、孟子にいはゆる不孝なる物五つ、後なきをもつておほいなりとも見えたり。あまつさへはてには、不孝行ばかりのあはうものとよばれて、父母の勘當かうむり、諸國に流浪す。しからば身を滅ぼし、命を失ふうつけたはけの中立、けいせいぐるひに過ぎたる事なし。とかくけいせいと云ふものの、むさくきたなき事をよく分別し心得ねば、思ひやむ事あるべからず。かるが故に永々しけれども書き付けはべり。たとへばけいせい狂ひする人は、大身、小身、町人、百姓、僧、めくら、ゐつた、乞食等あまたの食らひ殘し、呑み殘したるものや、よりあつてこねあはせ、一段うまさうなる料理なり、くひ給へとて出したらんには、喜びよりもくはうずるか、但したれ人なりともむさしきたなしとて、腹をばたつとも食する人は有る

まじきたの。蘇武がごとく、けいせいまけへるものに、うにかこた、色よき小袖ノ着かざり、あぶら
よあく〳〵もねくるく、蘭化粧に花車をかして、しやらたる風情をおもしにし、さらば折見はうらくし
けなれせく、蜘蛛は藪土にもおほ劣れり。其のいはれは、白粉、黒黛、てんかん、まかずき、くつれ
へほ、豆つた、こうしき、めくら、坊主のたゞ口叫、わざ〳〵しきをばうち、もねて人持て渡契り
をかはし、七百年八百年なとたはふれて、ひよくの枕をならべ、かいらうの肌を合はする事、いゝ千
萬人と云ふ數を知らず。されはかやうに、むさくさきたなく卑しききの異か、抱き合ひとのそび、ことと
をかゝて見苦しきふるまひしたる女を、むさしと思へるせんぎもなく、けがらはしきといへる吟味も
なく、たゞしなぶりれし鼠なつくし心を迷はし、妻女のごとく契りをかはし候はゞ、帝王將軍ひと
しき身、佛神同じき心にて、あまりにおそろしくいたましき事ならずや。たとへば五體に糞をぬるた
云ふとも、一たびあらへばきれいになる物なれども、けいせいの心中のけがらはしさ、かばと流ひす
ずでも、きれいになる事なし。但し年たけこの以後は、浙ふりに合しよせられ、老醜をかくしな
ぐさまんため、並すまひこうた、三味線などいたさせ、ごがなとあんしてよからんが。但し老いて
は一しほ慳心もふかまると候へば、おこのもやせん、たゝ老若ともにせぬにはしかじ。宜に〳〵水に近
よればぬれやすく、燈にちかづけばうるほひやすし。善にうとく惡にはしたしむ、ことく心得べき事

なり。

目利きる人の云へるは、それ人の主君としては、男女、鳥獣、藝能、財寶、道具、それ〴〵にいたるまで、是れを用る。是れをもて見およばんに、よきほどあるべし。其のよきほどが過ぎたるは悪しきか仕り候へば、みな悪事となり申し候。其の仔細は、たとへば分別、さいかく、智慧、はしれある者人みなめきゝして、家の老と定め、萬事のしおき、其大小共に、其の人に打任せ、國家を治めさせ、崇敬させうし、御身は何事にもかまはず、らく〳〵と御座候はれは、一度ときまらうにおはりのおほせ、是れまた悪事なり。其のいはれは、取り立てもちゐるたとふ人こそは、さばかりの善人なれども、其の家の諸侍をはじめ、出家、町人、百姓以下までも、我が主君は萬事を、老次第なりとて、其の老ばかりをおそれつゝしみ、主君をばたゞ、うつけのやうに輕しめあなどり申すべし。其の後にて、御威光うすくなり行き、其の老しれての跡、かならず國家みだれなるべし。これ則ち内の者を用る過し給ふ故なり。たとへば雨と云ふ物は、よきころにふれば、國土をもうるほし、五穀をもおひいでて、誠に養ひ得ては、花の父母たりといへども、ふり過ぐる時は洪水となりて、國土をやぶり、五穀を損亡するがごとく、いはんや不目利きにして、悪しき人を御取り立て候て用ゐたまはば、國家滅亡うたがひなし。さればまた老まかせにするはわるいとて、御自身御しおき掟あらば、萬事どまか迴りか

林にち両をかれて、諸人の迷惑云ふ計なし。是れ則ち邪欲を用ゐたるますといふて國家滅亡のもとゐなり。ならる問答人がまとふ用ゐたまほんにも、よきほどといふが有るべし。扨て其の云ふものには、子をまうけ三歳、名字なるを、子孫長久ならしめんが為ばかりなるを、賢慾にふけると、ゝあにその縁に云ふ[illegible]に、かならず其の女房にたぶらかされて、無理ひがことをとりおこなひ、悪道重罪して國家を破滅し、或は國家破滅せしむるに、貪欲と云ふ病を生じ、命をうしなひ給ふ。是れすでに二猶のこる過し給ふは[illegible]たとへば酒と云ふものは、すこし呑む時は不老の薬なりといへども、のみ過す時は五臓六腑をば損じ、命をもうしなふごとし。されば二猶はいらぬ物と云ふその給はゞ、御子息惣領に給ふ[illegible]斷絶し、其身のみやう字を絶し果し、國家滅亡うたがひなし。しかる間、身々郡司のあるにも、とまりといふ不断ごとし。又三寳なども給はりたてまつらんにも給ふ人は、いかなる不道の人と[illegible]其のいはれは、慈悲、正直、簾直をよく聞き給へば、三寳はなれぬものにて候。されば三寳にくらぶる[illegible]は、へ持つながらも、其の事用によつて[illegible]に、是れ則ち用ゐたるすと云ひて、欲の為となる事なり。されば[illegible]ふとんきものにも、あだと取らで、使ふまじき前にも、なおと申しうしなひては、すなはち欲をはなれて[illegible]ることとし、是れ則ち用の過すと云ふ。しかる間に謝て[illegible]をなはば何も、ふさはどいかあるべし。又萬のけいりうも、あまりにする事しなば、み

ならず其の藝能に心ざしをうばはれて、身命の大事をば忘却する。たとへば手跡は諸藝萬能のうはもりとして、十能七藝にすぐれたりといへども、侍のあまりに物かきたてもよしなし。もろこしに王羲之といへる人は、さばかりの大賢人にておはしけれども、古今にすぐれたる手かきゆゑに、羲之が筆蹟、石にゑる事三分、と申しならはして、その賢人君子たることをば、たれ人も取沙汰仕らず。さらば物をも書くまじとて無筆に候はば、おつし文盲あきたりめくらのごとくにて、人間の諸用かなはず。又馬をすきこのむ事、侍においては一段とよき事にて候へども、是れもあまりにすき過し候へば、ばくらうのやうに罷りなり候。唐の伯樂と申せし大賢人をさへ、今の世の人々は、血針藥飼をする馬醫とばかり、とりざた仕り候。さらば馬をもすくまじきとてすき候はずば、侍の道すたり、中間草履取のごとくにて、侍の中悪なし。また詩連句などもあまりにすき好みて、よくつくり候へば、諸家の出家がへりのやうに思ひあなどる。又歌連歌なども、あまりすき好みてよくよみ候へば、公家のなりさがりかと、やはらかに思ひなし、ほむるやうなれども、武士道にかたに思ひあなどる。さらば詩、連句、歌、連歌をもいらざる事とて心得ねば、底意つたなく萬物に心うつらず。されば浮雲流水にも心うつりて面白きは、詩、連句、歌、連歌の道なるをや。誠人倫おほしといへども、公家武家と號して、此の道をまもり學する、いにしへの武篇ほまれのさぶらひ、いづれか詩歌を心得

さる、又鷹野をする事をいはれあり。主君たる人は、朝夕うまい物ばかりを飲み食ひ下さいし、樂々と御座あるゆゑに、身體やはらかに、腠理ひらけ過ぎ、風寒しのぎかねつゝにおかされやすくして、足なえて行步叶ひがたく、臟腑滿ちて虛損しやすく、萬病のもとゐおほし。然るに鷹野をして、かけまはり走りありけば、五體すくやかに、心氣まへだに、諸病おこらず。そのうへ國郡の境、平地、難所、山川等を見おき、兵亂の計畧をもつぱらするんため、或は土民の盛衰を知り、國をもさめんためなるを、當世の人々は、遊山などするばかりと心得て、きびしき法度をたて、小鳥の一つも取りたる者あれば、はりつけ火あぶりなどに行ひ、親類までも悲しみ迷惑す。されば百姓共は、田畠を鳥獸にところ〳〵ほろぼされても、法度をおそれ、鳥獸を追ひたつる事もならず、田畠みな荒れはつるゆゑに、年貢の納めにくくなりては、とかく責められてうらみに逢ふ時に、百姓共も困窮に及びて、鳥獸のまことにしげくなりて、年貢のたよりとなし、又、鹿、猿、猪などは皆の作物を荒らしてつくらふなど、うちあれば世間にも大勢すくなく、人は多しなりて、物毎に高直になりて行きて、毎年なをされようれへ絶えやらず。其の上鳥をとる事法度なれば、みな人なに鳥はすくなし、又、高し。みだり盜賊もあれば、いかにとして盜みとりて、商賣しこそすれ、愚人共の淺ましさは、命をかへりみず鳥をとるゆゑに、はりつけ火あぶりに行はるゝもの多し。是れみな鳥獸をあまり憐むゆゑにことに

す、たゞ野をわろくするを好み給ふ主君のひがごとのゐなり。さらば鷹野をすまじきにてこそ召されけれ、有に申す。細く諸の品々出來し、國所の様子、士民の盛衰を知らずして、國をおさむる事はいかゞあるべきや。しからば用がり等も又是れに同じ事なり。さあらば用る過ぎと用る足らずとをさとる心、よくよく分別あるべし。誠に周の文王の御狩場は、四方四百里なれども、萬民ひろしと思はず、けつくせばきと申してうらみ申しけるとなり。仔細は孟子にのせたり、御らんあるべく候。所詮たゞ萬事萬物に付きて、用に立つ所が有るべし。其の所用の善き過不及なしに、分別もつともなるべし。され學問と申すものは、人間において極無上の物にて候へども、第一不奉公になり、又は武士道おろそかになのやうに思ひなさるゝ。げに／＼大聖孔子も、行に餘力ある時は、もつて文をまなべとこそのたまひけれ

〇昔さる人の云へるは、他國へ行き候はば、まづその國所の掟法度を、やどのあるじに懇にたづね問ふべし。其の謂れは、今此の江戸へ日本國中より、主君おやかたに付きしたがひて參覲いたされ候人人町屋にやどかりゐるものあり。然るに江戸の法度に、火事出來のときは、たとへば我が荷物なりとも、不案内にてあたともちはこび候へば、火けしの役者、町奉行、よりき、同心等うちすてにいたし候。さるほどに兼て案内をたづね問ひて、其の覺悟いたし候へば、あやまち是れなし。

○昔さる人のいひけるは、人の道にてはなしみせんと思ひ候はば、まづ我がおのれのうへにて、一はなし噺しておく聞きて、さてはなすべし。歌物語などせんには、歌道を心得たる人のかたへ、まづうたひよしあしを、心を詞をかきあらはし、尋ねたるうへにて、たとへば一字一點のがれは歌の歌なれども、歌のさまわろきなりとあぬは、いと興もなくて、心うちならぬへたなくて、大に恥をかき、又おそろしき事あやふき事、いかでか興福なと申しさぶらひし話のそりし難つけるを、真實のさやる事もれんらしてかく有るべし。

○昔さる國に、金銀不足なく、心正直にして人からやさしく、慈悲の心さしありて、慈心ふかき深からざる町人ありつ、ある時ある御家へ參りけるに、此の町人をすこしたる小わきざしを見ばや、と、才覚の侍、家中の衆なかにも、お前々御前にも、とて見せ參らするに、一柄きざし脇差なて、是れ備前の用に立つべきことも、儀式の人にはに、この町人、是れと名づけ申して、いろいろ名代の寶物にて候、さ申して、皆人、其の事とはいかなる謂れにて、名づけられ候ぞ、と問はれければ、町人、道らず、武器の事ならず候へと申す、皆人は、わけなくもなさけなし、其の時此の町人申しけるには、この御脇の差へ給ふでおからず、いざ御殿様たちの御道具にもおとり申すまじきは、只今の用心の上を主蔵候に、一振の脇差を入れ、よる道具をもいたし仕り、高利をとらず損をいたさず、御かたへ入りもすべし、世間商賣の時にても、何かの事ありの身にて、金銀をのみこととなせず、人はただこれ申さる

こそ、町人の心がけ嗜みとは申しつれ」と語りければ、皆人感じ給へり。誠に此の一言、末世、町人たるものの心得なるべし。されば此のごろの町人どもを見るに、皆侍のまねして、二尺あまりの大わきざし、三尺あまりの大がたな、てりかゞやくばかりのいだしこしらへ、蒔土文字、はてはし、男道の心がけ笑止千萬なり。實に〳〵石やの何兵衛とやらいふ町人、侍の眞似をしたがりて人さにおごり、さる侍の娘を嫁にとり、おのれが子を侍のやうにこしらへたてゝ、侍皆無人にふるまひけるが、町人のうたてさは少しの慾に迷ひ、父子ともに首をきられて、路のかたはらにさらされけり。まことなるかな、狐よく化けて人をたぶらかすといへども、いつぞの程に化けそんじて、かり人の手にわたる。猿猴よく人に似たるといへども、口に物云ふ事あたはずと、實におごるもののひきしかたよりは、町人ばらの上にも有るをや、つゝしむべき事なり、おごるなるは天道にくみ給ふなりて缺く。

一　昔よき人々の寄合を見るに、いかにもいんぎんなるかとすれば打ちくつろぎ、したしきかと思へばうとく、聊少なきやうにて、しみ〴〵との物がたり、いかにも吟味強なる出合にて亂れず、なつかしきはなしあれども、ひがうならず、是れぞよき事にやあらん、行末久しく日々にあらたに中絶なし。されば我等ごときのつきあひは、遠近のたゞきも知らぬ人なれど、一兩度はなすといなや、千年もなれな

つびれる心體にて、ひあうなつくしはぢをあらはし、慮外をかへりみず、危きにがじやれごと、つらをあかむる物あらそひ、其の心體の善惡をも知らずして、よき人なりとほめちらし、無理なるひいきをして、身命をもいとひ惜しまぬふり、ひとへに親子兄弟にもすぐれ、毎日毎夜よりあひ、食ひもの好み、さうこうの噂、若衆女房のよしあし、人の賭事、賣買の沙汰、うでだて、藝能の自慢、諸勝負事、不行儀るたのかぎりなり。されば、きのふけふまでは、ぴはくれんりのともだちも、すこしのことに中絶す、いはんや慾とくの上においては、水魁火のかたきとなり、身命あやふし、つゝしむべし。

口昔さる人の云へるは、貴賤、老若、男女ともに、金銀たくさんにもちながら、一ぶいもたぬふりをして、人目をつゝしみ忍び申され候。たとひいかほど持ちたりといふとも、誰人ありて無理ひがごとを企て、奪ひ取ることのあるまじきに、いかなるいはれにて、深くかくし包むぞと云ふに、金をたくさん持ちぬれば、使ふべき事にもつかはぬは、我が身ながらも惡しき事と、心にわきまへしるゆゑなり。されば本心は善ばかりにて、一點もあしきはなき物と云ふ事思ひしれり。扨わるき事と知りながらも、[illegible]て猶も悲しみ、人目をかくしつゝ、する事は、氣のなすわざなり。實に〳〵氣に善惡ありと云ふ證據のあり。されば世間のならひにて、おのが身のうへに、なにぞ少しのよき事あれば、

そばよりはせう〳〵かくし包みかしと思ふ事なれども、おのれといひふれまはるに、何ぞ又おのが身の上に、少しもわるき事のあるならば、いかさまにもしれぬやうにと、深くかくし包むぞかし。又大悪不道の大ぬす人めも、盗みをするはわるき事なりと、おのが心に思へばこそ、いかにしても人に知られぬやうにと、才覚てだてをする。其の上盗人にむかつては、おのれは盗人なりといはんには、いかなるさしやうを書きてなりとも、ぬす人にはこれなきよしを陳じ申すべし。扨こそ盗みをしながらも、おのが心には悪しき事と知る事必定なり。眞其のごとく、大慾不道の人々、金をたくさん持ちながら、ぶうある事にもつかはぬは、我が身ながらもわるき事と知るゆゑに、一さいもたぬふりをいたし、かくし包みて、よき人のふりを仕る。されば金銀をたからとて、人々惜しく思ふ事は、何ゆゑなれば、萬つかふべき事には、さら〳〵とつかひて、諸事萬端の所用をとゝのへ、又すりきり迷惑する人には、其の人の心體にしたがつて、よき人ならばさら〳〵と取らせ、貧苦をもおぎなひ、世間のたすけたるべきものを、愚癡妄想のたつきにひかれ、金銀をば己の底、庫のすみにつみ重ねて貯へおく事は、黄土砂石にも猶おとれり。ふんどはでんばくのこやしともなり、砂石は道路のわるきたよりともなるべし。さりながら使ふまじき事にも、めたと使ひうしなひ、くれまじき人にも、めたと取らせて失却する事は、すりきり貧苦なるわざと好みてする心なり。是れ又胴慾不道の人に似たり。されば侍におい

て、金銀におほしく持ち給はば、武道具隨分にこしらへ、家居見苦しからぬ作事いたし、内の者共身上よりは少しおほく召しつかひ、恩をあたへ情をかけ、軍役つゝがなく相つとめ、諸朋輩中よくあたるべし。さて侍は仁義の二つをわきまへ知るべし。仁とは慈悲ある事、義とは義理をたゞす事、たゞしむかうの相手によるべきか、いかん。

○昔さる人の云へるは、今時の人々、あれは利發、才覺、利口、分別あるよき人よと、ほめ給ふを見聞くに、みな輕薄、表裏、ねいじん、胴慾の者共なり。其のいはれは、まづ其の家の老、出頭衆の言行いとおかしくて、それ〴〵に氣をつけ、雲居にはめあげ、おもしろくもなきをかしき事を笑ひ、はうびし、其の間に侍、百姓、町人をおさへ責めつかひ、かねをためる才覺、或は遊山、なぐさみ、そんなわか衆のうはさ、諸朋輩のかげごと、或は老、出頭衆が上戸なれば、酒ほどよき物は御座なし、誠にうれいをはらふ帚と云ひて、賢人是れを好みてあそび候ふ。さる間、杯をあげ、萬事の苦勞をうち忘れ、うつ氣をさんじ血をめぐらし、百藥の長とも係あそばし、又下戸なれば、酒程わるき物はなし、血氣みだし内損をし、不慮のはたらき、醉狂して身命破滅の中立なり。悪口して、命ひたゝしれをふるまひ、呑みたくもなき茶を呑みて、もちは是れ老若の肉をつかへにして、茶は是れ福壽の藥、災難ではごく、誠に酒の上損茶の十德、ありがたきなどほめらるゝ又見る〳〵

すゝ人の前にては、是れにまされるなぐさみなし。棋はいかにも眞なる物にて、老若共に書院などにてうちたるも、見られたる物なり。すごろくは又われ〳〵きらひとして、はなはだいやしきあそび物、さるには孔子も、ばくえきをばいましめ給はずとはめおかれし、又碁雙六ぶすきの人の前にては、わら論なり。碁雙六や、萬の用がかけ、けんくわこうろんの中だち、人の意地がしるゝなどと惡口す。また女わか衆すきには、わか衆女のとりさた、又も世になき口に面白くかたりなし、此の外萬事萬端、是れにならつて思ひ知るべし。されば、かやうにある人は、何ぞおのれが爲わるき事あれば、述懐いたし腹かするかねて、自他のしやべつもなく、老、出頭衆の御うはさ、一つも殘らず云ひふれて、惡口あざけりすたの限りなり。かやうの事をば御存じなくて、當座氣に入る事のみ申しならはす人を、よき侍とおぼし召し、また目をかけられしかう給ひて、あた物にひいきをなされ、利口、才覺、分別、さいかん人とほめあげ、御取りなしをなさるゝ間、諸朋輩も又うらやましがり、にせたがりて慾にあづる、必ずかやうの人に、たぶらかされぬやうに分別あるべし。我聞く大聖孔子の御教へには、善人にはよきと思はれ、わるき人には憎まるゝやうに、心行儀をたしなめとこそ。

○昔さる人の云へるは、甲州武田信玄公の御時さきてを仕られたる山縣三郎兵衛と云へるめいよ無雙の侍大將の申されけるは、たとひ一度二度でがらの覺えしたる侍なりとも、武士道ぶせんさくな

らば、よき侍とはいはれまじ。其の仔細は、此の山がたが陣に、越後牢人大熊備前、又甲州譜代小野久介と云ふ者あり、一とせ上州みのわ城責の時、させる用ありて、久介をからめ手へつかはす、そこにて久介一番やりをつき手がらを仕る、信玄公御ほうびにあづかる。又備前のかせぎは、大手の門の内へ責め入り、よき敵と引きくみ首取りて歸る。あまりに深入りして、くみうちしたるのちに、さし物を取られたり。やすからぬ事に思ひ又取つて返し、城の内へ押しこみ、さし物を取りかへすのみならず、さし物取りたる敵のくびをも取りて歸る。信玄公無類至極の高名と御感ありて、黒ぐはうなる御感狀に、同心七十騎そへて下されけり。しかるに久介此の事をねたみて、備前をあざけりひばう仕る間、武士道をしらぬ卑怯者と思ひ、せつかんいたし追ひ出し候へば、目安をもつて、信玄公へうつたへ申し上げ候へども、さほど侍道ぶようなる奴めは、ことに御意に入らず、臆病者と同じ事、此の御せんさくにて花ぬのをいだし、御扶持をはなし、追放仕り候へば、それがしのむこにて候信州阿曳が所へまゐり、歸參の望みを心がけ罷りあり、そこにても侍道ぶせんさくにて、あびきが内の丸田と申す侍のこがたなをぬすみけり、けんくわをいたし、されども押しつけられ、百姓のかぶりをおく穴の中へ逃げこみ、最後ことのほか見苦しかりし由、とうし衆ぞと物語なり。侍道ぶせんさくと云ふは、慈悲の心なく、義理をしらず、己が身に自慢し

て、人をそねみあざけり、人をわるかれと思ひて、表裏を言ふ不行儀どうよくなどをいふ。

○昔さる人の云へるは、たゞ侍に上剛下剛と言ふあり、上剛とは、我と力をつくし手をくだき、身命をなげうち粉骨をちらして、たゝかはねどもよき内の者共をもちて、それ〴〵の役をいひ付け、思案、工夫、智略、武略、けいさくなどをめぐらして敵をしたがへ、無事安穏に國家ををさむる、又下剛とは、自身力をつくし手をくだき、身命をなげうち粉骨を散らして、敵をしたがへ、やうやう國家をたもつと云へりき、

○昔さる人の云へるは、それよき主君と申すは、仁義をさきとしておごる事なく、文を好み武をもつぱらとし、いんらんをつゝしみ慾を少なく、それ〴〵によき人を目利きし、似合々々の役をおほせ付けられ、よくなる掟法度をたて、佛神をあがめ、諸侍に恩賞あつく情をかけ、百姓町人以下をもあはれみ、使ふべき時にあたつて使ひ、年貢役金ゆるやかにとり給ふ。さあれば諸侍以下下々までも、おぎうろしか、にかは付けの如く、しつくりとおもひ付き、身命をかろんじ、よろづの御用にたつ。たとへばまづ城普請などの時、召しつかひ給ふに、町人百姓ばらも我おとらじと、勇み進んで稼ぎ申し候間、百日にて出來する普請も、二十日三十日に出來して、しかも丈夫に見事なり、そこにてなさけをかけ給へば、いよ〳〵過分かたじけながりて、御代萬歳をとなふ。しかれば國家繁榮に

て、よろづのさいはう、衣服、装束、木竹、草石、飲食物、種々のうりかひ物もみちみちて、何事にもことをかかず、其の上天下のよき人々、仁者、智者、いしや、ふくしや、諸藝萬能者をはじめとして、有徳非徳みなこの國所へとあつまり來る。さてこそ武運長久國家安穏なり。又わるき主君と申すは、仁義を知り給はず、文をすてぬる武にたかぶり、いやしきを好み、不禮にしておごりやすく、ねいじん輕薄を近づけ、諸侍をば疎みむごきあしらひ、似合はぬ役を云ひ付け、うれへ述懐をもたせ、百姓、町人、あきんど以下をむさぼり、無理ひがごとの捷法度をたてられ候へば、死罪、流人追放おほし。さあれば諸さぶらひを始め下々までも、身命の悲しさに、うはべはおぢおそるゝやうなれども、心底には君をにくみ、そねみそしり、すこしなりとも主君のうれへ、失墜ある事をよろこび、今日はやれと日暮しに思ひ、よろづの奉公他人にゆづり、うはべ計りのみせ奉公、いかにもして此の家をはなれたき、牢人の念頭ふかく、述懐日々に重なり候間、終にはひとり二人づゝ牢人いたし、少しも心ある侍は一人もなし。扨百姓町人ばかり、ふしん作事に使はで叶はざる時も、無理ひがごとつかはるゝと心得、なげき悲しみ怒り腹立ちて、時のひぐらしに仕り候間、二十日三十日の普請も、五十日百日を經て、しかもそさうに見苦しく出來いたす。そこにて死罪ろうしやにおこなひ候へば、いよいようらみかなしみ、かせぎ働く事もなし。譬へばやせたる馬のおもにをおそれぬごとし。か

くあれば、智謀勇人も、それ〴〵と他國に退けさり。其國に、一味の他所より來る者もなく、またづからのものもなくなれば、國家するもの皆して行きて、草木ばかり、露しん〳〵、狐狸鼯鹿の臥所となれ、民のうれへの極つて天のいかりはびとなり、病しげくなげきたえず、いくほどなくして滅亡し給ふ。これをもつておもんみれば、君のまみえざる時は、臣のしんたらざるなり。君のまみえたらざる時は、臣のしんたるものなしと、古き詞でありがたし。されば土地うすくして大木生ぜず、水あさくして大魚すまず、心のまがりひがみたる人に、正直なる友なく、正直なる人に、心のまがりたる友もなし。

○昔よりある人の云へるは、つく〴〵と世間の貧福をかんがふるに、彼の貧福と云ふ物は、大名、小名、智慧あり、不智慧なる、ぜんなる、あくなる、老いたる、若きにもよらざると見えたり。たとへば取り立ておふに、町人のいかにも利發才覺なるものはすくなき、ぶぜんうつけなるものは金子もちたるあれば、利發才覺者は、あきなひをする度々に、損をして身上おとろへ、あげくのはてはせんかいたるに、かのぶぜんうつけもの類みて、若いものといふものになりて奉公をいたし、奧きはたらく者もありうきめを見て、かけありき走りまはりて、あきなひをする時に於ては、するほどの事に高利をとりて、主にふるこぼするまでなり。さてかくのぐぜんうつけなる者は、いかにも利發才覺なるわかきも

ひや、いくたりもかゝへ置きて、あきなひをする度々に高利を得て、富栄の福者となりて、おのが自分と利根才覚のやうにいひまはり、鼻をたかめてどしのおごる。まことにその時においては、誰人も思ひよらつ(?)とはいはれ(?)て、利根さいかくの人とはあがめ馳走する、出家侍いづれも、又かゝ切ことし

可笑記巻第三 終

可笑記卷第四

の爲する人の云へるは、たま〳〵思ひより、なりふし學問をもせばやと存じ、物を知りたる人に逢ひき、學せんとすれば、或は卑下し、又はむづかしがりて教へず。さあるかと思へば、富貴の人には、きらひいやがりもしらでをしへ、卑下しむつかしがる事もなし。たゞ貴賤貧福をえらめるなり。されば物をしると云ふは、まづは身のため、又はしうし眷属の人もあらば、是れを教へて末の世に殘し、人の道おこなはせんためなり。仰ぎて天道を見るに、春夏秋冬土用八專をわかち、夜あり晝あり日月あり、是れみな天の教へなり。いつか天道の卑下しむつかしがり、貴賤貧福をえらみ給ふ事やある。されば師匠の根本は、まづ天道なるを、聖人賢人是れをつまびらかに悟り、あきらめならつて、天の道をおこなひ、扨萬民にもをしへほどこし給ふ。しからばせいけんたちもつかたの人々、師匠なくして叶はぬ事なるべし。しかるに卑下しむづかしがり、貴賤貧福をえらび教へずば、世間物を知る事絶えはてて、人の道、唱へうしなひ、蟲鳥獸の如くになるべし。されば學問をして善人となれるかたがたは、わろこしにても皆いやしき貧者たちなり。富貴の人はみな榮華にほこり、酒色遊亂に長じ、

名利にのみ走り、學問の事共をもしらず、それ當世の物しりたちは、學文のはじめより物をたのむ望よりては、かならず諸人に用ゐらるゝやうやまはれ、馳走進物をうけ、知行を取りかねを貯へ、遊山にかゝり、まけその動作よりも、聖賢のをしへにしたがひ、人倫のみち行はん心がけ露ほどもなし。かゝる族を世に當世の物知りといひ、言語行儀のしかるべからんを見ず、只ひたすらに、物を知りたると云ふ事を鼻にあてゝ、富貴をへつらひ、善悪にある程に、六ヶしき心もいで、ひがする詞もたくみ出し、貴賤交りをもよらふなり。されば聖賢の詞に違ひなりすと云ひて、物知に卑下し給ふやうなれども、それは高慢の事なり。香華口すきがてんなれば、善かへつて悪となる。すでに孔子大聖の御詞に、しりたる事は知りたると云ひ、知らぬ事はしらぬと云ふやうに云ふべし、是れまことに知りたると云へ、物と云ふと云へまさに仁にして古語の曰く、學問に心ざし有りて、習ひたづぬる人に對して教へざるは、其の道にそむしなふと云ひ、又見たがり聞きたがりもせぬ人にむかひて、しひて教へんとするは、其の道を[illegible]はすと云ふ、よくよく心得るべし。

○昔さる人の云へるは、ある時琥珀といふ玉の塵をすひとるがおもしろさに、ひた物の塵を吸はせたれど、一筋の髪あり吸ひとらず。ふしぎに思ひて手に取つてみれば、朽ちたる塵なり。又磁石といふ石の針を吸ひあぐるが面白さに、ひた物吸はせたれば、一本吸ひあげぬ針あり。不思議に思ひて見れ

見れば、さきのまがりたる針なり。そこにて思ひあはせけるは、さても心なき玉や石なれども、朽ちたる塵まがりたる針をば、えらびきらふぞかし。いはんや人として、其の惡をえらびしりぞけざらんやと。

○昔ある人の云へるは、わが身則ち佛なるべし、よそに佛を求むる事おろかならんか。わが身もとより生死あるまじ。生死あるとおもふは迷ひなるべきか。されば佛をもねがはず、生死をもいとはずして、無念無心に似たる時に、著と名づけてわれと心をさとてり、あきらむる事あらんにや。是れを大悟と申すべきか、實に本來の心あらはれなば、百千の月日よりもあきらかならんかし。

○昔さる人の云へるは、世上愚妄にてよく人の申し分には、學問をし一物を知れば、必ず心こびくねり、いなものになりて、身上をもちそこなひ、或は異風者氣ちがひめく。さるほどにわが子どもには、かへすがへす學問しんしやくあるべし。誠なるかなもろこしの滿奮と云ふ人、身體びじやくなる生まれつきにて、つねに風寒にあたつてなやめり。ある時晉の武帝へ召し出されて、北窗にむかつて坐せり。折ふし北風はげしければ、其の北窗に瑠璃屛をたてられたり。此のあかりと云ふは、うつくしき玉を以てこしらへたるびやうぶなり。此の屛風のうちより見れば、よそへの物あきらかにすき通つて見えながら、少しも風の吹きとほす事はなし。しかるにかの人、さやうの物見聞きおよびたる事なけれ

ば、よろづの物さへすきとほつて見ゆるほどに、風も吹きとほるらめと思ひしたし、若し風ふかへかへと色をちがへて苦しめり。又もろこしの江淮と云ふ所に、呉牛と云ふ獸あり、其の身大ねつするゆゑに、あつき事に苦しみわぶる。さるによつて晴れたる夕の月、涼しく冴えのぼるを見ても、朝日の出で、天地又あつくなりもやすらんと見あやまり、息をつぎあへずすだき悲しむといへり。眞其の如くわらふに堪へたり。さればいにしへより今にいたるまで、たれ人か學問をして罪科におこなはれ、又は氣ちがひ身命破滅するぞや。なにものあつて慾念ふかく、仁義をそむきて罪科に行はれず、又は愚痴の心にて、氣ちがひ、身命破滅せざるや、よく心得べき事。

一 昔さる人の云へるは、當世の佛者、儒者をうかゞひ見聞くに、佛者の方よりは、儒法をけしとことなして、外の字をあやまり、上下の下の字と心得たるや惡口し、又儒者の方よりは、佛法を異端とおとして、邪道のおこなひと思ひなし、あざけりひばうす。さればおのれが家々の事をまへ、やうやくかたはしならひ、夢のごとく覺えたる分にて、物知りだての邪念をかまへ、無用のあらそひ無益はなにだに、あゝ其の道をうる事こそなりがたくとも、其の法をまなばんとの心がけ、などかなからざらん。ことゝもつて觀ずるに、もつとも儒道佛道いづれも、内典、外典、異端あるべし。所詮たゞ佛者は、佛經語錄を學しあきらめ、其のうへ不立文字、教外別傳の道を參得すべし。さもなくして他家の

儒者をそしり、悪口せん事いかんや。又儒者は聖經賢傳を學びおぼえて、其の上わが道の貫の旨をいたり行ずべし、さもなくして他家の佛法をあざけり、ひばうせん事いかゞあるべき、分別かんえう萬能、心にはしかじと云ふ事。

○昔さる老功の云へるは、合戰に吉日良辰をえらぶ事、さもあるべけれども、我が爲に吉日良辰なれば、てきのためにも又吉日良辰なるべきか、又方角を取り用ゐんとすれば、山河海江にさまたげ有るべし。其の上是れづれの事をば、敵にも心得知りて、我がかつてに用ゐられず、只ひつと打ちあはする物あひに、大事の勝負あり。又くみうちの時は、かならずくみかたんと思はず、引きくむといなや脇指に心をかけべし。馬を入る時には、辻風のふくごとく、引く時には、ひくしほのごとく、馬上にて太刀うつ時には、うちかぶとを目にかけ手綱を切るべし。

○昔さる人の云へるは、學問は至つて大事の物かな、返す〳〵よき師匠をえらびならふべきなり。ある所の學寮にて、大義には親をもほろぼすと云ふ、古語をひき用ゐたり。側なる人の言ひけるは、呼いかんぞ聖教賢訓のうへにおいて、いかなる名利主命なればとて、我が親をころすと云ふ事あらん。すでに大舜樂羊のいにしへ思ひやるべし。されば親と云ふ親の字を、親とはよませずして親とこゝによみて、したしみの事なるべし。したしみとは、兄弟より以下のおやこの事か、たゞ一字のよみなが

ひにて、大なる誤りとなれるいたましさよ。されば當世の學者は、おのれにしかざるものをば友とする事なかれ、と云ふ語を用ゐては、位高き人に位なき人を卑しみかてず、富榮の人は、すりきり人をいやしみかてず、物を知りたる人は、物しらぬ人をいやしみかてず、或は善といふも惡なり、惡と云ふも善なり、などいひ散らして、我がまゝを取りおこなふ。又あみだ佛をひたすらにたのみ、奉り、念佛をさへ唱ふれば、十惡五逆の罪人も、安樂淨土へ往生すると云ひて、いよいよ諸罪不道をふるまふ。かやうになり行く世間ならば、主に主親をも殺害し、人間の道たゞにすたるべし、つゝしむべし、おそるべし。まことなるかな一疋の犬が、何でひらめく物のかげを、見あやまりてほゆれば、あまたの犬ども、何にても見定めたる事にはなけれども、聲にしたがつてめた物ほえ叫ぶごとく、根本師匠一人あやまれりければ、すゑ〴〵の弟子みなたはごとを云ひまはる。されば蠅子驥尾につくと申して、あぶ蠅などは、一日に千里をかくる名馬の尾にとりつき候へば、其の名馬の行くにしたがつて、行くとも思はずに、そのあぶはへも一日に千里をかくる。是れはよき師匠に付きそひたる弟子は、かならずよき學者となるたとへのことなり。しかるに同じ虻蠅なれども、牛の尾に取りつき候へば、一日に行く事わづかに五里七里なり。是れはわるき師匠につきそひたる弟子は、かならず不學者となり申すたとへごとなり。然らば隨分よき師匠をえらむべきなり。但し學問師匠はあまたにかぎるまじや、

○昔、彌生ののどかなる花のさかりにいざなはれて、西光寺と云へるむさしの國ほとりのてらに、所々にや、深山櫻もたわゝに咲きみだれて、ことさら人目にすばしく、富榮の人々、都鄙十騎のもてなしきたんしに、唄うたひ舞うたひの聲、聞くも心空なり。こゝかしこにあまた引きつれたるやからの中に、他の下かげにうかれありく、かの富榮の人々の云へるは、あはれにたゝずむあみがさきたる非人の花見は、いと興もあらじ、無用の花車だてし、かたはらいたしなど、とりどりに沙汰しあへるをきゝて、かの者に、嵐吹きとく中空の風落ち来りて、寸善尺魔と並木の花、さらさらとちるよそほひいとおかしきに、あみがさきたる男、扇をふりあふぎて、

忘れては袖打ちはらふばかりに花の雪ちる木々の下風

と詠じうたひゆくを見聞きて、たゞ人ならぬおぼえにや、かの富榮の人々われからもや恥ぢけん、いづちいぬらんも知らず。

○昔さる人の云へるは、目、口、耳、鼻、手、足、此の六根の正理邪理を、辨へ知らずんば悪しかるべし。其の仔細は、目は見るが役、口はいふが役、耳は聞くが役、鼻はかぐが役、手は取るが役、足は歩くが役なりとて、それ〴〵のはたらくまゝに、打ちまかせて置くならば、みな妄想妄念にひかれて、聞くまじき事をも聞き、かぐまじき事をもかぎ、見まじき事をも見、言ふまじき事をも言ひ、取

ふまじき事をも取り、歩くまじき事にもありき、みな其の邪理に溺れ、執着して、正理に背くべし。さればまた見され、言はされ、聞かされ、かがされ、取らされ、歩かされとせば、目、口、耳、鼻、手、足のあるは甲斐もなく、人倫絶え生きたる甲斐もなく、絵ぞう木像のごとくにて、是れ又正理にそむくべし。さる程に萬事の善をば、見たり、聞いたり、云ひたり、かいだり、取りたり、ありきたりすべし。又萬事の悪をば、見ず、聞かず、言はず、かがず、取らず、歩かずすべし。是れ則ち目、口、はな、手、足の正理といふことなり。是れを用るるに、正氣のたすけあり、永々しくて得しをはんぬ、心得べし。

或る人、ある時これへ来りて、それがしに對し意見をいふ事、「汝いかにとして侍の道にまよひや、身體ふにとしれいとさまにとのうわしふり、それがしの存分には、やらまにしるなり、意見なさばしみれところを消むべければ、見はなきともに我もあすけれと、眼がなく從へども、ましてやのやうなる人非人のにむかつて意見せられんは、我も同じ人非人たるべしと思ひ、とかくみてんのいくやうにまかせおきやと存じ、答へて曰く、そのはうの御意見、ありがたし事なれども、侍の身の上にあつて、いまだにはかなき意見にて候。このながら我何をもつても侍の道にそむくやう詞に、わが身の臭きを知る事なし、三度かへりみる身にしもあらず、其の悪いかん」と問ふ。しかし人答

へて、今まれ汝今其方のすがたを見るに、がつそうあたまにやつし、刀わきざしをもさゝず、あないは
らいとさまよひありく事、また其方宿のていしの、いかに富榮し者なりとも、町人に對しかいにおそれ
なるあなしらひ、是れ皆へつらひこぼむといひつべし。たとへば蛟あたらしけれども、いはゞつた
ふほし、折りふほしとなりたるためしもなく、かんむの古りたりといへども、くだつて[illegible]
なりたる事もなし、いかにくくことといふ。それがし答へて曰く、今其方しらずや、龍[illegible]
ん蛟と蛇といへる古語を。其の心は、上天をかくる龍と云へるものは、大かた其のかたちへびなるに
の類に似たりといへども、心ざしは隔別にて仁義をまもり、其の徳大いにして威光あれ、[illegible]
ちこと同じやうなりとも、へびむかでのごとくして、天龍の心ざしをわきまへ知るべけんや。故に世
れへびむかで、我はこれ天龍の蟄居するがごとし。實に老驥櫪に伏して心ざし千里にいへり、いはれ
やわがきこの身をや。其方よく聞くべし、我まづがつそうあたまにやつし、隠居すこし黙
るに今刀わきざしをさしはり、無用の俗氣、これ其の時を知らず、又其の形をわきまへ知りたるにあ
らず、髪を結ひ、刀わきざしをさしたるがさぶらひなれば、今時の地下人、職人、商人、皆さぶらひ
道吟味の侍たるべきか。嗚呼今此の身上において、いづれのてきかたきか有りて、鉾をまじへ、劍を
わさばさんや。誠なるかな孟子にいへる仁者にてきなしと。周易にいへる時の一字、毛詩にいへる

思無邪の三字。さりながら刀わきざしのさいごに用あることは、我つねにとぎ磨き、みだれなきはせ、秘藏しもちたる一腰の劔あり、吹毛の劔となづけ、さりながら用ふる事をはなさず、この劔は、是れ唐にては吳郡がうちたる干將の劔、我が朝にては、三條の小鍛冶宗近がうちたる鋼丸にも猶勝れり。おつとり出して首尾にあはせたること、何の不足やあらん。されどもさればなんぞ武道をばめつせんや。又やどの亭主にへつらひこびなましを云へり、ますらよく分別しなさまかわれ不運の身として、すいきの牢人となり、よき近づきの親類とてもあらばや、無能無智ある身にもあらず、しかれば出世をかねたる我等にもなし。誠に便宜絶えたる沖津船の、よるべ定めぬうき身なるを、今此の宿のあるじ釘やの豊田屋吉右衛門夫婦に託し、又釘やの近藤五郎左衛門諸共に、慈悲の心ざし深く、義理の氣ざしあつく、親をこのみておごらず、然るを以て我をもあはれみ、高代のみだいをかし、妻子共に養育せられ、朝暮心靜かにやすく日を送れり。されば冬をせつつの寒さ夜に、小袖をあたへてはだへをあたゝめさせ、九夏三伏のあつき日は、かたびらを得させてはだへをすゞしめさせ、我が身の老いたるをいたはり、あはれみもてなしあがめ、みづから茶のこをとゝのへ、茶をふつて馳走す。かるがゆゑにや、妻子病なくうれへをわすれ、吉野の花の消え残る、露のいのちをたもちぬ。呼此のやどのあるじ夫婦に人の心ざし、あふげば天よりもたかく、うつむけば地よりもあつし。そも當世の町人ともと見るに、い

やしきものなれども時にあひて富貴なるものをば、よき人と思ひてうやまひ、衣服、装束をうらやむ。いかほど貴き人なりとも、世におとろへおちぶれすりきりの人をば、わるき人と思ひていやしみかてず、金銀財寶をたつとむ世間なるに、千々に引きかへ萬々にこえたる宿のあるじの心ばせ、とやいはん、かくや語らん、まことに千人にすぐれるを英といひ、萬人にこえたるを雄と云ふ。しからば此の宿のあるじなりこそ、町人の英雄といはん、ふかく感じあつくたふとびて、一寸の胸中に是れをはかり見るに、昔にも／＼此の人の祖孫、世々侍としてれき／＼なり。さればこそ同氣相求むるなり。宜なるかな、金玉土にうづめども朽ちせず。白居易いはずや、遺文三十軸、軸々金玉の聲あり、龍門原上の土に骨はうづめで名はうづます。しかりしより此の方、此の厚恩を心肺に銘じ、寒露涕泣して、ゆびを折りてかぞへんとすれば、恒河の眞砂よりもこまやかに、筆をとつて書きんとすれば、すゞりの水には大海も波なにひがたとなるべし。此の厚恩を報ぜんと、我かならず生死に流轉の心ざし有り。傳へきく釋尊のいにしへ、蠡兒のかひこをもつて巨海をはかり給ふ。ある書に日はく、慈悲あるをもつて親とし、恩賞あるをもつて主とせよといへり。さあらば情をかけ恵みある人においては、しんるゐ他人にへだてなく、父母の思ひをなし物を取らせ、あいある人においては、尊きいやしきをわかず、主君の禮をせずんば叶ふまじ。されば天のあたふるを取らざれば、却つて其の罪をうくる。時いたつておこな

はされば、かへつて其のわざはひあり」と云へり。しからば何ぞへつらひこばむといはん、たゞし其の禮大過するや。我聞く過ちは不及にしかじといへども、義によるべし。汝我があやまりなしと申や。ことにはいり知らず、せいゑい海をうめんとす。

○昔さる人ありて、たゞひとり出家へ参り、参得の望みを申しければ、此の僧あはれみ給ひて、「さらばまづ金剛の正體といふ物を案じ出し給へ」と仰せけり。此の人聞いてとりあへず、「其のこんがうの正體は、藁にて御座有るべし」と申す。其の謂れいかにと問ひ給へば、「さればこそ、こんがうと申すはき物は、藁にしつくる物なれば、わらこそ正體にて候」と云ふ。出家笑ひ給ひて、「いやさういふ物にはあらず。夫れ金剛の正體といふは、音ありて目にも見えず、手にも取られず、火にもやけず、切つても切れず、水にもぬれず、色にもそまらず、かたちなき物かと思へば、元来その時にしたがひてある物なり」と教へ給ふ。此の人承つて、「こはむつかしき尋ね物」とて罷り出づるが、山門の僧にとりより急ぎ立ちかへり、「只今教へ給へる金剛の正體は、何にて御座あるべし」と云ふ。出家のたまはく、「いはれなく、難へかやうにしけれども、いはれいかにと聞へ給へば、答へて曰く、「それへと申す物は、其物の手にもとられず、目にも見えず、色にもそまらず、火にもやけず、水にもぬれず、切つても切れず、かくては元来なき物かと思へば、腹中のときにより幾つもある物に御座候」と云ひて、しかし

あるべし。

○昔武州江戸の御堀をかへるかたはら町の橋をかけられける時、なにがしとかやいひし牢人と言ひしが、通掛りて見ければ、かの人、七旬ばかりなるらうばふうろだれて、只三人ありあり（？）とあゆみ出で来れるを見ると、かるに此の橋なかば破損して、中々年寄わらじなどの行きかよふべくもあらずかなふこ此のわたり人、うばをかなしんで打背負ひし、うばのはげみ背負ふところへ入れ、そろりそろりと打ちわたり、静かにかたはらへおろし、さうなくかへりてはたりにけるか、いづくのいぬらんも知らず。此のうばは其の人の何ならんかし。我おろかなるかなし、孝あるわかものかなと思ひければ、諸人又感じあへり。これをもつて思へば、あろうこしにかぎらずわが國にも、ざゝなる人おほくあるべけれども、西の本家にもしるしおかねば、いたづらにその名くちて失せぬ。誠にこがねの土にうづもれ、玉の石にまじはれる如し。もつともいたみ思ふべき事、げにげに悪事千里をかけ、好事門を出でずと。

○昔老功の人の物語に、もし半途にて、うしろよりのはしりものに出でむかひ候時、追手のものども、それそれ逝すなと聲をかけ頼み候はば、打ちとめずんばあるべからず。但しうち止めたりとも、少しもてがらだてをせずして、何となくそこをたちのくべし。扨うつときやうは、まづむかうより敵走りむかはば、わが身はわきへ開きのきて、わがまへを敵通りすぐる、はしりとほるやうにすべし。扨

わかまへる半間ほど走り過ぎたる時、鑓をかけて討つべし。槍、長刀にてもとむる時も、此の心持なし。但しいはれば、かの逃げ走る者、逃げ道をたてふさがれて、其の敵を追ひつめるか、又は切つて捨てたる外は、逃げ足の外たしと思ひつめては、かたらずあやまりあり。しかるに走りとはなけれど、道をあけておき候へば、まづ逃げしと思ひとのみ思ひて、働くべき心ばせも甲斐なくなりて、まわくなりてやすく／＼とうち申し候。たとへば取つて返し働き候ともあやまてなし。そうじて、とつてかへしてはたらくと云ふ事は、百千人にすぐれたる勝のものなればなりがたしとなり。其の仔細は、おくれいくさにしんがりをすること、一番やりよりはつよしと、吟味ありけにて候。

昔より人の云へるは、主君としては惡光あるべし。韓非論といふ物の本にも、君子おもてするといふ人は虎なりと見えたり。此の惡光といふものを、たとへをとつて云ふに、まづ主君は虎、内のものは犬なり。其の虎といふものはなしあはするに、虎犬をやすくしたがへ食するなり。其の仔細は、虎にはするどなる爪と牙とをもちたる故なり。さればいかにたけきとらなりとも、爪と牙とを犬につけたらば、虎かへつて其の犬にやすくしたがへられ食さるべし。しからば爪と牙とは、主君のある[illegible]大事なり。但し、惡光もあまりに過ぎたるはあしし。いかにとなれば、虎の爪と牙と

が、いかほど用にたつ物なりとても、あまりにながく生ひのび候はば、かならずうらぼそになりて、まがりくねり、用にも立つまじ。千草萬木のうへのみに限らず、其のほか萬の物を見るにも、なが〳〵と生ひ出でたるは、みなうらぼそにして、かならずまがりくねるなり。されば馬の爪のながく生ひまがりたるは、かけはしりも自由ならず。ざうの牙のながく生ひ曲りたるは、物をかみくだき食する用にはたゝぬがごとし。いかに威光が高き事なりとも、あまた物におぢ恐れられたる分に[illegible]て意見いさめをいはんずる人もなくして、萬事我がまゝになりてゆき、後には國家破滅すべし、まことに亢龍の悔いある事を心得べし。

○昔もろこし呉つの西施といへる美人、胸をいたみて、手をもつて乳のほとりをおさへて、眉をひそめたれば、いよ〳〵美しくえんにやさ〳〵くして、上のゆびはるりをのべ、二つのちぶさはたまのさかづきを伏せたるごとく、かほばせは花のにほひもけおされて、かたちは春風の青柳を吹くにことならず。ある人此のよしをほのかに見て、山のごとくほめあげければ、ある醜女此のよしをつく〴〵と聞いて、ある時かの惡女おねもいたまざるに、胸のいたきふりをして、きたの足のごとく、まつくろにふとく高く、爪ばかりの手をひろげ、あた筋むらさきだちのひつぱり、こいもの如くなるあぶらの開を押へて、いれかゝるからのすつぼめをしわめたれば、ひたひは出でて、やりおとがひさきり鼻のた

ふり目、見るにをかしく腹すぢよつり、後にはにくゝも思はれける。されば總じて悪人として、みだり

にくき人の眞似をせんには、うはつらばかりのにくき物にて、よそめをかしかるべし。さるほどに男も

女も、善人の眞似をせんと思はば、まづ其の人のかたぎふぜいをばさし置いて、その心のうちをかん

がへと學ぶべし。しよういうをまへ〳〵と學び得候はば、かたぎふぜいは別なりとも、他人必ず賞め

あぐべし。實にも〳〵心だに誠の道にいりたらば、かたぎ風情もよかるべし。されば唐の逆旅に二人

の女あり。一人は美人、一人は惡女なり。美人はにくみそしられ、惡女はあいかはゆがらるゝ。逆

旅とは、日本にては旅人の宿をするもの、はたごやと云ふたぐひなり。ある時莊子と云へる賢人、此

の所に宿を借り此のよしを見て、其のいはれを宿のあるじに問へば、答へて曰く、一人のよき女は、お

のれがみめのよきに自慢して心たかし、心たかければ人ににくみそしらるゝ。又みめのわるき女は、

おのがみめの惡きを悔悟して心ひくし、心ひくければ人にめでまれ、かはゆがらるゝと語りける。萬民

高き卑しき心得べき事なり。

○昔或る人の云へるは、鎌倉の最明寺時頼公、最勝園寺貞時公、日本國を御めぐり御修行なされて、

萬民のうれへをしろしめされ給ひけるを、聖賢の上より云はば、毛をふいて疵をもとめ、人のいたみを

尋ねる事、或いは無益の由をあざけり書いたる物のはべり。いで〳〵物を云はれなば、天下の國

君名將の御事を、いやしき賤者の身として、少し物かき覺えたる分にてそしり申すことは、おそれあるこそかへつてけがらはしく、くわれいの難をもとむるなるべし。もろこしの聖賢人にも御咎かあり。湯王も網を解給ふ。又孔子も天下を歩かせたまふ。されば如何にしても、民を慈へいたはるに專に、國々へ人を遣はされけることなり。是れは上古と云ひ聖代の事なれば、其の御使も人さだめて慈悲ふかく義理つよく、分別も賢人にて、民のたすけともなりたるべし。末世澆季の當時は、人々慾に耽りて慈悲義理を知らず。分別も慮を忘れて、我が利我が利根を事とす。其の上權者としては、人の善惡の御目利も下手なり。さあらば其の使の人大惡人なるべし。惡人ならば御使につかはしたまふ國々所々に於て、例の賄賂不道のやつばら、此の御つかひの人々へ、色々の寶種々の進物をいたし、或は種々の馳走を公だてを仕つて、兼ての惡逆を皆よきやうにかたり繕ひ申すべし。さあらばかの御つかひの人々も、慾にふけりて惡をも善とみなし聞きなし、國々所々より歸り來つて、其のしなをも披露言上のときには、かねて音信進物を仕つ、おそう奉公いたしたる惡逆不道の者をばきやうに申すべきを聞、年月かさなりたる無理非道の公事さたも、大理を得て勝となり、あまつさへ利をも得者などを賞められなば、いよ／＼是れにつき上りして、猶々惡逆不道におごり、ほしいまゝになるべし。又いかほど善人にても、大理をもちたる人なりとも、すりきりはてたる小身者は、音信進物すべ

きやうもなく、おそうはうこうをいたさんでだてもならざれば、皆無理ひがごとに云ひかすめられ、結句悪逆不道者となりて、うへ／＼にくまれ申す事必定なり。さあらば世々生々の子孫までも、うれへ悲しみの遺恨なるべし。下民愁へあれば天禍ひを以てしめし給ふ。しからばせめ一人に歸す所、つゝしみ恐れあるべし。されば此の時頼貞時の兩公は、天下は一人の天下にあらずとおぼしめされたるにや、されば世上をうかゞひ見るに、國土の御政あるじとしては、かりそめの御歩きにさへ、十町二十町四方の木戸辻をかためて、往還の人をかたく止むる、さあれば只今死するおやこの別れにさへ逢ふ事ならず。いかなる大病人を抱へもちたる人も、醫者に藥を得てあたへん事もならず。哀しく泣きかなしみて、世をくわんじ身をくだくのみなり。又舟橋を押へとゞめて、歸來の民を通さず、かくては大事をかけたる臣の奉公、わが身の用をも達せずして、たゞいたづらに行めぐりて、關を焦れはべるも、誠にきびしき御用心と見えたるに、いかなれば此の時頼貞時の兩公は、いかにも御心やすく、只一人天下を巡らせ給ふ、げにも／＼仁者に敵なしと、孟子の云へる古語有り難し。されば天下の御あるじとして、御一人天下を御歩きありて、萬民の愁へを救ひたまふ人、唐土天ぢく我が朝に又ともあるべし。世上には知れたる馬鹿者もあるかな。かゝる明君名將の御うへを、そしりたてまつる天罰いかゞ。

一 昔さる人の云へるは、最明寺時頼公御つれ〴〵の御當座なりとて、

幾度か思ひ定めてかはるらん頼むまじきは心なりけれ

と申されし事を聞くならば自ら行もしつらひとげしまけ

情ある人には殊に能くあたれ彼れ仇をば恩で報ずると聞く、

仇あれば物ごとかゝはらでむつかしとや心に心あるべくとせよ

こまやかに情をかくる人ならば他人の親と思ひなすべし

とにかくに又は落ち散る物なれば黒金の事はこの為書くまじ

善き人にまじはれ、悪き事はおしへの中なる意見なれども

一 昔三州牛窪の住人山本勘介とて聞えの武士あり、此の人丈ひきく色黒く、片眼にてちんばを引き、やせたる男の數ヶ所手負ひぬれば、行歩もいとゞ不自由にて、見苦しき男ぶりなり。尚々駿州今川氏眞公のお家へ聞き及びて參られけれども、あの男ぶりにては、何の用にか立つべきなどあなどり物にして、召しおかるべき樣なし。しかるを甲陽の信玄公、いまだ御年二十ばかりの御時、此の勘介をきこしめし及ばれ、百貫の御知行にて召しよせられて、男ぶりを御覽なされて、扨々あのやうなる男ぶりにて名の高き侍は、さこそ覺えてからのほど、人にすぐれたるらめ。しかるを百貫の知行は似合

はうしに、御座にて御加増ありて、百貫になされ、其の後此の勘介を召して、重物[illegible]召して、弓矢の知識と尊敬斜ならず、誠に悪君と明君との御相違、天地隔別なり。されば當代の主君、諸牢人を召しおかるるには、たけ高くつらよきに、目は眞黒に生れ、眼大きなるを御このみ[illegible]呼もること[illegible]といへる賢人の浮沈も、[illegible]の勘介如くにぞ[illegible]。

昔おろかしき梁と云へる國に、宋就と申す人あり。楚國のさかひめを代官し給へる時、梁の里人瓜を作りけり。[illegible]とは念を入れけるほどに、うり共よく生ひ出でぬ。又楚國の里人も瓜をつくりけるが、そ[illegible]に作りける程に、悪しく生ひ出でたり。しかるに楚國の里人共、梁の瓜のよく生ひ出でたる[illegible]を嫉みて、夜ひそかに梁の里へ忍び入り、瓜蔓を[illegible]切りて[illegible]。梁の里人[illegible]を立て、仇を報ぜんと企て、楚國の瓜を[illegible]刈りて捨つべし。」と申しけれは、宋就此のよしを聞き給ひて、「[illegible]言語道断禍ひを[illegible]だちなり。」とて、楚國の瓜をあへてからせず、却つて梁の里人を集め、夜ひそかに楚國の中へ遣はし、楚國の瓜畑へ肥を入れ水をそそがせ、よくつくろはせけるほどに、楚國の瓜共一段とよく[illegible]、楚國の里人ども此の[illegible]を見聞いて、内には深くはぢおそれ、外には厚くよろこび嬉しがりて、則ち代官へ此のよしを申し入れければ、代官もいたきに感じ悦びて、則ち帝へ[illegible]聞いたす。帝も斜ならず御感ありて、禮儀をあつく[illegible]、進物共をおくりたまはしく、宋

の帝へ「是れ〳〵の樣子にて候。善き人をもたせ給ふものかな。以來は別して申しあはせん」と、宋就の事を山ほど褒めて候つかひあり。梁の帝此のよしをきこしめし、「今日より後世と梁とは親しみ、偏に其方の分別故に」と宋就をほめあげ、知行金銀山の如くくだされたり。さあれば其の金銀を少しもわたくしにせずして、我が代官下の里人どもに配當しとらせ給ふ。梁の里人共はじめの程は、「何ぞ我が瓜を刈りきられて、恨みを報ぜぬ事さへ無念なるに、結句他人の瓜をつくろひける事の口惜しさよ」と、宋就の事を謗り惡口しけるが、後にわが主君みかどの御よろこびを聞きおよび、又かねを宋就より貰ひ申して、うれしかりよろこび、千秋萬歳をうたひ、宋就を崇め敬ひけるとかや。誠に國郡のさかひめに居られん人はかやうの心得あるべし。されば少しの在所の爭ひか、村里のあらそひになり、最後に國郡のあらそひとなる。常に〳〵二葉にてきらざれば、斧鋸を用ゐん事必定なるべし。

○昔みちのくのかたはらに、仁義に達し給へる主君あり。みうちに花の牛介とて、當出頭の古きものあり。又はうばいに胴慾無道の人ありて、無理ひがことを取り立て公事にするが、この花の牛介を頼みて、是れ式をさい〳〵つかはしける間、此の是れ式にめでて、まゝ内々にて主君へ度々訴訟申し上げけり。さる時牛介かたへ御書あり、開いて見れば、

鼻の穴通されけるか牛の介人ちく生と是れを云ふらむ

牛の介此の書を見て、はづかしく思ひ入りけん、氣病みになりていたづらに死にけり。

○昔さる人の云へるは、されば人の親となならば、大身、小身、貧福共に、侍の子供は、七八歳にもなるならば、手習をさせ、それより年々にしたがひて、弓馬、兵法、禮儀、鐵砲、詩歌の道、四書七書など學さすべし。このほかの藝能知らずとも苦しかるまじきか。右の學問にはよき師匠をえらびぎんじて、せつかん強くあるべし。古き言にも、父母は肉身を養ひて、心ばうを害し、師匠は心ばうを養ひて、肉身を破却すと云へり、かへすぐ＼庭訓せつかん尤もなるべし。かやうなるをこそ我が子をば、よく寵愛すると、眞實の親とは云ふべけれ。然るにあのたきやうにあらで、我がまゝなる育にて、食物衣類すみてに付いて、其の子の心にうちまかせ、教へ折檻せざれば、第一は馬鹿うつけになり、第二には蟲もくすり自の持病をおこし、或は内損腎虚、らうさい、心氣病になる。或に今時の大身、富貴の人の子供衆の、人のいふ馬鹿うつけとなり病者となるは、大かた其の親のをしへのなき故なるべきか。されば人と云ふものは、十六七から人事のさかりになるべし。必ず善惡の友をえらびて付きあひすべし。世の中なる道は、たゞさるにすぎなり、ちしやの道の童は、習はするに經をよむとこそあれ。この五十年以前までは、日本國中が合戰の時分にて、人の子供藝能學問せざれども、武士道をかたにしうよく心がけし故に、心もかひがひしく、常毎に吟味ありて、馬鹿うつけ病者も、多くはなかりし上古

き人の物語、さも有ると覺えて候。昔は其の時分の馬鹿うつけの利者と云はれしものは、當世の利發、才覺、無病そくさいの人よりもまさるべし。されば當世は無事にして、人利欲にふけり、仁義を知らず。やゝもすれば酒淫の二つに溺れ靈智なし。しかる間急ぎ右の通りの教へを立て、[illegible]るべし。たとひ行末は兵亂戰國となりたりとも、日比習ひ覺えたる事は、猶もつて用に立つべし。さあらば治まれる御代にも、みだれたる御代にも、とにかく用に立つは右の學問なり。但し右の段の學問にも、其の年比によつて勤むべし。先づ七八歳の比は、てならひ物の本の素讀につけさせ、十三四よりは馬鐵砲、十七八よりは弓、兵法、詩歌、扨二十より上には、四書七書の講釋を聞くべし。されば我が子の望みに任せ、酒肴をとりくれ、美しき小袖を著せ、花車なる裝束飾らせ、萬心の任に育つる事は、偏に乳母母おやの心ばせなるべし。但し孟母が三遷斷錦など云ひたてゝ、よき風儀は教へ折檻もあるなり。

○昔さる人の云へるは、「扨もさる人の結構さよ、利欲を内にこめて、うはむきはなんどうとして、人の氣分をさげすみ、善惡を沙汰し批判せらるゝことといふ。側なる人、それはそも誰人ぞや、あら恐ろしや。いにしへの聖賢こそ、内に性をこめ理をつくし、胸中空虚にして、あきらかなる鏡のごとくなるが故に、外儀を蕩々として融和なり。いかんぞ當世の愚者聖賢に及ばん。今その方の申さるゝ人

は、内に邪心を構へ人をきけずみ、外には佞心をつくりて人に近よせ、善悪を見聞き出して、善をかくし悪をあらはし、他を亡ぼしおのれをたてんとのはかりごとなり」と云へる、面白し。

○昔さる人の云へるは、人目しのぶの浦と思ひそ、鏡のかゝるあみもありぬ。人の聞くべき事、みみな山と思ひそ、仙人のこる木をもこそあれ。されば壁に耳、岩の物云ふ世のなりひと、あまねく申し傳へきつ。誠に天知る地知る人知る我知る。是れを四知と云ふ、つゝしみおそれ申すべし。

○昔さる人の云へるは、出家となりては必ず古郷を立ち去りて他國に居住すべし。如何にと云ふに、いかほど智慧ありて尊き僧も、古郷に居れば、古里の人々の取りざたには、あの出家は誰人の子、誰人の甥、此の比までいたづらなる小僧しんぼちにて有りしなど云はるゝも由なし。他國の居生は其のすたれもなし。既に出家とは家を出づると書きたれば、古郷を出でざるは、あながちに出家の二字を、本宅を出づるとばかりも心得べからず。されば日外の事なるに、さる淨土宗上人、光り輝く装束にて、輿の上へのしあがり、談義を解かれし時、聽聞の男女共が中に、ざゝめく聞くに、「あの上人は昨日今日まで、たれ人が下女の子にて、ぞうりを取りたるのつぼしなるが、上を見殺して寺へひそかに新發意になり、わるびるひりわやくものにて行りしが、いつぞの程に上人になり、殊勝顏さして談義の座とりふしぎなり」と云ふ。出家たる人此の旨心得べき事なるべし。

○昔上方に、或大名の御家に留守居有り。或時、かの御家に儒者あり、此の人に推量させばやと思ひ、さいはひ参り逢ひ候へば、ある時此の儒者申されけるは、あはれ公冶長殿がおはせずかし、お手前を知るんになし、心やすく語さばやといへば、やがて其のむね合點仕候ても、何と知らぬ體を致して、「其の公冶長殿はいづくへ御他行にて候」と問ひければ、「古郷へ歸られて候」と答へられたるに、「ただそれは御のこり多き事かな。わたくしの知音に葛慮と申す人あり、此の人もはや古郷へ歸られたり。今が此の道にとうりうならば、御知人に致し、心易くはなし申すべき物を」と申しければ、此の儒者赤面してあいさつ悪しし。其のしきを立ちて後、ある人の云ひけるに、「先ほど其方のあいさつに、儒者赤面せられたる事如何に」と問ふ。答へて曰く、「さればとよ、あの儒者は東の者にて、詞なまりて聞きぬとて、公冶長殿を引合はさればや」と云へり。此の公冶長は唐のいよの人にて、諸鳥の囀り鋒を下もよく聞きしの好を開けたり。されば其の詞なまり、好なれぬ聞き知られぬとて、それがしが詞も、鳥の囀りにたとへ、卑しみなぶれり。それがしも其の分の事をば、少ししり申したれども、態としらぬふりをいたし、其の人はいづくにと問へば、古郷へ歸られたりといへり。古郷へ歸るとは死にたる事なり。そこにてそれがしも又なぶりかへさばやと思ひ、葛慮を引合はさばやと云ふ。此のかつろと云ふ人も、もろこし名譽の人にて、牛の聲までもよく聞きしり、

時をあけたる人なり。されば此の儒者の云へる事を、牛の映けるにたとへて、一[illegible]と

いへば、皆大わらひになりぬ。

○昔もろこしの、韓退之といへる文人の詩に、閑に居すれば食たらず、仕にとえば[illegible]人間の世し。兩事皆性を害す。一生たゞ心を苦しむ。黄昏[illegible]に歸り、[illegible]されば[illegible]韓退之は、いかなる人に[illegible]古來[illegible]のいましめ[illegible]趣ありけるにやしらず。たゞ打ちききたる分にては、日比たれかしの思ひ[illegible]る愚意に、よくあひかなひ申したるによつて[illegible]侍る。この身の上[illegible]給ふべし。

○昔ある人の云へるは、當世の醫者衆をうかゞひ見きくに、病人すこしの小事にても[illegible]人参を用ゐてよき[illegible]、小人参か、よき人参にこりゝしらへ、[illegible]間、すこしゝと本ぶ[illegible]何長びくうちに、[illegible]病などこと出で、迷惑をこする。又大身の[illegible]病者なれば、[illegible]病ひをあはせて、心得たるふりして療治をする[illegible]、これあれば病者の[illegible]迷惑して、醫者をかふるまで[illegible]の[illegible]を[illegible]よき藥と思ひ、下直なる藥を[illegible]。[illegible]高下によらず、常に用ゐて其の病を治する所をよき藥とす。異國の名醫[illegible]

の心得なり。数薬種の内朦朧なくして衣を忘れ、薬と薬との中わるきを有り、或はあたふまじきを用ゐ、古きをえらび、いろ／＼様々のこしらへやうありといへども、其の用心一つもなし。されば醫家に四つの大事あり、脈をうかゞひ、色を見、聲を聞き、病證を問ふ、望聞問切の四試是れなり。然るに病證のみを上げて薬を與へ、脈のみをうかゞひて薬をあたふ。さあれば病人の方より病のやうを語り出せば、「物語に及ばず、はや脈にて知れたり」と廣言して病證をとはず、いはんや色をみ聲をきき知る事なし。くわうげんするも道理かな。かやうの薬師を當世の人、上手よ物しりよとあがめ用ゐる故なり。かのやぶくすしの口癖として、「脈は浮沈遅数の四許りこそ肝要なれ。」とて、七表八裏九道七種の死脈等を知らず、いはんや胃の氣などいへる事をや。さて調合するに、大ぶく、小ぶく、肥えたる人、やせたる人、せい高き人、低き人、男女老少、病の輕重、薬の淺深、四季土用、方角などの心得あるべし。いかでか是れを辨知せん。たとひ又うはつらに走りたりとも、全く得心すべからず、たゞおのれが仕合のよきにつれて、病者十人の内二三人もへいゆすれば、上手ぶりをいたし、おし殺したる病者の事をば深くかくして、本復したる病者の噂のみ語つて廣言する。但し又醫者によりて、しそこなひたる病者の事を、わざと語つて聞かせ、「あのくすしはあやうなる醫者にて殊勝なる。」など人々にいはれて、用ゐられんのてだて才覺するもあり。或は前かどいしやの與へし薬をそしり、其

の婦人のおごれる[illegible]、身をわすれて人を上手に思ひ[illegible]、遊女のおごれるに異ならず。悲[illegible]なる哉。世間おほくは、輕き病者を重くおもひ[illegible]、おもき病者をおもしろ[illegible]、[illegible]を富に、人の命をたゝは[illegible]、仁義禮智信の五常專用たるべし。されば醫家に十のつゝしみあり。第一に慈悲心あるべし。第二に學問をし功を經べし。第三には四試をあきらむべし。第四には、病の源を知るべし。第五には運氣を知るべし。第六には經絡をあきらむべし。第七には能毒を知るべし。第八には藥のこしらへやうを念を入るべし。第九に配劑を肝要として、友を嘲るべからず。第十に慾をはなれて、貴賤貧福のへだてなく大事につゝしみ療治すべし。そも醫道と云ふは、わが身の上富み榮ゆべきためにはあらず。萬民の病をいやし、諸人の愁苦を救ひ助くべきためなり。さればかくの如く心得、つゝしみ療治せんには、天是れをかんじ、おのれが身の上富み榮え、そく[illegible]いにて萬めでたかるべし、まことに陰德陽報の事、天道何ぞ僞り[illegible]あらん。

○昔さる人の云へるは、今時の人々病におかされ牀にふし、正に藥をもちゐる時にあたつて、其のやうだいを見きくに、いかほど下手なるいしやなれども、當座ふの[illegible]きにまかせ、しやうぞく小袖結構に、にほひふんくとして、くすりばこものずきにいた[illegible]せ、の[illegible]ものにてありけば、上手と云ひて尊敬する、笑止なるかな、愚なるかな。萬物の上手へたは、いかで貧福しよたいによるべきや。抑

醫者に十のつゝしみあり、第一によきいしやを吟味し選むべし。第二に良藥を大事にして飲むやう、まんにやう、ねんを入るべし。第三に早くれうぢすべし。第四にはいたずらに絶つべし。第五にかなしみ怒るべからず、第六に物をふかく案ずべからず。第七に飲み食ひ物をつゝしめ。第八には寢る起きの大事にせよ。第九にみこ山ぶしのいふ事をまことにするな。第十には藥代を惜しむ事なかれ。されば病人が藥代を惜しみ候へば、あながち慾にめでぬいしやも、其の人の面にくさに、疎略にねんを入れず、いはんや胴慾ふかきくすしにおいては、藥の調合をさうにして、必ずあやまりあるし。されば金銀と命とをくらべ物に分別せよ。いづれを惜しみいづれをか捨つべき。扨病におもきとかるきあり。たとへば輕き病には、藥二三ぷく用ゐて本復すれども、重き病なれば、二三ぷくの藥にていかでか本復すべきぞ。しかるにくすり二三ぷくもちゐてへいゆせねば、其の儘下手いしやとて別の醫者にかゝる。又其のくすしもかくの如くなれば、ひた物いしやぜゝりをして、しぜんなひ身命を誤る。或はさるいしやの藥を久しく用ゐて、大事のわづらひが過半へいゆするに、藥代を惜しむやりて、そなたの藥にてはべん〳〵として、ほんぷくしかぬると云ひて、べちのくすしにかゝり、又それをも相應せぬとて用ゐず、おのれと我が心持をもつてしなほし、へいゆしたると云ひまはり、いしやに藥をそんにさするさへあるに、結句てがらをさへ云ひこなし、下手のやうに云ひなす。さあれば

いしやも腹をたちて、大様この病やうに云ひまはる。かやうに胴慾ふかき人なれば、腎虚におこり、のみくひ物にあきみち、萬不養生なる間、頓て煩ひ再發して、くるしみに耐へかね死ぬべき時には、右にいふさし鍼灸をもむかへりみず、又例の醫者をたのみ、養生せんとすれどもたのまれず、後悔千萬限りもなく、苦しみ死にしするのみなり、いましめ給ふべきやいなや。

○昔神無月十日あまりのくれつかた、武州檜原といふ所を通りしに、くさやのかたぶける軒端まばらに住みありしに、すだれたまたまなる戸ざしあり。人すめるかと覺えて、燈物凄く見えたり。折からうち風も肌を落ちて、うしろの木だち靜まりもやらず、さえにさえたる雲まの月、蕭然のながれにおち落ちたら、心あらん人はもろこし歌か、大和のことのはなど、一首ありぬべうなる景色かなとおもひめぐらすに、かの花園の内に聲ありて、落葉風にしたがつて水萍となる。寒流月を浮べて片舟横たふと、上の二句を吟ずれば、まことに立ち寄りたうに、下簾のやぶれよりさしのぞけば、年のほど立名ばかりなるが三、色あをくおもやせて、ひげむさむさと生えたるが、すみすり流し筆を染めたる爪つきいとさまげに、ふるびたる紙衣引きかさね、ついゐの前にともしびをあかく照らし、よみ殘したる書をくり、あまた取りちらしたるさいとめやすく、如何なる人なりけん、その名ゆかし。

昔龍をつくりし時の文帝の御代に、一日に千里をかくる名馬を進上しける時、公卿大臣、めでたき瑞祥

寶かな。」と申しあへければ、文帝あざ笑ひ給ひて仰せけるは、「夫此の馬を重寶と思はず、其の仔細は、われらまゝ遊山なぐさみにありく時は、一日にやうやう三十里、または合戦などの時も、多くて五十里に過ぎず。かやうにそろりそろりとありきてこそ、數萬の人馬も疲れず、われに續いて軍功をなす。若し又時にあつていそぐ事ありと云へども、かねてつかれぬ人馬なれば、我によく續いて忠功をはげます。されば我一人千里をかくる馬に乗りたりとも、數萬の人馬、千里をかけずばあへて益なし。」とて、主のもとへ返し給ふ。誠に由來けやけき物は、是れ寳にあらず、たゞ君が心を蕩かして則ち害となるといへる古語あるをや。

○昔さる人の云へるに、げらうの詞に、まがらねば世がわたられぬといふ。げにもげに番匠のもちゐるかねと云ふ物は、まがりまがりてこそ、よろづの物をまつすぐにする德用あれ。又屏風も曲りてこそ、座しきにもたち風をもふせぐ物なれ。これは皆まがりやうによつて[illegible]當世の人のまがりやうは、針のまがりたると筋の曲りたることとし。

○昔さるひとの云へるは、世上のおほく見聞きたる人々の行儀には[illegible]、見[illegible]か[illegible]取[illegible]云ふに、蟬といふむしは、夏の[illegible]時節に[illegible]生[illegible]、此の世の中に[illegible]、たゞ夏のやうなる上の[illegible]思ひて、春秋といふ[illegible]やうなる時節をしらず、又種[illegible]

なすびあとしするをはなは、此のたなの中より外に、ひろくきれいなる所はあるまじきとすこぶる自慢なして、植川と云ふ事なしに有り。又犬芝といふくさは、ここのうかのうへに生ひ出でゐ、あしたにはさかりにて、夕にはやかれしぼめる由なるに、この二つ塚より外に、世間にきれいなる所はあるまいと思ふがごとし。

○昔さる人の云へるは、ある時かた山のべをとほりしに、鳩とふくろふと、そばの木にとまりゐて物語りをするを聞けりと、ふくろふがいひけるは、いかに鳩殿聞き給へ、我此の頃はにし山にすみなれて、いと心やすくなでさふ、気やらめでほやと思ひ候へど、いかなる故にや此の山の諸鳥共、我をにくみそねみ、にぶり笑ひあなづるによつて、堪忍なりがたし。さる間、東山へ飛び移り住まばやと存じ候、いかゞと問ふ。鳩然る由を聞いて、さればこそ殿、いかに東山へうつり給ふとも、又ひがし山の諸鳥とてが、にくみそねみ笑ひあなどるべし。其の仔細は、其方の聲とすがたをわるきゆゑなれ。されば東山北山南の山へうつりても、諸鳥ともに憎みそねみ笑はるる事は、今の西山と同じ事なるべし。所詮たゞ聲と姿とを、改めなほしてしかるべしといふを聞きに付けて、人間もいふやうに、おのれが行儀詞のわるくして、人々に憎みをねたまれ笑はれて、咄懐うれへの腹をすゑかね、其の家、其の所、其の國を立ちのき此方へ来て、而してはあかれ

り候へども、又爰にても行儀詞があしく、人々に憎みそねまれなぶり笑はれて、述懐うれへの腹をすゐがねあたたへ行き、又そこにてもかくの如し。さればいく度もわが身を顧み心得べき事と、

○昔さる人の云へるは、當世の人の主君の御口ぐせとして、よき内の者がほしいの持たいのと仰せある。是れほどひろき世の中に、いかほどもよき侍共はあるべきに、ねがひ給ふのおろかさよ。ただ叢にすむ蟲とおぼしめせ。さればもろこしに伯樂と申す賢人あり、此の人馬のよしあしをよく見知り給ふ。されば世間にまづ伯樂と申す人おはしてこそ、扨千里をかくる名馬も世にあるなれ。されば千里をかくる馬は、世間におほくあるべけれども、伯樂ほど馬をよく見知り給ふ人はまれなるべし。さあらば今の世にも、千里をかくる名馬はあるべけれども、知る人なければいやしき里人の馬やにありて、荷おけ田かへし、空しく一生ををはるなるべし。あたら事や惜しい事かな。扨千里をかくる馬は、一たびにまめ一石をくらふ。さあれば千里をかくる名馬とは、かねて聞きおよび、知ると申せども、かの胴慾ぶだうのくせとして、まめ一石を惜しみかなしみて、馬の腹十分にかはざれば、千里をかくる力なし。力なくしてかけざれば、千里をかくると云ふいひなしも、皆いつはりとなりて、憎みそしられすてらるゝ。馬の心にはなにかと思ふべけれども、口に物云ふ事およばず、されば世のつねの馬の如く、物をかはれせめたてられては、いかにとして、千里をかけん事やあるべき。千里をかく

る馬においては、つねの馬とは萬ちがひ有りと知るべし。さあらば、乘り樣がわるくても千里もかけまじ、且又乘られもすまじきなり。しからば馬主こそかんようなるべけれ。其の仔細は、わるく乘りそこうにもおたて、思ふさまにかはれずば、必ず千里をかけまじきなり。かまへて／＼馬のとがになすべからず。是れをもつて案ずるに、主君としてはよき人をよく目利きし給ふべき事、伯樂の馬をよく見知り給ふと同じ事。扨知行や金銀などを、其の人に似合はしく取らせ給ふ事、千里をかくる馬の腹十分に飼ひ給ふと同じ事。扨情をかけそうきやうちそうし給ふ事は、名馬によくもちたて給ふと同じ事。さて其の人の器用取得にしたがつて、それ／＼に召しつかひ給ふ事、名馬をよく乘りせむると同じ事ならずや。されば世間にかくの如きのよき主君おはしましてこそ、又世にも能き侍もあるべけれ。いかに賢人君子といはれぬべき侍なりとも、主君の御心によき侍とおぼし召さず、御取り立て御用ひもなければ、下々まで用ゐうやまひ從はず。萬人用ゐうやまひ從はずば、いかにとして國家をもをさめ、且又天下をも治むべき。武畧、智畧、けいさく、工夫、思案などもなるべきぞ。たとひ又主君よき侍とおぼしめし、よく召しつかひたまふとも、金銀知行をもたくさんに下されずば、十分に思ひあたへなさけをかけて、富貴のものにかたじけながらせ、ありきりものにうれしがらせず、其身をとりつけ、わが身を愛するやうなるてだて才覺もならず。さあれば家中の上下もしたしまず、大切

に思ひたつかさ、家中の上下がしたしまず、大切に思ひてなつかざれば、萬事ととのほらぬなる、其の家中さへともがまはりかね候はゞ、いはんや他國の人が、何としてしたしみたてまつるべき。萬民したしみなければ、いかにとして天下國家の治まるべきぞや。みなこれ主君の御あやまりなり。ここに浮世聞によき侍のないとはいはれまじ。たゞ善人をば善人と見知り、わるきものをばわるき者と、善悪あきらかに見しり給ふ、御目利きが下手にておはしますなり。爰に一つの申し分あり、いかにといふに、親の心を子もしらず、子の心をおや知らぬ世のならひなれば、いかにみうちのものなればとて、他人の心がいかにとして知らるべきぞと、おぼし召さるゝ事もあるべし。それはうはべのなき道理にて、眞實の道理とは申しがたし。其のいはれは、鶴鷹馬猫などのやうなるとりけだ物をさへ、是れは進物でおりない、かれがよからん、御どこがよからんと、さまざま色々の御目利きだにされて、御自慢候に付いては、いかんぞや同類人間の目利きがなるまじく候や。さあれば人の善しあしにおいて、見知らぬと御申しなされんは、おろかなる事なるべしや、いかん。

○昔さる人の云へるは、上のよき人といふは、善事を見聞いては、其のまゝよき事の如くに、心をもち行儀をなほす。中の善人と云ふは、善事を見聞いては、よろこびねがふとはいへども、ともすればわたくしの悪念にひかれてあやまり有り。しかれども其のあやまりは、次第々々になほる事あり。下

のあしき人といふは、いかなるよき事を見聞しても、おのが胸欲ぶだうの妄想妄念をよしと思ひ、よ
き事をそしり[illegible]、重ねては見聞く事をいやがり嫌ひて、けつくわるずねにひがみくねり申さ
るゝ、まことにかくこそあれ。
○むかし中頃の比なるに、下谷といふ所を過ぎて、とある山の下道分け入り侍りしに、あやしくもとり
たることもなき道なれど、おのづから塵もなく、こゝろすゞしく住みなれたる古寺あり、うしろの
山けはしくそびえ、つゞら折りなる岩が根の松風をふくみ、紅葉はえだをまじへ、錦をはりたるがごと
し。庭の池の面さう〳〵として、やり水の音ころ〳〵とながるゝに付けても、あるじのさこそやと見え
門に、[illegible]山とかけたる額あり。そばなる人の語りけるは、此の額の[illegible]いきさんをひつかへして、き
れい[illegible]といはれ[illegible]なし、[illegible]法[illegible]、佛前に参りければ、かの佛のみまへに[illegible]
なし、色々いろどりたる佛達[illegible]、ひとへに淨土日蓮[illegible]向宗の[illegible]とおぼえて、[illegible]
[illegible]なりとて行き、此の佛[illegible]、[illegible]かはと、興[illegible]てかへりぬ。
○昔さる人の[illegible]るは、近代の見聞くに、いづれの御家にも[illegible]衆といふ人あり、一段とよきさう
な[illegible]、[illegible]と感じ侍[illegible]の横目のはじまりを思へば、[illegible]入道[illegible]といふ者おこれ
[illegible]、[illegible]入道[illegible]、いづれも十五六歳ばかりなる者なるが、六七十人[illegible]

して、人家へみだれ入り、ねや納戸のへだてなく、上下の善悪を論ずる事なく、ちきに清盛公へ申しけるほどに、ゆゑなき死罪流人のたゆる事なし。天性この入道は、悪逆不道の人なるゆゑにかくのごとし。又近いころは、甲州信玄公にもそこの衆あり。さりながら甲州のそこの衆の言上申されける品品は、家中諸奉公人の善悪に付けても、忠と不忠と功あると功なきと、武士道の吟味つよきと吟味なきと、扨諸人のうれへとよろこびと、國の富貴と衰微になる事と、奉行役人のえこひいき有る事と、扨は胴慾不道の人の事のみなり。かくあれば善人は御おんしやう御情にあづかり、悪人は追放切腹あるによつて、御家中萬事あきらかに道理にかなひ、武士道の吟味もいよ／＼つよかりしとなり。かの平入道のもちゐられたるとは、天地隔別夏冬の[illegible]。されば横目を仰せ付けられんとならば、大いに正直にして萬吟味つよく、無慾の人をえらまるべし。横目は大事のもの、つゝしむべし／＼。

○昔さる時さる所にて、ある人はいかいの章句をして、それがしに對せよとてさし出せり。其の隔句に曰く、

峯如花笠衣　　面白對春山

岩似苔筵布　　眼青開壁開

と、しらぬ事なれば、ふるひ／＼申しいだし侍りぬ、まづてならひのはじめ。

○昔さる人のいへるは、されば光ある物は、光ある物を友とするといふごとく、火はかれたる物に燃えつきやすく、水はうるほへる物にながれやすし。誠我が心かわきなば、智慧の火もゝえ付きやすく、情のうるほひあらば、慈悲の水もながれぬべし。

○昔さる人の云へるは、水に四見ありと云ひて、天人は水を瑠璃と見なし、魚は水を家と見なし、餓鬼は水を火と見なし、人間は水を水と見なす。又水に三味ありと云ひて、牛は水を飲んで乳となし、蛇は水を飲んで毒となし、人は水をのんで水となす。されば元來は一元一味の水なれども、むかひの相手によつて色をかはるぞかし。いはんや儒道佛道などわるくこゝろ得候はゞ、みなじやだうに落つべし。

○昔さる人の云へるは、神をいのるには、髪をあらひ身をきよめ、精進して殺生をやめ、腹をもたず酒をのまず、いかにもよくをたち、けがれなくして、せめては百日ほどづゝ、一心不亂にぜひともといのり申すべし。信心だにあらば、などか利生なからん。心なき石やかねも、うてば光ひゞきいづる物を。利生のなきは、おのが信心のたらぬゆゑぞ。奉公をするにも、我が主君を大切に思ひ、かげひなたなくぜひともと思ひつめなば、かならず恩賞なさけにあづかるべし。恩賞なさけのなきは、おのが不奉公故なり。しかるを何ぞ述懐すべきや、わるく述懐せば、必ず主命にそむくべし。其のごとく悪く

いふ所を申さば、利生になくしてかへつて罰あたるべき事うたがひなし。されば仁に諸神もいかなれども、ばあたれるは多く、利生をうくる人は世にすくなし。

○悟れる人の言へるは、悟れる人の心といふは、たゞ唖の夢を見て目さめたるがごとし。語らんとすれども言語におよばず、己が心にありて、おい／＼これを楽しむといへり。偖こゝに其の事

○昔ある人のいへるは、元弘三年の比、新田左中將義貞公と、鎌倉の相模守公と御中不和になりて、鎌倉より大軍をもよほし、新田をせめらるべしと聞えければ、新田の御一門あつまり給ひて、軍評定ありけるに、或は沼田を城として、利根川をまへにあて、或は越後の一類をたのみ、津張へうつらんと、うち出にたてこもらんなどと異議まち／＼なるに、義貞公の御舍弟わきや次郎義助、すゝみ出く思案して仰せけるは、むかしよりいまにも、侍は、死を輕んじて名を重んずるを以て義とせり。されば、いかなる難所をへだて、いかなる城郭にこもりたりとも、運命つきなば其の甲斐あるまじ。又越後の一族をたのみたりとも、人の心不和の世なれば思慮あるべし。さもあらばうしろめたき事もなきに、要害に落ち行きかくれ、にさまよひ、是れこそ新田のなにがしたれがしなど、人口にのらんも口惜しかるべし。同じ死せんずる命ならば、綸旨をむねにあて、鎌倉を枕として討死せんは、子孫の面をもおこすなるべしあらずやりと、義理を先として剛なる心を宗とのたまひければ、當座の一門皆もつともと感同して、

新田をうたれ給へば、ほどなく方々より味方はせあつまり、大軍となり給ひて、鎌倉を攻めほろぼし、御運をひらかせ給ふ。誠に脇屋義助の宣ひける事、侍においては感じ覚悟すべき事かと、爰もとに書きつけ侍る。くはしくは太平記にかいたり、御らん有るべし。

○昔の人のいへるは、大事の合戦には、糧をすて船をしづむるはかりごとあるべし、かならず籠城などの分別あるべからず。

○昔の人の云へるは、いにしへの辨の内侍と云ふ女房のよめる歌に、

　つらきをも恨まぬ我にならふなよ浮身を知らぬ人もこそあれ

まことに諸人の教へにもなるべき歌ならんかし。

○昔の人の云へるは、鸚鵡といふ鳥は、言敏あざやかによく物をいふ。されども鳥類をばまぬかれず。又猩々と云ふけだものは、人間の姿にさながらよく似たりといへども、畜類をばまぬがれず。又山がらと云ふ鳥は、ちいさくして利發なれども、鳥類をまぬかれず。又猿といふけだ物は、人藝能をなしぬれば、よく藝能をまなべども、畜類をまぬがれず。又すゞむし、松蟲のたぐひは、なく聲様々おもしろけれども、蟲類をばまぬがれず。又虎や孔雀などは、其の毛色の羽もやう色々に見事なる装束なれども、とりけだもののたぐひをばまぬかれず。又へび蚯蚓などに、[illegible]

とも、蟲のたぐひをまぬかれず。又越後うすぎ白鳥などには、色うつくしく白げなる、鳥獸のたぐひをばまぬかれず。是れをもつて人間のうへをも心得よ、いかに姿容見事に、色白くうつくしく、物いふ事あざやかに、聲うるはしく藝能ありて、利發才覺なりとも、其の心惡逆不道の愚癡ならば、とりけだもの蟲のたぐひと同然なるべし。たとひおのが心には、我こそよき人間なりと自慢に思ふとも、心ある人の見る目からは、みな地ごくの牛馬なるべし、はづかしからぬ事かは。

○昔ある人の云へるは、今時の人々學問するを見るに、よるひるをわかず、朝暮となく心がけかせがるゝ、あらあぶなの事やと見る内に、案のごとく十日二十日、或は一月二月許りにして退屈し捨ておく。又一年二年捨ておかずにかせぎ、學する人ありといへども、或は病者となり又はうつけのやうになり、かつうは氣違ひのごとくにして、日ごろ學する事をも打ちわすれ、あまつさへ身上持ちそこなひ、命をうしなふ事もあり。されば いかなる上氣上根の人なりとも、日夜朝暮をわかたずんば、根氣かならずつかるべし。根氣つかれなば、退屈も出來、物もおぼえられず、覺えたる事をも皆うち忘れぬべし。さあらば學問の正理を取りうしなひ、本心迷ひて病者となるうつけとなり、氣もみだれて天道にそむき、身上おとろへ命をうしなふ事必定なり。されば學問をせんには、そろり〳〵とたゆまぬやうに心がくべし。かくのごとく候へば、けふはきのふにまさり、此の月はさきの月にすぐれて、學

問成就なり。實に一日に一字づゝおぼゆれども、一年中には三百六十の文字覺えて忘るゝ事なし。しかるに其の三百六十の文字を、一日二日にもならび覺えん事はやすけれども、さやうに急に根氣をつくしておぼえ候へば、當座は覺えたる樣なれども、しばらくしては、みな打忘れて其の詮なし。たとへを取りていふに、異國にけんざんといへる山あり、かの山にはもろ／＼の藥草藥木生ひしげれり。其の山のそびえたる峯より落つるしたゝりは、みな彼のくすりの木草のうるほひなり。其のしたゝりとく／＼と落ちて、此の峯の下なる岩にあたりて、其の岩がまるくくぼみてうつは物のごとし。しかるをそろ／＼と切りぬきて茶椀にする。此のちやわんは、萬のどくを消すと云へる德用あり。日本にて鶴山といへるちやわん、これなりと云ふ人もあり。されば詞もかたき岩ほ、わづかの草木のしたゝりにて、茶わんになるほどくぼむ事は、ぜん／＼と年功をふるいはれなり。かくのごとく學問をするも急にこんきをつくさず、油斷なく漸々と心がくべし。さあらば退屈も出でまじ、病者ともなるまじ、うつけ氣もおこりにもならず、正道にもとづき續くべし。さあらば智者とならん事、何のうたがひかあらんや。又井土の井げたを見よ、つるべなはにていつともなく漸々とすりへり、其のつるべなはにて石はすれる穴あり、是れも漸々と應ずる年功を經たるゆゑなり。されば鶴山のしたゝりは、岩ほを摧む事にてもあるべからず、又つるべなはも、井げたを引くのことわりはあるまじ、たゞり

とへに漸々と年功を經たるゆゑなり。げに〳〵賢人のことばにも、水ぜん〳〵とつもりて深きふちとなり、學ぜん〳〵かさなりて智者となると。よく〳〵心得べき事なり。

○昔もろこしに蘇韶と云へる人、病にあたりて死ねたり。其の友だちある時ある所にて、かのそせうにはたと行きあひみれば、今生にてつねに見なれし小袖装束、馬くらにうちのり、にしの方へ行かる。あらふしぎやと見送り、若し人たがひか、又夢幻かと思ひけれども、別にかはる所もなき、いにしへのそせう殿なり。とかく詞をかけて見ばやと思ひ追ひ付きて、「なういかに御身は蘇韶殿にてはなきか。」と問ふ。答へて、「おうそせうにて候。」といへり。「扨御身は何處にて、いつの比何たる病にあたりて死に給へるかいかに〳〵。」と問ふ。答へて、「尤も仰せのごとく。」といへり。かさねて問ひて曰く、「扨今生と死して後の世は、いかなるかはりやあるぞ。」答へて曰く、「いや別なる事もなし、死しては鬼といへるものになつて、ともに天地の内をありく。今見たまふに少しもたがはず、たゞ生きたる人に交はらぬまでなり。所詮死せるは虚にして生くるは實なり。」といひて、かき消すやうに失せぬ。

○昔ある時、愚親の申しきかせらるゝは、運は義によるなりと云ひて、侍の戦場にのぞみては、うちじにと心がけ、心を剛にもつべし。是れ則ち義といふものなり。さあれば天命まつたくして運つよし、運つよければ、いかほど身命をすてゝたゝかへども手もおはず、いはんや死ぬべき事は思ひもよ

らぬ事なり。されば古人も、すゝむともあやふきを去ると云へり。しかるに臆病なる者は義にあたりても、まあれば天命にもそむく。天命にそむけば武運つき、運つくればかならず手を負ひ、或は犬死をなす。寶に古語に曰く、運をば天にまかすといふも、無事たるべき事をすとあるをや。此のゆゑに運は天にあり、人間にあらずと申しつたへたり。又大山大河を我が陣の前にあてゝ、小敵を引うけふせぎたるは、あはれに、且又大山大河をたのみに仕り候はゞ、かならず油断あるべし。油断すればはかりごとをいたさず、用ひたる軍法もわすれるべし。しからばかならず敗軍すべし。たとへば又、大山大河を我が陣のうしろにあて、大敵を引うけふせぎたゝかふとも、其の大山大河をたのみとせず、心斷にてたゝかはゞ、いのちの運を開き、軍法をまもるべし。しかれば勝つ事を一時に決すべし。かるがゆゑに此の運は天にあり、論にあらずと云へり。又戰場にいさみ進んで敵をきりかけ、身命をすて大敵を攻めたゝかふ儀は、たゞ心が猛く候へば、あながちそれによる道理なれども、いかなる愚人愚者も、能く知りたる事にて候。さあれども此の道理は、それはおのれの道理にて、それにうちかちてはなれたる事にて、昔人の知る心得にて道理なり。それはこゝに眞實の道理と云ふにはあらず、それ眞實の道理と云ふは、あるすゝむ其人のこゝろざしは、身命をすてたゝかふ時には、かならず高名して、此の高名をもつて家をおこし、身命をつゝがなく、主恩を報じ累代の家名をあぐるなり。此の眞實の道理といふは、

底にしづんでかくれてある故に、士たる人々の知り心得がたき所なり。たとへば又はしり馬にすてぶちをうつて、人よりさきに進み去り候へば、身命無事に有りと云ふ事は、いかなる愚人までもよく知りたる道理なり。さるほどに此の道理は、うはむきばかりの道理にて、上にうかんであらはれ出る事にて、みな人の知りやすくなしやすき所にして、真実の道理と云ふにはあらず。真実の道理と云ふは、臆病をいたし候へば、かならず犬死をして、おのれがつらに糞をぬるのみならず、累代の家名をけがし、子孫をたやすことをもおそるれば、臆病にはせぬなり。此の真実の道理は底にしづんでかくれてあるゆゑに、おほかたの人々知り心得がたき所なり。右此の二つの道理をば、真実によく／＼知り心得べし。されば進めば死ぬると云ふ道理が一つ、又すゝみても死なぬといふ道理が一つ、合せて等分の道理にて候へども、すゝんでたゝかふときの心中、すなはち義理に叶ふ、義理に叶へば天道にかなふ、天道にかなへば運つよし。運つよければ身命無事にして、比類なきはたらき、不雙の高名をいたし、主君の恩賞を報じ、累代の家名をもあらはし、子孫をおぎなひ、忠孝ひとつあり。もし又すゝんでたゝかふとき、定業きはまり討死するといふとき、比類なきはたらき、不雙の高名をとげ、主君の恩賞を報じ、累代の家名をもあらはし、子孫をおぎなひ忠孝ひとつあり。さあればすゝんで戦ふに、討死せぬに無上の善事、すゝんで戦ふに討死せば、無上の善事なるべし。實に／＼なげきの中のよろ

こひ、何事か是れにしかんや。親父しのそいて進ずる時の心中、即ち義理にそむく、義理にそむけば天道にそむく、天道にそむけば運つくる、運つきたればかならず犬死をして、死かばねに恥をさらし、累代の家名をけがし、子孫をもたやし、主君の恩賞を無にして、不忠孝のいたれるなり。もし又甲斐なき命生きたりと云ふとも、諸朋輩にいやしみなぶられずてもなれず、つらに糞をぬつて、累代の家名をけがし、子孫をたやし、主君の恩賞を無にして、不忠孝のいたれり、何事か是れにすぎんや。けにげになげきの中のかなしみ、悲しみの上にうれへなるべし。さあれば死なざるは無上の上の悪事、死したるは無上の悪事なり。さいなかにいかに進んでたゝかふがよしと云ふとも、無理ひがことを以て、死をいそがんは、かへつて義理にそむき、天道つき運たえて、かならず犬死をする。まことにく〱無理ひがことの人は人非人とし、なかまも人倫にたへけれど、つねに申しきかせけれども、馬耳風馬耳風。

○昔させる用ありて、武州江戸の日本橋をうちわたりはるか〱行けば、人々とよめきあつまる有り。我も思はず立ちより見れば、腹をかゝえてわらふもの、やせたる馬に大きなる桶ふたつつけて、肥をたごに入れ、おのれ打ちのり、ながえのひしやく腰にさし、ぶらり〱と行くなるが、こうは道なかばにて、荷重くてやむをかけし、下をおしきかよはゞ、なきあたゝかなるりる山事をまに、

目とぢもせ、馬上にさるゐねぶりして通る、いたう打ちねぶりて、やゝもすれば落ちぬべき時に、目ふさます事たび〳〵なり。是れを見る人毎に、あざけりわらつていひけるは、「かかるうき世のうけものかな、馬のうへさへあやふきに、いはんや左右は肥なり、かかるあぶなき所にゐて、なにの心やすくし、あれまではゐねむるぞや。もしゐねむりてたふれなば、肥の中へや入りなん、大地へや落ちなん」と、とり〴〵にいひあへる。そこにてふと思ひ出しけるは、さしあたりたる用所をはたと打忘れて、せんなき方に立ちとゞまり、このゐねむりを見る事は、肥とりもさがさるゐねむりより、猶おろかなる事なり。

昔さる人のいへるは、物をよく知りたる人は、ものをも知らぬといふ覺悟にて、なんぞ人の問ふ時には、あきらかに其の道をいひ教ふべし。又身をくだき命をすて、忠功をなしたりといふとも、其の忠功を鼻にあてて、ゆめ〳〵述懐すべからず。又いかほど心剛なりとも、其の心をおし靜め、人あひやはらかにあるべし。他人に勝つを剛なりといへども、まづわたくしの妄想妄念に勝つを、第一の剛なる心といふ。實に〳〵わたくしの惡心にさへ勝つならば、他人にかつべき事はいとやすかるべし。又いかほど出頭なりとも、おごらずしていんぎんに、義理をふかく正直なるべし。又いかほど金銀をもちたりとも、胴慾ふかかるまじ、たゞ慈悲をかんようとして、禮をおこなふべし。

昔鐵山禪師といへる出家の詩に、

看々白年暫不稽　誰能世上保二長生一
若人未必免二空老一　容色新時須レ有レ情

此の詩の心は、人としてはうき世のはかなき事を、心にかけ眼をつけて、よく／＼觀念して見よ、年月といふ者は、水の流るゝごとくにて、すこしの間もとゞまらず、去年は早くことしにあけ、先月はほどなくこの月とうつり、きのふ過ぎけふとなる、たれ人有りて百年をたもてるや、いにしへより語りつたへし長命の人々も、名のみ殘りて見たる人なく、昔がたりとなれるまでなり、されば世にめづる人間美人といはれし人も、いくほどなく年うちよれば、日比うつくしかりしかほばせも、いつのまにかは引きかへて、額に四海の波をあげ、腰にあづさの弓をはり、色くろく骨あらはれ、姿もにくゝふためむさし。さあればたれ人かむすぼほれたしとて、そこに聞く事を一度にいさする程に、若くうかんにしてゐのかたち美しく、みな人々もいはやし、執心ありける時に、それ／＼の心に任せて、なさけをかけよといへる作意なり。さりながら、かの詞のとほりにばかり心得ては、戀の詩と思ふてもよし。誰かなかりき、この詩をふかく吟じて見るに、是れ諷の詩なるべし。諷の詩と云ふは、うはべは他のことにことよせて、其の事をそらのといふやうなれども、我がおもひの外なる事を云ひて、ここ

の心にふかくふくみてつくるなり。さて此の詩のそこの心を案ずるに、大名も小名も富貴栄えの人々は、かならず人をあはれみ情ふかく、慈悲心をつぽらとすべし。されば世間にいきてゐたりとしても、一たびは栄え、一たびはおとろふるおきてさだまれる事なり。誠に春の花のさかりなるも、いつのまにかは秋のもみぢと散りはてぬるためし思へば、美人美男の若くうるはしく妙なるすがたかたちも、年打おとろへればむつくまたなく見にくくなる。かくの如し。又このびじん美男のうへをもつて、富貴栄えの人のうへを思ひとるべし。

可笑記巻第四　終

可笑記 巻第五

○昔ある人のいへるは、新田左中將義貞公のおほせ置かれたることとて、さる老法師のかたられけるは、大將となりてはつゝしむべき事おほし。されば時不慮のわざはひは、天運にまかせてのがれやすく、萬民の恐へかなしみによるわざはひは、天是れをあたへ給ふ間、まつたくのがれがたし。人の恨みにくむ所は、天是れをすて給ふ。諸人のなつきしたしむ所は、天是れをあがめ給ふ。されば萬民のうれへかなしみを能く知りて、深くつゝしむべし。侍のならひにて恨みある時は、日來の恩をすてゝあたを報じ、情ある時には、年比の遺恨を忘れて一命をかへりみず。さればみうちのさぶらひには、重ねて恩を與へなさけをかけ、恩をあつく賞翫すべし。無用の行儀、制を不慮にして、諸侍の恨みをおはん事、さのみとては愚意のいたれる處なり。又恩賞をあたへん事、譜代新參によるべからず、其の忠功にしたがふべし。書に曰く、舊惡を思ひ出して新しき忠功をわするゝは、つまびらかならざる人と云へり。いはんや舊惡もなくして忠功あらんともがらにおいて、いかでか恩賞あたへざらん。又譜代忠功の人なりとも、新參忠功の人をさして嫉まば、すみやかに善惡をたゞして、罪

道利すくなし。又無具無能の侍なりとも、武道に心ざし深く吟味明らかならば、取り立て賞翫すべし。しかはんの断絶ありて、文武に心ざし深からば、更に鐵杖なるべし。いかに諸藝萬能なりといふとも、其の心がけのたしかならずは、其の人間の益にあらんや。さりながら人十人ならば十人ながらおなじき事なし。必ず取り立て賞翫すべからず。抑主君として恩義あり、親として慈愛あり、侍として忠義あり、子として孝義あり、兄として恵義あり、弟として悌義あり、夫として信義あり、婦として貞義あり。右此の五義をおこなふ人ならば、かりにもおろそかにしあいやしむべからず。おやまつりごとを崇とせば、かならず天罰をかうむらん事うたがいなし。されば譜代相傳の侍において、一度二度のとがありとも、其の人の父祖旧臣の忠功あらば、罪を出して其の科をゆるすべし。古人曰く、今の科をあらためとがめて、ふるき忠功を忘るゝ事なかれと。たゞし譜代新参のへだてなく、大かたの科をばゆるすべし。是れ天命なり。もし大なる罪科には、譜代、新参、出頭、不相口のへだてなく、死罪流刑におこなふべし。古語曰く、大罪おこなはざれば人こるゝ事なく、小罪おこなはざれば、人なつく事なし。賞罰は忠功なきに恩賞あたふれば、讒者去らず、忠功あるに恩賞あたへざれば、忠臣としつかんとも見えたり。さあらば罪は大かたおもくとも、すみやかに許し、忠は大かた輕くとも、すみやかに恩をあたふべし。まことに小功を賞せざれば、大功たゝずといへるをや。つゝしみ給ふべき事。

「昔もろこし秦の國の李斯といへるは、利口才覺のあまりたる人なり。前かどは小身人の家に奉公いたしてけるが、ある時雪隱へ行きてみるに、鼠ども出でゝ糞をくらふを見る。其もとをたどりてみるに、立かへりて後、又藏へ用ありていりみれば、又ねずみ出でゝ粟米のたぐひをくらふを見て、こゝにて分別しけるは、我もねずみなり、住所の善惡によりて食物もよしあしあり、人も又其のすみかの高下によりて、身上萬事の高下あるべしと心得、其のまゝいとまをこひ、秦の國へたち越え、始皇帝を主君といたし、やがて出頭して大名となり、はてゝ後には相國となる。されば此の李斯が賢なる主君へ奉公をすればこそ、此の李斯、又賢人君子もあらそへ、あたら智を空しく、愚主に事へては、愚痴不才の人と成しぬる事の惜しきことを語りければ、されば其の人の奉公するは、時は
たゞ主君をえらみて奉公すべき事なるべし。さりながら利口利根の人は、邪智の道にいりて、すぐなる道にいたりがたし。」とこそ。

「實なる人の言ひては、萬事分のと思ふ事あるは、わしとの事人に至り心得て、大事とて、下る事あれば、あしたあるはなきはせんとふ。それはちと大の時がくる物に勝つて、後にはかたき事を取も、はや其時には、早才覺せざる前よりの事も、少しも大の時の時にはしるべきしとせぬかたりて、まことに心をつけて申されしぞ、ことなけれども行はるゝ

○昔から國に、道林といへる僧あり。この出家馬ずきにして、あまた飼ひたてゝもてり。又庭鳥の玉子をすき好みて、多く食ひけり。ある人の云ひけるは、「たまごをくひ給へるも、馬をもち給ふも、出家に似合はぬ事かな。」と申しければ、此の僧答へて曰く、「我は是れ馬の早きがおもしろし。たまごは水にて作り、まつたく鳥類にてはあらず。」といへり。されば出家の身として、早き物が面白くば、鳥の飛ぶを見てもありたき事、たまごを水なりと思ひて食するならば、元來の水を飲みてありたき事なり、いかゞ。

○昔さる人の云へるは、久しく知音懇したる友だちの中にて、何事にか慾に付けて中をたがふ事、又さまぐ〜雜作をつくして、師匠をとつて物をならはざる事、又年ごろ根氣をつくしながら、述懷奉公する事、又何ごとよく習ひ覺えて、後ふくする事もなく捨ておきて皆うち忘るゝ事、又金銀たくさんに持ちながら、惜しみ使はずして置く事、又内の者に知行ふちかたを取らせながら、述懷するやうに召しつかふ事、みな是れ人間第一のつひえなり。よく〳〵心得、つひえなきやうに分別ありたき事、此の外心得べし。

○昔さる人の云へるは、若かりし時に狐や魚をおほくつりたり。只今其の狐やうなどもの心を思ひやるに、扨も若鼠のあぶらあげにたらされてひきずられ、又うまさうなるゑばにだまされて釣りあげら

れ、かゝる憂き目を見て死ぬる事のうたてさよと、いか計り後悔かなしみけんと思ひあはすれば、人間も又かくのごとし。たゞ人々の身のうへにも、利慾の道に心をまよはし、身をほろぼし命をうしなふ。利慾の道とは、あながちに銀金ほしくおもふばかりにてもなし。官位、栄耀、身のかざり、家づくり、飲食物、家財、手足のうごきはたらく事、ねるもおくるも、見る事、聞く事、物いふ事までも、いふよき程といふを用る過す事、利慾の道なり、つゝしむべし。

○昔ある人、さるものに對して意見を申しけるは、「其方いかにとしてさいへ／＼牢人となり、あまたの主につかへるや。たとひいくたりの主をえらび仕へたりとも、にはかに出頭もせらるまじ。また知行も散々のたに取らるまじ。返す／＼此の後は主君ひとりを頼み、其の家に心をとめて奉公肝要にいたしれ。よも御はばかりへくに身上の富貴なるべし。」といへり。答へて曰く、「仰せまことにいふべくと御意見かたじけなし。されながら綿蠻たる黄鳥は、丘隅に止まると云ふ事知り給へるや。」と聞ふ。「何者も知らぬ。」と云へり。又、「一心をもて百君に事へ、三心をもて三君に事へよと云ふ事知れりや。」と問ふに「存知らず。」といふ。又、「伊尹は五たび夏の桀につかへ、五たび湯王に事へし事、御存じ候や。」と申すにも「それもいまだ知らぬ。」といへり。又、「百里奚が盛衰聞きおよび給はぬか。」といふに、「いや、承らず。」とてやみぬ。

一　昔さる人の云へるは、當世の出家は何として智慧もなく行ひも甲斐なく、いはんや道心の事思ひもよらず。たゞ可欲をこのみ、不知足をもつぱらとし、榮華におごり、飲食をほしいまゝにす。可欲とは、女わかしゆをすく事、不知足とは、金銀珠玉をあきたらずほしがる事、榮華とは、家居をしつらひ、衣類裝束をはじめとして、種々の諸道具を、色々の物ずきにけつこうする事。いんしいとは、めし、さかな、菓子、めづらしき、くひ物などの飲み食ひ物のしなじな、かずかずの料理だてする事。老子の言へるも、罪は可欲より大いなるはなし。災ひは不知足より大いなるはなし。罪とは、思ひもよらけたる所より出で來る、數々のなげき悲しみの事。わざはひとは、思ひもよらぬ所より出で來るしなじなの苦しみうれへの事。佛說に曰く、淫心をたゞずして、生死を解脫せんと思ふは、いさごをむして食となし食せんとするが如く、利念をはなれずして流轉をまぬがれんとするは、つなげる舟にさをさすがごとし。我聞く出家はかしらのかみと共に、心の塵を剃りすて、身の衣と共に、心のあかを墨にそめ、學問修行を勤め、智慧廣大に理分明にして、慈悲ふかく義あつきとこそ聞きし物を」と語りければ、側なる人のいへるは、「それは上代清淨の出家の事。末代濁穢の坊主ども、よからぬこそ道理なれ。其のいはれは、そのかみ出家は、いづれも公家武家の子孫なり、もし又行基ぼさつ弘法大師のごとく、いやしき胎內より生下のためしありといへども、それは權者方便のみせしめとして、自

餘のたとへにあらず。されば末世當代の坊主共は、たゞいやしき百姓町人ばらの子孫、身のすぎはひとしてかたちをかへたるまでなり。さるほどに淨土宗、日蓮宗、一向宗の坊主ども世におほけれど、この宗旨いづれも心やすき法律なればなり。これ公家の子孫、出家となりてよき仔細あり。いかにと云ふに、公家武家の輩は、うまれてよりこのかた、上位に居なれし人を下し、氣すくやかにしていさぎよく、善人に交はれば、おのづから經論、書籍・詩歌、文章、其のほか萬のよき事のみ見なれ聞なれ、理非あきらかに義至る。さる程に十の内、よき事は七八にして、惡事は二三のみ。又町人百姓ばらは、生まれしより下位に畏まつて、人をうやまひ、其の氣つたなくにごりて、惡人を友とすれば、おのづから利にはしり、慾にふける事のみにして、十の内よき事は二三もまれにして、惡事は八九にあまれり。但し公家武家の内、愚癡人ありといへども、百姓町人ばらの愚癡には似るべし。されば經に日く、我慢して後、亂惡かつ爲のために、出家[illegible]と說き給ふ是れなり。」と語れるを聞きし。

一　昔中納言[illegible]卿といへる人、後陽成天皇に仕へ給ひしが、この君惡逆不道におはしければ、種々の諫めを申し上げ、さまぐの御意見をつくしけれども、あへて御しよういんなく、けつく惡逆不道に超過せさせ給ふ間、此の世の中をもかくと思ひさだめ、ある夜御前へまゐり、もろこしの龍逢、比

下、伯夷、叔齊のいにしへなり、よもすがら御物がたり申して、夜もいたう更けにければ、是れをかぎりと見すとり、首頭をたかう出でられければ、大内山の月影もなみだにかきくもり、かへりみがちにて、やう〳〵木ぐらき北山のいはくらと云ふ所にたち入り、不二房を戒の師として出家し給ふ。猶北の山をきこし召し、おどろき騒ぎ、父の大納言宣房卿を御つかひとして、たづねさせ給ふ。父大納言この人のすみかを聞き出し、泣く〳〵たづね行き給へるに、其の夜しも彼の道世人、住みなれし草庵をふり捨て、ゆくへしらず行脚に出で給ふ。さて父大納言たづねつかせ給ひて、事のよしを問ひたまへば、不二房答へて曰く、さやうの世すて人は、過ぎにし暮れつかたまで是れに候ひしが、行脚の心ざしとて、いづち向後も知り候はずと答へけるに、立ち入り此の人のすみかを見れば、やぶれたるしやうじに歌あり、

住みすつる山をうき世の人間はば嵐や庭の松にこたへむ

父大納言文字もさだかに讀みわけ給はず、泣く〳〵かへり給へるなり。誠にためしなき世すて人、當世のは世に捨てられし人なんかし。

○昔ある坊主、わかき女を召しつかはれけり。あるとき旦那来りて申しけるは、いかに此のわかき女は、お寺に似合ひ候はず、何の御用に召しおかれ候や。僧答へて、ひるはお女房衆の御まゐり御あ

いさつの爲、よる〳〵のひまには、せんたく物いたさんとの用意なり。」とぞ申しける。よる〳〵のせんたく物、何にてかあるらん。

口賢き人の云へるは、鹿を追ふ獵師は山を見ずと云ひて、かのしゝゐのしゝ熊のしゝなどを目がけたる獵師は、是非共このしゝを射殺さんと、一心不亂に思ひ入り、おつかけてあるく時には、其の山には、谷があるやら、巖が有るやらん、ゆめ〳〵覺え申さず。正其のごとく當代の貪慾人は、利慾の事に付いては、それにのみ心ひかれ氣がうつりて、慈悲義理禮を打わすれて、後のうれへかなしみを知らず、たゞ物にむさぼりたくはへ侍る。さればある時の事なるに、ぬす人ありてみせにおきたる錢を盗みけり。此の店のぬし此の由を見付けて、其のぬす人をとらへ、奉行所へ引きすうる。奉行御らんじて、汝いかなれば人の有るをも恐れず、だいたんものかなと仰せければ、此の盗人申しこまつて、「さん候、それがし目には、只錢ばかり見え候て、人のあるは夢にも見つけ申さず候」といへるとかや、心得べき事。

「昔さる人の云へるに、若狭國小濱とまうす所に酒屋あり、一とせの酒一しほよく出來して、ならぶ酒なしと、其の上この酒屋のあるじ心すなほにして、あきなひにかけやうもなき事なく、酒道具きれいにして、酒にぶくしは其の數のゑきもあればさやうにあれば、酒もよく賣れべきと思ひ候へば、案

に相違して、此の酒屋のさけをたれ人も買ふ人なし。買ふ人なければ、其の酒共はいたづらに、酒桶まかだるきかへりにのみ有りて、後々はすく甘くなりて、いよ／＼買ひぬしもなく、つひにはすたりものとなりて、大損をとり身上破滅したり。あまりふしぎなる事なれば、其の酒屋の隣の人に、其の仔細をたづね問ひければ、かたりて曰く、「さればあの酒屋の酒、賣れずして皆すたりたる事は、あの酒屋に人くひいぬがありて、つねに門口につくばひふせりをりて、酒買共をみた物にほえ散らし食ひちらし、くひつき申す故なり。」といふ。實に思ひ合はせたる事あり。もろこしにてさる國のあるじ、御心ばせすなほにして行儀もよく、さのみ利慾もふかからず、かたのごとくしかるべき主君におはします。しかれども、いかなる故にや、其の國の侍、町人、百姓、出家にいたるまで、心あるものは皆ちり／＼に、他國へ逃げさり申す。其のいはれいかにと問へば、かの古き人などいひけるは、「さればとよ、此の國には人くひ犬がありて、常に主君の庭前につくばひふせりをりて、出仕忠功の人々を、めたものにほえ散らし喰ひころす、それが危さに立ちのく。」と云へり。彼の犬をいかなる犬ぞと思ひ候へば、かの家の老、出頭人の事なり。されば主君として御行儀よく、御心ざしすなほに、さのみ利慾に耽り給はねども、人の善悪を見知り給はず、當座御氣に入る事をのみ申し上ぐる輕薄、ねいじん、ざんげん、胴慾、不道の奴ばらを取りたて、老、出頭人とし給ふゆゑに、かの老、出頭人

どもゝ、又おのれが同類の軽薄、ねいじんをあつめけるゝ、胴慾、不道の者どもをひいきし、御取りなしを申し取り立て、よき人を悩みそしり、色々のいつはりをたくみきゝへ申して、終には追放し或は打ち殺す。さるほどに心ある人々は、それをいたみうれへて、皆其の家を立ちのくなり。さて、其の後には、終に国家滅亡せり。」かくし分別あるべき事にや。

○昔さる人の云へるは、ある人の破風の紋に、猿を三疋作りつけたり。一つの猿は、両手をもつて耳をふさぎ、一つの猿は、両手をもつて目をふさぎ、一つの猿は、両手をもつて口をふさいで有りける。ある人三人づれにて、此の門前を通りしが、此のましらを見て、「いかなる謂ぞ」と、そこらの人に問ひければ、「此の家の主、萬わるき事にすこしもかまはぬ人にて、よろづ世間の事悪しきに付きて、見ざる聞かざる言はざるの心持にや」とて、此の人々大きに感じ、立ち帰りて、三人に見ざる聞かざる言はざるの願ひを立てたり、ある夕暮のさびしさにたへずしてはて、かの三人庭に出でて木陰に立ちうかがひけるに、折ふし遠寺の晩鐘かすかに聞こえければ、聞かざるの願立てたる人、何となく思ひ出でて、

　けふも日も暮れぬ入相の鐘に罪科はなけれども聞かざるの我

と、ひとり言をうちいひける所に、言はざるの願立てたる人の言ひければ、「いかに其方、聞かざるの願

空しくなりぬる事の淺ましさよと、手を打ち指をさして笑ひ上げけるところに、見ざるの願立てたる人の云ひけるは、さてもかたはらいたくは、何を聞き何事を言ひて、共に大願を破滅するや、おろかに淺ましき事かなと、他人のあやまちをば思ひ知り、あざけり謗すといへども、おのが立てたる見ざるの願をはめつする事をば悟り知らず、まことにおこがましくこそおぼゆれ。されば此の事について、世間の人をいふうへに思ひはかるに、まづ他人の、よからぬ物ごとを愛し好むを見聞きては、其の事をあざけりそねみながら、おのれ又よからぬ事を愛し好みて、他人にあざけりそねまれん事をば、夢にも悟り知らず。古書に曰く、人の惡をそしらんには、おのれがあやまちをかへりみ、人のあやまちを見んには、我が科を悟り知るべしと有るを、げにもく人毎に、我がすきなる事には、惡事あらん事をわすれてそねみあざけるぞ。所詮我がすきなるものには、かならず惡事も有りて、他人のあざけりそねまん所を棄て分別し、又我が嫌ひなる事にも、かならずよき事も有りて、他人の愛し好まん所をかねて分別すべし。さあらば二つながら其の得失分明なるべし。得失あきらかならば、何ぞあながちにふかく好み愛し、さのみ又深くそしり嫌ふべけんや、是れ達人の心得たるべし。それ物毎に得失の有る事、天の道なるべきか。其の仔細は雨はよく五穀をうるほしそだつれども、又田畑を押しながす事あり、風はよく舟をやれども、又舟をくつがへす事あり。其の外水火として萬物を助くれども、又ばん

もつを滅する事あり、よく〳〵工夫思案あるべし。

○昔さる人の云へるは、一つのくせはある物なり、そしりあざけるべからず。されば伯居易と云へる唐朝の詩人も、人皆一癖あり、我が癖は章句にありと詩につくり、我が国の歌人大僧正慈鎮和尚の歌には、

人にみな一つのくせは有る物をわれにはゆるせしきしまの道

何かそのごとく、佛道儒道をきはめても、なほ捨てがたき身のくせあるをや、ただしくせもくせによるべきか、分別あるべし。

○昔さる人の云へるは、賢をば賢をもつて求め、賊をば賊をもつて求むべしといふ古き語あり。誠なるかな、賢人をば其の人見知るべきにあらず、賢人をもつて尋ね求めさせなば求むべし。又盗人をたづねもとめんには、盗人に詰らせて求むべし。つねの人盗人を見知るべきにあらず。

○昔さる所に、貧なる人の碁をこのむありけり。冬のさむき時には碁石をいれてあたゝめにして打ちあそびなければ、柴なんどをたきても打つ。眼かすめば、衣類家財を惜しまず賣りすてて目薬を買ひて、目に病をし直りて、よろひるわかず打ちけり。されば囲碁につくす大事の鍛を机気根をもつて、軍国の用意を好まこの心をよかれん物をや。気根なきぞ、世にかねのある事をし、よき事をよ

なびつとおぼるは、鐵々氣根つよきにはいりまして、其心ざしのなきなり。

〇昔さる人の云へるは、世間の人々好き好みもつておもぶ事、小唄、三味線、すごろく、しやうぎ、まりの勝負事、女、わか衆、茶の湯、大酒、鵜、鷹、飼鳥、とうゐう、かぶき、悪口、表裏、輕薄、けんくわ、こゝのくに、尺八、箏など。もし又此の類をすきこのまぬ人ありといへども、いたづらにひとりとほとなる事をすき好むか、或は書籍なんどをすきこのむ人又世におほし。かくさまぐにすき好みて、はてには財寶をついやし、或は病を生じ、身命破滅する事をしらず、悲しきかないたましきかな。右のすき好み愛しあそぶ心ざしをもつて、儒學佛學をすき好まば、現世無悲後生安樂ならんべき物をや。

〇昔さる人の云へるは、今時世間にて、あの人は萬事へつらひなきとほめらるゝ人を見聞くに、みな慮外くわんたいをも知らぬあぶれもの共の、不禮をはたらく人なり。又禮儀を知り、いんぎんなるつゝしみ人よと云ふを見聞けば、皆もつて時めく人のあたり、へつらひまはる表裏輕薄の人なり。又底の心はあくまでへつらひながら、うはべにて露塵へつらはぬ體にもてなし、不禮にしてすねまはる人もあり。

〇昔さる人の云へるは、諸侍の善惡を見知らん事は、何よりもつて大切なる事ならんか。さりながら

老の親に孝行なるを見聞いては、其の人かならず主君に忠節あらんと思ふべきか。又[illegible]ある人のおひ[illegible]にあはれみ情深く、人の恩を感じ忘れぬを見聞いては、其の人かならず主君のおいめを見放しず、い[illegible]、いかなる艱難辛苦をも見とゞくべきと思ふべきか。又ともだちの中よくいつはりなく、人の[illegible]を見聞いては、其の人かならず主君につかへて、陰口あらじと思ふべきか。もしかやうの人あらばいそぎ知行金銀を取らせ、情をもかけて召しつかはるべきか。また若き、出頭衆も御とりなしを申し、[illegible]にいではり給ふべきにや。たとへば目の前にて、[illegible]利[illegible]、物言利口お覚だてを仕るとも、能く〲そこの心を見させ候はば、十人の中八人は、[illegible]ばかりたるべし。かやうの人は[illegible]利[illegible]にふけ[illegible]、人の[illegible]を捨し[illegible]、うときしたしきかしわ[illegible]、義理[illegible]思[illegible]知[illegible]めれば主、親、兄弟、[illegible]の[illegible]事[illegible]ともに[illegible]国[illegible]人を[illegible]、主[illegible]御[illegible]出頭衆もよき[illegible]と思ひ、めに[illegible]取り[illegible]のか[illegible]悠不道の心底を、随分よき事と思ひ自慢をして、いよ〲悪逆不道にな[illegible]、長頭裝束[illegible]、百人の内八九十人までに[illegible]なりて、此

の心操をにせまなび候間、日を追うて世上諸侍のかたぎいやしくなりもてゆく、いたましき事悲しき事。

○昔それがし、ためしのよろひを威し候はんとて、註文を仕り、おやに見せ候へば、親の申され候に、ためしのよろひは重き物にて、汝がやうなる小男の用には立ちがたし。侍の諸道具は其の身其の身に相應して、取りまはし自由なるがよしとて、其のついでに語られけるは、汝が母方の舅、東禪寺右馬頭つねに申されけるは、運は天にあり鎧はむねに有りとて、幾度のかつ戰にも、あかねつむぎの羽織のみうち著て、何時も人の眞先をかけ、しんがりをしられけれども、一代かすでをもおはず、一とせ出羽國莊内千安合戰の時、上杉景勝公の軍大將本莊重長と走せあはせ、勝負を決する刻、敵大勢なる故に、四十三歳にして打死せられぬ。其の時本莊重長も、星甲のかたびん二寸ばかり切りおとされ、わたかみへ打ちこまれ、あやふき命生きられぬと承りしなり。切れたるも道理かな、相州正宗がきたひたる二尺七寸大はゞもの、ぬけば玉ちるばかりなる刀なり。此のかたな重長が手にわたり、景勝公へまゐり、それより羽柴太閤公へまゐり、其の後當御家へまゐり、只今は二尺三寸とやらんにすり上げられ、紀州大納言公に御座あるよしを承りおよび申し候。此の右馬頭最期のはたらき、出羽越後兩國において、古き侍は多分見聞き及び知りたる事なれば、仔細に書き付け侍らず。

昔ありこしに、太公望と申す大賢人あり、周の文王と申す聖王、渭濱といふ濱邊へ狩に出で給ひて御覽すれば、白髪なる翁の、すぐなる針ばかりにゑばをもかけずして魚をつりあぐる。不思議の翁とおぼし召して、「いかに老人、世間の人の魚をつるは、まがりたる釣針に、かうばしき餌ばをかけてこそ釣れ、汝いかに」とたづね給へば、答へていはく、「我は天のあたへの魚のみ釣る故に、すぐなるつり針にゑばをかけず、うき世の人曲りたる釣針にかうばしきゑばをかくる事は、心正直ならず、利慾にふける故なり」と云ふ。文王のたまはく、「老人には妻子ありや」と。答へて、「妻にも子にも別れてたることも申す。」文王のたまはく、「老の身にひとりあられ事、さこそうれへ多かるべし」と。答へて、「妻子にわかれ、此の身の隔たる事を憂へず、只天下にみかどなきことを憂ふる。」文王のたまはく、「當世殷の紂と申すみかどおはしますに、いかんぞ帝なきといふや」。答へて、「殷の紂は悪逆不道の人にて、帝のみかどならず、臣の位に似たるものなり」と。文王此の詞をきこしめし、いかさま此の翁は、大賢人なることを悟り知り給ひて、御車の右に打乗せて歸りたまひ、師匠大臣とあふぎ尊み、天下をたやすく治め給ふ。又傅説といふ大賢人は、日用をとる堤をつくり、人足の中より尋ね出されて、天下ををさむる宰相大臣とされけるも、しかればよき人は、いかなる所にもこれあるものと思ふべきなり。

昔より人の言ひけるは、人はたゞ友によること肝要なり。大聖孔子の御詞にも、いまだ其の人を見ずし

て、其の友を見ると云ければ、はづかしからぬ事かは。古き歌に、

　友なしの人の問とふて長居するは偏にあるより侘しかりけり

けにとく/\無相口の来りて、のみ/\と話しかゝる時には、心なきはほれ/\くびおぼえ、聞て退屈すれ。かくもの人来つてのかり/\と話しかゝる時には、心うきもかに物おもひをしくおもしろしとはあらはなん。りま善友ならば、なれなつかしき事ならずや。世間をうかゞひ見聞くに、大名も、小名も、位なききも位、才智あるも才智なきも、老いたるも若きも、貧者も福者も、みな友達持ちたる人更になし。たれ友達と云ふは、位あるにも、物知りにも、大身にも、福者にも、[illegible]たれまで、又位なきも、物知らぬなも、小身なも、貧者なも、いやしみいとはず馴れむつび、悲しき事うれしき事、はづかしき事こそあれと思ふ事、たがひに包まず皆うち語り、心の底なく善悪を吟味して、其の悪をいためなくひ、其の善をよろこびすゝめ、いかにも懇切にして、日を追うてしたしかるべし。されば朝夕肩をならべ、ふざけなく詞をかはすは、當座同輩のまじはりにて、友だちとはいひがたし。其の仔細は、我よりうはかなる人は、我をいやしみあなどり、内のもの間然に思ひこそすれ、まことにもてなし、こんせつにして悪をすくひ、善をすゝめんとする人はなし。さあればいかほど親しぶりなりとても、友達とはいひがたし。又我より下目なる人は、ともかくも我が氣にあはんとおもひけのおりゑ

取り、よろづは善をやめてこそ好まれ、悪をも心に細かせ、善に至らせざらんとする人はなし、さればい
かほど心安き事なりとも、友達とは云ひがたし。いはんや大名、高家、隠者においては、なほさらか
やうにては貴人其の事を嫌はるるはずなり。常に顔つてはいひがたき人数にも見えければ、なを其
後、高家、ことごとくの人は、あるいは事の立ちゐるほどの事、我が思ふ所の事にましたる事は何になしと
の心をはげしく、落葉をまきたる事のみ取りおこなひ、善事は言ふにもおよばず、悪事は申すにおよばず、其
よりふかく若し父をも悪しといひたる其意へて、いひたてる意見をする人あれば、いかなりとも少しなり
て、いたずらに親ふりし、進退けおきてをそむきにしたがひ、家内の人々友せずなりぬ所にも出入
りとまで見ゆれども、きのふは好み見習ふ人々、身の上を知らぬ人さへ、よくよく存のあきれぬ
ども、其の内をいひたるをすむる人一人もなく、心に打ちあはて、至極不思議にして、さるほど
はとにかく身を破滅し、おのれが精心の心を根をば、事と、人ひとのあはれむ、ひとつとしては友達のな
めし、心術四つにおのが目に見えて、いと哀れにもござんなれ。近き年月に大名、高家、隠者の、身上に
みえたる其の元をかなしめ、よくよく是を知るべし。

口惜しき人のうきる世、いつもなり世間をかくして友たちもとりつきて、其の人々にまた末のするまで
なき人々とおもへばかり、万事ついかにして、田夫野人の月花を見ること、又絡まりにたいして、爰は

らしき人かと見れば、名利にのみ耽りて實ならず。又心詞おとなしすくやかに物やさしけれども、あまりにひいきづよく、還つて其の友をあやまつも有り。是れ又まことに下らぬことばに、ならばかりよく一家押したふすといへり。

○昔さる人の云へるは、佛道諸法の空と云ふは、一念不生の空無染の心なり。永嘉大師の曰く、豁達して空なりと、されば近年聖教もしらず道心もなく、勤行も辨へぬ愚俗人賣僧坊主ども、つたなきおのれが情量を以て、空の道理を心得、因もなし果もなし、萬事みな空なりと云ふ。此の空は是れ惡取空の大邪見、信ずべからず、いましむべし。されば一念無念なりといへども、念を起して無念とおもはば、則ち有念となるべし。又念をおこして一念不生と知らば、是れすでに有生なるべし、まことに甘露を毒となせり。

○昔天竺の勝軍論師といへる人は、内典外典の明匠にして、世を遁れ杖林山と云へる山に引き籠り給ふ。大王是れをきこしめし、國師の位と十八ヶ國の朱印を遣はされて、色々召し出させ給へども、ついに出で給はずして、御つかひへ申させ給ひけるは、「それ人の祿をうけぬれば、かならず其の人の憂へを我が憂へとして憂ふ。我たまたま人間に生まれ、生死のきづなをたたんと思ふつとめ切なり、いづれのいとま有りて君に仕へんや。」と固く辭し給ふ。まことに人の恩賞をかうむれば、奉公人とな

りて一生他人の身がはりにたち、我が身體自由ならず。しかるをおさへて自由ならんとすれば、恩賞を知らぬものとなりて、其の科のがれがたし。さあれば一生我が體を滅却して、おのが一分の辛苦憂への上に、また他人の辛苦うれへをかさねあづかる。されば夢まぼろしの世をわたり、露電の身を養はんとて、佛體をなやめ佛心を苦しむる事おろかなるべし。實に／＼人奉公にありては、大身は大身、小身は小身ににせ、相應の辛苦憂へひまなし。さあれば現世のたのしみは、露霜とあだに消え行くのみならず、一生其の事にまぎれて、後生のつとめ思ひもよらず、やゝもすれば罪業のたねのみつくり、かさねて菩提の心は忘れやすし。されば名利は我が心身をたすけ、榮華を極むるのみ思ひとりて、名利の爲が心身を苦しむる事をば、夢にも知らず、誠に悲しむべき事とはわきまへず、ひたすらかかる一身のならひごと、思ひなしたる人の淺ましさよ。

○昔さる人の云へるは、たれ／＼も人として慾を知らぬはなけれども、あまりに慾のこまかなるは悪し。江戸の片原にある町人あり、利發才覺だてをして、算盤の上手なり。幼い子をたゞ一人もてり。其の子にはかに腹おほきになり、大便つまりわづらひけるに、よきくすしには見せたれども、後の藥代をいとはり案じわづらふ。爰にやぶくすしあり、あいよのくだしを調合して、一粒を代物一錢づゝに賣る。其の町人きゝつと思ひ出し、此の藥を買ひて吞ませばやと、此のくすしのもとへ行き、一粒を

一文宛におまきやれ」と、面々あつめてねぢりこびければ、とはず、うそなれば一粒や二文におまきや
れ」と、ひれもの呼びけるに、折ふし錢はつかひ用なり、さらばとて二粒三文にまけて賣りぬ。嬉し
くて獨り笑ちおへり、此の錢を一度に二粒、あるいは三粒づつ呑みまじなれば、なじかはもつ
ぬ、たてくだしにくだして、一日に七八十たび、いとはなき腹中空しくなりぬ。

○昔さる人の云へるは、奉公の心得と云ふは、いかにもして主君の御氣にちがはざるやうにとたしなむべし、御氣に入りだてをせば、必ずおちどあるべし。

○昔さる人の云へるは、當座は身のため迷惑なるやうなれども、後には身のためよき事あり。主君の御前にふだんつめての奉公、したしき人の意見、よその世のかゐ、さてまた三つ、あ治武藝、此の外あげてかぞへがたし。われは我いやと思ふ事のうちにあつて、わがすきたる事をせぬやうに。

○昔さる人の云へるは、いにしへの侍は、十能七藝などならふといへども、今の侍はそれまで知らずとも、そのみ昔しかるまじ、されば去らならひ知るべき事は、弓馬、兵法、手跡、さつほう、しつけかたなるべし、亂舞など知りて惡きにはあらねども、此のたぐひかならずすき過して、それしやのやうになる物なり。一とせさるお大名、殊の外能をすき好みたまへば、其の家の諸侍皆、まひ、兜、太刀、かたな、弓、槍、鐵砲、馬、くらなど賣りすてて、太鼓、つゞみ、うたひの本、いろ黑

[illegible]時のおもて[illegible]實[illegible]、偏に觀世今春[illegible]人民[illegible]

そありつれ。

○昔名大將と聞えし程の主君は、城郭をこしらへ用心きびしく、人民を[illegible]して、[illegible]のへだえをせぬとなり。誠なるかな、とほくは[illegible]右大將頼朝公、[illegible]時頼公、近くは甲州武田信玄公、[illegible]かまへなり。これは尾州織田信長公、近江安土の城[illegible]、[illegible]夜に滅し給ふ。[illegible]の時は[illegible]、[illegible]其の城郭[illegible]時、其の城郭にたてこもると云ふ[illegible]、運命[illegible]

[illegible]古今たれ人[illegible]案[illegible]は、城郭の用[illegible]

軍法をきはめ、[illegible]時味つよくあきらかにして、恩をあたへ情をかけ、よき人をえらびて老、出頭、諸人[illegible]、諸人をあはれみ[illegible]するなるべし。武田信玄の御詠歌に、

人は城人は石垣人は堀なさけは味方あだは敵[illegible]

○[illegible]大將[illegible]ものあり。ある時人々よりあひ、[illegible]

呑みて、呑みじにに死したりけり。腹をさきて見るに、へうたんのごとくなる物、あばら骨の下にあり、取り出し大釜にていりて見れば、いくらとも知らず酒わき出でたり。あることにもためしあるに似たり。さる病者、香油を好みて、一度に五升づゝ呑めば一段氣立てよし、のまねば氣色惡し。名醫有り、雄黄を水にたてて呑ませければ、右のごとくなる蟲下りて後へいのせり。蟲を油の中へ入れ侍りければ、動きはたらきて、其の油を皆すひかわかしぬ。

〇昔それがしのおや申されけるは、人のうき世にあらん内は、河をわたる心もちすべし。いかにと云ふに、河をわたらん時深きと知らば、はだかになりきる物をいたゞき、用心して渡るべし。又淺きと知らば、もすそをよきほどにかゝげ、用心して渡るべし。さあらばいづれもあやまち有るまじ。さればふかき河をみそこなひ、うか〳〵と渡りたらば、かならずあやまち後悔あるべし。又淺き河を深きと見そこなひ、あかはだかになりてわたらんも、用意こと〴〵しくて、人のひはんもいかゞあらん。さりながら淺き川をふかきと見そこなひたるは、當座の批判ばかりにて、身命において憂へかなしび後悔あるまじ。深き川を淺きと見そこなひ候はば、かならず身命において、憂へかなしみの後悔あるべし。よつて世をわたらん心得、淺深つゝしむべし。

〇昔さる人の云へるは、侍と生まれ出でたらん人は、少しづゝなりとも佛道儒道に心がけべし。其

の仔細は、生まれつきの胴欲悪の人なりとも、佛道儒道にもとづき候はば、少しは心中やはらぎきれいなるべし。いはんや少欲少悪の人をや。たとへば衣類装束は花をかざり、金玉をちりばめたりと云ふとも、心中かたくなにしておごり候はば、錦のふくろに糞を入れたるごとく、打見はさしも見事なる袋と思ひ、手にとり開いて見る時、うちに糞あらばいかゞあるべきぞ。もろこしの楊貴妃、西施、我が朝の小野小町、ときは御前など云はれしうつくしき美人なりとも、心中かたくなならば、たとひ一たびは戀にうかれ思ふとも、つひにはあきはて醜かるべし。

○昔をあはれむ人の亡き跡ばかり、物かなしきはなし。されば駿州大納言公の御殿づくりは、あつぱよつぱれ昔の事なれども、秦の阿房宮もこよなうかゞやかし、いかなる事によりてか、幾程もなくいたづら事になりぬるも、夢のごとくあはれのやうなりしぞかし。一日秋のすゑつかた、古きあとをと分けなもとはべりしに、八重むぐらはもぎまじりにうちなびき、名も知らぬ小草の花色々あらそひ、むやうむやうたる露もすそをぬらして、はゝきゞのこずゑ寂しく、むら鳥すらも、亡が秋とや心得て、なくねもかれ心細げに、さし固めたる門のまへ、いひあはせつゝある木の根に、そよ〳〵とうつり果てて、たれかさしこむる事もなく、こしかた思ひ出でて、

草埋回亭似瓜田　　雲樹深々諸鳥眠

秋葉隨レ風自來去　更無二人馬侍一レ門前一

○昔さる人の云へるは、當代いづれの家の侍の物語を聞くにも、皆主君をわるくきたなく取りざたせらるゝにはいかにと問へば、慾が深く、おほしまするとて申す、實にもく、慾心ふかくおはしまさば、とこそいはば、萬事の事いかにもあるべし。さりながらわるきとばかり申しやうは、其の仔細に、よろづのあしき事をたゞ仕へる人の善惡をうかゞふべし。當世の侍はおのれがよわるくして、主君にも見立てられまゐらせず、かへつて上をうらみ惡口す。其れ程わるき主ならば、とくして御いとま申し上げ出でてき事なり。しかるに牢人するは迷惑なり、其の家にをれば物をたまはるとて、いかにも惡口申さるべきぞや。たゞ幾度もわが身をかへりみ分別して、實に御家なるならば、とくく牢人いたすべし。すなはち件人の主君と申し奉るは、どれくも正直正法の御生まれつきにて、牢せず、其の家の老、出頭、役人、御友達などの、惡きにひかれてわるくなり給ふ、いたましき事也と言

○昔さる人の云へるは、當世のわかき侍に、武士道を吟味し、剛なる心がけをたしなみたしといへば、朋輩に遊びくし、少しの事にも小ひざをはり、眼をみはり腕立てをし、詞をあらし、いはれざる惡口して、けんくわずきとなり、犬、猫、庭鳥のよりあひのごとし。されば武士道の吟味と云ふはうそをつかず輕薄をせず、ねいじんならず、表裏をいはず、どうよくならず、不禮ならず、物每自慢

まず、おごらず、人をあなどらず、不奉公ならず、ほうばいの中よく、大かたの事をば氣にかけず、ただ弓矢に心がけて人を取りたて、慈悲ふかく、義理つよきを肝要と心得べし。命惜しみを
く侍には、いかでか、命を惜しまぬ事は、時により事に當つて、出家、百姓、町人、皆かた、こうじき、女等、百姓などいふ同輩なり、只、侍としては、仁義の二つを大せつと分別致すべし、たとひ當座の口論無口にても、あやまつては首尾のみにとらわれ、仁義の二つにいたらん人は、かならず大將共になるべし。

一、古き人の言ひしは、いまの人々をする世の人を見るに、まず人の會釈をし、功者だてをいたし、理屈のみいひたて、分別がほをつくり、人を二度思をする。其の詞にいはく、主君に忠功をなせ、又は親に孝行をせよ、主君に付く者に恩賞をあたへ、人をさけかけよ、父母に子ともによれ物、てまひ、馬、兵法、もつけいに大事なる此の節、折檻をいたす人、是は常にうけのがれ、常は見にしたがひ、仁義をいひたはの公て真をもつては、男は女に近よらず、女は男をはなれ、一、仁人は若きをそしる、若き人は老いたるをうやまはず、富貴にして知らず、あのさかおしおれて、つらはず、物知りたりとて愚者を笑はず、愚人にて物知りをそしらず、賢人大身にて諸人をいやしまず、下として上をあなどらず、一心、天下に我身こそ人のものも、義理つよく、我なれ、あるいは、隨喜の道なるまじき

りて、佛法を捨つべからずなどと申さるゝ、打聞いたるとほりは、しかるべき人めけども、近よりて見れば、皆其の口と相違したる心中行儀にて、けつく意見をいひ聞かするわかき人よりも悪人なり。所詮たゞ他人に意見をいひ聞かせんより、まづわが身に意見を云ひきかせべし。

○ある人の云へるは、それ聖人の定め置かせ給ふ如く、萬事時にしたがふべし。いかにと云ふに、先づ春は花が咲く時なり、秋は紅葉する時なり。しかるを秋になりて、いかほど花をさかせたく思ひねがひても花は咲くまじ。又春になりて、いかほどもみぢをさせたく思ひねがひてもなるまじ。又夏はあつく冬はさむけし。しかるを冬はあたゝかに、夏はすゞしくあれかしと、いかほど願ひ思ひても、叶はぬ事なり。又人死するも生まるゝも時あり、死なざるも生まれざるも時あり。しかるをいかほど死にたくなくとも、死ぬべき時いたりなば死すべし。いかほど生まれずにあれかしと思ひねがひても、時いたり候はば生まるべし。是非とも死ぬべしと思ひ定めたりとも、時いたらずば死ぬまじ。是非とも生まれよかしとねがひても、時いたらずば生まるまじ。又夜を晝にとねがひ、晝を夜にとねがひたりとも、かなふべしともおぼえず。たとへば位のたかき王殿、天下をとる將軍殿、智恩才覺利發ぶへんほまれの人々も、この願ひは叶はぬ事必定なり。この外貴賤貧福よろづの事、みなしかなり。してまはりたる事なれば、いかほど思ひねがひても、叶はぬ事と思ひ定むべし。されば、こそ萬端時

にしたがへばよろし、但しあしく思ひなば、是れもむつかし。

○昔さる人、友達のひとり子のもてる秘蔵の笛をかりて吹きならし、もてあそびけるが、なにとなきてすさみのあまりに、笛のなかへ指を入れたりけり。しばらくして、ぬかんとするにぬけず、是はいかにとあわてふためき、ぬかんとするに猶ぬけず、始めこそ人目もはぢらひてかくしけれ、後々はせんかたもなく、面をあかめ汗をながして呆れはてぬ。妻や子供ゐうちの男女走りつどひ、いかゞせん、只水を入れよあぶらを入れよとひしめき、引きぬかんとすれば、指きれておつるがごとく、いたみさけぶにせんかたなし。かゝる所へ彼の笛のぬし、未だ十歳ばかりなるが来りて、此のよしを見るよりも、「いかゞいかに」と問ふ。ありしかく〳〵の由、面目なしと答ふ。此の子いふやうは、「何か苦しう候べき。いでとく〳〵取り出して参らせん」と、この笛を惜しげもなくみぢんに打ちわりければ、指の節に皮むけて血になり、油や水にはとけでもなかりけり。されはもろこしの司馬温公といへる名誉の人、七歳のとし瓶のあつ中へわらはべの落ちて死ぬべかりしを、石をもつて其のかめを打ちわり、たすけける才智を感じて、是れを撃甕の図と號して、ためしなき事に語りつたへ、繪にもうつしとめしぬ。いざさらば是れをも割笛の図といひつたへ、繪にかきなましや。

○昔さる人のいへるは、唐國の名大將たちは、人の國所を取られたとても、あたと合戰をはじめて、其を

つかさかし人の命をうしなひ、國所を亂らし給はぬとなり。其ほかの一とよ尊みたし給へ。其ほかりごとと云ふは、敵の方にての武略、智略、計策などといふおこなひを、こなたにてよくさとるりやうして、其のてだてのならぬ様に、こなたにて又てだてをする。或はこなたより合戦をしかけて、切つて取らんとする人の國所へ加勢をもしつべき人の國所へは、皆こなたよりざんげんへうりを入れて、其中をあしくし、或は我が敵とする國所の主を、其の國所の諸侍百姓町人ばらまでも、ことごとくあきはて、嘲りそしる様にしなしいひなす。或は武道具、兵粮などの用意がなはぬやうにする、右此のてだてにても叶はぬ時には、天運をはかり合戦をはじむる事もありとかや。

〇昔さる人の云へるは、いづれの御時いかなる人やいひたりけん、さる國のあるじは糞には劣れり、その家老はねずみのごとし、出頭衆は南蠻流といふものなり。其のいはれは、先づ糞と云ふ物は、田地のこやしとなりて五穀をやしなひ、貴賤萬民を養育し、身命をたもつなり。されば國のあるじとしては、萬民をなづけ、人の身命息災に、國家をうるほし給ふこそ正道なれ。是れには引きかへて貴賤萬民を苦しめ、物の命をめたと殺害し、萬惡逆不道におはしける間、後には國家衰微し運命盡く、さあらば糞におとりたる事必定なり。又生ある物の中に、ねずみほどよしなき物はなし。いかなる物もしまんに藥などに用ゐる事もあるに、ねずみに於ては、人の毒となりあたとはなれども、藥とはな

らず、又何の用にも立たず、千萬に一つ、妙藥などにもちゐる事ありといへども、一ヶ年に一人のき
こしめしたるためしもなし。されば狐ほど人のあだとなる獸も稀なれ。其の仕業は、食物のためか
は、いかなる術ありとても、そこらほりても、食物ありと思へば、我が置き所のわるきにと思ひかへす事
もあるに、又亭の内の材、屋根、障子、小細なども食ひやぶりて、ことをかかせ迷惑をさする事、其
の道理一つもなきに、すべからずかしこき事なし。かかる獸に鼠をば穴を求めて、火を入れやきころしたく
思へども、しかし其の火あまりて、家をも燒きやせんかと恐れあへぬなれば、憎しくしと思ひながら年月
を送る。是其のごとく、仁義を知らぬ家老衆は、諸人の藥とはならずして、かへつて諸人の大害とな
り、あだとなるものなれども、さる類につき殺し切り殺したくは思へども、主君の睨みたるいかがと恐れ
あるゆゑに、いふべき折も口をとぢ、見る目もふさぎて堪忍する。しからば鼠に似たると云ふ事、もとも
なり。又末席にては、いかなる心がけも人なりと、心中誠をつくして、才智もあるかなれば、ふさ
人として奉公する。日本にては氏系性をただして、善人として奉公する。武士にてはうつくしき小袖
と申す。三々宗家をうけて、身をわすれ、輕薄美談をこのみ、不才をもつぱらとするゆゑ、善人として尊
敬せず。聞く人もいとはれ、田舎衆も、けいはくへうりなき人とて、主君の御氣に入り、重宝せられて、定
めて、目のこゆる繁多なれども、人をいやしむ人のあるゆゑ、たとへ我よりまさりて利發才智なる人

あれば、其の人より優りて利發才覺なる人の噂を、語り出して引きくらべて、此の人などには及びもないと云ひし悪口、一切言我より下あなる人と思へば、頭くだしと云ふものに一日に悪口す。

○昔さる人の云へるは、取りこもりのものあらば、あわてて人さきにぬけ出で、走せつくべからず。其の仔細は、見る人もなきうちに、いかほど身命をすてて打ちとめたりとも、他人其のはたらきを見ずんば、てがらとも云ふべからず、かへつていかやうにしてか打ちとめたりなんどと、嘲られんも詮なし。又うちかねて人のよりくるを待ちてゐたるも見ぐるし。さるほどによき時分にかけつき、敵いくたりと見聞き、味方に心を付けて、飛び入りてうつべしと語りければ、そばなる人、さやうにあとさきふまへ、用心せば何かよからん、只人さきにかけつき、身命を忘れ、無二無三にとび入りてうつべし。若し人はかやうに心がけずば、何時も首尾にあふ事あるまじきといへり。

○昔さるかたへ参りたれば、名所の露といへる題にて、人々歌よめり。我にも一首つかまつれと、召し出されて辭するに所なく、いたじきの邊にはひありきて、かく申し出でぬ、實にも四の煩ひ八の病におかされ、こしのをれたればなり。

宮城野や月の下風露ふけば神代もきかぬ玉ぞみだるゝ

○昔さる人の云へるは、けだものがりして身命を送る獵師、狸やうさぎなどを取るべきために、犬を

ひさうして飼ひたてぬれども、けだものをみな取りつくして後、一つもなき時は、犬をはなち入らさる物とて、其の犬を打ちころしてうちくらひ、皮をはぎ取りて用を達す。是れをもつて思ふに、日来は合戦有時に身命をかへりみず、御用にたちたる侍も、合戦有時の用が絶えてなければ、一言の情をもかけ給はず。いはんや一分の恩賞にもあづからず、かの玄関廣間のかたすみに押しこめられ、たうざ御気にあひたる出頭人、傍若無人に鼻をたかめておごりあへり。されば、かの忠功の侍は、かの出頭人の軽薄、表裏、ねいじん、胴慾にして、無慈悲、不礼、不義理なるをいたみ憎むによつて、又かの出頭人も、かの忠功の侍を憎みをなして、昔の[illegible]の装刀などをあざけりわらひ、折々に讒言をいたす。一度二度こそ主君もまことしからずおぼし召され、二十度三十度に重なれば、つひに誠とおぼしめし、侍ふみな忠功の侍、あるひは追放せられ、又切腹す。惜しかりしいたはしかりし。されば、讒言表裏者をば、則ち悦び召し出し、家老、役人、諸侍には其の是非を聞かで、正直にせんさくし、非道の方をすみやかに成敗あるべし。のみならず、出頭人なりとも、ひいきの心有るべからず。されける表裏者は古今まれなる物なり。一とせ大納言雅房卿と申して、才覚かしこくかしこき人あり、院の御前よく、やがて大将にもなすべきとおぼし召しける時、此の雅房卿を日来にくしと思ひける人、或時院の御前に参りて申し上げけるに、只今浅ましき恐ろしき事を見て候と申しければ、

何事につけても人を信仕せ置まじき事、心易き輩にこそ、膳に毒をあはせて、生きたる鳥の足を片々切り業
しつる事、ましてや主君として申しけるもの、或はさてうとをして情けなく召し、御前あへされ
たり。其の匡房卿日記をうたがひかなをまきて指をれけれども、犬のあしを江切らされけり。
○昔さる人の云へるは、よろづの物を見聞く時に、其の物をつくづくと見聞きをれば、かならず其の
物に氣うつりて、首をかたげ口をあき眼かすみ、うかうかとなりもて行く、よその見る目いと堪へがた
くみえし、心得べき事。
○昔されし時大田右近と申す者、折ふしに合戦のやうすを語りて聞かせられけるは、若きものの合
戦の時に出でたる時、我とはおもはずして、我ながらたれか一番槍を合はすべしと、我よりさきには
一人も味方見えずと、無二無三に前後の分別もなく、思ひきりたれども、又いく度合戦に出でたるとも、此
の度ばかりあなたと思かり思ひて、あとさきの壁てでからかみつつでし。下を負ふ事は其の時に通に
まる、矢鐵砲のふるごとくなる中に有りても、運つよければかすでをもおはず。されば古語にも、
よく陣するものは死なず、能く死ぬるものは死なずと云ふ事あり。
○昔さる陳孔章といへる賢人の云へるは、人に逢ひて物がたりせんに、上語らふと思ふとき、二
つにつはせ語りて、罷め出づべし。其のいはれは、むかひの人語りのしきぬ時も有るべし。さしあひ

ある人のをる時も有るべし、暇[illegible]時もあるべく、[illegible]時も有るべし。[illegible]に[illegible]しと引き[illegible]れ、[illegible]、[illegible]もあるべし[illegible]花も、[illegible]面白けれども、胸の[illegible]上にまとひ[illegible]、かへつてわさき心地ぞする。其のごとく、はなしも時によりて興つくる物な[illegible]ふ[illegible]き中に、いかなる隔てか[illegible]、[illegible]油断を大敵と思ふべし。[illegible]時にはやく、[illegible]忍[illegible]大事出来[illegible]火の燼の内にもえるときは、[illegible]ども、家をやく時は有るべし。[illegible]馬に[illegible]はそ道を行くか、又は一つ橋をわたる時は、[illegible]下馬をせよ、上手[illegible]は有る物ぞ。山路の[illegible]所を辛苦に思へし、[illegible]は[illegible]中にも、あまりに氣をゆるし候へば、ならず日[illegible]朝暮になれなれば、[illegible]不[illegible]によりて、いつぞの程に、[illegible]に見限り[illegible]うとき中となる、心得べしといひおけり。

○昔さる人の云へるは、人間において時節の[illegible]を分別し、心得[illegible][illegible]時には、秋の[illegible]時を[illegible]、秋の[illegible]には、春の花咲[illegible]ひ、冬の[illegible]むき時には、夏の暑からん時を思ひ、夏のあつき時には、冬のさむからん時を思ひ、雨ふ[illegible]ば晴れ[illegible]き時を思ひ、晴れにある時には雨ふらん時を思ひ、物をならふ時には、ならはざ[illegible]を思

ひ、奢はさる時には、奢りし時を思ひ、すりきりおちぶれたる時には、富貴なる時を思ひ、富貴なる時には、すりきりおちぶれたる時を思ひ、奉公の時には、牢人の時を思ひ、牢人の時には、奉公の時を思ひ、よき事ある時には、悪しき事あらん時を思ひ、悪しき事ある時は、よき事あらん時を思ひ、わかき時には、年よるべき時をおもひ、年よりたる時には、わかき時をおもひ、無病なる時には、わづらはん時を思ひ、わづらはん時には、無病なる時を思ひ、命ある時には、死ぬべきことを思ひ、死ぬべき時には、命ある時を思ひ、臆病なる時には、剛なる時を思ひ、剛なる時には、臆病なる時を思ひ、大身なる時には、小身なる時を思ひ、小身なる時には、大身なる時を思ひ、不忠功なる時には、忠節の時を思ひ、忠節の時には、不忠の時を思ひ、不孝のときには、孝行なる時をおもひ、孝行なる時には、不孝の時を思ひ、人のしたしき時には、うとかりし時を思ひ、うとき時には、したしかるべき時を思ひ、をさまりて靜かなる時には、亂れて騷がしかるべき時を思ひ、みだれてさわがしき時には、をさまりてしづかなるべき時を思ひて、少しも油斷すべからず。

○昔もろこし郢の國の貧者、雨ふる時にかぶる笠をつくりならひて、身命をつがばやと思ひ、ひた物つくりならひければ、其の年天下日照りにして、かさの買ひぬしなし。買ひ主なければ身命つぐべきやうなし。さあれば笠つくりても益なしとて、つくりならふ事なし。所詮當年は日でりにて水がきれ

ぐく、さあらば深井の水を汲みあぐるはねつるべを作りならはゞやと思ひ、つくりならひければ又天雨ふりて水充満せり。しかれば、はねつるべの買ひ手もなし、買ひ手なければ身命つぐべきやうもなし。さらば弓矢を作りならはんと思ふ時に、其の国俄に合戦ありて、武具をこそ用意しけれ、弓の買ひ手もなし。其の時武具をならはんと思ひけれども、にはかにしならふべきやうもなくて果てたり。これほどに人はたゞ、おのれ一ぶんの所作を、前後まで思ふべき事なり。

一 禅宗の僧と、くらべの山伏が出の山ぶしとあらそひけれ。僧問ひて曰く、「お山伏は何をか奇特のことゝとし給ふ」と山伏にたづねて曰く、「我いやしくも此の年月、不去不来の道にいたらんと、こゝたい難行の法におこなひ、けがらはしくのあとをなしたひ、中年のさつくにかけて、大峯かけ出の客なり。しかし所作の中にいつは、此の箱の中なる不動の像をかけおがみ、一生のいのる事ならば、忽ちに我が身より火炎を出して見せ申すべし。扨御僧のるしにはいかに」と問はれたり。僧答へて曰く、「それ禅宗と申すは、山かみそぎかけ一にせぬ、おのづからいはむていなれば、何をか威徳とせん。さりながら一念の浄水の徳は、そなたがお身より水を出して、いかなる火炎なりともきやすべし」と云ふ。山伏腹をたてて、「さらばきやして御覧ぜよ」と、道のかたはらに笈をおろし、おひのあしに絵像の不動をうつかけて、いらたかの珠数を押しもみて、もみにもうで祈りければ、まことなるかな絵像の不動

動きたつて、山伏の兜巾すゞかけをくだり、火煙をちらしてもえ出でたれば、山伏いよ／＼廣言して、「是れ見よ、當家の僧、きやせく／＼。」と断りけり。此の僧も、「さらば消して見せ申さん。」と立ちはだかり、衣の褄をかゝげ、布下帯を引き外し、かの山伏の兜巾、すゞかけ、いらたか数珠、ゑざうの不動をくだりに、小便をさつとしかけければ、火煙もきえて失せにけり。ふしぎなりし事なり。

昔さる人の云へるは、侍として金銀をほしく思ふは、小身ものの上なり。其の謂れは、知行をおほくもたねば、武道具の用意不足、内の者に取らせてつかふべきやうもなし。情ばかりにては、小身ものの内のものはつかはれず、恩よりも情の主と云ふ事は、仁義にたつ世し侍の事。但し情は質におかれぬと、恩賞を望む侍こそおほけれ。されば武道具なども不足、内のものをも持たずしては、何にて軍陣奉公をもつとむべきぞや。さりながら當世の侍、大身小身もろ共に、金銀をほしく思ふ事は、引きこみ町人となりて、遊山なぐさみ、女房ぐるひ、食物ごのみを自由にしたし、我儘にありきたきとの願ひ望みまでなり。さあらば侍が、あまりに金銀おほく貯へおくべき事、無用なるべし。いはんや一國一郡の御主として、何に事をかき迷惑して、あまりに金銀をむさぼりたくはへ給ふぞや。大名衆の御すりきりは、聞きおよびてもたのもしくいさぎよし。其の仔細は、御家中の諸侍に、さだつて恩賞情をかけ給ひて、よき御内の人々、多くもち給ふのゑなるべしと、おくふかく思ひ奉

なし其の上いかほどの御指切にても、金銀の貸し手あり、又いかほど御借銀なされても、さいそくを付けさせ乞ひ申すものもなし。しかれば何の御苦勞御迷惑やある。すでに陸奥の守正宗公、御一代御す[illegible]にて、[illegible]。これはお大名衆の御すりきりにて、御家御滅亡といふ事[illegible]して、仁義に[illegible]給ひてこそ、[illegible]御身上破滅し給ふ。其の教[illegible]

○昔九州おほちの御前と申し[illegible]御[illegible]の義隆公[illegible]給ひし。其の比まします[illegible]かなしくおぼしくおぼしし聞き給ひけるなり、[illegible]御前[illegible]御ふみあり、おくに、

身につみて人のいた[illegible]を知[illegible]

真実のためしに申し[illegible]誠に此の御歌は、諸人のみな上々にまたなき名歌とぞ。

○昔ある[illegible]人あって、[illegible]日の内まで、白き馬[illegible]、悪相のある馬をもてり。「此の馬は主のために悪き相あり、急ぎ賣りかへ給へ」と、ある人申しければ、主の[illegible]のための悪き相ある馬にて候や、御知らせかたじけなし。さりながら我がための悪相[illegible]、買ひたる人のための悪相なるべし」とて、遂に賣らざりけり。されば[illegible]の悪相も

ありて吉相となりて、富貴せられしとかや。まことに仁義に達せし人は、みなかくのごとし。

○昔さる人の云へるは、「軍法といふ物は、合戰の時計りの事のやうに、當代の人は皆思はるゝ、努々さにはあらず。主君として諸侍に、つねに情をかけ恩情をあたへ、下部にまでなさけをかけ、思ひ付きて、身命惜しまぬやうにしなし、其の上侍道の吟味たゞし候はゞ、第一の軍法と知るべし。」

○昔さる人手を合はせ、「南無大慈大悲のお天道、たすけ給へ。」と云ふ。側なる人の云へるは、「天道の大慈大悲なる謂れはいかに。」答へて曰く、「上は聖賢佛祖を始め、君親、智者、醫者、飲食のたぐひ、水火、金石、草木、魚鳥獸、山水、田野、ありとあらゆる萬物、皆以て人間の助けに與へ下さる。是れ天道の大慈大悲ならずや。」といふ。そばなる人の云へるは、「其のやうなる事を口にまかせていはれには、などか天道に大悪不道もなかるべき。そのいはれは、主おやを殺して悪事をやぶり、堂塔を焼きほろぼし、佛神をおそれず、或は五常を滅し五戒をそむき、又は虎狼野干毒蛇は[illegible]ど有りて、人のあだとなる。其の外顔回はすりきりはて、伯夷叔齊はうゑて死する。たうせきは富み榮え、孔子も天下しり給はず。いかん。」といへば、「それこそ大慈大悲の天道なれ、其の[illegible]うかゞひしることにてはしれぬ。」

○昔さる人の云へるは、慈悲の心ざしあらん事は、何よりもつてよき事なるべし。さりながら心持あ

るべし。たとへば取りて云ふに、乞食非人に、錢一文米一合をも取らする人は、定めて慈悲と思ひて取らするなるべし。されば其のこつじき非人と云ふものは、目見えず耳聞えず、口きかず手動かず、足はたゝず、或は病をわづらひあうて、諸道具いとなみあへず、さうじ取り中間等の奉公もならず、又は田つくりはたうち、鍛冶、あきなひ、細工、日用を取る事もならぬやうていのものなるに、しつ、貧にすやうの者共には、一文一合の慈悲あるべし。しかるに今時の乞食非人共を見れば、五體ただしく、すくやかなる者共なり。此の乞食非人どもは、いやしき奉公をせんよりも、田畑つくらんよりも、あきなひ、細工、鍛冶せんよりは、背をやみ物ぐさにて、辛苦苦勞をいたさずして、こつじきを業とするなり。されば時をも時ならずなしに、あたら錢米を取らすれば、わが心ざしのものをはじむなと云ふ程に、いやしくなる背をやみて、猶をはみなし乞食となるべし。但し此の人の云ふべきやうは、何れも人間に生れて、わざと乞食となるべき事やうやあるべき、をしむなる心ならば、諸人ぶべけれども、富貴世界に生れつくべきとうかゞひ見るに、侍の家に生まれくる人々は、生れながらにして、みな侍人となるをほしとす。侍と生まれ來る事、生々世々やすからぬ事なるを、利慾にふけり町人となる事、下々の者がこつじき非人と云はれたるものは猶あさまし。されば伊勢大神宮、春日明神、八幡大菩薩の御託宣にも、これ皆世間亂の時には、公家よりも武家を敬ひ、侍が雜人にならび、出家が妻子をもち、魚鳥をくらひ、俗人

が目細りたることをして、佛神道を修法し、されば侍が雜人となれる事、下中なる名馬が畜になり、貴人がおつたるにぞのはるまの猶淺ましと見えたり。永をしてく木を行ぐのごとく下り行く世の末になりて、なき人々まで、みな利欲に迷ひ、不禮にふけり給へば、いはんや下戸の乞食せん事、何のうたがひあらん。さる程に五體たゝしき、いくやかなる乞食非人には、いかに慈悲の心さしありとも、一文一さつをもとらすべからず。其の仔細は、人の錢米をとらすれば、かへつていに及びし申すべし。さあらば渇て死ぬるの悲しさに、おのれと田畑を作り、あきなひをし職工いたし、奉公縁師ともなるべし。さあらば天下のたからなるべし。されば慈悲といへる物も、其の仕様によつて善惡あるべし。いかに慈悲なりとも、取らすまじき者にものをとらすれば、慈悲かへつて仇となる。しかる間取らすまじきものにはとらせ、くれまじきものにはくれぬが眞實の慈悲と申すべし。かやうに申す事なれども、貴き人御披見の後は、さてもおさなきたとへごとなれども、大事の心を申すけたりと、おぼし召しあざけり給ふべけれども、當代の人々は、尊きも卑しきも、老いたるも若きも、出家も俗も、男も女も、皆以て物のおちきかたへは、御合點行きやすく、少しもよき道のかたへは、御合點參りにくき事かくのごとし。おそれながら此の心をおしへたるにて、慈悲の御合點參り候はば、天下國家をおさめ給はん大慈大悲も、御あやまり有るべからず。

○昔白井貫介といへる名誉の馬乗りあり、此の人病気の[illegible]けるに、大きなる[illegible]にて[illegible]は右馬に

乗り[illegible]たるを見て、らくしよに、

　は右馬のまへわにかゝる大へのこきんぶくりんと是れを云ふらむ

○昔陶淵明と云へる人、菊を愛して植ゑけるとぞ。此の人ある時わが子のもとへ、りきといへるものをつかはしけるとて、文を添へてやる。其の文の詞に曰く、我汝をかはゆく思ふゆゑに、此のりきをやりて汝がはするぞ。何事にても手づからする事なかれ、ある時は柴を取り道て薪とし、いかなる波をまたは谷の水を汲ませよ。されどもなかなか我汝をかはゆく思ふやうに、此のりきもおやあることなれば、思ふべしと[illegible]に不便に思ひ、情をかけ[illegible]ふべしと書けり。りきとは中間などと云へる類の者なり。

○古き人の云へるは、何[illegible]も[illegible]用心が肝要なり。用心と云ふは、常々に油断せざる事、[illegible]は諸人にまじはるとき、心静に、[illegible]。弘法大師の御歌に、

　出しもとも[illegible]と云はるゝ折もなし人の心を

まことに人心のうつりやすき事、[illegible]にして其の類を知らねば、取りわけ用心の可なる事なかれ。[illegible]あゝ[illegible]、天魔の障礙[illegible]、[illegible]但し有常[illegible]、天魔の虎

ことさらの女はいにしへにもまされなるゆゑに、今にも猶あるべし。和漢賢女今時、有るべしともおぼえず。されば用心といふは、うはむきをばいふにもおよばず、內證に入りて、つゝしむおもひ、本心を正しく嗜みつべし。

○昔、吉田兼好の詞に、物に多くありてあしき事、硯に筆のおほくある、持佛堂に本尊おほくある、家に子どものおほくあると書けり。又それがし申すならば、お大名衆の文庫に、金銀のおほくあるにあると。

○昔ある人の物がたりに、人としては必ず心がけ學すべき事あるべし。まづ聖賢の道に任せて、文武を兼ねとし、仁義を心がけべし。この外手かく事、手跡は諸藝萬能のうちにも、侍は殊にあさましからぬものことと、次に醫道、まことに人の命をたすくる術、忠孝も又こゝにはなれざるべし。さて弓馬の道、侍が知らで叶はぬ事、次に料理、よろづのわざはひとつ、のち、[illegible]なるたび氣血やしなふものぞ、食は是れ人の命なりと。

○昔ある人の云へるは、諸侍の心がくべき事、たとへば主君の前ならずとも、行儀みだりになく、萬ぶさたに思ふべからず。されば聖賢の教へにも、陰德あれば陽報あり。たとへば數年こゝの油斷なく、番等へつとめきたるとも、一時の[illegible]だんにて、おほきなるをちど有るべし。さるほどに常に[illegible]こと

に、此のたびばかりとつゝしみつとむべし。但し時はづる間なれべらひか、酒に醉ひたる時には、家中へ其の由ことわれ引きこみ申すべし。もし酒に醉ひたる時、おさへてむりに罷り出で候はば、かならずひろうを仕るか、或は法度に背くか、又はよろづ首尾にあしかれ申すべし。さ候はば其のはぢをば、何として清め、後にてかゞの言譯はれんや。扨又當番の時ねむりたる事あらば、必ず心のうちに思ひ出すべき事あり。いかにと云ふに、もしねむりたるうちにそさうを仕るか、又何事ぞ出來の時、耳にもあはずばいかゞ有るべきと、よく／＼思ひ入り、つゝしむべし。されば眠むたいの道遠と、恥をかきたるのいかくとをくらべ物にして心得べし。かほどに深く思ひ入り候はば、ねむたき事も有るべからず。それ侍となりては、常によく奉公して身をいたさず、合戰の時などは走りまはり、命を惜しまぬものなり。すなはち人は侍、侍は人と云ふなり。古人の詞にも、忠功の道をつとめんとなれば、身命を惜しみなくしてはかなはず。日に天地のことわりを見るに、水はさらに上へは流れず、火消えて後はかへりたゝず。

○昔ある人の云ひけるは、家にありたき物は、すなはち四書、七書、法語、和漢の集、此の外の記しおけるにまかせて、さのみ求めたゝはふべからず。扨も日影の霜、風前の露と消え失せてのちも、よからぬ雑具を残しおかれなば、其の人のあしき世の心ばせ、つたなく見のみとのぞこしつ、たとひ、さ

れて[illegible]にもほめらるゝに付ても、是まことの[illegible]で、[illegible]我こなるべしなど、心あらん人々の、思はんはかりもいとはづかし。[illegible]と見れを得かと、妻子兄弟のあらそへるもよしなかるべし。死して後ゆづらまほしき物あれば、生きるうちとくしてゆづるべし。おなじくは我が家／＼のなくて叶はぬ物の外、[illegible]ふる事なかれ。[illegible]庭に植[illegible]草木なども、いかなる物に[illegible]てとくひらけると、菊は白くて、末の秋つかたこがれたるこそ愛したけれ。

□昔の人の云へるは、京るなかに限らず、よからぬ人々の花市に[illegible]をかしき。香などをきいても、直段の高下を沙汰し、顔うちあかめてあらそひ、或は花を見るにも、色こき枝に咲きみちたるをおもしろがり、木の下に物しきて遊ぶといなや、大いなる枝ひしく／＼と打ちをりてしきに立て、後には酒に酔てあつさにたへかぬ、小袖引きぬぎ花の枝にかけさらし、或はいさぎよきいづみにもすそかいくり、どぶ／＼ととび入りて、くろみたる脛まであらひ、或は遠山のにほ／＼しく、ゆほのかに見渡したるざしきにのぼりゐても、障子押したて枕引きよせ、うちねたる有様、手足うちながらうつぶし伏しぬ。或はふる雪のうすらかにして、庭の面しろたへに降るなきにおりたち、ふみ散らしいぶてうちあそぶ。或は一日ひとほりふり過ぎたる村雨の、名残[illegible]月のかほえ[illegible]にも、[illegible]

ただて、ともしびきらくとかゝげ、[illegible]たる事のみ、ねがはしくおもひけるは、[illegible]金銀の事のみなり。[illegible]人の[illegible]に[illegible]物見なれ、又めざましきさまなり。はじめこそ人目いたう忍ぶ[illegible]しき[illegible]、後には[illegible]、[illegible]なく、未だ其の事の[illegible]せは、[illegible]、長きやうじついくはへて、芝居の人のうはさあざけり、物によりそひよりかゝりて、ゐねぶりし侍[illegible]に、[illegible]其の事[illegible]ぼ、ふと[illegible]眼[illegible]、我人さきにとざしきあらそひ、物ふみ散らし、人におされ[illegible]れば、[illegible]には其の事に[illegible]、目の[illegible]、眼[illegible]、[illegible]を聞き、妙[illegible]詩歌などをこそつ[illegible]。かくある人の物見るは、[illegible]人目[illegible]、人に[illegible]、句ひほ[illegible]、[illegible]あれどもさのみこのまず、人をまへにしてうしろにのき、[illegible]る[illegible]其の[illegible]ことの[illegible]見るに[illegible]、今[illegible]後の人々、[illegible]見苦[illegible]なり[illegible]取り[illegible]

[illegible]

くわせかなは以儀なれども、其の法度のうち、おほくは邪悪これあるとおもひ。されば法度と云ふはら、いかんとして邪悪あるべきと云ふに、まづ法度の二字をうへ、御ぞんじなきゆゑなるべし。まづ法度の二字を談ずるに、佛道において佛法、儒道において儒法、神道において神法とて、唐土天竺我朝倒、三國通法の法の字なり。されば三水に去の字を書きて法とよめり。三水は水なり、去はさりゆくるとよめる字なり。しからば水のさりゆくると云ふ文字なり。水をさりゆくと云ふ心は、天に陰陽水火の氣あり、陰水の二の氣は濁氣と名づけて、にごりてけがらはしき氣なり。陽火の二の氣は、清氣となづけて清くすみたる氣なり。人間に又陰陽水火の氣あり。火は陽氣にして、心性は清氣にて清くすみたる氣なり。又水は陰氣にして腎性なり。腎性は濁氣とてにごりてけがらはしき氣なり。其のにごりてけがらはしき陰氣の水の腎性、則ち妄想妄念もろ／＼の慾心なり。其の慾心の妄想妄念を去りゆくれば、其のあとはいかにもいさぎよく、せい／＼と澄みきつたる陽氣ばかりにして善なり。されば陰氣腎性一たびきざしぬれば、もろ／＼の妄想妄念おこりて、色々樣々の悪逆不道をなす。一たび其の陰氣の腎性のきざす所をさりのくれば、陽氣の心性ばかりにて、もろ／＼の善をこのみ、善をおこなふ。然らば先づ我が身法度をたて、我が心ををさめて、扨諸人に法度をくだし給ふべきにや。

○昔ある人のいへるやうは、それ人の主君としては、いかに御身ばかり仁義に達し、善行におはしま

し、よく法度をたて給ふとも、其の家々の老、出頭、奉行、役人どもがあしき人ならば、天下國家もをさまるまじきなり。其のわるき老、出頭、奉行人と云ふは、ねいじん、輕薄、無慈悲、不義理の賄賂ふかき人なり。さる間其の家の老、出頭、奉行、役人等を選び御用ひあるべし。誠に是れこそ無雙無類のよき法度なるべし。但し其のよき人々も、其の身／＼のとりえが有るべし。其のとりえ／＼をよく／＼御目利きなされ、役々を御申付けらるべし。いにしへの大聖堯舜も、臣下のよきを見計らひ、その役々を御申付けられしとなり。實に古語にも、牛を煮るかなへにて、鷄を煮べからず、にはとりをさく刀にて、牛をとくべからずとこそ御入り候へ。實に／＼いかによき人なりと云ふとも、とかく其ならぬ事には、仕はれにくかるべし。されば此の比世間をうかゞふに、國の仕置をさせてよからん人には、神奉行などをさせ、侍大將をさせてよからん人には、代官などをさせ、此の外是れにならひて知るべし。

○昔さる人の云へるは、當世上下の人を老いたるも若きも、學問藝能をすき好みならふ人の前にて云ふやうは、さりとも左様の事を御すきならひ給ふ物かな、我々も心付きならひ申したけれども、氣根が御座ないゆゑに、力およばず申さぬ、或は最早年が御座ないほどに、力およびも申さぬなどと、利口がましく申さるゝ。よし氣根がないといふ人に、何事にてもあれ、其の人のすき好む事のしなぐ、けいせ

身ひとつが榮花しか、或は食物のおいしき、金銀やまうけの利に、[illegible]ぜん、心の儘にかなはねば、氣根をおとして、其事ならずして、[illegible]其[illegible]好む事には精を出し、氣根をつくし給ふべし。さらば氣根がないとはいはれぬ事[illegible]かふ[illegible]事には、このむ人の前にては、たゞありやうに、われらごときの愚人は、いかなる因果のつたなき[illegible]にて、よき事には夢うつゝ、思ひよりが御ざないと、云ひたるがましなるべし。扨また年かよりてならふ事もならぬと云ふ人は、もつとも愚癡暗どんの身として、一旦きこえたる云分なれども、總じて聖賢の語あり、わかきものゝ學問するは、朝日の出でて世界を照らすがごとし。老いたる者が學問をするは、やみの夜に挑灯などをともして行くがごとし。又朝に道を聞いて、夕に死すともしかるべきとなり。さればもろこしの伯玉と云ひける人、年六十の時大聖孔子にしたしみ學文をして、此のあと五十九年が間、萬事に付けあやまりたるひが事を、只今わきまへ知りたりと、よろこびかたり給ふとかや。又荀卿といへる人は、年五十にしてはじめて學問にもとづき、又曾子といへる人、年七十にしてはじめて學問をなす。此の外の老學あげてかぞへがたし。何いづれも其の學問にて、心をあきらめ身ををさめ、天下に名譽をあらはし、高位にのぼり、大名になり、國家安穩千秋萬歳の主人公となれり。しからばなんぞ年寄りたるとて、學問のならぬと云ふ事やあるべき。所詮よき事をすき好

る人の前にては、たゞあるやうに、我等ごときのぐちなるものは、いかなる因果のたてまきの

ゐ日々、犬の年のよりたるやうにして、善事には夢うつゝ、思ひよりが御ざないといふうたがふかましな

ふそしつ。賢にや陶淵明といへる賢人の詞に、けふは是にしてきのふは非なりし事をおぼゆ、とことに

途に迷ひて、いまだとほからずと云へり。

の昔紫野の一休和尚、未だ純蔵主と申せし時、ある人道にて行き逢ひ、四五間へだてゝ目にたう

御出家、銭を百文とらせたに、こなたへあゆみよらず、それにて取るべし、さなくばとらせ

こそせよと云ふ。純蔵主聞きもあへず、投げてくれよとのたまへり。

の昔ある人の云はれけり、良薬口に苦く、忠言耳に逆ふといふ詞あり、良薬とは、われら我がやまひ

のために用ゐよき薬の事、忠言とは、われら我が身のために聞いにくき意見の事、とことにわれ

甘い物は、皆以て人のため毒なり、されば少しも食はじと思へども、かねて、おほきに食

ひ過ごして、ぞくに毒をかまはぬなり。又もろ／＼のあはなき物は、皆以て人のため薬なり、されば其もの

は食ひたくもなし、食ひたくなければ、ほかにすぐ食ひ過ぐす事なくして、薬にくすりのかなる

又耳に、小唄・三味線なぞは、身にかへても聞きたき物なり、されば何ながすの人のために

となる、又物の本の講釈などは、聞きたくもなきものなり。されば必ず人のために

此の言葉能く／＼分別すべし。

○昔武州陸戸關の合戰にて、初信の比は人をまねあれ、重數かく仕合けるに、それがし秘傳す
れ、勝するにおよばずして、

名にあげて關の名を見る儀あるな

かやうにもするる物にやあるらん。

○昔それがしの親、つねに語りて聞かせられけるは、若きものはじめて合戰にあふ時は、其の家の宿老
功おほきほまれの武士に、劣るまじきと深く思ひつめて、其の人に近づきしたしみて、是非引きま
はして、似あはしき高名をさせてたべと打ちたのみ、其の人の差先をかけ、無二無三に打死と心得はた
らくべし。さあれば其の人ほほれみあへて、能き所を見計らひ、てがらをさする。たとひ又不仕合
にて高名せざれども、主君の御前、諸はうばいの聞く所にて、あの若き者は一かどの心ばせあり、あ
くの通りのかせぎやうと、ほめあげ取り成していひ、其の上贔屓引き、勝負のさかひ、もの色、重ぜ
い等、見おほえ習ふものなり。

○昔さる人のをしへに曰く、侍と生まれては、弓馬の家なれば小弓を射ならひ、馬を肝要と乗りな
らふべし。馬下手なれば、山水のかけわたしもたり難く、よろづ不足おほし。馬上手なれば、左騎上

騎る中にとりこしいれしも、たやすくきられ、落されず、かけ引き自在にして、手柄をあらはす馬放なり。長輪、太刀の兵、法心得べし。皆人毎に兵法用に立ぬといへども、それなしには信ぜず。いかにとなれば、木刀しないうちあはせて見るに、何時も無手なるものはたゝかふ。さあらば木刀しないうちの時の心にて、誠の切り合ひの時もはたらき候はゞ、かならず勝つべし。しからば兵法の用にたゝぬにはあらずして、おのれが臆病なる故に、誠の切り合ひの時は、兼てけいこの兵法をも打忘れて、とり出さぬ故なり。書物かく事たしなむべし、物書かぬ人は、よろづ物ごと事もふつゝかに、大事の用もかけ、諸事に不足なり。この外作法いひまゝにしたがひて、学問、詩歌、しつけかた、蹴鞠など學びてしかるべし。かへす／＼博奕諸勝負などもてあそび、しんしやくあるべし。天下一の上手といはれたるものは、何によらずこゝろのたね。さればりやうつには、一心、一物、三上、四相、五力、六論、七曜、八術とて、八つの術をそなへねば勝たぬといふ。まづ一心とは、まけても大事なしと、このあらはれいにもつ事。一物とは、鍛金をたくはふるによりて、一錢に金子一両とりなば、一番には二両たてゝうり、二十両まけたれば、四十両たてゝうり、かくのごとくすれば、十度は何としても勝つ事あるゆゑに、つひには勝となる。三上とは、上手がまし、下手なれば勝つ事なし。四相とは、思ひ入りのつよきがよし、思ひ入りよわければ、見おとしもあり、又五

[illegible]

け、、爭ひあ[illegible]もあ[illegible]、[illegible]く叶[illegible]。六論とは、口[illegible]きき口論なし[illegible]ひまくり、む[illegible]う

のもの に氣を[illegible]せて[illegible]をとる。[illegible]は、人の目をく[illegible]まし、ぬすみ[illegible]せねば勝た[illegible]。

八[illegible]とは、右[illegible]心、[illegible]物、[illegible]上、四性、[illegible]、六論、[illegible]盜のしつを以てもま[illegible]たるときは、そお

ひ[illegible]を切りこみて、取る[illegible]外の事な[illegible]、[illegible]くのごと[illegible]して勝ちたるがよし。さあれば[illegible]の勝負

事と云ふは、内心に破[illegible]の[illegible]かく、外義[illegible]常の罪[illegible]。しかれば佛神の御[illegible]ぐみにもも[illegible]、聖賢

の御教へにそ[illegible]。されば[illegible]いに[illegible]へ[illegible]、勝ちて[illegible]しも[illegible]はなくて、まけて身命をう[illegible]な[illegible]る

もの は おほし[illegible]とひてか[illegible]當座[illegible]へども、[illegible]けたる者は、かならず敵かたきと[illegible]る さ

あ[illegible]ば態と仇な[illegible]くり[illegible]、[illegible]くるたる[illegible]物のた[illegible]にさ[illegible]、すりきり見苦しき風情を見ては、

ふるばくちうちかた[illegible]當座の[illegible]い[illegible]、[illegible]け[illegible]、[illegible]

[illegible]見にくし。其[illegible]、[illegible]詞[illegible]、[illegible]、身

命をあやま[illegible]、第一[illegible]の中だち、萬事用所かくると心得べし。

○昔さる人の云へるは、そも世の中の人の心と心と[illegible]、取[illegible]類[illegible]おほけれ[illegible]わ[illegible]業のつれ

[illegible]に、[illegible]わこうさまのおうへごのみに、おひめ様のおもてごのみ。出家のな

房ずきに、俗のわか衆ずきなどすれば人はたゞ、それ〴〵の道をすき好むべき事なり、世間諸大將の御
上を見るにも、或はけいせいにふかくなじみて、あそぶ三味線をすき好みて、身上破滅し、又諸侍
をうち聞き、引目切りなどいふる事をこのみて、身上破滅し、又公家衆のもてあそぶ蹴鞠をすき
好んで、身上破滅し、或はみめよき女わか衆をすき好みて、其の女わか衆にたらされて、身上は
めつし、又金銀を賭けてあそび、雙盤をすきこのんで、身上破滅も有り。
○昔もろこしの東坡といへる詩人、鳥とらはれて飛ばれぬ事を忘れず、馬つながれてつねに走る事を
念ふと常にいへり。人の世間にたゞよふ分もまたかくのごとし、心あるべし。たれ〳〵の師匠の上に
も、重ねて下知あるべき事。
○惣じて人の上には、一切萬物をいとほしく思ひ、およう(?)あいせんにも段々次第あるべし、先づ父
母をはじめ、主君、妻子、兄弟、親類、他人、畜類、鳥類、蟲のたぐひ、草木などにいたるまでの事
あり、されども先づ父母をいとほしく愛し、其のあまりをもつて主君をいとほしく愛し、其のあまり
をもつて妻子をいとほしく愛し、其のあまりをもつて兄弟をいとほしく愛し、其のあまりを以て親類
をいとほしくあいし、其のあまりを以て他人を愛し、其の餘りをもつて、畜類、鳥類、蟲までにも、草
木までも愛すべし。しかるに世間の人、みな父母をさしおき、妻子を愛し、主君を捨て、兄弟をも、に

れるあまりて他人を愛し、鳥けだものを捨てて草木を愛す、是れ何に[illegible]しく父母より外に、其の親の心中をはかりて、愛するもの[illegible]いかほど無頼のかごとありとも、其の心をせにまかせず、後悔なくはかり、[illegible]悪みのことをもにうつすべし。いかほど父母の法にあるまじき事なりとも、常に父母の気にさはる事あらば、つゝしみ恐るべし。扠かくの如く父母をいとほしみ愛し奉り、心を押しひろめて、草木までをも愛すべし。此の比の人々を見聞くに、草木などの枯れしはめるをば、何とも思はぬつらにて、路地とやらんいふ所に植ゑおく。草木のはや根つきて、枝葉しげりたるをもほりおこして、こなたかなたへ植ゑかへ、後々はなぶり枯らす。或は枝ぶりがわるいとて、引き切りすつる。かくの如く、不忠心、不道の心を、ほしいまゝに押しひろめてゆくほどに、鳥類蟲のたぐひをも、とらへて籠に入れておく。さあればこのむし鳥共が、うれへ悲しみに堪へかねて、色々様々の聲を出して泣きさけぶを、野山の木末草村のほとりにて、おのがさまざま鳴きさへづりたる時の聲と同じやうに、聞きなし、おもしろがる。其の悪心を押しひろめて行くほどに、もし其の蟲鳥が死ぬれば、あづかり飼ひおきたる人のおろかにして、うちたゝき切りころす。是れ何事ぞや。其の蟲鳥もおのれがうちのもの、又ころしたる人も、おのれがうちのもの、さあれば内のものとうちのものとをくらぶるに、むし鳥と人間を思ひ

かふればとて無分別に、うちすてばかりしたもののやあるべき。たとひわざと殺したりとも、切りころす
ことはとがにも有るまじ。いはんや蟲鳥の類は、おのれと野山にありてさへ、命はかなき物なるに、
まして人の手にわたり、愛へかなしみにたへず、食する物も其の身への外、多く食するによつて、百
に九十九までは死ぬる物なり。されば商賈をせず、それらの道具などをそんざしたるあやまちも、
皆以てわたくしのことにて、さてそやうにされずくのむことふる、押しひろめて行く程に、後々には父
母、主君、兄弟なりとも、おもたふしうち殺しても、何とも思はぬこゝろにて、大名も小名も結句でかした
ことゝみなしてあるだけなるを、道理がな、其のやうなる十悪五逆の大罪人なれ、上々にてしかるべく
召し使はるゝのまたなり。其の人はかほど利発、才覚、器用、無双のさだまりたる人なりとも、虎
狼を愛することとはいへ、はだへは清く替へぬ事ながら、これ程人の主としては、愛国に奉行なるをも
つて萬事を知り、人の部下としては、主君へ忠功をつくす、萬端を知りて勤むべくり。されば忠功といふ
は、かげひなたもなく只ひとむきに、主君を大せつにおもひ奉りて、無悪むかず義理つよく、いた
ましく人の吟味あきらかなるを忠といふなり。私なからしに主君を大せつには思ひ奉れども、今時
は無分別にて、御使者などに参りては、弁舌のさやかにいひおほせ、ただふるまひの時宜に
て、物頭八才覚に心を功といふなれども、其の忠と功との二つながらそなはりたるや、文武二道の賢臣と

ま一つなれば功ある[illegible]、[illegible]のみ無[illegible]由にてかずして情をかけ、折を[illegible]取
らず、[illegible]せぬ時に[illegible]は[illegible]。又恵あれて功の[illegible]何にも、[illegible]ように取りて、[illegible]
[illegible]をもくみ、[illegible]を使はるべし。此の人には[illegible]心安くるべし、よく其の
人の[illegible]利き[illegible]なり。[illegible]目利き[illegible]は、かの[illegible]、[illegible]、役人、[illegible]

一　昔さる人の云へるは、仁義の勇者血氣の勇者とて、侍の心[illegible]にもよく小あるにしても、仁義
勇者と云ふは、なにごとも義理をよく分別して、萬事を道理に[illegible]断なれば、[illegible]
あまさず、命をまつる事に塵物の數ともせず。たとへば千萬の人々よ手を打ち指さして、臆病とあ
ざわらふとも何とも思はず。又千萬の人々が、一國無雙の大剛の人よと、ほめあがむるとも何とも思
はず、我がすべき事ならば、いかにも[illegible]行ひ、我がすまじき事ならば、いかに[illegible]、
かけ引き自在に、一度いかれば天下の人おそれ、[illegible]忠功なるなり。かやうの人には、國家の仕
置をおこなはせ、大將をさすべし。又血氣の勇者と云ふは、手前一分の働きをばなすといへども、無道なれ
ばつよく無分別にして、情こはくひとむきにして、身命をすつる事なども、數をまつり、[illegible]を
もいとはず、大剛強なり。かやうの人なれば、人數すくなくして勝られざるところの人の所に用ゐ、むり
に破るべき時につかふべし。

昔さる人の云へるは、名大将の陣をとり人数をくばり、軍略、謀略、計策などのてだて、はた

らき給ふを傍にありて見るに、上手の将棊をさすごとく、いかにとなれば、上手にてつ手

前をかこひを肝要として、ためをつよく、其の石其のこまの有りしかるべき所におき、[illegible]てよ

き所に用ゐ使ふ事、一歩兵を進めて[illegible]、守るにも、飛車、角行両翼のかけ引き、桂馬の前途飛

び、香車の一向、[illegible]のところ[illegible]、投資めあひ地取りまだ、仔細に[illegible]し。

此の愚筆にあつても心得あるべし。何時も上手の[illegible]、将棊をし、見落しなくしては、[illegible]ふ事

なきものなり、[illegible]断大敵とあるなり。

○昔さる人の云へるは、世間にて[illegible]おはしますと取りまた仕まつり[illegible]、[illegible]らず

萬民愛へかなしみ、[illegible]あざ[illegible]なし。ゆゑこ[illegible]にての巣、殷[illegible]、利

口精発の世にすぐれたる主君あり、萬事人に[illegible]しこく、常に八十度二十度な[illegible]がた

き事をも、但一度に見とゞけ聞き届け、[illegible]にして、人の目をあざむかせず、人を[illegible]、人の

迷惑する事を悦ぶこのみ、我に[illegible]る人をたのみにくみ、我が利根をたかぶり、[illegible]聞き

入れず、わるき口にまねをはなて、忠功の臣下を捕へ、軽薄ざんげんを近よせ愛し、[illegible]耳

衣類をやうぎしこしらへるまで、[illegible]の二つにおぼれ、嗜慾ふかく、[illegible]

を貪として王殺し、悪逆不道のわざをなして、目前に遊びて奢をなし、つひには国家をみだし終る。是は眼の前利欲由の利口と云ふ物なり。其の仔細は、さんと云ふ獣、利口なる物にて、山の畑へ出でて粟の穂を取らんとては、藤葛かつらを腰にいくへもまとひ、粟のほを引きよせ、いくらともなく押しはさみ、山人此のよしを見つけ、走りより打ちころさんとする時、あわてふためき逃げんとすれども、粟の穂をおはしとして、生ひながら腰に多く挟みたれば、一足も引きえずして打ちころされぬ。山がらといふ鳥は利口なる物にて、くるみを食はんとするに、かたくして、食ひくだけざれば、岩ほのある所求めて、くるみをくはへて雲居にとびあがり、岩の上へ落し、其のくるみの落ちつゝ砕くるときに飛びおり待ちかまへて、打ちくだけたるを食するほどに、いつぞの時にか、おのが身の上におちかかり、つひにくるみに当りて、死する事多し、是其のごとし。

○自得する人のいへるは、物を知りたる人にも二やうあり。邪智ある人は、我が利欲わがまゝになる事を本に、仕置法度の足よとかにして、国家のわざはひとなる。又本智ある人は、萬事正理にしたがひ、仁義に達し、国家せいひつの棟梁なり。この本智邪智の大概を知りたくおもはゞ、太平記龍馬進奏の段をよむべし。

○昔もろこし韓信といへる人は、王孫にておはしけるが、世におちぶれすりきりはてて、せんかたな

うにこなたかなたと流牢して、百姓・町人を頼み、露の命をながらへ、ある時長安といふ都の市へ出でられしに、此の韓信のせいたかく肥えふとり、大力にて太き刀をさし、すりきれ見苦しきていを見、あなどりわたりて、わやくものども云ふやうは、「いかに韓信、汝が刀にても物の切るゝ事あらぞ、悪しき人、我ものと思はば、我がくびを切つて見よ、まつたく切れべからず。但し我が首を切らぬ事ならば、此のまたぐらを這ひくゞりて通るべし」といふ。ふんばだかり刀のそりをかへし、睨みいかつて立ちければ、韓信一言の返答にもおよばず、此のわやくものどもがつらをつくづくと打見て、あのくゝと立つの股ぐらをくゞり、腹這ひして通られければ、見物の人々手をたゝき、指をさして云ふやうは、「扨もあの如くの小男の力よわきか、など刀におそれて、大の男の大力にて、長き刀さしたる甲斐もなし。人にたゞ屈なる心こそあさましけれ」と、あざけり笑ひけれども、さりながら韓信の心ざしは、常の人の心ざしとは隔別にして、小事には身をいたはり命を惜しみ、恥を忍ぶ。いかやうの事の上につけ、大事にあたつては、身をいたはらず命を惜しまず、恥を清めいかりをふるふ。さればこそ其の後、楚国の覇王項羽ほどの大将と聞きおよぶ、奉公せられしかども、かゝる胴慾不道の人なれば、此の上に侍ると見知り、取り立てまじき所をさとりて、又牢人いたしけるが、漢の高祖の御大将の由を聞き、此の奉公に出でゝつかへられしが、案のごとく、名誉の侍、千萬人の

中よりえらび出され、一夜の内に千萬人の[illegible]、名譽を天下にあらはし給ふゆゑ、ついに齊の[illegible]となり、かの長安の市に[illegible]、[illegible]けり。わやく者を召し出し、知行を取らせ召しつかはれけり。此のわやく[illegible]、なさけを感じてよく奉公いたしけり。まことに情あれば恩をもって報ずるといふ。

○昔さる人の云へるは、いづれの御家の老、出頭人も、諸侍の善惡・目利は大切なる事なるべし。其の仔細は、かの老、出頭人のまへにては、皆人いか[illegible]能く見せ[illegible]、よく思はれたしと萬事たしなみ、或はおのもしきふりをもいたし、又顔作をいたし、上べだけの輝をとる。されば世上のならひとして、十人が九人までは、我に[illegible]人をば、何事も皆よしとのみほめたて、我に[illegible]るければ、何事も皆わるき人よとばかりそしらる、心得あるべき事。

○昔さる人の云へるは、世に物うきものは、牢人となれる侍なるべし。されば聖主賢君と、萬民あふぎたつとぶ御代にさへ、御慈悲のうるほひは、枝葉の露にまで及ばず、けつく世間の[illegible]高直になりもて行きて、[illegible]に及ぶ不便さよ。」といた[illegible]、傍なる人[illegible]出でていひけるは、「いや／＼聖主賢代の御慈悲は、あまねしとこそおぼゆれ。其のいはれは、諸牢人[illegible]にか[illegible]をあらはさず、風にもあて[illegible]、一とせ牢人ばらひと云ふ御法度ありて、國々所々町々

小路々々村々里々までをも、きびしくふれまはりて、一夜の宿をさへ貸さず。さあれば諸牢人ゆかりをたゞし、知音をたよりに立ちよらんとすれども、主人よりの法度におそるゝか、身を引くか、日比のよしみを忘れて、事問ふ人もなし。侍が侍を頼むは是れ常の事、両御相應の諸人の心中行儀是非におよばず。さあれば、老いたる親、いとけなき子、なやめる妻、見苦しきにも「ゐ所はなし」、こなたかなたと浮かれありきて、門にたゝずみ、戸にたちよりけり、天にあふぎて歎き悲しみ、地に伏して泣きさけぶ、あはれなるありさま、いたましきかな。其の中に牢人、相應に、育しおかれぬさへあるべき事ならぬに、おもふに主君牢人をにくみそねまれ給ふぞや。たゞし牢人の主君の、いにしへ不忠不功の逆心あるによつて、かくは憎ませ給ふか。さあらば其の不忠不功の逆心ある人に、いはれは牢人にこそ、いかりをうつるべけれ、何ぞあまねく牢人、妻子悲しみにたへがたし。古人の詞に、いかりは水中の魚にたとへ、愛は属従の鳥にたとへて云へる事、是れ閣観の事なるべし。かへす〴〵もいかりをうつさずとあるをや。」

昔さる人の云へるは、女には五障三従とて、男にまされる苦しみ多し。先づ五障の第一には梵天王となる事なく、第二に帝釈天王となる事なし、第三魔王となる事なく、第四に二度人間となる事なし、第五に仏になる事なし。是れを五障と云ひて、九つの四つはりとよめり。又三従と云ふは、第一には

をさなきうちは父母にしたがひ、まみへて思ふ事我が心に任せず。第二には、嫁人として他に夫に己に夫の氣をかね、おのづ思ふ事我が心にまかせず。第三には、老いては必ず子にしたがひなはれて、よろづの思ふ事我が心にまかせず。是れを三從と云ひて、三つしたがふと云ふ事。されども五障は死して後の事なれば、捨しおきたる現世のくるしみにはあらず。又三從の苦しみも、現世當來とはいひながら、をさなき時父母にしたがふ事、おんあいの慈悲なれば、そむきたき事もあるがたに、させる悲しみ憂へも有るまじ。又老いて子にしたがふ事、年月養育せし恩を報ずる子なれば、これ又苦にとかはあるべし。たゞ夫にしたがふ苦しみこそ、いと堪へがたき大切の悲しみなるべし。おほかたに思ひとりなば、あしかりぬべし。まづ女のたしなみと申すは、夕べには手足を洗ひ清めうがひし、男よりあとにいねて、あしたには男よりさきに起きて、やうだいつくり顔をあらひ、髪化粧つねはされ、おだやかに身をきよめ、世間に氣をくばり、内のものどもに情をかけ、あしき事ありとも、男にも、ふ隠しとりなし言ひて、夫を大切といたはり、主親とあふぎ、客人あらばやはらかに詞をかけ、其の人のかたまもりならず、簾にのぞみ戸に立たず、立ちふるまひ神妙にして、物毎むさぼることはなり、物はおだやかにして口をきかず、物見ちやうもんを好まず、りんきせず、子供きれいに育て、せつかんすべし。第一しうとに孝行なるべし。我が夫大切ならば、何ぞ男の父母憎からんや、けんぜん邪心を振

りすこて、一向に無慙あるべし。もしまゝ子あらば、あはれみいたはりて養育すべし。腹こそかはれ非しく我が子の兄弟なるぞや。我が腹よりの産ないだされとて、いかんぞ我が子の兄をにくみ、嫡をそねむべきや。まことにゝくみいたれり、罪ふかき事おそるべし、つゝしむべし。

〇諂る人のいへるは、茶の湯にすかせらるゝ主君達、茶人、茶杓、古銚、ふりたる器物、竹の引ききり、此くうたんなどには、金銀をつひやし、ほり出しと号して、秘蔵なようあいし給ふを見聞くに付けても、又世の中に侍にすかせらるゝ主君おほしまして、金銀をおしまず求め給はば、よき侍のほり出しもあるべし。さあらば大事の金銀をつくし給ふ其の得失、御吟味あるべし。

〇昔もろこしに燕の昭王と申せし時、郭隗といへる賢臣あり、ある時帝仰せけるは、我が御代の間には、いかにもして賢人をまねき求め、国家をおさめ萬民を安楽ならしめたき」と宣ひければ、郭隗申しけるは、御意めでたく候。誠に賢人を招きよせんとならば、まづ此の郭隗に御扶持金銀をたくさんにくだされ、高き位にのぼせ御賞翫あるべし。さ候はば、世上の賢人ども傳へきいて、あの帝こそ賢人を御用ゐ候て、民をなで仁義を事とし給ふとて、郭隗づれのものをさへ御賞翫被成候間、いざやれ〳〵やと、大賢小賢のこらず参り集まるべし。いかほど御口にてばかり、賢人を招き給ふとも、此の郭隗を御取立てなくば、世上の賢人共思ふべきやうに、存ず

御内に撰出されたる小賢あるをさへ見知り給はず、御取立なきは外聞ばかりの云ひなし、情にはことのいつはりなるべしと、小賢だにも参るべからず、いはんや大賢に於ては、耳を洗ひ手をひきさるべし」と申しければ、帝賞にもと御感ありて、其のまゝ此のくはしくわいを御取立なされ、大国を宛行はれ、御賞翫なのめならず。されば秦のごとく、諸国の大賢小賢みなく参りあつまり、けんさ輩集して門前市をなし、国家安穏萬民安樂にして、所にぎはひ国ゆたかなり、御代萬歳なりしとかや。若し又日東の主君の中に心ある御人は、此の正理におもむき、ほにもとお尋し召し給ひて、御内の諸侍の分々相應にしたがつて、それぞれに恩賞を與へ、情をかけ召しつかはるべし。さる儀は其諸国の諸侍、牢人、諸藝萬能の人々、招かざるに参りあつまり、召さざるに来りつどひ、国家にぎはひ、萬民豊のたのしみにして、所栄へ国ゆたかなり、御代長久なるべきかな。

○昔さる人の云へるは、いづれの御家の老、出頭衆を見聞くにも、主君の御事を大切に思ひたてまつるとして、何事も皆おためと云ひて、利慾にふけりなされ給ふ。さあれば侍百姓町人までも、憂へかなしみ迷惑する事のみ、あげてかぞへがたし。是れ何ぞおためなるべきや。眞實に主君の御爲を大切に思ひ奉るならば、諸侍を第一として、町人百姓以下までをも、したしく憐み思ひ付き、よろこびかたじけながるやうに、掟法度をすべき事たらめ、いかん。

〇昔さる人の云へるは、萬の草紙物語を見るに、同じやうなるしなぐ、幾所にもかきのせたり。作者の心おろかにして、心はたらかず、小智におはゆゑ、ことに詞多ければ、しなすくなしとあるをや。されども物の用にも立てあるべくすぐれたる事は、いく所にもかきのせて苦しかるまじきにや。其のいはれは細々目なれ口づき候へば、覺えやすく、合點も行くべき物かと。

〇昔ある時、親子ともに牢人いたし、國踏のかたはらに徘徊仕り候時、餘りの事に父におくれ、老いたる母にそひはなれて、辛苦艱辛をしのぎおくりけるが、身のいとなみにわづらへ、武州江戸の波にひかれ、やうやうかび出で候へども、大すりきりなれば、ながく身上かせぐべきてだてもなく、手跡あしくもあれば、日本利口にもあらず、心かたくななれば、世間狭くして傳手もあらず、生まれつき鈍なれば、藝能をも知らず、諸道の花のまに、無骨にしたゞ頭のかうにして、いかゞすべきと思ひわづらへる處に、さる慈悲人來りて云へるは、「汝少しねぢり書きをもするなれば、當座の命つなぎに右筆をせよ、似合はしき所あるべし。」と申さる。「是れは何より以てかたじけなし、とは申しながら惡筆、借る所なく、人の右筆せんもいかゞ候はん、又しらぬ事、思慮あるべき事か」といへば、かの人重ねて、「只いんきよすべし。」と申さる。答へて「世上の習はし、知行や領家をも持ち候て、年打ち上りてこそ、隱居はすべき事なれ」と申しければ、かの人曰く、「いやいや其の云ふ所の隱居と

いふは、もろこしの賢者の隠居といふは、よろづ世をわたるいとなみ、わが身に一つも益なき事をさとり知りて、おく山ふかく隠居して、大國の官をあたふれども、二度世に出でぬもあり。又我を善人と見知り用ゐる人なきゆゑに、うらめしくたの世間にまじはり、ながらへしきたいやかましむつかりて、見知り聞きおよび用ゐる人あるまでもと、しばらく海邊などに隠居するもあり。又天下みだれさわがしくて、山陰海邊も山賊海賊の不道發向し、すみうき時には城下の町に出でさなが細工をして、命をつなぐ隠居もあり。又世間するびして、あきなひ職もなりがたき時は、門番ないたし、或は茶をも引き、或は少しの代官などをも仕り、其の一役に命をおくる隠居もあり。眞其のごとく、其方も右筆ついゐるに身をかくし、命をまつたくして、心ざしをとぐべき。」と申さる。

○昔なる人の云へるは、つくづくと世間諸侍の上を見聞きうかゞふに、年盛んなるも年若なるも、こゝろ闕なるも臆病なるも、利發口才なるも愚鈍なるも、皆もつて我こそ氣根もつき病者となり、奉公なりがたしと悲しみうめかるゝ、是れまことに小氣不氣根、あさましくつたなき云ひぶんなり。いにしへの諸侍は、年々月々の軍陣に罷り立ち、朝夕寒さあつさをしのぎ、飢渇をこらへ身をくだき、命をすて憂へ思ひ、からき苦勞つかへせられしに、何ぞたゞ今の世の奉公に退屈し、草臥れて氣根つき、病者となりて奉公ならぬなど、いふ事やあるべき。」と申されければ、そばなる人指し出で、い

やいま當世の諸侍、氣根がつき病者となり、奉公なりがたしと、悲しみ申さるゝこそ道理なれ。まづいにしへの諸侍は、戰國兵亂の時代なれば、花車風流をわすれ、たゞ武篇高名をのみもつぱらと心がけ、仁義に達し身をくだき、命をゝしまぬ上は、自餘の苦勞はくらうと思はず、其のうへ主君も恩賞をあたへ、情をかけ惠みいたはり給へば、いよいよ氣もはやり心すゝみて、氣根もつよく病もなく、まつたく忠功つとめり。當代の諸侍は、無事せいひつ常式たる時代なれば、上下萬民花車風流を好みもてあそぶ。かるがゆゑに利に走り、慾にのみふけりやすく、其の上主君も胴慾道より深く、仁義をばかつて知り給はねば、恩賞なさけをもあたへからず、けつく無理ひがことをのみ言ひなし、違背ぞと詰ふ。されば、いよいよ氣しうかす、心おもくほれ病者となる。實に〳〵百病は氣より生ずるとあるをや。實に〳〵主君仁義を知り給はず、胴慾ふかく、無理ひがことのみ言ひ沙汰し、日夜朝暮つめさしこまらせ、いたづらに膝のたゝみをあたゝめて、恩賞情は露塵ほどもあづからずば、膝にてつくりたる氣根なりとも、なじかはもつてたまるべき。されば、いかほど不氣根病者なりと言ふ人なりとも、仁義にいたり無慾なる主君に召しつかはれて、似合々々のおんしやう情にもあづかるならば、なるほど上氣上根の、無病そくさいの人となりて、忠功まつたく勤むべし。其の方たちに至るべし。いかにとなれば、前代の武士も今の人も、時代同じの人間なれども、昔は恩賞なさけにあつかれば、慾

勤めつゝ奉公すれども、けつく無病息災にて、上根上氣の人こそよけれ。「昔さる人のいへるは、是れがしかう〳〵北にあたつて、十萬石以上の主君へ、此の人ある時の物語に、「諸侍、人皆しかし心持には、鷹を飼ふごとくすべし。其のいはれは、思ふ所を言ふきこえ鷹は、かならず鳥をとらず、たつきも逃す、どうぞにはそれ走る物なり。さる間兼て餌をひかへ、少しつゝ、折節に飼ふべし。さあれば腹だるそのまゝに、鳥をも能くとり、それ走る事もなく、日暮に手まはける、先其のごとく、諸侍にも知行思ふさまあたへ、金銀たくさんに取らせ、情をかけて召しつかへば、かならずつきあがりして、我々ほどよきものはなしと身に自慢し、いつそのほどにか家中を見こなし、嫌ひいやがり、日比の恩賞情を忘れて、大名高家をのぞみ心がけ、いとまこひ逃げても走る。さるほどに知行をも金銀をもなさけれども、兼てよりずいぶんひかへて、扨其の侍かつゑにおよび、迷惑する時分を聞きつくろひ、其の者の身上にしたがつて、金銀をあたへ、衣類を着せば、大きによろこびかたじけながる。或は其の侍、いとまを乞ひ申す時、其の人によつて少しづゝも加増を取らすれば、うれしがりたつとがりて、暇をこはず。或は奉公に退屈し草臥れたる時を見計らひ、詞をかくれば、過分がり有り難がりて、よく奉公するぞ」といひ給へり。「さても〳〵不慈悲、不義理、胴よく不道の事や。」と、聞く人毎に身の毛いよだて、恐ろしがり、悲しがり、憎がり、きたながり、

腹を立て、罵りあるけり悪口す。されば大聖の宣へるは、君子一言を出して善なる時は、千里是れに從ひ、君子一言を出して惡なる時は、千里之れに背くとあるをや、是れぞ可笑記の終りなりける。

一日愚かなる心の儘に思ひ初めて、筆を執り紙を綴り、此の假名づけの書をあみ立て、分けて五冊になしたるも、其の心ざし有りがけなり。つや〳〵當世末法の輩共を見聞き及ぶに、心おろそかにして、氣みだれやすく、何れの書をみても、文字に滯り、文章に泥み、其の心を得ず。其の書の心をしらざれば、手に觸れ目に晒れて、讀む事もなく、其の書いたづらに櫃の底、蔀の隅にのみ有りて、蠹にうつもれ、しみの棲となれるまでなり。それによつて、此のかなづけの愚書を與へよみならはせ、萬のこうし物語をも、耳づけよませんとの專用なり。されば人間に心肝脾肺腎の五臟ありて、五體に配し、敍木火土金水の五行に擬へ、萬物に當へり。みな〳〵佛法に五智あり、儒道に五常あり、されば我の五冊の書、凡みなれ持け置くべからず、飾はく手に惚をすてさる事なく、責こ〳〵講せ目を寫ですといへども、此の書見をふんにはしがじとあるなり。

可笑記卷第五 大尾

伊勢物語

傳・光廣

仁勢物語 上

をかし男、無官にして、奈良の京春日の里へ、酒のみに行きけり。その里にいとなまめいたる魚、腹赤といふありけり。此の男かうてみにけり。おもほえず古巾着に、いとはした錢もあらざりければ、心地まどひにけり。男の着たりける、かりきるものみな脱ぎて、魚のあたひにやる。その男しぶぞめの着物をなん着たりける、

　春日野のさかなにぬがししのぶずりのきぬは裸でのぼりしられず

となん、又つまでよみけり。續きておもしろき事共やおもひけん、

　みちのくのしのぶもぢずりの場所住居たれゆゑにし我ならなくに

といふ歌のこゝろばへなり。むかし人は、かくいちはやき熱ふるまひをなんしける。

をかし、男ありけり。ならの京は離れ、この京はまだ宿もさだまらざりける時に、西の京に旦那ありけり。その旦那人には男まさりけり。その人かたちよりは心なんまさりたりける。人のやうにもあらざりけり。この旦那しもそれをかの男、物語らひて、いかゞおもひけん、時は彌生の朔日、雨しほふるにやりける。

める、

　おきも出ず寝もせでよるも夕でるものうな顔とてながめくらしつ

をかし男ありけり、ひざうしける女のもとに、ひぜんかさといふものをやるとて、

　おもひあらばむしろの上に寝もしなむひぜんかさにはふたをしつゝも

二でうのうすべりのまだいでこで、たゞみやにおきけるときの事なり。

をかし東の五でうに、あふぎやの嬶わづらふありけり。西洞院にくすし有りけり。それはほん道にはあらで、鍼にこゝろ深かりけるゆゑに、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかに腫れにけり。はれどころはきけど、人のみるべき所にもあらざりければ、なほうしと思ひつゝ、なんありける。またの年の正月には、目もはなもひとつに出でゝはれて、起ちてゐ、ゐて見れど、去年に似るべくもあらず、うち笑ひてあばら骨もいたきに、つらのゆがむまで笑ひて、去年をおもひ出でてよめる、

　つらやあらぬはなや昔のはなならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〴〵とあくるに、泣く〳〵おきにけり。

をかし男ありけり、名人の碁打へ石直されに行きけり、大身なる所なれば、たび〳〵も得打たで、

わらつとたたきにふみやり、朔日節句に通ひけり。人よりは下手にもありけれど、まけたび重なりければ、あるじとの相手に、まことに上手をつけて打たせければ、うつべき得かたで、手も置かされけり。さてよめる、

ここそわが手置かぬさきはさもしこそは打たましかなた

とよめりければ、いとやさしかりける、主ゆるしてけり。

をかし男ありけり。双六にてうちしかりけるを、こしをとらへて抱きわたりけるを、ひとりにてうよせて、いと清きにあいたがみの腰れなどしきて、盤の上に置きたりける。子を二つ入れば双六の子かこと、盤によりける。賽うちの調く夜もふけにけれど、双子とらしけれど、いみさへいといふ黒く、あかきいたうふりまはりければ、あはてたる騒がしに、双をばおくに押し入れて、双調させかいてあびきをりに目や蔽もあけぬに、この子おほきになりて、双六盤を一くぐりにむひてけりちあいたやこといひければど、かねたる騒ぎに聞かざりけり。やうやう夜もあけゆくにみれば、うみし女も子もなし、足ずりをして泣けどかひなし。

たまこすかなにぞと人のとひしとき暁とこたへてきえなましものを

これは二段ことりばしのもとに、つかまきやにてるたいけるを、かたなの柄と目貫とをのすまれ

て、追うて出でたりけるを、ほり川のほとりにて太郎左衛門すみつほといふ大工、まだ暗きにいでけるに、いみじう追ふ人あるをみつけて、とゞめてとりかへしてけり。その衣単子をばうふけり。

をかし男ありけり。京にありわびて東にいきけるに、伊勢尾張に、あはび蛤の海づらにあるを、人のいとおほく売りけるを見て、

いとゞしくまきぬる貝のこひしさに羨ましくもかへる人かな

となんよめりける。

をかし山伏あり、京やすみうかりけん、東の方にゆきて、だんな求むとて、かちにて行きければ、あせもながれけり。白髪なる頭のはちに、ゆげの立ちければ、

しらがなる頭のはちに立つけぶりふどうと人の見やはとがめぬ

をかし男ありけり。その男身をえうなき物におもひなして、京にはあらじ、東のかたにすむべきとて行きけり。つれとする人一人二人行きけり、みち知れる人もなくて問うて行きけり。三河国岡崎といふ所にいたりぬ。そこを岡崎とは、ちやうりあるによりてなん岡崎とおもひける。そのやどの家にたちよりて旅籠めしくひけり。その棚にかきつへたいと多くありけり。それを見てつれ人、かきつへたといふ五もじを句のかみにすゑて、たびの心をよめ。」といひければ、よめる、

あちふれを昨日も今日もつれだちて一めぐりきはるたびをしぞ思ふ

とよめりければ、みな人わらひにけり。

物言ひて駿河國うつの山に至りて、わがのぼらんとする道は、いと暗うたがきに、つたかへでは しげり、もの心ぼそく、ふだるき目をみることと思ふに、す行者あうたり。かかる道はいかでかいまするといふを見れば、しる人なりけり。京にその人のもとにとことうてす。

するがなるうつの山邊のたうだんご錢がなければ買はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに雪ありてかしに似たり。

ときしらぬふじの殺生のいはもなまこのこがためらかへて食ふべき

その山をものにたとへば、こゑあしを重ねあげたるやうにて、なりに蕎麦のやうになんありける。猶ゆき／＼て、武藏國と下總國との中に、おほきなる川あり。それを隅田川といふ。その河のほとりにむれゐて、おもひやれば、限りなくむだるくもあるかなと、わびあへるに、渡守、早ふねにのれ、日もくれぬといふに、折しもしろき顔におはぐろと袖とあかき、角の上にあそびていをくふ。渡守にとへば、これなん都人といふを聞きて、

なめしめりはいづらとくはん都人わがおもふ程はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりてわらひにけり。

をかし男、武蔵國までとどび歩きけり。扨その國にある女をよばひけり。父は又人にあはせんといひけるを、母なん貧しきものに心づけたりける、父はまた人にて母なんおたて腹なりける。さてなん町ものにとおもひける。このむこがねをかりて、おこせざりけり。すむところなん、いるまの郡みよしの里なりける、

みよし野のたのもねんぐをこはるゝに借がかりたる金かへせかし

むこがねかへし、

わがかたにくるといふなるみよし野のたのもしかねをついとりかへす

となん、人の國にても、猶しやくせんいやまさりけり。

をかし男、かみなりのなりければ、ともだちどものみちにておちければ、詠みける。

たゝくなよほどは雲居になるかみもたいこのかはの打ちやぶるまで

をかし男ありけり、きりしたんの御法度ありて、むさし野へつれて行くほどに、とが人なれば、町奉行にからめられにけり。女も男もくさむらの中におきて火つけんとす。女わびて、

むさし野はけふはなやきそ淺草やつまもこゐべり我もこゐべり

とよみけるを聞きて、夫婦なからたすけて放ちけり。

　むかしむさしといふ男、京なる女のもとに、きこゆればはづかし、聞かねばくるしとかきて、上がきに武蔵坊ぐんけいとかきて、ほそ心ざしおこせてのち、音もせずなりにければ、京より女、

　むさし坊さすがにさなる長刀をふらぬもつゝみしふるもうるさし

とあるを見て、はづかしき心地しける。

　ふればいふふらねばうらむ武蔵坊かゝる折にや人はにぐらん

　むかし男、かげの国へすゞみに行きいたりにけり。そこなる女、江戸の人はみやびやかなりとおもひけん、せちにおもへる心地なんありける。さてかの女、

　ながくとつれてござらばてかけにもなるべかりけり此の月ばかり

蔵さへぞ、ひなたにさかゆける。さすがにをかしとや思ひけん、まゐりてねにけり。夜深く出にして、

　夜もあけばきつねたぬきと人やみむおきだきおこして銭をやりつる

とよみて、この男江戸へなんまかるとて、

　くりはらのあたゝけもらのあるならば土産にこんぜたんとやらましを

と、云へりければ、よだれこぼして、うれしかりけらしとぞ云ひたりける。

むかし男、かひの國にて、なでうことなき人のめにかよひけり。いやしうあかゞるなどあるべき女どもあらず見えければ、

しのすゝはしりにあかゞりなくもがな人の手足のうらも見るべく

女かぎりなくつめたしと思へど、さるきたなききびすなどを見せては、いかゞはせんとて、

むかしきのそう正の弟子ありけり。都の内に寺もちてときめきけれど、後は世かはりときへりにければ、よのつねの坊主のこともあらず、人がらは心うつくしう味なき物を好みて、こと人にも似ず、うまき物をくひても猶むかしよかりし時の味ながら、世のつねのことも知らず、年ごろ育てたる弟子やう〱とこはなれて、遂にぞくになりて、兒のさきだちて行きたるところへ行くを、坊主まことにむづかしき經などこそ教へけれ。いまはと行くをいとあはれとおもひけれど、まづしければやる物もなかりけり。おもひわびて懇にあひしらひける、旦那のもとにかう〱いまはとてまかるを、いたいけなるものも、えやらで遣はすと書きておくに、

ほね折りてそだてしことを數ふればとをと五つと四つはへにけり

かの旦那これを見ていとあはれとおもひて、刀脇差まで送りてよめる、

ときだにも十日二十日もへりけるをいくたり君をせがみくふらん

かの弟子よびて、魚など食はせたりければ、

今日やこの僧の衣をぬぎすてて君が大小さしたてまつた

よろこびにたへで、又、

めされや、鯛やまながもと思ふまで喰ふはなますの汁にぞありける

としごろとりつけたる人の、酒のみたびとれに来りければ、みなすましけり。さてさかや、

やりきりと名にこそたてれさけくらひいつもまれなる錢も持ちけり

上戸かへし、

今日こずは明日はよそへそやりたまはしやらずはありとも魚をたばまし

をかしなまなりをつけける返しありけり。男もまうあれけりに、一献にお人なりければ、こゝへふぬにと

て菊の花のうつくしきをしきて、男のもとへやる。

なまなりのすゝめばいつく白菊の枝にたをりつゝふらめくとみゆ

男しらずよみによみける。

しゆのつゝにはふかうへのなまなりはくれける人のものかとぞみる

昔を上州、都人なりける女のかたに、在十ばかりなりける人をあひしりたりける、程もなくかれに

けり。おなじ所なれば女の目には見ゆるものから、男はわが物ともおもひたらず、女、

あま酒のあぢにも人のなり行くか昨日に今日はかはるものかは

とよめりければ、男かへし、

あま酒のあぢをのみしるふる人はわかゐるやどのやまの神なり

とよめりけるは、まをとこある人となん。

をかし男、山家にある女をみてながひであひにけり。さてほどへて親のさとへかへりけり。蒲生にかりにむぎ手の米多う負ひて、男のもとに米かせとさしよりいひやりければ、男、

君がためたばへる米は春ながらかくこそ秋のもみなりにけれ

とて、もみをなんやりたりければ、つきてなんくれてとて、女、

いつのまにひけとて籾なくれぬらん君がさとにはうすなかるらし

をかし男、いとかじけおとろへて、米錢もなかりけり。さるをいな事をならひて、いづなふもりにつきて世の中をすぎんと思ひて、出でてをどらむと思ひて、かねなどをかうて首にかけける。

出でてゆかば心かるしとわらはれむよの方さいな人の知らねば

とよみおきて、出で申しけり。この男かねなたゝきなどれど、けしう米なくるべきともおぼえねば、

何にありても、斯かられんと、いとおたう申して、いづかたにもとめもらはんと門々に行きて、ととんつ
はねつるをとれど、いづくも同じごとくなかりければ、腰かがめて、

おもふ米くれぬなりけり腰かがめあだにつかひし我やすりきぬ

といひてながめをり。

人はいさわれもひやすらむわれがつも水ばかりのみいとどのませつ、

此の女いとひさしくありて、ねんじわびてにやありけん、飯ふたきたり、

ひだるさをわするゝ米のかしぎだに一ほも食ひてへらさずもがな

かへし、

たのむしくふとだに聞く飯ならばまゐりなくは汁もまはまし

また〳〵ありしとて飯くひて、男、

食ふらむとおもふこゝろの念佛のありしよりけに申し出るかな

返し、

ながき日にたちはるすねのくたびれはかふかひなくもなりにけるかな

とはいひけれど、おのが欲にてありければ、うとくになりにけり。

むかしほいなくてたえにけるもの、猶や忘れざりけんうばのもとより、

うばながら猶やはえしも忘れねばかくうまき物猶ぞくひたき

といへりければ、さればよといひて、男、

あひともに心ひとしきかのしゝのみそのなければくはじとぞ思ふ

とはいひけれど、その夜に似けり。いにしへくひけることどもなどいひて、

あがりこのわんをなりへになすらへてやたび食はばやあく時のあらむ

かへし、

あがりこのわんをなりへになせりとも汁はのこりてみやはのこらん

いにしへよりあはれとなんくらひける。

むかし田舎くだりしける人の子供、猪をゆでてくらひけるを、大人になりにければ、男も女もはぢたゝきの子なりけれど、男はこのわざいやと思ふ、女もこれをいやと思ひつゝ、親のをしふれどもならはでなんありける。さてこの鄰の男のもとよりかくなん、

つどひつゝ猪くひしまろびたひわりにけらしないひ汁のわん

女かへし、

くらひにしふるかけごきもかひわりぬ君ならずして誰かくるべき

などいひ〳〵て、終にほいの如くよびにけり。

さて年頃ふるほどに、女おやなく便りなくなるまゝに、もろともにいひ来なくてあらんやはとて、交趾国たかさご国へわたりて、いきかよふたより出できにけり。さりけれど此のもとでおしなど、多くはどらなくて、薬しかりければ、男こと女ありていたう思ひくたびれて、ちとせの中もかれ〳〵にて、ふかうちなみぬる顔にて、みれば、此の女いとしごとなどして、うちながめて、

風ふけばおきてしらなみせうまうの用心きびし一人なれども

まかし一人なれどもとよみけるを聞きて、限りなくかはゆく思ひて、手かけへもいかずなりにけり。まれ〳〵かの手かけにいきて見れば、はじめこそ心にくゝもつくろひけれ、今は打ちとけて、手づから飯がまたきて、けうの香の物をきりけるをみて、心うるさくていかずなりにけり。さりければかの女、男の方を見やりて、

きみがあたりみす〳〵ならんいかづちの雲間におちてあたまとるべく

といひておとすに、こはがりて、男来んといへり。よろこびてまつに、たび〳〵うそなりければ、

君こむとなきて夜ごとにきつねともたぬきとも身をなしつゝやねん

といひけれど、男すまぬかほなりけり。

むかし男、片田舎にすみけり。男都へとてわかれの緒をしめて行きけるまゝに、三月こそ行けれ、待ちかねけるに、いと仕事する人に、餅くはせたと契りたりけるに、この男もどりけり。「戸あけ給へ」と叩きけれど、あけで歌をよみて、いだしたりける。

あはびえのことし見ごとに出来たれば餅をつくとて手のひまもなし

といひ出したりければ、

あつき餅粉餅あは餅としつくとわがせになくば粳もち搗かじ

といひていなむとしければ、女、

あつきもち搗けど搗かねどそとよりもくろゝはあとへあきにしものを

といひければ、男ばら立てけり。女いとかなしくて尻からけしてちそうすれど、おゆものまで白水のあるところにすべりけり。そこなりける石に、わんに大ゆびのつめびたしに盛りてさしつけける。

あはおもはでしかれる人にすゝめかね我がくふ餅はひえはてぬめる

とよみて、それははなびらになりにけり。

むかし男ありけり、じゆくし柿ともいはざりける柿の、さすがうまかりければ、女のもとにいひや

りけり

秋の夜にさはしし柿の味よりもあはせざるにも味まさりけり

酒好人なる人かへし、

さにもあらぬ我なれはすさとしもねはやかひなて柿の味よくもいふ

をかし男、五十あまりなりける女をまうけける所へ、わびける人のたへしに、

おもほえずひたひに疵出きわづかなるもろこし綿の寄りしばかりに

をかし男、それな四前に一夜いきて、又もいかすなりにければ、女の洗ひあらふ所に起きおけをりけり

やりて、たらひに物の見えけるを、みづから、

我はとわ物あらふ人はまたもありなんと思へば水のしたにありけり

とよむを、かの来ざりける男、のぞきて、

水そこに物やあるらん馬さへも豆だらひをばのぞきてそみる

をかしとすむ好みなりける女、あまで食うて、

なとてかくはやとしよりに成りにけん水なすびをとおもしりしものを

をかし山寺のさこたちの、花見に飯酒もなかりければ、

はちにあける業平はいつもくびしかさ今日の花見にこゐ来ずやらし

をかし男、はづれなりける女のもとに、

あふなきは目だまの上のいもくおつぶしをならべて斯くはなるらん

をかし道のはたにて、ある子どもの猫をすゑて通りけるに、何おゑとかいひければ、まなやせ一とお

うなぎをかみたといふあこ、

つみもなき人は魚かひ隠をほり多くの魚くふといふなり

といふを、うらやむ坊主多かり。

をかし物おひける女に、としごろありて、

いにしへの質のふだをばうけ返し昔のかねをなすよしもがな

といへりけれど、なにとも構はずやありけん。

をかし男、ひぜんの國たかくのこほり島原の城へむかひける。女このたびは又はかへらじと思へる

けしきなれば、男、

おし手より身うちの皺のいやましに君に年をもよらせますかな

かへし、

こもりぬる大人数をばいかでかは無勢に先をさせてみるべき

田舎人のことにては、よしやあしや。

をかし男、魚の骨をのどに立てて、

なまだひやせねば胸にはさまりて心ひとつになげくこゝろをな

じゆつなくていへるなるべし。

をかしこゝにも立ちてたまたる人のもとに、

[illegible]ぬすみわざたつるをひきて食はんとぞ思ふ

をかし仕事せぬなめりと、いけんしける人のもとに、

[illegible]道ともでけせたうゆみのあそぶとさらに我が思はなくに

をかし男、銭ありける女にいへりけるを、うしろめたくや思ひけむ、

我ならでこと客に[illegible]なかにたなしやこゝろかけとらぬ法度なりとも

かへし、

我といふ客ばかりし銭をひとつしてあひよればかりそめごとぞ思ふ

をかし昔の酒に[illegible]して、[illegible]、鮭といひければ、ある、

うぢ河のおほきなふたつ山がたなる人はこれをや鯉といふらん

山家人かへし、

みしらねば山がのものは鮒をも鯉とはいふと思ふわれらも

むかし西院のなにがしといふ侍ありけり。其の侍のわこ鷹いと好きにて、いつも狩りしけり。そのわこよび給うて、御れうりの夜、その家のとなりなりける男、御れうりにせんとて、大かた車えびをあひもちて出でたりける。いと久しくこひて出したべ参らす。うちわびてかへらぬべかりける間に、あまの酒のいろのよきを、ひのきの小樽に入れて客これも物くふに、このくるまえびをひめくるみとみて、よりきて嗅ぐになよぶべききを聞い、かの小樽の酒をといて、車えびの肴にてのみたりけるを、くらがりたりける人、この小樽のともしくや見ゆらん、ともしびけちなむとするに、のめる男のよめる、

のみあけば限りなるべみ乏しげにたるの底にてなる音をきけ

あまの酒の酒このみの歌にては、なんぞありける、小樽はしぶ柿のおほきさなり、わこのはいなし。

むかしわかき男、藝にもならぬ相撲を取りけり。うれしかるおやにて、よくとると思ひて、此の子を外にてとらせんとす。さこそいへいまだとらせず。ひとり子なればあまやかしければ、とるにいき

はむなし。此の子やみおかりなりければ、相撲の力なし、さる間に、あひ手はいやまさりにまさる。彼におやこの子をつれてゆく。此の子ちゝあんのたんなるをして、とゞろあしぶみし出でてとりぬ。この子なよ〳〵とよめる、

出でてとらば誰か我には勝たざらんあゆみしちからも今日はかなしも

とよみて投げられにけり、おやあわてにけり。よくとると思ひてこそとらせしか、いとかくも投げられんと思ふに、しんじつに絶え入りにければ、かたやにてくわん立てけり。今日の入相ばかりにたえ入りて、またの日の戌の時ばかりになん、養生していき出でたりけり。昔のおはうは、かゝる相撲をなんとりける、いまのおの〳〵まさに仕なんや。

むかし女はらみて、ふた子生みけり。一人はいやしき男のまうしき、一人はあてなる男の子なりけり。いやしき男、七夜の内にうぶぎぬをして、下げかいもておこせけり。心ざしは出しけれど、さるやさしき事にも馴れざりければ、産衣の肩に針をのこしけり。着せんとて着せければ、たゞ泣きに泣きけり。これをあてなる男みていとをかしがりければ、いと結構なる綾羅のうぶぎぬなじまんしてやるとて、

むらさきの色こきみは今春の能のいしやうにまさりたりけり

むらさきの小袖なるべし。

をかし男、むさしのゝ原にて、あら馬をあひもちけり。これとくせはたかくさゝけり。しば〳〵ぜあけれど、猶いとうしろめたく、さりとていかだなどはえあるまじかりけり。猶はだかにてのりける事なりければ、ふつとかけ出でて、えおひつかでかくなむ、

出でてにけしあとだに見えぬ河原毛を誰がいちもつと今はなるらむ

ものうきに詠めるなりけり。

をかし餓鬼のみこに水の見えぬといひならはしけり。そのわこ墨蹟をほしがりて、いとたかうかねてかひ給ひけるを、なほ目利きにてありけるを、我のみとじまんに思ひけるを、また人ききつけてふみやる。ほとゝぎすのかたをかきて、

ほとゝぎす何ごと人のとひければ猶ひよどりと思ふほくせき

といへり。このわこけしきあしくて、

ひよ鳥としでの田長とけさぞなくこれをばにせとうとまれぬれば

時は、さ月になんありける。をとこかへし、

にせのおほきしでの田長は猶たのむ我がすむ里にすきしやたらずば

なか、男、有馬へ行く人に生鯛てはせんとて、よびてうとき人にしあらざりければ、家主になひじやくしておせて、其のれうりくにせんとす。あるじの男、歌よみて、みそこしにゆひつけさす。

鯛のみを我がためにとりつればわれらは汁をすひぬべきかな

この鯛に、あるかなきかにあたりしければ、こゝろとゞめてくはず、はらにあたはひて。

をかしをとこ有りけり、人の家をかりつゝ、いたづらのながき日に、物くはんと思ひけり。うち食はんことかたくや有りけん、ものでうくなりて死ぬべき時に、かゝといふ病者と思ひしかといではるを、くすしさいへ、薬をのませ、養生しければ、よくなりて、つれづゝとこもりをりけり。時は六月のつごもり、いと暑きころほひ、よひは、涼みをりて、夜ふけてすゞしき風吹きけり。ほたでれかうしける、この男のふせりて、

あをけたで雲の上までとぼれるにもなまなかすしにまけられもせし

いたうたき夏のひえみし思ひやればその細くなくはるをひたるき

むかし男、いとうるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひける。播磨国明石へいきけるを、いと事に思ひてわかれにけり。月日経てのぼるに文そへてあさましく行く。鯛もくはで月日経にける。こと料理はし給ひけんと、いたはしくおもひ佗びてなん侍る。世にある人の心には、目ざるな

とはれずれ給ひ出べきものにこそあらめと云へりければ、よみてやる、

のはるともおこしもえやは忘るゝおあしなければおもかけに餬

むかし男、わんとうて、ひかんとおもふ田の草ありけり。されどこの男ぶしやうなりと聞きて、つれなくやとはざりつゝいへる、

大勢のひくてあまたの草なれば御身なえこそやとはざりけれ

かへし、男、

おほぜいとなにやとはさるなにがしもつゝとふるまでひかんずものを

むかし男ありけり、馬の爪きらせんとて人をよびけるに、こざりければ、

いまぞしる暮しぬ物とひとまたん爪をばしらずきるべかりけり

仁勢物語上　終

をかし男、妹のいとあさましげなるを見をりて、

つらあかみ、さ[illegible]にみゆるわか草を人の笑はんことをしぞ思ふ

ときこえける、かへし、

はづかしやなどあてごとの言の葉ぞあさはかなくも思ひけるかな

をかし男ありけり、うらむる人を恨みて、

鶏の子を十づゝ十へて宮につかふともおもはぬ人をおもふ物かは

といへりければ、

朝はらに五串も十串もかりくべし誰か此の世をたのみはつべき

又をとこ、

よし汁にこぞの貝たすべりかうの物あれしはかなし人のこゝろは

又女かへし、

つくづくと布へるさしも焦がるるは思はぬ人をおもふなりけり

又をとこ、

りはるゝと星のまばゆくと我がまにまにいはれまでいふことをきゝわれ

たはことがなをぎにしける、男女の仕事のたゞきみとかなるべし。」

をかし男、人の先約ある女をむかへて、

わびしうは科なき時やあらざらんはなきへそはめ目さへたゞれぬ

をかし男ありけり、人のもとより内裏粽おこせたる返しに、

ちまきかひ君は鑓にそまどひけるわれは田にいでてとるぞわびしき

とて、田にしをなんやりける。

をかし男、あひがたき人湯にあひて、あかゞりなどするほどに、鳥の鳴きければ、

いかでかは鳥のなくらんあかゞりをそくふそくひはまだ夜深きに

をかし男、つよかりけるおんたらし射て、

ならぬかぬけるをにぎれるたなうらはあまたかずなる豆やおくらん

をかし男、思ひ懸けたる女をよう見たくおもひて、

おもくるはおりもすゝめどことさすりをりふし毎に思はるゝかな

をかし男、臥してなで、起きてなで、おもひあまりて、

わがあたまは夏の螢にあらねども暮るればつきのひかりなりけり

をかし男、あかみそをなむものけり、つほある人のもとに、

これわびぬあの鰹味噌ふ入るゝてふしほからつほも酔ぎてゐるかな

をかし心つきて酒ばかりこのみける男、長家にすみて居りけり。そこのとなりける殿原ども、夜半ばかりに酒飲まんとて、この男の所へ来て、いみじのよき物のしわざとて、集めおきたる徳利どもをふりて見れども酒なければ、男にも悉く隠れにければ、

あれにけりあはれいくつの世とくにもすみけん酒の音だにもせぬ

といひて、このながやに遊びければ、男、

ひきおひてあれたるつらの眠たきはかりにも鬼のすがたなりけり

とてなむ出したりける。この男ども、はゝひげ抜きてやらんとて、抜きければ、

うちとけて我がはゝひげを抜かせば痛さにつらもものがなしものを

をかし男、情をばいかう習ひて、彼岸にまゐらんと思ひ入りて、

すみぞめの袖もなぎれと八柱の我身にひゝかけてよむ普門品

かくて物ぐさく読みてねいりにければ、面に水をそゝぎなどして目さまして、

わがおほに書ご置くなるあかつきに煮置きしたなのかゆのしづくか

となんいひてくらひけり。

むかし在有りけり。つくりいそがしく、米もよあらあらぎりける程に、よね米ある人につきてよね

もしにけり。この男牛を貸りに行きけるに、その宿の人の在にてなんありける。この男にてぎをかご

じと、なおるに腹立ちければ、そこに有りけるたりはなるとりて、

三月まつはらたゝぼなのかけ見ればけがしの人のいのかそする

といひけるにぞ、はづかしがりて納戸に入りてぞありける。

むかし男、頭巾まであかうらを着て、まさにいきたりけるに、これは色このむすきしやと、すだれの内なる人のいひけるを聞きて、

染物をきたらん人のいかでかは色にたゝてふことのなからん

かへし、

名にしおはば茶色こそあれ赤うらの頭巾かたぎぬきるをいふなり

をかし年比つかひたりける女、心ひとつにもあらざりけん、ばかなる人のことに付きて、近江国なりける西の宮につかはれて、もと見し人のまへに出で来て、めし喰はせなどしけり。夜さりこのありつる人たまへと、あるじにいひければおこせたりけり。われをばよに忘れたりやとて、

いにしへの〇いづらんざくろ花こけらくづともなりにけるかな

といふを、いと恥かしと思ひて、いらへもせでゐたるを、などいらへもせぬといへば、みづばなのたるに目もわろく物もいはれずといふ。

これやこのわれにあふみのかゞみ山よらへはすれどまじりなる顔

といひて、たびぬぎてとらせけれど、すあしにて逃げにけり、いづちいぬらんとも知らず。

をかし、時に、すゝはきて、いかでくちすゝがれたる所へ行きてんと思へども、たよりなさに、酒をしひておこして、子三人をよびて語る。二人の子は情なくいらへてやみぬ。三郎なりける子なむ、よき御はからひといふに、この坊主にけしきいとよし。こと所はなさけなし、いかでこの西国中間にあはせてしがなと思ひて、乞食とありき下り、道なる馬のくつひろひはきなどするを、哀れがりけり。○さてこゝにはいたうしけれども喰はせざりければ、ある家の門外に立ちて、

もらへども一つぶくれぬつゝお米人はかむらしおもかげにたつ

とて腹立ちの氣色にて、いばらからたちのある家のやどに來て、つれなき事せし樣にこけまでゐるとて、

　ねけれどもしるもをしらで今宵もの聲しきのもとをしはてのみれけれ

と、あやしの輿れと思ひて、つれなき事どもしとしめあつめたる物をとらせければ、古へ今の時はそもふ

と目立ち、あしけ訪をば立ちはらしつを、いとはまさふかしやしはらで、きるり見ぞ話を事にな

なりける。

むかし男、女みそかうを食はずしてせざりければ、いづくへ通ひて所のでゆれる、

　ふくの神わが身になさば貧者へひんとさへこゝあるへきものを

ぴしやもん返し、

　むまれつかおのれをば我とたまはふりすくなくなほぱんしとけべし

むかし大けいせいやありけり。ところの事物ゐるきれたるありけるを、町人に置ひけるはらになれな

りける男、まだいと若かりけるが、この女知音しけりを、かの男へ、わがひにして、常に女と向ひをり

ければ、女いとしやらなり、ゑ親もいと來せなんとて云かふぞきいりければ、

　思ふには忍ぶることもわれまくれ負ひにしかねばさもあらばあれ

といひて、かうしの内にをれば、れいの此の格子の外には、人の見るをも知らでのさばれば、此の女

おもひわびて揚屋へゆき、これはいかゞ事と思ひて、あしたのゆきければ、皆人みて笑ひけり。こゝろし
てこの男たちの御出でなれば、くつわ出しておくに跳び入れてのきぬ。かく片時も離れずありわたるに、
いたづら者になり給ひければ、終に知音はなるべしとて、この男いかにせん我かのすまよせたるへと
傍輩にも申しければ、いやまさりたるすぢのつゝ、編わりなくいとすけなうおもひしいひければ、糸楊
枝かみたえたつゝ、みなきつけて、もはやかはだといふ誓文したてゝなむおもひける。逢ひけるまゝに、
いとゞ戀しき事かずまさりて、あやしまるけに戀しくおぼえければ、

戀しやと見にこそいれおけ誓の金にもたおもなりにけるかな

といひてなむかひける。

この男すまじは、かの後よりおはりして、御のやうにむかしへはいとよくしうたひ給ふ。男をいと
うたつきあひけり。かかる朝に、連れなかですぐにかしこめたい約束して、止るにたえん随めけるも。か
かる程に長閑ぎ付けて、此の男をば、つけとゞけしければ、此の女をば、きはかりて蔵にこめてしば
のけれぼ、いとに籠りて泣く。

さる人じやとおもうさにたへしわれが身の音をこそ泣かめ人はうらみじ

と泣きわれけり。此の男は人の國より、夜ごとにきつゝ、尺八をいと面白く吹きて、聲はをかしうてあは

うけにうたひけれ。かかれば此の女は藏にこもりながら、それにあなるとは聞けど、逢ひみるべきにもあらでなん有りける。

　さりともと思ふらむこそかはゆけれ有るにもあらぬ身をしらずして

とおもひをり。男は女しあはねば、かくしありきつゝ、人の國にありきて、かくうたふ。

　徒らに行きてはきぬるものゆゑに見まくほしさにはきやぶりつゝ

鷹氏の御時なるべし、大傾城屋は、染物屋の嬶なり、六條のかゝとも。

をかし男、つの國に知人ありけるに、兄弟ともだち引き連れて浪華の寺に行きけり。蓮池をみれば鮒どものあるをみて、

　なには寺講堂のまへの蓮池にこれや近江のうみわたるふな

これをくひたがりて、人々かへりにけり。

をかし男、養生しに思ふ事かきて、和泉國へくすし呼びにやりけり。頭の鉢を見れば、くぼみ、はれ、みゝうきやまず、あしたより痛みて、ひるははれたり。うみいと白う腫物のさきに見えたり。それを見てかのくすし、只一つけになほしけり。

　きのふけふ頭のまはりの引きつるはなのとをかのうしろなりけり

をかし男、和泉國へ行きけり。住吉のこほり、住吉の里、住吉の濱に行くに、いとひだるければ、休みつゝ行く。或人住吉の濱とよめといふ、

あめなきて菊ゝ花さけれしにあもくふと腹のへりたるすみよしのはま

とよめりければ、みな人尤もといひけり。

をかし男ありけり、其の男伊勢國へばくちを打ちに行きけるに、かの伊勢のばくちうち、つねの人よりはこの人上手なりければ、おやにもいうて、いとねんごろにあひしらひけり。かくてねんごろに馳走しけり。二日といふ夜、男忍びうたんといふ、伊勢の男もうたじともおもへらず。されど人目しげければ、えうたず。宿せたといふ人あれば、人をしづめて、子の時よりかの宿に行きて、外のかたを見出してゐるに、月の朧なるに、小さき童をさきに立てて人立てり。男いと嬉しくて、我が寝る所に率て入れて、子ひとつより丑みつまで打つに、まだ何事も負けもあらず、打あかしけり。つとめて油の代に、わが錢をやるべきにしあらねば、心もとなくて、しばしあるに、宿主のかたより、

其のかちし人や負けけむ我や勝ち負けたか下手か上手か

男、いたう忍びてよめる、

よりあはすわがふの錢にまどひにき下手上手とはこよひさだめよ

とよみてやりて出でぬ。今夜は人をしづめて、いととく打たむと思ふに、国の守といふ上手いはれて、打ちありき囲みて、碁へにさかしければ、最早打つ事もえせで、明くれば尾張国へ遣けんとすれば、亭主が石をとりいだすさかづきの皿に、歌をかきていだしけり。

いしにはにもらへどくれぬ義しあれば

とかきて、末はなし。その皿にたばこの灰して、末をかきつゝ、

この春むきけの代はやらぬなれ

とてあくれば、尾張国へこえにけり。」といふうちは、水尾の御時、これたかの御子のむよとり。

むかし男伊勢へ帰りて上りけるに、大淀の渡にて、伊勢のさい打ちのでつちに、いひかけける、

こひめうつかたやいづこぞさいなげて我に教へよゆきてうたなん

むかし男、伊勢の斎宮にみやづかへしける、かの宮の杉といひける女と、わたくしめをとこにて、かみこぬはせてよめる、

ぬひやぶる紙子にせばくなりぬべし大みやすぎぬの裏のころさに

女、

こはくともきてもみよかし紙子をば風のとほせるものならなくに

をかし男、伊勢国に下り、隣へ、酢を貰ひに行きければ、女いみじう叱りけり。その男、

そんなことはいつがくもんもあらなくに論語よまずの論語よみかな

をかし、つへに有りける時、それはいもせざる所なれにいかねておもひけん、

目には見て手にはとられぬ月の中のかつらのごとき君にぞありける

をかし男、[illegible]して、

よこねふだうおきやれにあごねせるはね目おほけ、[illegible]

をかし男、伊勢国にて、しりたいしてあらばといひければ、女、

大淀のはまにおふてふ海松もなくと心はまつにくびてあれけり

といひて、ましてつれなかりければ、男、

袖ぬれてあまのかりほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする

をんな、

岩間より下ふる物しあさなくはしほにつけたる[illegible]のなん

また男、

涙にぞぬれつゝしぼるにごり酒のからき心ははなをはじくか

よに落ちぶれたる女になん。

をかし男、二條通りの西の[illegible]の富の宮の[illegible]祭見に行きけるに、近衞の前にて、心きゝたる人々の土器まゐるついでに、御棧敷より給はりて、のみたてまつりける。

大はらやおつ口のあんも今日こそは[illegible]

とて、心にも嬉しくや思ひけん、いかゞ思ひけんしらず。

をかし田村といふ能ありけり。その時の太夫を[illegible]といふ、いきほひありけり。それをよびて天王寺に三日しけり。人々さゝげ食籠もて來たり、もてきあつめたる物千をばかりあり、そこばくの[illegible]食籠を、木の枝につけて、堂のまへにたてたれば、山もさらに堂の前にはかに出でたるやうになむ見えける。それを謡衆にありけるふだいいゝの何のなにがし申しけるに、祝言のをはるほどに、歌よむ人々を招きあつめて、今日の御能を題にて、春の心ばへある歌たてまつらしめ給へといふ。右の馬の太夫なりける翁、目はたかりながらよみける。

山うばのをはりし後の狂言は腹すぢきれて笑ふなるべし

とよみけるを、今見ればよくもあらざりけり、そのかみは、これやまさりけん、をかしがりけり。

をかしたがやうの娘をぞ[illegible]しけり、嫁入して七ヶ日の祝ひ安穏にしけり、鵜師殿といふのなにがしその

閏正月廿二日、かへすに山崎にむかしすまれける山崎の家に、瀧おとし水むかひなどして、
面白く作られたるに参りて、年比まさに山崎つかへども、近くつかひて御目に懸けず、今宵更にて
見に罷りしかば、この子ども皆この家などかく大切にするに有の鶴脚用でつまけりける様、
家見るはじめに、見事をかまふるすべき、言語は道路に、眼の前にも有りけり、いと面白うすべた
てまつりて大守の前をば召すに、かくば、いとこ有の、はれは、味噌にかへてかりけるを、輸この一輪六人
なの、この米穂を参らむと思えて、みつし校に取りに遣はす、いかばかりもなうてきてまめ。此の米
穂を今よりは見るに勝れね。是れをたゞ参らせんは、すくなきともさふらふとて、取らむ人に遣はさ
けり。宿の隣所にすみける人に遣はせ、是れを和へ作ったる紙に、かく付けけるとも。

あかねさしたしとうちつつ他のふ心ざしとふとしりぬはの

ふかし、宇治の上林鳥んるけり。馬場より人をやらんと出でけり。ちはさはる穴へ落ちて死にければ、
翁のよめる。

わがかどに千尋ある穴をほりつれば夜ひるたれかはまらざるべき

これに、翁すでに聴りて人のちうちうと云はれいひける。あにちりやうこてあいさせんわ。
つきかしまかう、この家に、ふきりたち出でたるありけり。師走の晦日に、其の日雨ふりくく降るに

人の許へほりて奉らすとて、

ぬれつゝぞしひて掘りつる年のうちに春はふつかにならせられてよ

をかし左の利きたる、すりこぎぶし居られけり。かも河のほとりの六條わたりに、家をいとわでて作りて住みけり。神無月二十日かた、菊皿のうつくしきに、もみなますを盛りて、殿達おびたゞ一日酒のみし遊びて、樽もあけもてゆく程に、この殿達をかしき歌よむ、そこにありけるかたゐ翁、板しきのはたに這ひ来て、人に皆よませはてて、よめる、

しほ物をいつかくひけん朝めしに盡きぬるよねにもみもあらなん

となん讀みけるは、うす杵にてつきたりければ、あらなく白き米にもみ多かりけり。わが主殿六十四石とり給へば、鹽物より外にまかななかりけり、されば、かの翁皿に是れを迷惑して、鹽物はいつかくひけんとよめりける。

をかし惟盛卿と申す公卿おはしましけり。八島のあたりに、むれたかまつといふ所に船ありけり。年比の侍、與三兵衛、石童丸を連れて、伯父宗盛なりける人を常に恨みて、ぬけておはしましける。時代経て、久しく成りにければ、其の時の事は忘れにけり。かねはたんとも持たで、すねを引きゝ、大和の方にかゝれりけり。今おはする高野の瀧口が寺、其の院の上人ことに貴し。その寺のもとにを

りふ、、罪ををりて、名をかへて、上中下みな歌をよみけり。與三兵衛なりける人のよめる、

世のなかに絶えて亭主のなかりせば今日こゝろはのどけからまし

又人の歌、

死ねばこそいとゞ亭子はめでたけれうき世になにかひさしかるべき

とて、其の寺を出立ちて行くに、むだるくなりぬ。御供なる人酢を持ちて外よりいで来り、此の酢をくひてんとて、よき所を求め行くに、醍田川と云ふ所に至りぬ。きみなむきがりて多くえならず。宣ひけれ、二位殿が酒にて醍田川のほとりに至るといふを題にて、歌よみて盃はさせ、と宣ひければ、かの與三兵衛よみて奉りける、

かひでけん樽ぞのかたからに醍田河原でわれはきにけり

きみ御亭のかくしひ給ひて、かへしえし給はず、二位殿御供につかうまつれり、これが返し、

一とせに一度のあとふにきみませば宿かす人はあらじとぞ思ふ

帰りて亭主の門に入らせ給ひぬ。夜更くるまで、酒のみ物語りして、あるじの二位酔ひて臥所へ入れまゐらせけり。十一日の月もかくれなんとすれば、かの兵衛よめる、

あかなくにまだきも臥所へ入りぬるか山水さして入れずもあらなむ

君にかはりて奉りて、行幸、

おしなべてこれは中のこれもかと疑のなければたれも知らじな

むかし何者にかまけ給ひしこれもら將軍、例の狩りしにおはします。供に馬のりなど大勢にて狩りし給へりけり。二尾へと見るに、かりやうありけり。女おはうしてしとくよばんとおもふに、大勢を止めて、あくならぬ所までとて鞭打ちをせさりけり。女この馬の口をとりければ、降りて、

まくらとて草引きむすぶこともせで誰がつまとだにたのまれなくに

とよみける。時は九月三十日なりけり。將軍大きに醉ひて、あか顏し給うてけり。かくしつゝ舞うつ歌うつ飲みけるを、思ひの外に、御烏帽子も落ちてける。無理に鬼どもくひ奉らんとて、大勢まうでよるに、六甫山の麓なる、河原あしいとはやくつよくて、岩隠にまゐりて見奉るに、つく〴〵といびきかきておはしければ、やゝ久しくおこして、仰せのことなど御はかし取り出でて消えにけり。鬼もさぶらひしかなと思へど、大鬼小鬼どもありければ、またあらはで、無理ぎりに切つて懸れば、鬼、

わるくして太刀はあらむと思ひきや弓ふみ折ればきみなくはんに

とてなむ、なく〳〵逃げにける。

なき人の別れの時も、身にあまりたるか、翔たむ稚子なりけるに、その母長閑といふ国にくだりけるに、子は京に宮仕へしければ、詣でんとしけれど、一すいにも出でず、人も聞ゆれば召しもてゆかれける。師走ばかりに、俄の事とてふみだせるかふあり、驚きて見れば歌あり。

　おいぬれば猿のわかれのありといへば猶続つる涙にもあつめてこと

かの子、ゐざりながら泣きてよめる、

　世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため

むかし男ありけり、童よりつかへられける。天狗熱鉄の飲ひ給うてけり。六時には、必ずい出でにけり。大嶽より常住へしければ、常にはえまうでず。されどもとの心うしなはで、まはりける。昔ついたしあれし人、俗にて一臂なるあまた参りのつとめて、六時なれば、こたへとて、大かたつとめ給ひけり。昔のこと思ひでて、大日御止まず、皆人酔うて雨に降りこめられたりと云ふを題にて、歌ありけり。

　思へども身をしわけねば目離るる事もできなかりける雪のつもるぞわが心なる

とよみけれは、天狗いたう哀れがり給ひて、御ぞぬぎて給へりけり。

むかしいとわかき男、若き女を相いへりけり。おのおの親ありければ、包みていひさしてやみにけり。

けり。年比経て、女のもとに猶心ざし晴らさんとや思ひけん、男歌をよみてやれりける

今までにわすれぬ人は世にもあらじ己がさまざま年のへぬれば

とてやみにけり。男も相になれぬ、宮仕へになむいでにける。

むかし男、つのくに、いばら郡、あしやかま蓋取手の職など、知人にてありけり。昔の歌に、

あしやかま蓋のとつては鋳もなみつけておくれてささできにけり

とよみける。此の里をよみける、こゝをあしやの灘とは云ひける。此の男なまかはものなりければ、それを頼りにて、えびの助どもかゝみあつまり来にけり。此の男のかみもえびの助なりけり。其の家の前の海のほとりに遊びありきて、いさごの山の神のをると云ふ、布見に登らんといひて、登りて見るに、そのはた物より異なり、長さ二丈、ひろさ五尺ばかりなる。石の表に白ききぬに岩をつゝめらん様になむありける。さる機のかみに、わらんぢの大きさして差し出でたる、ぶら／＼あり、それに走りかゝるに、ぶら／＼はててうち栗の大きさにてこぼれ落つ。そこなる人に、皆はたの歌よます、えびの助先づよむ、

わが世をば今日もへめぐりまつふぐり織ると此の布いづれたかけん

あるじ次によむ、

ゆきたて仕人こころむかし白衣をまたくもおろか袖のわきに
とゞめりければ、かたへの人笑ふ事にやありけん。この歌にめんじて止みにけり、帰りくる道遠くて
う並にしくらひて、[illegible]が家の前にくるに、日暮れぬ。宿の馬を見やれば、あまの篝たく火おほ
く見やるに、あるじ男よむ、

昔[illegible]蕪がほたて[illegible]我がすむかたのあまのたく火か

とよみて家にかへりきぬ。その夜南の風ふきて、浪いとたかし。つとめてそのいへのめのこども出で
て浮海松、くらげなどの、浪によせられたる、ひろひて家の内にもてきぬ。女がたよりたる海松くら
げをたかつきに盛りて、柏をおほひて、さし出したる柏にかけり。

わたつみのかざしにさすといはふ藻も君がためにはをしまざりけり

田舎人の歌にては、あまれりや足らずや。
をかし、いと若くはあらぬ、これかれ百姓ども集まりて、月を見て、それがなかに名主、

おほかたは月をもめでじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの

[illegible]といふ男、われよりは勝れたる人を[illegible]、[illegible]
人しれず[illegible]の[illegible]

をかしくもれる鏡を、とがでと思ひわびければ、天晴とや[illegible]、[illegible]
るを、曇りなく[illegible]して、[illegible]ければ、[illegible]

[illegible]

といふ[illegible]

をかし[illegible]男、[illegible]

[illegible]

をかし、[illegible]帰れど、女は[illegible]よめる、

あみ笠でたなし貰りのほてかづき行きかへるらん知る人もなみ

をかし男、身は[illegible]くて、いと高き木の上に登りたりけり、下したてにやありけん、ふして思ひ、
おきて思ひ、わびてよめる、

あぶな／＼の[illegible]はすべし枝もなく高き木のそら登しかりけり

昔もかかる事は、くもまひのしけるにやありけん。

をかし男、女ありけり、如何ありけん、その女、目つぶれにけり。後に[illegible]生じければ、ほしある眼
なりければ、こまかにこそ見えねど、時々もの見えけり。女かさかく人なりければ、かきなれぬ許

わなり、今の男、[illegible]となりて、一つの[illegible]になりけり。前の男、いとつらく、己がきおひの事なれば、
今までのこと[illegible]ねば、[illegible]と思ふらん、[illegible]物になん有りけるとて、[illegible]
ける。ときは春になん有りける。

[illegible]

となんよめりける。女かへし、

[illegible]

むかし二條の后に、[illegible]
[illegible]
ば、[illegible]

[illegible]

このせきに迷惑して、いにけり。

むかし男ありけり。[illegible]
[illegible]
[illegible]

たゞとて、公事しそはてさにけり。されども、明けのとも山主膳にむかへとしけり。されば此事、
かつをのたゝきをこしらへて、歌をかきつけて置きたり、

秋かけてしたふたゝきのいろかしとおもへばふくるゝおきにぞありける

と書き置きて、往還より人もこずは、これを進ぜよ」とて、出て行きて後、つひに今日まで知らず。よくてやあらん、悪しくてやあらん、いづくの所とも知らず。かの男は、天野の酒手をおひたる隠れ居るなる。わたくしにて、人のゆくと思ふにやありけん、伯母のもとにあり、いまこそは出でめとぞいふなる。

をかしほりいだしにやありけん、大橋あたりに、家を買ひけり、四十両が九十両の家にぞなりにける。なか立ちしける翁、

作事してちりまでひろふさらゝくに骨を折るとこそまたおもひおもね

をかし犬もお好きありけり、頼みける坊主なが月ばかりに、梅漬にさびもの添へてやるとて、

わがたのむ旦那のためにつくりもの斎非時わかぬ茶のこなりけり

とよみてやりければ、いと嬉しがりて、使に銭くれにけり。

をかしうどんのこ麦をほしける日、むかひにたてたりける車に、女の仕事傷たおなさうに見えけれ

ば、中間なりける男の、よみてやりける、

[illegible]ことをばわが麦の[illegible]にかへてひけかし

といへり、

[illegible]麦わけて[illegible]車の[illegible]

後はたんとつむぎけり。

むかし男、高麗陣にて、あやうげに居たりければ、あるやれぎぬきたる人の、具足は[illegible]綿の目を強とやいふとて、出しければ、見て、

[illegible]目の人を[illegible]

となりしたる佐兵衛の[illegible]けるあり、このゆき難波といふ[illegible]。其の人の家に、よき酒賣ると聞きて、うへにあるまじき奉行、[illegible]、[illegible]たるの日の酒盛にとて行ける。[illegible]にて、[illegible]酒を入させ、其の酒の中に、甘酒、ぶだう酒などありけり。酒を入る事二十六升ばかりなみ入れけるを、それを題にしてよむ。[illegible]に、明石の[illegible]る花し、[illegible]珠[illegible]と聞こえ、[illegible]来りければ、しゐて飲ませけり。元より酒の事に、飲[illegible]ければ、すまひけれど、強ひて飲ませければ、かくなん、

[illegible]

などかくもよまむといひければ、大臣のゑひてはくれるさふりにまかりて、ふぢからげのさかばやしを、思ひまゐるといひければ、皆人げにもと思ひけり。

をかし男ありけり、歌はうたはざりけれど、世の中の小歌を知りたりけり。[illegible]あるす、世の中を[illegible]うんにて、京にもあらず、はるかなる田舎に住みければ、[illegible]なりける男、すゝめてやりける、

[illegible]にはむかし[illegible]なれどよのうたよりはよくぞあるてふ

となんいひやりける。[illegible]

をかし男ありけり、いとまめにこゝかしこありきけり。深草のあたりになん、浄瑠璃あやつり[illegible]かたりける人、見に往きける、[illegible]取られたといへり。さて、

時計の[illegible]ゆるせまづひらにいやといふともいりまゐらする

となむよみて入りけり、さる人のきたなげさよ。

をかし、ことなる事なくて、にげて上る人ありけり。太刀かたなはさしたれど、心やおくれたりけん、鴨の羽たゝきに落ちたりけるを、男歌よみけり。

昔、[illegible]

これは、[illegible]東に下りけるが、[illegible]

をかし男、頭ははぐべしといひやりければ、けさやう、

[illegible]

といへりければ、[illegible]心[illegible]

をかし男、[illegible]

手は[illegible]

むかし下手なる[illegible]其の男の[illegible]ける人を、[illegible]此のかぢ[illegible]

刀の[illegible]

は[illegible]

つぶ／＼と[illegible]

かへし、例のかぢ、

[illegible]

といへりければ、[illegible]男[illegible]

せたり。額に書きて後に軍をかけり。[illegible]にて、[illegible]侍る。[illegible]

のあくめに出でしたりへれければ、例の[illegible]、よもて取りかへしにやる。

　たけ〳〵と[illegible]のごはず錆び刀身のこしらへにうんぞまされる

とこれでやれりければ、身も鞘もとりあへず、しとゝめそへて、戻しけり。

をかし年より女の、人の心を恨みて、

　風吹かば[illegible]

と、常のたはごとに云ひけるを、聞きおきける男、

　云ひごとにかし[illegible]の[illegible]白き[illegible]年月[illegible]

をかし男、友達の額をはらしけるがもとに、云ひやりける、

　はなよりも額ぞたかく成りにけるいつほゝさきをこびんとは見し

をかし男、味噌つきにやとふ女ありけり。それがもとより、こよひ夢になんみえ給ひつるといへり

ければ、男、

　おもひあまりみそ玉[illegible]夜ふかくさつゝ玉[illegible]せよ

をかし鼠、やせたる猫のもとに、病みける事をとぶらふ様にて、いひやりける、

いにしへは有りもやしけん今はなし鼠の猫をかぶるものとは

かへし、

頸玉のしつかとせしうとけなくにかぶるねずみは戀ひずぞ有りける

又かへし、

戀しとは言ふにもいはじむす玉の緒をたえんと猫にたとへしもとじな

むかし男、ねぶとを煩ひける女のおんばになりければ、

すそのあたりしかにしくもあるらめ思ふいたみ思はぬうちは腰ひきにけり

むかし男、やみ目にてゐて、

あやなくも眼のうちにしぐる物はいかにあはせし藥ならん

むかし仁勢男、せりやきの料理しけるとき、いまはさる物はも無く思ひけれど、もとすきにける物なれば、大高坏にもえんとものて食はせけり。すりこぎにかきつけける。

飼ふ上てんなわらびを芹やきと今日ばかりとぞ人と食ふなる

大きさのみ思ひこえかりけり。あの芹やきを思ひけれども、好かぬ人は聞きにくかりけりとや。

むかし所に有りける、男車の穴けられたといふ。この穴いと戀しくて、

耶いとまじやたに苦とせんとて、さもなく見やりけれど、喫に（?）とまりて見るを、

みなの衆で身やつしよりも悲しきは耳のあなほるいたきなりけり

むかし男、すゝきみみつ野の辺にてまよひへにけり、虫は鳴上人は通りける、

畑にてとられる瓜のはさみはに被られぬ瓜はさるとて

その下男、すゝめに上洛して、

刀が鳴りもなくなりぬ杉吉がきちんのはかまいくよへぬらん

おんつま(?)は悟性に成りて、

わづかなると平家もしらずしやみせんも琵琶も小うたもいかで過ぎてき

むかし男、久しく畑のまで出る心もなし、まゐりこむといひて、

太刀かづきていく火あたまにするぬれ侍たちぬくすりに温補もなし

むかし女はおごりつゝ、男はそうたもてり、はやく打ち捨てたりけるをみて、

おもてこそは今はあだなれ是れなく侍そうおほにふもにあらそしものを

むかし女のえたまへすとおぼして、いかなる顔にて挨拶しけるとて、

近江なるおかたたの前をとくになんへつれなき人のなべのしりみむ

をかし男、梅ほしを雨に濡らしける女を叱りて、

[illegible]

女かへし、

[illegible]

をかし男、ちぎれる事あやまれる人に、

[illegible]

といひやれど、いらへもせず。

[illegible]男ありけり、深草にて鼠を捕へて殺さんと思ひて、かかる歌をよみける、

[illegible]

とよめりけるにめでて、殺さんと思ふ[illegible]

[illegible]

[illegible]

をかし男、煩ひて心地しぬべくおぼえければ、

終にゆく道にはかねもいふじかときゝふ霍乱傷にくれしを

仁勢物語　下　大尾

他我身の上

山岡元隣

他我身のうへ

世に出でゝより、旣に、耳より目より其の[illegible]て、指を屈る、以て、[illegible]の月を[illegible]せば
ひかりかげを忘れたり、山を山といふを、たゞ[illegible]として行くを[illegible]にこそ

他我身のうへ目錄

第一

[illegible]

二　中庸の事

三　やぶれ車の事　同　もにすむ蟲、みより出せるさびの事

四　九ケ條の[illegible]の事

五　至樂の事

第三

一　けいせいにくるひの意見の事

二　はかいむざんの事

三　數寄者と鞠ける人の論の事

四　女ともみえず男なりけりの[illegible]の事

五　う[illegible]言葉にかゝる言葉の事

六　[illegible]の事

七　一言以て身を終ふるまで味ふべき事

八　[illegible]つるに[illegible]びはなら[illegible]事　付　因果のこと

九　[illegible]の事

[illegible]の上目録

第四

目録終

他我身のうへ第一

一　願ふともに、後生をふかくねがひ願ふるものは、必ず世の事に付いては心根よわりて、人のよき事はそねみ、あしき事はすくもてはやすものなり。是れ大聖釋迦のながれをくむとも見えざるを、不審に思ひ侍りて、此のころ此の事をあきらき智をもつて相尋ね侍るに、今時世にある人の、後生ねがふといへる人に、其の心實に後生ねがひにはあらじ。其の願ひやうの趣は、或は極樂の座のすにには、なれ、此の外世の事にたよりあしき人こそ、大かた後世ねがふ事なれば、人の愁へも聞きては、餘所にし此の愁へにあり、我ひとりの身ばかりかくつらき目にはあはじなどいひて、餘所の愁へを我が愁への友とすらんこには深く世の愁へをなげくに似たれども、底には我が方人と思ひて、おいとしほらや笑止やなだ、口にまかせていひなす、すべてまかりぬ事なり。餘所の愁へを聞きて、我が愁への友とすして心を慰めんよりは、しかじ我が愁へを、これ即ち前世の宿業のはつる所、善根の種なりとおもへりて、いよいよ仏の法を修行せんには。又其の身のほどに付けつつ、時を得てしたりがほなる人は、愛心ではまぬ心にて、我こそ才覚ありて萬事たらひたれ、家もさかえ、族もひろまれば、此の上

には後世をねがはん信者やと思ひて、仏前にしたしみ信をあつまりて、あるひは寺の常住堂にこもりけて、あるひはこなたかたへあるきありきして、或は名聞とばかりいふべけれ。此の名聞の心よりおこりて、たとひよき出家にても、貴き尊き住寺をばあかまへて、同じ寺の同行のうちにても、とんじやうにれは、仏祖の正道をせられし信者に、我もいかめしき本願につきてたと、我慢をおこす心より、人をそねみ、ほむらをもやす、是れ心得の後の世のためとはみえず。誠に後世を大切に思はんとならば、先づ一番に我慢をやめ、次に慈悲を専らとすべし。縦ひ我慢をやめたりとも、慈悲の心薄くしては、後世を願ふとはいふべからず。又慈悲ありとも、我慢をさきとしては、中々仏の御心に叶ひ難し。此の二つを心に会得し、其の上に我か身の罪をしる人を、愚かなりともいへ我は誠の仏道者と言はん。

二　若き人のひとり口に、隔心なかれの間にありき、諸の法語などもよき師匠なしにあれば、心をやぶりになりて、万事物ぐるはしく、又歌草子など見ては、好色に移るやうに、心をもちてあるべしこれ教書の本意なりけらし。

三　芸能にかぎらず、物の師匠をするもの、弟子にわたくしをいひなれし心を、外にもちにむかひていへる、心得ぬわざなり。

四　人のよき事を、殊の外にほめこぶ顔するもの多けれども、大かた心には何とも思はぬ物なり。

さのみは知らぬ[illegible]、よき事は[illegible]人の、かたり傳へぬにてもしるべし。又あしき事は、一わたり[illegible]
を一人、二人の外までも、人にかたり傳ふるは、まことは心にうれしがる程にはなけれども、まこと面白が
る心なる故にや、いとはつかし。

人[illegible]をみれば、いやしきはおのれに[illegible]、人の[illegible]なし[illegible]にこそはいつはふ人や、[illegible]
理の外におもひて、[illegible]の人をあなどる[illegible]も、[illegible]しへるゆゑ、又へつらふ上
なき富貴なる人に對ふには、世の[illegible]ならねば、へつらはぬ人にても、[illegible]もあらねば、よく
心をつくしてつかふるを、見てあしとは[illegible]、又へつらふ事とて、我とわがみを卑しと[illegible]
る事なかれ。[illegible]
[illegible]、[illegible]にくむとも人、よろしき道具とも[illegible]
と、[illegible]
の[illegible]に、[illegible]利[illegible]、[illegible]
いと悪し。

上[illegible]に、[illegible]の[illegible]をすると、いふ事を[illegible]、此の[illegible]にわたるべし[illegible]
[illegible]を[illegible]、[illegible]のをなしたえ、道のため徳心のためにも功をつくさば、後には[illegible]

然に天子にもまこしのし、講學にもめし出され、國の守護ともに仰せられし者なり。今の代の儒者なりとて、世に鳴るものの元來を尋ぬれば、其の祖先の宗領には、それ〴〵の家をもつがせ、二男に隠居の跡をもとらすべし。此の外の子を學問をもさせて、のぞみ〳〵は、世をわたるたすけともさするなど、思ひすてたる輩に、やう〳〵大學の讀みならひ比まで、はや弟子をもとりて講釋をもして、人にきかせんと思ふ心より、とやかくやする内に、法體をして、異風なる名をつくりつき、上がてあたま丸きものは、人に物を貰ふものなりと心得て、あなたこなたへも、心なき事のみ云ひかけ、聞きはじひに書を見る故に、口はかしこくて、我にあはぬ者なれば、假令よき人にても、面白きすぢへと云ひて、あしざまに云ひなし、又惡しき者にても、我が相腹中なる者なれば、理窟なる引事を取り付けて、雲居までもほめあげ、我が淫亂なる事をも、是れ即ち天地和合の道理、人倫の根本なぞ、言葉に花をさかせて云ひぬくれば、當座は誠にかしこげに、孔子の孫のやうにも見ゆれども、又しりさきて側よりよく其のわたくしを見れば、口と身の行ひ、雲泥はるかに違ふ人のみ多ければ、論語よまずの論語讀まずと云ふも尤もなるべし。

八　世にすこしも、徳心の爲に文字をならひ、道理をも聞くものを見て、文盲なる人なま物しりとてそしる者あり、是れ大いにひが事なり。誠に一文は無文の師なれば、われよき物知りにならんまで

は、たゞ物師たる人を、師としうやまふべし。わが身は若年にて、ある人と友なひて、人の家にまかり出しに、ところに残る所もなき普請にて、かしこのくま〴〵まで、心を盡して住なしたるを、かれはたゞほめて、ここに物好み足らね、かしこを世智辯に好みたれと嘲りしが、其のほめたりし人のすみか、誠にわたりの宿とて言ふべきならねど、今のたる物師にて、そしりし人に似たりしか。

九 いぬの年のあゆうに、何の修行もなく、うか〳〵と年よりたる人を、ところわきにかほして敬ひ、さいることのなくしけなるかも、人若しといはぬを、我は齢をば重ねけれ、ものゝ上の思ひせしこそ、萬事分別もなき故に、人のあなどることゝはなるものを取りて、ひたぶるに物しり顔なる人は、いとはし。

十 わかき人のすぐれたる智慧、又は藝能ばかり仕おほせたる人に、老いても人の藝能をまなびたる、一藝の人、いとにくし。

十一 我が身の際をかへ、富貴をきはめたるにつけて、身のこゝろおごり、其の昔を忘れたる人こそ、世にあるともいふべけれ。もし我を貧しき人に、人に驕られ、人を卑しまれぬことなくは、かう人の、ともに語らひ、禮儀をもしつかふものならば、人すこし、それに無禮をせられても、ともに

て、頭たるものを二つ求めたりしに、其のうちに、少しよし悪しきあらんときに、まづ其方目に入りたらんを取り給ふべしと、評儀しけるに、いづれも先の人、心やすくまへがちに良きをとらん、又先まりも、先づ其方こそを申すべけれ。こゝで互に無禮をつくして分けたらんうへは、たとひ我取りしまさりて、人のとられしを取りたりとも、人も我をうらみず我もまたうらみず、又我劣の人まさりたりとも、互にへだてもなかるべし。もし此の禮儀もなく、たがひに争ひわかつものならば、人の劣りたるをとりたらば、いかばかり腹も立ちぬべし、又我がまさりたるをとりて、人に本意なく思はせんも益なしとかく朋友の交はりにも、我が身を後にし言葉ひくうして、一生くらす人をこそ、徳のいたりたる人ともいふべけれ、あながち當座のさしあひなきよく云ふとて、心實なき人はうらやましからず。

十二　我が身のほどをわすれ、人に無禮をなすものこそ、必ず又へつらふまじきものにへつらひ、怖ぢまじきものに、深く恐るゝものなれ。これあだことに、金銀を多くつひやす人、すべき義理禮儀をもなさず、やぶさかなるまじき事に、吝なるがごとし。

十三　法體をして、めづらしき字を求め、耳にたつ法名つくる事、此の頃おほくある事なり、たゞよびよき名よかるべし。名は人によりてたつとし、人は名によりて尊からず。樊噲の辨慶のといへる名は、今聞きても、其のらしく聞ゆれども、もし樊噲辨慶が手柄なくば、樊噲も辨慶も、おそろしき名と

は聞くまじ、父ほとけといへる名も、きゝてたふとき名にはあらねども、慈悲の程をよく人しれば、聞くよりはやたふとし。もし父ほとけと云へる名を、木履か草履かにつけて、わかしより聞きたらましかば、聞きにくかるべし。

十四　岡にさかしき人も、なれにし妻に後れし折は、同じけぶりにも立ちのぼりなんと歎きあへれども、ほだしとなりぬるみどり子さへありて、つれなく日を送りけるうちに、やうやう念ころなる友にいざなはれ、心ならず後の妻を迎へて、年月をふるうちに、又子といふもの一人二人まうけて、こゝやかしこや商賈する内に、ぜん腹の子やうやう人となりて、もはや家をもわたし世をもつがすべき折にして、其の心得いつかで、かへりて後の子に、家財をもとらせたき心に、いつとなく移りかはれる、其のあたる事をおしはかるに、はじめの妻の子が憎きにはあらねど、思ふ夫はあるべからず、たとへば井の水をくまんに、間なるつるべをさげんと思ふ心はなけれども、むかひなるつるべを引きあげんと思ふうちに、心ならず前のつるべ下ることし。其のすき間をうかゞひ、かのさかしき手代、言葉をたくみにして、いろいろ身になるがほに、ぜん腹をさしにすゝめば、其の色にあはれ、家督をかたとし、後の子を家督にたてんとするにより、本より彼の継母がことを子しまれなれば、子の方よりも若気にて、すこし述懐の心出で来て、ひとへに夢の世と移りかはる事をなげき、一日だらもしなまに心を持ちて、

聞に[illegible]を[illegible]するときに、[illegible]の[illegible]母、[illegible]うしろにて、[illegible]事を取りつけかたれば、其の父これを[illegible]、[illegible]に[illegible]の道をきりたとする事は、[illegible]かたは[illegible]のつ[illegible]く[illegible]の[illegible]、[illegible]死なんとする時に、形見などをとらせ、我死したらん後にも、[illegible]、我が子にも、継母[illegible]とて悪くぞしするな、[illegible]いひおくもいとむづかしと、[illegible]又かたへ[illegible]人相口[illegible]に、これも其の人の心にこそよい[illegible]、[illegible]人[illegible]侍るもあると[illegible]は、定めて後の妻の心[illegible]持つ[illegible]、[illegible]が、[illegible]八つ九つ[illegible]者なれば、多分につきたるかた心にくし。されどもむかへて、其の子の[illegible]が[illegible]に[illegible]ば、またむかへ[illegible]べし、一[illegible]からず。

十五　世に[illegible]二代[illegible]いへる事は、[illegible]見侍らねども、[illegible]まづこゝにひとりの長者ありけるに、多くの子をもち、それ〴〵に芸能をつけ、朝夕に能の謡をうた[illegible]ありけれども、おや生涯のうちはさる物とて、とかくはごくみて恙なく侍れども、本より電光朝露のきえやすきことわりなれば、親やう〳〵此の世の縁のつきんとする時に、[illegible]引きよせて、唯今[illegible]命よりも、我が子どもに別れん事をなげけども、時到至ればはかなくなりて後、それ〴〵にゆづりをとらせ侍るに、たとへば千金のかさねたる富なるを、五人の子供にわかちと

らざれば、其の身は先祖の分限なるを、今まで親の此の世にありしときのごとく、能き衣をとゝのひ、あへる内に、家へ出入る、ねらふめのとの、わかやしなひ君は、鼓こそよくあたゝまれ、謡こそ器用なれとはやされぬれば、其の家職をわすれ、春は花見、秋は月見といふうち、やうやう其の身よりしもはれけるほどに、後には身もとゞろかす家破れて、あまつさへいふまじき見には、常に不足をいへば、常に足にならぬを思ふ。譬むなしくなりし後は、藝をもたしなまで、朝夕身をそこなひ、家をとゝのふる工夫のみよかるべし。親存生のうちに、子を思ふ事のふかきに、人として藝のなきは、命期になほる事ことを思ひ、それぞれに藝をつくるといへども、文盲なれば、彼のあだなる藝にうかる心をつひやすさるべし、身の程をわすれさゝと見えたり。同じ藝を學ばせんとならば、彼の大聖孔子の門にあそばせて、おのれを修め、人を治むる道をまなばせたきものなり。此の道をまなばばあまりなきが、たとひ天命不幸にして、身の徳のなきとも、彼のあさましきはゐる人の、貴族を家に重ねたるものよりは、心にさへしとて、一錢の金も、しばしく空しくとも、彼のあさましき心の人の、末年の美味に、目を口腹をついやすよりは、ためしみ道にまさるべし。千金の金をつむといへども、一日の學にしかずと、古人のいひ傳へしもこの所なり、まことによく衍ひぬべし。

廿六　ある家にて上手のなせる藝を、其の道を心得ぬ人のにほめたるは、聞きにくきものなり。

其の論ずる人も、何かは其のしらぬ人のはこれをまなぶこと稀れ、まして智慧ふかき人の公事の分けやうたへを、あるかなる身にて我が心にまかせて、何の義理か道理にあたるなきのもとを、いと無きかたし、いはんや儒佛の道理をや。

十七　胸懐穴に、たび／＼手を入て、後におもてよろこぶこそ心得られね。又手をくみなどいふも、にくきものなり。すべてかかるわざは、これに、昼夜日をくらし、心つくす人は、大かた愚かなる人の上にある事なり。

十八　人の多く集まりたる中に、そこ／＼の里には、ふしぎなる事どもありなど、面白く語り出づるは、聞く者たれも空事たりとはしりながら、其の物がたりの、さも有りぬべき次第を興じけるを、かたへよりさし出で、さいまくりて、そのこと極めてそらごとなり、何の經には何といへる本文あり、かの文にはかく云へる言葉ありなど、道理しり顔にいひちらしたる、いとにくし。又年老いたる人の、血氣ぶりの力だては、喘にも其の人いかばかりとおしはかられて、心劣りせらるゝものなり。

十九　郷に入つて郷にしたがへといふ事は、いまだ文にては見侍らねども、是れに能く相似たる事は、禮記等にいと多し。然れどもまことの佞人は、おのれが利口をもととして、賢人の言葉をかり、人は人たり我は我たり、もし我はつるときに、たれかは身にかはるものあるべきとて、人のそしりを

も顧みず、人の事のみあしざまにいひなす者あれども、かやうの口こはき、人くらひ馬のたぐひには、さすがに云ひ聞かする人もなければ、一生我身ほどよろしきはなしと思ひて、あやまりを直さゞる者あり。惣じて口の悪をとゞむるやうの事には、来生の罪あり、もし我は我、人は人たるといふ事ならば、さきての恩といへるまでは有るまじき事なれども、たとへば網を大谷にはなち、鳥を求めんに、鳥にかゝれるあみの目は、わづかにひとつふたつに過ぎねども、目ひとつふたつ、ないし十二十あるあみにて、鳥をとらへ得ぬ所には、いつまで求めんとも、鳥かゝるまじきごとくに、我一人にて世をわたるといへる事は、有るまじき事なり。

二十　むかし睦しかりし人の、予誤くなりぬるとてかはるは、うき世の有様なり、又我とすしかりし時の友には、今いかに高くなりぬるとも、昔のごとくにおもふべし。人の心は、大かたうつろひ易きものなり、友のうちより交るべき友と撰ぶべきと、いましめ置きし事こそ、まことにそれ。其中にも、離別すべき五つあり。一には父母にしたがはぬ者、二つにはいたづらなる者、三つには物ねたみする者、四つには口さがなき者、五には酒をすぎたる者、此の外にありとも精ある者と、又うたをすとをするといへる事あれども、是は事にあたりて行ふべし。また我が心にかなはずとも、離別せざるもの有り。一には我を親の育み養ひにて仕へし人、二には我貧なる時にむかへて、共に家のうちを行ひ治めたる妻。

三には其の好の父母兄弟も今はなくて、たよりなきもの、是れ世上に仕はる道なるを、此のころは人の心、ことやうになりもてゆき、仕ふべき事あるをも、世におはれて一年二年、又三年の出るまじきもののあるなども、我が少しの腹立ちにて、つらき別れをする人あり。かく仕へ來るも、心のたえし事なりや、又是く速るゝ處にも、我かまた將軍をふるまひ、思ひをもやぶすることあり。又わづかに、一人二人相つかふ下人にも、無理のみ云ひかけ、つよくせたげて、共にはからずもやすき人あり。これ人をせたぐるに似たれども、ついには我が身のはなれたつる所いかばかりぞや。ふるき世の式にも、下人の無禮、見入り聞きいるべからずとこそ聞けれ。又陶淵明は、我が子のかたへ下人をおくるとて、これも人の子なれば、よくいたはりはごくむべしと、いひやりしとかや。有りがたき心ざしなり。

二十一　日本は神國にて、かたく四足を食する事を、神の御いましめとて、ふかく其の制法を守る事、其のおこりは未だ聞き侍らねども、神道は、慈悲をもつて專らとする事なれば、すこしも生あるものの命をとる事を、あはれみたまふなるにや。それはよし何ともあれ、此のあしはらの國にすまふものは、天照大神の御掟をそむきては惡しかるべきなり。しかあれども此の頃の人は、おのれが利口をのみ專らとして、神は人をあはれみ給へば、たとひ四足のものなりとも、くすりに用ゐるに何の憚

もあらん。しからば、獣食にする分はいむまじ。其の上唐には、牛鹿などをもつて神をまつることもめづらしからずなどいひて、おのれが食するのみにあらず、人にもすゝめ侍る事、大きなるあやまりなり。儒者の法は何ともあれ、それも異国の風俗をそむけとは、孔子孟子の教へにもあるまじ。唐の風の聞きどころなきを行はん人は、からへわたり給ふべし。一日も此の地にゐ給ふまじ。御無用なりとかたり侍りしかば、かたへなる人のいはく、昔もさる古徳の、わづらひ日々におもりて、今はのかぎりと見えしとき、名醫來りていはく、此の病にさらにほどこすべきくすりもなし、ただ魚類をきこしめしたらんには、もしもや癒ゆる事もありなん、されども御出家の事なれば、いかゞと申し侍りしとき、古徳の曰く、我らにおかしをいひかけん大願あり、魚は喰ふとも惜しきにはあらねども、此の世を願ひ侍らば、もし此の生に果さずれば、ふたゝび畜類に沈むべければ、ただ釈尊の誡いましめの、四足を犯しとせよとし、一日の命をもとかなふべからずとて、彼の醫者の與へし魚を退けり。忽ち末期に及び、後世に顧み侍りけり、あやまりになるべきや否や、答へて曰く、あやまりになるまじ。り且つ、醫師をとどめんと問うて曰く、然らば今の世には、此の命はつくべきもの、其の善惡のにこそ、惑ひしこの身になりて、後世をも願ひ神道をも問ひとで、此の事をさば疑ひになるまじや。答へて曰く、理りになるべし、是れ智者の悪は、悪ともに善、愚者の善は、善ともに悪といへる

ものなり。さればむかしの古徳は、其の病なりて後、一大事因縁の修行より外をなさゞれば、其の覚力皆佛果のたねとなりしなり。今の凡人の藥喰ひといへるは、たとへば、病ひなれば、朝には名利につかはれ、夕にはみだらなる行状のよしなき物思ひに、悪業を作るより外なければ、此の藥力の害の罪となるなり。例へて曰く、しかるに藥種に智者の用ゐるも、又のむ人もあやまりなきゆへ、言へて曰く、とかくならじ、先づ藥種に用ゐる分は、大かた其の病人にそれとしらせず、又しりて苦しといへども、わづかの事なれば、其の藥種故に、多くの生きものをころさず。それをさへに、千金方をえらみし人も、おほくの生きものゝ藥種に用ゐし故に、仙人の果を得がたきよし侍りき。されども藥種に用ゐる分は、大かた口に味ひておもしろき事あるなくて、爰の養生なるべければ、神も佛もとがめはあるまじ。彼の藥喰とて、あつものにしてたべたる人は、口に適ふを正意として、藥にするもたゞまことにだしにする故に、神慮にたがふ事うたがひなし。其のいはれは、よの養生はつひにもなして、藥喰の方にのみ心をひかるゝ人は、大かたに其の藥力をもつて、或は淫亂の樂事とするの心がけて、善を修せんためにする人は稀なり。ゆだんに辯口をもつて正理をみだるべからず。

二十二　すべてこのごろ、佛の御つかひとて、大寺にすわり知行をとり、又は人を教化して、布施物をうくる出家も、或は女をかくしおき、又は魚鳥をほしいまゝに食ふといへる事を、内々耳には聞

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]、あれも其のさとりだてする出家のいへるやうに[illegible]申すなり。[illegible]

くみゆるほどなる滑稽の思なるには、たれも及びがたからん。

二十三、女犯肉食をいむを、出家の至極と思ひて、學文をつとめねば、本より智もなく徳もなき法師の、今世の僧俗も無下に云ひくたし、剰へ佛道をさへ、おのれが心にまかせて、旦那をたぶらかし、いかなる罪をつくりても、懺悔の文をとなふれば滅し、ふかき煩惱も、此の妙法蓮華經にては菩提となり、又いかなる惡業をなしても、一念彌陀佛即滅無量罪ととなふると、忽ち阿彌陀如來の來迎あそばし、其の念佛の行者と心をあはせ、すくひとらせ給ふなど、何の所見もなく謂ひ聞かすれば、能く佛道をしらざるには似たれども、却つて衆生に惡をすゝむるに同じ。女犯肉食をせぬとて、貴き出家とやは云ふべき。學文ありとて、徳の至れるとやは云ふべき。只欲心のなきこそ、貴き知者とも云ふべけれ。大藏經五百四十函も、欲心をはらひ、物に執着のこらぬやうにぞ、しめし給ふなるべけれ。されば莊周は是れを枯木死灰と云ひ、法華經に佛此の夜滅度し給ふ事は、薪盡きて火滅する如しと說き給ふ。執着の露ちりほども殘らぬを示し給ふとかや。欲と云ふ字の心甚だ廣し、欲と云ふ文字は、ねがひとも又ものおもふこととありともよませたり。さりとて喜怒哀樂愛惡欲の七情は、聖賢の上にもあるなれば、いかで佛も是れを制し給はん。されども右七つのもの、其の節分よりすこしも過ぐるを以て欲といひて、欲の字下に心をそへ、慾とかきし字なり。たとへば衣服の上をもつてこれをいふべきに、衣服の用は二、一には嵐をふせがんため、又一にはあらしをふせぐと云ふのみにても

威儀立たざれば、僧は袈裟衣、俗家は束帯、俗には上下あらねば足りなん。其の二つを調へし上に、或は衣紋をつくろひ、好色の中だちとせんと思はんこそ、衣服のうへの慾なり。其の外居所調度にも、此の心なるべしと語りしかば、かたへなる人問うて曰く、好色の方へ、心ひかるゝを欲といはゞ、既に女犯肉食せぬ僧には、欲あるまじや。答へて曰く、我こそ女犯肉食をせぬなれと思ふ心、即ち欲心なり。これ我が身に愛の節分に過ぎたるなり。出家となりて此の二つをつゝしむは、常の事にて、さして殊勝にもなき事なり。然らばいかなるをか無欲といはん。答へて曰く、法師のうへに、是れをいはゞ、多くの衆生を濟度しても、我こそ衆生を濟度したりとおもはぬこそ、無欲とは云ふべけれ。是れ即ち莊子の虚舟不忤、動而不留、圓明無礙、我と、のたまひし所なり。曰く、我を忘れて無心になる事を無欲といふ。曰く、是れなるやと。曰く、いかなるか無心といふ。曰く、假へば大海を舟にてわたらんときに、沖よりも又舟一艘流れ來て、我が乗りたる舟にあたるべきに、其の舟に人ののっていたらんときは、其の舟人をとがめ、たがひに腹をもたてつべし。又其の舟に人なきときは、彼の舟其の儘に打當たる舟の舷に、せうしく當たりしも、其の舟にうらみは有るまじ。舟の損ずる所は同じ事なれども、彼の舟は來る舟に、人のあるとなきとにより、腹のたつと立たぬと有るがごとく、萬端ことにふれてあしき心はある故に、人と事を争ふ。此のつなかれぬ舟の心なき心をもって人にとりあはゞ、少

少人の耳にあたる事を謂ひたりとも、人を[illegible]此の類ひ[illegible]、人を欺偽し[illegible]
にいたらんにおいてをや、[illegible]といふ事のあるべき

他我身のうへ第一終

他我身のうへ 第二

一 ある職人の子、博奕をこのみて、あけくれ打ちしに、其の從者つよく諫め申し侍りしかば、「我は唯見物をするばかりなり、かゝるいたづらなるわざは、夢にもなさず、心をすへその方へうつさずれば、見物ばかりは、くるしうもあるまじ」と申されしかば、又重ねていはく、「見物ばかりに候はかる所なり。是れ博奕に、いたうしと敗をうかゞふるゝと云ふものなり」といさめしは、誠に此の世諺に、米こし車しる所なれども、すこぶる要實の道にもかなふべし。瓜田不納履、李下不正冠といへる古語あり。此の心は、いかにあやしき正直にて、瓜をとる心なきといへども、瓜ばたけへそことこたちなほりた後、新履をはきしく瓜をとると見るべし。又李下不正冠といふ事は、是れもくだもの〻なる木の下にて、たとひ心なきとても、なりもの〻木の下にては、かうぶり直さぬ古法なり。もし其のくだ物を取るかと、人にうたがはれまじとにふしめしなり。さはいへど又、あまり賢者ぶりなるは、かへりて不調法にもなる事なり。いかなる愚か賢人たちとといへ、たとへば一人の女房を、前輩二人して不調へ御來しける時に、其の女房のおやのかたより聞あわて、彼に其の一人をのりしことにて「我

二人は禅上の徳に感じて、両人かへり申さん、其方一人をば御所望として、本國へかへり給へ」といはんとき、今までの京都の難儀を、別の事としてすゑ時、ふと心にはゞかりの事の有りしかども、其方を二人にてに詫候とあらたに、御上より思ふべしと思ひて侍りしが、今まで我一人しては、御所の見る目もいかゞなれば、わたくしなきと頭をふりて、其の都よりともに来たる男どもと繋ぎず、本朝の不断一りと批判ふるのやうにいふ人こそ、あまり賢人ぶりてあしきとはいふべけれ。是れも祇園不入道ぞ、おもひつはりがはねども、中庸をしらぬ事は同じ。唯中庸のえ得がたき事なり。

二　さして學文者とも見えぬ人を、物の数奇が拔ひかに立ちまじりては、とかく物は中庸がよろしきといひあへるは、いかなる合點にや、たよりなく思ふに、其の人の心には、中庸と云へるは、不偏之謂中、當不及なるべく、又執二其兩端一用二其中於民一ともある本文の心を見あやまりて、とかく物の眞中を、中と心得しと見えたり。たとへば四人道づれとなりて、道すがらの物がたりは、これよりむかひの山までの道程、一人は七里と云ひ、又一人は八里、又一人は九里あるべしと、たがひに我が目がねの程をふきとあらそひて、其の事につき、かけあくをせんときに、「其方ら七里のかたへなりとも、又は八里九里のかたへなりとも、心にまかせてくみし給へ」といはんときに、何のわきまへもなく、三人各別々に七里八里九里と、あらそふなれば、われは其の中をとらんとて、八里と

いふにくきことをいふ事ごとくなるを、その中をとるといふもいなりと思ふは、誤なるべし。聖人の教といへるは、例へば百人集まりて、物の理をあらそはん時に、九十九人は同じ心にて、すでのこり一人は、九十九人に違へる事に道ひたりとも、能く分別をして、其の理の當然を能く味ひ、たとひば一人のかたにありとも、よき道理を持ちたらん方へつく事を、其の中をとると宣へり。又調度の上を以てこれをいはゞ、書物のとおきのかたわきにある、是れ即ち書物のとおきの中なり、とかく眞中と心得るは、ひとつ事なり。さて庸といへるは、庸は天下の定理なりと、朱文公の註せられしなり。庸といふ文字は、つねとよませたり、定理といへるは、世話にいふ定規の事なり。たとへば番匠のうへにていはゞ、木は曲りゆがみて、直はかねを以てはつる事、此の定規が正道となるなり。されば定規は番匠の四つ目なり。さて人の心の定規とは、たゞなすべきなれば、誠の一つなり。此の誠といふ字、いのちありて生れて、いはつくしかたし。是れ即ち中庸の一大事なり。中庸を能く會得せずんば、誠の字合點ゆくまじ。智仁勇の三つのものは、至りてなしがたけれども、能くするものこれあらん。中庸にいたりては、古人も仰せられしなれば、今我等が口にはにかくべき事にもあらねども、さやかに、中庸を讀ほど文字ふみせしかば、今に其の一兩句を其のかたばかり覺えたり。其の本文によつて、一篇が一つほど申すべし。まづ朱子の序に、中庸何爲而作也、子思子憂道學

之は其任一而作ト云々。さて中庸のおこりは、いにしへの聖人、その天より受たまへる心に、人欲のわたくしを微塵もまじへずして、至極の道理をたてたまひし道統の傳なり。是れ即ち聖論者の血脈なり。昔の堯、舜に天下を讓り給ひしときに、允執厥中と教へられしより、又舜の禹王にて天下を讓られし時、人心惟危道心惟微、惟精惟一允執其中と教へられしなり。右に堯の仰せられし、允執厥中といへる一言にて、天下萬物の至極の道理、ことへくそなはりし上に、又舜の人心惟危道心惟微、惟精惟一にせよとそへ給ひし三言にて、堯の仰せられし心、いよく明らかにして、萬々世の手本となりしなり。たやすく申すべき事にもあらねども、次にいさゝかあたれ付るべし。朱文公これを論ぜられしは、天、人に與ふるに仁義禮智の性を以てせずといふ事なければ、上聖人より下愚人にいたるまでも、靈虚知覺(靈虚は心の靈知覺は心の明なり即ち人々の佛心なり)は同じ事なるべければ、舜の仰せらるゝ樣に、人心惟危道心惟微なりと、心の上に二色はあるまじきなれども、或は生於形氣之私、或は原於性命之正とのたがひあれば、其の知覺同じからざる所なり。此の形氣之私といへるは、物に譬してこれをいはば、耳目鼻口四肢の如し。あながち私あるに極まりたるものにてはなけれども、人の心と云へるは、猶海を渡る舟のごとし。道の心といへるは舵なり。若し此の人心の舟に、道の心を舵とせざれば、舟のなみにたゞよふごとく、其の人の心の惡におもむくと、いへる説もあり。又性命

の正しきとは、聖人の心なれば、別に其巨細を師として、善をえらみ悪をしりぞくる道をしる、惟精なり。惟一にといへるは、其れをよく身に行ふ事なり。さて又本經の發端に、天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教と云々。天の命ずるとは、我生をうくると、天よりよき道理のそなはるものをあたへ給ふを、これを性といふ。性といふは、即ち此の道理のかたまりたるなり。率性之謂道といへるは、そのよく道理にまかせ、萬端行ふときは即ち道なり。修道之謂教と云へるは、其の能く道を凡百姓までにしらせて、おこなはしむるを教へといふなり。修むるとは、佛道にいへる修行の修の字なり。其の道をよく修行するを、をさむるといふなり。さて又道也者不可須臾離也、可離非道也、是故君子戒愼乎其所不睹、恐懼乎其所不聞云々。道は暫くも離るべからず、はなるべきは道にあらずといへるは、道は則ち階道のごとしといへる說もあり、これと一時もはなれては、叶ふまじき心にや。又是れを鳥の上にいはゞ、飛ぶは鳥の道なり、此の飛ぶ事をしばらくもせずは、鳥とはいはれまじきにや。この故に君子といひて、道を能くおこなふ人は、其の人のみざる所なりとも心にふかく戒め、つゝしみ、人の聞かざる所をも、よくおぢおそれて、ひとり我が部屋のうちにありとても、人のみてはづかしき事はせぬやうに、常にあそばすなり。司馬溫公といひし人は、人にかたられぬほどの事をば何にてもせずして、つねに御たしなみありしとなり。これ獨りを

つゝしむといふものなるべし。又王密と云ひし者、楊震といひし人に金を送りしに、楊震王密にいひしは、「我は其方の心を能くしりしに、其方はなぜに我が心をしらぬものやらん」と、其金を返しにうけよと仰せられし」と云ひければ、王密が曰く、「今宵は日くれてたれも外にしる人もなし、ひそかに贈うけ候へ」としひ侍りしかば、楊震が曰く、「天知地知吾知子知」といひしかば、王密ことばなくし、顔に紅葉をちらして出でけるとかや。是れを世話にも、天しる地しる我しる人しると申すとかや。是れも人の見聞かざる所をつゝしめるたとへなり。中庸の書の事は、一生語るともつきまじければ、まづこれまでにてさしおき申すめり。

三　君にとがなやうらみはせまじ、やぶれ車でわがわるいといへるは、かのそめにうたひし小歌の唱歌なれども、これ自然に「あまのかるもにすむ蟲のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ」といへる本歌の心にも通ふべし。またものゝほりていはば、射有似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身と、孔子のたまひしにも通ふべし。此の心は、正鵠といへるは、鵠といへる鳥を布に絵にかきて、これを的にして弓を射る事なり。君子に似たる事ありと云へるは、たとへば弓を射る時ばかりは、まとを射はづしたるときも、いかやうなるひが／＼しきものも、まとのたてやうが悪しきなどはおもはずして、我が弓の手前があしきにとか、又はねらひやうの足らぬにかと、我が身をうらみて身にかへさ

うしもとむるとかや。是れもとかく人をうらむるな、萬事我あしき故に、人は我にあしきと思へとのしめしなるにや。古歌にも、「われよきに人のあしきのあらばこそ人のあしきは我あしきなり」といへるも、さしもの賢でしゝ。世の中にいのちほど、いたりて大切なるものはあらじ。されども、孔子も朝に道を聞人滅なさるれば、それかたなき事なり。又ほどほどつらき物はなきに、其の聖といへるは、人かた人の貧ふるはまれなり、みな我となす恥なるべし。

○我かしこげに人の事のみはかりて、我身へふでにさへおきつらぬれども、其の身はなさまらぬと人にいはるゝ事。

○人に用ゐらるゝ事なき身にて、いはれざる公儀にてなすゝる事。

○身のくらゐみじかくて、上々に立ちまじりこびへつらふ事。

○我しらぬ藝能の座敷へ出かけて、人に其のことを所望せられて、とかくせぬたゝみのへりむしる事。

○及ばざる事をのみのぞみかけて、その望み終にとげぬのみならず、其の人にあひて重ねて言葉なき事。

○諸道を心得たるかほして、其の跡先首尾せずして、人にうしろゆびさゝるゝ事。

○身に過ぎたる武勇だてのみ常にいひて、喧嘩口論のとき、人よりさきにしりぞき侍る事。

○雪のかしらをいたゞき、若年の人に立まじはり、うとまるゝ事。

○常に無欲なる體にて、物のそぶりにて欲ふかき事。

○まけず心ぶり、いふまじき不足を人にいひ聞かせ、其の人に道理にせめられて、かへりて迷惑する事。

○我ふしきかたちをもちて、かたちよき人に立まじはる事。

○身のほど過ぎたる約束をして、後日に其の言葉ちがふ事。

○一文不通にて、文字こそしらずとも、ものの道理はたれにかは恥ぢんなどいふ人あれども、不レ深斯道有不レ爲者と古人いひおき侍れば、文字なき人のいひし事は、利口げに聞えても、いかなありと人におもはれ、又は言はれする事。

○文字の心をもよくしらずして、片言まじりに物をこはし、念のいりたる振舞といひしあるべきを、人の丁寧といふを、何やらん面白さうなる言葉とおもひ、こいせんなる御ふるまひなどいふかた言数をしらぬ事。

○かながきの書をもよめぬ人の、佛道は本より不立文字なれば、一文字ひかすとも、工夫にてさとるべ

きなどいひちらし、人に心おとりせらるゝ事。

○何にても其の為す藝の大事こそ我しりたれ、秘傳こそ傳はりたれといへども、其の藝の常の事さへ人なみにならぬ事。

○よくもなき我が子を、さる／＼のよき人もほめ給ひしなど、まことしからぬ事を人に云ひ聞かする事。

○悪しかなる身を持ちながら、其の身にぞはしきに付けて、さかしき人の時にあはぬに、よ[illegible]はことに云ひ聞かする事。

○金銀を人にかり、かへすべき覺えもなき事。

○我こそしにせはしければ、誰にかしてもよけれ、人のものをかりおきなどいふ人と、又時宜にてさうもくなわざとして、人にかかりし事を云ひ出さるゝ事。

○朋友は財を通ずるとて、時々のものを請ふことなれども、少しも悪になるといふ事をしらずして、人に物をかりし人などを、むざとわらふ事。

○秘密すまじき事を、大事がましく云ひなす事。

○下戸上戸によりて、酒の挨拶を上手ぶりて、我が心を隔つるばかりにて、我がいひつる事などいへば、其

り外あらたひたぎ致して、面目うしなふ事。

此の外にまだをかしき事もありつれど、皆忘れつ。

四　やけどには、栗の木の皮を黒焼にして、ごまの油にてつけたるよし。灸のあとのいたむには、艾をせんじ呑みたるよし。又井のつるべの水あかもよし。

○ねずみに喰はれたるには、桐の木を火にくべ、黒焼として、それを油にて付けたるよし。

○手あしにとげをたてゝ、腫れもたきにはれ、又あからみたるには、あかにしがらを焼きて、酢にて付けたるよし。にしがらは物をわらす物なり。

○打ちきず、又足手こまらうに挫かしたるや、高き所よりおちたるには、楊梅皮をすりめにてあはし、こんやののりにてねりて付けたるよし。

○高き所より落ちたるには、山椒の目をすりて付けたるもよし。又黒焼をのみたるもよし。

○りんきに臍切れたるには、龍骨をけづりのみたるよし。産子はつねの事なり。

○山椒にむせたるには、畳をねぶりたるよし。其の外何にても胸のわるきやうにして、からゑづきを出すれば、のどに唾たまりて其のまゝよし。

○すこしきりたる疵には、ふるきくさ膿をもみて付けたるよし。

右九十一は儀論もなきといふ事なり。

九　あるひと、世の中はなにをか樂しみとせむ事ぞや。さ、先づ帝王の御位は、申すも云ふべきも恐れあり。又其外末の傍輩も、なほ云ふもあまた樂しけれ、四人の樂しきなどいふ、一つの樂しみにとさふをれけしに、又かたへなる人、「それも尤もなれども、我はたゞ貧富にはよらず、唯身の達者なるを樂しみと思ふなり。千萬の財寶ありても、其の身病者にては甚あらばこそ」とかたりしに、又かたへなる人、「樂しみは貧賤の上にこそ有るなれ。たから多ければ、身をまもるにまぎしくしてこそ古人もいはれしつれ。隱遁する人こそ、うらやましう樂しみなれ」とかたれりしに、又かたへなる人、「我が思ふさまよる樂しぶは、樂しい仁樂、宜に樂しぶなり。富める樂しみと思ひて願ふとも、本より天命にあらざれば、彼に得る事あたはず。我が身の達者とても、二と此も生れ付いて病者なる者、いかで達者になるべき。又隱遁をねがふとも、上下ともに其性を得たりければ、ふつかに居る所にはは入るべからずことを願ひ出れば、めぐる三ケのには、一三て其方は、樂を樂しぶと思ひ給ふぞ」と問ひければ、我がりし、「思ふは必ず樂しみなり。古人も、心はなほ一貧もよの賢になりうちふといふんと評せられし」と語りつれば、「各其理に至りて、まさに心の樂しみと申せるこそ、心に二色ありてやうこそには、其の人なにと思ひければ、「まづ尊心樂樂といふはたくしてくらめる物なり」とて、樂しみこそ

わかれなば、ながうてかなふ楽しみなこそ、よきねがひとも申すべし。ます心にかなふ楽しみと云ふは、まづ四季を以て是れをいはば、物の心もなく、たる事しらぬ人は、先づ元日の朝よりも、家中ともに「まづ春の、めでたき正月のことといひ渡れば、彼の心のあしき人は「我は一つも年のよるがうたてき春」と云ひさます。扨春もやう／＼三月の頃にもなりぬれば、春のけしきは悪しきものにはなし、気がもう／＼としてかしらがうつといひ、夏は、ひるは蠅にせゝられ、よるは蚤蚊にくはるゝとて身をもやす。又秋風をよふけば、別して己が一人してかゝふるやうに思ひても、かなはぬものの故、いねにあたりて、もし世の中あしからんかとて肝をけし、冬は彼のこたつのはたにかゞみゐて、夫婦いさかひに身をもやす。花時鳥月雪も、花よりだんごといひちらし、時鳥は昔より、命に替へても聞きたきと、人は仰せられしかど、此の鳥ほど役に立たぬものはなし。先づ料理にもつかはれず、たまたま鳴きぬる聲だにも、ひるねのゆめを打ち破る、聲を聞くさへうらめしや。又秋の月とて、人々のもてはやさせられしも、別して四季にかはる事なし。すべて月ほど益のなきものはあらじ。手ぬぐひひとつほすとても、ひるこそ物はよくひれ、夜はかへりて、ほしたるものも濕りあふ。雪は、まだ降らぬさきより頭痛のおこるに、あまつさへ二日も三日も道も乾かず、又候や春まで、長だうとふるこそにくけれと、かかる四季の上々の景物さへ云ひくたすれば、この外のものは、えもいはぬことなる

べし。さて心に樂しみをしりたる人の、四季をもてあそびたのしみとする事、あら〳〵かたり申すべし。よひの年は、雪もはげしくふる里も、けさのどけさと春たちて、云ふばかりにやみよし野の、山もかすむとおかしげにし、其の趣きの道までも、思ひやりつゝそれ〴〵の、うち祝ひこそめでたけれ。門松がけのわか水は、命なが柄のひしやくにて、しやんとくみあげたまりやせぬ、おのれがまにもこし入れて、大ぶくたつるなりかゝり、もてる茶杓の一ふしの、鼻唄うたふ其のこゑも、千代萬代とよばふなる、みかさの山にたつ雲の、天津そらまでおしはかる、今日の儀式の小朝拜、院の拜禮冰のためし、星かと云ふるてやり手より、年のよはひは若えびす、又毘沙門の功德經、日にも白の連歌師も、誹諧師とて三つもりを、句作る風はしをりとまり、かなやわらべの玉毬打、ぶり〳〵ふりのらほ顔に、けさう文をもつりになれば、返事をまつと懐の内、たうとにたつる大竹の、ほつとと家のふくらかし、ひな引くわこは太郎月、二郎もよれるはうびきは、せちぶるまひに軒はじめ、はま弓もこゝろもいゝふの、人々いはふ具足餅、それの名をとる柳がきの、ほこをよこたへ詩を賦せし、むかしの事を思ひ出て、あまねくひとに梅原も、一えだ折りてさしすせそ、太刀のうちとおもはれなれば、軍梅花とも申すべし。陶淵明の愛せし、かの柳これ柳なれ、柳絮といへる名にめでて、見る人の目も絲となる、春のしらべの琴のねに、鶯さへもその聲に、高砂なれや春はやし。つてん天下もめでて太鼓、ちとの

文をつくしぬる、雪の朝の初子の日に、田も野もみな春の野に、つゝきの若菜つむ東風よ、ふき
の葉をもくみたる、人の心をはかるあまりの、梅のかをりかゞやく花を、あやなくもたゞ寄て、聞て、
室にもつて、もてなしておせ、かの時もあるなどの、さそはずしも孔子、莊子にかきし題詠も、
つれたる曲折に戯々と、さつきの雨のふる夜、時鳥にしろきものは、おいし聞けば哀れ、色も
こぼれる露もきえた、こゑもさこそ野辺の、とのかはず文つくりし、ふるきなりとも人はいへ、此
一曲のくせまひも、胡蝶にたはむれ、思ふ人にさそはれて、さぞこゝろもやすからし、
若むらさきの早蕨を、手ごとにつみても田や、苗代水にふる雨は、躑躅の花の、ちゝと、いふ
よりめぐむ、むらご標、文字もかくる法帖、こゝのへの八重ざくら、けふ九重に匂ひても、馬にく
ふ屠ぐらはまだ、あらしに散りし花のさかみ、うつせみのよも詣りのへんし、楊家にはなるゝ女御、か
はにもたぐふ海棠花、雨にはぬるゝ雫あれて、文にも書かぬ人の、このみならはで十日に猶、川は
邊にいでて、この水に、うれへを忘れながいきる、せん術なれやもゝの酒、とりもなほさず又いもがもと、
つきても謂ふさしもぐさ、しめぢが原にすみぬれば、むねの煙もはるゝ日の、長きといへど暮れ行き
て、今日の名におふ更衣、雲のけしきも青すだれ、かけてもたのむ神まつり、思ひ出づればかの宿と
け、生まれ給ひし其の時に、天のうへ、又天がした、尊きものは我のみと、いはれしもげに深見草、卯

月ばかりの花嵐、花は雪にも紛ひぬと、いふやよしだの何もしり、かれん〳〵ならし宿山門に、よもや
本尊かけたよう、卓袴のふすまの白と、ござす、卯花くだし梅の雨、物文木履あいぞなし、山にの住ればは
とをし初り、又ここの首にをるものの、客にたて花の納言関、しかも〳〵と隠りぬる、閨とうばふめ
はなまめも、明すたをしたじ手前とる、持蔵団の筒汁粒、あたご参りにひかれぬる、神のしず玉をり
続る浮、いぶの蓋箱の内置所、ふやあやしいすたへましに、ものうしまでもきぼ山、右近の馬場の
ひらの田、下さだれ見ずもあらず、あらぞ心人を懸たがり、うつし心とうき草の、花薄もゆれ
しこはめやん、まさ寺語りやぶるなれ、鋳にみほしを兵干とも、引くや祇園のよいやたい、またこそ
なしる風薬の、余りむすぶ本鼓や、しれざいぞくるはね馬に、潮わけてふるやゆえだれ、雲の峯よ
り高る月を、紫にてうりますて、ひの盟家でもりく〳〵と、たつや八十宮の川の波、行方も皆さお
やすらむ、よそうは熊のみをれにて、みあやうき命又かはしこ今朝みぞ吹に一ぞうる、されの
あらん、細るあつさもほしれぬれば、紹上織どおゐぞこしし、紅葉の色しを霧の、わたすも待てるもぞ
こし、願ひ浮瀬の恨めくもの、思ふ心の事がら、ふる雨になるとひぞこん、願ひうさするふみ月を、か
さいへたりも身は、まおりする、こんは、まただみはやしやあものふと、うき世を厭きは
ほのを、るみを結ぶ舞踊、うむにたのみのそのまだびて変あなでも、世をたつる

伊勢小町、歌のさまさへ嫗にて、たゞよわ／＼とふることぞ、世々に其の名をあげ蟷螂、大津に近き逢坂の、關ずまひこそみものなれ。霧はれわたる秋の野の、くさの袂や花すゝき、ほにいでまねく女郎花、俗によばひて女郎とし、出家をあつるさが野にや、ほころびぬらしふぢばかま、つゞりさせてふきり／＼す、鈴蟲松蟲くつわむし、こまつなぎにぞとまるらし。もにすむ蟲の音になきて、世をも怨みじ葛のはの、色づく程の蔦もみぢ、かたるといつか月ぐさの、庵をむすび秋の田を、守る僧都のうきつらさ、ひたとなるこを引く聲に、驚かさるゝ鹿のねや、鴫のはねがきもゝはがき、君が來ぬ夜は我ぞかず、かきほにとまるかまきりの、己が力を頼みにて、龍車に向ふ心ねの、我慢をすてゝ世をいとふ、鶉衣ははだされなと、あたゝめ酒はあらこもの、在郷祭はをりにふれ、今日重陽のきくあはせ、田みのゝ里やひろ澤の、月の桂の花咲きて、ひかりを散らすながき夜の、露や時雨に袖ぬるゝ、思ひ草また忍ぶぐさ、まさきのかづらくる冬の、月夜に霜はふるふすま、木のは衣もとりかさね、冬籠りする爐のすきの、かけものにする達磨忌や、東福寺には開山忌、夷講する商人の、算用酒のそろばんに、つもる白雪の下、水仙花もや開くらん、神樂もとめて庭火まで、たくをかうぶるくにたみに、豐の明りの豐年の、のざきの使はやたちて、殊勝なりける佛名に、つみも殘らず流れ行く、こよみの末の年忘れ、孫や子供もよび集め、春のまうけにつく餅の、千石萬石萬歳と、いはへる國ぞ久し

かるらん。

他我身のうへ第二卷終

他我身のうへ第三

一たのしき庄屋どの、一番子をまうけられ、悦びこれにかぎりなかりけるに、いつしか年月も過ぎ、はや十六七にもなりにける。それだに此の太郎八、うまれつき愚にてありしかば、庄屋どの是れをなげき、或人に「我一人の子をもちたりといへども、此の子うまれつき愚にて、我がうしろの跡をしらざれば、いかにもして一人の子をあひをもさせ、公儀をもはなさはせたく思へども、何とも致しかたなき。」と談合すれば、其の談合人のいはく、「其はやすき事なれ、去りながら少し銀子の入る事なり。」と申されければ、庄屋どの宣はく、「是れは其方ども覚えぬ事仰せらるゝものかな、我が身代にては、銀子など大分入る申すとてもくるしからず、まして少しの事ならば、唯今なりとも」といはれければ、「去りながら大事の太郎八なれば、精の毒を申すか、どのつたなき事ならばなるまじ、何事にて候や覚束なき。」とぞいはれける。其の時談合人「いや左様には候はず、いかにも気ののびて、心おも白き事にて候。」と申されければ、又庄屋のたまはく、「とかく覚束なし、其の事をありのまゝに語り給へ。」と責められければ、談合人、「傾城ぐるひとて、おとなの心のつく事にて候。」と語られければ、「尤も然

ゐてしごとて、よう小判百兩談合人にわたし、日夜に傾城ぐるひやめ、しなんはせけるほどに、早とりなりもよくなりて、うすき小袖の一つまへ、しめぬる帶も凜々しくて、小唄さみせん立ちすがた、云ふもことも由ありて、花時鳥月雪の、うつりかはれる折々の、あつききむきの指合も、人にあうての取りあはせ、ふるたいこんともいひつべし。此の時莊屋よろこびて、あのせんじやうそれは、つねに耆婆なる人なりと思へば、かやうの事までする、其の談合の甲斐ありとて、其の談合人に小判十兩、これはあたりがましけれども、それがしが存ずる仔細あればとて、贈りけることをたゞならぬ。さて其の後莊屋の一番子の太郎八、談合人にもかくれつゝ、ふかきあみがさ引きかぶり、はながみ折りて顔にあて、日々に揚屋とやらへ通ふほどに、あげくのはてには、莊屋が錢箱そろ／＼と銀も動の節にやみければ、莊屋もこれを聞き付けて、殊の外にきもをつぶし、いろ／＼意見をしたれども、太郎八少しも聞きいれず、ひた物かよひに通ひつゝ、これにのみ身をやつせば、あるもの來て、左様にはいせいぐるひにかゝるものも、内に又おもしろき事あれば、其のかたうすくなるなり。」といはれれば、「是れこそ一だんの分別にとて、追付けよきよめを聞き立て、女房をよびとらせつれども、この太郎八一きい其のにしたなければ、あひやけの中も悪くなりて、遂に其の女房も、三下り半で暇をあけ、嫁を此の事つのりければ、一門集まりて、いろ／＼嚇いつ賺いつ、意見をすれば、太郎八一てつゐ出し、

菩提心をおこしける。其の時同苗權太夫きにたけき、「我年よりて一人の子を道心者となしては、生きてのせんもなし。所詮此の道心をさまし、もとの太郎八になるならば、一箇月に何度までに、願ひてるひはめるすべし。」とて、たびたび、家人をつかひ、又もとの太郎八となしにけり。扨また太郎八、はじめのほどに親と約束のことく、一箇月に何度といへるかぎりを、よくまもりけるが、もとより無法には、火のつきまきならひなれば、太鼓持とやらんにたきつけられ、月に何度といふきりは無かりけれ。此のときはや、葺屋のなにがしは恋しくなりて、葺屋後家はかりになりにけり。後家此の葺屋にわかれけるは、うき世のならひなれば、日數ますほど、わすれぐさも生じけるが、たゞ太郎八がわる狂ひこそ、うたてわざなれとて、いろいろに意見して、かやうの事は友達ならでは、といひ合はせじとて、太郎八がねんごろなる友達五六人に、いけんを頼みける。さて太郎八をよびよせて、「太郎八どのもよく聞き給へ、其方がねがりたる人なれば、かくも申さねども、萬事かてんのゆきたる人なればば申すなり。おやぢも今にはてられて、おふくろ一人になり給ふ身に、何とてかかる儀に心を盡し、又金銀をつひやし給ふぞ、ひらにとまり給へ。」と申されける。其の時太郎八が曰く、「各の仰せらるるも、それがしをかはゆきと思召しての事なれば、我が申し分も聞き給へ。いかにいかほど其方達の仰せられても、かのものが心中は、あるときはなま爪をはなし、又あるときはきしやうもんを、玉章

にそへて遣しけるを、もしもいつはる事もやとぞんじ、それがし四五日もまゐらねば、にやわらふけしきなれば、これをみすて侍ることは、命果つるとてもなり申すまじ。せめ同人の御意にそむかば、前世の約束とおもはれ、此の家をからかさ一本にて罷り出で、諸國を修行せん」と云ひければ、いはれし者ども興をさまし、座をやぶらんとせしときに、それがし下座に侍りしが「みな人々は御腹立と見え給ふが、我は太郎八どのの詫び分も、あまりあしきとはぞんじ候はず。人にはそれぞれのすきたる道あり、それがしが若年のときは、殊の外のすまひすきにて、一日に百人づつ、とつて投げ候ひき。それにていよいよ貧になり、此のやぶれ紙子の體なり」といひければ、一座の衆、「右のすまひの日に、百人づつ、なげたると、ほめ給ふもうらやましく、又今は貧になりたると仰せらるるから、すまひとりたると下物になりたるとは、一圓あとさき前後し候はず」と申されける。其の時それがし申しけるは、「御不審はもつともなり。さりながら、其のすまふ日にかぎりては、一日四度候」と申しければ、「日傳は」ととへば、「其の事に候。我等が親もすまうとくにありしあとにて、おのおの御存知のごとく、我一人となりたれば、一日に鳥目を一貫文づつもち出でて、百人にあたへ、我とすまひをとりたならば、必ずまけよと、やくそくしてとりたる間、大八町の男ども、片手にてとりても、六十才の者をも、ゆびひとつにて突き倒しける。」と、あざやかにかたりもあへば、其の時あの太郎八いふやうは、「誠

手前のごとく人にてにそれぞて、すまひに勝ちたるぶんにては、面白くもをかしくもなき事とて、利根性に申せしかば、其の時それがしつたとひちんをかきてなりとも、かちたることこそうれしけれ」といひければ、太郎八、「我も其方にすまひにまけ、日々にぜにをもらひたき事」といひしとき、それがしいふやう、「此方は我が人にちんをかき、すまひにかちたるをも笑ひ給ふが、其方の多くの金銀をとられせ、けいせいの心中よきとて、おやの気にそむくは、我すまひにちんをかきしと、おがひあはぜことにはあるまじ」とおどけしに、太郎八涙にくれ、「此のほどそれがしが行ひ、さぞをかしく思すらん。もはやよくがてん参りたり」とて、ひごろ傾城のおこせし文玉章をもやきすてて、今までのひが事せしをくやみ、則に孝をつくして、父の跡をとぶらひ、樹はんじやうとぞなりけるとかや。人に意見をするとも、あたままたしにせんやうは、道理をつめていたしやうあるべき事か。

一　わかき者のふるまひ、其の外齋非時にゆき、我上客にてもなきに、一つ〳〵何に出来たり、何はめづらしきなど、膳部をほめたる聞きにくし。つねにさう召され斯う召されと、いふ侍のあいさつなる友の所へ、ふるまひにゆきたる時ばかり、御ふるまひ出来させられました、御亭さまよ、少し御膳をひかへさせられませいなど、ばかいんぎんにいふやうなる事は、大かた、此中来すんがにぎりならひ、鉢叩きほどくあたゝくもののいふ事なり。

三　ある数寄者の曰く、「一物にかゝる富なきものはあらじ、昔よりの賢き人の、九損一徳といへりとも、我は十損無徳と思ふなり。其の雪雨のふるときや、又風吹にもならず、老いてならず、朝ならず、夜ならず、其の外の損はあげていひがたし。嗜にすれば茶の湯は、からうす踏みには劣りたり。又其の徳といへるは、さまぐ\の器とやいへるにや、いとをかし。器の新古もしらぬものも、溝へふみかぶり、堀へはまりて、死したるためしいと稀ならん。もとより、なほ其法にきすめもとでなれば、まな茶をける人こそ、すくもあるまじきことに、ひんく\と歎足をし、ときぐ\骨をたがへなどする。」といふにかの聞ければ、聞ける人の是れを聞きて、「只をこゝに置きながら、こは面白き仰せられやうかな。なも茶といへる、研究に其のおこりあると申し侍れども、これは古義がましく候へば、悪と申すべく候ふすあもしやすき事にてあるならば、前にもきこゆるはいかに、其方のこの茶湯数寄の道こそ、打には在世にあるものなれども、そこ心はすこしも道にかなひ候はず。先づ心にはよきと思ふ道具をほむる、是れ第一なり。又たゞ人がよき道具をもては、うらやましさうなるものなれば、やすく買ひとらんと思ひ、又うのてうらなき友達の中にては、いかにも云ひ廻して、代物がいかに取れて我が直上し、又他をへくさしおけんとのみ心をこらし、みな欲心のはいるなり」といへるをきかば、其の時傍の数寄者のいはく、「茶の徳といへる先づ、祖師にも茶を好みしもあれども、是れも談義がましく候へば

申すとし、いかなる位高き人のなしみにも、此の茶湯にこそ、我等ごときが罷り出づべきといはれしかば、又まり蹴る人、「それはかのすい茶の事か、又我が氣に入らぬ人のわけもなくぶるはいかに。」といはれしに、又かたへなる人、「我等が思ひより侍るは、各御すゝむることは格別なり。何にてもよろしき道にも、一つ心得たらんうへには、鞠をこのむとも、浚ふとも、すきをするとも、又わらふとても、尤もなるべし。いかに公家のなさるゝ、風流な鞠をよく蹴るとも、人のところより來る文の返事に、態一筆令啓上候とかき、またたとひ大名わざのすきも、上手になりたりとも、此方よりやる文に、如何とかきなどする如くにては、面白からず。彼の御公家様は、唐の事をもあきらめ、大和の事をもよくなされての上に遊ばすなり。又大名の御すきも其の通りなり。しかるを今、數寄と鞠とばかりの稽古あるは、是れ孔子の、はじかみをすてずして食ひたまひしとて、はじかみをのみつねに好み、驕奢とせまして、孔子のながれをくむといへると同じ事なり。両方の論は無益といはれしは、誠に道外事のやうなれども、志二於道一、據二於德一、依二於仁一、游二於藝一と孔子の宣ひしにも通ふべし。志者心之所レ之謂と註せられしなり。志とは、我が心東へゆかんと思ふ、即ち東への志なり、道とは人たるものの爲さずして叶はぬ道なり。據二於德一、據るとは執守と註せられて、我がせんと思ふ事に、目を付けてゐるやうなる事なり。德と云ふは、卽行レ道而得二於心一者也と註せられしなり。心

に其の道理を得て、身におこなふ事なり。商ひに徳のあるといへるも、此の徳に少し心をよふなり。
依ニ於仁一依ると云ふに、不仁道の事と同じくせられしたる、依るとは其の仁の道理に我が心同じものにな
りたるときの事なり。又仁は五常の一つなり。五常の事はいつにても心しづかにかたり申すべし。
遊ニ於藝一 遊ぶと云ふは、志ニ於道一據ニ於德一依ニ於仁一と論じられしなれ、道德仁の三ツの物は、人間のなくてかな
はぬ理なり。されども次第あるによつて、志と云ひ、據ると云ひ、依ると云ひて、藝に游の遊ぶと
いへるは、あまりすぐれても、又する藝にてもなんになればなり。俗語にも、物にあとの精をださ
ぬ事を、たゞ藝がてらとも、又あそびわざともいへるなり。さればにや、此の藝どもをこのめて藝
する人なりとても、君子といはれぬにもあらず。又をかしとおもへる人ともいひがたしと、いへるやう
なる藝もあり。されども本文の藝といへるは、禮樂射御書數の六藝の事なり。今の能や歌舞やなどの
ごとくに、わが遊ぶばかりにて、天下國家の用にたゝぬ事にてはなく、世の用にもなり立つ事なり。
藝と申し出ていへる、此の六つなり。しかるを今は、さるがくやつゞみ打ちなどを、藝者といへるは、
いかなる事に候や、此の六つはまた、それはたゞ役者といふべし。

問 又ところみすや、男なりけりと讀へるを、ある人のいはく、女とも見えつゝ、男なりけりといふを
かたにあやまりたるといへり。されどもたゞなりひらは、これ程うつくしき姿なれば、女とみえたる事

なる所、女にも見えず、いかにも男なりけりといふ心なるべし。古歌に、木にもあらず草にもあらぬ竹のよのといへるも、木にもあらず、草にもあらずといひて、竹のよのといふは、重言のやうなれども、これも歌の一體なり。後漢の帝につかへたてまつると名のりて、ましたゝつた一間に白居易に謡ふはあやまりなり。白居易は唐朝のものなれば、後漢の時よりはるかに後の者なり。うたがひはこれにかぎらず。

【五】世話に、貧福賢愚、けんによらざればむね悪がすとあるは、むかしよりいはれたる事なれども、能く理に叶ひし事なり。古語に於我善者我亦善之、於我悪者我亦悪之、我既於人無悪、人能於我有悪哉、上の句の心は、別に理にも及ばず、我既にといふ下の句の心は、我よりも少しも、人に悪しき心をもたねば、人も我にわるき意地はあるまじきとの心なり。彼の今の世の気のきはめたるものは、我が事をそしるかと思ひて、立聞きなどする者に、我が心すゝどくもちたらば、人も我が事はそしるまじとの示しなり。けんによらなければ胸悪がすと云ふにはあらざるなり。

【六】はなしの座興、言葉のしなに、あたごの、八まんのと、人もこのまぬ誓言たつることを、其の人の心いかばかりとおしはかられて、心おとりせらるゝものなれ。其の外商ひのかけしほに、猶おそれある、日天三寶などちかふものあり。買ふ者も、まことしからず思へば、随分と勧請する、日天も

恥かき給ふべし。起請文と云ふ事は、もろこしに盟誓をたてゝ、牛馬の血をすゝり、其の詞を記して土にうづみ、約する處若しそむかば、此の牛のごとく、かの屠らるゝ罪にあたらんと、諸神にちかふ。周禮春秋傳等に委しく記せり。日本にしては、天照大神素盞嗚尊とちかひましませば、神代にもありけるにや。初めは盟誓といひしを、人の代の末にいたりて、白川鳥羽の御時も起請文と云ふ事あるよし、貞永式目起請のうらがきにありと云々。又日本紀に、盟約の字をうけひとよめり。起請の字、この間によりてうけたてつるといふにや、猶おぼつかなしと、つれづれ草の抄に道祐の書かれしなり。此の請けをたつるとよむといふ義は、世話の手形などに、何がし請人とかくやうに、神佛をうけにたつるにや。其いにしへに、みしやおがつたいといへる、昔から人のいふことに、山嶽河帯と云ひしを、末の世に、かのあとを病のまつりごとに、とりまぎらはしたるにや。此の心は、山は礪石ほどになり、河は帯ほどになるとも、今の約定をかへまじきとの心なり。古歌に、君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなん、とよみしに、松山になみはこえ越ものなれば、若し我あだし心をもたば、山にも浪はこゆべきと、なき事をたとへたるものなりと、さて有職の御方でありしなり。又或人、外記の常忠に、火起請はいかゞと尋ねられければ、常忠、火をつかみてやけまじきならば、非をつかまじ、水にこそすけん。と答へたり。火は必ず燒くべし、燒けば不思議あらんとなり。此の時

火起請の事皆くやみぬ。異國に、罪人の實否を糺さんとて、象にかゞしむる類なるべしとあり。總じて、きしやう誓文をとりあつかふ事、よからぬ事なり。起請誓言は、大かた若衆ぐるひ、又女房ぐるひするもののする事なり。それほど胡散におもふ若衆女房ならば、中をきるべし。又此方よりこひもせぬを、あいより書きておこしなば、過分なり、それほどに思召しなば、これに及び申さじとて、かへしたるかしかるべし。しかじ、きしやう誓言なしに、心中をみて、よろづ疑はぬときには、大かた、ものうたがひはあしき事なり。

「七」ある人、たふとき上人にあひて、「一言以治二天下一」といへる事は、いかなる事なる。」と問はれしに、上人「其方に今たれ人ぞ、天下を治むる事をあつらへ侍るか。但しとひおきにあきれ候や。」といはれて何とも言葉なくしてかへり、又の日参りあひて、「一言以不レ尤レ人不レ恨レ身といへる事さふらはば、をしへ給はれ。」といひければ、上人の曰く、「なれども何とせうといふ事を、能く會得し給へ。」と仰せられしかば、「其のなれども何とせうといへる事は、いかなる御事にて候や。」と、かさねたづね申されしに、上人のいはく、「先づ其方の身にていはば、今まで人のためにあしき事はせず、よきどき善根をこそしたるに、かく物ごとにたよりあしき事は、不思議なれども何とせう、是れもぜんせの約束とおもひ、人の子としては、我は親に能く孝行をつくせども、親はかへりて我をにくみ給ふ。

餘所の聞はあしき子なきへ重寳せらるゝに、我は本意なき事なれども何とせう、孝は子たるものゝならずして叶はぬものなり。又は我が孝のたらぬにやと、いよ〳〵孝をつくし、又臣下としては、我は君に忠をよくつくせども、君の御氣に入らぬは、無念なれども何とせう、まだ奉公をぬ分がうれしきと思ひ、夫婦の中にては、我はよく夫につかへども、夫は我をおもはず、あまつさへ、手かけぐるひなどせられて留守がちなるは、むねの火のきゆるまもなきことなれども何とせう、まだ去られぬをうれしきと思ふやうなる事なり。また友だちのなかにては、我よく念ごろに思へども、さきよりはさもなきは、上手な事なれども何とせう、一旦友となるうへはと思ひ、まじはりをなかくするやうなる事なり。これよりふかきをしへもあるべき事なれども何とせう、我があさき智恵なれば、ふかき事は本よりしらずして、仰せられしとなり。此の心は萬事にわたるべし。

八　世話に、人の酒をしひるとて、「其方も親の子なれば、瓜の蔓に茄子はならぬといふ事あれば、いかにしてもつりがよい程に、一つはまゐれ。」といふ。むかしも此の義にも叶ひ侍れども、其のもと因果の道理をせめし者なるべし。古人曰く、若人作二不善一得二顯名一者、人不レ害天必誅レ之、種レ瓜得レ瓜種レ豆得レ豆、天網恢々疎而不レ漏、深耕淺種尚有二天災一、利レ己損レ人豈無二果報一。此の心は、昔よりの変に二人の人あらんに、何事も同じ事をいふとも、賢人は讀まれに、それも當家の御氣に入りて、權勢をふ

る人か、又うちたくても仕合なきものは、とかくにも行はれず、されども天必誅之とて、天より罰とあ
る事のちかふなり。積レ惡得レ禍積レ善得レ福とは、惡をなせば惡のむくい、善をなせば善のむくひといふ心なり。天網恢々疎而不レ漏、世話に、天のあみがきびしくては、のがれられぬといふこと、同じ心なり。此の天のあみは、恢々として疎かなるとは、一つ／＼天に其の事をあたりまなこに、とかめにるにはなけれども、そこ上もなしに善人をめぐみ、惡人を見すて給ふと云ふ心なり。深耕淺種而有二天災一、積二己損一人豈無二果報一とは、例へば農人がつくりをするに、なるほど深く耕して、其の上にも、よく／＼こやしなどを入れて作るさへ、天災とて、水損火損があるほどに、まして己ばかりようやうにして、人の損のゆくをも、又人のためにあしき事をもかへりみずば、なぜに天の災ひがのがるまじき程ほどなり。これも商はすこしにしても、業有り、業はきかぬ事もあるといひて、人によく毒絶をさするやうなる心なり。世話によき人をおしなべ、果報者といへれども、果報といへるは、善惡のうへにある事なり。果といふ字ははつるとよみて、善惡ともに其の事のをはる所、報はむくいといひて、其のたねの後にあらはるゝ所なり。たれもしりたる事なり。

九　馬鹿氣なる町人、子を壹人もたれしが、たしなむ藝あまたあるべきに、かくし藝なりとて、其の子に兵法をならはせらるゝほどに、やう／＼おもてを習ひあぐるほどに、いつともなく陽氣ものに

なりて、あそこの喧嘩、こゝの辻ぎりの手から上に、まことしからぬ事のみ、物がたりに出して、きるものにも、上のつねの形小紋にてけす、下がへにはきぬにつるなどかけちらし、かたさきには南無妙法蓮華經などはねまはり、大わきごし落しざし、こびん剃りさげかき頭巾、目のてりわるにも轉子供、たま〳〵つかふ詞までへ、關東べいの如くなり。此のありさま他人の目にあまり、おやの耳へも入りしかば肝をつぶし、元より馬鹿氣なるおやなれば、向後八まんさやうの儀は、ゆめにもしり申さないといかり、はや親と子のきうりやきり申さんと、どしめきけれども、一門あつまり、さうはなき事、又一たんも二たんも、いけんをもしてみんとて、其の者をよびよせ、右の段々いろ〳〵いけんせられたに「さても〳〵はおもしろき事を仰せらるゝものかな、それがし喧嘩はいたしさふらはず、若しか樣の事申すもの候はゞ、我に御引合あるべし。」と答へければ、「それにとよれ、とて其方のたりふかはすはなるにまゆ、またむかしにも血氣さかんのものにて、喧嘩をしあけたらましき何にも」といへば「其の事にて候、兵法のおぼえにて、向ひよりたとひ無理をしかけ候ても、三度までは堪忍いたし、四度にも及び申すときは、此の手にてあいてをいため、此の身ばかりにて人々をとめてはふることなり。」と、「昔、武見せる人の目に人と手のあるものなれば、自由にそうでなるとて、「それなれば、「何時なりとも、右に四つの辻をかけ申したる時御申し候へ。」と、ものはひとつかぬやうにいへば、

けけんも今はにや崩れさうなるときに、末座に侍る人の、「只今おもしろきばくちを見侍りしが、わらべどし三人集まりて打ちたるが、三人ながらみた、我がもと錢を引きてうたりしことといへば、喧嘩すきする人、三人ながら本を引きたらば、のこりにばくちうつてに打ち上ぐ。といへば、其の事なり、今の世には人々に、我まけぬやうの兵法を習ひて、喧嘩すきする者さへあるものを。」といはれしに、能く我が身の上を得心して、けんくわすきをとまりけるとぞ。此の一物の勝負をこのむもの、我こそかたんと面々におもひてするは、三人ながら本を引きてうつといへるばくちに同じ事なるべし。

十　これも町人に、兵法に朝夕心をつくす者あり。其の人にあひて、「木太刀は兵法道器なりといへる事もあり、また大蛇の異ともいへれば、其のかたはいらざるもの。」と云へば、其の人の曰く、「其方のやうなふぐりしきとはあかうたり。男といへるものは、若し何時にあらき大事にあはんときに、命をたすかる此の兵法が、悪きかことといへりしかば、予が曰く、「其の事なり、我が里につねに大なる瓢箪を、くびに壹つ、兩わきに貳つ、くゝりつけて居るものあり。」と語りしかば、其の兵法者のいはく、「それはつねにあみうにつけて、身のとりまはしもむつかしからん。」といはれしかば、「其の事なり、若し何どきによらず、大水の出でたらんときは、此のへうたんにて命をたすからんと云へりし。」と語りしかば、やがて其の旨をさとりて、兵法をすて、あけくれ學文をして、後には人をもしめす物識に

なりしとなり。これは一ねんのきざす所、大事なりといふ心なり。

十一 上かたの人は、身を卑下するものなりと思ひ取り、よく物いふものの、我等がやうなる無口なるといひ、又くぎりうちをもかへすほどなる、ものにねんを入る身をもちて、我等がやうなるあとのなきものもなどいふは、卑下せぬよりはにくし。なかなかしこだてする人の身の上にある事なり。卑下をも人のにくまぬほどにしてありぬべし。

十二 はじめのそゝめき後のどやめき、一寸の蟲に五分のたましひといへる事いひならはせり。此の事萬事にわたるといひながら、こゝに、人のむすめを縁につけんに、はじめは何の合點もなく、むこの家のものしきに目を付けて、其の男がきかしおあるか、人物こつからをも吟味なくて、めでた認めあいひかりして、そこともなく縁につくる。然るところに、其の女が心に、その男が五つほど氣にいらぬ男なれば、是非に及ばずして、不承々々ながら添ふうちに、縁はふかしきものなれば、それところに薄口なるくはになりて、たはけものと見えたり。されども、上が上なれば、心にかなはぬ男なれば、此の一寸のむしに五分の魂といへる事あれば、心にはじめにも添ふてもおもはねど、さすがに其れの子なれば、それと言葉にはようも出でず、はじめは親のことのゆうにして、うちはふたりと別かし添すほどに、どこともなくつなにさきにどうやらん、おいさが寒しうなるそれれまし

おもふせに、いの出(いだ)すほどこそあれ、あの医者(いしや)の此(こ)の医者(いしや)のと、かはるがはれども、もとよりいしやの詞(ことば)のごとき病(やまひ)にはあらねば、前栽(せんざい)あるけど験もつかはず、やうやくやせおとろへゆくほどに、文殊これに［illegible］つふし、あそこの観音(くわんおん)、こゝかしこのかたのと、いのりけれども、すこしもしるしもなく、［illegible］けるしさにとは、命(いのち)おしくて見(み)え侍(はべ)るとき、又(また)ことともなく、何(なに)さまに大(おほ)かた、とこ御(ご)かたへ和気(おき)にまゐらぬものさうに見(み)ゆるは、上下の出(いだ)さ［illegible］、乳母(おち)や腰元(こしもと)なとして、四方山(よもやま)のをかしきはなしにまぎらはし、とひあましせば、あんのごとく、男(をとこ)にくみといへる病症(びやうしやう)なり。此(こ)の由(よし)をこおや聞き、始(はじめ)は殊(こと)の外(ほか)にはらを立て、四方の聞えも口をしや。なにに山椒(さんせう)つぶほどなる身として、左様(さやう)のことこそ其(?)ならね。ましやとかく、我が子なれど上を持たぬききとおもへばあまきものをとて、九寸五分などいねくりまはし、さしこみしておどかしたれども、もとより四婦(?)のこゝろさしなれば、うばふべからざる智(?)なれば、此の事(こと)を病(やまひ)にさへするほどに、思(おも)ひこみたる事(こと)なれば、すこしもひるむ體(てい)もなければ、又出入(でいり)の者が、「さうあそばしたるものにてはなし、縁(えん)といふものは、かかるならひなるものなり。そんじやうそこのなにがしごとも、おや御(ご)のあんにつけさせられし殿(との)とはそはせられいで、のちによき男(をとこ)でもあるか。さこそこの何(なに)がしといへる不人物(ふじんぶつ)なるものに、一期(ご)そはせ給(たま)ふ」など、そらごとを取(と)りつけ、追従(つゐしょう)をいへば、きよかわ子(こ)のかはゆさに、「さらばともかくもして、いとしの状(じやう)をもらふ縁合(?)をせよ」などい

ふとき、かしこき聖なれば、其の風ふれるとき、すなはち我が好まぬきのたるやうになして出し、ふかを
みくるしめ、又人のたれる例なれば、我をまいらせしに、可笑八まん口をしさなどのゝしれども、と
ても勝ちまうしるまじきものなれば、無念をはらすはさにもなく、のみもきらず、かみもきらず、我も女
房ども打ちすてゝ、年月をおくるこそうたてけれ。人がいかゞかゝる事は、両人の上にある事なり。此の
おこりは、むすめにおよぶ悪口でこのおこる事なり。とかく瞋につけんと思ふは、先づまへかど
に必ずそれのもして、とはぞたがいのなりと語りしかば、かたへなる人、一それに就て道理に背たる
世にられやうになどり、かへりて人に聞ゆるうちに、ある心づくるに似たりとなんで一人の子とんで
そその病にかけ一時のるまどこといにけりければ、処かいはく一定もされもさる事これにども、人として
情をあすお道になきとし、ぬす人の居心をこのむ事もなしぬすびとなれば、おやいまをそむくものはあ
らじとて、さきる事をいふまどきにもならず、誰ぞ人に言ふ心の病かほどなれば、則ちくみするにとな
るいせつなるが、なんとう指南か、このむ申すと見すべきかは、こなた元様の事をせぬむすめ
ならば、今こそ申すとも、これにそむいて男にくみはせまじ、たゞこれは人のおもひたるものに、嫁を
まねとり、ねゆあるへに付くることも、誠にくやふのなきやうにとの物がたりなり。さていかゞして、
人にはつくべきところの法、其のむすめもよくかてんせしうへには、且今其もその人に使くたる人は、

若しむかひの氣にかなひなば、ふたゝび我が家へかへらんと思ふべからずと、いひ聞かするはつねの事なり。さて心やすきものをもつて云ひふくめんには、

第一　しうとしうとめを、我が二親のごとくうやまへ、孝行をつくすべき事。

第二　亭主を誠に御主のごとくに思ふべき事。

第三　すこしもりんきがましき事を、ゆく〳〵にも思ふまじき事。

第四　他所の男にむかひては、したしきうちきともに、心づかひ有るべき事。

第五　夜あるかば、すこしのまといふとも、火をともすべき事。

第六　あさねせまじき事、ならびにひるね。

第七　物がたりせまじき事、さはいへど、嫁しうとめの物とひかけたらんには、其の事ばかりいらへすべき事。

第八　おやざとのよき事すこしもかたるまじ、ましてあしき事をや。

第九　亭主、内外のもの、または他所のものに付けて腹立つ事あらば、宜しくいひなだむべき事。

第十　身のもちやうは、すこしも人の目にたたぬやうに、つまはづれはなるほど花車にたしなむべき事。

此の外にいろ〳〵、いかなる事もあるべけれども、右ケ條をさへ、心にかけたらましかば、其の外は又ひとりも思ひつくべし。

十三 むかしいれの座敷にて、其の作法よくしりがほなるもこそ、見るからおとましけれ。たゞはづかしき事なる、しかるべき。もとよりよみは、[illegible]をかへ[illegible]しるはいかゞと、[illegible]まで[illegible]やきれていときくしと、或人の云はれしに、[illegible]、[illegible]其[illegible]也[illegible]、[illegible]其[illegible]也[illegible]と[illegible]事の作法[illegible]、其の外衣服等[illegible]しなとまで指南なり。たとへば千石とりは[illegible]には何ほどの役儀、また町人ならば、いかほどの分限には、いか程の風體がよきといへるやうなる事なり。其の由[illegible]、[illegible]と[illegible]と、[illegible]しおつかふよりしはきかたなり。[illegible]本意とは其の分をはかつかいまり、[illegible]も又[illegible]るる事もなきかいへれ。されば馬をのれ[illegible]に、[illegible]まる事なるべけれども、[illegible]よりはきさかむまりしとなれ。たとへば[illegible]よりべ馬[illegible]に、[illegible]中なるべけれども、そこへ[illegible]傳よ[illegible]に[illegible]行かれ[illegible]と[illegible]に、[illegible]るおに遠きかたにあれる分にては、少し其の事おしまくなるはかりに[illegible]、[illegible]はあるとおきと云[illegible]、これなく[illegible]よりそこへ出[illegible]てたれは[illegible]なるあえなり。[illegible]も[illegible]にはなくや[illegible]、其のうちにては、萬事うちのあなかた[illegible]との[illegible]なり。[illegible]其[illegible]也[illegible]とは、[illegible]たし、へる[illegible]の[illegible]、またな[illegible]のあひだの事なり。其の子たるものは、[illegible]萬事其の儀式を

わきまへたるよりも、親のわかれをかなしみ、かなしき事にあきれ、取りもあへず[illegible]したる[illegible]、といへるにかなへ侍るは、其の人心にくくなりて聞ゆれば、いとやさしきことなり。人の心にくき所なり。

十四　何のよくもの書くは、かへりてかのかたの中だちとなるなり。又筆のはやき[illegible]

十五　しうとの氣に、あながち入らんとする、むこも見ぐるし、又くじがましきも、うたてし、入むこといふ名は、聞くからをかし。

十六　わかき女の、たびたび神佛まうりするは、其のさへある人の心もおもはれる[illegible]なり。ことに人の目にたつ風情は、猶興さむるものなり。とかく女は、おやのうちより外にしらぬなどいへる心にくし。又當世のはやり言葉など遣ふ女は、猶にくし。諸衆も秀句などいひ出でたる憎し。よく[illegible]いはんよりは、唯俯しがちなるに、わざとならぬ袖の[illegible]などしたる、いつまでも忘られぬものなり。

十七　後家になりし身の、寺參りなどいひて、うなぎれたなどかうぶり、[illegible]あるくは、たれが爲のかたちづくりにやと、なまぐさし。

十八　人のうちへ來りて、尻目のみつかひて、ことに女など見たがる[illegible]、にくし。

他我身のうへ第三　終

他我身のうへ　草四

[illegible]

こそなつかしけれ。必竟のみと通ふ所ありしに、人の文、人のことばのとりはやしたるも、降りたるを
はなれて人に云ひわたり侍るときに、とかくのいらへもなさず、たゞつらきといふべくもあらず、更
いはぬぞくるしかるや、心をつくして、とやかくやまたらひとしれば、ふさぐにはあらでまことなん
ひと聞すつるは、罪深きわざにかは、もし其の人とたえぬべき、口惜しきものなるをまことが
わかこゝる事ありて、文うちすてつべきにもあらねども、昔くちはいたく思ひわたりたるに、人しれ
たまはり、さすがにそれとはいひ出でずして、よのわざにかけて、文などおこせたるは、はじめて會ひ
しより繋られし。又かくまでうらむべき事なきなれど、小わきざしやうの物入れくりまはし、おど
したるに恐るゝもうれし。又みうかれし思ひきゝつ、同じ道にさそれあらば、猶情ふかし。久し
くいたゝれて、さみてやに、人のことたりけんかたなりとも見て、なでうふことにもせんと思ふに、ま
さ聞かすれたるも、遣るかたなし。かくかたゞわつゞくれば、むかし物がたりの衣をたれたる、わが身かり
儚きものにはあらねど、さはいへどまた、疎まれぬものなり。なき身となれりし人をさへ見たるもうれし。
さればこそよろしきゆゑのこと見はてぬ間でなれ、あしきゆゑの甲斐きこえたるも思ふうれし。おもふ人ふた
りもちて、彼方此方にかよひたる人も、いとむつかしけなり。名のみ世間に聞えわたり、草草などかよ
はせて、心をつくして語らひよりたる人の、けはひさもなきこそ、興さむるわざなりや。久しくいだ

たゞでとりよる文の、はゞかることありしそれとなすも、本意たがはざるなり、思ひよらぬ、ことなたとへり
打て譯すべき詞の數もなきに、誹諧の詞もて來たるぞ、例をもてかは此のよのる法すべき題に
す、はまさうれば、文ばかりかゝるに、一ふしうたけたる調うたえこそ、命ながさか侍りと、侍ば
あきも守る事なり、是しあやまりにかたなくれ、何とも上ゝ其の折にふれてあ、ふることたる口
すまれ、その句は忘れつなどいふを、たやすくそれにやはせ、打ち捕してることそいふにはれて又
こよひ言葉も我なるのと、問に立ずに、月は猶や山の端に出でぬまこそ、[illegible]和歌のなれ、也あ
さましき人にあらで、此の事たれにもいはまほしけど、[illegible]、籬つきのわ[illegible]すべて
此の道しらぬものは、物のあはれをもしらず、又此の道にあるべからざるに、[illegible]な
り。[illegible]、様としいふべき[illegible]、いとかたはらいたき
一、さて寺の調ねまで、[illegible]、他本は[illegible]事なりと思ふ人にも用ふるまたれ、そ
れをも我もつてはいかむには、たまへば聞き顔には、いかばかり制詞をもて[illegible]、此の道の趣
くよむ制詞なきも、その例様は、近世法師にかくあれ、と[illegible]にかゝ約りとも、我ご一家の[illegible]
轍）一月・星し、しかのみて、ひたすらに思ひこむに、[illegible]用なき法をふか[illegible]心を用ふるにはまり、る一
[illegible]の法に見するつひも、いたばかりなれ、これの萬法の光を樂として、[illegible]脈に[illegible]用ひ

とりつく島もなきやうなる、仏陀の御心ぬる故なるべし。八宗九宗そのしなぐ＼にわかれ、それぐ＼の法をたてゝる方便の術を、人のたりに用ゐる手足眼にたとへたるに、[illegible]手と目の視とわかれ、もの高下にして、是其の君たる事を得たりと、又目をながめ、花をもておもはゞ[illegible]、是手は[illegible]なこの理にして、目その手足の君たる事を得たり。又手のうへにていふときもかくのごとし。佛說にも淨土をとくときは、餘經みな淨土のやつこにて、淨土君たる事を得たり。其の妙法華眞言禪法相の法も、其の法をひろむるときは、其の法君の位を得て、餘法みな臣下の位なり。されば一宗ばかりにては君といへる名もあるまじ、これを萬法一如とやいふべからん。其の一如はなにものぞ、かの心にいへるものなるべし。心はもとより形もなく、いづれにもさだまれる形なく、鏡のごとし、其の色あるはなく、ものにしたがひてうつり形なき故に、よろづのかたちうつりゆくなり。もし鏡にさだまれる形のあらましかば、よろづのうつりゆく事はあるまじきよしを、いにしへ人も仰せられしとかや。いかにぞおろかなる者の、一法に執着し、他法を嫌ふなりと心得るものを、經文には、もろ／＼の盲ひたる者のあつまりて、大象をさぐるにたとへたり。されば／＼かの象の鼻をさぐるものは、象といへるものは、蛇のごとくなるものなりといひ、又足をさぐりたるものは、柱のごとくなるものなりといひ、尾をさぐるものは、はゝきのごとくなりと、云ひ争ふとかや見えたり。これかの大象の全體をよく見ぬゆゑなり。大象にまことに形あれば、

[illegible]本心といへるものは、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いふらん、いづれをか見ぬといふべき、父こひし母こひし。

三 我身つみて、人のいたし[illegible]といへる事、[illegible]古歌に、

身をつめばいるもをしまじ秋の月山のあなたの人もこそまて

此ノ心は、我が月のみたる[illegible]に、山のあなたの人も、[illegible]見[illegible]にいふほどに、[illegible]其[illegible]

[illegible]もののぼりていはば、恕の字にうこり侍るべし。恕といへるは、[illegible]

[illegible]、朱文公は[illegible]せられしなり。己をおすとは、おのれが身のうへにある事をもつて、他人の上をお[illegible]

[illegible]といふは、[illegible]

[illegible]、中心ことも注したり。これは心の[illegible]といふなり。これ我が心の[illegible]に、他人にもあ[illegible]

[illegible]

[illegible]

す、其の能のぶざの見えぬを、わがいやに墮ふなるば、其の心をおしはかり、我がうしろにある人を、我がのびあがり、又大あみ笠などかぶりたるは、いかばかりいやならんと思ひて、其の心を付けよなり。又ここに忠恕仁恕といふ事もあれども、とうかきて侍らぬは、此の恕の心をだに能くすれば、自然に忠恕仁恕のこゝろにもいたるべし。恕の字の心は、しるし難きにあらず、行ふ事のかたきなるし、つとめよや〳〵。

一　友とする人に、少し文字をもよみたらん輩へ、よそごとなきは、あだになる事に、永き月日を、みるのなれど、老いの孫子に立ちまじり、かたことまじりの道話の本いはんより、そこだましにはせば、其の折ふしのかたうどに。など、勸めあへれば、まづ大かたの人、其の道心にかゝわり物にならぬも、それぞれに家のいとなみ勸めあへる身にて、其の暇なしなどいひ侍るは、尤もなりとおぼゆべきことながら、大きなる不覺なり。それ人と生まれて、いつをかぎりともあらじとおもひ、又いつをかぎりともしといはん、其の中に、なる人も、心實に露のいとまもなからん人には、ただなむとひとつといひ出しかけのなり。其の人大かた、あだなるわざにおほくのひまをついやし、おほくの金銀をつひやすをさて、かたりよるとみえたり。此の事物がたりあきたれど、今の世にある人、みな〳〵かくのごとくなり。又すぐれてかしこだてするしれものは、道は文字のうへにはあらず、心にこそあるなれ。六祖はかくいふす

ふみの事しるべき事なるべし、只其をのみ見れば、只日なれば、さりとて暗きをば、しるべからず。
われすぐれし書の為のみにもあらず、われいまだ身をかへりみ、古今書典の全體は、我が身を引き
合はせて見る事ぞ、ほかの書に物ずるほどに見る事なれど、かへりみて見ずるほどの思ひかへし、その身をもつて、さ
とりたては無用なり、ゆめゆめ心するほどにつけて、一文字のみだに讀み誤りなく、誠に文字は道をの
するうつはものとこそ、古人ものたまひしとかや。

凡そ人の情は、もとより重寶なる物なれども、おほかたは其のことの上に、われひとり悟りて、其
心を見る事もしるべき事なり。ここに我慢に堪ふべきものの品のある事も、そこにはこれ他國に人
あり、國にすむとても、しきず國にて才覺をもし、又は國主の御恩をうけてこそあるなど、
其のまま自由にてしくしかしこく言ひでしに、これか其の物語の感ずらん。然れども其の物語の一途相す
みて後に、其の人こと事なりければ、こにも給ひしことあり、まことに、此の世に言ひし事をも
いはば、其の當に物ずる感ずる人、其の時又はいにしへにもとも左様の事、今はよりいはれぬる
所なり、はなはだ其のものもなく、さりとて其の事をしもなくいひがたく、此の事の
物ぞひとりのみにて、それぞれしるも思ふとはいふ二つなるつことし我なるもの、人とをしはふる文な
る、なにとなくにも人を以て言葉をもつて、言葉を以て人をもつとも、のたまひしとかや、やつこはく、尊

富不仁、爲仁不富。こゝろは、陽虎は仁をすればとまざるほどに、仁をすることなかれと、富のために言ひしを、孟子は富をすれば不仁、仁の爲に仰せられしとかや。今此の君子を見にらん人、もし道に[illegible]事なく、われをま[illegible]

[illegible]

なほ[illegible]世界[illegible]

あきらめたる人あらば、千里を遠しとせずして、尋ね求めんと、つねにかなしみ、つねによろこぶ人あり。さる折ふし、また例の世界のはての物語出で来ければ、やつがれがいはく、「むかし天地ひらけはじまるときに、よろづの神佛あつまり給ひて、生きとし生けるものに、[illegible]給ふ[illegible]至[illegible]思ひ定むに究むとかや。これ[illegible]の身[illegible]をみるまた[illegible]くしがたき事をしらず。今これおかしい[illegible]事も、心で萬里[illegible]にめぐらする事のたくみなる事をしれども、世界のはてを、夜ひる工夫し出しても、身に[illegible]事をしらず。佛經三十三天須彌之四州九山八海[illegible]百千萬億那由他阿僧祇三千大千世界[illegible]、末には此のもろ／＼の

世界は、[illegible]所にあらずとかの[illegible]給ふ。又四維東西上下天地不可思量とかや。又六合之外[illegible]聖人存而不論ぜず[illegible]文にも見え[illegible]言はば、又いはく、生きとしいけるものに、死せざる[illegible]、[illegible]人、勿論[illegible]ひとたび[illegible]ものの、死せざるはなし[illegible]定まる事、天地も一たび[illegible]なるも[illegible]滅せる道理あるべきといはれもあれば、[illegible]かの例の[illegible]、[illegible]たぶ[illegible]、[illegible]ていまだ[illegible]にはいたしてなりとも、[illegible]事[illegible]侍らん[illegible]、又[illegible]人のいはれしは、「[illegible]むかし[illegible]の郷にをかしき人あり。さるさびしき夕まぐれに、こよりを一筋[illegible]、それを[illegible]うこに、ますぐに立てられければ、其[illegible]たぶれにけり。此[illegible]侍る道理あれば、[illegible]立ちたる道理[illegible]にて[illegible]。[illegible]には心つ[illegible]、[illegible]ごしなる[illegible]、[illegible]一致の道理もありや[illegible]、[illegible]人の云く、「なんぞ有るまじきや、物長きあればみじかき有り、高きあればひき[illegible]。[illegible]からましかば、ひききといふあひ手もあるまじ。これ一致なる所にあらずや。」とかたれば、又[illegible]人のいはく、「勿論[illegible]生死[illegible]、然れども[illegible]」

といへる事もあれども、我等が見解、いまだ其の位にのぼりえたり侍らねば、さだかに語り侍らず。」といはれし。

七　ある人、俳諧の発句すべき様を、たづね侍りしに、予が曰く、「発句のいたしやうは、いまだ習ひも有るなるべし。古人も仰せられしかど、先づ初心のうちは、世上に出でたる俳諧の書を、能く見覚えて、其の時をしるをもつて、一つの習ひといたし候なり。其の時をしるといへるは、先づ世に人のもてはやせし、それぞれの集の、何の集の時代の作意は何。かの集の時代の句のしたてやうは何と、能く見はからひ、其の内にならぬまでも、句の手のあたらしう聞ゆるやうに習ふべきなり。」問ひて曰く、「すでに世に出でたる集を手本とせよと仰せらるれども、今の世の集には、集一つには、非言の書も二三十もあれば、いづれを正とし、いづれを非とせん。」答へて曰く、「尤もよき不審なり。されども其の内に、山の井などいへる書には、未だ非言もなく、よき書かと覚え侍る。此の書の作者は、大和物語の抄なども書かれたる事、人のよくしりて、世に用ゐる事なり。」問うて曰く、「されども、此の作者の句に、山里やいつも正月門の松とあれば、よき人難ぜしは、もし此の句を、山里やいつもむ月の門の松とよみさふらはば、連歌たるべし。」と。答へて曰く、「これこそいはれぬ非言なり。よく此の発句は、いつも正月といへる世話にてしたてたる句なり。其の上其の時に申すといへる事あ

り。たとへば国摘の守り、人にものかたるとも、長刀にてはえとらぬ、太刀刀にてはつかとたれ、
古来のよみくせなり。又れ文字に徒然ぞやとあらん時、俳諧の体裁ならば、とぞんきやと詠むべし。
又漢詩の体裁にあらば、かぞしかとよむこそ、此の道を心得たる人ともいふべけれ。此の俳諧の
書に比して有るを、いかに非常がしたきとて、わ行とむぎへあるに、又その字を入れて非常する
こそ、返す／＼道の魔障なり。これ古人の深く悪む所なり。縦ひ非言ありとも、むざと心得もなく、
あたらしき作をたくふるも、今の世の非言には、ことごとく聴もあるまじき何なりとも、人をそしり、撰をたてん
とて、難ずるとのえたけ、これはにや俳の言るべき何にも、聞のなきもあり。三国ともに日くて此の俳諧
をよくと読まで。俳の徳加あるも皆へて日く、此のすかゐのふかき理にいたりて、人を世間の道に
おもむき、心を化し、罪をのがれ、悪をこらし善をすゝむるの一助ならん。まず／＼ここに云ふを
玉きはる、といへるは、いやしき民の言葉を以て、この如在の数をつらね侍るは、遠きをおふの事に
あらずや。俳諧のうたに、古今集に出でたれば、趣向あるべし。さて此の誹諧の体を、滑稽とも
称せられ、敵かたも有り。此の滑稽の者まで、上はかまびすしく述べたれ、長々しく其へずも、其
の一つ二つの品に入りむかし秦の国に優旃といひしものあり、つねにをかしき誹諧のやうなる事を
いひて、しかも聖人の道にかなへり。此の時に、始皇もとよりおごりをこのむ人なれば、苑囿ここに

秦にてこれをいはば、大きなる苑囿をつくらんとせられ、[illegible]を作り、其の中へもろ〳〵の鳥けだものを放ちおき、狩場の遊ぶ所にせんと催し給ふとき、諫臣是を悪事とは知りながら、其の威におそれて、あへて諫むる者もなかりけるに、彼の滑稽者の優旃に此の事をかたられければ、優旃がいはく、いとよき御分別なり。我等も[illegible]、若し他国より敵の攻め来らんときに、此のたびの[illegible]、[illegible]らさせんといひければ、此の事やがてやみにけり。又二世の時に、おごるべき事に事をかき、城郭をうるしにて塗らんといひしとき、もろ〳〵の臣下共無用なりとは思ひながら、口をつぐみてゐたりしに、又此の優旃、是れこそ然るべき御事にて[illegible]、此の漆にてすべり申さんを、かけ出でんにたやすく敵を滅ぼすべし。さりながら其の城郭を、いれ申す所のうるし風呂が有るまじきと言ひければ、笑ひになりて此の事もやみ、民も穏かになりにけり。又我が身の上にかへる人、賢臣をめして、一々次第にならべおき、我は仁君か[illegible]と、一人一人にとはれしに、いづれも君は仁君なりといへりけるに、さて[illegible]が番にあたりて、又任座かとをとはれしに、任座がいはく、仁君にあらず、其の故は中山といへる所を討ち取りしは、国しく君の弟の御手がらなるを、弟を中山へ封ぜずして、君の宗領の知行所とせられし、これをもつて仁

君にてはおはさずと誹ると申し上ぐるに、文侯大きに御腹立ありて、翟璜を座よりおつたて、其の次に
任座といへる者の番なりし時に、又仁君かと問はれしに、任座答へて曰く、いかにも君は仁君なり。む
かしより其の昔に賢仁君のある時には、臣下にかならず直なる臣のあると申し伝へたり。さきの翟璜が、
る事、いかにとても直言なり。これに君の仁君なることを知り侍ると、御心をやはらげて、翟璜を召されて
申さしに、文侯叡感ありて、又翟璜を召しかへし、賞禄に賜はりしとなり。又趙の恵王
人、燕の國をうたんとせられしときに、蘇代といへるもの恵王の御前に出でて、昨日これへ参りし、易
水といへる濱を通りしに、おもしろき事を見申し候。大きなる蚌、海より出でて口をあ
き、日の光を浴びて居る所に、又鷸といへる鳥飛び来たり、此の蚌を見付けて、嘴を
其の口に差し入れ、身を食はんとせしに、蚌は口を閉ぢて、鷸の嘴を挟みければ、鷸も嘴を挟まれて、
何れも互ひに放さず、其のうちに鷸のいふやう、今日も雨降らず、又明日も雨降らずば、此の蚌は
ひとつも死すべしといへば、蚌もまたいふやう、今日も出でず、
明日も出でずば、此の鷸は死したる鷸ならんといひて、互ひに問答するうちに、猟師来たりて、ほどなく両
人、二つながら取りて帰りければ、燕の國と趙の國と、互ひに争ひ給はば、
より二國を取らんとて、其の間を窺ふに足るべし

入れし事どもなり。元より大和うたは、人の心をたねなれば、心におもふ事即ち皆うたなりと、仰せられしやうに、かりそめに云ひ出づる物がたりにても、をかしき事にて儒佛の道へも引き入るゝは、皆誹諧の徳なるべし。あながちに十七字十四字につらねて、一巡箱をまたせ、そなたこなたの會に會し、ひぢをはり頭をふるぎつねのやうに、世の數寄ものをたぶらかすばかりにては、誹諧師とは云ふべし、誹諧の道者とはいふべからず。

八　世話に、陰陽師と辻風には出あはぬが祕密、又あふもふしぎ、あはぬもふしぎといへる事、たれも口なれていへども、其の道理にかなふもまれなり。いかにとなれば我が身も息災に、其の家にも何事もなきときは、たれも巫かんなぎのたぐひ、其の外判はんじ、五音のうらなひなどいへるものに、たぶらかさるゝもまれなり。されども有爲轉變の世の中なれば、あるはなれにし妻がわづらふか、あるは寵愛の子にはなるゝ折ふしか、または金銀其の外貨財など、不慮に盜まるゝ時には、かのつねにいさめし利口とちがひて、あそこの辻うら、こゝのうらかたのなどいひて、あしをそらにまどふ事なり。もしつねに此の理をよくわきまへ知らば、いかでかやうの時も迷はん。誠なるかな、孔子曰く、歳寒然後知松柏之後凋也。此の心はもろ／＼の草木も、春夏の中は、別に松やかしはのみどりなる色とちがふ事もなけれども、かの秋の末より樣々霜下り露おちて、そらのけしきも冬

だゞこれより、人の根本は世のかはりの、東西へわれども、此の世を他ば色をもかへぬを、その迷ふ人と迷はぬ人も、同輩も身にうき事のなき内には、同じやうに我他彼此と目を開き得れども、かれこれの迷惑するときか、命もはてんとするときに、ことさら人と違ふ人のあるを、平常にありて、ことさらくとしほ存ぜしに、地獄極楽にもうかとをせぬ、松や桔にたとへ結びんとかや、ことにもろかなる人こそ、今日はこの人のいそぐ目にあたるなど謂ひて、楽とやら云ふものを打ち捨てて、この世の道のしるべなき闇をんといふこの、何とは細なれども、みるより早ぞゝかゐもたつばかりなる、はしたなき事にわいゝことさらしく此のつるうゝそゝのかし、おほかたもかなきなき、神仏のおこなひのみ多く、おもてとぞかりに上げもらし、此の亡者のことつゝて上て、さまぐゝのうちおとしき事にも左、まことしきやうなれ、あはれげに世に聞かれば、げにもよそれたり、神は魂の現じにまひて、心にまふ等にがむ事ぬて、一種にとにこみ、情ん事は変りしぬつゝ。此の道のつにたぼたしきを、かの貴子見ぬなれにて、また亡霊に、亡者の云ひかにきこえけり、おのれが身にさえひるきとき事をいふ時は、まりおふ事にても、なしく風と聞きいれず、これはまで亡者の事とて、うそかなしき事ともえん。あるわりのもんばかりになる事なれば、頭上はただ合はせて集まりたつるゝ、これだとくまで神のやうに聞こし召されいゝ事なり、すこしまされが身にとんの思ひ事なれば、ほどなくまとにせねば、亜

のいへる事をもふかく信ずる事と、信ぜぬ事とあれば、其のうそを取りて又あまねく広めん、聞く者の心、猶ほ下人にあり。すれば此の諺の殿上源順が和名鈔の部立にも、吉備国に巫覡をいれおかれしなり。世にする者、此の道の迷ひを去らずんばあるべからず。吉備大臣の庭訓に、雑占を求むる莫れと仰せられしも此の心なるべし。右聖人の周易の占ひ、天文の暦数をつかさどる陰陽の博士が事をいふにはあらず。又吉備大臣の庭訓にも、「非ず不知の示」と仰せられしは、かのまことの易のうらの事なるべし。又あるふもふしぎといへる事に出たる事も有り、或の申し侍る人、むかし漢土に季咸といへる神変なる巫あり、人の貧富長き若死の事まで、まへかたより其のいつのいつと、月日まで言ひあてて、すこしもたがふ事なし。鄭の国の人上下ともにおそれぬものなかりき。また列子といへる仙人も、これにあひて帰服し、さてかへりて我が師匠壷子といへる仙人にかたりていはく、「我今まで先生の道をもつて至極の道と思ひしに、又方々なるあるを侍れば、めづらしき不可思議の道あり。」壷子の云はく、「今までなんぢに我が道をかたるといへども、真の道理をしめさず、しかるに我が道をなんぢ伝はりたると思ふはひが事なり。たとへば雌鳥の上をもつていはば、なんぢに伝へしは雌鳥ばかりなり。未だ道の男鳥を聞かせざれば、いかんぞ其の道の卵子を得んや。さらば其の相人をともなひてわが相を見すべし。」と。さて其のあくる日、列子相人の季咸を伴ひ来りて、

壺子を相させければ、相人やがて壺子を一目みて、列子とつれ立て其の座を立ていはく、「其方の師事ふる、其方が師匠たる壺子とのは、十日の中に死に至ふべし。」列子此の事を聞くよりも、[illegible]りあへず、こく\/壺子に此の事をかたる。壺子あざわらひ、「さきに吾地文をしめすとて、いきたる身にて死にたるやうなる相をなしたり。又あすもこれを伴ひて来るべし。」といひしかば、列子又かの相人をともなひ来れば、壺子を相せしめしかば、相人列子にいはく、「さても\/よき事かな、其方の先生はきのふまでは十日の内に死ぬる相ありしが、けふは其の死相なき。」と。列子此の事をきくより色をなして、かく\/の次第を壺子にかたりしに、壺子又、「我きのふは天壌といへる相をしめす。又明日伴ひて来るべし。」といひしかば、又、其の次の日列子、相人を伴ひて壺子を相せしに、相人のいはく、「此の先生其の相さしておはさず、我相を定むべき様なし。」と語りしかば、此の事を列子、壺子に語りしに、されば今日は太沖莫勝といへる相をしめしたりとぞ。[illegible]も待れば、相人の言へる様もおもはしで、足にまかせて[illegible]。其の故は[illegible]相人といへる所で、[illegible]らず。

此の[illegible]一類といへる事[illegible]、此の事[illegible]には、[illegible]

かうけたらん然るべきに、理もかうしたるは悪しきとあれば、善しとするものなしたる、悪しきといよやうに聞ゆれども、すこしはあらず、評も其の理のたけよりすぎたれば、かへりて非とおなじことなりといふ心なりとたとへば、ここに一人の病人あらんに、いろいろ医術をつくしても癒ゆる事なきとき、山ぶしに此の病本復の祈禱をあつらへんに、山ぶし初めは先づ大病の義なれば、客僧が祈禱はいかゞなるべしと辞退せんときに、重ねて是非にと頼まれに、山ぶしかいはんは、尤も此の病も忽ち平癒すべき法あり、されども此の道をそれがし師匠よりつたはり侍るときに、我一代に唯一度ならでは行ひ侍るまじきよしを、かたがたかたへ申し侍る故に、たやすく行ふ事にあらず。いつにても大名の仰せにしたがふか、また公家殿上人の身のうへより、御たのみなさるゝならば、大きなる望みをも調へ、我が師匠のあとをも弔はんと存ずるなり」と語れば、其の時病人並に一門是れを聞き、尤も其れもさる事にては候へども、いづれも御慈悲は同じ事たるべし。今度の病人がうへを御たすけなされ給はれ。もし此の病本復いたしたるにおいては、慮外ながら病人が身代を半分、御はつ穂に上げ申さんとかたく約束ありし、山ぶしに祈念を頼みけるに、病忽ち本復して後に、この山ぶしに大分の礼物をつかひけれども、さすがに身代半分まではつかはぬときに、山ぶし此の約束をたがへたる事を、御公儀へ申してあがりたらんときに、天が下にても、山ぶしが道理とはいへども、かゝる公事にするまではある

まじきと、申にくにくみ申さでもしらぬ公事にも出でずば、山伏をにくむものはあるまじきなり。

諸事に此の心あるべし。一芸一能に游ぶるにも此の心あるべし。今の世にも、猶それには、各様のいかなり近しき法度は守るにはなし。されども法制には其の国の字を御ふれとて、或はさるものに背かざす申し渡度にし、又市町の者をも呼寄せの者に、すぐれたる言の付きき、うはまへをとり、旅人のきとれ打ちならず、皆し者のふれなからと忘れぬるか、または人をそむきたる馬士ものあれば、其のまゝ打ちすてにいたし、又一両代をも取り上げらるゝ事ども多し。是れも其の国にすむ民として、国の守の法度をそむきたる故、一たんの科の事のやうなれども、半をわなとかけたるとて、さして命をとるほどのとがにてはあるべからず。しかし、最前にとどけざるゆゑ、みなその我が法度を、是非なく言動すべきをむくいとなすならば、彼をむすべしと存じたるゝは、理に叶はれども、よく天道より見れば、其の法度とに私をもつて、これかこれ随れものの命をとれ、却而はむさもいは無理とたるなり。われもと見るときは、其のとがを断罪するとれば、なり、其の目とは、たゞ其の国の守をもかんたる人の仕の置し、好勇疾貧乱也、人而不仁疾之已甚乱也。此の心は勇を好みて、我よりしたる者をそらふものは、かへすがへすもたるに、則ち知恵の者は、うやまうにはいかにとしても、人々あの事をめのますぞ、更とはいはれたる、山野にたゞすみ、山を崇敬するにてもいへども、人而不仁疾之

之已甚亂といふなれば、本文の心は、悪しきものも餘りてにくみ過ぎれば、かへつて亂だるゝ所ありとなり。小人に過ぎてなるゝとて、其の小人の非をあしういひたてぬることならば、かへりて其の小人我にあだをなすものなり。たゞ我が身をつゝしみ、つねに／＼しうちすれば、自然に小人とは遠くなるものなりと、古人も仰せられしとかや。このごろは天下太平なるによつて、世間に殊の外儒者おほく出来て、国々にも六百石七百石の知行を取りてゐる人も多きと見えたれども、若しわれら御いけん申しては、我等牢人にならんかと、口をとぢゐるゝと見えたり。されども其の身に在りては云ひにくき者なれども、儒者といふからは、国の法度のかにくくなりたるを、いさゝかではかなはぬ事なり。されども又た、儒者に国をまかせぬか、目に見ぬ事なればつよくは云ひがたし。若し国をとても治めもせぬ身ならば、儒者とはいはじ、たゞ物識りといふておかるべし。

他我身のうへ第四巻

他我身のうへ　第五

一　世間に短氣は未練、又は短氣は損氣、やせ馬の道いそぎといへる事あり、此ノ事萬に亘るべし、まづ商人のうへにて此ノ事をいはゞ、其ノ[illegible]我が本錢よりも遙かに安く人の求めんときに、其ノ人を待たず[illegible]していたせ侍るは、一旦氣もみじかく、物にらちのあきたるやうに見ゆれども、これかへりて未練なり、又損氣なり。[illegible]るべし。おのれこそそれを朝夕あきなへば、[illegible]か[illegible]いふ[illegible]侍らん[illegible]いはば、おのれが一朝[illegible]身を[illegible]年[illegible]事を[illegible]未練なり、又損氣なり。[illegible]さはなくて人のかげにて、短氣は未練、又損氣なりと[illegible]いふは、かへりて、たんきにて、未練な[illegible]此の二つの間をわきまへ侍る事はむづかしかるべし。[illegible]といへる所に韓信といへるものあり、つねにこのみて劍をよこたへ居に

りしに、其の郷の子どもくみして韓信をとらへ、さげしみかしていはるゝは、武辺だてをするなれば、何ぞ命なりとも死なんとおもはん、其のつゐでに我々をさしころすべし。又命惜しくば、我々が股くゞらるべし。」とぞのりける。其の時韓信心に、一かたなにさし殺さんとは思へども、終には身をもすて、先祖の名をもあげんと思ふ身の、かゝる小事を心にかけてはいかゞと思ひ、つひにへいきで、またぐらを潜りければ、本より燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんなれば、皆々一どきに笑ひあへて、いまでもつたなき韓信やことて、ののしりけることははかなけれ。さて韓信後に漢の高祖につかへ天下をなされし功により、楚国のあるじとなりて、其の昔我をなぶりし子共を、皆我がさぶらひとなしていはく、むかし其方達の我にはぢをあたへ給ふときに、もし、我しなば何とも思はれまじけれども、我心に大きなる望あれば、つらき恥をもしのびしなり。もし其の時に命をすつるものならば、死したるあとに、さして名ものこるまじきが、堪忍をしたればこそ、今楚国のあるじとはなりたることはおもしろけるとかや。其の外程嬰杵臼が事にも、かゝるためし数多し。又や其馬遷いそぐとは、孟子の、すゝむ事すみやかなるものは、しりぞく事もすみやかなり、と仰せられし類なり。又老子経に曰く、大器晩成。此の心も、大きなるうつはものは、三日や十日には出来ぬものなり。又一日に一つも二つも人のするうつはものは、其の役にたつ所もせばきとなり。又うゑ木なども正木やも

その末は、一日の内に一尺も三尺も伸ぶれども、遂に枯となりたるを見ず、久しくその末なきに、
一年に一寸づゝのびるといへども、ゆくゆくは大木ありて、挽物ともなるが如し。

三　さるをかしき人、今日貧乏神にまつりのひたるが、正しく貧乏神は、子を五人持ち給ふと聞く
たり。その名をしあれば、かたへなる人、そのかたてき神のすがたに御何なるぞと問へば、されば其の
事なり。其の神のすがたはよく人に知れたり。其の子供の名、まづ總領を耕十太郎、遊山の次郎、博奕
の三郎、酒食の四郎、貧食五郎となむなりしたり。

二　ひとの国を仁慈ぞうにといへる事あり。これふかき心のあるへき事なり。もし此の心をかへして上
に[illegible]給はゞ、[illegible]堯舜の御代となりぬべし。孟子曰く、無恒産而有恒心者、惟士為能、
若民則無恒産因無恒心。恒の産とは一ぞにもる事をいふ。此の心に[illegible]とは、[illegible]
[illegible]たる者は、たとひ身すぎなりとても、[illegible]其の心不義なる事はせぬものなれども、
世に[illegible]くして[illegible]は、[illegible]民と[illegible]、[illegible]不義をなし、[illegible]
いるといふなること、其の上には身すぎの[illegible]事あれば、[illegible]するなり。こゝに少しの
[illegible]は[illegible]、民にも商事もあるべきなれば、[illegible]
[illegible]、[illegible]にいる[illegible]、[illegible]例へば上に[illegible]

上には百両のつひえなれば、下には百両の儲けたるべきやうなれども、下には其の利は僅に百疋か十両となり、又其の十両の金の出所はといへば、民の運上の銀子にのぼり、又は百姓に賦あてゝ入り給ふまで、下のもとにあつまる銀なり。されば上なきが下なれば、下々まで奢りをこのむへ、際限なくなり行きて、分際にこゆる事にてはあるまじなる様に、公儀の御沙汰訴訟の日をいひて、わかん〳〵侍るを見て云り。此の物がたりは當時の事にあらず。

四　他人はくひよりに、親はなきよりといへる世話有り。此の事考ふべきには、他人はふるまひなどさい〳〵仕る時は、親しきこゝろにして、其のふるまひ音信など遠く時には、必ず不念比になり、又我が子には常にはのうきもなけれども、事にかなしき時には、なきよるといへることなり。此の義も大かたたゞは侍れども、此の言葉をよく味はふときに、他人とかきては、うとき人とよみ、親といふ字はしたしきとよめば、親類の親にして、おや子の義理ばかりにては侍らず。其の上君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之内皆兄弟の如くたらんといへる事もあれば、いかに他人なりとも、親しき人は親なるべし。又親子たりとも、うとき人は他人なるべし。兄弟は他人のはじまりといへる世話もよく心得、他人のはじまりにならぬやうにいたすべき事なり。兄弟は我が身をわけしものなれば、いかほどもしたしかるべきを、他人のはじまりといへるは、あしき義理のやうなれども、はじまりといふ

[illegible]

世に[illegible]、又はわづらひか憂へなどある折ふしに、たま／＼よりては親[illegible]

[illegible]

其の末は妄りに不善を大將にして、心中の王となれて、さまざまの不善口舌を出で来侍るなりとぞ申され
おしかれど亡母講法が言ひたりに、無我といふ字を、よく紙を大いにかきて、房の内にかけてかもとこに貼
りつけておき侍ると承るとかたられ侍りしを、常に亦耳にとゞめて侍りしに、此の頃古書を閲し
上下のをも學び侍るに、至人は不已といへる文字を見て、猶々亡母の昔語なつかしく思ひ侍り
き。又大學の新註には、人己合一といへる論も侍る由なり。其の外佛書に此の論あげてつくすべからず
す。彼の六波羅蜜の戒行も、無我の二字には過ぎざるなり。今世にある出家にかはる人はありと
も、此の無我の道徳にまで到る者あるべからず。されど無我の道に、大有の小有の、短有の長有
るべければ、一生無我を行ふ事こそあらざれけれ。一時に一つ無我を行ひ、又一つはならびに無我を行
ふ人は、佛の御心に近かるべし。神佛に祈りてとやかく、此の心にたがひなば、しも無我を行ひ
すとしたらむ何ならば、尾上の咎あらず、無我の見解なれば害
と思はず。されども、わが無我なりとしておそらくの心に近くは、ほむ無我ありて、とかく此の事
萬々が一つも身になる事となれば、云ふべきにあらず。

五　或人問うて曰く、「つれ〴〵草に盛親僧都の行跡、餘の人にかはりたる曲ものたりといへども、
皆人其の徳にめでて許したりといへるは、まことに上にしかるや、まことに其の理のみにして、事のいま

だ作は一種[illegible]一事[illegible]「[illegible]三昧」一事のみを[illegible]ば、今の世にも此の困難を有す
けれど[illegible]の時代[illegible]に、[illegible]に、[illegible]に[illegible]有る[illegible]しに、然れども[illegible]
賢人なれば、その[illegible]なる徳にも[illegible]すと得ざる[illegible]一冊[illegible]に、見物の諸人其の能に見入りて、
時[illegible]し[illegible]に[illegible]の事に[illegible]に[illegible]、其の道の至極に至りぬれば、人を
其の学を行ふ事を忘れて、いはゆる彼の賢愚の道徳いたしたる者においてをや。さてこの小冊にふる
と云ふ事は[illegible]あるべし「あへて其の物につひやしたる[illegible]、実に致すべく、身に
しるべ、国に盗人ありといふ内に、君子に仁義あり、時に法ありといへるは、賢者の手に出たるもの、
また[illegible]此の段も[illegible]言はゞ此の段に此の条目にして、[illegible]しき談にも
これらも此の段の心は、其の君子なるを[illegible]、又其の道にかなひて、人の適ひ
適して、[illegible]の適を適とするの[illegible]の心を[illegible]時に法ありといへる[illegible]、又[illegible]
とも其の君子にて、[illegible]其の法と仁義とあつかひに、心に思ひもよらぬ事を、身に[illegible]
と思る事にいへりとも言へれども、此の章下[illegible]本心に[illegible]説に言はく、[illegible]に[illegible]、時に
かにも法ありて君子[illegible]、はる仁義ありといへるを、下にも[illegible]見るべしとの[illegible]に、[illegible]賢人
に[illegible]ありて[illegible]聖賢は道に安んずる事[illegible]に[illegible]、[illegible]

むる事やはたす、小人は此の楽しみのみ〳〵なすにより、たゞかゝるもて身の為になることの外はれば、たからならば第一の重宝になるべきを、それをもかへりて、其の徳には目に触れもやらず、まこふうりへの行ゑにて、惜しはかれ捨ふべし。今の世に博学多才にて賢人にする道理の者も、たゞ書を求め得たるときは、其のほどにすぎてよろこび、心にいつらず、蔵書にしておくはじめにおきては、いつまでもうじ〳〵と、坐にさきにつきたる蟲のごとくにして、かねて得たりしことども皆なしおす。又たからならひつる時は、其のほどに消えてはかり、黒き表紙はれば、さきに言ひ人にことならずや。一たび書になびて見台のちりをうちはらひ、箱に納めてはなち、ちと読みはへ入れ、あるは高庫に登り、鑰もも宿なるこわきこりも引きはなちて、紐の結業を目の下に見しめたき、蔵せひ事に取り、高閣にたからかいやしみ、道をたふとむことゞくに書を読むは、さいくもよみしく思ひて得るによりて、小人の財貨の身にわざはひをまねく中立となるといへる人あまた有り。狭筆かひか耳やらん。大方の人の、此の草子をよみさこゆるにも、商家の品帰にも、小人のたからなるあつむるは、かへりて其の身にわざはひ有りといへるばかりにて、賢人なればたからをあつめても、くるしからぬやうにのみ聞えて、かねて、賢人はたからを集めぬものなり、といへる事の信らぬやうに聞きなしたるは、我がわたかたぎにや。されども草子の本意は、むかしよりかしこき人に、とめるはまれ

りといへるにて、一部の大意をくみ給ふべし。又荘子に何義あるといへるも、もとは此の諸國の神仙の事どもをしるせる書なれば、荘子の新註に此の書の字義に、あへて註言せず心をもつて見よとあり。此の書にては通じがたし。又荘子一部字心をもつて見るべしとの教へなれば、荘子を唯一人のみすれば、此の段の文章本意をとりがたし。後の段に、信をもとむる議論を思はざるといへるにても、靈劍あるべき事をなせり。又に懸河、暴題に心をすゝむるに、筈なるが、人に不思議をなせしといへるや。かねて四十に足らぬほどにて死なれしも、目出度かるべけれといへり。又一人は、無智無能なるべきものなりといふも、其の爲にする所ありていへる事なり。東坡居士は人生識字憂患始といへるも、其の心にいかほどの所ありての反說なり。世話にも此の心有り。例へばものゝ一旦の難儀となるものは、其の心よりはじまるといひ、はかり知られぬ事ども、多くあるといひ、又諺ながらはべれにも、さればよ、つれなく口にしのぶことの後、難きとぞも云ひこそ、ある人の物いふに、人にそのうれしき事をこのむに、たゞ一言の口のつゝしみをいたすといへる事にて、此口舌の弟子になりかなはぬ、言葉多く、心を静にもたず、あへて名利につとめり、静かなる暇なく、一生苦しむその應に三年といふ段の本意、又高深に一事といへるも此の論と、奥といふ事をとふ。是にて言はゞ此の段此の趣旨の生れし所、かねて荘子

の一事、天下に[illegible]はかなき[illegible]事、卒爾に言葉をもつて[illegible]べらるゝ事にあらず。いたりてむづかしき事なり。凡俗の身にしては、ゆめゆめかりにもいらふべき[illegible]此の段の心を[illegible]会得したるものならば、此の終りにいへる、[illegible]つになりし年父[illegible]問うて曰く、佛はいかなる物か候ふらん、とは[illegible]たる道に[illegible][illegible]中庸、もし佛家[illegible]をいはば、善悪不二、不思善不思悪[illegible]、有無一致の[illegible]なるべし。されども、善悪不二といへるとても、善あれば悪あり、悪あれば善あり、わづかに善といへる名のあるも、はや悪といへるものがあれば、あくのはじまる所などいひて、かの[illegible]々蕩々として、わざはひをまねくやからの、どうやらん無のけんへ[illegible]る、かき[illegible]なる義には、[illegible]侍ふす、こゝにまぎれ道具おほくあるところなり、[illegible]給ふべし。善は善、悪は悪と、さてかりと事の上に立ちて、さて其の上に、不思善不思悪の道理の[illegible]下しかたき所有りて、又々理いいちじるき所は、世話にいへる愚癡またき人といふ輩、律儀なる所あるべき事ならん。されども其の理は、只今は[illegible]人も多く有りなどしては、中々さわがしくしてのべがたし。もし此の事を心置に開かんとおぼしめし給はりて、すこしも悪意地なきならば、わがひが心にまかせて、凡きうつはものにけたのふたなれども、可不可一條抄といへる、かんなかき侍りたるものを御見にいれ、[illegible]もおかな

能合ふゝの、借るべし。又、申すといふも、別に秘所もなき事を、ふかからせんといふにもあらず、なほ其ことに常ばかりのものなり、又申すには、ゐのゝことふらはざりし。たゞわれ／＼、道に叶ふやうなる人を武者といひたり。されば道にこゝろざし、この宗旨をばとりはも遊ばせるといへるなり。昔し此の心を得し徒、聞たる人あれば、日々に日本國中の神々を勧請いたし申すとも、人敢て、座敷しきともいふべからず、一文不通なりとも、文盲なりともいふべからず、天をかけりたりとも、通力ありともいふべからず、一時がうちに萬千をつゞけたりとも、あこりともいふべからず、あながちにしのつも、無禮ともいふべからず、大ごゑをあげ元日に泣きさけぶとも、いよ／＼しきと鄰里よりきいてす、らず、高声の誰を辞したりとも、賢なりともいふべからず、貪泉をのむるとも、むさぼりともいふべからず、其他とにすゝむにかゝはらず、ましてこれらぞ、からだし、分に過ぎたるいのすこし、はづかしや／＼、あなかしこ／＼

六、其の道にあれぬ人の、物をば知りけと、かたはしいふまき事はなし、又我々が身の程を、かんつ対人のまぐをさまさるゝ事こそはづかしけれ。さる人學問のきようなる人をほめんとて、さんじとさまほしく高作者のこらずたてまこすかんせに向ひて、其の高師をひらくいかなど譽めなし、むかしの論師の書とも、たてまこと文字に讀み書物をよまれたらん、たまたま詩文などに並立して、申すやうな

る事あれども、押しなべての事につきて、其の義理をよくみるを褒美して、器械に理を云ふは、たてこまかにこさまにふむといへるを、下もちやつりていふと見えたり。又医術につきても、この里の御之門は竹輔が大谷人にして、九人や六人によませて、一どきに別して、高いからとしらるほど、神のやうにいはなせしも、これもひが事なり。やつがれ若年のをりふし、吉田休庵老人がとほきをきゝいて、九々の一句をもならひ侍りての物語に、世間にいへる者のはなし仕出し、我等體に此の事あることくいへども、又道の至極に至りては五人六人に、同音にいひいでてもつもる算ありやと問ひ侍りしに、休庵のいへらく、たゞ算は遅きもくるしからず、かんじんにこゝろがけ目なきを尊み申すなり。はやきこん曲らしき算は、吉田の實義にあらずとことわられし。これ、天下に名を得し、道の主となり侍るなれと、いと有難く思ひ侍りし。又出家法師なども、世にいさなるまゝに、人のまことによきをば神妙なる事共と、とりつけて人にほめあぐるもの有り、これはかへりて人に、其の出家の威光をかゝげんとて下ぐるわざなり。かの苗をたすけますしものゝ、等しきにや。これはいへど、神佛の不思議をかるまじきといふには、ゆめゆめ侍らず。むかしより佛神の御事は、神明不測とて又かゝる其の不の事なり。すこしもふしぎを出し侍らず、あふぎたふとむべし。これに有りがたきは、いはゆる祇園清水北野あたりのごとし。

七　さるしれもの、人の仕合よき事を、殊のほかうらやまれ、其の人の名をつきて、我が子どもまでも其の人の子どもの名にせられければ、町中にてまぎらはしくて、をかしき事に侍りしを、かたへなる人のいはく、「其わのいかにたれどのの親をせられたりとも、すこしもあやかる縁あるべからず、却つてあしくこそ候べけれ。」故いかなれば、我が里に大きなる森有り、さるかしこき人、六月の折ふし朝がけに其の森の、にしばらにすゞみゐて、やう／＼四つ過ぎにかへられければ、又かたへなる愚かなる人のいはく、「今日は殊のほかのあつさにて、誰もたへがたきに、其方はあやかりたき御はふしぎなり」ことほめしに、其の人の曰く、「其の森のにしばらに今まですゞみ侍る」と語られければ、其の聞きし人、よき分別なりと思ひて、ひるすぎより森のにしばらへまかり出で、すゞみ侍れども、涼しき事はさてなき、西ふぞの日にさへられ、返りてくわくらんを仕り出し、長きわづらひとなり侍りしなり。是れ夏日には森のかけにすゞむ事のすゞしき事を、見ならへども、其の日かけに朝暮のある事をしらざる人なり。」とかたられ侍りしは、ときにとりての宜しきたとへなりとて、いと興にいり侍りき。

八「庄吉庄介同じく手をやぶりて、抱円子にくすりを求め侍りしに、抱円子曰く、「煩惱なき(?)に、問ひ合せて聞くに、手をやぶりたることといへば、庄吉が曰く、『佛をさへおがみあやまりたるに

し、正介がいはく、鳥窩をつくり得るよりは、我やまうたるにはしかじと。抱臼子聞人にくすのをあらはして、南へつて後、天にあふいで長くためいきつきて、物あんじすがたなり。抱臼子が亡妻のいひしは、子なにをか案ずるや。抱臼子かうべをふりていはく、妻の曰く、子なんぞ言葉にきはまりたる。其の時抱臼子闕唯やのみて嘆じて曰く、嗚呼汝がしる所にあらず。昔正介同じく手を傷めて、しかも手やつかし術は善悪にあらずや。妻の曰く、しかなくしにいひなみあへる、世をわたるたつきは同じ心にや。抱臼子又こたへずして、かうべをふりて色をおこす。妻の曰く、さればこそ我がいへる事のあやまれるか。子が不豫の色あるは。抱臼子が曰く、しかればあらず、なんぞさのみいやしき。妻しかばしかありいへらく、八宗九宗其のしな〴〵にわかれて、人を謗り我をたつるも、本意はかのにふとき所へとおもむかしむるのみなるといふおもてなるや。抱臼子がいはく、可なり、もつともしかるべし。されどもたひとり出で、かはる〴〵にくみて、ひさをいたゝに安き事をたのしみ、聲々に朗詠し、いひながら白みになるをもしらず。有りしむかしを思ひ出づれば、今もかれ子の袖をぬらし侍りつことかたふれつる。

九「よろづに世なれたるかほする人こそ、うたて思ふ所なくみゆれ。かりそめにいひ出せる物がたりにも、ゆふべはそこ〳〵へおしかけ、酒などたうべたりなどかしこげにいふも、いと聞きにくし。

とはいへ、[illegible]ごときの御かたの不時にきたられ侍るこそ、身にあまり[illegible]、

[illegible]おもひ[illegible]侍る。又[illegible]友のとひ[illegible]

[illegible]年もいかず侍るものなれば[illegible]人は、[illegible]にて、其の[illegible]

[illegible]我が身[illegible]人は心も[illegible]言葉のかひなき[illegible]俗[illegible]又[illegible]

世の人は、あるひは俗にちかきと、又は[illegible]足[illegible]にてはしたなきもあるぞれ侍るなど、かたへ[illegible]

ば、かたになる人、[illegible]ども[illegible]はる中には、いかにも心安[illegible]ども[illegible]

お[illegible]言葉[illegible]して、心易き[illegible]いふ[illegible]言葉の[illegible]

[illegible]心[illegible]には[illegible]日本国[illegible]馬かた、舟[illegible]

はるとも、[illegible]心[illegible]

か[illegible]ふれば、[illegible]山中[illegible]

とも[illegible]侍ることも、[illegible]とつたへ[illegible]昔より[illegible]友と[illegible]には、[illegible]人に[illegible]

皆、あるは義によつて、死をとつて人に[illegible]

は、[illegible]の傳への文にも、いまだ聞きこそ侍らね。又たまく[illegible]の[illegible]

[illegible]言葉[illegible]、其の人にいまだむかひ侍らぬさきよ

り、あらかじめ其の郷の風俗まで推しはかられ侍る。これにて思ひしりぬ。やつがれなども今すこしえらんでよろしき里にも居りなば、かくこれほどに口をしき身にてはあるまじき上、賤のなみだをこぼし侍れど、いかなる宿世にや、其のよすがもなき身なれば、力もなし。かまへてわかき衆など、かりにもあしき風になれ給ふなよ。」

十「匹如身なる遁世者のむかし物がたりに、「それがし若盛りのみぎりは、山立強盗を以て、世を渡るたづきともせしいたづらものなりしが、すこし思ひしる所ありて、かかる業をたもとに身をやつし、からかさ一本の身體になり、あめが下をさして定むる所もなく、時雨とつれて巡り侍りき。其の昔山立せし折ふし、多くの與力を催し、夏山の峯も木深きみどりのはやしの物かげに、やすらひ侍る夕まぐれに、坂の下よりひとりをの子の上り侍りしを、すはや上々の事こそ出で來れと思ひ、のこる者共にもきつとめくばせして、此の者の體を見送り侍りしに、風いとはげしくふき侍るに、すげ笠の紐をわざと結ばずして、上の方へあげたりしに、いかさまにも此の者は心得たるものなりと、與風心おかれて、口をしながら過し侍りし。」と語られける。」と、かたりあへれば、わが友正春といへる人のいへらく、「昔我等の所へ參られし田舍人、思ひよる事ありてひえの山へのぼられしに、何とかしたりけん、道にふみ迷ひて、其の所に到りぬれば、日もやう／＼暮方になり侍れども、京へかへらで叶

ひ侍る用所もあれば、日くれて待ゐしに、用心の爲にとてそのほとりのやぶに近づき、手ごろなる竹を其の長さ一間ばかりにきりて、中わきざしにて其の竹のさきによくからめつけ、長刀のやうにしなし、これやうのかたはてかへり侍りしに、家の邊ちかくはがふところとやらんいふ所に、山だち多く待ち居けれども、此の長刀をかまへし體をみて、あへて近づく山賊は一人もなかりけるとぞ語られける。すこしの心づかひにて、其のがたき難の口をのがれけるこそたゞならね。旅などするものには、此の心をもちたらん然るべきわざにぞ。

他我身のうへ第六

一　人にはゐ所有り、いふ所有り、両やうとも下知をなすと云ふこと有り、聊か細しき事に付てのみいふ事なり。いはゐ所有りといへるは、例へば或人は九十になり給ふ老人の果てられしといふ事に、ある や八十になりたる人の前にてはいふまじき事なり。あるはまだ二十年ある身は、高声嗽気して昔話 しうんも、袖をしぼるにひきかへて、まして此の物語などし出でられぬ、わが齢に合すことは かと思はしてん、これ老をやすんずる道におゐてはなし。又六十になる人とても、九十に なりし人の死を語るべし。其の故は、まだ我が齢も三十年有りと思はれて、楽しみをなすも一つ、又は養生だにすくしつかに身をもおき侍れば、長き齢も有りと思ふうちに、心のまゝにかなはれた まふ一つなり。また老人のまへにて、二十、三十にならせたるもの死にたる事はかたりいでても 然るべし。其の故は里に杖つき、くにに杖つくまでになる人は、二十ばかりの頃は、はるかに過ぎこし昔なれば、かへりて心にもかけざるべし。かねては老少不定のまかひなる事をしらしめて、念仏の一八んもつぶやかせ、又心ある身には、いとまある身となり、一大事因縁をも励ませ、花のちり、月

のかたぶくをみても、心を無何有の郷に遊ばしめん傷なればなり。此の事につきて、一つの物がたりのうへに
わたるべし。されども今の世には、年はや六十七十にもあまりたる人の死に給ふをば、あわてた
事の、又はあやかり者など、なべての人の云ひふらしたる事なれば、我ひとり侍らんこともやうな
り。其の云ひ出でる人こそつれなけれ。さはいへど生まれつきわかゝしく、年よりたる顔なきこそ、い
とにくきものなれ。しかるなどに、さればとて事にふるまひたいさあり、我が子にさへいたはりなく
思はするこそ、むくつけきわざなれ。我が國のみ斯く騒がしきかと思へば、高麗もろこしの女にても
其の中に、何のもの人は来りて騒がしきたとへには、嫁姑勃谿すとて、家の内に嫁姑の中あしく、
物の情けなきの、いたづきあまたなるやうのことにいひ傳へ侍れば、ものゝしりにも、嫁々とのゝ中は悪
しきものときこえたり。此の姑をいかなるものぞとたづね侍れば、その昔むかしより名高きもの
よめのふるびたるなり。いとをかしきわざにや。すべて嫁の心は斯くあるべきにて、又あらたの徳は、
列女傳にあまたとどまり侍るに、ことに此の頃、我が先生の女文字にや書き給へる條、これもとも尚し
見るべきなり。また潤をさすまで下知すなとといへる前々、つるのもとにて讀へせしが、あるかたの
申し侍りしが、此の野寺の小僧などく、日暮の方へ来り、さてつくゞみつかるには、うるはしき目にあひ
候ふのため、今ごろ心をなじみにけくゝみ給へと申しける、日暮其の故をとはれ、師匠に申した

候へば、かたんまじきとは存じ候へども、又かたり申さでは、中々そのことわりも聞え侍らねば、かたり申し候べし。今度それがしは寺をおひ出され侍る。咎のみならずと聞えわけても給はれかし。其のとがの一つにいはく、香盤をわりしとが。二つにいはく、持佛堂のほこりをはらひ申し候こと。三つにいはく、火事まゐらんとする折ふしに聲たてしとがより外に、ほとけも照覽あれかし、身に覺え露もなく候。」とぞ語りける。だんなのいはく、「それはみな然るべきわざにして、とがといふには侍らじ。」とて、小僧と道々師匠をそしり〳〵、山寺へぞ參られける。さて師匠のまへにゆき、今度の小僧があやまりの義、御腹立いかにもかんにんして給はるべく候。さりながら小僧がかたる三ヶ條さしてとがとも申しがたし、また別にとがも候やらんといはれければ、師匠のいはく、「これよりとがのなにかは候ふべき、まづ香盤にて六時の勤めのきざみをしり侍るが、抹香つかみくべし候。たふとみ申す持佛堂のほこりをはらひ申せと申し付け候へば、くそをはき申し候帚にてはらひ申し候一つ。四五里もへだてたる火事に、こゝもとより火出でたるごとくのゝしりたる一つ。」とかたられければ、旦那はじめは小僧がみ道理と思はれけれども、また師匠の云ひ分をきけば、其の事はひとつなれども、其の理非は天地雲泥のちがひなれば、あきれながら、やう〳〵わびごとをいたし、もとのやうに寺へ入れてぞかへられける。浮世の人の中のあしきをも、我がひいきなるかたの云ひ分ばか

りきて、すぐなる人をあしく思ひくらす有様も、みなかくの如し。あつかひなどせんものは、兩方を能くきかでは叶ひがたかるべきか。かのかどをさぐりし心、たれもあるべきわざにや。

[二] ある人のいひしは、世にかしこだてする人、すましたがほする人ばかりにくきはなし、此のたぐひの人は、上朝にありては、國の禮儀をはぶき、下民にまじはりては、それぞれの法をないがしろにする事なり。あるひは下々をまつり、佛事などの儀式等をも、何はおごり、何はつひえなどとかしこげに云ひまはさば、又十人が五人も、此のかたに心をよせ侍るこそ、いたましきわざなり。すべて神國にてつひえつひえといひもて行かば、すべて佛神のまつりも皆つひえなり。もろこしには、地に香ばなる酒をそゝぎ神をむかへ、又紙錢とてわらにてけしのを作り、まつりのそなへとなしても、其の後には、ほこにもたきあかす、道のかたはらにも捨ておくただひ、日のもとにては禁中の年中御まつり、下下僕を作々の神まつり、いづれか費えにあらざるや。又七月の玉まつりのそなへは、まつり過ぎぬれば、あるは川へながし、または、道の火とほこらかすら、猶つひえの上のつひえなり。されども其のつせ[illegible]る所詮、まつりなりはどことなり。和漢共にまつりのそなへものは、下々にくだされて、朝臣にすこしもと[illegible]の物は神にてしあるべし。神をまつるにも、唐には王族公卿士庶人にいたるまで、それぞれのまつる神と、まつり奉らぬ神とある侍れど、あしびきの大和には、上天子より

下土界一切の草木國土に至るまで、天照大神の御恵みを、かうむらぬものはなければ、すべて此の社をたふとみ祭り申す事なり。されども其の神をまつるに心持はあるべき事なり。其の心持とは、先づ我が身のほどをしりていのり侍るべきなり。もとより神は非禮をうけたまはず、からの文にも見え侍るなり。いかなるをか禮にあらぬいのりといふならば、かの季氏が泰山に旅祭せしは、一旦神をふかくいのるに似たれども、泰山のまつりは天子の御まつりなるを、季氏が臣下の身としてなしたるなれば、是れ孔子のふかくにくみ給ふ所にして、罪を聖門にうけ、そしりを後世にうくる所なり。よこしまなるまつりとは、人をのろふ類なるべし。此のやからは神のうけ給はぬばかりにはあるべからず、かへりて我が身におひかぶりなんこそかなしけれ。奢りとはいかなるをかいふべき。其のしなに當りては金銀を多くつひやすも、さしておごりとはいふべからず、たゞせまじき事をするがおごりたるべきなり。世話に、おごりては餅のかはをむくといふにても知るべし。又葬禮の儀式も、其のしな〴〵にある事なれども、かの龍をほふりならひしたぐひなれば、今さしおき侍る。されども其の心ざしに知らせんばあるべからず。むかし子游問ニ喪具一。孔子曰、稱ニ家之有亡一。子游曰、有無惡乎齊。孔子曰、有毋レ過レ禮、苟亡矣、斂ニ首足形一、人豈有レ非レ之者一哉、云々。此の心は子游、孔子に喪禮の儀式をとひ侍りしに、孔子の仰せられしは、其の家の財のあるとなきとに叶ひて宜しき程にせよと仰せ

ならはしを、[illegible]、人に貧富あればなにとしてか、其の喪禮の儀式をひとしうはか

[illegible]、孔子も仰せられしは、たとひいか程[illegible]といふとも、其の[illegible]

[illegible]又ひんなる身といへども、其の死人のかしらや足などの、[illegible]

[illegible]其の二つの心を[illegible]、たれか笑ひそし

るものあらん[illegible]人事之[illegible]、先哲の[illegible]、宜[illegible]

[illegible]是れ即ち中庸なり。むかし黔婁といふ賢人死せしを、曾西といふもの[illegible]

[illegible]其の[illegible]衾を一重[illegible]侍りしに、

[illegible]

[illegible]

[illegible]心を[illegible]

[illegible]

[illegible]右の通[illegible]

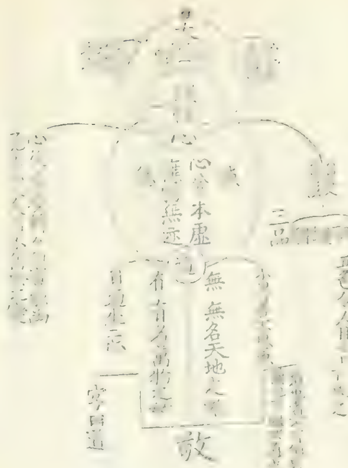
[illegible]世々の[illegible]人を[illegible]

[illegible]貧なる[illegible]人に[illegible]

其の心なくむときは、同じ佛神に請をとるにも、取やうのあるべき事なり。病者なるものをいはゞ、ものなどは、ありき願などはたてまじき事なり。さりながら今は法印・僧都のといふもの、世に徘徊し、神變を手にとる如くにいひきかせ、よわき病者にも御符などとて、水にいのりませなどすれば、かへりて病おもくなれば、きずもなき佛神に御きずを付くる者なるべし。とかく佛道も神道も、其の願や行やうゝげものよりは、信心が本たるべきものならんかし。また葬禮などは、心のいたる所大事なり。禮儀は有職者にもとひ侍れば、しれたり、しれたるにもたるものならんが、心はつねに机にもたれかゝらずんば、得がたからんかし。其ながら、もたれかゝりやうあしければ、充棟汗牛の書に眼をさらすといへども、かへりて心がひがみ侍るものなり。これ智慧いでて僞り有りと、常に我が李老君の謂ひそめ給ふ所なり。たとへば名のものゝ刀ほど、身を守るによろしきものは無けれども、ふる所あらければ、其の刀の切るゝにしたがひて、手をきるものなり。昔より儒者佛者の論綿々として、はつる事もなき事なり。それを今の世の小僧、又文字よみをするわこたちも聞き習ひて、あたまに口あればいふにはゞからず、佛者よりはまづ儒者は三世の道理なければ、天命とのみ心得て、かれて因果の理に疎きとそしり、儒者よりは佛者は、父をすて母をすてても菩提の道にならば赴けといふは、まづ五倫のわきまへざる所なりなど、其の外いろ／＼の辯をなして、そしりあふこそ曲ものなれ。若

し儒者たる儒道をもしのたて円召し候はば、儒道をひとこなしに仕るやうを、執一申すべし。其のこなしやうはまづ、孔子は三下人倫をあかし、上天理に達し、民を富貴にすくひ、其を商代にのこしてあるに、さてそのふまでは孔子の道、但のくだへ言教したれども、けふまでは何としても儒者臣三世をしらぬにまかす、儒道者になると仰せられれば、それもみな其の人の儒道をそしる事まことにすべし。そしるべき道さへ、儒はど、ご行にいて、口ばかりにては、うそとしく思ふなり。又儒者達も儒道を云ひけしたく思はれ候はば、彼の大聖釋迦のやうに、結構なる王位、又富貴をも捨つる様と思ひになり、一切業中をいむ事を、子のごとくに思ひて後に、そのふまで儒道をこれほどにひろめて候へども、なにと脩を候ても、儒道に五倫をみだる事ひとへなれば、とかく今日よりは儒道を行ふと仰せられ候はば、もし其の言ひ分もあることに候ふべけれど、それがしが存じたる様にも、儒を尊む我からはもあるやうに、云ひ聞かする人の有りしが、其の物の末ざまには、一くにあたらぬふだをおし給ふにて、口にまかせたる行ひとも思ひとられ候る。是れあたこの礼を押したるをあしきと云ふにはあらず、ただ口と身とのちがひ候をそいへるまでなり。此のついでに、病者なれる儒者に語ると語られとりてきたる、定業非業の事も仰せばかり語り申したく候へども、われらしてはよ人の智を云ずはす事なれば、不調法なる云ひやうよりは、云はぬにいふにましてんと、まつ差し置き候ふ。又今の神

代は佛法にんじゆうなれば、色々に宗旨もわかれ侍りて、自他是非の……、其の目當の……
まだあくちもきれぬ衆の、我々宗體の下げはみがき申すも……、辻小路にやすらひても、人の法に著ら



ちこ……、……法度にしたきもの
にや……それも佛法となり申すべきにや。
又何の所見もなき僧法師の、そこの神の眞體、ここの
佛かの佛とのめききも、めにしみ侍るものなり。すべ
て神は神とし、佛は佛としての信心しかるべきにや。
此の事むかし……いまむかし……侍るにまで
又……人のなき／＼に、はづかしきものとかけら
れしを、御弟子達色々に思ひ……、大
和の、引くの山のふる事をもつて、とき給へれども、
遂に其のむねにかなひ侍らざりしを、終に……人なく
上人にあけられ侍れば、よくしんなき人とこそかれしは、永々の事にこそ。

三 人の心ばしらいしの、そのなき所まち／＼にて、はかり難きとはいひながら、又其のはしにつ

きては、[illegible]やつがれ、此の草子をなかば書きつかうまつりて、其[illegible]終[illegible]いはれしは、[illegible]はよけれども、[illegible]やうの事つくるものこそ、其の身はかならず、[illegible]せらるゝ通りにて、うき世はくらす物なり」と答へしかば、[illegible]にのりて、其の事[illegible]しかば、やつがれ申し侍りしは、「其方の仰せらるゝ、[illegible]賢きに似て、身にうとき事はあらじ。」と申し侍りしかば、かの人のいはれしは、「いかなる事さへ、[illegible]なることといはれしかば、やつがれがいはく、「はや唯今の言葉、即ち一圓らちあき侍らぬ事なり。此の草子を[illegible]給はば、[illegible]人に[illegible]に、其の行ひの悪しからん事をあんじおきせんよに、しかじ今までの御身のあやまちを見[illegible]、[illegible]申[illegible]、我を折られ侍り[illegible]、[illegible]道理[illegible]くはどさかめに入るものなり、まことに下愚のうつるべか[illegible]此の[illegible]にむかし多く人のあ[illegible]、色々の物[illegible]の次に、此の沙汰などいろいろ人のかたりしに、[illegible]侍[illegible]、[illegible]其[illegible]、遂にしるし侍るべし。

四　よく物をわきまへたるものも、時によりてあやまちはまゝ有る事なり、又無法なる者も、ときにあひてはしたりがほなる事も有り。二人ともにしあつる事も、またあやまつ時もあるを、とかく物はさだまらぬものなりなど、ひたすらに思ひ取りて、はや牛も淀、遅うしも淀など、または物しりの口にも、甘草はあまからんず、苦参はにがからんなどいひて、ものを同じやうにいひ落したがる人こそ、ことやうなり。其のたがひめは道にいたりて、廣大無窮なる事なれども、まづ近づくたとへをとりていはんに、こゝに膳部にたとへんに、其の膳部我見ぬときに、いかほど無沙汰ありとも、別にいんどくはいれまじければ、見ぬがほとけなりとて、心よく味はんよりは、またよく其の膳部こしらふるをみて、なるほどきれいに萬事申し付けて、たべたるはまたはるか上なり。豆ならをたくさへよく觀念をしたる上からは、向上の工夫有り、まして少しなりとも心得て、月花をみんにおいてをや。鳥なき里にかうもりといふ事あり。何にても其の道を知らぬ所にては、ものはいひたきまゝなるものなり。たとひ其の中に少々かしこき者ありといへども、其の賢きもともにあはせて知らぬうちなれば、終にわけもなき法など信じこみて、物ぐるはしきもののあり。昔去る人田舎へ金いれを音信にせられしに、此の在所にはいまだ金色といへるものをえしらず侍りしによりて、一在所一座に集まり、此の物を何ならんと、せんぎたち／＼に及びけれども、もとより名たるべき名もしり侍らねば、たゞ恍惚とお

も語れたり。其の中にすこしかしこき人ありて、「我等こそえしらずとも、寺の長老樣は一切經をも常にごらんじ給ふと聞き侍れば、長老樣にたづね申し侍るべき。」といふに、事きはまりてはかの御寺へつかひをたつる。長老、使者に式代して、はや在所へぞ赴かる。其の席になりぬれば、一座各かうべを地につけ先づ十念など給はりて、さて其の後に件のかたいろを取りいだし、「これをみやこがたより音信に得申し侍るが、いかなる道具にてあるやらん、いまだ名をだにも知り侍らねば、貴僧にうかゞひ侍る。」と申し侍る。其の時長老二つ三つ小うなづきして、「これおの／＼のえしり給はぬこそ尤もなり。京には三十年以前より、六角堂の辻風とておそろしきから風ふきて、此の中も大きなるつりがねをも吹きちらし侍れば、洛中ともに其の風をふせぎ侍らんために、神々へ祈願などせしに、ある靈神の靈夢想に、此の頭巾をあたへ給ふ。其の名を卽ち『靈寶奇特の頭巾』とぞ申されける。其の時又里人一同にふしをがみなして貴うていはく、「一段高頭巾はさる事にて候。彼はたすれども、此の上にそのはしのやうなるもの御座候は、いかに。」とこそなじりける。又長老のいはく、「されば、こそそれほど強き風これは、此の頭巾をも取りて置く故に、その風のむかへのはしとてなり。」とぞのべられける。又かたはなる人のいはく、「何の論にてもさる事なるべけれども、此の嘴のやうなるものに、目へ入り口あき鼻はいかにぞ。」と問ひければ、長老またいはく、「これは人の物がたりをきく爲め、耳のかなめ

らんことゝいはれける。又さる賢き人のいひて、さ様なる時は両方にてあるべきことといひけるとぞ。
長老の曰く、其の事こそ、両方にありてはまされるとさは、まくらにつまし侍る様、ていかにしては
あることゝ候得ば、一在所のもの感心して、こゝろあるめでたしとて、御下になまへを何事にも、
後のこともありもてなすことゝ、重宝を箱にでも、長老ききにたゞ国の守へ上りけり。讃
のかみの広間へつゐがけ侍りけれども、国のかみは御留守にて、いまだ侍らし間に、忠高の首を持
て御覧に給はりけるに、いだれの神変奇特の頭巾に、汁をついで出でければ、一在所さわぎけし、
ともなき訴訟、しやうもなくなりて、在所へこそはもどりけれ。心のつきことはあはれなれ。一わが世
の人の分別がほする、在々所々のとしよりも、又たぶらかさるゝ道ありて、生きとさにならうべく
とする人も、かのむかしの在所へかへりなば、広間にありてかなしいかを見たることのありさまにこと
よく似るべくもあらんとぞ、むかしはかの侍るなり。

左　しめやかにふるよひの雨に、おほとの油もらめくばかりに、ひとり過ぎこし方のうれいをさへ。
つらさも、今のさびしさにとりそへ、又長き行末にかなしきまで思ひおくれば、袖は猶かわきあへる
いとまもなく、すがたなきものの事のみ、思ひがちにてかきくらしたる折ふし、嵐ならでは、露まさ
なふるのあらじと思ふに、つま戸をたゝきて、のかまし静なる閨の、あやしがりて立ち出で、うたゝそこ

と聞へぬ、あの年頃より来もこゝろに[illegible]、もとより人へ事[illegible]、そ
ほりては、門なかに[illegible]くれなゐの聲す、まづ、先づ戸さしあけは[illegible]のごもか
にいへば、いざなりていふも、[illegible]念佛の聲を[illegible]とたかくあかしける
るうちに、[illegible]におなじく、[illegible]聞ゆ、こよひ[illegible]に、何とかいふへしと、きゝ
たまはせしかば、わか子その[illegible]、坏（さかづき）とりて[illegible]下部（しもべ）らにも、た
めはせ給ひしも、其のつかへ人[illegible]ときこえける人は、身に余る
ことを[illegible]の間に[illegible]傳へたりとて[illegible]四折ふし
たれば、物語につけても[illegible]、下にくだく雲もあり、けり
月は山のはに出でんとすれば、空に[illegible]有明て[illegible]庭に[illegible]、霧に
ま隠ろ、[illegible]、そ
こはあとに[illegible]夢のごと、下と[illegible]
ひみ前にして、[illegible]聞え[illegible]、日もやうやう西になりぬれば、いざ下りなむとて
[illegible]千とせを契ると見しに、あめのした[illegible]
とまた[illegible]侍（はべ）り[illegible]二三人[illegible]夢（ゆめ）ならん、と大（おほ）きなる夢（ゆめ）といふもの[illegible]、此（こ）の

大きなるゆめを知らぬといふも、又々夢なることをしらずとて、年ごろ聞きふりにし物語どもを、洛陽散人山岡元鄰抱甕齋といへるさしかけにして、みじかき筆にまかすれば、いたへたるわらはべのいひけらく、「それそもたが身の上なるべき、したりがほいと見ぐるし。」といひたれど、本より外を求むべきにもあらねば、誰か身の上と名づけ侍るものならし。

明暦貳年さんじやうその日

他我身のうへ第六　大尾

をさな源氏

野々口立圃

をさな源氏序

ある女房の長なりし草紙をよみけるを、わらはべ共のこぞりよりて聞きゐけるが、皆そらにおぼえて、口ずさびつゝするを、何者がわざにか、数もなき事どもを書きあつめたる物なりと、これをまことと思ひて、耳にふれ口になるゝは、みだりなる事なりと思ふものから、此の名高き物語のすたれ行くを、かたのごとくつゞりて書きつゞく。古への歌人さへ大事とつたへ置かれたる儀なるを、つぼのうちに見かさへ奇ならねば、たやすくいふべきにしあらねど、片言をとりまじへて、をさな源氏と名付けたり。この趣を読み聞かするれば、いろはの片仮名にこれを見なれむ輩は、そのめにはやさしく思はれ、まなぶ心に興ありなんことのたよりにも成るべきものにこそ。

立　圃

源氏物語 巻之一二

きりつぼ　はゝ木々

うつせみ　ゆふがほ

わかむらさき　すゑつむはな

もみぢの賀　花のえん

あふひ

[illegible] ― 前坊 ― 秋好中宮

蛍兵部卿 ― [illegible]

三宮

女五宮

朱雀院

八宮

女一

女三

女四

帥宮

式部卿

兵部卿 ― 若君

常陸宮

[illegible]

六條院[illegible] —— 夕霧左大臣[illegible] —— 右衛門督
- 中納言
- 右大辨
- 中務宮　母明石
- 一品[illegible]

[illegible] —— 侍從宰相

明石中宮 —— 源宰相中將
- 頭中將
- 四位少將
- 童
- 春宮女御
- 女君五人
- 女二宮

螢兵部卿 —— 童宮
四宮 —— 同
帥宮 —— 宮御方
八宮 —— 大君
宇治のうばそくの宮
- 中宮
- 浮舟

○大臣 —— 六條御息所
源大納言　若君

○先帝 —— 式部卿宮
- 侍從
- 中將
- 民部大輔
- 藤壺女院
- 源氏宮
- 鬚黑室
- 紫上
- 冷泉院女御

式部卿宮
　├宮君
│致仕太政大臣（頭中將の事也）
│　├柏木權大納言
│　├[illegible]右大臣
│　├左衛門督
│　├[illegible]宰相
│　├頭中將
│　├藏人少將
│　├八郎君
│　└女子四人
│[illegible]
├冷泉院
│　├一宮
│　└[illegible]
攝政太政大臣（右大臣[illegible]の事也）
　├藤大納言
　├[illegible]
├一品宮
│　└女二
├[illegible]
├葵上
├前齋院
│[illegible]
├大臣─明石入道─明石上
├按察大納言
│　├雲林院律師
│　├左衛門佐（小君）
│　└桐壺更衣
│[illegible]

○きりつぼ

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、きりつぼの更衣とて、みめかたちすぐれたるまゝ、此の更衣を御寵愛あるにまかせて、世の人きりつぼのみかどと申し奉る。あまたの女御更衣たちにくみそねみて、あさゆふの御みやづかへ、何かにつけて苦しげにもてなし、わづらはしければ、日にそひて物奉らぬを、みかどいとゞ哀れと思召し、人のそしりをも憚り給はで、御遊びの折々には、まうのぼらせ給へり。もろこしにもかゝる事のおこりにこそ世もみだれけれと、みな人なげきを悲しめり。更衣の父あぜちの大納言はなく成りて、母北の方はたのもしげなき身なりしかど、このかしこき御なさけをなぐさめにて年月を過ぎしが、さきの世よりの御ちぎりや深かりけん、をのこみこうまれさせ給ふ。（これをひかる君と申すなり。源氏の君の事なり。）一の宮は右大臣の御むすめこうきでんの女御の御腹にて、まうけの君とかしづき奉れども、この二の宮の御かたちには中々ならび給ふべくもあらず。みかどいよ〳〵浅からぬ御ちぎりと思召し、猶しげくめしよせ給へば、人々のにくみもいやまさり、更衣の朝夕かよひ給ふうちはし廊、こゝかしこのみち〳〵に、ふじやうのわざをして、送り迎への人々のきぬの裾をけがし、又ある時はあとさき心をあはせて、廊下にたてこめ、人しれずわづらはせ給ふ事

もあり。宮みや三つにならせ給ふ年、更衣わづらひ給ひて、里へ出で給はんとあれど、みかどゆるさせ給はねば、更衣の母なく／＼に申しなし里におろし給へり。みかどかなしく思召し、こしかた行末の事まで契り宣へば、更衣の方、

かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり

手ぐるまのゆるさせ給ひておろし給ふ。みかどは御わかれふたゝびの御心まどひ、何事もおぼしめしわかれぬに、夜なかすぐる程にたえはて給ふ、おたぎといふ所にて煙になし奉らする。母君もおなじけぶりにと泣きこがれ給へり。みかどは一の宮を見給ふにも、わか宮を戀しとおぼしめし、命婦をつかはし給ふ。野分の風吹き物さびしき夕暮に、ゆげひの命婦をうば君へつかはさる。御

みやぎのゝ露吹きむすぶ風のおとに小萩がもとを思ひこそやれ

みやうぶ、更衣の母にあひて、

すゞ蟲のこゑのかぎりをつくしても長き夜あかずふる涙かな

いとゞしく蟲のねしげき淺ぢふに露おきそふる雲の上人

更衣の母よりも詠じ給ひてやうやく、御ぐしあげの調度に參らせられ、みやうぶとゞまりてかへりの、わか宮の御事、うば君の有樣奏して御返しをたてまつる。

あいさ風にすゞしきかげのかれしとにや小萩にさへまとひて心ほそ

贈物とさへ御らんじて、

いみじき物ともはやうなへてにても哀なるものゝもとにもしるべく

一の宮の御局は、久しくうへの御局にはれにも参り給はず、更衣のうせ給ひしころよりしと口惜しく、其

くうちうちの更衣なとしてあそび給ふ。多く人の口にはにしき思ひいふなり。みかどはうき世のいと口

思召して、

雲のうへも涙にくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふの宿

月日をへて若宮参り給ふ。あくる年一の宮とうぐうに定まり給ふに、みかどは此の二の宮をと思召さ

れけれども、世の人承引有るまじきことを、色にも出させ給はず、うち君其の比うせ給ひにけるも、

みかどあはれに過ぎにし事を思召し出で給ふ。わか宮七つになり給へば、文はじめし給ふに、御学

問はさらなり、琴笛の音までも雲居をひゞかし給へり。其の比こまうどの相人なるが、此の若宮のか

しこくかたちのきよらなるに目でて、光君とつけたてまつる。此の若宮をば源氏の姓をたまはりて、たゞ

人になし給はんとおぼしめす。年月にそへて更衣の事わすれ給はず、御心なぐさむ方もあるべきなりし

に、先帝の四の宮のかたちすぐれ給へるを、ないしの介そうし参らせたり。此の宮は昔の更衣によ

[illegible]給ひて、ひとすぢに[illegible]御心うごかせてしげくわたらせ給ふ。源氏の君は此の[illegible]君の
[illegible]ます藤つぼへも[illegible]はします。十二にならせ給へば、元服し給ひ、左大臣殿の[illegible]十六
に[illegible]給ふを、そひぶしに[illegible]給へば、此のひめ君あふひの上なり

いときなきはつもとゆひに[illegible]契る心は[illegible]むすびこめつ[illegible]

大臣
むすびつる心もふかき[illegible]紫のいろしあせずば

源氏の君は其の夜左大臣殿へおはします。此のおとゞの御子藏人の少将には、二條の右大臣殿のこうきでん
なん[illegible]の四の君をあはせ給へり。源氏の君は内裏には御心もつかず、藤つぼの御かたち[illegible]たぐひなしと
おぼして、つねにし[illegible]給ふ。又[illegible]り給へば、みすのうちにもいれ給はず。笛の
ねに[illegible]きかよひ、もろ[illegible]

[illegible]は、きよ[illegible]はと此のまき[illegible]あひだ[illegible]をかはし給ふ[illegible]し。

[illegible]る君は藤つぼに御心をさし[illegible]内にのみおはしまして、左大臣殿の御かたへは時々おはし
ま[illegible]長閑はれまなき此、[illegible]いとゞながゐし給ふ。左大臣殿の御子頭の中将藏人の少
将[illegible]、いやすくよふ[illegible]源氏の君の物忌にこもりおはします所へおはして、とも
し[illegible]よせ[illegible]をひらき見給ひて、その人へ[illegible]此の[illegible]上間

はるれど、それともあらはし給はず。「そなたにこそ見所ある女どもはおほからめ、すこし見せ給へ、さあらば此のすしも心よくひらくべき」と宣ふ。此のついでに女のしな〴〵を定め給へり。「まづ中にもかあられたる娘、ふかきまどの内にこもりゐたり。其のかたかどを聞きつたへ、心をうごかす事もあるべし。又もとのしな高く生まれぬれど、おとろへて位みじかきと、猶人のかんだちめまでなりのぼりて、家のうちふつきなるとは、いかゞはわくべき」と定めかね給ふに、むまのかみ藤式部丞まゐりて、此のしなじなをさだめあらそふ。むまのかみ云ふ。「なほ人のなりのぼりたるは、人の思ひなしかろ〴〵し。又もとはやんごとなき筋なれど、おとろへたる人は事のたらざるにつけて、わろびたる事も出でくる物なれば、いづれも中のしなといふなるべし。ずりやうの中にも富貴にして、かしづける娘どもしいやしからぬもあるべし。みやづかへに出でて、思ひかけぬさいはひにあふも多かるべし。人にしられずむぐらの宿に、こもり居たるもをかしかるべし。人かたちなきも我がものと思ひさだめんは有りがたき世なり。人はたゞしなにもよらじ、かたちをばさだかにもいはず、物まめやかにしづかなる心ざしだにあらば、ついのたのみには思ひ定むべかりける。」さておほくの物がたりに、まだわらはべの時女ばうなどの昔ものがたりを聞きて、あはれなる事かなとなみだを落しも、いま思へばかろがろしき事なり。心ざしふかき男のすこしつらき事ありとて、家を出でてにげかくれ、男の心を見

んと思ふに、げに道理なり、二人に[illegible]上下[illegible]ても、あはれとも[illegible]ぬれど、[illegible]るべし。これを聞

きて涙ながせば、[illegible]女[illegible]、「男の御心はあはれなれども、[illegible]

身を[illegible]になりて[illegible]ことよ。」といへば、[illegible]心にて、仏のみちを[illegible]

ひ[illegible]の心[illegible]、[illegible]心ざし[illegible]、[illegible]事な

どいふは、[illegible]心[illegible]、[illegible]心ある[illegible]

しの事ども[illegible]、[illegible]目[illegible]、中将[illegible]

へ[illegible]「これ[illegible]時、あはれと思ふ人[illegible]

とて、[illegible]、とかく[illegible]に、[illegible]

なやみ[illegible]、我[illegible]、心[illegible]此の[illegible]

「[illegible]心ひとつ[illegible]、我が[illegible]事[illegible]

は、世のまじはりもなりがたし、今日こそかぎりなれ。」といひて、

下[illegible]

[illegible]心[illegible]手[illegible]

此の[illegible]手に[illegible]男[illegible]」と[illegible]

たり申す。又おなじ比かよひし所あり、神無月の月おもしろき夜、内よりまかで侍るに、ある殿上人いふやう、こよひ我を待つ人ありとて、我が車にあひのりて、かの女の家のあれたるくづれより入りたり。是れは常に我がかよひし所なりけり。もとより心かはせるにや、すのこにしりかけて笛をふけば、女は内より和琴をかきあはせたり。

琴の音に聞きもえたらぬ宿なからつれなき人をひきやとめける

女
こがらしに吹きあはすめる笛の音を引きとゞむべきことの葉ぞなき

かゝる女には心おかせ給へ、あやまちして見ん人のため、名をもたてつべきものなりなどいましめたり。とうの中将の物かたりに、忍びて見そめし人ありて、おやもなく心ぼそげにて、我を打ちたのみたるに、四の君北のかたなり。よりうたてしき事をいひやる。さる事をも我はしらで、久しく音信もせざるに、稚きもの一人あるに、思ひわびてなでしこの花につけて、

女
山がつのかきほあるとも折々はあはれをかけよなでしこの露

頭中将
さきまじる花はいづれとわかねども猶とこなつにしくものぞなき

女
打ちはらふ袖に露けきとこなつにあらし吹きそふ秋もきにけり

此の女は夕がほのことなり。むすめは玉かづらなり。

其の後は跡もなくうせたり。いかにもかくて此のたびこそ尋ねんとおもへど、またこそ聞き付け侍らね。」とかたり給ふ。

と、式部が物がたりに、「ある博士のもとに学問し侍るとて、かよひし程に、はかせの女にいひよりて物をもならひ侍りしが、妻子とたのまんにはなかなかにて、心のうちはづかしく、そひとげんとも思はれず、久しく参らで物のたよりに立ちよりたれば、物ごしにあひていふやう、『月比はらのやみ重きによりて、ごくねつのさうやくをふくしておる、このにほひうせなん時立ちよりたまへ。』といふ。藤式部、

ささがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせといふがあやなさ

女 逢ふ事の夜をしへだてぬ中ならばひるまも何かまばゆからまし」

君だち、「そら言。」とて、わらひ給ふ。日のけしき猶はれず、まかで給はんとするに、内より左大臣殿へは中神ふたがりたり、いづかたへかかたがへし給はん。」とて、いよのすけが子のかみが家に、中川のわたりなるにおはしましたれば、水の心ばへ、など、をかしく、螢とびまよひ虫の音きこえけり。人々はわた殿の下よりながれたる水にのぞみてさけのむ。源氏の君はにしおもてに女房三四ゆる音をききたまふ。いよの介がわかき妻のことをはかりきこゆるを、此の子にたづねたまひて、

「あな尊と給ひたるかな」と聞ふもきこゆ。君はうちとけても寝られたまはず、とやうかうのおもひかねたまふこころみに御帳をあげ給へば、火のほのぐらく見たれかはしき物共のなかにわけ入り給ふに、よくしづまりたる人もしれぬ男君をかけて」と宣へば、女おどろきたり。中將の君といふ女房う寄りて見付け、こはあなうれしと思へど、なゐくいふ人ならばこそひきもかなぐらめ、あまたの人は知りてはあらぬ事と思ふに、おくなるおましにいだきて入らせ給へり。鳥もなき人々もおき騒げば、

「つれなきをうらみもはてぬしのゝめに取りあへぬまで驚かすらん

女は此の有様、いよのすけ國にてゆめにや見んと、そらおそろしくて、

　身のうさをなげくにあかで明くる夜はとり重ねてぞねもなかれぬる

左大臣殿へかへり給ひ、小君をめしよせ、姉の事をかたりて、女を此の子につかはし給ふ。

　見し夢をあふ夜ありやとなげくまにめさへあはでぞ比もへにける

「かかる女はみるべき人もなし」と申せしとて、返事もなし。又物いみの比おはして、こよひあはんとおはせども、中將といふ女房のつぼねにかくれゐたり。小君たづねあひてかくと申せば、なやましくてあたりに人おほく、「こしを打せたゝかせて」と申せ」といひはなち、心の中にはいかに悲しからぬやうにおぼすらんと思ふ。君は此の女の心のほどもはづかしく、うしとおぼして、

[illegible]の心をしらで[illegible]の道に[illegible]まどひ給ふことな

女もさすがにまどろまれざりけり。

数ならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらで消ゆるはゝき木

○うつせみ

其の後紀伊守県[illegible]、かくて[illegible]、いかなる折にかと待ち思召し、そのかみ国にくだり、夕やみのたど〳〵しげなるに、小君が車にのりて人しれずおはしましたり。まだ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人に[illegible]

の人の[illegible]給ふ。此の女

はなほ心なくあはれに[illegible]、たゞひとへに[illegible]衣をとりて

かへり給ふ。[illegible]の院におはして、打[illegible]給ふ[illegible]見給ひし[illegible]ことに、

うつせみの身をかへてけるこのもとに猶人がらのなつかしきかな

[illegible]の昔もうきからぬ御けしきを、ありしながらのわが身ならばと、しのびがたければ、

うつせみのはに置く露のこがくれて忍び〳〵にぬるゝ袖かな

○夕がほ

おなじ年の夏、六でうのみやす所へ忍びかよひ給ふ中やどりに、[illegible]のめのとおもくわづらひて尼に成りたるをとひより給ふ。五條なる家のかたはらには、[illegible]開けわたし、簾すゞしげなるに、[illegible]見しに、夕がほの花の咲きかゝりたるを、一ふさ折りて参れとあれば、随身入りて折る。内よりきいろなるすゞしの一重袴長く着なしたるわらは出でて、白きあふぎのこがしたるに、花をおきて参らせたり。君はこれをみて、母のもとにおはし給へば、兄のあじやり、むこの三河守、女などもつどひ居てよろこびかしこまり、あま君もおきあがり喜びてなくなかり。[illegible]ぬわかれのなくもがなと、ねんごろに語らひ給ふ。かへり出で給ふとてしそくめして、ありつる扇を御覧ずれば、歌あり、

心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたる夕がほの花

これなりつるに、「此の西なる家は何人の住むぞ。」と問ひ給へば、やどもりの男そのこ、「男はゐなかにまかりて、わかき女なんあり。」と申す。

源　寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕がほ

六條のみやす所は、いとびの袖もとかはさず、人のいはせぬかんもいとまに、時々わたり給ふ。朝まだき出で給ふに、女ばうの、中將のおもと送りて出でけるを見かへり給ひ、かうらんに暫しひきすゑて、源、

咲く花にうつるてふ名はつゝめども折らで過ぎうき今朝の朝がほ

手をとらへ給へば、いとなれて、中將、

朝霧のはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

夕がほの宿は、頭の中將の常に忘れざりし人にやと思召し、これみつにさぐらせ給ひしに、たゞならぬものから思ひなやみ、のひそみ給ひてより後、時々かよひ給ふ。八月十五夜の月、板屋のいともり、見なれ給はぬすまひに、あかつきがたとなりの家々のしづの男の口々に聞ゆ。かはり、「ほゝ」とうちかへすなるの音、唐臼の音、かたへの砧のきぬたの音、

かはりてまほらん」みたけしやうじにや、南無たうらいだうしと拝める聲を聞給ひて、かれ聞き給ひ、此の世とのみはおぼすまじきなど、それはかくぞ詠給ひて、

うばそくがおこなふ道をしるべにて来ん世もふかき契りたがふな

さきの世の契りしらるゝ身のうさに行末かねてたのみがたさよ

「いざ此のあたりちかき所にて心やすく」とて、右近といふ女ばうを召して、御車にのせ参らせたまへり。

いにしへもかくやは人のまどひけん我まだ知らぬしのゝめのみち

山のはの心もしらでゆく月はうはのそらにてかげやたえなん

なにがしの院とかや、人目もなくうとましく荒れはてて、草も木も見どころなく、池はみくさにうづもれ、みな秋の野らなる所へいざなひ給へり。

夕霧にひもとく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそ有りけれ

光ありと見し夕がほのうは露はたそがれ時のそらめなりけり

「いかなる人ぞ名のり給へ、むくつけし。」と宣へど、打ちとけぬさまなり。すだれをあげてまたふし給ふに、御まくらがみにをかしげなる女きて、此の夕がほの上をかきおこさんとすと見給ふ。物にお

そはさゝ心地してあきれ給へば、火も消えにけり。太刀を引き抜きて右近をおこし給ふに、是れもまたのしと覚えて臥したるまゝにて起きもあがらず。手をとらへつゝ給へば、山びこのこたふるまとましき御わたりに、紙そくのけしからぬ。しそくさしよせ見給へば、夢に見えつる女まゝらかみにゐて消えうせぬ「あゝ」と、あさましく騒ぎ給ひて、ひきよせ給へば、いまは絶えはてにけり。右近は恐ろしと思ふ心もうせはてて泣きまどふ。これをいたはりて「いかゞはせん」とあれば、「此の院もりに聞かせんにはびんなかるべし」とて、惟光召させ給ひて、うはむしろに押しくゝみて車にのせ、東山に送りものとこへ隠し給ふ。君は二條院にかへりたまふが、もしいかゞかへりて疑はれつゝやおはすらんふ、これはなうなうただ見んと思ひてまはしけり」手をとらへしつこれをおにさかせ給へ、いかなる世のちぎりにかと泣きまどひ給ふ。右近をもおなじ院にとしたひしを、とかくなだめして御前の院にめへしおきたまふ。御なやみになりて、世にもほかなくしての給はず、みのほどのにて都とゐる下へりぬるうち給ひ、御心地まさり給へば、これるつ川の水にて手をあらひ、清水の観音をおがみて下り給ひ、二條院にかへり給ひて「いかにこゝろなき」と右近に問ひ給へば「女は三位の中将なりしが、こゝを頭中将殿にのちのちたまひて、みとせほど通ひ給ひ、ひとり持つまいらせ給ふが、ここの北の方に知られてのち、へいと東の陰ににげかくれ給ひて、あやしきあばらやにかくれおはしたり。

君は西の京の乳母の許にありけれど、たづね給ふすべもしらせ申さず。

源　みし人の煙を雲となかむれは夕の空もむつましきかな

うつせみの君は源 わするゝやとこゝろみて、

とはぬをもなとかと問はでほどふるにいかばかりかは思ひみだるゝ

源　うつせみの世はうき物としりにしを又ことの葉にかゝる命よ

まゝむすめのかたへ、小君して、

ほのかにも軒ばの荻をむすばずは露のかごとを何にかけまし

返し　ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜にむすぼほれつゝ

夕がほのうへの四十九日、比叡山にてきやうさせ給ふ。ふたゝびかはさるゝはかなさに、

なくなくも今日は我がゆふ下ひもをいづれの世にかとけて見るべき

五てうの夕がほの宿にのこりゐたる人々、うへはいづかたにかと思へども、たづねず、うこんもその後の事をえ聞かず。

いよのすけは神無月に常陸へくだる。空蟬もくだらんにとて、いとしのびてぬさなどつかはさる。

[illegible]

過ぎにしもけふわかるゝも二みちに行くかたしらぬ秋のくれかな

○わかむらさき

[illegible]わらはやみおこりにわづらひ給ひて、北山にひじりのある所におはしたり。[illegible]

おひたたん有りかもしらぬ若草をおくらす露ぞ消えん空なき

ほの草のおひ行く末も細に向ひていと嘆かしげなる

此の僧都のかたより、源氏の君へ御使ありて、やがておはしましたりとし給ふに、ひるの程は

おもかげ心にかゝりて、尋ね給へば、「僧都のいもうとの尼君の女子なり。父は兵部卿の宮なりしが、か

たり給ひけり」と北の兵部卿は紫の上の御父なり。夜ふけて此の姫君の御ゆかしさに弁の君に語り給ひて、

此の草のゆかしき人の上を見つるより忘れがたき由の給ふに、わりなき

かくてあま君にかたりければ、あま君、

まくらゆふこよひ許りの露けさを深山のこけにくらべざらなん

稚きけどの御うしろみと、ゆくすゑの事までいひ給ふ。暁がた、懺法の聲、山おろしに瀧の音、ひゞ

きあひてめづらしく聞き給ふ。

源 ふきまよふみ山おろしに夢さめて涙もよほす瀧の音かな

さしぐみて袖ぬらしける山水にすめる心はさわぎやはする

宮人にゆきてかたらん山ざくら風よりさきに来ても見るべく

うどんげの花まちえたる心地してみ山桜に目こそうつらね

奥山の松のとぼそをまれにあけてまだ見ぬ花のかほを見るかな

あま君の御かたへ、源より、

夕まぐれほのかに花の色を見て今朝はかすみの立ちぞわづらふ

まことにや花のあたりは立ちうきとかすむる空のけしきをも見ん

御むかへの人々、君だちもあまた参れり。岩がくれのこけのうへになみゐて、かはらけ参る。頭中将ふきならし、弁の君うたひ給ふ。此の弁は頭中将の弟なり。僧都琴もて出でて、御手一つとあればかきならし。

京へかへり給ひて、又の日、

おもかげは身をはなれず山櫻心のかぎりとめてこしかど

あらし吹く尾上の櫻ちらぬまを心とめけるほどのはかなさ

二三日ありてこれみつをつかはさる。

あさか山浅くも人を思はぬになど山の井のかけはなるらん

くみそめてくやしときゝし山の井の浅きながらや影を見るべき

三四月の比より藤つぼなやみ給ふ。源は逢はんと藤つぼの中だちに、わう命婦たのみ。

見ても又あふよまれなる夢のうちにやがてまぎるゝ我が身ともがな

世がたりに人やつたへんたぐひなくうき身をさめぬ夢になしても

尼君は京へかへり給へば、源氏もかへりおはしけり。

源
いはけなきたづの一こゑ聞きしよりあしまになづむ舟ぞえならぬ

同
手につみていつしかも見ん紫のねにかよひける野べのわか草

あま君九月二十日の程うせ給ふ。姫君と少納言は京にこもりおはせるを、源氏尋ねて入給ひて、

あしわかのうらにみるめはかたくともこは立ちながらかへる波かは

めのと
よる波の心もしらでわかのうらに玉もなびかんほどぞうきたる

四十九日過ぎては、姫君はちゝ兵部卿の御かたへむかへ給はんとなり。

源しのびしのびかよひ給ふ所を、すぎがてに門たゝかせ、ともの人にうたはせ給ふ。

朝ぼらけ霧たつそらのまよひにも行き過ぎがたき妹が門かな

内よりつかひを出して、（此の女は誰ともなし）

立ちとまる霧のまがきの過ぎうくば草のとざしにさはりしもせじ

姫君父の御もとへむかへ給はぬさきに、とり給はんとて夜ふかくわたらせ給ひ、姫君をいだきおこし、御くるまにのせ給ふ。めのと少納言は夢の心地してのりたり。二条院にてわらはべども参らせて、ひめ君の御心をすかし給ふ。

源 ねはみねど哀れとぞ思ふむさしのゝ露わけわぶる草のゆかりを

紫 かこつべきゆゑを知らねばおぼつかな如何なる草のゆかりなるらん

○すゑつむ花

故ひたちの宮の御むすめ、心ぼそくてすみ給ふを、たいふの命婦源にかたりて、いざよひの月をかしき程におはしまさせて、琴のねを聞きたまふに、かきのほとりに男居たり、誰ならんとおぼしたれば頭中将なり。

頭中将 もろ共に大うち山は出でつれど入るかたみせぬいさよひの月

源 里わかぬかげをば見れど行く月のいるさの山をたれかたづぬる

ひとつ車にのりて大とのにかへり給ふ。此の姫君はあはせ給ひても、ものをいひ給はねば、

源 いくそたび君がしゞまにまけぬらん物ないひそといはぬ頼みに

姫君の御めのと子侍従とてありしが、ふと出でゝ、

かねつきてとぢめむ事はさすがにてこたへまうきぞかつはあやなき

源 いはぬをもいふにまさると知りながら押しこめたるはくるしかりけり

かくて帰り給ひ、夕つかた後朝の文つかはし給ふ。

夕霧のはるゝけしきもまだみぬにいぶせさそふる宵の雨かな

御返しえし給はねば、侍従教へて聞ゆる。

はれぬよの月待つさとを思ひやれおなじ心にながめせずとも

此の姫はゐたけ高くをせながに、御鼻はふげんぼさつののり物とおぼゆ。色白くひたひはれてしもぶくれに、鼻のさき赤く、かみは袿のすそに一尺ばかりひかれたり。ふるきのかはぎぬを着給へり。たゞむゝと打ち笑ひて、口重げなるもいとほしく、かゝる人を我ならでは誰かは見しのばんとあはれにおぼさる。

朝日さす軒の垂氷はとけながらなどかつらゝのむすぼほるらん

山里のさきにたる花の雪にうづもれたるや、随身にはらはせ給ふ。御車出づべき門の翁のえあけやらねば、むすめよりて引きたすくる。

源　ふりにけるかしらの雪をみる人も劣らずぬらすあさの袖かな

きぬあやわたなどつかはし給へば、

姫君　から衣君が心のつらければ袂はかくぞそぼちつゝのみ

あさましのくちづきやとおぼして、此の文のはしに、

なつかしき御ことばに御はこの末つ花に添へ給はれけん

くれなゐの色こそ花[illegible]にすゝめたすらくたすけ名をしたてすは

父の日記

おもひ出でてくだりつる神の衣（ころも）にかさねていとゞ見まもりましまし

昔の十日[illegible]出でて、しばし逝ける[illegible]かきて、はなにそへにそへけて、

くれなゐの花（はな）こそあやなくもにほひたる梅（うめ）の枝（え）にはなつ[illegible]けれど

○もみぢの賀　源氏十八歳

十月十日あまりの行幸には、朱雀院[illegible]給ふ。源氏の君と頭中将、青海波（は）をまひ給ふに、みる人涙（ひとなみだ）おとしけり。つぎの日源（けん）より藤（ふぢ）つぼの御（おん）かたへ、

物思（ものおも）ふに立（た）ちまふべくもあらぬ身（み）の袖（そで）うちふりし心（こゝろ）しりきや

藤つぼの御かへしに

から人の袖ふることは遠けれど立ちゐにつけてあはれとは見き

行幸（みゆき）の日（ひ）は、春宮（とうぐう）みこたちも世（よ）に残（のこ）る人（ひと）なし。かへりの船（ふね）かざり、紅葉（もみぢ）のかげに四十人（にん）のかいしろ、物（もの）の音よろこびに、青海波（せいがいは）かゝやき出（い）でたるに、かざしの紅葉（もみぢ）ちりすぎて、菊（きく）を折（を）りてさしかへ給（たま）ふ

藤（ふぢ）つぼは[illegible]皇子（こわうにん）[illegible]まうけ給ふ

年（とし）あけて紫（むらさき）の上（うへ）をさしのぞき給（たま）へば、ひゝなどもおしすゑて、三尺（じやく）のみづし、又（また）のひとつ[illegible]

もつくりあつめて、あそびゐ給へり。

藤つぼは二月十日あまりに、男みこうみ給ふ。此のみこれいぜん院なり。此の若宮は源氏の君によく似給へば、人の思ひとがめんとむつかしげなるもことわりなり。源はいまだわか宮を見給はで、

いかさまに昔むすべる契りにて此の世にかゝる中のへだてぞ

みやうぶ 見ても思ふ見ぬはたいかになげくらんこやよの人のまどふてふ闇

此のわか宮のうつくしきを源見給ひて、

よそへつゝみるに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花

藤つぼにこれを見せたりければ、

袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにも猶うとまれぬやまとなでしこ

源内侍のすけとて年五十七八なるが、あだめいたがあり、こゝろみんとてもの裾を引き給へば、あふぎをかざし見かへりたり。取りかはしてみ給へば歌あり。

君しこばたなれのこまにかりかはんさかり過ぎたる下葉なりとも

源 さゝわけば人やとがめんいつとなく駒なつくめる森のこがくれ

うんめい殿のわたりをすみありきたまへば、けんないし琵琶を引きゐたり。源はあづまやをうたひて

給へば、

（内侍）立ちぬる、人もとまるにはあらぬまでにうたてもかゝるありさまをこそうらみたく

（源）人づまはあなわづらはしあづまやのまやのあまりもなれじとぞ思ふ

頭中将は見あらはさんとて、源氏のあとをしたひて入りたまへるに、源は人来たるとおぼして、屏風のうしろにかくれ給へば、頭中将屏風をこほ／＼とたゝみよせて、太刀を引きぬき給へば、内侍かなしと思ひて手をすれば、打ちわらひ給ふ。源も出でましして、さらばともにと、中将のおびをとらへて解かせ給へり。

つゝむめる名やもりいでん引きかはしかくほころぶる中のころもに

（源）かくれなき物としる／＼夏衣きたるをうすき心とぞ見る

内侍あわてしにて、おくれとまりたるおびさしぬきなど、あしたにたてまつるとて、

（内侍）恨みてもいふかひぞなきたちかさね引きてかへりし波のなごりに

（源）あらだちし浪に心はさわがねど寄せけむ磯をいかゞうらみぬ

此の直衣の袖を頭中将より源へ奉りければ、

（源）中たえばかことやおふとあやふさにはなだの帯は取りてだに見ず

宰相中将 昔にかへり引きたられぬる事なれば[illegible]

みかど二條院へは御寵愛ことに、此の若宮をとうぐうにたて給はんとおぼすにつけても、御

人もおはせねば、[illegible]藤つぼを中宮にたて給ふ、

源 つきもせぬ心のやみにくるゝかな雲居に人を見るにつけても

○花の宴　源十九歳

きさらぎ二十日のあまり、なんでんの櫻の宴させ給ふ。中宮春宮[illegible]女御[illegible]給ふ。源氏

(　)君頭中將春鶯囀のうくわうをまひ給ふ、源の御かたちに、

大かたに花のすがたを見ましかばつゆも心のおかれましやは

かんだちめきさき春宮かへらせ給ひ、月おもしろう出たるに、源氏は藤つぼわたり忍びうかゞひ

こうきでんの細殿にたちより給へば、三の口あきたり。女御はうへの御つぼねに上り給ひて人ずく

なゝり。人はみな寢たるに、いとわかうをかしげなる聲して、おぼろ月夜に似る物ぞなきと誦して、

こなたざまにくる。ふと袖をとらへて、

ふかき夜のあはれをしるも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

「名のりし給へ、いかでやみなん。」と宣へば、

うき身世にやがてきえなば尋ねても草の原をばとはじとや思ふ

いづれぞと露のやどりをわかむまに小笹が原に風もこそふけ

人々起き騒げば、扇ばかりをしるしにとりかはして出で給ふ。彼の扇は櫻の三重がさねにて、かすめる月をかきて水にうつしたるなり。

源 世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへて

三月二十日藤の宴に、櫻二木おくれたるいと面白きに、源氏おはしよりたれば、

右 我が宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

こゝまでかの女と二重はかはします。戸ぐちに源より給ひて、おぼろの手をとらへて、

あづさ弓いるさの山にまどふかなほの見し月の影や見ゆると

返し 心入るかたならませば弓はりの月なき空にまよはましやは

○あふひ 源二十一より二十二歳

かくて帝の御世、朱雀院にかはり、春宮の御うしろみは、源氏にさだめつけ給ふ。

かものいつきの宮の御禊の日、かのみやすどころも車をだまして、下がさねうへのほかと、所くるしき

下なれど、いでたちて源氏のおほくしにおはし給ふなり。一條の大路はところせきまでに物見給ふ。七

との〻君はなやましける。

遠き國々のめづらしき山踏までも、ひこを引きつれ見ける事とて、にはかに日六日に出で給へば、車共のひしと立ちわたり、あふひの上の御車もたて所なくて、さしはさむべき隙もなき中に、あじろ車のすこしなれたるよしありげなるふたつあり。是れはいせの御母、六條のみやす所のしのびて出で給へるなりけり、口こはく手もふれさせねば、あふひの上の人々、さはいはせそとて、其の車どもを押しのけて御車をたてつゞけたれば、人だまひの奥に押しやられて物も見えず、しぢなども押し折られて、人わるく、なにしに來つらんとくやしくて、かへらんとし給へど、通り出でん道もなくて、御息所、

影をのみみたらし川のつれなきに身のうき程ぞいとゞしらるゝ

まつりの日は大殿上の御棧敷に、もの見にいでこそ給はず。（あふひの上の事なり。）

むらさきの上の御ぐしすゞしげに見ゆるをかきなでゝ、今日はよき日なりとて、御ぐしそぎ給ふ。

源

はかりなきちひろのそこのみるふさのおひ行く末は我のみぞ見ん

紫の上

千尋ともいかでかしらん定めなきみちひるしほののどけからぬに

源は、紫の上とひとつ車にてかものまつり見たまふ。かんだちめの車おほき中に、女車より扇さし出でてまねく。いかなるすきものぞと御車よせ給へれば、源内侍なり。（年五十七八の女ばうなり。）

内侍 はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちける

源 かざしける心ぞあだにおもほゆる八十うぢ人になべてあふひを

くやしくぞかざしけるかな名のみして人のためなる草葉ばかりを

あふひの上は御なやみなやみて、心ぐるしうおぼして、御修法おこなはせ給ふに、物のけいきりやうなどいふものさま〴〵名のりする中に、人にうつることもなく[illegible]時はなれず、[illegible]物ひとつ有り[illegible]御なやみを見すてがたく思して、源より六條のみやす所へ御おとづれも[illegible]なれば、返事に、

袖ぬるゝ戀ぢとかつは知りながらおりたつ田ごのみづからぞうき

源 あさみにや人はおりたつ我がかたは身もそぼつまで深き戀ぢを

[illegible]、[illegible]に、

なげきわび空にみだるゝわが玉をむすびとゞめよ下かひのつま

是れはをんりやうのよめる歌なり。

すこししづまり給へば、大宮御ゆなど參らせ給ひ、かきおこされてうまれ給ふ。（此の御子夕[illegible]なり。）みやす所はうつゝなく思へば、御ぞにけしの香しみかへり、あらへど〳〵此の香うせざれば、我ながらうとましくおぼさる[illegible]人の[illegible]の内人[illegible]なるに、にはかに胸せきあげて、程なくたえ入り給ふ。二日三日見給へど

かはる験もなければ、鳥邊野に送りたてまつるを、源、

のほりぬる煙はそれとわかねともなへて雲居のあはれなるかな

にび色の御ぞたてまつるも夢の心地して、源、

かぎりあればうすゞみ衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける

みやす所より源へ菊の花につけて、

人の世を哀れと聞くも露けきにおくるゝ袖を思ひこそやれ

源 とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらんほどぞはかなき

頭中将 雨となりしぐるゝ空のうき雲をいづれのかたとわきてながめん

源 見し人の雨となりにし雲居さへいとゞしぐれにかきくらすころ

わか君の事を大みやへ、源より、

草がれのまがきに残るなでしこをわかれし秋のかたみとぞ見る

大宮 今も見て中々袖をくたすかなかきほあれにし大和なでしこ

源よりあさがほのさいゐんの御かたへ、

わきて此のくれこそ袖は露けけれ物思ふ秋はあまたへぬれど

[illegible]

ふるき枕ふるき衾たれとともにかと、源、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あまた年けふあらためし色衣きては涙のふる心地する

あたらしき年ともいはずふる物はふりぬる人の涙なりけり

源氏物語 巻之三四

さかき　　花ちる里
須磨　　あかし
みをつくし　　よもぎふ
せき屋　　ゑあはせ
まつ風　　うす雲
あさがほ　　をとめ

〇二條太政大臣
├藤大納言
├四位少將
└左中辨

〇常陸宮
├阿闍梨
└蓬生君
　末つむ花なり

〇三位中將　夕顔上
└宰相　宰相君

弘徽殿太后
─帥宮北方
─致仕大臣室
─五君
─朧月夜尚侍

○伊與介─
─紀伊守
─藏人右近將監
─藏人少將妻

○參議藤原惟光─
─山阿闍梨
─少將命婦
─三河守妻
─典侍
─兵衞尉

齋宮は前坊の御むすめなり。御母は六條の御息所、あふひの巻に齋宮にたち、みをつくしにおり給ひ、繪合に入内、梅つぼと申すなり。少女に中宮、御法に秋好中宮

○さか木 [illegible]

齋宮の御くだりちかうなりゆくまゝに、[illegible]

[illegible]

びかふ[illegible]。野の宮には九月七日ばかり[illegible]ずまたせ給ふ。秋の花おとろへあさぢが原もかれがれなる蟲の音に、松風すごく物のねもたえだえに聞ゆ。物はかなげなる小柴垣、くろ木のとりゐいとかりそめなる[illegible]はるる色を。」とあれ

と、御息所、

神がきはしるしの杉もなきものを何にまがへて折れるさかきぞ

源

少女子があたりと思へば榊葉のかをなつかしみとめてこそ折れ

おぼしいでしこゝらの事を御かたらひに聞えかはし給ふ。

暁のわかれはいつも露けきをこは世にしらぬ秋の空かな

みやす所

大かたの秋の別れもかなしきになくねなそへそ野邊のまつ虫

斎宮はわかき御心に、はゝみやす所の御くだり定まり給ふをうれしとおぼす。源、

やしまもるくにつみかみも心あらばあかぬ別れの中をことわれ

さいぐうの御返しは、女別当かきてつかはす。

くにつ神そらにことわる中ならばなほざりごとをまづやたゞさん

みやす所は十六歳にて宮に参り給ひ、はたちにて遅れ、三十にてけふ九重を見給ふ。

そのかみを今日はかけじとしのぶれど心のうちに物ぞかなしき

さいぐうは十四にて御かたちいとうつくしければ、みかど御心うごき給へり。

ふりすてて今日は行くともすゞか川やそせの波に袖はぬれじや

心からかた〴〵袖をぬらすかなあくと敎ふるこゑにつけても

なけきつゝ我が世はかくてすぐせとやむねのあくべき時ぞともなく

こゝにも、紫の上の事心にかゝりて、

淺ぢふの露のやどりに君を置きてよもの嵐ぞしづ心なき

紫の上

風ふけばまづぞみだるゝ色かはるあさぢが露にかゝるさゝがに

賀茂のいつきゐんへも程ちかければ、

かけまくもかしこけれどもそのかみの秋おもほゆるゆふだすきかな

齋院

そのかみやいかゞは有りしゆふだすき心にかけてしのぶらんゆゑ

中宮に參り給へば、中宮、

九重に霧やへだつる雲のうへの中をはるかに思ひやるかな

源

月影は見しよの秋にかはらぬをへだつる霧のつらくも有るかな

おぼろの御かたより

こがらしの吹くにつけつゝ待ちしまにおぼつかなさの比もへにけり

源氏

あひみずて忍ぶる比の涙をもなべての秋のしぐれとやみる

霜月のいたる比、きりつぼのみかどの御忌日なり。雪いたうふりたり。源より中宮へ、

わかれにしけふはくれどもなき人に行きあふほどをいつとたのまん

中宮

ながらふる程はうけれど行きめぐり今日はそのよにあふ心ちして

十二月十日あまり、中宮の御八講なり、まことの極楽思ひやらるゝ。[illegible]さま〴〵の奉物さゝげ給ふ。はての日はわが中宮御事に結縁にて世を背き給ふに、人々おぼえけり。

月のすむ雲居をかけて[illegible]此の世のやみに猶[illegible]

大かたのうきにつけてはいとへどもいつか此の世をそむきはつべき

年かはりぬれば内わたりの花やかなる。中宮は御堂の内の御[illegible]六所にわたらせ給ひて、御[illegible]こなひをさせ給ふ。[illegible]入道殿も[illegible]給ひて、

ながめかるあまのすみかとみるからに先づしほたるゝ[illegible]ら島

中宮
ありし世のなごりだになきうら島に立ちよる波のめづらしきかな

夏の[illegible]比、中[illegible][illegible]しのもとのさうび[illegible]けしきばかり咲きて、[illegible]の花[illegible]中宮の御[illegible]八九[illegible]にて、[illegible]高砂[illegible][illegible]中宮[illegible]

[illegible]初花に[illegible]

[illegible]

[illegible]いしのかんの[illegible]、[illegible]人しう[illegible]顔[illegible]、[illegible]ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

〇花ちる里　第十一回

そのつぼの女御麗景殿は宮たちもおはさず、院かくれ給ひて後は、源にもてかくされて過し給ふ。此のいもうとの三の君、花ちる里なり。源かよひ給ひし。五月雨の空めづらしく晴れたるにわたり給ふ、みちの程中川のわたりを過ぎ給ふに、小家にあるさまよき木立、…源、…

源
をちかへりえぞ忍ばれぬ時鳥ほのかたらひし宿のかきねに

返し
時鳥かたらふ聲はそれなれどあなおぼつかな五月雨の空

此の小家は源のあひ給ひし人と見えたれど、誰ともなし。

三の宮は物しづかにおはします。まづ女御の御かたに、昔物がたりなど聞え給ふ、二十日の月さし出づるほどに、郭公ありつるかきねのにや、おなじ聲になく、

源
たちばなの香をなつかしみ郭公花ちる里をたづねてぞとふ

女御
人めなくあれたる宿はたちばなの花こそ軒のつまと成りけれ

□すま　第二十五歳三月より廿六の年まで

源氏の大将は、藤つぼの中宮、おほかたの内侍のかみの事につけて、世の中わづらはしけれど、いづくへもおもむかれんとおぼす。須磨は里はなれ物すごくて、あまの家だにまれなりと聞き給へど、人しげき所は身のためやすからんとおぼす。紫の上の思ひなげき給へらん、心ぐるし、又引具してのかんも思ひのつきなるべし。夜にまぎれ大殿にわたらせ給ひて、若君にすゑてかなしと見給ふ。中納言の君を人しれず哀れとおぼして、その夜はとまり給ふ。（女房うちなる大殿の思ひ人の物なり）へ、紫の上の事をおぼし掛けて、涙、

とりべ山もえし煙もまがふやと海人のしほやくうらみにぞ行く

なき人の別れやいとゞへだつらん煙となりし雲居ならでは

二条院にかへり給へば、紫の上は鏡台にむかひゐにします。御覧じたちより給ひて、

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡のかげははなれじ

別れてもかげだにとまる物ならば鏡をみてもなぐさめてまし

月影のやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光を

行きめぐりつひにすむべき月かげのしばしくもらん空なながめそ

須磨へは文集など入れたるはこ、琴ひとつもたせ給ふ。べいしのかゞみのもとに、硯、

あふせなき涙の川にしづみしや流るゝみをのはじめなりけん

返し

なみだ川うかぶみなわも消えぬべし流れて後の世をまたずて

藤つぼの入道の宮に参り給へば、中宮、

見しはなくあるはかなしき世のはてを背きしかひもなくなくぞふる

源

別れしにかなしき事はつきにしを又ぞこの世のうさはまされる

月まちて出で給ふ、御ともに七八人なり、馬にておはする。きのかみが弟うこんのぞう御馬の口とりて、

引きつれてあふひかざししそのかみを思へばつらし神のみづがき

源

浮世をば今ぞわかるゝとゞまらん名をばたゞすの神にまかせて

故院の御はかに参り給ひて、

なきかげやいかゞみるらんよそへつゝ詠むる月も雲がくれぬる

とうぐうにも御せうそこ聞え給ふ。

いつかまた春のみやこの花をみん時うしなへる山がつにして

御返しはれいの命婦、

咲きてとくちるはうけれど行く春は花の都に立かへりみよ

むらさきの上へ、源より、

いける世の別れをしらで契りつゝ命を人にかぎりけるかな

をしからぬ命にかへてめのまへに別れをしばしとゞめてしかな

[illegible]給て、追風を[illegible]彼の浦に[illegible]給ふ、源、

から國に名を殘しける人よりも行方しられぬ家ゐをやせん

古郷をみねの霞はへだつれどながむる空に同じ雲居か

行平の中納言のもし[illegible]

京へ人出したて給ふ[illegible]、入道の宮へ、

松島のあまのとまやもいかならん須磨の浦人しほたるゝころ

[illegible]かんの君の御もとに、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩やくあまやいかゞ思はん

入道の宮かへし

しほたるゝことをやくにて松島に年ふるあまも歎きをぞつむ

[illegible]

かんの君
浦にたくあまだにつゝむ戀なればくゆる煙よゆくかたぞなき

紫の上よりとのゐ物おくらせ給ふ。

うら人のしほくむ袖にくらべ見よ浪路へだつるよるの衣を

伊勢へ御使あれば、みやす所、

うきめかるいせをのあまを思ひやれ藻しほたるてふすまの浦にて

同
いせ島やしほひのかたにあさりてもいふかひなきは我が身なりけり

源氏
いせ人の波のうへこぐ舟にもうきめはからで乗らましものを

同
あまがつむなげきの中にしほたれていつまですまの浦にながめん

花ちる里
あれまさる軒のしのぶをながめつゝしげくも露のかゝる袖かな

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、せき吹きこゆるといひけん浦なみ、よる／＼はきこえて、又なくあはれなる物は、かゝる所の秋なりけり。琴をすこしかきならして、

戀ひわびてなくねにまがふうら波は思ふかたより風やふくらん

からのあやなどに、さま〴〵の繪などをかき給ふ。

はこゝに[illegible]しき人のつらなれや旅の空[illegible]のかへしす
[illegible]
心あらは[illegible]
[illegible]
大方の春の霞をへだつる[illegible]出でて、
[illegible]
[illegible]
其の北つくしに[illegible]
[illegible]の琴の[illegible]のこに、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人
琴を[illegible]

[illegible]

年かへりてわか木のさくら咲きそめたるに、

[illegible]

御おくりにくろ馬たてまつり給ふ。

[illegible]悲しうながめくらし給ふ。彌生にはみの日のはらへし給はんとて海邊に出で給ふ。[illegible]

[illegible]舟にことごとしき人がたのせてながすを見給ふ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○あかし　源二十六歳三月より二十七歳の秋まで

[illegible]

[illegible]

浦風やいかにふくらん思ひやる袖うちぬらしなみまなきころ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しあけてながめおはします。

海にます神のたすけにかゝらずば潮のやほあひにさすらへなまし

故院夢に見え給ひて、住吉の神のみちびき給ふに、はやく舟出して此の浦を去りのき給へと、御手をとらへて引き立て給ふ。御夢さめてあたりを見めぐらし給へば、人もなく月のみきら〳〵として、あかつきかたになりにけり。なぎさに小さき舟よせて、人二三人参りて、明石の浦より、さきのはりまのかみしんぼちの御むかへに参れるなり。過ぎにしついたちの夢にも、告げ知らする事ありしかど、信じがたき事と思ひしに、又十三日の夢にあらたなりければ、舟をよそひて参りたりと申す。君おぼしけるしまはすに、夢うつゝさま〴〵しづかならず、神のたすけにもあらんをそむくものならば、又いかなる憂き目をや見んとて、此の舟に召され明石にいきたまひけり。此の入道のかまへ領じたる所ひろく、いかめしき堂を建てて、朝夕おこなひすまし、高潮におぢてむすめは岡部の宿に住ませたり。昔の御けしきを見て、老もわすれてよはひのぶる心地して、喜び栄えたり。京より参りたる使者あまた身あまる物共多くたびてかへし給ふ。むらさきのうへへの御返しには、

はるかにも思ひやるかなしらざりし浦よりをちに浦づたひして

入道は年六十ばかりなるが、娘一人をもてわづらひたるよし、時々語り申す。

あはれさふくむるものの音の哀れすら澄みたくまなきの月

入れしめ給ふ琴に和せよと召出でて、かきならし給ふ。入道もびはを引きたり。さうの琴を参らせたれば、取りて少し弾きて、「これは女の引きたるにこそ」と宣へば、入道うち笑みて、

ひとりむすめは我に知りぬやう〳〵と思ひあかしの浦にびしきを

娘なりたるやうにあかしが浦のさゞなみは漂ひむすぼす

よそへの宿に戦慄をつかはしける。

昔斑のよしき消息にこがれわびゆかしき宿のこなたよりとふ

むすめはつゝましげに、心も憂しとて臥したれば、入道ぶけわびて、

立ちもらぬ同じ宿内をさうなればぼきの遣りきなを聞えわたる

ぶれてくゝめ心は隙なきを物のひやかにいかにとふ人をあ

思ふらむ心の際やや出でいかにまだ見ぬ人の聞きなやまし

「明け〳〵日頃の涙は出雲されなん。のたまひの御返しに、此の陰雨けんとす寄して、にいか聞ふと見給ふ

よそう、御はよはうまふ。今は浜邊山里なるとの暮にむし給はんと、ただ〳〵思し寄す

遊びに君に此の御にお聞え給ふ、きしすばいりなきほのたまへば、入道とさへびてたいへん夜のよす

こよひたちまち十三日の月はなやかにさし出でたるに、御馬にて出でたまふが、都のかたおぼしやられ出で
て、

秋の夜の月げの駒よ我がこふる雲居にかけれ時の間も見ん

娘を住ませたるかたは、ことにみがきて月入れたる戸口少しおしあけたり。うちやすらひ給ふにも、宮
いひけれど、うちとけぬさまなれば、さしも有るまじき人だに心づようもてなすに、今はかくまでなれた
る身なれば、あなづるにやとおぼし悩めり。近き木戸のかたはらに、さうの琴しどけなくかきよせて、
ありけるを、さへやなどいひよりて、源、

むつごとをかたりあはせん人もがなうき世の夢もなかばさむやと

明石
あけぬよにやがてまどへる心にはいづれを夢とわきてかたらん

むらさきのうへの此の事をもり聞き給はんも、心のへだて有りけるとおぼして、御文に、

しほ／＼とまづぞなかるゝかりそめのみるめはあまのすさびなれども

紫の上返し
うらなくも思ひけるかな契りしを松より波はこえじ物ぞと

みかど御目のなやみをもらせ給ふ。物心ぼそければ、七月二十日あまり、京へ帰らせ給ふべきせ
んじくだる。ついの事とはおぼししかど、又此の浦を思ひはなれん事もなげき給へり。あかしの上六

月よりくわいにんし給ふ。源、

此のたびは立わかるゝともしほやく煙はおなじかたになびかん

（明石の上）かきつめて海士のたくもの思ひにも今はかひなき恨みだにせじ

琴に又あふまでのかたみにと宣ふ。明石の上、

なほざりに頼めおくめる一ことをつきせぬねにやかけて忍ばん

（源）逢までのかたみに契る中のをの調べはことにかはらざらなん

（源）うちすてゝたつも悲しき浦波の名残いかにと思ひやるかな

（明石の上）年へつるとまやもあれてうき波の歸るかたにや身をたぐへまし

（入道）よる波にたちかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとはん

（源）かたみにぞかふべかりけるあふことの日數へだてん中のころもを

（入道）世をうみにこゝらしほじむ身となりて猶此の岸をえこそはなれね

（源）都出でし春のなげきに劣らめや年ふる浦をわかれぬる秋

君は[illegible]給ひて、二條院につき給ふ。[illegible]、この後に[illegible]、權大納言に[illegible]給ふ。内に參り給ひて御物語に夜もふけぬ。

源 わたつみにしづみうらぶれひるの子の足たゝざりし年はへにけり
御 宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこすな

あかしへ御文つかはさる。源、

なげきつゝ明石のうらに朝霧のたつやと人を思ひやるかな

つくしの五せちおもひさめぬる心地して、

すまのうらに心をよせし舟人のやがてくたせる袖をみせばや
源 かへりてはかごとやせましよせたりし名残に袖のひがたかりしを

○みをつくし　第二十　七八歳

二月に御國ゆづり給ふ。冷泉院十一歳で 春宮には、承香殿の女御の子立ち給ふ 朱雀院の御子なり。 源は内大臣になり給ふ。左大臣殿攝政し給ふ。太政大臣なり。 御子の宰相中將は權中納言なり。 此のむすめ十二にて内に參り給ひ、こうきでんと申すなり。 明石には三月十六日姫君うまれ給ふ。彼の浦にははゞきめのとも有るまじとて、京よりくだし給ふ。此のめのと若やかなれば、源たはぶれ給ひて、

兼てよりへだてぬ中とならはねど別れはをしき物にぞ有りける
打ちつけの別れを惜しむかごとにて思はんかたにしたひやはせぬ

此の乳母の事をあかしへ。源、

いつしかも袖うちかけんをとめ子が世をへてなづる岩のおひさき

あかしの上かへし ひとりしてなづるは袖の程なきにおほふ許のかげをしぞまつ

むらさきの上に此の事かたり給へば、紫の上、

思ふどちなびくかたにはあらずとも我ぞ煙にさきだちなまし

源 誰により世をうみ山に行きめぐりたえぬ涙にうきしづむ身ぞ

五月五日は姫君の五十日にあたらんとおぼし、明石へ御使有り。

うみ松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらん

あかしの上 数ならぬみ島がくれに鳴くたづをけふもいかにと問ふ人ぞなき

五月雨つれ〴〵なる比、花ちる里へわたり給へば、

くひなだにおどろかさずはいかでかは荒れたる宿に月はいれまし

源 おしなべてたゝく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそいれ

源氏願はたしに住吉へまうでたまふ。かんだちめてん上人あまた、わか君も御供したまふ。[illegible]

ふね中に[illegible]とみゆ。

住吉の松こそ物はかなしけれ神代の事をかけて思はば

あらかりし波のまよひに住吉の神をばかけて思ひわする、

其の時あかしの上は船にてまうで給へりしに、惟光すゞりをたてまつれば、源より明石の上へ、

身をつくし戀ふるしるしにこゝまでもめぐりあひけるえこそふかしな

明石の上　数ならでなにはの事もかひなきになどみをつくし思ひそめけん

露けさの昔に似たるたび衣頼みのしまの名にはかくれず

あそびの女共参るを、かんだちめ、若やかにこのましげなるは、目とめ給へり。

今は齋宮も、かはり給へば、みやす所ものぼり給ふ。俄に重くわづらひ給ひてあまになり、つひに失せ給ひにけり。齋宮は何事も覺え給はねば、源氏渡らせ給ひて、有るべき事共人々に仰せ付けさせ給ふ。雪みぞれかきたれたる日、源より齋宮へ、

ふりみだれ隙なき空になき人のあまかけるらん宿ぞかなしき

齋宮　きえがてに降るぞかなしきかきくらし我が身それともおもほえぬ世に

此の齋宮を朱雀院御けしきあれど、引きたがへて今のみかど冷泉へ参らせんと、御母入道の宮藤つぼの事なり。にかくと宣ふ。

ひたらの宮の龍胆すゝつる花は、源をたまふ。宮の内いよ／＼あれまさり、人々、なにとなりて
まつれこ玉なと形をあらはし物すこて此の古き宮にわびしくておはしまさんよりも、うつはなら給
へかもと皆行人有りけれど、故宮の御あとゝかのべ／＼さ人には渡すまじとて、御調度ともも明落か
たみとなおあ給へ、見のすんじの昔されて出でい出で給へど、茂き草ふかきを掛ける物ともし給は
ず、時節になれば馬牛放ちかふ所となれりて野わき荒ぶれし年、らうは崩れはてて、わづかに背ばかり
のこりたり。山下人しかかる時には目やうかけず、此の龍胆の根のほらからに、すわやうの北のかたに
て、かなたにくだるか、龍胆を連れてくだり、我かなしめのつかひといはせんと云へど、さらに動く
べうもあらねば、恐げなる事といひて、ものとりこ侍従をつれてくだる。いひ出さんやうもなくて、
御ぐしのまをたまりにつきれつけて、かつれにし給ひつるが、九尺あまりにてきよらなるを、侍従にし
らせ給ふとて、

たゞきとし御前と頼みし臣かつら思ひのほかにかけりたれぬる

我がおつるたゞしとものやむむ行く道にたむけの神もかけてらかほん

車がほの二腹升はかりに、源に花なる車へおはすとて此のふる宮をおほし出でて、これをつくへ入れ給

ふ。姫君は故宮の夢に見え給ふなごりかなしうて、

なき人をこふるたもとの隙なきを荒れたる軒の雫さへそふ

尋ねても我こそとはめ道もなく深きよもぎがもとの心を

藤なみの打ち過ぎがたく見えつるは松こそやどのしるしなりけれ

年をへてまつしるしなき我が宿を花のたよりに過ぎぬばかりか

後にはひがしの院にわたし給ふ。侍従が今しばし見とゞけざる心の、あさくはづかしう思へり。

○せき屋

須磨よりかへり給ひて、又の年九月つごもり、石山に参り給ふ。其の日いよのすけ常陸より上る。うち出の濱来る程に、源氏の君はあはた山越え給ふと聞きて、杉の下に車共おろしてすぐし奉る。昔の小君今は衛門の佐なるを召して、「今日のせきむかへは、え思ひすて給はじ。」と宣ひければ、

ゆくとくとせきとめがたき涙をや絶えぬしみづと人は見るらん

石山より帰らせ給ひて後、御せうそこあり。源、

わくらばに行きあふ道を頼みしも猶かひなしやしほならぬうみ

あふ坂のせきやいかなる関なればしげきなげきの中をわくらん

[illegible]

ましきや心に思え[illegible]、うつさうに[illegible]になりにけり。

○ゑあかはせ　第三十章

[illegible]

[illegible]

[illegible]

権中納言心を[illegible]三月十日の[illegible]せ、左は梅つぼ斎宮なり右はこうきでん、中納言の御むすめなり。左より平内侍のすけ、侍従のないし、少将の命婦三人出でたり。右よりは大貳の内侍の介、中将の命婦、兵衛のみやうぶ三人出でゝ、心々に争ひけり。

まづ竹取の翁にうつほのとしかげを合はせて、伊勢物語に正三位を合はせて、平の内侍のすけ、

いせの海のふかき心をたどらずはふりにしあとゝ波やけつべき

[illegible]
雲の上に思ひのぼれる心には千尋のそこもはるかにぞ見る

中宮
みるめこそうらふれぬらめ年へにしいせをのあまの名をやしづめん

院より梅壺へ御絵共遣はされける中に、斎宮のいつきへくだり給ひし日のぎしきを、きんもちに書かせて、御院、

身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちをわすれしもせず

斎宮返し
しめのうちは昔にあらぬ心ちして神代の事も今ぞ恋しき

かんの君大宮より梅つぼへも、こうきでんへも御絵共参らせらる。判者に兵部卿宮なり。源氏の御弟定めら兼ねて夜に入りぬ。彼のすまの巻出でたるに、人々涙を落し、左梅つぼの御かたかちになりにけり。二十日の月さし出でて、御琴めし出でて、和琴権中納言、兵部卿宮さうのこと、源はきん、びはは

[illegible]共は中宮[illegible]給はれ[illegible]（此の中宮は冷泉院の御母、藤つぼ入道の宮の御事なり）

[illegible]東のたいにはあかしの御かたを渡し給・

[illegible]、、たゞ[illegible]

[illegible]

[illegible]入道[illegible]なるを見たてまつらでは、いかですごさんとおぼす。入道、

行くさきをはるかに祈るわかれぢに絶えぬはおいの涙なりけり

[illegible]

[illegible]

明石君

かのきしに心よりにしあま舟の背きしかたにこぎかへるかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

尼君
身をかへて獨りかへれる山里にききしに似たる松風ぞふく
古郷に見しよの友をこひわびて囀ることを誰かわくらん

おとゞわたり給ひ若君を見給ふに、いかゞ淺くは思されん。尼君は昔中務の宮の住み給ひし事を、

住なれし人はかへりてたどれども清水ぞやどのあるじがほなる

源
いさら井ははやくのことも忘れじをもとのあるじやおもがはりせる

源はさがの御寺に渡らせ給ひ、十四日十五日つごもりの日は、おこなはるべき事定め置かせ給ふの御、

契りしにかはらぬことのしらべにて絶えぬ心のほどはしりきや

御かた
かはらじと契りしことを頼みにて松のひゞきにねをそへしかな

源は桂の院に、頭中將兵衞督參る、かゝるかくれ所見あらはされけることと、にはかに鵜がひ共召す。昨日野に止まりぬる君たちも、小鳥つけさせたる荻の枝などつとにして參れり。月さし出づる程にみな參りて、びはわごん笛ども川風にあはせて面白し。夜ふけて殿上人四五人參れり。勅使には藏人の辨、

御
月のすむ川のをちなる里なれば桂のかげはのどけかるらん

明石上
入りぬたの光にてかゝ名のみして朝ゆふ霧もはれぬ山里

源
いにしへも下にとる涙やさやけき淡路の島のあはと見し月

明石上
浮世にしはしとかげし月影のすみはつる夜そのどけかるまし

入道
雲の上のすみかをすてゝ夜半の月いづれの谷にかげかくしけん

むかしの上にかこち愛し給ふ御心なれば、明石の姫君をいだきかしづかばやと思さる。

○うす雲　源三十より三十一歳まで

明石の上は、冬の日の寒けきに、川づらの住居も心ぼそし。みぎはの氷なども見やりて、

雪ふかみみ山のみちははれずともなほふみかよへあとたえずして

雪まなき吉野の山を尋ねても心のかよふあとたえめやは

雪すこし解けて、姫君をむかへに源わたりたまふ。姫君は何心なく御車に乗らんと急ぎ給ふ。おたこ
との蔭にうつくしう、[illegible]、姫君の[illegible]あかしの上、

すゑとほき二葉の松に引きわかれいつか木だかきかげを見るべき

源
おひそめしねもふかければたけくまの松に小松のかげをならべん

あのこの[illegible]車にのりつ[illegible]姫君は[illegible]

たゞ御くだ物など参り、あたりを見めぐらして、母君の見え給はねば打ちひそみたまふもいとあし出でなどもあまたにかくしたまへり。むらさきの上なつかしき御心ざまなれば、またくすかしてつきむつびたまへり。年かへりて源大臣にわたりたまふ。姫君御さしぬきの裾にとりつき慕ひたまへば、たゞとまりて、「あす帰り来ん」とて出でたまふ。むらさきの上、

紫　舟とむるをちかた人のなくばこそ明日帰りこんせなと待ち見め

源　行きてみてあすもさねこんなかなかにをちかた人は心おくとも

其の比おほきおとゞ失せ給ふ。（あふひの上のちゝなりし）その年世中さわがしくて、雲のたゝずまひ月日星のひかり例にかはり皆おどろきあへり。入道きさいの宮春のはじめよりなやみ給ひて、三月に失せ給ふ。三十七歳

うす雲の女院と申すなり。

源　入日さすみねにたなびくうす雲は物思ふ袖に色やまがへる

御いのりの師の僧都、年七十ばかりなるが、此の入道の宮の有りつる昔の事のついでにさゝやき申されば、みかど泉冷めづらかに聞召し、おそろしうもかなしうも御心みだれさせ給へり。さらにしり給はで後の世までとがめあるべき事なり。源おとゞのたゞ人にて世につかへ給ふも、あはれにかたじけなく思しなやみ、秋のつかさめしに太政大臣に成り給ふべき事定め給ふついでに即位の事もらし

[illegible]給ふ[illegible]有るほどに[illegible]申し返し給ふ。桃園の式部卿宮（齋院の父なり）[illegible]亡せ給ひぬる由聞き給ひ、いよ〳〵さわがし。世のうしろみにはあふひの上の兄[illegible]納言に[illegible]右大将かけ給へ[illegible]、[illegible]給ひ[illegible]その後[illegible]思しける。秋の比二條院に[illegible]。[illegible]おとゞ木丁へだてて御[illegible]秋の野のさかり、昔よりとりどりに争ひ侍る。もろこしには春の花の錦にしく物なしといへり。やまとは秋のあはれ[illegible]思へる。源、

君もさはあはれ[illegible]かはせ人しれず我が身にしむる秋の夕風

源、大井へわたり給へば、あかのし上、

いさりせしかげ[illegible]られぬかゞり火は身のうき舟やしたひきにけん

源 浅からぬ下の思ひを知らねばや猶かゞり火のかげはさわげる

○あさが[illegible]　源三十一歳

あさがほの齋院は[illegible]父の御ぶくにておりゐたまふ。源大臣はおぼしそめたるくせに[illegible]かれど、齋院はとけ[illegible]御返事もし給はず、長月に桃園の宮に齋院わたり給ふを、源聞[illegible]五の宮の御見まひに[illegible]よせておはしたり。（もゝぞのの式部卿は女五宮の兄なり）しんでんのにし[illegible]がしにすみ給ふ[illegible]

おまへ今ぬやり給へば、せんざいの景色のとやかなるも昧しくて、おとゞわたり給ふことび色ごと、かけわたし、くえの木丁のすきかけたるのかしら　せんだい対面し申つたふる。

源 人しれず神のゆるしを待ちし間にこゝらつれなき世をすぐすかな

朝 なべて世の哀ればかりをとふからに誓ひし事と神やいさめん

二條院へ帰り給ひて、あさがほの色もにほひもかはれる折り給ひて、斎院へつかはさる。

見し折の露わすられぬあさがほの花のさかりは過ぎやしぬらん

朝 秋はてゝ露のまがきにむすぼほれ有るかなきかにうつるあさがほ

冬の比女五の宮へおとゞわたり給へば、西なる門あけさせ給ふに、錠の錆びつきてあかざるを、おきなの寒げなるすがたにて、こほ／＼とひきわぶるを、あはれときこしめして、

源 いつの間に蓬がもととむすぼほれ雪ふる里とあれしかきねぞ

御物語し給ふに、女五の宮は御耳もきこえず、ねぶたげにあくびし、いびきの音すれば、おとゞ出で給はんとするに、ふるめかしき人出でゝ名のる。げんないしの典侍になりて、此の宮の御弟子にてあり。今もあだめきたるこわつきにて、もみぢのがの巻に、源あひ給ひたる年よりなり。

年ふれど此の契りこそわすられね親のおやとかいひし一こと

夢さめて、[illegible]

西院へ参り給ひて、[illegible]人づてにて対面もあらざれば、源、

つれなさを昔にこりぬ心こそ人のつらきにそへてつらけれ

[illegible]

雪のふりつもりたる夕ぐれ、上、西の対にわたり給ふ。[illegible]

[illegible]に月いよ〱おもしろし。紫の上、

氷とぢ石間の水はゆきなやみ空すむ月のかげぞながるゝ

[illegible]しの鳴きければ、源、

かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれをそふる鴛鴦のうき寝か

[illegible]とおどろかし給ふに、涙流れてけり。源、

とけて寝ぬ寝覚さびしき冬の夜にむすぼほれつる夢のみじかさ

〳〵おき給ひし所々に御ずきやうせさせ給ふ。

なき人をしたふ心にまかせても影見ぬ水のせにやまどはん

をとめ　源三十二 三四まで

かものまつりの比、前齋院へ、源より、

かけきやは川瀬の波も立ちかへり君がみそぎのふぢのやつれを

返し 藤衣きしはきのふと思ふまに今日はみそぎのせにかはる世を

あふひの上の若君夕霧なり御げんぶく三條の殿にてし給ふ。四位になしてんと人みな思へるを、あさぎにてかへり給ふを、若君。大みやは淺ましと思したり。六位なり。高き家の子と生まれては、つかさくらゐ心にかなひ、世におごりぬれば、學問などに身を苦しむる事はとほく、たはぶれあそびをのみ好めり。世にある時に人皆へつらひしたがふなり。時うつりおとろふる末には、人におもなうあなどらるゝに、かゝる所なくなり行くなり。此の若君をば大がくの道にならはさんとて、ほかにせをのしませ給ふ。四五月のうちに史記などいふ文よみ給へり。

大將は内大臣になり給ふ、御子達あまたおはします。御むすめはこうきでんの女御と今一所あり。

此の姫君はくわさの君夕霧とひとつ所にて、大みやの育てたまふ、をさな心に思ふ事なきにもあらず、

日に贈り給ひは、はやうしにし三年になる更衣とかおぼすゝみ、人々見なくして、讀さ
侍くに、野のおとゞ聞きつけ給ひて、親なき身のみなれは、しにゐぐの花によすて靴なたに、大
人やの思ひも絶ふ事と聞え給ふに、それより後は、今より後に更衣の通ひも絶えず
わかるゝときは、初めなければ給ひぬれば、心とゞにとゞ中のしやうじなれども音なし。ひの指のみき
まとゝ、雲井の雁も夜の間にやとりとことも給ふ。[illegible]小竹葉やさえたる、こゝも聞く給ふことを
おのが音もえず、夕霧、

一と枝に花とばかりえん風の伝へに吹きさそふなる[illegible]は風
内の梅壺の御ほとりのこうるやうは、梅壺におもはれ給へ、苦しとのみ思す。梅つぼはみやす所なる（明石の后なり）
夕霧のへのと姫君に通ひ侍りて、更衣とものゝやうにお侍しかしこ、見ぬでまり、給へるとまる
ゝ、大宮の御かたには、夕霧に心をは給ふを辛く思ひて、物にはひかれて侍すれど、[illegible]
おと寵ある給ひ、

「こゝの間にかゝる紅の色のうみむすびしと言ひし使ひて
色よしの[illegible]うさまの陽にそゝ、は三瀬にそめけんかの[illegible]ぞ人と
雲に[illegible]

大とのよりことし五節たてまつり給ふ。そ舞姫にはこれみつがむすめ、よしきよもたてまつる。これみつがむすめのさまは、雲井の雁のほどと聞えて、やうだいよろしく見えければ、夕霧たちよりきぬの裾を引きうごかして、

　あめにますとよをかひめの宮人も我がこゝろざすしめをわするな

大とのむかしのをとめおぼし出でて、文をつかはさる。

　をとめ子も神さびぬらし天津袖ふるきよの友よはひへぬれば

　　つくしの五せち返し
　かけていへばけふの事とぞおもほゆる日影の霜の袖にとけしも

今一人のまひ姫はよしきよがむすめ、これみつがむすめはないしのすけになし給ふ。此のないしのかせうとのわらはして、夕霧文をつかはさる。

　日影にもしるかりけめやをとめ子が天のはそでにかけし心は

兄弟これを見けるを、これみつ見つけて、母にも見せて、此の君のかく思しめさば、参らせんと云ふ。

二月二十日あまりしゆじやくゐんに行幸あり。源おほきおとゞも参り給ふ。天子もおとゞも同じあかいろをき給へば、ひとつものとかゞやきて見え給ふ。かしこきがくしやう七人召して、題を給はり文つくらせらる、夕霧もつくり給へり。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]つくり給ひて、[illegible]に作庭に[illegible]給ふ。

太政大臣、六條の[illegible]の古き宮のほとりを、四町をしめてつくらせ、八月にわたり給ふ。

[illegible]秋このむ中宮の[illegible]なれば、やがておはしますべし。[illegible]

[illegible]紫の上、[illegible]かしの御方なり。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花ちる里をうつし給ふ。そこは[illegible]の上[illegible]。[illegible]情景の北にわたり給ふ。[illegible]日満[illegible]、[illegible]れ
たり給ふ。中宮のおまへの紅葉おもしろし。[illegible]のふたに花紅葉をまぜて、むらさきの上の御前へ、

こゝろから春まつ園はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ、

御返しは、此のふたに[illegible]け[illegible]敷きて、[illegible]はに心ばへして、たゞ[illegible]の[illegible]たに、

風にちるもみぢはかろし春の色をいはねの松にかけてこそ見め

みかしの上は御殿[illegible]川にわたり給ふ。

源氏物語 巻之五六

玉かづら　はつね
こてふ　ほたる
とこなつ　かゞり火
のわき　みゆき
ふぢばかま　まきばしら
むめがえ　藤のうら葉

○[illegible]仕太政大臣――男子七人
　　├[illegible]右衛門督 [illegible]
　　└[illegible]左兵衛督

[illegible]

[illegible]

藤中納言
次郎君
右兵衛督
近江君
夕霧大臣室　雲井の雁
右大辨
頭中將
眞木柱上
冷泉の女御
今上の尚侍　中の君とあり

○太宰少貳
豐後介
次郎
三郎
揚名介妻
姉御許
兵部君

○玉かつら　源三十五歳

年月へだゝりぬれど、夕がほの上の事露忘れたまはず、うこんをかたみとおぼして、たいの御方にさぶらはせたまへり。西の京にゐ給ひし姫君〔玉かつら〕四歳の時、めのとのをとこ少弐になりて、つくしへつれていきけり。船の中にてめのとむすめ二人、

舟人も誰をこふとかおほ島のうらかなしげにこゑの聞ゆる

こしかたも行方もしらぬおきに出でて哀れいづくに君をこふらん

つくし肥前にくだりても、夕がほのうへはいかゞにはおはします。夢に見えたまひてもこゝろあしければ、世になくなりたまふやと思ふ。少貮にはその二人ありしが、この姫君は京へ具して歸り、人にも知らせたてまつれといひて、姫君十ばかりのころ、少貮は失せぬ。京へのぼらんとすれど、中あしきくにの人おほくて、怖ぢはゞかりてのぼることもならで、とし月をすごす。この姫君のかたちよきことなるなか人聞きて、むかへんといふもののおほけれども、かたはにおはしませば、尼になしまゐらするといつはりいへり。少貮が子供ものこともむすめも、ところにたより出できて、京の方はとほざかるほどに、姫君二十ばかりになりたまふ。そのころ肥後の國に大夫のけんとて、年三十ばかりにて、いきほひおそろしげなるつはものあり。この下かづらのことを聞きて、たとひかたはにおはしますとも、いたゞきにすゑて、わたくしの君と思はんとねんごろにいひて、このくにに來りぬ。少貮がむすこ二郎と三郎は、身の行くすゑのたよりにもたのもしからんと思ふ。ふたごのすけといふは、親のゆゐごんにまかせ、京へのぼせたてまつらんといふ。このけんがありさまのおそろしきに、心をやぶるなどとて、みのと出でけんにあひたり。監はうゐなかものとてあなづらんにとて、和歌をよみたり。

君にもし心たがはゞまつらなる鏡の神をかけてちかはん

めのとは心あさくもおもひかへしまぬけれど、監は聞きしらず、うれしと思ふなり。

年ごろいのる心のたがはねば鏡の神をいのりしとも見ゆ

卯月二十日の程、むかへにまからんといひて、監は肥後の國へかへりけり。此の姫君を京へぐしてのぼらん事を年ごろいのるなり。もしたがひたらば、かゞみの神をつらしと思はんの心なるを、監は聞きしらぬなり。

ぶんごのすけと兵部の君といふむすめ心を合はせて、姫君をつれ参らせ、夜にまぎれはや舟にて逃げてのぼる。兵部の君、

うきしまをこぎ放れても行くかたやいづくとまりとしらずも有るかな

行くさきも見えぬ波路に舟出して風にまかする身こそうきたれ

うき事にむねのみさわぐひゞきにはひゞきのなだもさはらざりけり

九條に昔しれる人あるをたづねてゐけり。彼の國にても願をたてつれば、八幡にまうで又はつせへ参る。四日といふにつばいちといふ所につきたり。此の宿に又ふねのおとこ女、馬などひかせてつきたり。是れは昔夕がほの上につかはれし右近なり。ぶんごのすけ姫君の参り物手づから取りまかなへるを、右近ものぞきて見れば、見たるやうなるかほつきなり。三でうと云ふ女の有るをよくく見れば、是れも見しやうにて、右近もかほをさし出せば、三條は右近を見知りて、「あらうれしや、さ

「こは夕がほの上にはおはしまさずや」といふ〳〵なく〳〵右近は「姫君は」と問ふ。めのとに此の[illegible]て、[illegible]めのとの心もとなく[illegible]、おぼえず[illegible]泣きくらして右近は姫君をうつくしと見奉り、三日ここにあり、此の[illegible]君の御[illegible]と、御[illegible]参らせて、

二もとの杉のたちどを尋ねずばふる川のべに君を見ましや

玉かづら　はつせ川はやくの事は知らねども今日のあふせに身さへながれぬ

京にかへりて君源に此のよし申したれば、父おとゞにはな知らせそ、我は子らすくなければ、知らぬかたより我が子をたづね出でたりといはんと宣ふ。

源より玉かづら　知らずとも尋ねて知らむ三島江に生ふるみくりのすぢはたえじを

玉　数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとゞめけん

右近が申の五条に、よく忍びてうつし奉り給ふ。花ちる里の中にも、東の上に此の玉かづらの母なる夕顔の事語り、我が子のやうにいひかはし給ふ。玉かづら源に対面したまひて、親の顔はゆかしきものなり、[illegible]とて木丁をおしやり給へば、はづかしげに、御み給へり。母上によく似給へり、

[illegible]身はそれなれど玉かづらいかなるすぢをたづねきつらん

年の暮には人々のしやうぞくを配らせ給へり。こうばいのいともん浮きたるえびぞめのこうちぎ、今

やう色のすぐれたるをば紫の上、櫻のほそながに、つやゝかなるかい練とりそへてあかしの姫君、あさはなだのかいふの織物、こきかい練り添へて花ちる里、山ぶきのほそなが玉鬘、柳のおり物に唐草おれるをすゑつむ、てふ鳥ちがひたる白きこうちぎに、こきつやゝかなるかさねてあかしの御かた、うつせみのあま君に、あをにびのおりもの、くちなしの御ぞゆるし色そへ給ふ。いさへなはひがしの院におはして、

きてみればうらみられけりから衣かへしやりてん袖をぬらして

御返事に、やまぶきのうちぎ、袖口すゝけたるをかづけ給へり。

○初音　源三十六歳元日の事なり

六條院の内、見所おほきかた〴〵の中に、春のおまへ紫の上とりわきて、梅の香もみすの内のにほひにふかひやすらかなり。めしつかへの人々も若やかにすぐれたるは、明石の姫君の御方にえらせ給ひ、おとなびたるはよし〳〵しくしやうぞくして、歯固のいはひ餅かゞみに向ひ、千とせのかげにしるき祝ひ事して、そぼれあへるに、おとゞ源さしのぞき給へば、ふところ手引きなほし、人々たはぶれ事いひて夕つかた、源、

うす氷とけぬる池のかゞみには世にたぐひなきかげぞならべる

紫上の
くもりなき池の鏡に萬代をすむべき影ぞしるく見えける

けふは子日なりけり。姫君わたらせ給へば、わらはしもづかへなど、御前の山の小松をひきあそぶ。[illegible]上に、ひげこわりご、五えふの枝にうぐひすをつくりて、

年月を松にひかれてふる人にけふ鶯の初音聞かせよ

引きわかれ年はふれども鶯のすだちし松のねをわすれめや

宮の御かたには、むつまじき妹脊の契りばかり[illegible]かはし給ひて、[illegible]わたり給へり。明石[illegible]にわたり給へば、御さうし共取りちらし、昔の小松の返歌を見る給ひて、

めづらしや花のねぐらにこづたひて谷のふるすをとへる鶯

こよひはこなたにとまり給ふ。あけぼのの程におき出で給ひて、宮の上へ渡らせ給ふ。東の院へは日たけてわたり給ひ、[illegible]のこうばい、見はやす人もなければ、

ふる里の春のこずゑにたづね来て世の常ならぬ花を見るかな

[illegible]踏歌の[illegible]、[illegible]月十四の踏歌なり。

こてふ

やよひの二十日のころ、[illegible]の花の色鳥の聲、山のこだち、中島のわたり[illegible]

[illegible]

おいたる舟つくらせ、歌うたふの人召して、船の楽せさせ給ふ。秋このむ中宮は、かろぐしくこなたにわたらせ給ふべきならねば、女房たちのわかきに龍頭鷁首を飾り、みづら結ひたるわらはべにかぢとり棹さゝせ、南の池にこぎいださせ給ふ。女房たち、

風ふけば波の花さへ色見えてこやなにたてるやまぶきのさき

春の池やゐでの川瀬に通ふらんきしの山ぶきそこもにほへる

かめの上の山もたづねじ舟のうちにおいせぬ名をもこゝに残さん

春の日のうらゝにさして行く舟はさをのしづくも花ぞ散りける

楽人の手のかぎりつくさせ給ふ。夜にいればかゞり火ともして、みはしのもとのこけの上に楽人召して、かんだちめみこたちみな弾き物吹き物とりどりなり。宮かうぶりのことをきゝて、心がけたまふ人おほかり。

兵部卿
紫のゆゑに心をしめたれば淵に身なげん名やはをしけき

ふちに身をなげつべしやと此の春は花のあたりを立ちさらで見よ

けふは秋このむ中宮の御どきやうのはじめなり。春のお前より花たてまつりたまふ。蝶鳥にかざりわけたるわらはべ八人、しろかねの花がめに櫻をさし、こがねのかめに山吹をさして、南の山ぎはより

舟かざせて、御前うちも、ほ殿の中將とて、夕霧の事也。むらさきの上なり、

花園のこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらん

こぞのもみぢの御返し也けれど、中宮うち笑ひて御らんず。御返し、

こてふにもさそはれなまし心ありて八重山ぶきをへだてざりせば

大との〻中將は、玉かづらをいもうとゝおぼし給はで、

思ふとも君はしらじなわきかへり岩もる水にいろし見えねば

おとゞ右近をめして、此の返しはもはや人よりしてせさせよとのたまふ。おとゞは時々ある言葉をこそ給へども、玉かづらは聞きしらぬさまなり。

ませの内に根ぶかく植ゑし竹の子のおのがよゝにや生ひわかるべき

今さらにいかならむ世か若竹のおひはじめけん根をば尋ねん

たちばなのかをりし袖によそふればかはれる身ともおもほえぬかな

袖のかをよそふるからに橘の身さへ果なくなりもこそすれ

むつかしと思ひて、うつぶし給へるさまなつかしう、はだつきのこまやかに、うつくしげなるに今日思ふ事聞こえ給ふついでなる御さまおや心なり。御そでよくまぎらはし給ひて、いとゞあはれにおぼし給ふ

又の日御文に、

打とけてねも見ぬ物を若草の事ありがほにむすぼほるらん

ほたる　五月

玉かつらはおとゞの思ひの外なる御けしきに、心苦しくおぼす。しげくわたらせ給ひて、人遠きをりはけしきばみたまふ。兵部卿宮しんじちにせめ聞え給へば、御返事などし給ふ。ある夜忍びやかにおはしたるに、おとゞは木丁へだてゝかくれおはしまし、きちやうのかたびらに螢をおほく包みて、にはかにしてくふさし出したるかとあさましきに、玉かづらの扇をかざし給へる、かたはらめのうつくしきを宮御らんありて、まことの御むすめならば、かやうにはもてなし給はじとおぼす。

なく聲も聞えぬ蟲の思ひだに人の消つにはきゆるものかは

聲はせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなるらめ

此の事ゆゑに此の宮をほたる兵部卿といふなり。

五日には、むまばのおとゞに出で給ふ。ついでに玉かづらへ源わたり給へり。兵部卿宮より玉かづらへ、

けふさへや引く人もなき水隠れに生ふる菖蒲のねのみながれん

玉かづら
あふはれしいとゞ浅くも見ゆるかなあやめもわかずながれける袖の

ところ〳〵よりおとゞへくすだま参る。おとはのおとゞは、これまでのふうより見とほし催しなされ、
おとゞは花のさかりにおはせしのごとく。今はおましもことことに事なければ、花にふ甲、
その中にも下草の白菊と名にたてるみぎはのあやめはふや引きつる
ごはごもに影をならぶる君こそはいつかあやめにひきわかるべき

おとゞより玉かづらへ、
思ひあまる昔のあとをたづねれど親にそむける子ぞたぐひなき
玉かづら ふるき跡を尋ぬれどげになかりけり此世にかゝる親の心は

内のおとゞは御子たちあまたおはしける中に、彼のなでしこの行へいかにと御心にかけ思し、玉かづらは始のことこそ
の御むすめとおぼしたまへど、御子にてもとありたまへぬ人なれば、見まほしう思ひ給ふ。

○とこなつ 同六月

いと暑き日、六でうの院の東のつりどのに出でて涼み給ふ。御子息たちつどひてまめやかに侍り給ひ、西
川より奉れる鮎、ちか川のいしぶしやうのもの、御前にて調じまゐらす。大殿のきんだち、中将の御あたりを尋ねて参り給へる
のついでに、内のおとゞのおとし胤のむすめ尋ね出で給へるは、ときこえ上げ給ふ

[illegible]時、西のたい玉へ渡り給ひて、いにしへ、父大臣の、なでしこと語りたまひしをおぼし出でて、

なでしこのとこなつかしき色を見ばもとのかきねを人や尋ねん

山がつのかきほにおひしなでしこのもとの根ざしを誰かたづねん

内のおとゞに、「今姫君をいかにせん、かへしおくらんも物ぐるほし、女御に参らせていかにとし
へ給へ。」となり。此のおふみの君は五節の君とすぐ六をぞ打ちける。「女御の里におはします時は、参
りて人のさまをも見ならひ給へ」と、父大臣仰せらるれば、「嬉しき事かな、いつか参らんずる」とて、ま
づ文を参らす

草若みひたちの海のいかゞさきいかであひ見んたごのうら波

女御此の文を御らんじて、此の返しは中納言の君にかき給へとゆづり給ふ。御文のやうに、

ひたちなるするがの海のすまの浦に波たち出でよはこざきの松

○かゞり火　同秋

秋のはつ風すゞしき五日六日の夕月夜、西の對玉かづらへおとゞ源わたり給ひて、わごん教へ給ふ。か
がり火ともさせ、御琴をまくらにて、諸共にそひぶし給へり。源、

かゞり火に立そふ戀の煙こそ世にはたえせぬほのほなりけれ

行方なき空にけちてよかゞり火の便りにたぐふ煙とならば

（野　分）

中宮の御まへに秋の花をうゑさせ、これまでよりもことにせさせ給へり。例の年よりも野分あらゝかに吹きたり。おとゞは姫君のかたにおはしますほどに、夕霧は東のわた殿よりつまどのあきたるを何心なく見いれ給へるに、ひさしにゐ給へる人さるべくもあらずいとけだかくきよらなり。紫の上なりけり。春のあけぼのゝ霞のまより、かば桜の咲きみだれたる心地す。ふすま吹きかへれば、人々におさへさせ打ち笑ひ給へるけはひ、あいぎやうにほひ溢る、静かなり。おとゞのわたらせ給へるもこよなうにほひ給ふに、おとゞ西のかたよりわたり給へり。夕霧はたゞ今参れるやうにこわづくりして出で給へば、おとゞ彼のつま戸のあきたるを、夕霧や見給ひつらんと怪り給ふ。夕霧は大宮の風におぢさせ給はんとて出で給ふ。大宮うばくちよろこびわびさせ給へり。おほきなる木の枝も折れ、瓦さへ吹きちらし、はなれたる屋共はたふれたり。東の町に花ちる人もいと心細う思ひ給ひけん、人皆して所々つくろはせ、そなた行き居て給ふ。ひくれば中宮のお前には、わらはべ四五人蟲の籠して籬の露を給ふ。おとゞは中宮へわたり給ひ、それより御あかしの御前などに一つけて…たり。…ありて…給へば、あかしの上、

大かたにをぎのは過ぐる風の音もうき身一つにしむ心地して

西の對には、おそろしと思ひあかし給へるなごりに、ねすぐして今ぞ鏡見給ふ。おとゞ入り給ひて、れいのすぢにおつかしうきこえたり。玉かつらはうたてと思ひながら打ゑみ給ふ。わか露はいかで玉かつらのかたちみてしがなと、木丁引きあけ給へばよく見ゆ。おとゞと玉かつらはおやと聞ゆるなから、かくふところはなれ給はぬをあやしと見給ふ。少しそばみ給へるを引きよせ給へるに、御ぐしのなみよりてはら／＼とこぼれかゝりたるは、いとおかしきけしきながら、流石なごやかなるさまして、なれ／＼しくより給へる御けはひ、昨日見し人むらさきのうへにはおとりたれど、見るにゑまるゝさまは立ちならぶべく覺ゆ。八重山ぶきの咲きみだれたるさかりに露かゝれる夕ばえなかりし時なから、

咲きみだる風の景色にをみなへししをれしぬべき心ちこそすれ

返　下露になびかましかば女郎花あらき風にはしをれざらまし

姫君の御かたへ夕霧参り給ひて、かみゝぞの請ひて、雲井の鴈へ御文つかはし給ふ。

風さわぎ村雲迷ふゆふべにも忘るゝまなくわすられぬ君

○みゆき　源三十六七歳

しはすに大原野の行幸とて、世にのこる人なく見さわぐ。六條院の人々も見給ふ。しゆじやかより

五條の大路を西ざまに折れ給ふ。かつら川のもとまで物見のくるまひまなし。雪いさゝか散りて道の空もみえねば、あまたおほくのみだれの鷹をすゑさせ給ふ。玉かづらはみかどの麗しき御かたちを見奉りいとゞ見給ふ。ひげくろの大将などいとおびて色黒くひげがちなるを、心つきなく見給へり。おとゞ達は御ともにはあらで御みき果物など奉り給ふ。みかどよりの御使は蔵人のさゑもんのじよう、きじ一えだ、

御
雪ふかきをしほの山にたつきじの古き跡をもけふはたづねよ

源御返し
をしほ山みゆきつもれる松原に今日ばかりなるあとやなからん

おとゞより玉かづらへ、きのふ上は見奉らせ給ふや、みやづかへに出で給ふべきやとの御文なり。御返しに、

うちきらし朝ぐもりせし行幸にはさやかに空の光やは見し

源
あかねさす光は空にくもらぬをなどて行幸にめをきらしけん

玉かづらの事あらはしてんとおぼして、大宮へおとゞ渡り給ふ。あふひの上の御母なり あふひの君の事大宮もたゞ出で給へり。内のおとゞも君たちも参り給ひて、かはらけたび／＼ながれ、玉かづらのことも語り出で給へば、内のおとゞもうちなかれてしばし打ち泣きたまふ。御ともの人々何事と知らず、あやし

月十六日と定め給ふ。御こしゆひは父おとゞにとおぼして。大宮よりも玉かづらへ御使あり。御文には、

　　ふたかたにいひもて行けば玉くしげ我が身はなれぬかけごなりけり

秋このむ中宮よりも、かゝる御いそぎあけがましやうぞく、つぼにからのたき物入れて奉り給ふ。末つむ花の青にびのほそなが一かさね、おちぐりのはかま、むらさきのしらきり見ゆるあられ地の御こうちきとよきころもばこに入れて、御文には、

　　我が身こそ恨みられけれから衣君がたもとになれずと思へば

おとゞれいのことをかしくて、

　　から衣又からごろもからごろもかへすがへすもからごろもなる

内のおとゞは、玉かづらの御こしゆひの程しのびがたき御けしきなり。御かはらけ参りて、

　　恨めしやおきつ玉もをかづくまでいそがくれけるあまの心よ

おとゞ玉かづらにかはりて、

　　よるべなみかゝるなぎさに打ちよせてあまも尋ねぬもくづとぞ見し

此の事をあふみの君きゝて、女御のおまへにかしこには木中将少将さぶらひ給ふに進み出でて、「殿の内大臣殿は御むすめまうけさせ給へる。かれも劣りばらなり。ないしのかみに宮づかへに急ぎ給ふと聞く。」と

て、女御やう〳〵おきぬれば、中將打わらひて、「ないしのかみにはなにがしをこそと思ふに、非道にも

思しよりにけるかな。」と宣へば、をさ〳〵はら立てて、「中將殿こそつらけれ、さう〴〵の人にはにてふまじき

御うへかな。」とてあざむき人たちの「ないしのかみには我を申しなし給へ。」と女御を責めたり。父大臣

は此由聞き給ひて打わらひ、「申し文あつくりなん歌などよみてあげなば、まいらせ給は

じ。」と宣へば、近江の君の詞。「やまと歌はあしくもつゞけ侍らん、むね〳〵しき事は殿より申させ給へ。」

とて手を押しすりて居たり。かたはらにてききける女房は、をかしきに中々しぬべくおぼゆ。

○藤ばかま 源三十七歳八九月

大宮は三月二十日の比失せ給ふ。玉かづらにび色にやつれ、夕霧中將も同じ色の姿にて、ないしの

かみの事の御使に、玉かづらへ在したり。彼の野分の御あさがほ心にかゝりて、人にきかすまじき事

の御使に參りたり。」とて、人々を退けて、木丁の後にそばみゐて、つくり事をながくしく云へば、

[illegible]給はで、[illegible]花を、みすのつまよりさし入れとらせ給へ

ば、[illegible]、夕霧、

同じ野の露にやつるゝ藤ばかまあはれはかけよかごとばかりも

尋ぬるにはるけき野辺の露ならばうす紫やかごとならまし

今すこし思ふ事をもらさまほしけれど、なやましう」とて玉かづらは入り給へり。頭中将父おとゞの使に参りて、

いもせ山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける

玉かづら
まどひける道をば知らで妹背山たど／＼しくぞたれもふみ見し

ひげくろの大将は、かしは木中将を常によびて、父おとゞにも申しいれ、大との源のいかにおぼすとも、まことの親の御心だに違はずばと、辨のおもとをせめて、

大将
数ならばいとひもせまし長月に命をかくる程ぞはかなき

兵部卿
朝日さす光をみても玉笹のはわけの霜をけたずもあらなん

紫の兄兵衛督
忘れなんと思ふも物の戀しきにいかさまにしていかさまにせん

兵部卿返し
心もてひかげに向ふあふひだに朝おく霜をおのれやはけつ

○まきばしら

ひげくろの大将は、玉かづらの事父おとゞの許しそめ給へば、大との源の心ゆかぬけしきを見せんもいとほしく、大将は玉かづらを我がかたにわたし給はん事をいそぎ給へど、もとの北の方のはゞくも思ひ給ふまじと、心のどかなるやうにもてなし給ふ。大将のおはせぬひるつかた、おとゞ源氏玉かづら

一渡り給へば、[illegible]げに面[illegible]せ給へるを、よそに見はなつよと口惜しうて　[illegible]

おりたちてくみはみねどもわたり川人のせとはた契らざりしを

みつせ川渡らぬさきにいかでなほ涙のみをの泡と消えなん

大将の北のかたは、おほかた世にかゝ[illegible]、容もよくおはしけるを、しふねき物のけに年ごろわづら

ひ給ひて、うつし心なくて過ぐし給ひけれど、大将の御心はうつるかたもあらざりしに、玉かづらにう

つり給へるを、北の方の父式部卿の宮聞しめして、「いまめかしき人をわたし置きてかしづかれん、

かたすみに人わろくてあらんより、我がかたへまかで給ひね」とあれば、北の方は[illegible]

といひながら、今さら立ちかへらんも人ぎき悪しかるべしと、さまざまに思ひみだれなやましくなり

てふし給へり。紫の上の大将殿、ひめ君は北[illegible]ひとところにおはしまして、[illegible]ほのから[illegible]のか

たへ出で給はんとおはすに、[illegible]いかにせんとはしらぬ[illegible]給ひて、小さき紙に

書きて[illegible]ひきいれてたまはしめ給へり。北の方[illegible]見てにはかに過ぎ[illegible]、[illegible]

取りて、うしろにまはりて大将殿になげかけ給ふ。[illegible]なる灰大将殿の目にも入りて、[illegible]

給はず、[illegible]今日は玉かづらへ[illegible]給ふ。

心さへ空にみだれし雪もよにひとりさえつる片しきの袖

もくの君といふ女房だち、

ひとりゐてこがるゝ胸のくるしきに思ひあまれるほのほとぞ見し

大将

うきことを思ひさわげばさま〴〵に燻る煙ぞいとゞたちそふ

北のかたの御はらには女君ひとり、年十二三をとこ君二人おはしける。父宮より中将、侍従、民部大輔など御むかへに参れり。北の方の兄弟なり。をとこ君たちは殘しおき、姫君はつれて出で給ふが、つねによりゐ給ふひがしおもてのはしらを、よその人にゆづる事の悲しければ、ひはだ色の紙に歌をかきてはしらの割れたる所に、かうがいのさきにておしいれ給ふ。

今はとて宿かれぬともなれきつるまきの柱は我をわするな

なれきとは思ひ出づとも何により立ちとまるべきまきの柱ぞ

中将のおもと

あさけれどいしまの水はすみはてて宿もる君やかけはなるべき

ともかくも岩間の水のむすぼほれ影とむべくもおもほえぬ世を

螢兵部卿宮より玉かづらへ、

み山木に羽うちかはしゐる鳥のまたなくねたき春にもあるかな

年かへりてをとこたうがあり。正月十四日せちゑなり。玉かづらの内侍は拜賀に参り給へば、うへわたらせ給ひ

て、おぼし立事のたがひたるやうなる宣はせて、御、

立とてもかくにじみおひがたき紫を心にふかく思ひそめけん

いかならん色ともしらぬ紫を心してこそ人はそめけれ

大将玉かづらを我がかたにむかへんとて、中よせたれば、御

九重にかすみ隔てば梅の花たゞかばかりも匂ひ来じとや

香ばかりは風にも傳てよ花のえに立ちならぶべき匂ひなくとも

右近は玉かづらにつきて大將殿へ參る。二月雨ふりつれ〴〵なるに、おとゞ思召しいでゝ右近がもと
へ文つかはさる。

かきたれてのどけき比の春雨にふるさと人をいかに偲ぶや

ながめする軒のしづくに袖ぬれてうたかた人を偲ばざらめや

おとゞやまぶきのおもしろきを見給ふにつけても、

思はずに井手の中道へだつともいはでぞこふるやまぶきの花

かものおほかるを見給ひて、源、

同じ巣にかへりし雁の見えぬかないかなる人か手ににぎるらん

大將見給ひて、御返しはかはりて、

　すかくれし数にもあらぬ雁の子をいづ方にかはとりかくすべき

十一月に若宮生れ給ふ。父大とゞは思ふやうなる御すぐせとよろこびかしづき給ふ。いかなる折にか、あらん、殿上人あまた、夕霧も女御の御かたにものの音しらべてあそび給ふに、あふみの君人々の中を押しわけて出でゐたり。あなうたてと引きいるれば、さがなげに睨みて、聲いとはやかにて、夕霧をさして、あふみの君、

　おきつ舟よるべ波路にたゞよはば棹さしよらんとまり教へよ

雲井の雁を戀ひ給ふに、かなはずば我さしよらんとの心なり。夕霧、

　寄るべ波風のさわがす舟人も思はぬ方に磯づたひせず

（　）梅が枝　源三十九歳

しゆじやく院のみこ十三歳にて、二月御かうぶりの事有るべし。あかしの姫君十二歳。入内ちかづきければ、二條院の御くらあけさせ、御用意どもいそぐ。香どもは昔今の取りならべ、御かた〴〵にくばり、たき物二くさづゝ合はさせ給ふ。おとゞは里方侍従合はせ給ふ。前齋院よりるりの壺に入れて、松梅を引きむすび、御文そへて參らせらる。

花の香はちりにし枝にとまらねどうつらん袖に淺くしまめや

源 花の枝にいとゞ心をしむるかな人のとがめん香をばつゝめど

おとゞの二くさは、西のわた殿の下より出づる。みぎはちかううづませ給へり。兵部卿はんじやにてとくしわしをうださせ給ふこといふんの果方、おとゞの侍從、むらさきの上たいの上の梅花をまさる匂ひなしとゐで給ふ。夏の御かたは花ちるかう、冬の御かたはくしあかしのゐかう、百ぶのはう合はさせ給へり。螢宮御もぎのうちならしに、御こと共のしやうぞくしけるなどゞあさせ、兵部卿のみやびはおとゞさうのこと、頭中將わごん、夕霧よこぶえ、辨の少將ひやうしとりて、梅がえうたひ給へり。

兵部卿 鶯のこゑにやいとゞあくがれん心しめつる花のあたりに

源 色もかもうつるばかりに此の春は花さく宿をかれずもあらなん

頭中將 鶯のねぐらの枝もなびくまで猶ふきとほせよはの笛竹

夕霧 心ありて風のよくめる花の木に取りあへぬまで吹きやよるべき

弁少將 霞だに月と花とをへだてずばねぐらの鳥もほころびなまし

兵部卿宮かへり給ふに、御なほしたる物二つぼ奉らせ給ふ。宮、

花の香をえならぬ袖に移してもことあやまりといもやとがめん

（源）めづらしとふるさと人も待ちぞ見ん花のにしきをきてかへる君

御もとには秋このむ中宮の御かたに、おとゞわたり給ふ。紫の上も此のついでに中宮に御たいめんありて、秋の時に御まいりたてまつれり。御使明石の上は、かかるをりにも見たてまつらぬを、いみじと思ひ給へり。春宮の御元服は二十日あまりになんなり。梅が枝の左大臣のこの君四月に参り給ふ。そのついでを聞て、螢君の御もとにもさうしともあらせ給ふとて、さいしやう中将、兵衛のかみ、頭中将などにあらせて、歌ゑを書かせ給ふ。おとゞも御心のゆくかぎり、女ばうまで人に墨すらせて、上でたいみじく書きつくし給ふ。けふそくの上にさうしどもおきて、筆のしりくはへて思ひめぐらし給へるさま、あくよなくめでたし。内のおとゞは雲井の鴈の君をさかりにとゞめ、つれなくとりあへる給へど、人のねんごろなる時になびかましものをと、くやしくおぼす。夕霧はおとゞのかくたゆみ給へる御けしきを聞き給へど、あまりにつらかりし御心なれば、あへしとおぼす。御文はたえずかよはし給ひつゝ。夕霧、

つれなさはうきよのつねになり行くをわすれぬ人や人にことなる

かぎりとてわすれがたきを忘るゝもこや世になびく心なるらん

○藤のうら葉　源三十九歳

やよひ二十日は大宮の御き日にて、内のおとゞふか草のごくらく寺（極楽）にまうで給ふ。夕霧は此の
おとゞにいかゞつるに見え給はんと、心づかひせられてしづまりゐ給へば、内のおとゞ、袖を引きよ
せて「我が冬作りのこりなきに、何とて心へだて給へるぞ、けふのみのりの心をもたづね給はば、つ
ゆるし給へ」と恨み給へば、夕霧は「御けしきにはゞかりて。」といひなし給ふ。卯月ついたち比、庭
の藤咲きみだれたるに、おとゞより夕霧へ、

我が宿の藤の色こきたそかれに尋ねやはこぬ春のなごりを

中なかに折りやまどはん藤の花たそかれ時のたどたどしくば

夕霧いたく出立ち給へば、あるじの君たち七八人むかへに出でて、入れたてまつれり。おとゞ対面し給ひ、
「春の花さうらはてて、のちのあるがうらめしき比、此の花のひとり夏に咲きかゝるほど、色ふかくなつ
かしきゆかりとつへし」とて打ちわらひ給ひ、ゑひ参り、御あそびなどし給ふ。おとゞそらゑひして、
藤のうら葉と打ちずんじ給へば、頭中将心ありて花の色こき房を折りて御さかづきにくはへ給ふ。内大臣、

紫にかごとはかけん藤の花まつより過ぎてうれたけれども

いく返り露けき春を過ぐしきて花のひもとくをりにあふらん

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらん

とうち誦し給へり

夜ふけ行く程に、宰相の君夕霧そらなやみし給へば、[illegible]人[illegible]給ふ。夕霧[illegible]おぼえて、

女　あさき名をいひながしける川口はいかゞもらしゝせきのあらがき

もりにけるくきたの関を川口のあさきにのみはおほせざらなん

ねくたれがみの御朝がほ見るかひあれど、夕霧の御文には、

とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみけふあらはるゝ袖の雫を

賀茂のみあれの御使はとうないしのすけなり。此の出立を夕霧はとひ給ひて、

何とかやけふのかざしよかつ見つゝおぼめくまでになりにけるかな

藤内侍　かざしてもかつたどらるゝ草の名はかつらを折りし人やしるらん

入内には紫の上そひて参り給ひ、三日過して出で給ふ。今は明石の上たちそひて参り給ふに、紫の上と対面し給ひて、うと／＼しきへだてものこゝろずなつかしげに物がたりなどし給ふ。其の秋おとゞは太上天皇になずらふ御位に給ふ。内のおとゞは太政大臣、夕霧は中納言なり。雲井の鴈のめのと、夕霧を六位すくせとつぶやきし事をおぼし出でゝ、菊を給はせて、夕霧、

あさみどり若ばの菊を露にてもこき紫の色とかけきや

二葉より名だゝる園の菊なればあさき色わく露もなかりき

夕霧は、院の殿のあれたるをしゆりしてわたり給へり。むかしのうば殿をおぼしめし出でゝ、

なれこそは岩もるあるじ見し人の行方はしるや宿のましみづ

なき人のかげだに見えずつれなくて心をやれるいさら井の水

又おとゞもおはしまして、ありつる手ならひどものちりたるを御らんじて、

そのかみの老木はむべもくちぬらん植ゑし小松も苔おひにけり

いづれをもかげとぞ頼む二葉より根ざしかはせる松の末々

神無月二十日あまりに六条院に行幸あり。院もおはしまして、馬ばのおとゞに左右のつかさの御馬ひきならべて、九月のほどにわかやかなれば、東の院に向きまうけて、うかひのおさめして、鵜おろさせ給へり。西の対にもみな心こゝろなるを、中のかべをくづして中門をひらき、御覧ぜさせ給ふ。くれかゝるほどに殿上のわらはべ舞つかうまつる。源氏、

色まさるまがきの菊もをりをりに袖打ちかけし秋をこふらし

紫の雲にまがへる菊の花にごりなき世のほしかとぞ見る

秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝる紅葉の折をこそ見ね

をのゝ秋の紅葉(もみぢ)とも見るいにしへのためしにひける庭のけしきか

源氏物語 巻之七八

わかな上　同下

かしは木　よこぶえ

すゞむし　夕ぎり

みのり　まぼろし

にほふみや　こうばい

たけ川

螢兵部卿 源氏の御弟 —童宮

—同

—[illegible]真木柱の上なり

○紅梅大納言──┬大蔵卿
　　　　　　　├修理大夫
　　　　　　　├今上藤壺女御
　　　　　　　└女子

わかな上（源三十九歳より四十一歳まで）

院のみかとは、御母ぎさきかくれさせ給ひて後、なやみわたらせ給ひ、おこなひの道にとおぼしめす。宮だちは春宮女宮たち四ところの中に、女三の宮をたれかにあづけ給はんとあんじ思召し、御たから物調度どもをも皆此のみやに参らせ給ふ。西山に御堂つくらせ給はんの御いそぎなり。（院は朱雀院の御事なり。母はこうきでんの大后なり。）御悩みおもくなりまさらせ給ひ、中納言の君（夕霧）参り給へば、よろこびおぼし召し、此のもてわづらひ給ふ姫宮を、此の人にあはせ給はんかとさまざまおぼしめさるゝに、螢兵部卿はおきかた後れたり、衛門のかみかしはぎはまだ年わかくてかろがろしけれと思す。たゞ六條院におやざまにゆづりおき給はんと御けしきあれば、源は「院の御おこなひの後は、我も年の程おくれ奉らぬに、その御うしろみなば何とてうけ取り侍らん。中々世をさらん時心苦しく、ほだしにならせ給ふべき。」

と宣へば、院もさすがにことわりと思召しうちゑみ給ひ「さらば内泉に奉らん。」と思す。年も暮れにけり。此の宮の御もぎの腰結には、おほきおとゞ源、大臣だち、かんだちめ、みこたち、内春宮いかめしきひゞきなり。秋このむ中宮より御さうぞく、御ぐしあげの具たてまつらせ給ふ。

さしながら昔を今につたふれば玉のをぐしぞかみさびにける

院

さしつぎに見る物にもが萬代をつげのをぐしもかみさぶるまで

三日過して御ぐしおろし給ふ。

おほみのかみの君「思ひしみ給へる別れのたへ難くも有るかな。」とて、御心みだれ給へり。山の座主すけ三人、はふぶくなど奉る。女宮たちも女御更衣をとこ女泣き悲しむ。六條院源も参り給ふに、「此の内親王女三の御事を預け奉らばや。」と宣へば、我も行くさきみじかくて、いかならんとはおぼしながら、あづかり給ふべき由宣ふ。源四十になりたまへば、御賀の事正月二十三日ねの日なるに、大将の北の方玉かよりわかな参らせ給ふ。をさなき君だち二人つれて参らせ給へり。屏風、かべしろ、御しとね四十、しとね、けふそく、みすゞし二よろひ、御ころも箱四つ、夏冬のさうぞく、かうご、薬のはこ、御すゝり、ゆするつき、かゝげのはこ、きよらをつくし給へり。

玉かづら

わかばさすのべの小松を引きつれてもとの岩ねをいのるけふかな

小松原すゑのまはにのあれて中野での若葉も年をつむなきかんだちめあまた、紫の上の父式部卿宮、ひげくろの大將、わかなのあつ物まゐる。こちのまきだちもの物まゐる。

おまへには沉のかけばん四つ、御坏、院の御料はよりあく人は召さず。笛はおほきおとゞ、わごんはもんのかみ、さうは兵部卿、おまへにひかせ給ふ。御おくり物ありて、二月十日女三宮六條院へ渡り給ふ。

紫の上　めにちかくうつればかはる世の中を行末とほくたのみけるかな

源　命こそたゆとも絶えめ定めなき世のつねならぬ中のちぎりを

源に夜毎に女三の宮へおはします。中務中將などいふ女房だち、「餘りなる御思ひやりかな。」とて、源のあかつきかへらせたまひ、かうしたゝき給へど、そら寝してあけやらず、やゝまたせ奉りて、あけたり。

女三へ源　中道をへだつる程はなけれども心みだるゝけさのあは雪

女三の宮　はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にたゞよふ春のあは雪

三月に院のみかどさがの御寺にうつろひ給ふ。院より紫の上へ、

そむきにし此の世にのこる心こそ入る山みちのほだしなりけれ

そむく世のうしろめたくば去りがたきほだしをしひてかけなはなれそ

おぼろのかんの君は二條の宮に住み給ふ。おとゞひそかにおはして、

年月を中にへだててあふ坂のさもせきがたくおつる涙か

涙のみせきとめがたき清水にて行きあふ道ははやくたえにき

目ずらしくやがて出で給ふとて、源、

しづみしもわすれぬ物をこりずまに身をなげつべき宿の藤なみ

身をなげんふちもまことの淵ならでかけじやさらにこりずまのなみ

夏のころより、あかしの姫君たゞならずなやみ給ふ。明石の上は御身にそひて出で入り給ふ。紫の上も姫君へわたり給ふついでに、女三の宮には對面し給ふ。たいの上手ならひに、

身にちかく秋やきぬらん見るまゝに青ばの山もうつろひにけり

源 水鳥の青羽は色もかはらぬを萩の下こそ氣色ことなれ

姫君は中の戸あけて女三の宮にもたいめんし給ふ。女三の宮の御母と紫の上の父式部卿宮と兄弟なり。

おいの波かひある浦に立ち出でてしほたるゝあまを誰かとがめん

姫君　しほたるゝあまを波路のしるべにて尋ねも見ばやうらのとまやを

あかしの上　世をすててあかしの浦にすむ人も心のやみははるけしもせじ

三月十日の程をとこ君生まれ給ふ。紫の上わか君をいだき給ひて、あかしの上は御湯殿のあつかひなどをつかうまつり給ふ。七日には内より御うぶやしなひ、みこだち、大臣われも〳〵ときよらをつくし給へり。紫の上手づからあまがつをつくり給ふ。

あかしの入道つたへ聞きて、今は此の世のさかひをゆきはなれんと、家をば寺になし、此の國のおくに人のかよはぬ山あるをとくこしらへおき、此の月の十四日に入り給ふなり。あかしの上へは文を參らせ給へり。其の文にはわか宮のよろこびと、昔姫のうまれ給はんとしの二月の夢のさまなりつれば、此の思ひかなひぬれば、九ほんのうへの望みもうたがひなし。

ひかり出づる曉ちかくなりにけり今ぞ見しよの夢がたりする

我をば變化のものと思し捨てて、くどくの事をなし給へ。とて、願文どもはおんのはこにふうじこめて奉れり。三月の空うらゝなる日、六條院に兵部卿宮ゑもんのかみ參り、御物がたりし給ふ。大將夕はうしとらの町に人々あまたまりもてあそびてときこし召し、こなたにとあればきんだちみな來れり。しんでんの東おもてにて、頭の辨、兵衛のすけ、大夫の君、大將、かしは木のゑもんおり給ひ

て、花のかげにまよひ給ふに、ゐもんのかみのあしもとにならぶ人なかりけり。大将は花の雪のやうにふりかゝれば、見あげて枝をすこし折りて、みはしの中のしなにゐ給ふ。女三のおまへのみすのつまのすきかげ見ゆるに、唐猫のちひさきを、大きなる猫の追ひつゞきて走りいづ。つな長くてみすのそばあいなに引きあけられたるに、うちぎすがたにて立ち給へる人あり。女三の宮なり。こうばいに色濃き薄きあまたかさなり、御ぐしのすそふさやかに、七八寸ばかりぞあまり給へる。猫のいたくなけば見かへりたまへるかほ、若くうつくしの人やと見えたり。かんの君猫をまねきよせてかき抱きたれば、かうばしくてらうたげになくもなつかし。

大将夕霧とかんの君かしは木ひとつ車にて物がたりし給ふ。

かしは木
いかなれば花にこづたふ鶯の櫻をわきてねぐらとはせぬ

夕霧
み山木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色にあくべき

かんの君猶わりなければ、小侍従へ文やり給ふ。

よそに見てをらぬ歎きはしげけれどなごり戀しき花の夕かげ

これを女三に見せければ、みすのつまおぼしあはせけん。御返事は小侍從、

今さらに色にな出でそ山櫻およばぬ枝に心かけきと

（わかな下　源四十[illegible]より四十七[illegible]）

殿上の四位四位六位院に侍るべしとて、左右の大將[illegible]殿上人參り給ふ。衞門のかみ[illegible]
を見[illegible]るにおさるし[illegible]て、彼のねこ[illegible]、心の[illegible]
狂ほ[illegible]衞門のかみ春宮に參り、琴を教へ[illegible]六條院のねこ[illegible]
春宮は猫をらうたくし給へば、女三より參らせらる。衞門のかみ此のねこを見て[illegible]
[illegible]の中[illegible]

恋ひわ[illegible]ばなれ[illegible]何とて鳴くねなるなん

冷泉院御くらゐにつかせ給ひて、十八年にならせ給ふ[illegible]日ごろ重くなやませ給ふ事あり[illegible]、俄におりゐさせ給へり。[illegible]の左大將右大臣になり給ふ、[illegible]の御はらの一のみや春宮に立ち給ふ。四源歳。十六 春宮の女御の御[illegible]のりのため、住吉へまうで給ふ、[illegible]御殿たちの上ひとつ車なり。次のにはあかしの上、尼君、[illegible]んだちめ、[illegible]ひ人、御馬、ずる身、[illegible]り、又なき見ものなり。源、

たれか又心をしりて住吉の神[illegible]をへたるまつに[illegible]とふ

あま君

すみの[illegible]をいけるか[illegible]ある渚とは年ふるあまもけふやしるらん

あかしの上

昔こそまづわすられね住吉の神のしるしを見るにつけても

紫の上
すみの江の松に夜ぶかくおく霜は神のかけたるゆふかづらかも

女御殿
神人の手に取りもたるさか木ばにゆふかけそふるふかき夜の霜

たいの上のつかさ
はふりこがゆふうちまがひ置く霜はげにいちじるき神のしるしか

[illegible]宮に[illegible]一の宮[illegible]、[illegible]の上とのわき[illegible]き給ふ[illegible]の御かた[illegible]花ち[illegible]

[illegible]、大[illegible]

入道の御かど五十にならせ給ふ年、二月十日あまり、源より[illegible]

[illegible]上、女御殿、[illegible]の上、[illegible]

[illegible]琵琶、[illegible]上和琴、女御殿箏の琴、女三の宮[illegible]琴[illegible]

[illegible]大將のぞき給へば、ちひさくうつくしげに

[illegible]みだるべき御か

[illegible]心[illegible]。なやましくて

[illegible]

[illegible]花[illegible]

[illegible]紫の上[illegible]

なきくだ物をだに參らず、おきあがり給ふ事なくて日ごろへぬ。こゝろみに所をかへ給はんとて、二條院にわたし給ひ、御すはうなどさま〴〵なり。たのみすくなくよわり給へば、いかさまにせんとて、まどひて、源は女三の御かたへもわたりたまはず、人々はみな二條院につどひ參りて、六條院は火をけちたるやうなり。其の比かしは木の衞門督は中納言になり、女三の宮のあねの二の宮をえたれど心にもつかず、小侍從といふかたらひ人は、女三のめのとの女なり。其の上あのとの姉は、かしは木のめのとなれば、小侍從をよびてかたらひ給へり。日々にせめられてさるべき折をうかゞひあはせて、かしは木忍びておはしたり。卯月十日あまりにて、人々はあすのみそぎ見んとて物ぬひけさうじ、おまへのかたはしめやかなり。女三は何心なくおほとのごもり給へるに、かしは木をいれたれば、女三は源のおはしたるとおぼすに、あらぬ人なり。あさましく汗も流れていだきおろし、ふるひかたらふに、思ひしづむる心もうせはてて、いづくへもつれ行きかくして、わが身よになきものになし給へとまで思しみだれ給へり。夜もあけゆけば、よべ入りし戸口はあきながら有り、物をいはんとし給へど、わなゝかれてわかく〴〵し。かしは木、

おきてゆく雲もしられぬ明けぐれに何處の露のかゝる袖なり

女三
明けぐれの空にうき身はきえななん夢なりけりと見てもやむべく

嘆ばみるはなれてとまりゐるむしす。禁の日に物見んとて君だちもさそひやうし給へと、なやましとて
聞て寄ほす。とてうけ、

くやしくもつみおかしけるかな卯の花の神のゆるせるさかりにけるに
卯月のみやしたえるまましけれども、かうことは殺さればとて讀て、

とかありしは、あのお殺を同じく打ちありける者はかなりしたるきありしものも
おとゝいとはなやまけけれと聞えておにしたるも、禁の上の上綸人り給ふとて人々はたしてはりしたさひまかり給
ひつけなどをこれかしこみるに、嫌は宿を借しいと、給へば、月頃みるはれなる物語は、
わかうき君にはけうとかるものゝもある。六条のみやす所のやうなれ。源氏に遠まどうもあまりして、此
のあとはけ事なとして、ことにそこの人も猫なとのたれがれたなとれおほく、あはれは、

現が世にさもあらばかゝりとなれぞれながらもきゝおはしきこえ君は君な
此の中宮に禁の上にけたこともあるれてわたし給ふ。禁の上部をしもさんたる給はんとて、いたゝきはから付
つる、石蔵をうけ給ひ、かこんとはなさの法華経一部、くそうし給ふ。五月ははれなかしまて見むをの
けんきものにや経しく、六月に蛇をひつ給ふ。さは此ずてりいさすにもおはゆず、な
やましくあるみそこなはれ給ふ。くわいて しなり

[illegible]

源 [illegible]

おとゞ女三へわたり給へり。女三は見え給へるもはづかしくて、御いらへも聞え給はず。おとゞあやしく見給ひて、おとなびたる人召して、御なやみのさま問ひ給ふ。れいならぬさまにわづらひ給ふよし申せば、年頃へぬる人々にだにさる事のなきに、不思議の事とおぼす。二日三日おはします。衛門のかみ聞きておぼつかなさに文おこせたり。小侍従しのびて女三にみせ奉る。おとゞ入り給へばとくもかくし給はで、しとねのしたにはさみ置き給へり。ひるのおましにうち伏して、夕さり二條院へかへり給はんと聞え給ふに、ひぐらしのなきければ、女三、

夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くをきく／＼おきてゆくらん

源 まつ里もいかゞ聞くらんかた／＼に心さわがす日ぐらしのこゑ

おぼしやすらひとまり給ひて、朝すゞみの程にわたり給はんとし、よべの扇をおとしておましのあたりたづね給ふに、しとねの少しまよひたるより、淺みどりのうすやうの文見ゆるを、とりて御覽ずるに、をとこの手なり。二かさねにこまごまと書きたるは、まぎるゝ事なく衛門のかみの手なりと見給ふ。日をへだてて女三の宮のくわいにんを思ひはなれ給はでおとゞわたり給ひても、彼の文見給ひた

りとし、宣はす、

そのころおぼろのかんの君、あまにならせ給ふと聞きて、おとゞおどろかり、

あまのすまひにきかへしやすまの浦にもしほたれしも誰ならなくに

あま君にいかゞ思ひおくれけん明石の浦にあさりせし君

西山のみかどの御賀、十一月には女三の宮なやみ給へば、女二の宮參り給ふ。十二月十日餘り、女三

よりあるべしとて、舞のうちならしに、紫の上も六條院へかへらせ給ふ。女御は里におはします。

なとこみこうみ給ふ。（匂宮なり）右大臣殿の北のかた（玉かづらなり）渡りたまふ。衞門のかみはわづらふよし申

させければ、父おとゞ、「などか參り給はぬぞ。」といさめ給ふに、苦しと思ふ〳〵參れり。例の如くみ

すの内に入れ給ひ、大將ともろともにわらはべの舞のようい加へ給へ。」と、なつかしげに源宣へば、

うれしと思ひたるに、ことすくなにて立ち給へり。ひげくろの四郎君、夕霧の三郎君、兵部卿宮

のきみだち、三人は萬歳樂、夕霧の内侍のすけ腹の二郎君、式部卿宮の兵衞のかみの御子わらは

やう、右のおほい殿の三郎君、大將殿の太郎君、こまの太平樂きりのこして舞ひ給ふ。ゑも

人の見ばかりすさみて來るもかしこさいたく覺ゆれば、ほどきをかりにはおはせず、源見とが

めたまひて、たはぶれのひ給へば、心ちいとゞ亂れてかへり給ふ。氣のはりあみにやいたく臥させ給ふ。

おとゞの同北のかた驚き給ひてこなたにわたし給へり。

○かしはぎ　第四十八卷 [illegible]

衛門のかみなやみわたらで年もかへりぬ。父おとゞ北のかたおぼしなげくこといはんかたなし。ありとて、人々をなげかせ給へるに、女三へ文參らせけり。

今はとてもえん煙もむすぼほれたえぬ思ひのなほや殘らん

かつらぎ山よりおこなひ人召して、あらゝかにだらに讀むを聞きても、つみ深き身にや、だらにの高きに恐ろしうて、いよ／＼死ぬべく覺ゆるとて、立ちのきて侍從とかたらひ給ふ。此の事をおとゞに知らせ奉りて、世にながらへん事もなくなりぬべく、魂は身にもかへらずと泣いつ笑ひつかたり給ふ。女三もけふかあすかの心地して、返事などは給はねど、侍從御すゝめなど取りあへずかなしくせめければ、しぶ／＼に書き給ふ。

立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるゝけぶりくらべに

行方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ちは離れじ

女三はその夜はなやみて、日さしあがる程にをとこ君生れ給ふ。かをるなり。ならはぬ事の恐ろしうおぼされ、御ゆなども參らず、たいきょうはるあたらしき心地し侍るを、尼になりて、もしいきとまるとも又な

くなりても、いみじうしたふ事にもやと、いねの御けしきよりおとなびて宣ふ。いかにさぶらふ中に、たふとき僧を召しいれて、御ぐしおろさせ給ふ。後夜の加持にもの〻け出でていふやう、「ひとり紫のをば取りかへしつると思されしが、ねたくてこゝにさぶらひつる、今は歸らん。」とて打ち笑ふ。衛門のかみはあまになりたまふと聞きて、いとゞ涕き入るやうにたのむかたなくなれば、内にもきこしめし、にはかに權大納言になさせ給ふ。大將は心のへだてなければ、かかる今はのきざみ何をかかくしはてむ、六條院にいさゝかのあやまりありて、恐ろしく心ぼそくなりてやまひつきたり。我なからんあとに、一條の宮には事にふれてなほとひ給へば、いはまほしき事はおほかるべけれど、心地せん方なきまで見えて、あわの消ゆるやうにて失せ給ふ。やよひの櫻咲く二の宮にわたり給ひて、わ花さいだきて、

たか世にか種はまきしと人とはばいかゞいはねの松はこたへん

一條の宮は人げすくなくてつれ〴〵なるに、大將おはしてみやす所對面し給ふ。女二の宮御母なり。女二

時しあればかはらぬ色ににほひけりかたへ枯れにしやどのさくらも

[illegible]は櫻のめにそ[illegible]咲きおくる花の行方しられねば

これよりも[illegible]のもとに参り給ひては、[illegible]かくては本の

木の下のしづくにぬれてさかさまに霞の衣きたる春かな

夕大將
なき人も思はざりけん打ちすてて夕のかすみ君きたれとは

源、かしは木の衛
うらめしや霞の衣たれきよと春よりさきに花のちりけん

卯月ばかりに大將、一條の宮へわたり給ひて、

ことならばならしの枝にならさなんはもりの神のゆるし有りきと

「みすのへだてあるこそ怨めしけれ。」とて、なげしにゐ給へり。

女二の宮
かしは木にはもりの神はまさずとも人ならすべき宿のこずゑか

○よこぶえ　源四十九歳、かをる二歳

山のみかど朱雀より姫宮に、たかうな、ところなど參る。

世をわかれ入なん道におくるとも同じ所を君もたづねよ

女三
うき世にはあらぬ所のゆかしくてそむく山路に思ひこそいれ

若君はうつくしくしろくそびやかに、柳をけづりたらんやうなり。かみは露草にて色どりたるやうにて、口つきまみのびらかに彼の人のかたちおもかげ思ひ出で、このはのおひ出でたるにくひあてんとて、たかうなをにぎりてくひかなぐり給ふ。

うつほにも忘れがたかりける竹河の手はいとかたき物にぞ有りける

秋のいぶせき心地はせざるに、女御一条の宮二女におはしたり。かの院は木の常に弾き給ひし琴をすこし引き給ひて、そぞろの箏に押し寄せ給ひて、女二は弾き給はず。大将、

ことに出でていひ初めかしこにもあらぬは人にはあはれげしきなど見ゆ

この宮の夜のあはれなるは聞きわけたることより外はさやはいはざりける

「御あそびの御前に笛をそへて奉る。」と宣へば、あはれおほくてふきすまして出で給ふ。御息所、猶しりけるも御前に出で、秋はかなき虫の音かな

よこ笛とては、ことにおぼえ心をかしくなりぬること多きもせれ

女二の宮に大将心かけ給ふを雲井の雁聞きて、夜深く帰り給ふも憎くて、かへり入り給ふと聞き給ひて、ねたるやうにて聞き給ふ。大将はねいり給へる夢に、ありつる彼の笛をとりて、

横笛に吹きよる風のことならば末の代ながき音につたへなん

はこれにつけてはとも思ふに、若君ねぼけて泣き給ふ。あやしとおきて騒ぎて乳をあたへし給ふほどに、雲居の雁いまきちらしなでし給ふ。大将殿のいまめかしき月めでに夜ふかし、あうしなさあげ格子給へば、「物のけ入り來れり。」とかこち給へば、大將うち笑ひて、「

「御前には入りこずもあらじ」と宣ふ。大将殿六条院へ参り給へば、にほふ宮宮三、大将にいだかれ女御へまゐらす。この宮あそびあひたまひて、「われも大将にいだかれん。」と宣ふ。にほふ宮「あが大将を、」とてあらかへ給へり。

○すゞむし 源五十歳、夕霧三十歳

夏比にはちすの花盛りに、入道の姫宮三女御持仏くやうし給ふ。おとゞの御こゝろざしにて、御前はた法華のまんだらかけて、しろがねの花瓶、あかだなつぼなどのしなびやかにだんじて作りたまへり。あみだ経はおとゞ書かせ給ふ。

源 はちす葉を同じうてなと契り置きて露の別るゝけふぞかなしき

女三 へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらん

八月十五夜の月をかしき夕暮に、おとゞわたり給ひ、むしのねを聞きたまふやうにて、猶思ひはなれぬさまに宣へば、入道の宮は佛の前にねんじ給ふが、すゞ虫のなきければ、女三

大かたの秋をばうしと知りにしをふりすてがたきすゞ蟲のこゑ

源 心もて草のやどりをいとへども猶すゞむしのこゑぞふりせぬ

琴の御ことひき給ふ。宮女三は御ずゞひきおこたりて、御琴に心いれてかきならし給へり。螢兵部卿

大将殿にも参り給ひて、御かはらけ参る程に、冷泉院より御使あり。

雲の上をかけはなれたるすみかにも物わすれせぬ秋の夜の月

月影はおなじ雲井に見えながら我がやどからの秋ぞかはれる

○夕霧　源氏五十歳

夕霧の大将は、一條の宮を人目には昔を忘れぬけしきに見せて、ねんごろにとぶらひ給ふ。みやす所小野に山里すみ給へるにわたり給へば、大将殿より御車御ともの人々など参らせ給へり。八月十日ばかりの程、律師にかたるべき事有りて、其のついでに小野の御息所わづらひ給ふをも、とひ給はんとて出で給ふ。

山里のあはれをそふる夕霧に立ちいでん空もなき心地して

山がつのまがきをこめてたつ霧も心そらなる人はとゞめず

又かゝる事は有りがたかるべしと思して、こよひはとまり給へり。つねにはあだめきたるけしきも見せ給はねど、うたてもあるかなと女二はおぼしながらも、大将殿人のかげにつきてまぎれ入り給へり。いとわりなくていそぎ出で給ふを引きとゞめ、思ふ事をきこえ給ふ。宮あはれげになき給ひて、

我のみやうき世をしれるためしにて濡れそふ袖の名をくたすべき

　誰かたは我がぬれ衣をきせずとも朽ちにし袖の名やはかくるゝ

「大[illegible]しは木[illegible]なり」の聞き給はん事よ、院来のいかに聞召しおぼされん、みやす所の知り給はぬもわびしければ、あかで出で給へ。」とやらひ給ふ。

夕霧
なぎはらや軒ばの露にそほちつゝ八重たつ霧をわけて行くべき

女二
わけゆかん草ばの露をかごとにて猶ぬれぎぬをかけんとや思ふ

六條院東のおとゞる里にかへり給ふ。夏冬ときよらにし置かせ給へるにぬぎかへ給ふ。小野へ御ふみ奉れ給へど、女二はみやす所の事もありがほに思召されんとて、御覧じもいれねば、人々ひろげて見せたてまつる。夕霧、

　魂をつれなき袖にとゞめ置きてわが心からまどはるゝかな

みやす所の御ものゝけの加持し給ふ、律師参りて、「此の大將殿はいつより通ひ給ふぞ、ほんさいつよくまのし給へば、女二の[illegible]おしたまはだ。」と、頭をふりていへり。御息所少將の君たち女房をよびて問ひ給へば、有りのまゝにかたる。みやす所女二を呼びて、「其の文の返事し給へ、いかに心きよくおぼすとも、人はさは思ふまじ、心うくいひかはし給ふ[illegible]いひ給ふに、父大將殿より御文参る[illegible]くかなにおきく[illegible]見よ山川のながれての名をつゝみはてなば

ゐやまに御まで大将殿への御返事に、又こはなやましければと書き給ひて、

をみなへししをるゝ野べをいづくとて一夜ばかりの宿をかりけん

と大将殿は侍従殿におほしとて、この道である際に小野よりの御返事参らす。雲井のかなた見つけ給ひてうしろよりとの給ふこそはいかにも給ふこと、六條の東の院[illegible]御文をとりて見おこせ、給へ給ふやとひ給ひけるの返事なり。」といつはり給へど返し給はず。大将殿は、此の文のうらむべきにも見給ければ、二返し給へ」とのたまふに、我が偏ましければ、又文を参らせんに。」とこひ給へど、とやかく紛らはし給ふに、日も暮れにけり。[illegible]ほゝゑみ給へるを見つけ給ひて、御返事に、夕霧、

秋の野の草のしげみを分けしかどかりねの枕むすびやはせし

小野にはかの御返事のなきを見て、いかなる御心ごと浅ましう心もくだけて又いたくなやみ給ふ。[illegible]はおぼえぬ人にて、日に[illegible]有りさまを見し事、口惜しうおぼし、かくさまぐ＼泣きまどひ給ふに、大将殿よりは御文参らせ、御息所聞き給ひて、我はこよひもおはせぬにや[illegible]心うく、思ひしみつゝ[illegible]けるが、俄に、やがて絶え入り給ふ。宮はおくれじとおぼし沈み給ふ、う。八宮[illegible]の山の[illegible]御文あれど[illegible]大将殿わたり給ひて、[illegible]御葬送[illegible]給はでも大将殿かく[illegible]給ふ[illegible]

女二はとかくすとも御覧ぜず、大將殿の北の方は、女二の宮と御中よくおはしければ、

哀れみもいかにとおぼして御歎きのほかなるや悲しきことかぎりなし

九月十日あまりに小野へわたり給ひて、少將を召して物語し給ふ。

里とほみ小野の篠原分けきても我もしかこそ聲も惜しまね

少將

藤衣露けき秋の山人は鹿の鳴くねにねをこそへつる

けふも對面し給はでかへり給ふ。みちすがら一條の宮を見給へば、人げなく月のみ澄みたり。

見し人のかげすみはてぬ池水にひとりやどもる秋の夜の月

三條殿へかへり給ひて、小野へふみやり給ふ。

いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめてとかいひしひとこと

朝夕になくねをたつるをのの山はたえぬ涙やおとなしの瀧

女二の手ならひに書き給ふを、少將がふみにまきこめてかへし奉る。女二は世のなかを小野に住みはてんとおぼすに、一條の宮しげうあれたるを、やまとのかみ召してみがきたるやうにしつらひなし給ふ。かべしろ屏風几帳まで大將殿より奉らせ給へり。わたり給ふ日は大將殿おはしまして、小野へ御車奉り給ふ。女二はのり給はじとあれど、左近少將御衣共奉りかへたり。

のぼりにしみねの煙に立ちまじり思はぬかたになびかずもがな

人々急ぎ立ちて、くしのはこ、手箱、唐櫃、ふくろやうのものまでさきに立ててはこびければ、ひとりとまり給ふべきやうもなくて、泣く〳〵乗り給ふ。御はかしに綸綍をへたるに、姉上、

戀しさのたぐひなかたきかたみにて涙にくもる玉のはこかな

（篠の宮の）東の對の南おもてを、夕霧の御かたにしつらひて住みつきがほにおはす。宮はあさこめにあまり歎かせ、日よりもましておぼしとりごもる。つらしと思ひあかして、夕霧、

うらみわびおもはきなたを名のみに又さしまさるせきの岩かど

泣く〳〵御前にて六條院におはしたり。女君目を見あはせ給はず、御ぞ引きやりたまへば、女君「これに我も死に侍ひなばはてん。」と宣ふに、此の思ひこそ恐ろしくもあらねとたはぶれ給へば、御けしき「何事に死に給へ、我も死なん、見ればにくし、聞けばあいきやうなし、見捨てて死なんは後目たし」といひ給ふ。をかしきさまもまさりてかくなぐさめ給ふ。

雲井雁　なるゝ身をうらむるよりは松島のあまの衣にたちやかへまし

夕霧　松島のあまのぬれ衣なれぬとてぬぎかへつてふ名をたためやは

姫宮はかれ給ひて、夕霧に對面し給はず。たばかりてぬりごめの北の口より入れ奉る。女は

遠きしう心づきなしとおぼしたり。三條の君は大殿へわたり給ひ、[illegible]給ひにし、大將殿おどろきたまひて、消息あれど御返しもなし。父おとゞ聞き給ひて、女二へ御使たて給ふ。

契りあれや君を心にとゞめ置きて哀れと思ひうらめしときく

女二宮

何ゆゑか世に数ならぬ身一つをうしとも思ひかなしともきく

藤内侍のすけこれを聞きて、我を雲井の鴈の許さぬものに思ひたるに、かくあなづりにくき事出きけるとうれしくて、雲井の鴈へ文をたてまつる。

数ならば身に知られまし世のうさを人のためにもぬらす袖かな

雲井

人の世のうきを哀れと見しかども身にかへんとはおもはざりしを

みのり　源五十一歳

むらさきの上わづらひ給ひし後、いとあつしくなり給ひ、「行ひをまぎれなく。」と宣へど、おとゞ源ゆるし給はず。年ごろの御願にて書かせ給ふ法花經千部、二條院にして供養し給ふ。花ちる里、[illegible]の上などもわたり給へり。やよひの十日なり。

紫の上

惜しからぬ此の身ながらも限りにてたきゞつきなんことの悲しき

たきゞこる思ひはけふを始めにて此の世にねがふ法ぞはるけき

むらさきのうへより花ちる里へ、

たえぬべきみのりながらぞ頼まるゝ世々にとむすぶ中の契りを

花ちる むすびおく契りはたえじ大かたの殘り少なきみのりなりとも

夏になりては、あつさに消え入り給ふ折々おほかりき、にほふ宮が参り來りて、人の聞かぬまに「我亡くなりたらば思ひ出で給ひなんや」と宣へば、幼心に「上よりも宮母よりもいとほしく思ひけるを」、目をすりて紛らはし給ふ。母后は紫の上の事いとあはれになり給ひては、庭に住まはせ給ひて、「この紅梅と櫻とは、花の折々は御遊びにも、春の上を給へ」と、紫の上せければ、御涙打ちうなづき給ふ。ほろこぼし給ふ。秋になりてむらさきの上、

置くと見る程ぞはかなきともすればかぜにみだるゝ萩のうは露

御 やゝもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつ程へずもがな

中宮 秋風にしばしとまらぬ露の世をたれか草葉のうへとのみ見ん

中宮は御手をとらへて泣く／＼見奉り給ふに、消え行く心地なる様物のけにやと疑ひしかど、夜もすがらさまざまの事をし給へど、かひなく明けはつる程に消え給ひぬ。殿の内には誰も物をおぼえぬなし。源氏は更に夢の心地し給ひつゝ、たゞ涙にくれて日を暮らし給ひつゝ、限りある事なれ

[illegible]にも、あへなく空をあゆむ心ちして、大将、

いにしへの秋の夕の戀しきに今はと見えしあけぐれの夢

ちじのおとゞ
いにしへの秋さへ今の心ちして濡れにし袖に露ぞおきそふ

源
露けさは昔今ともおもほえず大かたあきの世こそつらけれ

秋このむ
かれはつる野べをうしとやなき人の秋に心をとゞめざりけん

源返し
のぼりにし雲ゐながらもかへりみよわが秋はてぬつねならぬ世に

○まぼろし　源五十二歳

春のひかりを見給ふにつけても、くれまどひたるやうにのみ、人々参り給へど、心ちなやましとてみすの内にのみおはします。兵部卿わたり給へし。

源
我がやどは花もてはやす人もなしなにゝか春のたづね來つらん

兵
香をとめてきつるかひなく大かたの花のたよりといひやなすべき

おもひ人だちのかたへもわたり給はず、源、

うき世にはゆき消えなんと思ひつゝ思ひの外になほぞほどふる

三の宮にはゝの宣ひしとて、こうばいをとりわきうしろみ給ふ。源、

「[illegible]花のあるじなき宿に知らずがほにてきぬらうべくしも
わか宿ふる木の桜は[illegible]、木のもとに帳をたてたらば、風吹きふらじ。」と、か[illegible]宣ふかは
いとうつくし。
源
今はただあはれやはてしなき人の心とぞめしはるのかきねを
あかしの御方にわたり給ひ、昔物がたりし給ひに、夜更けてかへり給ふ。御文に、
[illegible]ものかへりにしかなかりし世はいつくもへひの常世なるらねに
あかしの上
夢がたりにほしの水のたえしまにうつりし花のかげをだに見ず
花ちる
雲井[illegible]あけぼのふかき思ひも[illegible]
源
羽衣のうすきにかはりけふよりは空蝉の世ぞいとゞかなしき
[illegible]の日、中将の君、
さもこそはよるべの水にみくさゐめ今日のかざしよ名さへわするゝ
源
おほかたは思ひすてし世なれどもあふひはなほやつみをかすべき
[illegible]人なしにふるさとの村雨にみだれてや来つる山ほとゝぎす
大将
時鳥君につてなんふる里の花たちばなは今ぞさかりと

ひぐらしのなきければ、源、

つれ〴〵と我のみなきくらす夏の日をかごとがましき蟲のこゑかな

よるをしる螢を見てもかなしきに時ぞともなき思ひなりけり

七夕のあふせは雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ

はての法事八月ついたち比、中將の君、

君こふる涙はてはもなきものを今日をば何のはてといふらん

源 人こふる我が身もすゑになりゆけば殘りおほかる涙なりけり

九月九日 もろ共におきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝる秋かな

雁のなきわたりければ、

大空にかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ

ごせちなどいひていまめかしきに、

宮人はとよのあかりに急ぐけふ日かげも知らでくらしつるかな

むらさきの上の御手なる文どもを見給ひて、

しでの山こえにし人をしたふとてあとを見つゝも猶まどふかな

ときつめて見るもかひなしさくら草おなじ雲ゐの煙とをなれ

待まで（？）…なしに色つゝ咲きけふかへしてん

匂兵部卿宮、

やよひの春ゐるべき花といひつゝおきて我が身を春と共にふりぬる

何見ふと過ぐる月日もしらぬ間に年も我が世もけふやへぬる

にほふ宮　かをる十四歳より二十歳まで、此の巻の間九年

源氏かくれ給ひて後、にほふ宮かをる二人ともなん、きよらなる名をとり給へり。花ある里は二條院に住み給ふ。二の宮は三條の宮におはします。六條院うしとら町に、一條の女二の宮をわたして、夕霧は三條殿と十五日づゝ、かよひ住み給ふ。かをる十四歳にて侍從になり、其の秋中將になり給ふ。かをるは本の事は聞き給ひておぼつかなくおぼして、

おぼつかな誰にとはましいかにして始めも果ても知らぬ我が身ぞ

此かをる中將は御身にかうばしき香ある人なり。匂ふ宮は百の香をとめきこえ、兵部卿宮うら。やみ給ひて、…

み給ふ。

（一）こうばい　二十歳

紅梅の大納言には姫君二人あり。北の方失せ給ひて、姉君は春宮に参り給ふ。蛍兵部卿宮に姫君一人有り。兵部卿失せ給ひて後、其の北のかたへ大納言かよひ給ひて、わか君出で来給へり。此の子三人を一所に育ておき給へるが、ある時に大納言紅梅のえだをわか君にもたせて、におふ宮へ奉り給ふには、中君を参らせんのこゝろなり。

心ありて風のにほはすそのの梅にまづ鶯のとはずや有るべき

匂宮返し

花のかにさそはれぬべき身なりせば風の便りをすぐさましやは

匂宮すら、宮の君のかたちよき聞えあれば、しのびやかに宮の君に奉れつゝ宮ふ

大納言

もとつかのにほへる君は袖ふれば花もえならぬ名をや散らさん

宮

花のかをにほはす宿にとめゆかば色にめづとや人のとがめん

大納言は姉の君を参らせばやの心なり。

（二）たけ川

玉かづらの内侍のかみの御はらに、をとこ三人女二人おはしける。ひげくろ失せたまひて後、心かけ給ふ人おほかりける　夕霧の子蔵人の少将ねんごろに聞えて、御母雲井の雁より文を参らせらる。

其の比ひなるは十四五ばかりなるを、むこにと玉かづらはおぼしたり。此の頃冷泉院のたまはするを。かをるの御かたちに似る人もなくおはしければ、[illegible]からも女ばうたちも、婿にあはせたらばやと思ふに、かをる参り給ひてみすのまへにゐ給へば、宰相の君、

折りて見ばいとゞ匂ひもまさるやとすこし色めけ梅のはつ花

よそにてはもぎ木なりとや定むらん下に匂へる梅のはつ花

二十日あまりの比梅の花さかりなるに、かをるおはしたり。直衣すがたなる人中門にたてり。蔵人の少将なり。引きつれ入り給ひて、かをる和琴かきならし給へり。少将さきくさうたひ、あるじの侍従子なり。玉かづらの竹川唄ふ。少将はあふ人かをるに心よせけると思ひて、

人はみな花に心をうつすらん一人ぞまどふ春の夜のやみ

折からや哀れもしらん梅の花たゞ香ばかりにうつりしもせじ

あしたにかをる侍従より藤侍従のもとへ、

竹川のはしうち出でし一ふしに深き心のそこは知りきや

竹川に夜をふかさじと急ぎしもいかなるふしを思ひおかまし

[illegible]給へり、蔵人の少将侍従の[illegible]

姫君、

櫻ゆゑ風に心のさわぐかなおもひくまなき花とみる〳〵

御かたの宰相の君、

咲くと見てかつはちりぬる花なればまゝゝるをふかき怨みともせず

中の君

風にちる事はよりつね枝ながらうつろふ花をたゞにしもみじ

大夫の君

心ありて池のみぎはにおつる花あわとなりても我がかたによれ

大ぞらの風にちれども櫻花おのが物とぞかきつめて見る

櫻花にほひあまたに散らさじとおほふばかりの袖は有りきや

少將はあね君をと思へど、院に參り給へば、御母玉かづらは中君ならばとおぼす。

つれなくて過ぐる月日をかぞへつゝ物うらめしきくれの春かな

少將はらだちて中將のおもとにあひて、

いでやなぞ數ならぬ身にかなはぬは人にまけじの心なりけり

わりなしやつよきによらんかちまけは心ひとつにいかゞまかする

哀れとて手をゆるせかしいき死を君にまかする我が身とならば

少将 花をみし春はてぬるの今日よりやなげきの下にやどはん

けふぞ玉かづらの宿をなかむるけしきにて花に心をうつしけりとも

九日に院へ参り給ふに、少将の文を姫君に見せければ、姫君、

哀れてふつねならぬ世のことともいかなる人にかくるものぞは

少将 いける世のしにには心にまかせねばきかでややまん君がこと

かゝる侍従藤侍従といひて、夜のおまへの五月ふにふぢの咲きかゝりたるを見て、

手にとれる物にしあれば藤の花松よりまさる色を見ましや

紫の色にかよへどふぢの花心にはこそまかせざりけれ

源氏物語巻之九十　宇治十帖

はし姫　　しひがもと
あげまき　　さわらび
やどり木　　あづま屋
うきふね　　かげろふ
手ならひ　　夢のうきはし

以上

うばそくの宮はきりつぼのみかどの第八の宮なり、母は左大臣のむすめなり、冷泉院は第十の宮なり。春宮にふし〳〵し時、大后の御孫冷泉院に引きこされ給へる春宮を曲なくおぼしめして、此の八の宮をとりたて給へるに、六條院に押され給ひて、八の宮も御中あしくなりて、京の家も焼けければ、宇治へ引きこもり給へるなり。

〇はし姫　薫中将二十歳より廿二歳まで

八の宮には御むすめ二人おはします。此の方は大臣のむすめにてましけるが、こうぜ給ひければ、宮は世をすて給はんとおぼせど、此のをさなき人々をゆづる人なくて年月を過し給ふに、宮の内物さびしく、召しつかへの人々もちりぢりになりて、いつのとも見えて荒れば、父宮はぐゝみ給ひ、御ねんじゆのひまひまには、姫君だちに琴を教へ、碁うちへんつきなどして、心ばせを見奉り給ふ。池の水鳥を御覧じて、

打すてゝつがひさりにし水鳥のかりの此の世にたちおくれけん

いかでかくす立ちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞしる

なくなくも羽うちきする君なくば我ぞすもりになるべかりける

姫君は琵琶、いもうとの君琴、宮は経をもたせ給ひて、唱歌し給ふ。此の宮やけたりけるに、宇治に山里の有りけるにうつろひ給ふに、御すみかたづねまゐる人もなく、下は山がつばかり参りつかうまつる。此の山里にあじやりの住みけるに、法文をまなびならひ給へり。其のあざり冷泉院にも参りて、八の宮の事どもおはしまし、出家の心ざしは有りながら、姫君たちを思ひすて給はで、猶なかなかにおはしこの御心ふかき由を申し給ふ。かをる中将御前にさぶらひて、我もまた此の世に物うく思ひ給ふ

まうしかへさせ給ふ。みかどあはれに思召して、八の宮へ、

世をいとふ心は山にかよへども八重たつ雲を君やへだつる

跡たえて心すむとはなけれども世をうぢ山に宿をこそかれ

かゝる中将たび〳〵おはしまして、法文聞き給ふあまりの程にて、あはれ、

山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな

いかなる折に琵琶の秘曲の妙絶なる曲ゆゑ、八の宮はあじやりの寺にて、七日の勤おこなひ給ふ御留守にて、そのある人にあひ給ひて、姫の隙より見給へば、月をかしきほどにすだれすこし巻きあげ、ひとりは柱に居かくれて、琵琶をまへにおきて、雲がくれたりつる月のいとあかくさし出でたれば、「扇ならでこれしても月は招きつべかりけり。」と、のぞきたる顔いみじくらうたげなり。今ひとりは琴の上に、かたぶきかゝりて、「入日をかへす撥こそ有りけれ、さまことにも思ひ及び給ふ心かな。」とて、打ち笑ひたるけはひ、今すこしおもりかによしづきたり。あはれなるはみやびにも似給ひて、うちけに浅き心にしは、斯様に尋ね参るまじ。」とまめやかに仰せければ、辨の君出でて、年よりたる世の中に住み給ふ数にもあらぬを、かくねんごろなる御心ざしのほどは思ひ給ふれど、わかき御心に聞えにくきにやことにいふ。此の辨はかしは木のめのとのむすめにて、昔の物がたりのぞも申したり。かゝるほ

あやしき聞えず語りと聞かまほしけれど、「人目しげし、此の殘りは又こそ。」とて立ち給ふ。かをる、

朝ぼらけ家ぢも見えず尋ねこしまきのお山は霧こめてけり

雲のゐるみねのかけぢを秋霧のいとゞへだつる比にもあるかな

橋姫の心をくみてたかせさすさをのしづくに袖ぞぬれぬる

さしかへるうぢの川をさ朝夕のしづくや袖をくたしはつらん

京より蔀むかへ參れば、霧にぬれたる御ぞどもは、とのゐ人に取らせてかへり給ふ。又の日ひわりごやうの物、山の僧には衣綿けさ衣などつかはさる。かをるにほふ宮へおはして、宇治の事共かたり給ふ。十月五六日の比かをる宇治へ參り給ふ。八の宮待ち喜び、あざりも請じて、義などいはせ給ふ。其の夜は辨を召してかしは木の事とひ給ふ。ちひさくおしまきたるほうぐ共の、かびくさきをふくろに入れてたてまつる。かへり給ひて此のふくろを見給へば、かの御名のふうつきたり。あくるも恐ろしけれど見給ふ。彼の御手にて五六枚の鳥のあとのやうに似て、かしは木、

目の前に此の世をそむく君よりもよそに別るゝ魂ぞかなしき

命あらばそれとも見まし人しれぬ岩ねにとめし松のおひすゑ

[illegible]

きさらぎ二十日の程に、にほふ宮初瀬にまうで給ふ。あまた上達部殿上人つかうまつり給ふ。かへる御むかへに参り給ひて、宇治のわたりにてまうけさせ給ふ。宮はこゝにやすらひ給はんの御心にてあそび給へり。かゝるを斯かるたよりに八の宮へ参らんとおぼせど、ひとりこぎ出でん舟わたりもかろらかならねば、とかう程ふるに、八の宮より、

山風に霞吹きとく聲はあれどへだてゝみゆる遠の白波

御かへし聞えさせんとて、にほふ宮、

をちこちの汀に波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の川風

にほふもむかへるも参り給ふ。舟さしやり給ふ程、かんすゐらく遊びてらうにさしよせ人々おり給ふ。姫君たちを思ひやり、櫻の枝をうへわらはしてつかはすとて、にほふ宮、

山櫻にほふあたりに尋ねきておなじかざしを折りてけるかな

中君返し

かざしをる花のたよりに山がつのかきねを過ぎぬ春のたび人

にほふの御むかへに、おほせ事にて藤大納言参り給へり。大君二十五歳中君二十三歳八の宮はおもくつゝしみたまふべき年にて物心ぼそし。七月にかをるわたり給へば、八宮の詞「此の君達を我亡からんのち見すて給ふな。」と聞え給へば、かをる詞「かはらぬこゝろざしを知らせ給はん。」と宣ふ。宮、

　我なくて草の庵はあれぬとも此の一ことはかれじとぞ思ふ

　いかならん世にか枯れせんながき世のわすれがたみの草の庵は

八の宮はしづかなる所にて念仏せんとて山へ入り給ふ。姫君たち心ぼそく泣いつ笑ひつ過し給ふ。けふは三昧もはてぬらんと待ち給ふに、人参りて行きよりて八の宮はかれさせ給ふとなり。御忌などと縮あつくしていそぎ参らせらる。二日三日おはし給はず。またたの蔀ばかりに見え給へるに、人参りて「此り夜なかばかりに失せ給ひぬる」と泣く泣く申す。浅ましく涙もいでこざりけれ、ただうつぶし給へり。なき人になり給ふかたちをだに、今一たび見奉らぬをなげき給ふ。かなる中納言は聞き給ひて、御とぶらひこまやかなり。九月の比匂宮より、

　なじかはと秋の山里いかならん小萩が露のかゝるゆふぐれ

　涙のみ霧のふさがれる山里はまがきに鹿ぞもろごゑに泣く

　朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやは哀れとも聞く

御かへしは二の宮をあつかひ給ひ、辨を召して人づてにはことぞばらへずと侍らまとあれば、大君すこしふきの間て給へり。

　色かはる浅茅を見ても墨染にやつるゝ袖を思ひこそやれ

大君 色かはる袖をば露のやどりにて我が身ぞさらにおき所なき

秋霧のはれぬ雲居にいとゞしく此の世をかりといひしらすらん

年のくれには、あじやりのかたより炭たてまつれ給へば、わたきぬなどやり給ふ。

大君 君なくて岩のかけ道たえしより松の雪をも何とかは見る

中君 奥山の松ばにつもる雪とだに消えにし人を思はましかば

かゝるおりしも、匂宮の御返事はいづかたにかと問ひ給へば、

大君 雪ふかき山のかけ橋君ならで又ふみかよふあとを見ぬかな

かをる つらゝとぢ駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらん

宮のおはせしかたあけさせ給へば、佛のみぞ見ゆる。

かをる 立ちよらんかげと頼みししひがもと空しきとこになりにけるかな

年かへりて、ひじりの坊より、芹わらびなど奉れり。

中君 君がをる峰のわらびと見ましかばしられやせまし春のしるしも

雪ふかきみぎはのこぜりたが爲につみかはやさん親なしにして

かをる匂宮よりをり過さずとぶらひ聞え給ふ。匂

つてに見し宿の桜を此の春はかすみへだてず折りてかざさん

中君
いづことか尋ねて折らん墨染にかすみこめたるやどの桜を

あまりつれなきけしきのみ見ゆれば、にほふ宮はかをるをせめ給へり。その年、つねよりもあつさをわぶるに、川づらゆかしくてかをるわたり給ふ。

○あげまき　十三歳

姫君たち物がなしく、宮の御はての事つとめ給はんとて、かをるもあざりも参り給ふ。みやうかうの糸引きみだれ、むすびあげたるを見給ひて、かをる、

あげまきにながき契りをむすびこめおなじ所によりもあはなん

大君
ぬきもあへずもろき涙の玉の緒にながき契りをいかゞむすばん

かをる我が身は捨ておきて、匂宮の事をまめやかに宣ふ。大君は中君をくち木になし果てぬやうにと思召す。辨を召し出でてかをる此の事をかたらひ給ふ。かをるの御心の有りがたう哀れなれば、かけはなれがたくして、大君対面し給ひ、仏のおはする中の戸あけて、しめ〴〵と語り給ふが、「心地なやましければ、ためらひて聞えん。」とて入り給ふを、屏風押しあけて入り給ひ、かたはらなる几帳を仏の御方にへだてて、[illegible]給へり。つねなき世の御物がたりに、時々[illegible]給へる[illegible]

ほくめやすし。あけがたになれば、しやうじあけてもろともに見給ふ。

山里のあはれ知らるゝこゑ／＼に取りあつめたる朝ぼらけかな

女君 鳥のねも聞えぬ山と思ひしをよのうき事はたづね來にけり

大君は中君を人なみに見なしたらんこそ嬉しからめとおぼす。九月の比かをる又おはしたり。れいのやうにも對面し給はず、辨をしてせめ給へば、大君詞「かをるのさしも怨みふかくば中君を押し出でん、見そめ給ひては淺くは思ひ給はじ。」とて、中君にかくと諫め給へば、中君の詞「かゝる心細き慰めには、朝々大君を見奉るなり、いかなるにか。」とあれば、げにといとほしくていひさし給ふ。大君詞「かをるの昔を思ひ給ふ心ざし深くば、中君を同じ事に思ひ給へかし。」と宣はすれば、かをる、「今更に思ひあらたむまじ、匂宮の怨みもまさりなん、中君をばにほふにあはせ給はん。」となり。すべて言葉おはければ、「憎く心づきなしとて、大君中君常のやうにおほとのごのもれり。」辨にたばからせ、おひ過ぐる程にかをる入り給ふ。大君聞き付けておきて出で給ふ。中君は何心なくね入り給ふに、かをるはこれをもえ思ひ放つまじき心地して、なつかしきさまに語らひて、「大君のつらきにならひ給ふな。」とて、のちせをちぎりて出で給ふ。かをるの文には、

おなじえにわきてそめける山姫にいづれかふかき色と問はばや

山里の人の心はわかれどもうつろふこゝろの深きをおもふらん

にほふ宮、かへるさのうたにて、

女郎花さける大野を防ぎつゝ心せばくやしめゆふらん

霧ふかきあしたの原の女郎花心をよせて見る人ぞなき

かゝるにおやかたになりて、中君の事をまめやかにかたり、二十六日に宇治へしのびおはして、近きみさうの家に匂宮をおろし奉り、かをるばかりおはしたり。大君はかをるの中君にしみ給へかしとうれしくて、まつり給へり。辨を召して、「こよひさり中君のかたへ導け。」とたばかり給ふ。まことにはにほふ宮をいれんとたくみ思ざるゝなり。大君には、ひとこといふべき事有りとて、しやうじの中より御袖をとらへ給へば、いとうたて、何に聞きいれつらんと悔しければ、かなはいはん方なくて、一つらはなしに、おほかたならぬ御心なれども、山鳥の心ちしてあかしかね給へり。かをる、

しるべせし我やかへりてまどふべき心もゆかぬあけぐれの道

かたぐ〳〵にくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば

にほふ宮はやまとの殿へかへりて、三日にあたりて餅をつかはし給へば、辨[illegible]人にて、本なる六條院へ入り給ひて、御文には、にほふ、

よのつねに思ひやすらん露ふかき道のさゝ原分きてきつるも
わか君に見せ給へば、此の御返し中君に書かせて、使にはそれがし一かさね三重がさねのはかまそへたまは
り、三日にあたる夜には参る、中納言殿より御衣櫃さゝやかなるを取りそへて、
さよ衣きてなれきとはいはずともかごとばかりはかけずしもあらじ
返し　へだてなき心ばかりは通ふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ
にほふ宮の御ありきを、御母中宮あかしのせいし給へば、かたみに語りあはせて、いかなるは内へ参りには
ふは宇治へおはしけるに夜更けておはしたれば、いかゞおろそかに覚え給はんとうち嘆き給へり。
にほふは中宮のせいし給ふ事などかたらせ給ひ、思ひながらとだえあらん、いかなるにかと思すべし。
やがて京へわたしたてまつらん。」と宣ふ。にほふ、
中絶えん物ならなくは橋姫のかたしく袖やよはにぬらさん
返し　たえせじの我が頼みにやうぢ橋のはるけき中を待ちわたるべき
朝開のすがた御うつり香なども、人しれず物あはれなり。九月十日のほどににほふかをるひとつ車にて
宇治へおはす。大君うれしとおほせど、かをるは其の夜は遠山鳥にておかせり　十月ついたちごろあ
じろもをかしきほどならん、紅葉も御覧ぜんとて、殿上人あまた宰相中将など御供にて、にほふ宮

わたらせ給へば、[illegible]の物すゝみよる[illegible]参れり。紺に文つけたる紅葉をさして、かいぞへなど

あそばせ給ふに、中宮の仰せごとにて衛門のかみ御使に参れり。かやうの御ありきはかたくなしく上で、

文殿の人あまた参るに、物のきようもなくなりて、[illegible]へは御文をつかはさる、宰相の中将は何心な

く古宮の紅葉をよそながら見て、

いつぞやの花の盛りに一め見し木のもとさへや秋はさびしき

歸るさと思ひしかれ咲きにほふ花も紅葉もつねならぬ世を

ゑもん
い[illegible]の秋見[illegible]山里のもみぢのかげは過ぎうきものを

宮大夫
見し人もなき山里の岩かげに心ながくもはへるもみぢかな

秋はててさびしげに立てる木のもとを吹きな過ぐしそ峰の松風

かやうには心をうけとてゐる人を口惜しと思へりし。にほふ宮のおほみやらしき御ありさまにて、[illegible]のお

[illegible]の大君の[illegible]をむかへ[illegible]。かをるは大君の中の君をとりもち給ひしに、わきまへことやう

になりし、[illegible]などいづれをも我が上に見なすまじく[illegible]に、とがむる人も有るま

じと思ひのたまふ。

に[illegible]、宮はわかき上の女一の宮へ参り給ひて、御前[illegible]、在[illegible]物[illegible]たり[illegible]参[illegible]たる

ところ、いかゞおはすらんと、、

わか草のね見んものとは思はねどむすぼほれたる心ちこそすれ

にほふ宮より宇治へ御文あり。

ながむるはおなじ雲居をいかなればおぼつかなさをそふる時雨ぞ

あられふるみ山の里はあさ夕にながむる空もかきくらしつゝ

大君おもくなやみ給ふを聞きて、かをるおはしたり。しるしある僧たちあまた召じて、御すほふはじめ給ふ。大君の手をとらへて、「なぞか聲をだにきかせ給はぬ。」とあれば、ものいふも苦しきとて、いきの下にふわりゆき給ふ。

霜さゆるみぎはの千鳥打わびてなくねかなしき朝ぼらけかな

あかつきの霜うちはらひ鳴く千鳥物思ふ人の心をやしる

かをるはかくこもりゐ給ふに、とよのあかりはけふぞかしと思ひやりて、

かきくもり日影も見えぬおく山に心をくらす比にもあるかな

かくておはするをたのみにみな思ひたり。いよいよ哀れに、かひななどもほそう弱げなるものから、白ううつくし。中君の事をかをるのたまへば、御袖を引きはなして、「此の中君を同じ事とおぼして立

ものし給へ、是れのみ怨めしことと宣ふ。阿闍梨召しいれさま〴〵に加持奉らせ給ふ。たゞもののかれ行くやうにて消えはて給ふ。中君おくれじとまどへるさまことわりに哀れなり。ともし火ちかくて見給ふに、たゞね給へるやうにてうつくしげに伏し給へり。とかくれいのさほふどもするぞ淺ましかりける。人々の色くろうきかへたるを見て、かをる、

くれなゐにおつる涙も甲斐なきはかたみの色をそめぬなりけり

おくれじと空行く月をしたふかなつひにすむべき此の世ならねば

かをるは大君にいかにとやうにて、中君の見るべきものをとくやしくおぼす。

戀ひわびて死ぬる藥のゆかしきに雪の山にや跡をけなまし

にほふ宮のとだえを、中君はつらしと思すに、わたり給へり。物越にして日ごろのおこたり聞え給ふ。中君、

きしかたを思ひ出づるもはかなきを行末かけてなにたのむらん

行末をみじかき物と思ひなばめのまへにだにそむかざらなん

○さわらび　かをる二十四歳

中君は春のひかりも見給ふにつけ、夢のやうなり。あじやりの許より、わらびつく〴〵しなどまゐ

ゐとて、

君にとてあまたの春をつみしかばつねを忘れぬはつわらびなり

此の春は誰にか見せんなき人のかたみにつめる峯のさわらび

かをる中納言はにほふ兵部卿へ参り給へば、宮は箏の琴をかきならし、梅をめでおはする

見る人の心にかよふ花なれや色には出でずしたにほへる

かをる
見る人にかごとよせける花のえに心してこそをるべかりけれ

中君を京へむかへんとかたり給ふ。御ぶくも限りあれば、ぬぎかへ給ふとて、中君、

はかなしや霞の衣たちしまに花のひもとくをりもきにけり

京へわたり給はんとてのあした、かをる宇治へおはしたり。我こそは人よりさきにと思ひしに、我が

あやまちなりとくやしく思ひつゞけ給ふ。

中君
見る人もあらしにまよふ山里に昔おぼゆる花のかぞする

袖ふれし梅はかはらぬ匂ひにてねごめうつろふ宿やことなる

又かやうにきこえよるべきなどいひて立ち給ひぬ。

辨
さきにたつ涙の川に身をなげば人におくれぬ命ならまし

身をなげん涙の川にしづみても戀しきせゞにわすれしもせじ

辨は宇治にのこりゐるなり。

人はみないそぎたつめる袖のうらにひとり藻鹽をたるゝ尼かな

しほたるゝあまの衣にことなれや浮きたる波にぬるゝわが袖

有りふればうれしき瀬にもあひけるを身をうぢ川になげてましかば

過ぎにしも戀しき事も忘れねどけふ將まづもゆく心かな

ながむれば山より出でて行く月も世にすみわびて山にこそいれ

よひ過ぎておはしつきたり。目もかゞやく殿づくりのみつばよつばなる中に引きいれて、宮は御くるまのもとによらせ給ひておろしたてまつり給ふ。

しなてるやにほのうみにこぐ舟のまほならねどもあひ見しものを

〇やどり木　かをる二十三歳より二十五歳まで

時の帝の宮には宮たちあまたあり。故左大臣殿の御むすめ藤つぼの女御に、女二の宮一ところおはします。此宮ひと宮十四といとしの夏の比、御母女御うせ給ふ。みかど藤壺にて御碁うたせ給ひて、かをる中納言を召して花をかけ物にて、まけさせ給ふ。ひとつだにゆるさせ給ふは、たゞ一ところの御心

なりもかをる、

よのつねのかきねに匂ふ花ならば心のまゝにをりて見ましを

霜にあへずかれにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな

かをるは中宮の御はらの女一の宮ならばとおぼす。そのとしもくれぬ。

夕霧右大臣の六の君を、八月の比にはふ宮にまゐらせんのいそぎなり。薫二十五　二條の院の御方に中君の事なり　聞き給ひて、今さら山里にかへらんも人笑はれなるべし、かたちをかへなばとさまざまにおぼすに、五月ばかりよりくわいにんなり。かをる聞き給ひて中君をいとほしとおぼす　御なやみ問ひ給はん、けふは内に參るべければ、日たけぬさきにとて、朝顔を持たせ給ひて出で給ふ。にほふ宮はよべより内に參り給ふ。かをる、

けさのまの色にやめでんおく露の消えぬにかゝる花と見る／＼

中君のなやみ給へるかたちゆかしくて、かをる、

よそへてぞ見るべかりける白露の契りおきにしあさがほの花

中君　消えぬ間にかれぬる花のはかなさよおくるゝ露は猶ぞまされる

右の大いどのより頭中將してにほふ宮へ、

大ぞらの月だにやどる我が宿にまつよひ過ぎて見えぬ君かな

にほふ宮の出で給ふを、中君のうれしと見給ひて、

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

にほふ宮は右の大いどの[illegible]夕ふのかへらせ給ひて、文奉り給ふ。たいの御かたに入り給ふに、ここまでめでたる事はないひ出で給はず。また我が身になして思ひ廻らし給へ、身や心のまゝにもならずかなしきに、春宮にまうで給はば、人にまさりたる心ざしのほど知らせたてまつるべき」などいふ所に、六の君より御返事参る。また、母の宮女二の宮の御手なり。

をみなへしをれぞまさる朝露のいかにおきける名残なるらん

中君は日ぐらしのこゑに山里こひしくて、

大かたにきかましものをひぐらしの聲うらめしき秋のくれかな

ここのほどは夜は更けぬに、にほふは六の君へ出で給ふ。三日のいはひにてかをるもおはします。左衛門督宰相中将などまゐりさぶらひて、二たびまで御参り給ふ。かをるはあまりの君のつほれにあかし給ふ。

打ちわたし世にゆるしなき関川をみなれそめけん名こそ惜しけれ

こなたかなたへはみゆれどせき川のはやきのかずはにごるらんかに

には三宮今は二條院に心やすくもわたり給はず、六條院に年ごろ有しやうにおはしまして、六の君

は六の君へわたり給ふ。中君はおもほどに思ひあまりてかなたへ御文奉り給ふ。文の日かずかさなれば

給ふ。ありしかはりし世の事どもかたり給ふついでに、ふるき過ぎにし方のくやしさをも忘るゝをりなく

なとはのめかし、やうやう暗くなりゆけば、中君、「心地なやましきに、くこそ。」と入り給ふ。簾の

下より御袖をとらへ給ふ。女はうしと思ふに物もいはれず引き入れ給へば、それにつきてそひ臥し給

へりつ。ちかくさぶらふ女ばう二人ばかりあれど、うとからず聞えかはし給ふ御中なれば、しりぞきゐ

たり。あかつきかへり給ひて御文あり。

いたづらにわけつる道の露しげみむかしおぼゆる秋のそらかな

中君はにほふ宮のまでさせ給はば、我を頼もし人にし給ふべきなど思ひめぐらし、けふは宮の中君へ

わたり給ふと聞くもむねつぶれ給へり。にほふ宮かをるのうつり香のしみ給へるをとがめ給ふに、も

てはなれぬ事なれば苦しと思ひけしきを見て、さればよと御心さわぎけり。にほふ宮、

又人になれぬか袖のうつりかを我が身にしめてうらみつるかな

見なれぬる中の衣と頼みしをかばかりにてやかけはなれなん

かゝる中納言殿もやさしの人なのけはひ、なまばみたるを思ひやりて、女の装束あまた、みづから
の御料にも、くれなゐのうちき、しろきあや、はかまの腰ひきむすびてはへて、

むすびける契りことなる下ひもをたゞ一すぢにうらみやはする

かやうに聞えはうしへ給はんとて、人をよみこびいふなり。

しかつぎなるはふつかた、かやう中納言へおはしたり。たやすくと二人して聞え給ふ二いふかひなくてなやましう給ふとは、聞ゆる御隙くましくべどもかゝ参りよるに、かやうに人づゝに宣ふは、甲斐なしと覚え給へば、すこしあうの御手にたいめんし給ふ。まだかの下より几帳をすこし押しいれて、るかづきより給ふかいとゝなりけれど、少将といひし女房をよびて、扇をさしよこしと宣ふ。かゝるは、彼の山里に寺など侍らんとも、若し彩色に人形をつくりて、箱にとめおきて置ひ給ひたると宣へば、あはれなる御ねがひかな、いつそのこゝろきたりし人はうせたまふべき時に人なり。昔の人によくて似たる二日をなんとぞ御覧ずべし、とて聞え給へば、かなう御ありて、早いと御心に給ふことと給ふ。是月の下旬の頃を召して御相かたり、彼の人にたち添ひ御時で給へば、それは腹北にた伏す給ひし荒、山中、新との住のふ存りしに、八の宮との御前より、女子をうるみたるに、とこのひとへにも、其の後中納言じめりやうのつきになりて、とほき田舎に

此の春の頃中君へたづね参りたりと聞く。中将の君は北のかたの御供にておはしまさば、常陸は
に参りたきよしいひこされし。さやうのついでにとひ聞き侍らんとかたらふに、かをる、

やどり木と思ひ出ずば木のもとの旅ねもいかでさびしからまし

弁の君
あれはつるくち木のもとをやどり木と思ひおきけるほどのかなしき

中君のかたにはにほふ宮おはして、

ほに出でぬ物思ふらししのすゝきまねくたもとの露しげくして

中君
秋はつる野べのけしきもしの薄ほのめく風につけてこそしれ

二月ついたち按察大納言になり、右大将かけ給ふ。其のあかつき中君をとこ君うみ給ふ。大将殿より
うぶやしなひ、屯食五十具、碁手のぜに、椀飯、ついがさね三十、ちごの御ぞ五かさね、むつき、宮
のおまへにもせんかうのをしき、たかつきにて粉熟参らせ給へり。七日の夜は中宮より内より、九日
には大とのより参るなり。四月には女二をかをるにわたし給ふ。あすとての日藤のほにみかどわたらせ
給ひ、藤の宴せさせ給ふ。

かをる
すべらぎのかざしにをると藤の花およばぬえだに袖かけてけり

よろづよをかけてにほはん花なれば今日をもわかぬいろとこそ見れ

昔いたちをれるかうしはわしこきの雲におとらぬ花のけしきか
よりつねの色ともみえず雲居まで立ちのぼりたる藤なみのはな
賀茂のまつり過ぎて、かをる宇治へおはしたり。くち木のもとを見給ひおはするに、女くるまひとつあふぎを上に御あまたおひてはしりわたりくる。ゐなかびたるもののかなと見給ふに、此の宮をさしてくるなり。ここのかみたるもののひたちのぜんじ殿の姫君あづまの事はうせにまうでて、たゞ今くだり給ふなりとて車より下し入れたり。かしらつきやうだい細やかに、よくむかしの人に似たり。屛風のあなより覗きてかをる見給ふ。弁なまでて「嬉しくもきあひたり、いひ知らせたまへ」と宣へり。明日はうではん事ありて、姫君あづまびとの参り給へば、かきねていひ参らせん」といふ。かをる、
かほ鳥の声も聞きしにかよふやと茂みわけてけふぞたづぬる

○あづま屋

ひたちのかみの子ども、もとはらの此のはらに六人ある中に、此の姫君を思ひへだつるをつらしと思して、帰国にいでぬればしくくと国若思へりし左近の少将といひし人ねんごろにいひわたる。八月ばかりに契りてんと思ひおきしを、此の少将はかみがまゝむすめと聞きて、中だちをまねびて、思ふに違ひたるとせいへば、中立も、まことの女と思ひてこそ申しつれ」とて、ひたちに此の由いへば、ひた

申合て「さらばまことのむすめを参らすべし、寶物もつくして参らせん。」といふ。少將聞きてひなびたる事をいふよとは思ひながら、もぎりしくれにおはしそめたり。北の方は人知れず此の用意せしに、あやしくたがひたれば、物もいはれずめのと二人なげきて、此の姫君を中君へ参らせけり。かなれど中君へおはしまして、れいのなつかしげにて、

見し人のかたしろならば身にそへて戀しき人のなで物にせん

姫君にかはりて中君返し、

みそぎ川せゞに出さんなで物を身にそふかげと誰か頼まん

何事もかたらひおきてかへり給ふ。にほふ宮は中宮よりかへり給ひて、君たちと碁うち、ゐんふたぎなどしてあそび給ふ。夕つかた女君はかみをあらひおはす程に、西のかたにわらはの見えたるをのぞき給へば、姫君あやしとおぼして、扇をさしかくし給ふ。にほふ宮とらへ給ひて、「たれか。」と宣ふ。大夫がむすめの右近参りて、暗きにさぐりより、「こゝにをとこのそひふし給へる。」といふ。にほふ宮心しづかにかたらひ出で給ふ。女はおそろしき夢のさめたる心ちして、汗にひたして臥し給へり。めのとやたち殿へかへりて、母北の方に此の由かたれば、むねつぶれて夕つかた参りて、「こゝには心やすくしてこそあづけ置きしに、よからぬ事出できなん、又も参らせ侍らん。」とてつれてかへり、三條お

たりにちひさき家まうけて、「忍びておはせよ、ともかくもつかうまつらん」といひおきて、みづからはかへり給ふ。彼のひたちがむこの少将はせんざいをながめ、むすめはまだ何心なくそひふしたり。

北のかた、

しめゆひし小萩がうへも迷はぬにいかなる露にうつる下葉ぞ

少将

みやぎ野の小萩がもととしらませば露も心もわかずもあらまし

三條の姫君よ、母のかたへ、

ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬ所とおもはましかば

北の方

うきよにはあらぬ所をもとめても君がさかりを見るよしもがな

大將秋のころ宇治の御だうつくりたてたると聞きておはしたり。かをる、

たえはて[illegible]清水になどかなき人のおもかげをだにとゞめざりけん

辨のあまのかたに立ちより物語し給ふついでに、姫君の事問ひ給ふ。「此のごろ物いみとて、三條の小家に隠しおき給へりと聞きたり。」と語れり。「さあらば姫君京に行きて、こゝにつれてきたれ[illegible]ん、三[illegible]へいふ[illegible]の由いひければ、姫君も[illegible]ともめでたしと見えし人の御[illegible]たまへれば、うれしくおぼす。昼過ぐる程に、宇治より人参れりとて門をたゝく。あけさせたれば[illegible]

なりて月ごろ思ひあまることもいひ聞えさせんとて。」と宣ふ。ありとは母君に聞えさせんといふ。あ

なれの日ごろにおぼしつゝあひみ入れ給へる。雨ふりくれば、

かたることなるなかにしてまあけまやのあまり程ふる雨をとゞかな

程もなうあけはなる心地して、おぼされたるこゝろして、聞きもしらぬなのりして行くよきこゆる、物い

たゞきたるはあにのやうなりと見給ふもをかし。くるまふたつつまどによせさせ、かきのせ給ふ。お

ま君侍従は一つ車に乗りたり。又宇治へ、

かたみぞとみるに付けても朝露の所せきまでぬるゝ袖かな

母君の思ひ給はん事もなげかしけれ」と、あはれにかたらひ給ふに、なぐさめておはし給ふ。女は

つかしくてしるき扇をまさぐりそひ臥したり。辨、

やどり木は色かはりぬる秋なれど昔おぼえてすめる月かな

里の名も昔ながらに見し人のおもがはりせるねやの月影

〇うきふね　かをる二十六歳、正月三月

にほふ宮は彼のほのかなりし夕を忘れ給はず、中君のたれと知らせたまはぬもことわりながら、つ

らくていかにしてかたづね出さんとおぼす。かをるは宇治の人のまちどほならんもいとほしく、人知

みやこにわたして住ませばやと、三條わたりなる所に家つくらせ給へり。む月のついたちごろ、匂宮はわか君の御前にてあそび給ふ。ひるつかたおさなきわらはの、みどりのうすやうなる文に髭籠を小松につけ、又すくたて文とりそへて參れり。にほふ宮見給ひて、何處よりぞと問ひ給ふ。中君、是れは宇治に大たふのむすめなむそのかたよりといつはりて宣へば、匂宮とりて見給ふに、みやづかへ人の文とは見しらぬ書ざまなり。又卯槌、いとをかしげなる人のしわざなりと不審におぼし召されぬ。またぶり山たちばなをつくりて、

　　またふりぬ物にはあれど君が爲ふかき心にまつと知らなん

匂宮心におぼしつるは、かをるの内へ通ひ給ひて、よるもとまり給ふとなり。彼の人をかくし置きたるなるべしと、大内記とていとなれしたしきたよりあるを召してとひ給ふ。大内記『宇治には誰とは知らず、かをるの中將おき給ふなりと申す。その人は我が見そめし人なるを、かをるに尋ねとられにけり。それかあらぬかたしかめて見させんと、よる過ぐる程に宇治へおはしたり。宿直人のあらぬかたにはよらで、かしこの垣のくづれより入りて、格子のひまよりのぞき給へば、火ともして物ぬふ人ども四人、わらはべあまた、右近といひし若人も有り。姫君はかひなを枕にておはしますめり。右近などさし向ひたるさまどもに几帳にうちかけて侍ふしたり。姫君は右近が後によそ

せ給へり。宮はせんかたなくて格子をたゝき給へば、右近ききつけて出でたり。かをるのこゑにに
せて入らせ給ひ、「道にておそろしき事の有りて、見苦しきすがたになりたり。火をくらうせよ。」とて
入り給ふ。右近はかをるなりと思ふに、御ぞぬぎて打ちふし給へれば、女君おらぬ人なりとおどろか
るれど、聲をだにし給はず。夜あけて御供の人こわづくれど、「今日はかくてありなん。」とのたまふ。
「母君より今日は御迎へまゐるべし、いかにとか申さん。」といへば、「けふは物忌なりといへかし。」と
姫君宣ふ。日高くなるほどに、母君より御迎への人来り、石山にまうでさせんとて、車二つ馬など參
る。右近返事かく。「昨夜よりけがれさせ給ひておぼしなげく、こよひ夢見もさわがしくなどかきて、
むかへの人々に物などくはせてかへしたり。あま君にも、「今日は物いみにて渡り給はぬ。」と云はせた
り。女君れいはくらしがたくながめわび給ふに、けふは暮れゆくもはかなしとおぼす。

にほふ
ながき世を賴めても猶かなしきはたゞあすしらぬ命なりけり

女君
心をばなげかざらまし命のみさだめなき世と思はましかば

京より時方參りて、「御ありきかる〴〵しきと、きさいの宮御母大との夕霧も思しのたまはする。」と申す。
いかならんとおぼしやるに所せき身なり。かる〴〵しき殿上人にてもあらばや、人に知られ給はぬ所
に連れゆき給はんものをとおぼす。にほふ宮、

世にしらずまどふべきかなさきに立つ涙に道をかきくらしつゝ、

女君　涙をも程なき袖にせきかねて如何にわかれをとゞむべき身ぞ

睦月もたゞすこしのどやかなる比、大將殿は宇治へおはしたり。「二條の家造りたてゝ、此の春のほどにわたしたてまつらん。」とのたまふ。かをる、

うぢ橋のながき契りはくちせじを危ぶむかたに心さわぐな

女君　たえまのみ世にはあやふきうぢ橋をくちせぬ物と猶たのめとや

あかつきかへり給ふ。

二月十日の程に匂ふ宮おはしたり。右近は侍從を語らひて、此の事をかくし給へといひていれたてまつる。よるの程にて立ち歸らんも心うし、こゝに人めもつゝましきに、川よりをちなる家につれ給はん。」とて、右近は殘しおき、侍從を舟にのせて時方に棹ささせて出で給ふ。「橘の小島と申すな」

宮　年ふともかはらんものか橘のこじまのさきにちぎるこゝろは

女君　橘のこじまの色にかはらじを此のうきふねぞ行方しられぬ

是にこしのりて下り給ふ。（是れより此の君を浮舟の君といふなり）女君はしろきかぎり五つばかり、袖口すその程までなまめかし、侍從も色めきしきわかうどにて、時方ををかしと思ひて、物がたりしてくらしける。雪ふり

つもり、山は鏡をかけたるやうに、きら／＼と夕日にかゞやきたるに、ゆふべ分けこし道のほどさへ跡も絶えて、にほふ宮、

峰の雪みぎはの氷ふみ分けて君にぞまどふ道はまどはず

浮舟

ふりみだれみぎはにこほる雪よりもなかそらにてぞ我はけぬべき

今日はみだれたる髪けづらせて、こうばいのおり物きかへ給へり。よろづかたらひ明かして夜ふかくかへり給ふ。明ぼのゝ比、匂宮、

ながめやるそなたの雲も見えぬまに空さへくるゝ比のわびしさ

をりしもかをる大将殿より御使あり。

水まさるをちの里人いかならん晴れぬながめにかきくらすころ

にほふへの返し

里の名を我が身にしれば山しろのうぢのわたりぞいとゞすみうき

同

かきくらしはれせぬ峯のあま雲にうきて世をふる身ともなさばや

かをるへの返し

つれ〴〵と身をしる雨のをやまねば袖さへいとゞみかさまさりて

三條の家つくりてわたしたまはん事、内記がしうとの大くらの大夫に宣ひ付けたりければ、にほふ宮聞きつたへたまへり。御めのとの受領やよひつごもりの比、ゐなかへくだるべければ、其の家にわた

させんとおぼしかまへて、宇治へむかへやり給ふ。うき身は如何にしなすべきと、うきたる心ちしてふし給へり。匂宮宇治へおはしまして、などかくあをみやせ給へるとおぼろき、蝶の尾をよびて昔物語などし給ひけれ。それをうち聞きてよろづ思ひ続くるに、此の水の音の恐ろしく響くにつけても、我が身行方も知らずなりなば、しばしこそあへなく思ひ給はめ、人笑へにうきこともあらじと思す。にほふ宮よりかゝるより今日も御使きあへれたり。かをるの使見とがめて、何しにこゝへはたびたび参るぞと問ふに、私に用有りて参るなりといふ。奇なることとて、もとより人を付けて見させたれば、時方が家に入りたり。かをる此のけしき聞いとほりて、文をつかはさる。

波こゆる比とも知らず末の松まつらんとのみ思ひけるかな

うき舟は胸はしりて、此の御文はもとのやうにして、所たがへにやとて返し給へり。うき舟は侍従右近が思ふにもはづかしく、うき事ばかりと思ひ入りておはす。右近はこのけしきを見ていふ、我が姉もふたりのをとこに見たりし、下にもかゝるやうには盗れ給ふは悪しき事なり。一かたに思ひさだめ給へ。あまりに物歎かせ給ひて、やせおとろへ給ふも益なしといへり。まへるかひとあるといふもののあるに仰せて守らせ給ひ、それこそ物けしき見給へと申して、見つるかりけり夫みなの御子にて侍ふ。宮よりおはしてもの給はしやうもなければ、時かた

人りて侍從に會ひて、「いざやもろともにきこえさせん。」とて誘ひ出でたり。宮は馬にて遠く立ちはするを、犬ののゝしる聲に、かたり給ふべきやうだもあらで、山がつの垣のもとにあふりをしきておろしたてまつる。侍從詳しく有りさまを語りて、「御なかへの日をよくたばかり給へ、我も身をすてて出し參らせん。」といふ。にほふ、

いづくにか身をばすてんと白雲のかゝらぬ山もなく／＼ぞゆく

侍從入りてありつるやうだいかたれど、いらへをだにし給はずふし給へり。うきふね、

なげきわびみをばすつともなきかげに浮名ながさん事をこそ思へ

おやも戀しく、つねには思ひ出でぬはらからも戀しく、たゞ人に見つけられず、出でゝ行くべき方を思ひめぐらしねられ給はず。うきふね、

からをだにうき世の中に止めずばいづこをはかと君もうらみん

母君より夢見あしとて御文あり。うきふね、

後に又あひみん事を思はなん此の世の夢に心まどはで

かねのおとのたゆるひゞきに音をそへて我がよつきぬと君につたへよ

○かげろふ　かをる二十六歳

宇治にはうきふねの君行くかたなく失せ給へば、こゝかしこと求めさわげどもかひなし。母君もおはして、「鬼やくひつらん狐やとりもていぬらん。目の前になくなしたらんは、世の常の事なり。」とあわてまどひ給へり。右近は匂宮のおはし給ひし事をかたれば、「扨は此の川に流れうせけるよ。」と泣きかなしめり。にほふ宮より時かた參りて此の由申す。大將殿もきゝてなみだにおぼられ、うかりける所かな、鬼などや住むらんとむね痛くくやしくおぼさる。母君は此の水の音を聞くにまろびぬべくかなしくて歸り給ふ。卯月になりてかみなるよりにほふ宮へ、

忍びねや君もなくらん甲斐もなきしでのたをさに心かよはば

橘のかをるあたりはほとゝぎす心してこそなくべかりけれ

[illegible]宇治へおはしまし、

我も又うきふる里をあれはてば誰やどり木のかげを偲ばん

あさりを召して、七日々々に經佛くやうすべき由宣ふ。にほふ宮より右近か許に、壺に黄金入れて給ひ、時方も七僧のまへの事し給ふ。かをるの君しのびてかたらひ給ふ一品の宮の小宰相は、うき舟の事をあさからず思ひなげき給ふを見知りて、

哀れしる心は人におくれねど數ならぬ身に消えつゝぞふる

　常なしとこゝら世をふるうき身だに人のしぬまで歎きやはする

後嵯峨院の御ため、あかしの中宮御八講し給ふ。紫の上など思しければ、御経供養せさせ給ふ。大將殿はりせの方におはしければ、かのそなたのつぼねあり。小宰相やあると見給へば、おとな三人、わらはふたりゐて、氷を物のふたに置きて、わるなり。白きうす物着給へる人、氷もちながらゐ給へる顔、いはんかたなくうつくし。御ぐしこちたくなびかし、氷かれたる程たとへんものなし。女一の宮、小宰相もひをあつかひかねて、わらひたるまみあいぎやうづきたり。かしらに置き、むねにあてなどする人も有り。おまへに参らせたれば、「いなもたらし、しづくむつかし」と宣ふ聲さへも限りなく嬉し。下﨟女房のいそぎ参れば、大將殿たちかくれ給へり。

　かへる朝とく起き給へるに、女二のかたちもいとをかしげながら、女一はまさり給ふべきや、思ひなしかなりかしと思して、「今日はいとあつし。薄き御ぞ奉れ」とて、手づからきせ奉り、御はかまも昨日のやうなるくれなゐなり。氷をめして人々に割らせて、取りてたてまつり給ふ心のうちをかし。又のおしたかなるは大宮に参り給ふ。にほふ宮も繪をもたせてわたらせ給ふ。大將近くよりて、繪共ついでに女一の宮の女二の宮を疎くしなさせ給ふ。「かやうの御遊びの折は、なにがしかもてまからん」など聞え給へば、中宮の詞「などてすてし給はん」とただそめ給へるにこそ、と宣ふ。其の後一品の

宮より二の宮に御せうそこありて、大將殿うれしく、ふたゝびもおほくまゐらせ給ふ。せり川の大將のとほ君の女一の宮おもひかけたる繪を、おもひよせてたてまつるとて、

をぎのはに露吹きむすぶ秋風もゆふべぞわきて身にはしみける

とかきそへまほしくおぼす。

彼の宇治には人々ちりて、めのとと右近侍從許りぞゐける。今は恐ろしく心細しとて、侍從は京に出でたりけるを、にほふ宮たづね出で給ひ、中宮につかへゐけり。此の春うせ給ひし式部卿の宮の御むすめ、此の北の大宮にむかへ給ひてさぶらひ給ふ。此の姫宮は春宮にたてまつらんとおぼせしに、世のありさまを見るには、水の底に身をしづめても、もどかしからぬわざにこそとて、いたはりて心よせ聞え給へり。

かをる大將大宮に參り給ひて、人々あまた居たるに、ことかはし給ひて、かをる、

女郎花みだるゝ野べにまじるとも露のあだなる我にかけめや

女房たち 花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露にみだれやはする

弁のおもと たびねして猶こゝろみよ女郎花さかりの花にうつりうつらず

かをる 宿かさば一夜はねなん大かたの花にうつらぬ心なりとも

大宮女一の宮も月を見給ふ。此の西の對式部卿の姫宮のおはしますに、かほる立ちより給ひて、此の姫宮を見給ふにつけても、八の宮の大君の事おぼし出でられて、

ありとみて手にはとられず見れば又行方もしらずきえしかげろふ

○手ならひ　かをる二十六七歳

其の比横川にそうづあり、八十あまりの母、五十ばかりのいもうとのあま有り。此のあま君たち初瀬にまうで給へるに、あじやりをそへてなら坂越えける程に、母のあまわづらひ給ひて、宇治にとゞめてやすめ奉り、横川へこの由いへり。僧都おどろきておはします。此の家のあるじむづかしといへば、宇治のゐんといふ所にわたしかふるとて、あじやりは下らふ法師に火をともさせ、うしろのかたに行きたり。森と見ゆる木のしたにしろきもののひろごりたるあり。何ぞとみれば物のゐたるすがたなり。「狐の化けたるにや、にくしあらはさん。」とてよりて見れば、かみはながくつやつやとしてなくなり。此のよしそうづにかたれば、「きつねのへんげすると聞けど、いまだ見たる事なし。」とて、四五人つれて見ければ、是れは人なり。「死にたる人をすてたるが、よみがへりたりと思ゆるなり。なのれなのれし衣を引けど、猶かほを引きいれてなくなり。何にてもあれ、其の命たえぬをすてんいみじき事なり。かくて置きたらば雨にぬれて死にはつべし、湯を呑ませ助けんとて、抱き入れさせ給

ふ〜あま君の心ちして、有りつる人はいかにとゝふ。いもうとの尼聞きて、我が初瀬に夢の
つげ有りとて祭りければ、若くうつくしき女の、目もあやなくれたるのはかなきにたなれ、我がむすめの
のなくなりしが生き返りたるなり」とて、なく〜抱き入れ、「いかなる人ぞ」といへど、物も聞こゆ
ることなし。下つかたの湯をくみ入れ、「此の人をかけ給へ」とて、母の尼よりも此の人をいけまほし
とどめ給へり。「我のたまへ」といへば、「人に見せず此の川に落し入れ給へ」と許りいふな。二月
ばかりして、人の人に語り、車ふたつにて道すがらゆきのまゝ、小野にかへり給ふ。つや〜として
起きあがるともなく、つひにいくほどか人にやと思ひながら、打ちすてんもいとほしくて四五月も過
ぎぬ。僧都一よかけし、人にかの移して、「何ものぞ」ととへば、物のけ調ぜられていふやう、昔おこ
なひせし法師、世に恨みをとめてたゞよひしに、うきふねの住み給ふ所にあひ、大君のはかなびし
に、此の人は観音のはぐくみ給ひ、此の僧都にまけ奉りぬ。今は歸りなん」といふ。うき舟心もさ
ばやすこあたりを見まはし給へば、ひとりも見知りたる人なし。たゞ知らぬ国に来たる心ちして、む
なしていくくにきにけるにかと、昔の心ちまでへ思ひ出づれば、物を思ひなげきて、みな人ねたると
につまどを放ちて出でたれば、風はげしく川波もあらく、ひとりもの恐ろしかりしかば、たゞこの端に
みをなげんとせしに、行くべきかたもおぼえで、かへりいらんもなかぞらにて、心づよく死なん

と思ひ、此の侍もくへかしと、つくづくと見たりしを、いかなる頃までいたく心のみだれども、宮と思ひしより心まどひ、しらぬ所にすておきて、此の男消えうせぬ。其の後の事は覚えず。今人の云ふをきけば、おほくの日数へにけり。しらぬ人にあつかはれ、見えつらんとはづかしく、いきがへりぬるかと思ふも口惜しくて、沈み給へり。日ごろは物参る事も有りつるに、今は露ばかりのゆをだに参らず、あま君そひゐて、いかなれば頼もしげなく、おはするぞ」と、泣く泣くあつかひ給ふ。「尼になさせ給へ、さあらばいくる事も有るべき。」と宣ふ。「いとほしげなるさまを、いかでか尼にはなし参らせん。」とて、いたゞき許りをそぎて、五戒をうけさせて、僧都はかへらせ給ふ。此の尼君はかんだちめの北の方なりしが、其の人なくなつてむすめひとりをかしづき、よき君たちをむこにして、思ひ思ひあつかひけるに、其のむすめなくなりければ、かたちをかへてかかる山里におはすなり。秋になれば門田のいねかりとて、女どもに歌うたひ引板ひきならすもをかしげなり。うき舟の君手ならひに、

身をなげし涙の川のはやき瀬をしがらみかけてたれかとゞめし

我かくてうき世の中にめぐるともたれかはしらん月のみやこに

此のうき舟の君を手ならひの君とも云ふなり。母君めのと右近などもをりをり思ひ出でらる。此のあまの昔の聟は中将にて、弟のぜんじの君とひ給へるついでに、小野におはしたり。あま君対面して過ぎにし事ども語り給ふ。

少將のあまをよびて、すだれの隙より打ちたれがみの見えつるは、誰にやと思ひ給ふ」（少將ノ尼詞）「あま

ゝ、見えぬ人をえ給ひて、明けくれかしづき給ふ。」といふなり。又の日山よりかへり給ふとて、中將

又きたりて、「此のひめ君はいかなるゆゑに世をうらみ給ふにか、なぐさめばや。」といひて、中將、

あだし野の風になびくな女郎花われしめゆはん道とほくとも

つきゝ、ねはききいれ給はねば、あま君、

うつし植ゑて思ひみだれぬ女郎花うき世をそむく草のいほりに

八月十日あまりに、小鷹がりのついでにおはして、中將、

松蟲のこゑをたづねてきつれども又萩原のつゆにまどひぬ

御返しし給はねば、あま君、

秋の野の露わけきたるかり衣むぐらしげれる宿にかこつな

中將笛吹きならし、鹿のなくねになどひとりごつ。

（あま君）ふかき夜の月を哀れと見ぬ人や山のはちかき宿にとまらぬ

（中將）山のはに入るまで月をながめ見んねやの板まもしるしありやと

（中將）わすられぬ昔の事を笛竹のつらきふしにもねぞなかれける

仙つれに聞の身も思はれてかへりつゝも袖をぬらすかな

身を捨はつるに思ひ捨られつゝなる給はにとすれど、心をおもひとて念じ給ひて、手習、

はかなくて世にふる川のうき瀬には尋ねもゆかじふたもとの杉

古川の杉のもとだちしらねども過ぎにし人によそへてぞ見る

みなはげみせに参りて人すくなゝり。少将のあま君をうち給へり。夕暮の風の音もあはれなるに、

心には秋のゆふべをわかねどもながむる袖に露ぞみだるゝ

中将おはしましてうらみて、

山里の秋の夜ぶかき哀れをも物思ふ人はおもひこそしれ

手ならひ

うき物と思ひもしらで過す身を物思ふ人と人はしりけり

一品の宮御物の怪になやませ給ひ、加持にため僧都おりさせたまふついでに立よらせ給へるに、手習の君対面して、尼にならん事を急がせ給ふ。初瀬より尼上帰らせ給はねば、必ず助け給はたゞ、嬉しき折なりとて、額に僧都そがせ給ひて、尼達よくなほさせ給へと仰なりつ。胸あきたる心ちして、

なき物に身をも人をも思ひつゝ捨てし世をぞさらに捨てつる

手習

かぎりぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな

岸にくることはなるらんあま君にのこそくれむと思ひけるかな

心ざしうき枕のかはしを抜るかも行方もしらぬあまのうき木を

はつせよりあまがへり給ひて、十のしとて高の事とて涙にいりおにし、いまでかく世にはなれ給へる

となりて出しさへ給へ。

一品の宮の御もやみそこたびに給ひ、中宮侍部に対面し給ひて、初瀬の道にてうき身を見つけたり

九 事にあひ給ふに、神見に北を思しあはするに、たゞ人にやあらん、と聞きすぎゝにほしけり。

小野へ車に人はしたりける君、

こがらしの吹きにし山のふもとにはなにもかくてすぎやすだにこそなき

よつ人ちらむと思ふ山里にこそあるを見つゝなほもすぐさき

又かたの世をとり直ける君なれどいとふによせて身こそつらけれ

目前の君は睦しみ法文おはしまし給ひて年もくれね。

今はもうそ野山の雪を晴れてるふるにし初をはふとおきしき

田中の雪まりのみなつみはやも鍋めてこのたのまるべき

手づから野べのわかなも今よりは君がためにぞ年もつむべき

袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの

大あま君の孫のかみ来りて、かをる大將の供にて宇治へまゐりて、悲みなげき給へりし事を語る。尼のきこうへにの語りて、ほしいにかきつけ給へる歌、

見し人はかげもとまらぬ水の上におちそふ涙いとゞせきあへず

これを聞きて手ならひの君、

あま衣かはれる身にやありし世のかたみの袖をかけてしのばん

雨ふりしめやかなる比、かをる大將殿中宮に參り給へり。中宮の詞「宇治には恐ろしき物やすむらん、いかやうにて彼の人はなくなりにし」と問ひ給ふ。小宰相僧都のいへりし事をかたる。かゝる聞きて、「其の人は今もあらんや」と宮へば、「尼になしたる由そうづのいへる。」とかたり申す。

（一）夢のうきはし

かをる山におはして、又の日横川におはす。僧都おどろき御物語し給ふに、かをるの詞「小野にて御弟子になりて尼となりし人は、親ある人にて我ゆゑうらみけること」と語り出で給ふ。僧都の詞「されば、たゞ人と見えざりしと」、始めよりの事詳しく語り給ふ。「さあらば御文を給はりて此の童に遣はさん、唯尋ねきたる人あるとばかりかかせ給へ」となり。此の小君を道よりやらんと思せど、人目多くて又の日遣はさ

る。」此「小君は昔舟の弟なり」尼君聞きて手習の君に文を見せ給へば、面赤めて應へん方なくてふし給ふ。（尼君の詞）「此の小君は誰にか[illegible]見給へば、（手習の詞）「此の子は今はと世を思ひし時、母にて[illegible]宇治へも参れりしなりと思ふに、まづほろほろと涙はおちぬ。「小君を内に入れよ」といへば、（手習の詞）「怪しき様に變りて見えんも恥かしく、母君許には人知れず對面せまほしく思ひ侍る、御事といひなし隠し給へ。」となり。（尼君の詞）「後に隠れはあらじ物を。」と、小君を内によびよせ給ふ。小君は、「御返事給はりて参らん」と急ぐ。尼君御文ひろげて見せ給へば、有りしながらの御手にて、かをる、

のりのしとたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな

「心地かきみだり、むかしの事思ひ出づれど、さらにおぼゆる事もなし。夢かとのみ心もえず、[illegible]此の文はもてかへり給へ、所たがへにもあらんに、[illegible]心に[illegible]れてたるさまにて、これ[illegible]給ふに、なに事をかしるしに聞えさせん、たゞ一ことにてものたまへ[illegible]、[illegible]のたまはねば、心ゆかずなほなほかへり参りぬ。か[illegible]中々に[illegible]人の[illegible]

をさな源氏大尾

近代日本文學大系

第一卷

昭和二年十一月十五日印刷
昭和二年十一月十八日發行

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座 二一八八番 三六八八番
振替東京 二三一八九番



